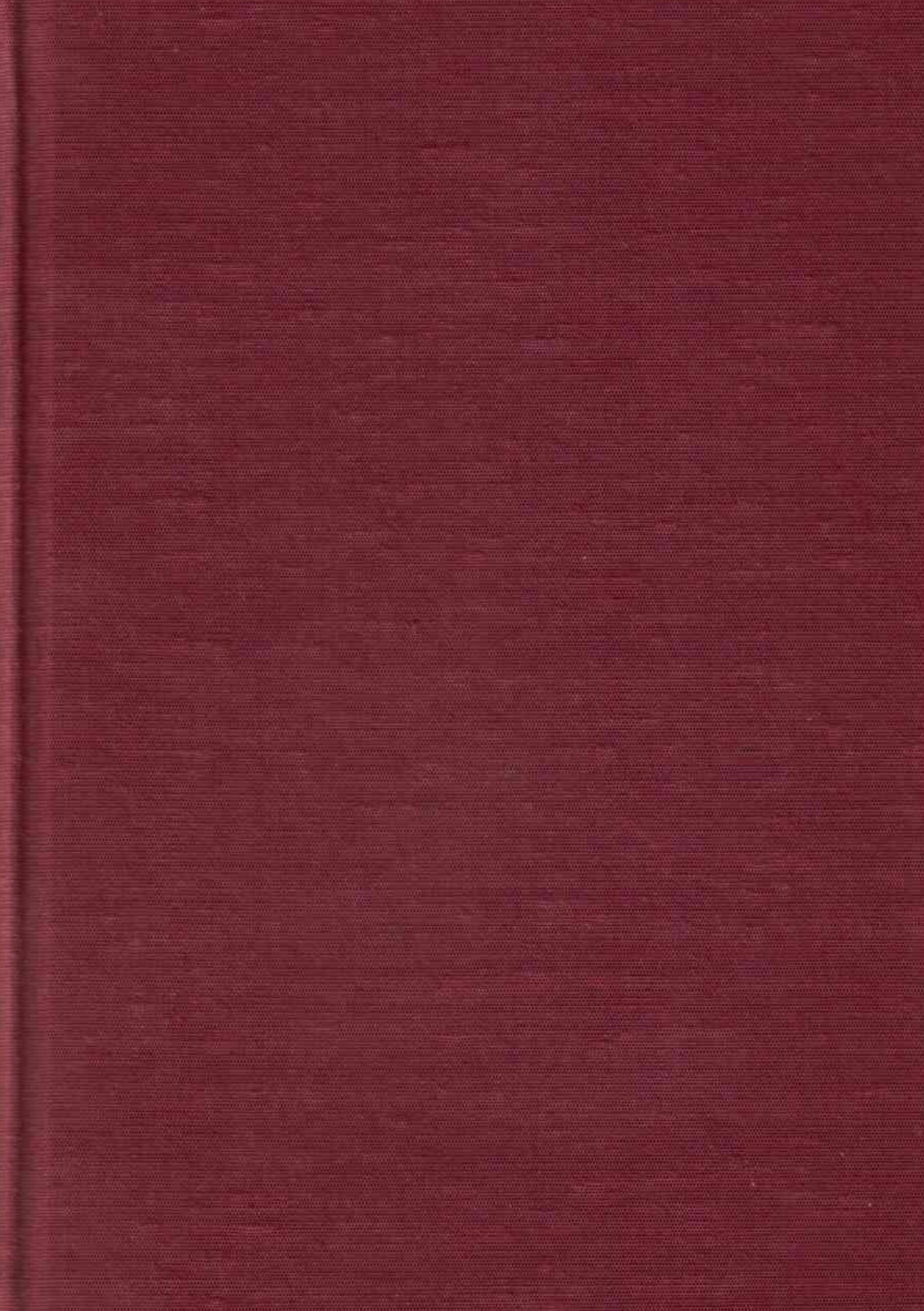


樽本照雄 著

# 清末小説三談

清末小説研究会





# 清末小説三談

樽本照雄著

清末小説研究会





清 末 小 說 三 談

目 次

<b>1</b>	<b>日本における清末小説研究——受信から発信へ……………</b>	<b>10</b>
1	はじめに	11
2	1920年代まで	13
3	1930年代——『中国文学月報』	14
4	1940年代——『中国文学』、澤田瑞穂、中村忠行	15
5	1950年代——中村忠行、『北斗』、中野美代子	15
6	1960年代——『清末文学言語研究会会報』、増田渉	16
7	1970年代——『野草』、『啞』、『清末小説研究』	18
8	1980年代——『清末小説閑談』、『中国文芸研究会会報』、 『清末小説から』、『清末民初小説目録』	21
9	1990年代——『新編清末民初小説目録』、『清末民初小説年表』	24
10	中間報告	26
<b>2</b>	<b>「阿英『晚清小説史』ほか索引」について……………</b>	<b>31</b>
1	阿英『晚清小説史』	32
2	欧陽健『晚清小説史』	40
3	(美) 韓南 PATRICK HANAN 著、徐侠訳『中国近代小説的興起』	40
4	(日) 樽本照雄著、陳薇監訳『清末小説研究集稿』	42
5	陳平原『二十世紀中国小説史』第1巻	44
<b>3</b>	<b>蟻の穴から——私の清末小説研究……………</b>	<b>47</b>
1	小説雑誌目録の作成	51
2	天津日日新聞版『老残遊記二集』の発掘から難問解決へ	54
3	『繡像小説』編者問題	63
4	『繡像小説』発行遅延説	67
5	「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題	70
6	『増注官場現形記』の発掘	74
7	「官場現形記」裁判	76
8	『庚子蕊宮花選』の発掘	78
9	吳趸人「電術奇談」の原作探索	79
10	細かいことをいくつか	82

11	商務印書館と金港堂の合弁問題	86
12	林紓冤罪事件	91
4	『繡像小説』問題はどうか論じられているか……………	96
	問題の所在／阿英のばあい	
1	李伯元研究から	100
	張仕英のばあい／王学鈞のばあい	
2	『繡像小説』研究から	106
	王燕のばあい／郭浩帆のばあい	
	『繡像小説』問題判定表	112
5	李伯元死後のこと——『繡像小説』発行遅延との関係……………	115
1	阿英の断定	116
2	問題の所在と研究者の反応	118
	文迎霞のばあい／陳大康のばあい／王文君のばあい／劉霞のばあい／論 争の経緯／資料としての新聞広告／劉霞の広告調査／魏紹昌から薛正興 へ／基本的共通認識か／盗用問題／李伯元の肺病宣言	
3	李伯元死後の影響	149
	『繡像小説』刊行一覧（部分）	152
6	新しい「説部叢書」研究……………	157
1	商務印書館版「説部叢書」をめぐって	158
2	「説部叢書」の成立	162
3	研究の状況	163
	鄭方曉の研究／付建舟の研究	
7	商務版「説部叢書」試行本……………	180
8	「説部叢書」元版はタンポポ文様……………	184
1	説部叢書と「説部叢書」	185
2	普通名詞の説部叢書	186
3	「先元版」など——検証の手段	188
4	翻訳シリーズの「説部叢書」	189
5	奇妙な現象——集編番号の重複	200

6	結 論	202
9	『瑞西独立警史』について——漢訳「スイス独立史」……………	206
1	スイス史とウィリアム・テル	206
2	『国民之元気』のばあい	209
3	『瑞西独立警史』のこと	214
	中村忠行説／栄驥生序／盛時培序／楔子／本文／結尾	
4	結 論	239
10	『瑞士建国誌』について——漢訳「スイス独立史」……………	242
1	序 文	243
	趙必振序／李繼耀序／鄭貫公序	
2	「瑞士国計表」という一覧表	248
3	「瑞士図」という地図——1840年代のもの	249
4	『瑞士建国誌』全10回の大要	251
5	漢訳に関係がありそうな日本語訳	258
	『（字血句涙）回天之弦声』のばあい／『（血涙万行）国民之元気』のばあい／「（維廉的児）自由之一箭」のばあい	
11	漢訳リサール辞世詩——魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪……………	266
1	魯迅「雑憶」から	267
2	梁啓超と「墓中呼声」——問題の発生	268
3	疑義の提出——『黎薩爾与中国』	272
4	疑義の再提出——江樺論文	273
5	李海の指摘	275
6	陳漱渝論文	278
7	孟昭毅と鄭寧人がまとめる	279
8	リサール辞世詩の日訳と漢訳	281
9	結 論	302
	附録：リサール辞世詩の翻訳対照表——清末の日訳、漢訳を中心に	305
12	『比律賓志士独立伝』の底本……………	319
1	問題の発生	319

2	樽目録がほかと違うところ	320
3	『比律賓志士独立伝』とその底本	325
4	底本『南洋之風雲』	328
5	『南洋之風雲』と『志士独立伝』	329
6	崇昭本西の謎——孫文、日本人お清との関係	331
7	ポンセの肖像	339
8	来日以前のマリアノ・ポンセ	342
9	漢訳に対する疑問	343
13	瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の嘘……………	345
1	シェイクスピア原作である	346
2	二重基準である	351
3	責任問題	353
	附録：アマゾン日本【書評】瀬戸宏『中国のシェイクスピア』	354
14	瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の事実……………	357
	ラム本のばあい／Q本のばあい	
15	漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序・補遺……………	364
1	林訳批判および林紓批判の本質	366
2	評価逆転の実例	371
3	林紓批判の現在	374
4	新しい文献2点	375
5	初期の漢訳者たちが小説と戯曲を区別していた事実を把握しているか	377
6	クイラー=クーチが莎劇（詩）を小説化した事実を知っているか	388
7	結 論	392
16	2014年の林紓評価……………	395
	呉仁華／陳平原／夏曉虹／陸建徳／王勇	
17	翻訳家としての林紓——「区別がつかない論」の現在……………	410
1	林佩璇論文	411
2	評価の現状	414
18	文明戯「ハムレット」について——「鬼詔」と「竊国賊」……………	422



1	脚本など	422
2	徐半梅の文明戯「ハムレット」	423
3	新聞広告「竊国賊」	425
4	文明戯「ハムレット」の成立と上演	427
5	一步深める	430
6	瀬戸博士の嘘	431
19	文明戯「ハムレット」と『民国日報』の広告	437
20	莎劇のようなもの——文明戯シェイクスピア	446
1	林訳と文明戯	447
2	文明戯の新聞広告	449
3	『申報』広告の莎劇	450
4	台詞の一部	462
	附録：文明戯シェイクスピア一覧	470
21	田漢漢訳『ハムレット』の底本	481
1	哈孟雷徳と哈孟雷特	484
1	雑誌初出／2 中華書局単行本	
2	瀬戸博士の記述	489
3	劉瑞論文	491
4	手がかりとしての単行本『哈孟雷特』	494
5	日本語訳『ハムレット』から	497
6	戸沢日訳と田漢単行本	498
7	田漢単行本「訳叙」の問題	503
8	戸沢日訳のダウデン	505
9	ロルフとの共通点	508
10	田漢のいう「某莎翁学者」	510
11	雑誌初出「哈孟雷徳」	513
1	「訳叙」と「代序」／2 第1場	
12	結 論	534

## 凡 例

- 1 書名の角書、副題は、本書での初出のみ記し、以下は省略する。
- 2 旧暦は漢数字で、新暦はアラビア数字でしめす。  
例：宣統二年九月十九日（1910.10.21）  
ただし、引用文はこの限りではない。
- 3 記号は以下のとおり。  
『 』 雑誌、新聞、単行本（書名）、全集  
「 」 論文、雑誌掲載、あるいは単行本中の個別作品、作品名一般、叢書名  
[ ] 原文と翻訳文の区別がつきにくいばあい、使用することがある。また筆者の注
- 4 漢語文献に使用される記号は、そのままを引用する。ただし、簡化字は使わない。日本語漢字にかえる。
- 5 カッコ類は、引用文のなかでも原文のままである。例：「○○「○」○」とし、「○○『○』○」と書き換えない。

## 日本における清末小説研究

—受信から発信へ

『中国文芸研究会会報』第120、121号（1991.10.30、11.30）に掲載。

日本における清末小説研究は、中国大陸の研究に大きく影響される傾向がある。それを脱するのは1970年代からだ。発表された研究論文数をグラフで示しながら、大正末期からほぼ2000年にいたるまでの清末小説研究の状況を概観する。

日本における清末小説研究約100年間の傾向を簡単に表現すれば「受信から発信への変化」だ。中国大陸での研究傾向の影響を受けて細々と研究が続けられていた時代が長くつづいた。「文化大革命」により中国における研究が中断したその最中に日本ではそれとは無関係に清末小説研究が活発化する。『清末小説研究』をはじめとして定期刊行物2種類が現在にいたるまで発行されつづけている（追記：2018年現在は1種類のみ）。新しい資料も日本で発見されるという現象も起こっている。まさに受信から発信へと研究姿勢が転換した証拠なのである。

2000年までの日本における清末小説研究の状況を紹介した。

1991年5月30、31日の2日にわたり台北・中央研究院中国文哲研究所の主催で「中国文哲研究の展望」と題する国際学術会議が開催された。参加をうながされたが時間のつごうがつかず、そのかわりに提出したのが日本語の本稿である。会議で読まれたという。漢語に翻訳されたのだろう。使用言語が異なる場合は二重投稿には当たらない、という私の考えのもとに日本で刊行する会報に発表した。あとで鍾彩鈞主編『中国文哲研究的回顧与展望論文集』（台湾・中央研究院中国文哲研究所1992.5）が出版されて送られてきた。見れば驚いたことに私の日本語論文が収録されている。会議後に論文集が発行されるという連絡はなかった。結果として私の嫌う二重投稿になってしまった。しかたがない。

本論文は該会議に参加した崔溶澈教授（韓国漢陽大学）により韓国語訳された（『中国

小説研究会報』第6号韓国・中国小説研究会1991.6.25)。

台湾の国際学会では評論員が発表論文について意見を表明する。それが前出論文集に収録されている。説明が不十分だというのが私の文章に対する論評だ。私個人が関わっている研究分野だ。ゆえに本稿執筆にあたって自画自賛にならないように控えめに説明した。論文名をあわせて見ればわかるように配慮している。ところが説明不足だといわれる。どうやらその評論員は自分で考えることが苦手らしい。あからさまに全部が書かれていなければ状況が理解できない人だとわかる。それならば、ともとの文章に加筆し1990年代をあらたに書いてつけくわえ、さらに副題をほどこした。なお研究者のなかにはなぜ自分の論文に触れないのだと怒る人がいるかもしれない。お許し願いたい。

本稿は樽本編『日本清末小説研究文献目録』（清末小説研究会2002.4.1 清末小説研究資料叢書1）に収録した。

また、最近の研究状況については古二徳論文をご覧いただきたい。CÉSAR GUARDEPAZ, A CRITICAL REVIEW OF JAPANESE SCHOLARSHIP ON MODERN CHINESE FICTION AND TRANSLATION STUDIES, (嶺南大学) 『JOURNAL OF MODERN LITERATURE IN CHINESE 現代中文文学報』第14巻第1期 2017夏。清末小説研究会ウェブサイト <http://shinmatsu.main.jp> で読むことができる。

## 1 はじめに

1901年から2000年まで、この100年間に日本で発表された清末小説関連の文献は約1,360篇を数える\*1（日本で発表された研究論文であるから、国籍を問わない）。10年ごとに区切って100年間の文献発表数の推移を図にしてみた（図1）。

全体の印象をのべれば論文数の推移は右肩あがりの傾向をしめしている。すなわち1950年代までに発表された論文は、それほど多くない。1960年代から飛躍的に論文の数が増大する。

その詳細（図2）を見れば1970年代に境がある。

言葉をかえれば中国の「プロレタリア文化大革命」を谷にして、それ以前はある程度の数の研究論文が発表されている。ところが1970年代以後は「文革」に

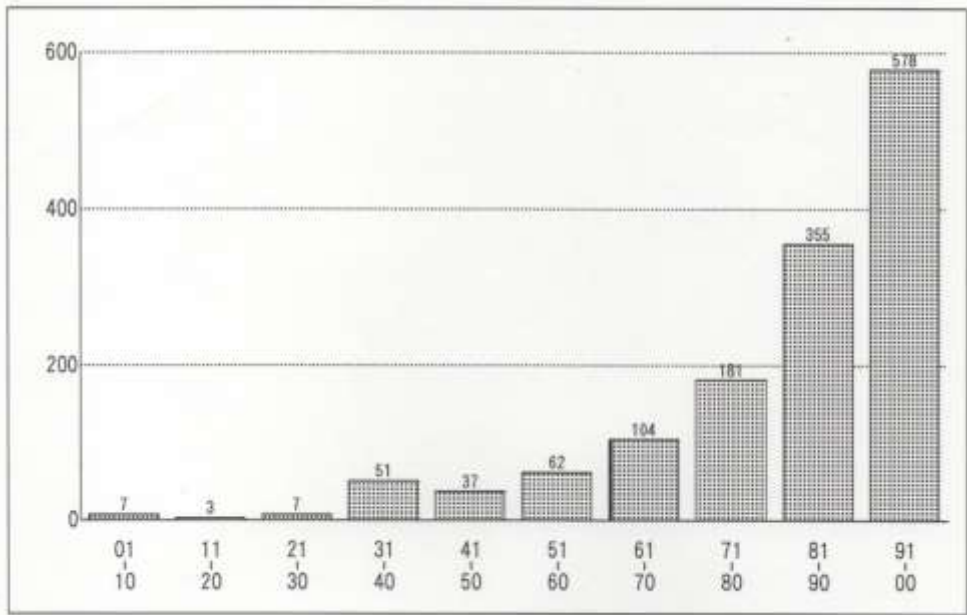


図1：日本における清末小説研究文献数の変遷（年代別）

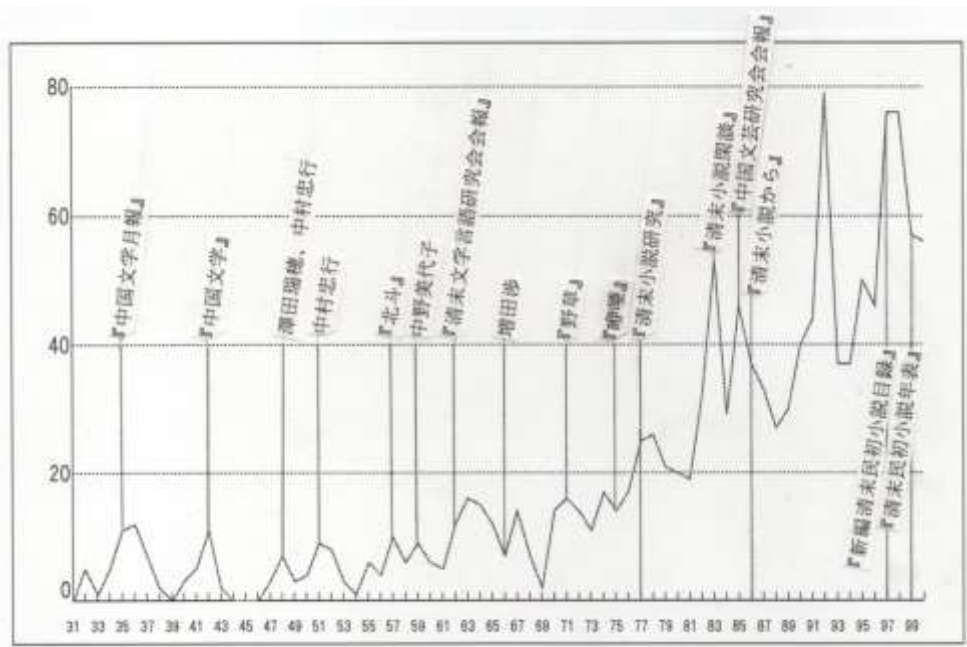


図2：日本における清末小説研究文献数の変遷（詳細図）

関係なくはじまった研究論文の発表が、年をおって急激に増加しているのがわかるだろう（専著の刊行によって点数が極端に増える年もある）。

日本における清末小説研究は1970年代が転換点なのである。

発表論文の数が多ければよいというものでは当然ない。しかし研究発表が少ないところに質の高い論文が突然、出現するとも思えない。量の多さは質の向上に必要な条件でもある。

論文が多く公表されるには、その環境が整わなくてはならない。ここでいう環境とは専門雑誌の刊行である。

『清末小説研究』の創刊がそれにあたる。専門雑誌に発表された研究論文が増加する。数だけではない。質的にも以前とは違ったものが出現することになる。私はそれを受信から発信への転換だと見る。

まずそれぞれの年代について簡単に動向を紹介することから始めよう。

## 2 1920年代まで

1900年代は中国でいえばまさしく清朝末期である。日本で発表された文献といっても、義和団事件当時の北京における劉鉄雲の慈善事業を報道する新聞記事であったり、同じく劉鉄雲の日本訪問についての新聞記事だったり、蘇曼殊の翻訳作品であるなど研究そのものというわけではない。

清末小説に関係する最初の文章は長尾雨山「現代支那の作家生活」（『日支時論』4:3、1918.4）<sup>\*2</sup>らしい。東京・金港堂と上海・商務印書館が合弁した1903年より合弁解消の1914年まで、長尾雨山は商務印書館編訳所に勤務していた<sup>\*3</sup>。長尾が、林紓、嚴復、黄遵憲らと交流をもったとしても不思議ではない。上海において時代の息吹を肌身で感じていたであろう人物の筆になる文章だ。興味深い。同時代人が伝える作家の生活ならば研究論文というよりも報告書かもしれない。どちらにしてもおもしろそうだ。ただし残念ながら未見である（追記：渡辺浩司氏より複写をいただいた。感謝。樽本「長尾雨山と上海文芸界」2006。『商務印書館研究論集（増補版）』2016所収）。

1920年代には神田喜一郎「曾樸の補後漢書芸文志考に就いて」（『泊園書院学



会会報』第2号1922.6) という曾孟樸の著作に関する論文がある。しかし曾孟樸の作品「孽海花」に言及してはいない。

また橘樸が李伯元「官場現形記」を解説、評釈する一連の論文を発表している（「『官僚』の社会的意義」『月刊支那研究』第1巻第1号1924.12.1など）。その目的は「官場現形記」を材料にして中国の「官僚社会の階級性」を分析するところにあった。

いくつかの先行論文はあるにしても小説研究を目的としたものではない。すなわち当時の日本には、同時代の小説を研究するという発想が存在しなかったことを意味する。

日本における清末小説研究のはじまりは1930年代からになる。1931年より1年ごとの研究論文発表数を見ると、全体の動向として増加傾向を示しているなかにも微妙な変化を見て取ることができよう。それぞれの頂をささえているものはふたつある。図2のなかに書き込んでいるようにひとつは研究雑誌であり、もうひとつは特定の研究者の存在である。

### 3 1930年代——『中国文学月報』

早い時期のものに「老残遊記」「九命奇冤」また蘇曼殊について書いた松井秀吉、大高巖、池田孝（本名：孝道）の文章がある。掲載誌は『満蒙』『同仁』などだ。

池田孝のコレクションを利用して書かれたのが『中国文学月報』に連載された「文芸雑誌の変遷」シリーズである。『繡像小説』にはじまり『小説月報』『礼拝六』『民権素』などの雑誌が書影とともに15回にわたって紹介された。無署名だが、実藤恵秀が執筆し竹内好が大幅に手を入れたと聞いている<sup>4</sup>。清末民初が小説専門雑誌の時代であることを見抜いた企画であり、見識の高さを示しているといえるだろう。飯塚朗が蘇曼殊について書き、岡崎俊夫が翻訳老残遊記の解題を発表する（該誌は第60号より『中国文学』と改題した）。

竹内好は『中国文学月報』第59号（1940.2.1。汲古書院影印本。156頁）の「後記」に次のように述べる。「歴研の東洋史の人たちと僕らの会（注：中国文学研究会）

の間にいま清末研究会（未定）設立の相談が起つてゐる」。清末研究会が実際に創立されたかどうかは知らない。しかし当時、清末という時代が意識されていたということは記録にとどめておく価値があるだろう。

中国文学研究会の仕事は40年代にも引き継がれる。

#### 4 1940年代——『中国文学』、澤田瑞穂、中村忠行

『中国文学』に連載されていた劉鉄雲著、岡崎俊夫訳「老残遊記」および劉半農著、竹内好訳補「賽金花」は、いずれも生活社より単行本として発行された。前者は1941年、後者は1942年の出版である。

日本の敗戦をへて中国文学における清末小説を概観した文章が発表された。澤田瑞穂『中国の文学』（学徒援護会1948.9.5）だ。中国滞在中に収集した資料をもとにして書かれた該文は、日本人の手になる清末小説の概観としては最もはやいもののひとつだといえる。

比較文学の手法によって日本文学を起点にして清末小説に接触しているのが中村忠行である。「中国文芸に及ぼせる日本文芸の影響」1-5が、『台大文学』第7巻第4号-第8巻第5号（1942.12.31-1944.11.5）に連載されたのをはじめとして、敗戦後は『天理大学学報』『華僑文化』、50年代は『中国資料（旬刊）』『亜東資料』に、60年代は『天理大学学報』、70、80年代は加えて『清末小説研究』を主なる発表舞台とし健筆をふるう。筆のおよぶ先は、梁啓超、演劇、児童文学、虚無党小説、翻訳小説、探偵小説、説部叢書、商務印書館などなど多彩にして広範である。その資料にもとづいた立論の綿密さは定評のあるところだ。世界を含めた清末小説研究界においてその業績は屹立している。氏は生前、論文を著書にまとめることを拒んでおられた。論文を読みたければ、発表誌に当たるほかない。

#### 5 1950年代——中村忠行、『北斗』、中野美代子

1940年代に引き続く中村忠行の研究がある。「政治小説に於ける比較と交流」（『文学』第21巻第9号 1953.9.10）は、日中間における文学の影響関係を軸にし

て文学の状況を概観したものだ。

中国文学研究会の仕事として竹内好、岡崎俊夫監修、中国文学研究会編『中国新文学事典』（1955.11.25河出書房）が出版され、「作家、文学遺産」の項目に清末小説関係を収録する。1930、40年代の研究蓄積があったからこそ事典に組み込むことができたと考えられる。

1950年代の研究雑誌をしいてあげるとすれば、竹内好らの中国文学研究会に次ぐ世代によって創刊された『北斗』がある。先輩にならうかのように「黎明期の文学雑誌」と銘打ち『小説月報』『新青年』などを紹介する。ただしそれ以上に広がらなかったのが惜しい。

清末の四作家と梁啓超について論じた中野美代子の清末小説研究がある（北海道大学『外国語・外国文学研究』5-9、1958-1962）。

## 6 1960年代——『清末文学言語研究会会報』、増田渉

清末を名前に使った雑誌が登場した。主として関西の研究者が集まり1962年に創刊された『清末文学言語研究会会報』である。宮田一郎、飯田吉郎、香坂順一、鳥居久靖、鈴木直治らが「官場現形記」「二十年目睹之怪現狀」「孽海花」などの版本、語彙についての論文を発表した。のちに中国語学研究会関西支部編『中国語と中国文化』（光生館1965.5.10）の清末部分にまとまる。

1960年代前半の日本において研究の盛り上がりが見られるのは、中国からの影響にちがいない。阿英が「中国近代反侵略文学集」（北京古籍出版社1957.2-北京・中華書局1960.2）および「晚清文学叢鈔」（北京・中華書局1960.5-1961.4）シリーズを編集出版したからだ。その延長線上で日本に清末小説の版本研究という基礎作業が出現した。ということは研究が本格化する前段階にさしかかったことを意味する。

増田渉が清末の文学者に関する一連の論文を大阪市大の紀要『人文研究』に発表しはじめたのは1955年からにさかのぼる。これに「中国現代文学選集」第1巻『清末・五四前夜集』（平凡社1963.8.15）のために書いた「清末小説について」などをまとめたものが『中国文学史研究』（岩波書店1967.7.25）だ。増田は清末

小説の収集でも有名だった。原本を収集し所蔵するからこそ独自の研究を進めることができた。現在それらの貴重な書籍は関西大学の増田文庫に収蔵されている（参照：中島利郎編「増田渉先生旧蔵清末小説書目」『呻呷』第10号1978.6.30）。

内田道夫は「庚子事変をめぐる文学」（東北大学『文化』第23巻第3号 1959.11）をはじめとして1960年代には林紓、譴責小説についての論文を発表した。関連して『中国小説の世界』（評論社1970.12.10）が生まれる。清末小説部分の執筆は、三宝政美と細谷草子だ。

この時期の出版物として特筆すべきは、太田辰夫『海天鴻雪記』（呉語注稿第一本 前言に1970年10月の日付あり）であろう。苦心のすえ入手した該書を秘蔵したままで終らせることなく自家影印された快挙に対して私は敬意を表する。四分冊刊行を予定したが完結しなかった。

1966年に発動された「文化大革命」により中国では清末小説研究どころではなくなった。日本でもその影響からのがれることはできなかったといわざるをえない。清末小説についての論文が目に見えて少なくなっているのがその証拠だ。

中国の研究動向に日本の研究界が影響されている。別の角度からこの事実をながめる。

外国文学研究はその対象国における研究動態に多少なりとも影響されるのが普通だろう。中国古典文学研究については知らない。しかしこと中国近現代文学研究にかぎっていえば、中国での研究成果をふまえて日本の大部分の研究が存在するという印象を私は抱いている。結果として出てきた評価に違いはあるかもしれない。だが中国で特定の作家について多くの論文が発表されると日本でもその作家研究が流行する。中国で流行する研究題材を日本でも追いかける。少数の例外を除けばこれが外国文学研究につきまとう逃れられない一般的な傾向のような気がする。

1954年より北京と上海であらそうように「官場現形記」「二十年目睹之怪現狀」などの作品が復刻されはじめた。くわえて60年代にかけて前述の阿英編集の原典復刻シリーズ（中国近代反侵略文学集1957-60、晩清文学叢鈔1960-61）が出版される。日本での研究は阿英が編纂したこれらの書籍にお世話になっているはずだ。しかしそれ以後日本での清末小説研究は継続されなかった。

研究のしりすぼみ現象は中国学界の変化が原因だ。1950年代から「文革」直前にくりひろげられた「老残遊記」批判<sup>\*5</sup>、譴責小説批判が日本の研究者に強い影響をおよぼした。私はそう考えている。当時、日本においても新しく清末小説研究を志す人はほとんど出現しなかった。日本には中国での「評価」を守るべきものとしてそのまま日本の研究に押しつける人が、ままた。中国で「評判の悪い」分野を誰が好きこのんで専攻するだろうか。あえて選択するとすればその人はヘソまがりである。そう私は偏屈だったのだ。

くりかえすが少数の例外を除いて1970年までの日本における清末小説研究は、中国で発行される資料集、発表される論文を受信することに多大の熱量を費やしてきたということだ。受信型の研究だから中国での研究状況からその影響を真っ直ぐに受ける。中国で清末小説批判があればあえてそれに手を染める日本人研究者もいないのも道理だ。ましてや日本で資料を発見する、新説を発表するなど思いもよらない。外国文学研究の宿命とまでいえばいいすぎになるだろう。だがこと清末小説研究についていえばそれに近いものがあつた。

ところがつづく1970年代には中国における研究が停滞したのとは無関係に、日本での清末小説研究が盛んになる。特異な現象だというべきだろう。

## 7 1970年代——『野草』、『呻唾』、『清末小説研究』

関西在住の研究者、大学院生たちが中心となって結成したのが中国文芸研究会である。機関誌『野草』第2号(1971.1.15)で「清末小説特集」を編集した。日本の研究雑誌における最初の清末小説特集である。澤田瑞穂、樽本照雄、相浦杲、増田渉、橋本高勝、島田虔次らの文章が掲載された。

1930年代から数えれば日本での清末小説研究はすでに40年間の歴史がある。しかし研究の基礎となるべき資料の整理がなされていない。当時の私はそう考えた。よるべき作品の本文が後世の人の手により一部でも書き換えられていたとしたら、またそれに気付かないとしたら研究そのものが成り立たないことは明白である(阿英による書き換えが確かに存在する。この事実を指摘する研究者は多くない)。版本研究も重視されなければならない<sup>\*6</sup>。

私は、まず清末に発行された小説専門雑誌の総目録を作成することから着手した。日本に原本での揃いはただの1組と思われる『繡像小説』（追記：澤田瑞穂旧蔵。現早稲田大学図書館風陵文庫）の総目録（『大阪経大論集』第93号1973.5.15）をはじめに清末の主要雑誌8種類の総目録を作成する（1982年まで）。作品の掲載を確認するためにも必要だ。

こういう基礎作業を実行する研究者は清末の分野に限っていえばそのころ中国にも日本にもいなかったように記憶する。（現在でも中国では資料整理の仕事は研究よりも一段と低く見られているようだ。従事する研究者が少ない理由だろう）

日本文学研究で文芸雑誌の総目録を作成することは、研究の基礎作業として重視される。ところが私が同じことを清末小説で実行していると「研究になんの役に立つのか」と批判がましく直接私に問う人がいるのが日本の当時の実情だった。その人は清末小説の思想などを究明しない研究は研究ではないとでも思っていたのだろう。

資料の発掘にも心掛けた。『老残遊記二集』の原本を日本でさがし出したのは最初の成果だ<sup>\*7</sup>。簡単に説明する。『老残遊記』初集20回本は多種類が刊行されている。しかし二集が掲載された『天津日日新聞』を実物で確認した研究者はいなかった。その切抜き本を日本で見つけたというわけ。今にいたるまで中国で天津日日新聞版『老残遊記二集』の所蔵があることを聞かない。

資料の発掘によりそれまで謎とされていた「老残遊記」執筆過程を解明することができた。また一部でとなえられていた二集贋作説をも否定したのである。中国での研究成果を引き写すだけの文章とは異なるものを提出できたと考える。これこそ発信型の研究論文だ。研究者の誰でもが参考にしなければならない事実を明るみに出したからである。

自国の文学を研究する専門家ですら解決できなかった事柄を、それがどれほど小さい問題であっても（ここは謙遜している）外国人が解きほぐしたのだから少しくらい自慢してもいい（ここまで書けば、あの台湾の研究者はこの重大性が理解できるだろう）。

『呻啞』は増田渉の教え子である関西大学院生が中心となり創刊した雑誌である。中島利郎が1975年より「阿英『晚清小説史』試訳ノオト」を連載し始め（第



10号1978年まで)、吳趼人特集を組むほか彼自身も吳趼人に関する文章を精力的に発表する(第20号1985年まで)。『咄咄』そのものは第29号を『台湾文学の諸相』(緑蔭書房1998.9.30)と改題発行して終わった。

1970年代に日本の清末小説研究がそれまでの受信から発信に転換したことを物語る象徴的事件がある。研究専門雑誌『清末小説研究』の創刊だ。

『清末小説研究』雑誌の創刊(1977.10.1)は、中国の『中国近代文学研究』第1輯(1983.11)発行に先立つこと7年である。世界最初であるばかりでなく現在も発行が継続していることでも唯一の研究雑誌だ(第8号より『清末小説』と改題。追記:第35号2010で停刊)。樽本が主編となり、中島利郎、麦生登美江が毎号のように論文を発表する。中村忠行「清末探偵小説史稿」全3回の連載は、材料豊富にして氏でなければ書けない論文だ。

資料整理を目的のひとつとし、劉鉄雲、李伯元、吳趼人、曾孟樸らの研究資料目録を編集する。2001年までに24号を発行し、既刊号の論文、資料あわせて約200本の文章が掲載されている。

清末小説研究の専門誌が日本で継続発行されていることは、考えればきわめて重要でかつ珍しい事柄に属する。

中国、香港、台湾においても専門研究誌はない。過去にはあったが長続きしなかった。世界で唯一の専門雑誌が、それも日本という外国で発行されているのだ。特筆にあたいする。

その編集方針は資料にもとづく論文である。清末小説研究者は、『清末小説(研究)』を見ることなしに研究をすすめることができなくなっている。そういつても過言ではない。

その証拠に日本以外からの漢語論文の投稿が増えている。そればかりか『清末小説』に掲載された論文が、中国の雑誌に転載されるという現象がおこっている。ただし転載を明記しない場合があつてこれはルール違反である。摩擦が発生しそうになるくらいに交流しているということもできる。

こう見てくると1970年代は研究雑誌創刊の年代ともいうことが可能だ。研究者と発表の場の両輪がそろってこそ研究が進む。

重要なのは研究雑誌が日本で創刊されたというだけではなく、研究そのものが

質的变化をとげていることだ。

中国の研究を後追いしようとしても目標となるその研究自体が「文革」で存在しなかった。マネのしようがない。日本で独自に問題を探索しながら資料を発掘しはじめた。その結果、論文に新しい発見が盛りこまれる。新しい発見がある文章は他の研究者にとっては読まないわけにはいかない。これこそが発信型の研究ということになる。

そのほか注目すべき研究に蘇曼殊著、飯塚朗訳『断鴻零雁記』（東洋文庫219 平凡社1972.10.10）ならびに阿英著、飯塚朗・中野美代子共訳『晚清小説史』（東洋文庫349 平凡社1979.2.23）がある<sup>\*8</sup>。後者の中島利郎による詳細な注が有益だ。

## 8 1980年代——『清末小説閑談』、『中国文芸研究会会報』、 『清末小説から』、『清末民初小説目録』

李伯元が新聞主催の妓女コンテスト（花榜）を行なったのは知る人ぞ知る有名な事だ。いくつかの資料には新聞紙上で開催された花榜の記録が見える。これを証明する直接資料を樽本が日本の書店で発見した。『庚子蕊宮花選』と題する小冊子である<sup>\*9</sup>。花榜に類する妓女コンテストを花選という。『清末小説研究』第5号（1981）に影印しておいた。それにしても珍しい資料が日本に伝えられたものだとは今でも不思議に思う。のちに薛正興主編『李伯元全集』（南京・江蘇古籍出版社1997.12）に事前承諾なく収録された。

もうひとつ。これも書店で発掘した世界繁華報館増注本『官場現形記』がある。現在までその存在を明らかにした文章を中国でも日本でも見たことはない。きわめて貴重な版本だといえることができよう。めずらしいばかりではない。この世界繁華報館増注本の存在は「官場現形記」が李伯元と欧陽鉅源の共同作品であることを示しているのだ<sup>\*10</sup>。『繡像小説』編者問題に関連して、南亭亭長という筆名が李伯元と欧陽鉅源の共同筆名であることがのちにわかった。「官場現形記」の場合も同じなのだ。

樽本『清末小説閑談』（法律文化社1983.9.20）<sup>\*11</sup>は、既発表の論文をまとめたものである。清末小説研究の専著としては日本で最初の単行本だ。

『清末小説研究』第7号(1983.12.1)は全頁が漢語の中文版だ。『野草』第33号(1984.2.10)では清末小説特集(その2)を編集する。

中国政治小説研究札記と副題する山田敬三の論文が複数ある。

S Fの方面から清末小説に接近する武田雅哉がいる。その著書に『翔べ!大清帝国』(リブレポート1988.11.15)、中野美代子・武田雅哉『世紀末中国のかわら版——絵入新聞「点石齋画報」の世界』(福武書店1989.2.15)がある。

80年代で注目されるもののひとつは『繡像小説』の編者をめぐる論争だ。これをあげる理由がある。世界的な規模で研究者が参集したのだ。しかも長期間にわたる特異なものだった。『光明日報』の「文学遺産」欄を舞台に該雑誌の編者は李伯元ではない、いややはり李伯元だと日中両国はもとよりそのほかの研究者が討論に参加した<sup>\*12</sup>。

編者問題はのちに「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題に拡大していく。論文発表の舞台も『出版史料』へ、また日本の『中国文芸研究会会報』(『野草』の姉妹誌。月刊)に移った。

1984年から86年にわたる論争に参加したのは、汪家熔、樽本照雄、魏紹昌、鄭逸梅、許国良、方山、張純、中村忠行、時萌、MANYING IPらである。

日本、中国、ニュージーランドの研究者がひとつの論題に関して討論を続けた。それまで類を見ないくらい希有な出来事だ。またこのことは清末小説研究がすでに国際的な規模にまで発展しつつあることをも証明しているといえよう。同時にこれもまた日本での研究が発信型になっていることのひとつの証拠だ。

『繡像小説』編者問題に決着がつくのは、論争開始から17年後(2001年)である。商務印書館が『繡像小説』の主編に南亭亭長李伯元を招いたと新聞に広告を出した。これが論争を終結させた(追記:決定的証拠の存在が提出されたあとに汪家熔は反対しつづけている。証拠があるにもかかわらずそれを認めようとはしない。研究者としていかがなものかと思う)。

資料探索では、日本菊池幽芳著、我仏山人(吳趸人)衍義「電術奇談」の原作が菊池の「新聞売子」であることが明らかにされた<sup>\*13</sup>。原作についての発見を中国の研究者(王立言を指す。実名を出すのはそうしなければこの重大さを理解しないからだ)が自らの文章に無断借用して中島利郎、樽本らに批判されている。

『清末小説』は年1回の発行である。清末小説についての情報量が飛躍的に増加している事態に対応するため年4回発行の季刊誌『清末小説から』があらたに創刊された。1986年のことだ。劉鉄雲の日本訪問を日本の新聞記事に見つたり<sup>\*14</sup>研究文献目録欄を設けるなど資料の発掘と情報の交流を重視する編集方針がある。

編集方針は「発情継交」の4字にまとめられる。つまり、<sup>◎</sup>見のある文章を掲載し、<sup>◎</sup>情報の交換を行ない、<sup>◎</sup>発行の継続を力とし、<sup>◎</sup>双方向の交流を実現したいという意味なのだ。2002年1月現在第64号を発行し年4回の刊行を維持している（追記：第101号よりウェブのみの公開となる。2018年7月現在第130号を発表）。

阿英の「晩清小説目」（『晩清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8／増補版、上海・古典文学出版社1957.9）が出版されて以来、該目録に対していく度か増補の試みがなされた。しかし初出の雑誌から最近の復刻影印版にいたるまでのすべての版本を収録する目録は中国でも編纂されていない。

清末小説の総目録こそ研究の基礎となるものだ。日本という外国で中国の小説の目録を編集するなどという行為は無謀といわれてもしかたがない。現物を確認できるものは限られている。しかし研究に不可欠であるからには作成しなければならない。樽本たちは清末から民初にかけて出版された小説を各種目録から採集することにした。その結果おおよそ1万件の小説を収録する目録を発行することができた。すなわち清末小説研究会編『清末民初小説目録』（中国文芸研究会発行1988.3.1）だ。

約1千ページという大部の目録は、阿英の目録を大きく乗り越えたということができる。それが日本という外国で完成したことは注目されてもいい。

基本工具書が出版されたことは、研究の前進に大いに貢献するはずだ。同時に、収録された創作と翻訳作品の多さが清末民初時期の小説が豊かに実っていたことを無言のうちに証明する結果ともなった。それまで文学革命以前には小説のめぼしい収穫など微々たるものであったという印象があったのを完全に覆したのである。

阿英の「晩清小説目」はこれでようやく引退することができる。ただし『清末民初小説目録』の発行部数が少なく利用できる研究者にかぎりがあることが、の

ちの研究の2極分化に結びつく。

## 9 1990年代——『新編清末民初小説目録』、『清末民初小説年表』

研究誌『清末小説』と『清末小説から』が定期刊行物として発行されつづけている。世界で唯一の清末小説専門研究雑誌が、日本において樽本の個人誌として存続していることは普通ではない。中国では継続発行が不可能な種類の専門誌なのだ。

そればかりか基礎資料の編集出版もひきつづいて行なわれている。

『清末民初小説目録』を増補改訂した樽本編『新編清末民初小説目録』（清末小説研究会1997.10.10）が刊行された。旧版に比較して収録件数を大幅に増加させている（追記：『清末民初小説目録 第10版』2018年ウェブ公開）。

編集の特色は雑誌主義だ。清末に出現した小説専門雑誌は、以前には見られない作品の発表形態を提供する。最初、雑誌に連載されたものがのちに単行本となる。単行本化されない作品も多数にのぼる。以前の単行本のみを採取対象としていた目録では、清末の正しい状況を反映することができないのだ。そこで初出雑誌に掲載された作品はすべて採取するというのが雑誌主義である。編集方針をこの雑誌主義に置き単行本主義も併用して清末民初時期に発表されたすべての小説を網羅しようという試みである。旧版に比較しても大きな反響が中国の研究界にあった。多くの書評が発表されているのがその証拠だ。

さらには、樽本編『清末民初小説年表』（清末小説研究会1999.10.10）も出版された。1840-1919年に発表された小説を創作と翻訳にわけて見開きで示す。

新編目録は個々の小説の履歴書であり、年表は時間の流れにそって発表された小説の一覧表となる。それぞれの作品を全体の流れのなかに置いてながめることができるようになった。両書を使用すれば、より視野を広げて清末民初小説に接触できるだろう。

中国ではこの種の編纂物がなぜ出版されなかったのか、まことに不思議としかいいようがない（追記：次の書籍が出た。王継権、夏生元編『中国近代小説目録』南昌・百花洲文藝出版社1998.5。陳大康『中国近代小説編年』上海・華東師範大学出版社

2002.12。陳大康『中国近代小説編年史』全6冊 北京・人民文学出版社2014.1。劉永文編『晚清小説目録』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008.11。劉永文編『民国小説目録（1912-1920）』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2011.12。）。

聞くところによると、新編目録を入手した中国人研究者は学術的価値を評価し独自に中国の出版社3社にその発行を打診したそうだ。3社ともに出版の重要性を認めながら出版すれば赤字になるのを恐れて辞退したという。改革開放政策のもとでは学術出版は望むべくもない。必要としている研究者が利用することがむつかしい新編目録と年表であるといえるかもしれない。しかしそれは中国の研究界、あるいは出版界の事情であって日本で研究とは直接には結びつかない。

（追記：結果として中国で刊行された。『新編増補清末民初小説目録』済南・齊魯書社2002.4。書名は変更されているが数えて第3版である。2018年現在は第10版をウェブ公開）  
清末小説研究の単行本も出ている。樽本『清末小説論集』（法律文化社1992.2.20）、同『清末小説探索』（同前1998.9.20）（ほかの樽本著作は省略する）および中島利郎『晚清小説研叢』（汲古書院1997.7.30）である。中島利郎は台湾文学研究に方向を転換したようだ。『晚清小説研叢』は彼の清末小説研究締めくくりの著作となった。

日本において清末小説研究を継続している人は、目録を見てもらえばわかる。注目すべきは、李慶国、張仕英、利波雄一、森川（麦生）登美江、松田（鈴木）郁子（追記：松田郁子『呉趺人小論——‘譴責’を超えて』汲古書院2017.12.12）たちの研究だ。

この100年間にわたる日本における研究状況を簡単に概観した。内外の研究状況は変化しつつある。清末小説研究会がインターネット上にホームページを設置したのも1990年代後半だ。世界へむけての発信指向がいよいよ強まった（追記：中国でネット規制が強化されているという。受信ができなければ意味はない）。

インターネットといえば、以前には存在しなかったまったく新しい形態の論文集が出現した。樽本の漢訳ドイル論文の5点がまとめられて『漢訳ドイル作品論考』第1巻（しょうそう文学研究所出版局2002.1.15）と題されている。ただし、書籍の形をとらない。<http://page.freett.com/Shoso/index.htm> からデータをダウンロードして各自の電脳で読むのだ。紙に印刷しないから出版社にとってはそれ



だけ経費を節約することができる。読者にしてみれば絶版という事態が生じない。保管する場所が不必要となる。

## 10 中間報告

発信型の研究というのは内容には新しい発見があり（新資料の発見を含む）、説得力のある仮説を提出しそれまで問題の存在さえ考えられなかった場所に光を当てて疑問を投げかけるという積極的なものなのだ。

たとえば研究者が『清末小説』を無視できない理由のひとつは、掲載する資料が貴重だからだ。

作品の再掲載がある（数字は掲載年を示す）。「庚子蕊宮花選」（1981）、「老残遊記手稿」（1986）、「白話牡丹亭」（1989）、「冰山雪海」（1990）、「胡宝玉」（1991）、「海上名妓四大金剛奇書」（1992-96）など、いずれもが普通に見ることのできない作品だ。ゆえに中国で発行する資料集に収録したいという依頼があったり、勝手に無断借用したりしている。

新しい指摘がなされている。すでに紹介した論文以外のものをあげると以下の問題が提起されているのだ。

周樹人は魯迅とばかりはかぎらない、周樹人が複数人いる（1983、1994）。李伯元と吳趸人は同時に経済特科へ推薦されていた（1995）。作品の発行年月表示するとき旧暦と新暦を混用している（1999）。魯迅の「斯巴達之魂」は翻訳部分とでの悪い創作部分によって構成されている（1999）。魯迅の翻訳「造人術」の原作は黒人と中国人を蔑視する作品である（1999）。「老残遊記」の記述をもとにして劉鉄雲の黄河治水策が論議されており、それだけでは不十分だ（2000）などなど。

仮説に対して研究者はそれに賛成するか否かの態度表明を迫られる。情報化時代に突入している現在において、中国だ外国だというその垣根が消滅しているのも同じなのである。全世界的規模の研究態勢に入っているという認識だ。中国の研究者だから外国で問題提起が行なわれていることなど知らないというのでは、もうその時点で研究者失格といわれてもしかたがなからう。

清末小説研究会の場合、定期刊行物として年刊の『清末小説』（停刊）と季刊の『清末小説から』を持っている。論文をいれる容器があることも発信型研究の存在を明確にしている。それプラス研究会のホームページである。

日本からこれだけ発信をしている。別の言葉でいえば全体を見ると地球規模である。清末小説研究は中国人研究者だけのものではない。すでにその範囲を逸脱している。これこそが上にいう全世界的に拡大している研究態勢という意味だ。

日本における清末小説研究という題名である。しかし現状にてらして述べるとすれば、世界における日本の清末小説研究の占める位置をいうことに通じる。

情報化時代の研究は、外部の研究に敏感であるか、または鈍感であるかの2極に分化することになるろう。

日本における清末小説研究はまだ継続中だ。本稿が中間報告にならざるをえない理由である。



論文抜き刷り

【注】

- 1) ちなみに2001年に日本国内で発表された清末小説関係の論文は、57篇。
- 2) 飯田吉郎編『現代中国文学研究文献目録——増補版——(1908-1945)』汲古書院1991.2。  
3頁による

- 3) 樽本照雄『初期商務印書館研究』清末小説研究会2000.9.9
- 4) 樽本照雄「幻の雑誌『新小説』」『野草』第20号1977.8.1
- 5) 樽本照雄「『老残遊記』批判とは何か」『清末小説探索』所収
- 6) 樽本照雄「版本のこと——『鄰女語』を例として」『清末小説論集』所収
- 7) 樽本照雄「天津日日新聞版『老残遊記二集』について」『清末小説閑談』所収
- 8) 樽本照雄「翻訳に訳者の研究姿勢が見える——阿英『晚清小説史』の翻訳を読む」『野草』第25号 1980.5.1
- 9) 樽本照雄「游戲主人選定『庚子蕊宮花選』」『清末小説閑談』所収
- 10) 樽本照雄「『官場現形記』の真偽問題」『清末小説閑談』所収
- 11) 中島利郎「樽本照雄『清末小説閑談』について」『大阪経大論集』第171号1986.5.15
- 12) 沢本香子「ワクドキ清末小説」『清末小説論集』所収
- 13) 樽本照雄「呉趺人「電術奇談」の原作」『清末小説論集』所収
- 14) 樽本照雄「劉鉄雲の初来日」『清末小説論集』所収

【資料】日本における清末小説研究に言及する文献（新編目録、年表書評を含む）

1. 黎 活仁「日本新出版的『清末小説研究』」香港『天地叢刊』創刊号1978.9.20
2. 中野美代子「（翻訳晚清小説史）解説 阿英著、飯塚朗・中野美代子共訳『晚清小説史』東洋文庫349 平凡社1979.2.23
3. 心 田「『清末小説研究』（日文）第2号出版」香港『開卷』1979年8月号（総8期）
4. 『文史研究与古籍出版動態』第35期 1979.9.10
5. 徐 允平「日本近年中国古典文学研究述略」『文学評論』1981年第5期 1981.9.15
6. 徐 允平「日本近年中国文学研究述略」『中国文学研究年鑑』（1981）中国社会科学出版社1982.10
7. 高 健行「日本学者研究劉鶚及《老残遊記》簡況」『光明日報』1983.2.2
8. 林 崗「日本研究中国近代（清末）文学述略」『中国近代文学研究』第1輯 1983.11
9. 竹 青「日本学者对《老残遊記》的研究」『学术界動態』第40期（総236期）上海社会科学院情報研究所1983.11.25
10. 魏 仲佑「清末小説的研究在日本」『漢学論文集』第3集 晚清小説専号 1984.12
11. 莊 月江「樽本照雄与清末小説研究会」『文藝情況』1985年8月号（総112期）1985.8.23
12. 中島利郎「日本における劉鶚研究について」『清末小説』第10号1987.12.1
13. 中島利郎「劉鶚研究在日本」南京師範大学『文教資料』1988年4期 1988.8.5

14. 西田元子「本屋にない本 清末民初小説目録」『国立国会図書館月報』第333号 国立国会図書館1988.12.20
15. 「日本学者的晚清小説研究」 袁健、鄭榮編著『晚清小説研究概説』天津教育出版社 1989.7
16. 黎 活仁「日本の清末小説研究以及《清末小説》年刊」『幼獅文藝』1991年6月号／再録：『清末小説から』第23号 1991.10.1
17. 向 雲「日本《清末小説研究》及其他」『中国文学研究年鑑』1988 中国文聯出版公司1992
18. 榊原貴教「中国における西洋翻訳文学——樽本照雄編『新編清末民初小説目録』を手にして」『明治翻訳文学通信』第2号 1997.12
19. 王 学鈞「樽本照雄《新編清末民初小説目録》読後」『明清小説研究』1997年第4期（総第46期）1997.12.10
20. 范 伯群「一位鏗而不捨の学者——紹介《新編清末民初小説目録》及其編纂者樽本照雄」『通俗文学評論』1998年第1期 1998.2.25
21. 汪 家熔「鏗而不捨 金石可鏤——読《新編清末民初小説目録》後」『出版史研究』第6輯 1998.2
22. 郭 延礼「对中国近代小説の新認識——簡評《新編清末民初小説目録》」『文史哲』1998年第2期（総第245期）1998.3.24
23. 黄 錦珠「樽本照雄和他的《新編清末民初小説目録》」台湾『文訊』別冊11号（総号151）1998.5.1
24. 汪 家熔「從《新編清末民初小説目録》看到和想到的」『図書館建設』1998年第3期 1998.5.20
25. 寧 稼雨「清末民初小説数量的最新統計」『文匯読書周報』1998.7.4
26. 夏 曉虹「近代小説知多少」『読書』1998年第7期 1998.7
27. 袁 進「中国小説的轉型期——《清末民初小説目録》」『読書導報』1998.8.5
28. 袁 進「弥補缺憾 糾正誤区——評《清末民初小説目録》」『社会科学』1999年第4期
29. 夏 曉虹「小説年代紀的意義」『中華読書報』2000.2.2
30. 顔 廷亮「樽本先生の貢献和中国学者的任務——從《新編清末民初小説目録》談起」甘肅省『社科縱橫』2000年第1期 2000.2.25
31. 范 伯群「八十春秋 一目了然」江蘇省『書与人』2000年第2期（総第39期）2000.3.15

(注：樽本照雄編『清末民初小説年表』の書評)

32. 阪口直樹「中国現代文学研究の源流を発掘する——樽本照雄『初期商務印書館研究』」  
『中国文芸研究会会報』第228号 2000.10.29

## 「阿英『晚清小説史』ほか索引」について

『阿英『晚清小説史』ほか索引』（清末小説研究会2007.2.1 清末小説研究資料叢書10）に収録。『晚清小説史』には台湾で発行された版本が1種類あることに気づき「補遺」を書いた（沢本香子名を使用。『清末小説から』第85号2007.4.1）。本稿にはそれを組み込んでいる。また、のちに刊行された関係書籍は気のついた限り「追記」で補った。採録漏れがあるかもしれない。

本書に収録する索引は、以下の書籍4種類についてのものである。発行順にならべる。

- 1 阿 英『晚清小説史』北京・人民文学出版社1991.4北京第2次印刷
- 2 欧陽 健『晚清小説史』杭州・浙江古籍出版社1997.6
- 3 （美）韓南 PATRICK HANAN 著、徐侠訳『中国近代小説的興起』上海教育出版社2004.5
- 4 （日）樽本照雄著、陳薇監訳『清末小説研究集稿』済南・齊魯書社2006.8



それぞれについて簡単に説明する。



図1



図2

## 1 阿英『晚清小説史』

最初の清末小説史である。上海・商務印書館（1937.5）（図1）から出版された。作品の内容により分類して記述するところに特色がある。翻訳小説を含めてその説明の範囲は幅広く、入門書としても活用されている。

目次を掲げて内容紹介にかえる。

- 第1章 晚清小説的繁栄
- 第2章 晚清社会概観（上）
- 第3章 晚清社会概観（下）
- 第4章 庚子事变的反映
- 第5章 反華工禁約運動
- 第6章 工商業戦争与反買弁階級

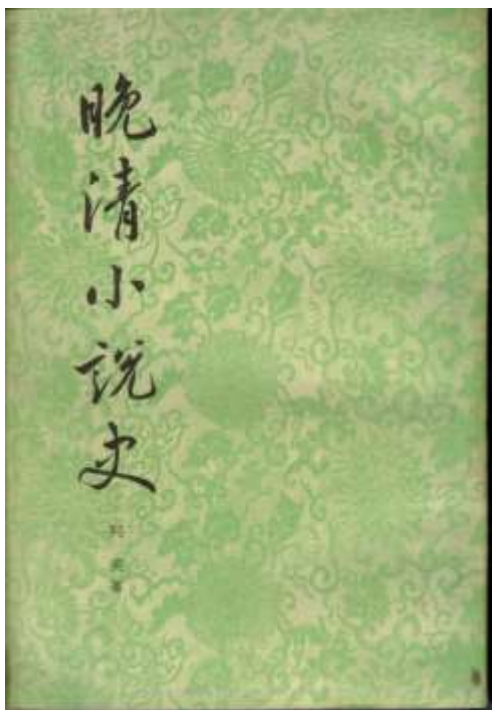


図3



図4

- 第7章 立憲運動両面観
- 第8章 種族革命運動
- 第9章 婦女解放問題
- 第10章 反迷信運動
- 第11章 官僚生活的暴露
- 第12章 講史与公案
- 第13章 晚清小説之末流
- 第14章 翻譯小説

それまでに見られなかった豊富さで作品を収録して記述する。ゆえに清末小説の専門著作といえバ阿英著『晚清小説史』である。そういう時期が長期にわたってつづいている。需要があったらしく初版から約20年後に修正版が、北京・作家出版社（1955.8. 1958.3に重版）（図2）から出た。



阿英は、その「跋」において次のように説明する。「……（商務印書館版）本書はすでに絶版となっているが、時に各方面より需要がある。原作品はまたすべて蔣匪によって〔為蔣匪〕すでに強奪されてしまっており急に書き改めるのも簡単ではない。多くの考え方が今と昔では違うが、その内容は参考にする意義を失っていない。……」（190頁）ということで文章に手を入れて修正版とした。

文章に手を入れた実例のひとつは、たとえば胡適にまつわる部分がある。

第1章のまとめに初版では胡適と魯迅の文章を引用していた。1955年の修正版ではその胡適部分を削除する。ただし本文中には胡適から引用してそのままになっている箇所がある。必要最低限は残しながらできるかぎり削除したようだ。当時くりひろげられていた胡適批判の影響であろう。

また翻訳部分の周作人についても削除している。初版に見える「魯迅と周作人」を「周樹人（魯迅）兄弟」にあらためる。周作人の名前を出したくなかったのは、当時の周作人批判が理由だ。

阿英は、本格的な改訂版を考えていた。以下の文章が発表されている。

「關於“二十年目睹之怪現狀”——“晚清小説史”改稿的一節」『文藝學習』

1957年第1期1957.1.8

「關於《老殘遊記》——《晚清小説》改稿的一節」『文学評論』第4期1962.8.14

「關於《官場現形記》——《晚清小説史》改稿的一節」『小説三談』上海古籍出版社1979.8

副題に「改稿」と記入しているところからも阿英の意図が理解できる。しかし発表年月を見てもらえばわかるように3本の論文ともに『晚清小説史』修正版が出た1955年以後に公表された。改訂版の準備を進めていたが間に合わなかった。たしかに「急に書き改めるのも簡単ではな」かったようだ。そこで書き改めた部分だけを後日、個別に発表したものだろう。だがこの数3本では完成にはほど遠かったといわざるをえない。

阿英「晚清小説目」（『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8／増補版 上海・古典文学出版社1957.9、北京・中華書局1959.5）とあわせて、『晚清小説史』は

清末小説研究の基礎文献として認められてきた。

阿英の死後、娘婿の呉泰昌がさらに訂正を加えたものが重ねて出た。北京・人民文学出版社（1980.8/1991.4北京第2次印刷）（図3）だ。

呉の「校勘後記」が事情を説明して、後の研究成果を取り入れたという。ただし紙型を利用しての重版だから訂正部分は活字を象嵌する必要がある。電腦製版でオフセット印刷する現在に比較すれば自由にできるわけではない。おのずと訂正は限定されたものとなる。いくつかの誤りはそれでも残った。最新版だからとはいえずでにだいぶ時間は経過しているが、本書に収録した索引はこの北京・人民文学出版社1991.4北京第2次印刷本に基づいて作成している。

さらに後年、簡化字になおして横組みの北京・東方出版社（1996.3民国学術經典文庫）（図4）が出版されている。こちらで自由に十分に訂正したかというのと、それは実現していない。人民文学出版社版をそのまま組み直しただけ。理由は不明だが呉泰昌「校勘後記」は未収録だ。（追記：南京・鳳凰出版伝媒集団、江蘇文藝出版社2009.1がある）

台湾では私が知るところ3種類の阿英『晚清小説史』が出版されている。

2種類は台湾・商務印書館が発行する。

ひとつは1968年5月のもの（図5）。1937年上海初版を縮小影印して日本でいう新書判だ。「人人文庫679・680」の表示がある。なぜ数字がふたつあるのかわからない。影印本だから初版そのままだと考えれば誤る。283頁途中から287頁まで周兄弟の翻訳小説部分をバツサリと削除している。台湾では魯迅がタブーであった時代のものだ。今からは想像もできないだろう。

台湾第2版（図6）が1996年11月に出た。発行年は北京の人民文学出版社版よりも遅いがそれとはまったく関係がない。本文は1937年上海初版のものをそのままに新しく組み直しただけ。周兄弟の翻訳小説部分は復活させている。だが北京でほどこされた修正、訂正は取り入れていない。（追記：2004.4台二版あり）

もうひとつは修正版で、台湾・天宇出版社版（1988.9）（図7）で見ることができる。これは香港・太平書局版（1966.1）あるいは香港・中華書局香港分局版（1973.6）をそのまま影印したもの。なぜそれがわかるかといえば、阿英の改訂版説明文にある「為蔣匪」を削除しているからだ。



図5

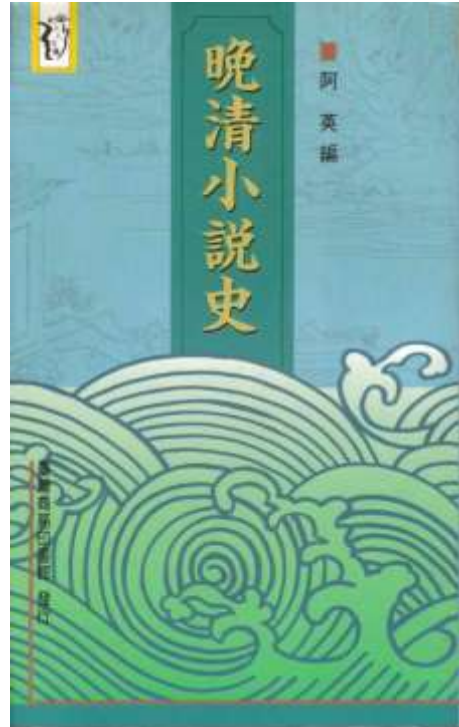


図6



図7

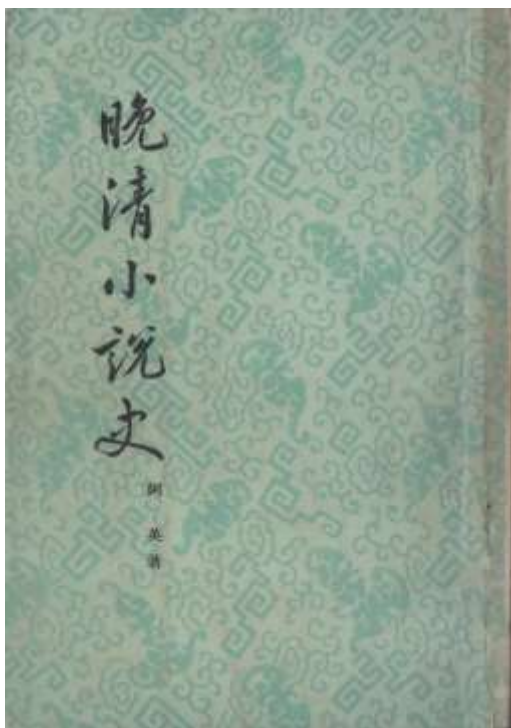


図8



図9

香港では2種類がある。

ひとつは、香港・太平書局版（1966.1）（図8）だ。作家出版社1955年版を影印したもの。ただし微妙な箇所を巧妙に削除する。前述した阿英の説明文にある「為蔣匪」をそのままに影印するのは不相当だという判断があったらしい。この3文字を削除した\*1。中国に返還される前の香港の位置を反映していると考えられる。

もうひとつは香港・中華書局香港分局版（1973.6）（図9）がある。こちらは上の太平書局版を影印した。だから「為蔣匪」も削除したまま。

以上の阿英諸版にはすべて索引は作成されていない。だが早くから索引だけが別に発表されているのだ。

翻訳と索引について紹介する。

アルフレッド・ホフマン（阿爾夫雷徳・霍夫曼）のドイツ語訳があるらしい。1939年『亜洲周報』に第1、2章の翻訳が掲載されたという\*2が未見。



図10



図11

日本では『晚清小説史』の本文翻訳よりも索引のほうが先に作られた。

尾崎実編「阿英著「晚清小説史」人名・書名・事項索引」1、2（大阪市大文学部中国語文学研究会『中研ノート』第9、10号 1962.12.30、1966.11.1）がある。未完。

全体の索引は別人の手により編集され単行本で出た。

『阿英著「晚清小説史」固有名詞索引』（日本・関西大学文学部中国文学研究室編発行 刊年不記〔1974〕）（図10）だ。油印。増田渉先生退職記念とある。

原書の一部が日本語翻訳されている。中島利郎訳注で雑誌の連載だ。該当する章と掲載誌を掲げる。

- 第1章 阿英『晚清小説史』試訳ノオト（1）『咄咄』第5号1975.12.31
- 第14章 晚清小説史試訳ノオト（2）『咄咄』第6号1976.6.30
- 第2章 晚清小説史試訳ノオト（3）『咄咄』第7号1976.12.31

第3章 晚清小説史試訳ノオト(4) 『咄咄』第8号1977.5.31

第4章 晚清小説史試訳ノオト(5) 『咄咄』第9号1977.11.30

第5章 晚清小説史試訳ノオト(6) 『咄咄』第10号1978.6.30

連載は未完に終わった。だがその内容はのちの平凡社版日本語訳に吸収されたと考えていいだろう。

全体の日本語訳は、会沢卓司、長尾光之、山口建治訳『清末の中国小説』（日本・栄光堂印刷出版部1978.2.1）（図11）がある。香港・中華書局香港分局版（1973.6）を底本に使用する。「固有名詞索引」があり訳本と底本の頁数をともに示す。その説明に「固有名詞索引を御提供下さった中島利郎氏はじめ関西大学中国文学研究室のみなさん」（241-242頁）と書いてある。前出の油印単行本を活用したと思われる。

もうひとつ翻訳がある。飯塚朗、中野美代子訳『晚清小説史』（日本・平凡社1979.2.23）（図12）だ。詳細な注と書名・人名索引がついている。



図12



図13

## 2 欧陽健『晚清小説史』

欧陽健『晚清小説史』（図13）の目次は以下のとおり。

引 言

第1章 晚清新小説の初軀（1902-1903）

第2章 晚清新小説の第一個高峰（1903-1905）

第1節 李伯元及其主編的《繡像小説》／第2節 吳趸人和他的代表作／第3節 劉鶚／第4節 曾樸／第5節 蔡元培、旅生、姬文、頤瑣  
／第6節 黄小配及晚清革命派小説

第3章 晚清新小説の第二個高峰（1906-1909）

第1節 吳趸人及立憲、新党小説／第2節 黄小配の近事小説／第3  
節 陸士諤

第4章 晚清新小説の余波（1910-1911）

第5章 晚清時期的其他小説

余 論

該書には索引がなかった。ゆえに作成したのが樽本照雄編「欧陽健『晚清小説史』索引」（日本『大阪経大論集』第49巻第4号（通巻第246号）1998.11.15）だ。作家、作品、文書、雑誌、新聞、論文、出版社を主として採取した。ただし本書に収録するにさいし初出のものに手を加えいくつかの項目を取捨選択している。

なお、欧陽健『晚清小説簡史』上下2冊（瀋陽・遼寧教育出版社1992.10）および『晚清小説簡史』（太原・山西人民出版社2005.6）があることをいっておく。（追記：欧陽健『晚清新小説簡史』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2015.10がある）

## 3 (美) 韓南 PATRICK HANAN 著、徐俠訳

『中国近代小説の興起』（図14）



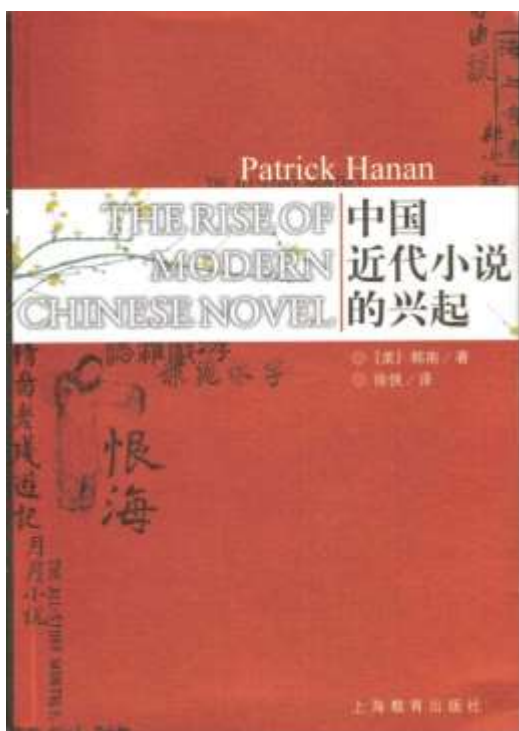


図14

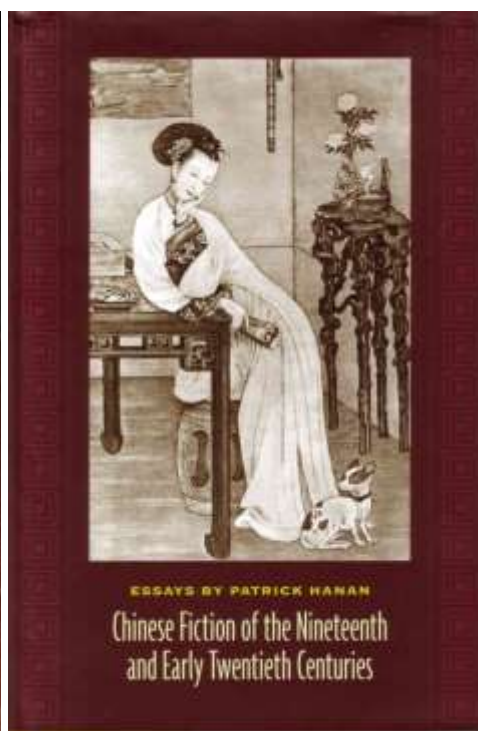


図15

本翻訳の原本は、PATRICK HANAN, *CHINESE FICTION OF THE NINETEENTH AND EARLY TWENTIETH CENTURIES*, COLUMBIA UNIVERSITY PRESS, NEW YORK 2004 (図15) である。収録した12本の論文のうちから8本を選択して漢訳したもの。

漢訳本の目次は以下のとおり。

#### 引 言

“小説界革命” 前的叙事者声口

《風月夢》与煙粉小説

中国19世紀的伝教士小説

論第一部漢訳小説

早期《申報》的翻譯小説

新小説前的新小説——傅蘭雅の小説競賽



吳趸人与叙事者、《恨海》の特定文学語境

陳蝶仙的自伝体愛情小説

李欧梵「韓南教授の治学和為人」

うしろにある李欧梵による紹介文は、雑誌に掲載したものを翻訳本に収録したという。

英文原本には当然、索引はついている。だが該翻訳には索引がない。そのため今回あらたに索引を作成した。

本翻訳については書評がある。李慶国「中国近代小説研究的重要收穫——讀《中国近代小説的興起》」（『清末小説』第28号2005.12.1）。インターネットで検索すれば、漢語の書評を探することができるだろう。

#### 4 （日）樽本照雄著、陳薇監訳『清末小説研究集稿』（図16）

樽本が漢語で執筆した論文を主として収録する論文集である。

目次を示して内容紹介にかえる。

- 1 清末小説資料在日本  
劉鉄雲資料／李伯元資料／吳趸人資料／雑誌和出版社
- 2 劉鉄雲和日本人  
西村天囚／牧放浪／小田切万寿之助／西村博／中島裁之／中根斎／内藤湖南
- 3 《老残遊記》写作刊行的兩個問題  
定論／令人費解的兩個問題／解決問題
- 4 關於《老残遊記》外編殘稿的写作年代——与时萌先生商榷
- 5 劉鉄雲讀過梁啓超的原稿嗎？
- 6 《老残遊記》和《文明小史》的關係  
引言／《繡像小説》登載《老残遊記》／《繡像小説》の出版延期／《老残遊記》初集の写作和出版／誰是《繡像小説》の編輯？／魏紹昌所提出



図16

の問題／結論

- 7 胡適如何認識《老殘遊記》  
緒論／胡適の“文学革命”觀／胡適の《老殘遊記》論
- 8 《劉鶚散論》序
- 9 誰是《繡像小説》的編輯人
- 10 《繡像小説》出版延期問題簡論
- 11 有關《繡像小説》編者問題的討論  
有關《繡像小説》編者問題的討論的情況／誰是南亭亭長
- 12 《繡像小説》的編者到底還是李伯元
- 13 《官場現形記》的初期版本  
迄今為止的版本研究概況／初期版本的系統
- 14 《官場現形記》的真偽問題  
緒言／真偽問題的發生与發展／《官場現形記》增注本／結論

- 15 李伯元和吳趼人の經濟特科  
要解決の問題在哪里？／研究的情況／什麼是經濟特科／李伯元和吳趼人の經濟特科／結論
- 16 吳趼人《電術奇談》の原作
- 17 不要輕視小事——広智書局本《二十年目睹之怪現狀》の出刊日期
- 18 阿英先生の寫法——與竺慶麟先生商榷
- 19 阿英《晚清小説目》の結構  
序／阿英《晚清小説目》の現在／阿英《晚清小説目》以前の目錄／阿英《晚清小説目》の特點／阿英《晚清小説目》研究／阿英《晚清小説目》の規模／結論
- 20 反映時代の小説目錄——關於《新編清末民初小説目錄》
- 21 《遊戲報》の周樹人は魯迅嗎？
- 22 關於魯迅的《斯巴達之魂》  
《斯巴達之魂》の發表／《斯巴達之魂》与《歴史》／複数典拠説／創作部分／創作還是翻譯
- 23 《新小説》の出版日期和印刷地点  
《繡像小説》の停刊日期／《新小説》の停刊日期／樽本説
- 24 辛亥革命時期的商務印書館和金港堂之合資經營  
公司和經理／合資的條件／偶然發生的兩件事／誤解1——金港堂“教科書貪污案件”以後在上海尋找投資的機會／誤解2——“主權在商務的合資”／合資的決算報告書／董事會報告／結論

本書のために索引を作成した。

おわりに、本書には収録しなかった索引についても触れておきたい。

## 5 陳平原『二十世紀中国小説史』第1卷 (図17)

陳平原『二十世紀中国小説史』第1卷（北京大学出版社1989.12）は、1897-1916年の小説史である。以下のような章立てになっている。

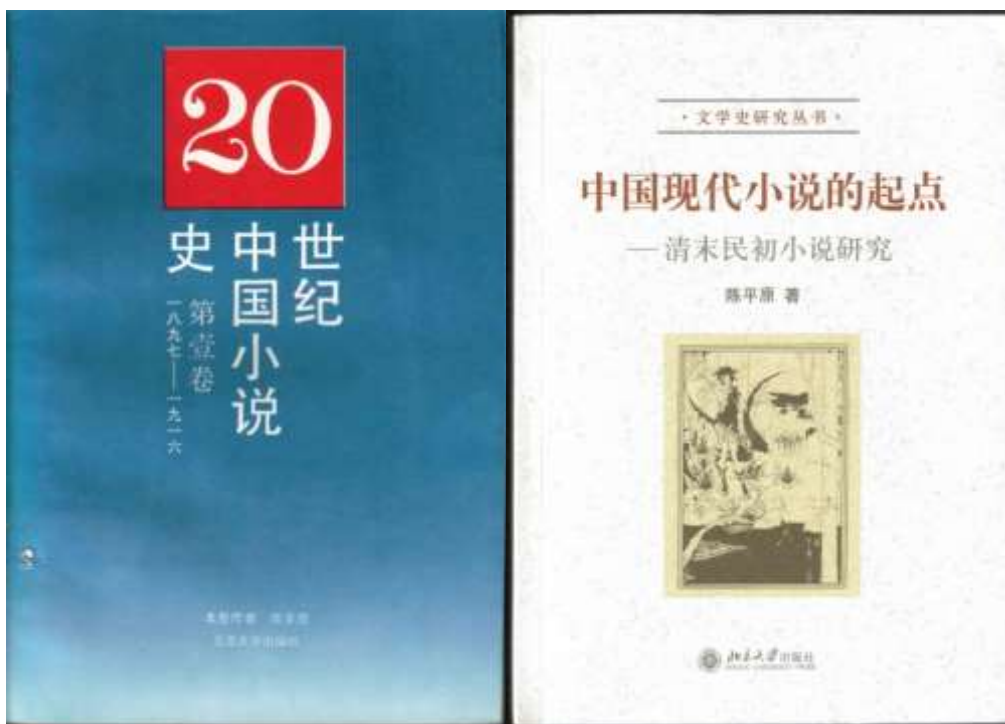


图17

图18

- 第1章 新小説の誕生
- 第2章 域外小説の刺激与啓迪
- 第3章 商品化傾向与書面化傾向
- 第4章 由俗入雅与回雅向俗
- 第5章 集錦式与片断化
- 第6章 文白並存の小説文体
- 第7章 従官場到情場
- 第8章 旅行者の叙事功能
- 第9章 実録、譴責与感傷
- 附録1 作家小伝
- 附録2 小説年表

該書には索引がなかったから私が作成して公表した。樽本編「『二十世紀中国

小説史』第一巻索引」（『大阪経大論集』第200号 1991.3.31）である。

のちに改題され『中国現代小説的起点——清末民初小説研究』（北京大学出版社 2005.9 文学史研究叢書）（図18）として出版された。「《二十世紀中国小説史》討論紀要」を追加し、あらたに索引が作成されている。そのため、私が作成した索引は本書には収録しなかった。

【注】

- 1) 中野美代子「解説」飯塚朗、中野訳『晚清小説史』日本・平凡社1979.2.23。386頁。  
関連するものとして樽本「改竄される書物」（『清末小説論集』所収）、および中島利郎「阿英『晚清小説史』の成立」、「阿英『晚清小説史』の改訂」、「阿英著・作家出版社版『晚清小説史』の改稿」（以上3点ともに『晚清小説研叢』汲古書院1997.7.30所収）がある。
- 2) 呉泰昌「校勘後記」阿英『晚清小説史』北京・人民文学出版社1980.8／1991.4北京第2次印刷。192頁

## 蟻の穴から

—私の清末小説研究

『清末小説研究ガイド2008』（清末小説研究会2008.6.1 清末小説研究資料叢書11）に収録。私の清末小説研究を振り返り、研究論文が成立する条件について述べる。論文には「新しい発見」がなくてはならない。それを実行したのが私の清末小説研究だった。取り組んだ課題を例にあげ、それが定説をくつがえす結果になった経過を紹介する。同時に中国の研究界がどのような状況にあるのかも考えることになった。

私が行なっていることはどこか違うらしい。

自分では、普通のやり方で研究課題に取り組んでいると考えている。やらなければならない作業はその時々必要に応じて実行する。だがときたまなぜだか到達する場所がいままでいわれているのとは異なることがある。過去に書いた自分の論文について見なおしてみると、どこでそうなるのかよくわからない。

ほかと違う結論になろうと、まあ一般に無視されることの方が圧倒的に多いからかまいはしないのだが。

1991年だったか、日本における清末小説研究をふりかえる文章を書いた。台湾の中央研究院で開催される研究会へ提出した論文である。日本語でいいというからそうした。批判をうけて人気のないこの研



究分野に参入したのは、私が単にへそ曲がりだったからと表現する。それが事実なのだ。それに対して台湾のある研究者から不真面目だと書かれた。会場で代読されたものへの書評にそうある。動機よりも研究成果のほうが重要だろうと思ったものだ。国際研究会では非難をするためにだけ発言をする人がたまにいる。その人もそういう種類の研究者だったらしい。

興味を覚えただけであまり深く考えずに入ってしまった（広くいえば）中国近代小説研究という分野だ。現在まで飽きもせず気長くつきあうことになった（狭めて）この清末小説研究である。自然の流れで民国初期にも範囲はひろがる。

ふと気づくと日本人である私が、中国のそれも当時は冷え切っていた研究分野にあって論文を書いている必要性を考えている。私が日本で清末小説を研究する意味はどこにあるのか。

外国文学研究に従事している人は、常に感じる問題ではなかろうか。なにを好んでこの研究分野なのか。中国においても関心をもたれない（当時は、と注釈がいる）あるいは過去に批判をあびせられた領域だ。さらにはそれとは別に外国人である私ははたして成果をあげることはできたのか。

最初の論文集『清末小説閑談』（1983）を上梓したときのことだ。出版社がだした広告に「清末小説なくして五四文学は成立しない」と書いてある。アレあれ大げさなと意外に感じた。だがなんのことはない出版趣意書に自分でそう説明していたのだった。

1919年の五四時期を経験しのちに重要視される作家たちがその成長期に読んだものといえば、当然ながら少し前の清末小説も含まれるだろう。林紓たちの翻訳した外国小説が大量に出版されてもいる。彼らをはぐくんだ土壌そのものを罵倒するだけで終わっていいのか。連続した時間の流れを度外視できるはずがないではないか。清末小説を無視して五四時期の作家たちを研究できるのか。そういう意味を込めて私は「清末小説なくして五四文学は成立しない」と書いた。普通の感覚だと今でも思う。

しいていえばそれくらいのことか。

さかのぼって1960年代後半だ。私の学生時代における周囲の研究情況といっても前半は中国で「文化大革命」が発動され、後半は日本で大学紛争が発生した

時代だからそんなものはないといえばそうだが。それでも私の感じた雰囲気についてあえていうと中国で清末小説が批判された過去を日本ではまだ引きずっていた。

どういう意味か。批判された分野はそれだけで研究する価値がないと判断される。そういう空気があった。今から見れば信じられないかもしれない。中国学界の動きに日本の研究界は強い影響を受けていた。それとも私のまわりだけだったのか。いやそうではないだろう。当時、清末小説を研究する人は日本にもほとんどいなかったのがその証拠だ。

中国からの影響があることすら感じない。対象国にのみ注目する。その国の研究動向に左右される。外国文学研究では避けることができないだろう。少なくとも私をとりまく環境ではそうだった。

それにしても影響をまともに受けた日本のありさまは悲惨だ。今だからわかる。なにしろ中国の学界が批判した作家は研究の対象にしないという人が私のまわりに実在していた。中国で批判された事柄に興味をもつことは反中国だという人さえいる。驚いたね。その意味では日本でも研究が政治と結びついていた。

現代漢語を学ぶことは現代中国流に考えることだと短絡する部分があった。私はそれが悪いといっているのではない。興味の持てない国についてそのことばだけを学習するのは苦痛だろう。続かないはずだ。外国語を学ぶためには、対象へのめりこむ必要があると理解している。しかしそれ一辺倒だと平衡感覚はくずれる。渦中にいた私にしてみれば殺伐としていた。中国で「文革」が進行中だから客観的に見るという姿勢は最初から放棄している人もいたのだ。賛成か反対か。どちらかに態度を表明することが求められる。すると卒業論文で取り上げられるのは必然的に魯迅が主になる。「文革」中に生き残っていたほぼ唯一の文学者が魯迅だった。その印象が強く残っている。

その中であって私が清末小説の「老残遊記」について卒業論文を書いたのは例外ということになるだろう。当時、私だけがなぜはずれていたのか自分でもわからない。だからこそへそ曲がりだと表現したのだが台湾の研究者はそれを理解しなかった。

そこからはじまり今にいたるまでに発表した論文を振り返ってみる。ざっとし



た印象だが気づくことがある。中国人研究者が一顧だにしなかった問題について自分がこだわっていることが多い。中国では研究する価値がないと判断されている、そういう課題だ。本当に小さなものも含めてそこに私は興味を持つのだからしかたがない。

中国の学界は清末小説という研究分野に対して冷淡だった。そこにはまさに政治的な背景がある。あえて挑戦する研究者はいない。中国がそうだったから日本で論文を発表しても注目されることもない。私は主として日本語で論文を書いているから当たり前なのだ。別の側面からいえば、中国では評価されない接近の方法を私は採用しているということだ。

ある時など（この時は漢語で行なった報告について）細かいことをいうのではないと中国人研究者から面と向かって発言された経験がある（後述）。

別の件で私あての手紙にそう書かれたこともある。おおまかに説明する。ある作品の初版に間違った刊年がついていると問題にした。初版を確認しないで研究するのかと提起したのだ。その時、研究者の名前を複数あげた。するとそのなかのひとはわざわざ手紙で（電子メールのない時代）初版は見えていないがそれと作家研究とは無関係だと知らせてきた。的外れな返答である。それよりも初版を確認するのが研究の基礎だと認識していないことに驚いたものだ。私が提起した問題の意味を中国の著名な学者は理解しなかったらしい（後述）。

それらを忘れることができず、またこのような文章を書いている。こまかいことが気になる性分なのだ。

流れの中に身を置くと自分が流れていることに気づかない。全体が動いているのだから。視線を自分以外の場所に置かなければわかるはずもない。外からながめれば見えることもあるのではないか。この「外」とは日本という外国だ。外国から見た清末小説研究、広くいえば中国近代小説研究である。

小さな事実が背後に隠れている大きな問題につながっている。些細なことが気になるからそれを追究していくと思ってもみなかった新しくしかも巨大な課題にぶつかる。気がつけばこれが私のやり方であるとわかる。

自分のことを書いてあやふやになるのが不思議だ。しかしはっきりと認識していなければそうならざるをえない。

研究課題に接近する私の方法が一般と異なるらしいと理解した。そこから結果的に中国での研究方法について考えることになった。外国人、すなわち私が中国近代小説研究を行なってきて感じることである。できごとに直面してこれはなんだろうかと思う。どこかあやしい。

自分が体験したことを軸にして考えることにする。私の乏しい経験だから以前に書いた文章と重複する箇所がある。ご了解いただきたい。

## 1 小説雑誌目録の作成

中国近代文学史では必ず言及される小説雑誌が複数ある。

1900年代の中国において小説雑誌という形態そのものが新しく出現した。外国からもたらされた近代的印刷技術の発展にともなって、伝統を破って出てきたから画期的である。しかも小説の重要性を認識した中国最初の小説専門誌は、日本で印刷発行された。奇妙な表現にならざるをえない。それが事実だからである。

中国の近代的文学雑誌『新小説』について説明している。梁啓超が亡命先の日本横浜で創刊した。日本で刊行されたが読者には中国人を想定している。だから全文が漢語である。日本から輸送されて上海経由で中国全土に広まった。事実を説明して、中国で最初に「小説」を誌名に使った文学刊行物だと一般に書かれる。日本横浜で刊行されたともうひとつの事実を加えれば、まさにこれこそが当時の文芸界の状況を象徴しているといえる。中国の近代的小説雑誌は出発点をほかならぬ日本においていた。中国の近代小説は中国国内だけで成立するのではない。外国との影響関係がいやおうなく生じている。外国文学の翻訳が盛んになるのもこの時期の特徴のひとつだといっている。まったく新しい環境が出現したといえることができる。

そういう重要な意味を持つ『新小説』だ。しかし日本で発行されたにもかかわらず雑誌の全冊を日本で見るができない。原物が数冊、所蔵されているだけ。それをいうなら上海で刊行された『繡像小説』全72冊も、日本の公共機関でそろえているところは皆無である。原本のことだ。後に作成された影印本のことをいっているのではない。つまり当時は特色ある清末の小説雑誌を研究しようにも

読むことができなかった。これでは研究にならないではないか。一般に清末小説関係の資料は少ないといわれていた。資料が少ないから研究が進まない。そう説明するのが普通の見解だった。日本では特にそうだ。自分で原物を見るのが不可能ならば先行論文を引用するしかない。その論文を超えて新しい記述を試みてもそれは無理だろう。

私は清末小説を研究することに決めていた。まわりには誰もいない。

まず小説雑誌を日本でさがすことから始める必要があった。当時、中国でも日本でも小説専門雑誌に注目する研究者は少ない。誤解のないようお願いしたいがこれは1970年代の日本での話である。戦前では竹内好、実藤恵秀らが雑誌『中国文学』において中国の小説雑誌についての紹介記事を掲載している。また中国の阿英（銭杏邨）は清末の雑誌群に関してはやくから文章を書いている。1930年代に出版された彼の『晚清小説史』で触れており、さらにのちには専著も出版している。といっても1950年代だから、私が大学で現代漢語を習いはじめずずっと以前のことだ。その後、雑誌を追究する研究者が中国にもいなくなった。「文革」が継続中だから無理もない。だから私は手探りでやらざるをえない。

『繡像小説』である。前述のように日本の図書館で所蔵するところはない。原本でしかも全冊揃いを所蔵していたのは澤田瑞穂ひとりだった。戦後、北京から引き揚げてきたとき持つことを許されたただひとつの荷物に包み込んだという。その『繡像小説』にもとづいて私が総目録を作成したのは後々利用するのに便利なようにと考えたからだ。複数の研究者に別刷りを送った。はるか年輩の研究者から、よくやったといわれたときは自分でも不思議に感じた。自分の研究に必要だから編集しただけだ。

知らされたところによると竹内好も所蔵していたという。ただし1冊が欠本（今は全部が行方不明になっている？）というハガキをもらった。中村忠行はその竹内所蔵本を作品別にまとめて写真で撮影していた。しかしそれでは掲載号がわからない。私の目録が役立つといわれたのを思い出す。目録を作成してはるか後になって、30年近くの時間が経過しただろう、私は別に原本一揃いを入手した。押印を見ると中国のある出版社の図書室が放出したものとわかる。

目録編集という日本では普通の作業も中国では違う意味をもつと思われる。す

なわち研究者は研究論文を書くのが当たり前で目録編纂などはしないといわれる。では目録作成は図書館職員の仕事なのか。よくわからない。

中国では仕事に区別をつけるらしい。そういえば外国語教員と文学研究者も区別しているように見受ける。私は日本の勤務先で現代漢語科目を担当していて目録を編集し論文も書く。ところが中国では外国語教員については研究論文を書くことは期待されていないという。研究論文は文学専門の研究者が発表するもの。だから両者には授業の持ちコマ数からして異なっている。長期出張先の天津で教わった中国人教師から実際に聞いた話である。それが中国のやり方らしい。だが考えればおかしいことだ。

ある国際学会に参加するため上海から乗った列車での出来事だ。同じ学会を目的とする中国人研究者が私に何を言ったか。著名な某近代文学研究者は話にならないと悪口をいう。なぜなら作品集を編集するだけで論文を書かないからだそう。論じることこそが重要なのだ。こういうばあいは返答のしようがない。論文を書くときには資料集、作品集を利用するだろうに。その基礎作業を軽視してどうするのか。資料整理を重視せよとは中国の学界で幾度もいわれていることだ。何度もいわなくてはならないくらいに軽視されるのが日常なのだろう。こういうところに日本と中国の相違があると思われる。いや、日本でも同様か。

研究に任務分担があると考えるのは奇妙だ。中国では阿英という先例があるではないか。作家であり評論家であり、目録も編集するし論文も書く。清末小説研究の分野では第一人者として重要視されているのは周知の事実だ。仕事をどれかひとつに限定しろというほうが無理だ。

私はそう思う。だがよそ目にはどうでもいいことに違いない。

とにかく小説目録を作成することが研究に欠かせないと私は考えた。しかしそれが目前にはない。ならばできるところから作るしかない。それらを所蔵する複数の図書館に通い（当然、日本の図書館を指している。「文革」で鎖国していたから当時は中国に行くことはできなかった）、アメリカからマイクロフィルムを購入し香港で影印本が出たからそれによって目録を作成した。『繡像小説』について『月月小説』『小説林』『競立社小説月報』『遊戯世界』『小説時報』『小説月報（改革以前部分）』『新小説』などである。

ただし、中国で類似の刊行物が出てきた。私が目録の作成を中止した理由だ。

上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』全6冊（上海人民出版社1965.12／1980.7-1984.8）である。第1冊は私が大学に入学する前に刊行されている。だが1966年に「文革」がはじまったからか日本には輸入されなかったらしい。1980年に再版が出たことがわかる。該彙録は雑誌全般の目録であって小説雑誌も含んでいる。私のばあいと採取項目は少し異なっているが、基本的に重複して私が作る必要もない。私の目録作りは1973-82年の期間で終了した。

この作業は私にとってはいくつかの点で大きな意味があった。

ひとつは一般に清末小説の資料は少ないといわれていたが、さがせば日本でもいくつかは見つかるという事実だ。もうひとつは雑誌の原物を手にするという貴重な体験をした。先行論文で誌名だけをながめていてはその雑誌の持つ雰囲気を理解することは困難だ。原物のページをめくってこそ実感できる。のちに『清末民初小説目録』を編集する気になったのはこのときに基礎作業を行っていたからである（該目録は、1988年と1997年に日本で刊行した。3回目は、2002年に中国の齊魯書社から出た。現在も増補訂正作業を継続中。追記：第10版は2018年にウェブで公開）。

## 2 天津日日新聞版『老残遊記二集』の発掘から難問解決へ

研究の手がかりをつかんだと今でこそ思い出すのは、小説「老残遊記」の新聞切り抜き本だった。劉鉄雲の作品だ。少し詳しく説明する。

それまで論文を書くことに楽しみを感じたことはない。その理由を説明することは簡単だ。発信する価値のある内容を見つけることができなかったからである。先行論文をなぞっておもしろいわげがない。

自分だけが知っている情報を公表するきっかけになったのは、この天津日日新聞版『老残遊記二集』だ。

たかが版本1種類ではないかと思われるだろう。大方の反応はそんなものだ。なにを大騒ぎしているかと冷笑の対象にしかならない。だが小さな事実が大きな発見に結びつく。基本はこれだどくりかえす。あるいは重箱のスミをつついてほじくり、重箱そのものを破壊するのが目的だ。蟻の穴からというではないか。

劉鉄雲「老殘遊記」の執筆発表状況を説明する必要がある。その経緯はすこし複雑だ。

「老殘遊記」は初集20回と二集9回が書かれた。これが基本である。

初集は雑誌連載中に中断し続作のうえあらためて新聞に連載された。初集20回だ。最初に掲載された雑誌とは『繡像小説』である。私が目録を作成したあれだ。二集9回は、のちに同じ新聞に連載された。その新聞は『天津日日新聞』という。いかにも日本語に見える新聞の名称だ。日本人が関係していた。中国では天津『日日新聞』と表記しているのを見かける。誤りである。

問題は「老殘遊記」の執筆経過だ。執筆途中で中断された。それがあから時間の流れに見ていくと説明できない事態が生じている。

中国では研究の際に利用される論文はほぼ決まっていることが多い。清末小説研究でいえば前出の阿英である。資料を整理し解説を書き関連論文を多数発表している。なによりも『晚清小説史』（1937）の刊行が大きい。資料にもとづいて立論する姿勢には定評がある。早い時期から清末小説研究の重要性を強調していたのだ。阿英の功績が大きいことを否定することはできない。その後、中国で清末小説批判があった。だが基本的な事実をおさえる際には自然と彼の説明によりかかることになる。贅言するまでもなく阿英は清末小説研究の権威として広く長く認められている。

阿英は「老殘遊記」の公表経過を以下のように説明した（「關於老殘遊記二題」『小説二談』1958）。大筋だけを抜き出す。

「老殘遊記」は最初『繡像小説』に連載された。第9期（癸卯1903八月〔漢数字は旧曆。以下同じ〕）から第18期まで前後10期にわたり、第10、11、14期の3期はそれぞれ2回を掲載して中断する。

阿英は明確に、しかも適切に説明している。雑誌の原物を見ているからここまで詳細に記述することができる。私も『繡像小説』で確認した。阿英は清末小説関係の収集でも他の追隨を許さない。その膨大な蔵書を手元において論文を書き資料を解説し、そうして『晚清小説史』にまとめた。『晚清戯曲小説目』（1954／57）、『晚清文藝報刊述略』（1958）をあげるだけでよい。基礎資料の整理に対する彼の貢献が理解できるはずだ。実物を所蔵するからこそ阿英の論文は信頼

されている。

「老残遊記」について私が補足説明する。連載中断の主要な理由は「老残遊記」の原稿第11回が『繡像小説』の編集者によって没書にされたからだ。結果として前渡ししていた第14回までの原稿が1回ずらして第13回として掲載された。

阿英は『天津日日新聞』本（第1-10回）1冊を所蔵すると書いている。それには裏に広告があるという。ならば新聞を切り抜いたものだ。『繡像小説』連載が中断したのち書き足して完成させて新聞『天津日日新聞』に連載した。阿英の説明によれば、彼の持っているはその新聞切り抜きそのものにほかならない。本当に珍しい（現在ではこの初集切り抜き本を見ることはできない）。その新聞連載時期は雑誌で中断した翌年「すなわち甲辰1904年である〔即甲辰（一九〇四年）〕」（傍点筆者）。

阿英のこの指摘は、きわめて重要であるといわなければならない。なぜならこれ以後「老残遊記」初集20回の『天津日日新聞』連載と完結は1904年だというのが定説になったからだ。まさかこれが誤りの出発点であるなど、研究者のだけひとりとして想像もしなかった。阿英は『天津日日新聞』本を所蔵している。それに1904年と印刷されているのだろう。ここが断言の根拠だと思われた。阿英による断定がある。誰も疑わない。

たとえば飯塚朗はつぎのように説明している。「同じく一九〇四年に『天津日日新聞』にはじめから原稿どおりに再録され、二十回で一応完結をみた」<sup>\*1</sup>

飯塚がそう書くのは、これが定説であったからだ<sup>\*2</sup>。

『天津日日新聞』の原物を見ている研究者は阿英以外には存在しない。ゆえに疑問を感じる余地がないのも当然だ。私がことばを足せば、現在も『天津日日新聞』を見ることができない。これを所蔵する図書館は中国にもないらしい（追記：郭長海は北京で見ている。ただし私は未見）。幻の『天津日日新聞』である。

阿英の詳細な説明は、雑誌、新聞の原物にもとづいている。正確きわまりないと研究者は安心して信用している。さらに阿英は必要な論文を視野にいれているから万全である。

「老残遊記」に関しては劉鉄雲の息子大神が公表した論文がある。劉大神「關於老残遊記」（1939）だ。『繡像小説』で中断した理由が第11回の没書であった

ことなど親族であるからこそ知っていて説明することができた。

そして問題が提出される。1962年のことだ。劉大紳の該文は魏紹昌編『老残遊記資料』（1962）に収録された。大紳の息子厚沢がそれに注釈をつけて「老残遊記」二集執筆の過程について疑問を投げかけたのである。問題の提出だ。

劉厚沢は劉鉄雲1905年日記に「老残遊記」二集が記録されている事実を指摘した。この劉鉄雲日記そのものも珍しいものであったが、この時点では部分的な引用にとどまっている。

問題というのはこうだ。

劉鉄雲1905年日記では、十月初三日（旧暦）に二集第11回を書き終わり、翌初四日に第15回、初五日に第16回を書いている。ならば第12回から第14回の原稿はいつ書いたのか。もうひとつ。二集の新聞掲載は1907年であるが、1905年の日記から2年も後の発表であるのはなぜか。

劉厚沢が疑問に感じそれを表明したのは当然である。「老残遊記」初集の『天津日日新聞』連載と20回完結は1904年であると阿英は書いている。ならば1905年の劉鉄雲日記にでてくる「老残遊記」は二集である。二集を執筆していて数回分をとばしているとわかる。日記を見ると第15回の翌日に第16回を書いていて順序だっている。なぜ途中の第12-14回をとばしたのか。なにがあったのか。不思議だ。説明できないではないか。

1962年以降、このふたつの疑問を解決した研究者はいない。

私もこの部分を読んだ時は疑問があるということを知っただけ。先行論文を勉強して「老残遊記」初集の新聞連載が1904年だと私の脳には刻みつけられている。劉鉄雲1905年日記の「老残遊記」は、だから二集についてのものであるのは間違いない。私もそう信じていた。劉厚沢が提出した疑問は解決不可能に見えたのである。まさかその私が解答の糸口を見つけることになろうとは思っていない。

難問であることは、それまで推論のひとつも提出されていないことからわかる。答えられない問題を未解決のまま文章にする研究者はいない。無視した形になる。あるいはこれに答えられなくとも作家論、作品論は書くことができるという判断だろう。



私が問題を解決するにいたるまでには順序がある。

まず新しい資料に遭遇した。その資料こそ天津日日新聞版『老残遊記二集』9回本である。日本の大学図書館で見つけた。当時は「文革」中だから中国旅行などできなかったし中国の学界も活動を停止していた。中国とは無関係に日本で資料を発掘したことになる。

手にとって見れば『天津日日新聞』の連載そのままである。つまり新聞に掲載されていた「老残遊記」二集が切り抜かれて手製の線装本に仕立てられている。9回分をまとめる。貴重であるのは発行月日が記載されていることだ。しかも新聞切り抜きだから裏には広告が印刷されている。前述のとおり阿英が説明している初集の新聞連載と同じ体裁だとわかる。阿英所蔵本は初集だ。私が確認したのは二集である。

何が重要かといえば、裏に掲載されている広告から発行年が1907年であることが判明したことだ。つまり「老残遊記」二集9回が『天津日日新聞』に掲載されたのは1907年であったという事実である。

それだけのことがなぜ重要なのか。二集の発行が1907年であるのは従来からいわれていたことではないか。そういう反論があってもおかしくはない。だが、私にいわせれば昔からの説明はただの説明にすぎない。実物で確認することとは雲泥の差がある。ここが理解できないと新しい局面に進むことはむつかしい。このことは、のちに『繡像小説』編者問題でもくり返すことになった。

確認できる事実を整理しなおす。動かしようのない事実には◎印をつける。

◎「老残遊記」が『繡像小説』に連載を開始するのは1903年だ。原稿第11回が没書になって執筆は中断した。

○『天津日日新聞』に「老残遊記」初集が連載完結したのは1904年だ。そう阿英が断言している。

◎劉鉄雲日記の記載は1905年の十月初三日に第11回を執筆している。翌日に書いたのは第15回だ。

◎『天津日日新聞』に「老残遊記」二集9回が連載されたのは、1907年で間違いない。原物で確認した。

上に示した時間の流れをながめても問題解決にはいたらない。どこかがおかしい。説明できないのだ。初集の新聞紙上連載完結が1904年だということは阿英が断言している。阿英の説明があるだけ。自分で確認することができない。だから○印にした。

時間の順番に項目を並べて眺める。初集が1904年完結（阿英の断定がある）だから1905年の第11回は二集に決まっている。どうしてもそうとしか理解できない。研究者の全員がそう書いている。今から思えば従来からの説明、つまり定説に思考が縛られていた。

二集の執筆回数が途中で数回分とんでいる。二集原稿執筆から新聞掲載まで2年も時間があいている。疑問のままだ。

長く考え続けていた。劉鉄雲が原稿を執筆する情況、原稿第11回を没書にされて中断したこと、日記に見える第11回原稿執筆の翌日には第12-14回をとばして第15回を執筆したこと。

没書にされた第11回、日記に出てくる第11回原稿……。あれ、なぜ第11回で重なるのか。没書になったのは初集の第11回で、日記の第11回は二集だろう。しかし私の見た新聞連載の二集は、9回までしか公表されていない。このいわゆる「二集第11回」はあやしい。

何度も見ている劉鉄雲日記の箇所だ。もういちどその記述を読み直した。驚いた。日記には「二集」とは書いていないではないか。劉鉄雲本人だからわざわざ「二集」と書く必要もないか。いやもし日記のこの第11回が没書にされた初集第11回であれば、第12-14回はすでに『繡像小説』に掲載されているからあらためて書く必要はない。書くとすれば第15回からだ。日記の原稿執筆も第15回で一致する。

劉鉄雲1905年日記の「老残遊記」は二集ではなく初集のことであると考えれば疑問が解ける。

つまり問題は阿英が断言した1904年ということになる。

初集の『天津日日新聞』掲載完結は1904年だと阿英はいうのだが、これが怪しい。きわめてあやしい。阿英以外は誰も『天津日日新聞』で確認していない。

阿英だけが1904年だといっている。のちの研究者はそれを書き写しているにすぎない。上の阿英発言に◎印をつけなかった意味がようやくわかる。

こうして清末小説研究の権威阿英が行なった説明について疑問が生じた。ほかに同様の疑問が複数出てきたから私はそれを「阿英問題」という。これは別の話だ。

阿英は『天津日日新聞』連載の初集を所蔵している。だからこそ劉厚沢を含めた研究者全員が阿英のいう1904年発表説を信じた。そうして解決できない問題が発生することになった。ところがその1904年発表が不確実で信頼できないものであるとわかったのだ。1905年日記の原稿第11回は没書になった初集第11回を復元したものだと理解に到達する。それで何の問題もない。劉鉄雲は手元に原稿の控えを持っていたからそれにもとづいて復元した。下書き手稿の数葉が存在している事実がある。

原稿執筆問題は以上で基本的に解決した。

阿英のいう「老残遊記」初集の新聞連載1904年説は誤りである。ではいつなのか。私は1906年だろうと推測している（追記：郭長海「劉鉄雲的佚詩和几件聯語」『清末小説』第33号 2010.12.1）。

天津には『天津日日新聞』の原物が所蔵されている場所があるかもしれない。私はそう考えて長期出張先に天津を選んだ。だが天津図書館にも南開大学図書館にもなかった。そうそう南開大学図書館では入館料金を徴集された。へーエ、中国の大学図書館はそういうことをやるのか（追記：昔の話だが上海図書館では入館証作成は有料だったし図書によっては閲覧に手数料を請求された。今は知らない）。そればかりか持ち込み禁止だからバッグを荷物入れに置いていたのをバッグごと盗まれた。不愉快なことを思い出すものだ。『天津日日新聞』探索の広告を出そうかと新聞社に足を運んだ。しかし中国は日本とは違うといわれけんもほろろの対応であった。それ以前も以後も今にいたるまで『天津日日新聞』の消息は聞いたことがない。もし出てきて「老残遊記」初集の掲載が1906年でないと判明すれば、それでもかまわない。訂正するだけだ。

天津日日新聞版『老残遊記二集』を点検していて気づいたことがある。

魏紹昌編『老残遊記資料』の特色のひとつは、二集第7-9回を収録したこと

だ。二集の前6回分は1930年代に上海の雑誌に掲載されその後単行本にもなった。だが第7・9回はうち捨てられたままだったから資料集への採録は意味がある。

ところがその資料集に収録されている二集は、初出の新聞と対照すると語句が多く箇所で異なっている。このことを私は以前から指摘しているのだが中国の研究者の注意を引かない。誰も何もいわない。

資料集所収の二集になぜ語句の異同が存在しているのか。

その理由は資料集に収録した本文が新聞の現物に直接もとづいていないからだ。手写本によっている。それには事情がある。

初集20回が何度も単行本になったにもかかわらず『天津日日新聞』連載の「老残遊記」二集9回は忘れられた。後年、劉鉄雲の子孫が再発見する。その人は新聞社に勤務しており倉庫のなかに残っていたのを見つけた。別の親戚がそれを借りて写本を作った。その際に写し間違いをした。数人で手分けして急いで作ったからしかたがない。その後もとの『天津日日新聞』連載分は中国では行方不明となったという。だから『老残遊記資料』に収録したものは、間違っただけの箇所のある写本に依拠している。原物がないのだから訂正しようにもできない。というよりも原物があればそれを底本にするだろう。中国では今にいたるも新聞そのものの存在が確認されていない。ゆえに今のところ日本にある天津日日新聞版『老残遊記二集』が世界で1本なのだ。貴重である理由が理解できるだろう。

説明しておかなくてはならないのは「老残遊記」の執筆過程が明らかになったといってもそれだけのことだ。劉鉄雲あるいは「老残遊記」の評価について影響をおよぼすものではない。さらには資料集に収録された二集の原文語句に多少の違いがあったとしても劉鉄雲評価とは関係がないと研究者は無視するのだろう。

だが難問を自分の手で解決したこの体験は、私にとっては大きな意味があった。論文を書くときに必要とされるのは「新しい発見」であると理解したからだ。どんな小さなことでもいい、先行論文が言及していない新しいことをつけ加えたい。それがあってこそ論文を発表する価値がある。他人のいうことを二番煎じのくり返すのは論文ではない。自分しか知らない情報を書くことが論文作成の中心であると実感した。

同時に論文を書くことの楽しさを味わったのも事実だ。それまで経験したこともない。どのように説明すればわかりやすくなるか、数回原稿を書きあらためるのも苦にはならない。それゆえ印象深い。他人の評価とは関係のないことなのだ。

ここまで書いてきて少しひっかかる。私はなぜ天津日日新聞版『老残遊記二集』に遭遇したのか。そこを説明しなければ不十分だ。何も準備をしていないのに偶然該書に出会うだろうか。興味のない分野で思いがけず発見をするとは考えにくい。

さかのぼれば「老残遊記」を卒業論文で取り上げたのがはじまりだ。のちに作品が連載された『繡像小説』原本にもとづいて目録を作成した。その延長線上にあるということができる。興味が持続していた。さらに当時、私が行なっていたのは『老残遊記』の版本探索だった。できるだけ多くの版本を集めて本文の比較対照を行なう。この作業を経て一応の文章を書いていたことを抜かすわけにはいかない。

だからこそたまたま別の用事で訪問した大学で、ついでに図書館の図書カードを見る気になった。私の見ていない版本がもしかしたら所蔵されているかもしれない。念のためにちょっとのぞいただけ（現在は管理が厳しくなっているので紹介状もなしに入館することはできないだろう）。すると、あった。『老残遊記』の版本についての知識を多少なりとも持ち合わせていたからこそ図書館でカードに吸い寄せられた。カードを見たときは半信半疑だ。まさか日本にあるとは思ってもみなかった。しかし原物の切り抜き本を手にした瞬間にその重要さを理解したのだ。

大学に所蔵されていたのだから見ようと思えば誰でも閲覧できる。だがその存在に気がついたのは私しかいなかった。準備をしている者にだけ幸運が微笑む。

版本1種を発掘しただけだ。それが「老残遊記」の執筆問題を解決することにつながった。

ところが、だ。「老残遊記」の原稿執筆問題だけでは終らなかった。関連して問題がつぎつぎと発生した。この「老残遊記」はそれを掲載した『繡像小説』の編者李伯元に関連してくる。さらには『繡像小説』の発行遅延にかかわる。それでも終らない。「老残遊記」と李伯元「文明小史」の盗用問題がもう一度蒸し返されることになる。

1976年からはじまり1984年の編者論争を経て2001年に別の資料が発掘された。私の関連論文の執筆は2003年までつづいたのである。長い。これだけで約30年近くの時間が必要だったことになる。主題が少しずつ変化していったから論文をいくつも書く必要があった。次に説明する。

### 3 『繡像小説』 編者問題

劉鉄雲「老残遊記」と李伯元「文明小史」を連載していたのは前述のとおり雑誌『繡像小説』である。

「繡像」すなわち今でいうイラスト（挿絵）を各作品の冒頭にかかげているからそれを雑誌名にしている。商務印書館が日本の金港堂と正式に合弁する直前から刊行をはじめた。梁啓超の『新小説』が日本で創刊されたのにつづき『繡像小説』は上海で創刊された本格的な小説専門雑誌である。ただし『新小説』は洋装活版印刷だが『繡像小説』の方は本文が活版印刷、挿絵は石印の線装本だ。その編集長（また主編とも。以下、編者と称する）は「官場現形記」の作者である李伯元だ。みづから「文明小史」などを執筆連載しながら編集していたことになる。畢樹棠（1935）、阿英（1958）らの説明があつてこれが定説だ。

ところが『繡像小説』の編者は李伯元ではない、と定説を否定した人が出てきた。汪家熔である。1982年のことだ。それまで李伯元編者説を疑った研究者はいない。なにしろ畢樹棠、阿英らがそう記述しているのだから。

汪家熔はいくつかの証拠をあげた。たとえば『繡像小説』そのものに編者は李伯元だとの記載がない。李伯元自身が雑誌編集について書き残していない。呉趼人らの友人も証言していない。商務印書館首脳陣の張元済が「評判の悪い」李伯元をわざわざ招くはずがない。ゆえに、該誌の編者は李伯元ではない。

「評判が悪い」というのは、李伯元が「花柳界の首領〔花界領袖〕」と呼ばれていたことを指す。花柳界に入り浸り、新聞『遊戯報』を刊行し、さらに花柳界の美女コンテストなどを行なったことを含んでいる（後述）。花柳界とのつながりがある人物だから張元済から嫌われ、それで「評判が悪い」となる。

汪家熔論文は別の雑誌に転載（1983）されたところからも注目されたことがわ

かるだろう。

ただの論文でないのは筆者の汪家熔が（後でわかったのだが）商務印書館に勤務していたからだ。『繡像小説』は商務印書館が刊行していた。その版元に勤める汪家熔は内部資料を見ることのできる立場にある。一般の研究者ではできないことが可能なのだ。てっきり内部資料によって李伯元編者説を否定したと思われた。しかし上の論拠を見てもらえばわかるとおり汪家熔は物的証拠を何も提出していない。状況証拠のみである。商務印書館にも記録は保存されていないらしい。

私は長期出張先の天津で汪家熔の文章をじっくり読んだ。それができたのは電話もかかってこない静寂な環境だったからだ。住宅棟の部屋には電話機そのものがない。

汪論文では説明不能の部分があると思った。それは劉鉄雲「老残遊記」に関する。

劉鉄雲が原稿の執筆を中断したのは『繡像小説』の編者によって原稿第11回が没書にされたのが原因だった。これはすでに説明した。その「老残遊記」は、数ヶ所にわたって李伯元の「文明小史」に盗用されている事実がある。大きいところでは「文明小史」第59回が没書にした「老残遊記」第11回から盗用している。これは特に有名だ。魏紹昌が「李伯元と劉鉄雲の盗用事件〔李伯元与劉鉄雲的一段文字案〕」（1961）を公表して以来、研究者ならば誰でも知っている。私は卒論に書いてから、後に『繡像小説』そのものを確認したし『老残遊記』の版本各種を収集して本文の異同についても調べた。李伯元が劉鉄雲の作品から盗用しているのは動かすことのできない事実だと知っている。ゆえに劉鉄雲の原稿を盗用することのできる人物は『繡像小説』の関係者以外には存在しない。ならば『繡像小説』の編者は李伯元にほかならない。最初はこれが私の汪家熔論文に対する反論の主旨である。

汪家熔は状況証拠によって李伯元編者説を否定した。私は盗用の事実をもって汪に反論しもとからある李伯元編者説を支持した。私が中国の新聞に投稿したから反響は大きかった。汪家熔は私の提出した盗用問題を認めようとはしない。自分は状況証拠に依っているのにもかかわらず、他人の証拠提出には同意しなかった。後になって考えると汪家熔は一度も実物の証拠を提出したことがない。私が

提起する証拠資料の全部を否定するだけだ。汪家熔はもともと反論証拠を持っていなかった。

汪家熔は私が指摘した劉鉄雲1905年日記に見える「老残遊記」初集第11回原稿の執筆をとらえた。そうして何を主張したか。李伯元が劉鉄雲を盗用したのではなく逆で、劉が李を盗用したという。なにを言い出すやら。

李伯元が劉鉄雲から盗用したといわれる内容は、「文明小史」第59回（『繡像小説』第55期 [1905年七月]）に掲載された。ところが、劉鉄雲の第11回原稿執筆は1905年十月だ。劉鉄雲は李伯元の作品よりも後に執筆しているのだから劉が李を逆に盗用したのである。これが汪家熔の根拠である。

従来とはまったく反対の見方を提出して私への反論とした。驚いた。私がこの件について何も知らないと思っているらしい。劉鉄雲1905年日記に見える第11回は没書になったものを復元したと私が指摘しているにもかかわらず、それを無視するのである。『繡像小説』に渡した原稿のことはまったく考慮しない。考慮すれば汪家熔の主張は崩壊するから彼にしてみれば考慮するわけにはいかない。なるほど根拠にもならないことを根拠にして言い張るのだなと私は思った。

くり返すが、汪家熔は自分が提起したこの問題について新しい資料を提出することはなかった。否定することに終始した。李伯元が編者ではないという証拠があるとすれば、たとえば商務印書館の内部書類に『繡像小説』の編者に別人の名前を記したものを見つけることぐらいしかないだろう。商務印書館に勤務していた汪家熔はそれに成功していない。

汪をとりまく当時の裏事情はあったのだろうが学術上の論争とはかかわりが無い。ここで触れるつもりはない。

日本と中国間の論争になったから注目された。『出版史料』第5輯（1986）が『繡像小説』編者問題の特集を組んだほどだ。多くの研究者が関連する文章を発表している。ただし例外のひとり方山（1985）を除いて直接証拠を提出しているわけではない。

李伯元が『繡像小説』の責任者であることを証明する資料のひとつは、それより少し前の1985年に発掘されている。前出の方山だ。汪家熔はその原物を確認するために南京にまでおもむいた。私が汪家熔の執筆する出版関係の論文（『繡



像小説』編者問題を除く)を信用するのは、原物を手にして確実な論拠をもって立論しているからである。彼は他人の書いた文章を鵜呑みにはしない。だから南京に足を運んだ。自分の目で確認しないかぎり信用しない。研究者のあるべき姿だ。彼は書類を検討した結果いくつかの記述不備があり信用できないと結論づけた(1990)。資料の発掘がもっと必要だというのだ。樽本批判文とこの論文を彼の著作『商務印書館史及其他——汪家熔出版史研究文集』(1998)に収録し考えが変わっていないことを示している。証拠を提出することなくあくまでも李伯元編者説を否定した。

劉鉄雲と李伯元の盗用問題がある。『繡像小説』の編者は李伯元を除いてはない。私の考えは最初から定まっている。だが日本で具体的な資料を探し出すことは、もともとできない。誰かが提出するのを待つよりしかたがない。発言しなかった理由だ。

決定的な資料が出てきたのは2001年だった。

劉徳隆が武禧という筆名を使用し清末小説について原稿を連載していた。発表年の順序にそって説明するというやり方だ。その中の1篇が、「一九〇七年小説略説(中)」(2001)である。雑誌の発行状況について、こういうのもありますとあって商務印書館の出版広告を引用した。新聞『時報』(1907)に掲載されたものだ。そのなかに「本館前刊繡像小説特延南亭亭長李君伯元総司編著」という文句がある。劉徳隆はなにも説明してはいない。だがこれを見た瞬間にこれこそが動かすことのできない証拠だと私にはわかった。

『繡像小説』の版元である商務印書館が出稿した広告だ。南亭亭長李伯元を特別に招いて編著を統轄してもらったとある。南亭亭長は李伯元の筆名のひとつだ。

私は上海図書館に行ってマイクロフィルムで当該記事を確認した。行こうと思えばすぐに渡航できる状況に変わっている。さらに『中外日報』にも同じ広告があることを探し当てた。文章を書き広告の複写を添えてこれが最終論文である。

李伯元が『繡像小説』の編者であると結論づけるのは結果的には定説にもどったように見える。だが意味が違う。以前の定説は、定説というだけで証拠を出していない。前出阿英の例でも見たようにただ阿英がそういっているから定説になっているにすぎない。今回は新聞広告という実物がある。この違いは決定的だ。

たとえ定説にもどったとはいえ、それを確実なものにしていることが以前とは大きく異なる。

汪家熔に複写を送った。彼から樽本のということが正しいようだと言答がある。だが自分の立論が間違っていたことを公表するわけではない。この問題のばあい論争相手の私が日本人だから特にそうだ。

私は思ってみる。もしイギリス人研究者、アメリカ人研究者、あるいはフランス人研究者が反論を書いたら汪家熔はどのような反応をしたらだろうか。容易に想像がつく気がする。何も知らない外国人が勝手なことをいっているくらいのことを言うだけだろう。そういう例を見てきた。あいにく私が日本人だから批判的な姿勢を堅持した、あるいは堅持せざるをえなかったのではないか。

彼は出版研究では多くの成果をあげている。その業績はすばらしい。だが「老残遊記」については研究論文1本も発表してはいない。私は「老残遊記」から研究を開始している。いくつか資料も集めた。その上で反論している。それに対して汪家熔は、くり返すが最初から最後まで証拠資料を提出することなく否定的な持論を主張しつづけ、私の指摘を受けとめようとはしなかった。汪家熔は私信では認めた自分の誤りだが、のちに文章を発表して新聞広告そのものを否定した。汪家熔の行動を理解するのはむづかしい。

私が『初期商務印書館研究』を上梓したあとにおこった問題は、それと関係があるのかどうか微妙なところだ。

#### 4 『繡像小説』発行遅延説

以前は見るができなかった新聞が影印される、マイクロフィルムになって公開される。まさにこれこそが研究状況の新しい変化にほかならない。利用できる資料が拡大していくなかで私はそれと併走している。私が行なっているのはそういう種類の研究である。

編者論争の途中で思いもかけない問題提起が行なわれた。『繡像小説』の刊行が遅延していたという。張純が1985年に提出した。

『繡像小説』は1903年に創刊し、月2回で全72冊を刊行した。1906年三月に

編者の李伯元が死去しそれと同時に停刊した。これが、阿英以来の定説である。ここでも阿英だ。逆にいえば阿英はそれだけ研究を先行させていた。

この定説について私も検討したことがある。『繡像小説』総目録を作成した。該誌第13期から刊行年月日を記載しなくなる事実は知っている。だが李の死亡と、もし月2回の刊行が守られていたらという推測で割り出される停刊の時期とがまったく一致する。偶然ではないと考えた。当時は私も阿英の記述を信用していたからなおさらだ。

定説の影響力の大きさをどうしても魏紹昌を例にして示したくなる。過去に紹介してきたが重要だからここでもくりかえす。

『繡像小説』の停刊は李伯元死去と同時の1906年三月だと魏紹昌もそう信じている。それはしかたがない。ところがその定説にもとづいて他人の文献を書き換えた。これはいかがなものか。研究論文をあつかう場合あってはならない行為である。

魏紹昌編『李伯元研究資料』（上海古籍出版社1980）に畢樹棠の論文「繡像小説」（1935）を収録した。重要文献だから当然だ。ところが雑誌停刊の時期について魏紹昌は畢樹棠の原文を改変した。

畢樹棠は、初出では「停刊の年月は不明だ。おおよそ光緒三十二三年の間だろう〔停刊年月不明、約在光緒三十二三年之間〕」と書いている。畢は雑誌を見て刊行年月日が記載されていないことを知っている。だから1906年から1907年の間だと推測した。慎重かつ正確な説明である。

ところが魏紹昌は、畢樹棠論文を資料集に収録するとき定説にしたがってこの箇所を勝手に書きかえた。すなわち「光緒三十二年（丙午）三月に停刊した〔停刊於光緒三十二年（丙午）三月〕」（462頁）としたのだ。

定説にあうように書き直すのが編者としては親切だと魏紹昌は考えたものか。しかし別の方法もあったはずだ。原文のままにしておいて注釈で説明する。これが資料編集上の原則だ。なんだろうか。定説にあわせて他人の文章を勝手に書きかえるだろうか。奇妙である。（追記：魏紹昌のその誤った資料を使用して誤記をする若い研究者が出現した。王文君「再議《繡像小説》的停刊時間——讀《申報》刊《繡像小説》廣告札記」『中国海洋大学学报（社会科学版）』2016年第2期 2016.3.10）

それくらいに定説の力は強い。だから発行遅延説が出てきたときに私が驚いたのも当然だろう。

張純は日露戦争を題材にした作品に注目した。開戦を詠み込んでいるからそれを掲載した雑誌はそれ以後の刊行でなければならない。すると発行が遅れていた事実が浮かび上がる。

彼のいう通りなのだ。『繡像小説』は発行が遅れていた。張純は掲載された作品の内容にもとづき雑誌停刊は定説の1906年4月ではなく1907年9月以降だと推測した。

当時は『繡像小説』編者論争の最中だった。そこに発行遅延問題が発生した。そのような指摘をした人は誰もいなかった。雑誌の原物を見ている私もやはり定説に思考が縛られていたといわざるをえない。

『繡像小説』そのものには第13期から発行期日を記さなくなる。なにを見れば雑誌の発行を追跡できるのか。月日を明確にした確実な資料で雑誌発行を証明できるものはなにか。

私が思いついたのは当時の新聞、雑誌である。特に新聞は年月日のついている資料そのものだ。その新聞に掲載された『繡像小説』の発行広告を見ればおおよその時間を知ることが可能だろう。

その頃、利用できる新聞は天津『大公報』が影印版になっていた。もうひとつは商務印書館の『東方雑誌』だ。同じ版元だから『繡像小説』についての出版広告が参考になると考えた。前者の天津『大公報』には、上海から『繡像小説』第〇期が到着したという記事が掲載されている。そこに目をつけた。日本にある『同文滬報』と『消閑録』も利用した。それらを総合して私の結論は、最終的には1906年旧暦年末が停刊時期であろうというものだ(1985)。張純の1907年説はとらない。

この問題について張純と論争になった。だがほかの研究者は沈黙したままだ。2002年に上海で開催された国際学会で『新小説』の印刷場所問題とあわせて報告したことがある。このときも反応はなかった。問題が細かすぎたのだろうか。だが『繡像小説』の刊行が遅れていたことの重要性は比較にならないくらいに大きい。反応がないということは、当時は問題視されなかったことを意味する。あ

るいは作品、作家について論じることを重んじ資料的に「些末な」問題は軽視した。

その後、利用できる新聞が増える。『申報』『世界繁華報』『中外日報』などを調査した。私の結論は動かない。どの新聞広告を見ても1906年旧暦年末に停刊したことを示している。これについても何度も論文を書いた。

『繡像小説』発行遅延問題について郭浩帆が発言したことがある(2000)。新聞広告を資料に使用した研究論文が中国で発表されるのは2006年だ(文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」『華東師範大学学报(哲学社会科学版)』第38卷第3期)。張純、樽本から約20年後だから「ようやく」という表現があてはまる。その間、中国の研究者は無視したと書けば角がたつ。20年以上かかったが一部の研究者が問題の重要性に気がついたといいなおしてもいい。だがその論文でも不十分だった。なぜなら発行遅延が事実だとすれば(事実だが)、より大きい問題が発生していることを見逃しているからである。あるいはこれこそ今にいたっても無視か。私の理解をこえている。どこかおかしい。

大きな問題とはなにか。「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題である。ここにまたもどってくる。

## 5 「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題

『繡像小説』編者問題には、劉鉄雲と李伯元の盗用問題がからんでいた。私はそれを論拠にした。そこに『繡像小説』発行遅延説が出現する。作品の公表時期がほぼ確定できる。ゆえにあらためて盗用問題を考えなくてはならなくなる。ほかの研究者は気づいていなくてもこれは必然なのである。

簡単にすませよう。

『繡像小説』の編集長だった李伯元は、自分の「文明小史」に「老残遊記」から一部を盗用した。これは李の生前に発生している。もうひとつは例の「老残遊記」第11回にまつわる。「文明小史」第59回(『繡像小説』第55期[1905年七月])がそれを劉鉄雲の原稿から盗用した。見てほしい。今[1905年七月]で示したのが従来考えられてきた刊行時期だ。それが発行遅延説によって1906年六月頃

と推測される（追記：別の新聞広告にもとづく1906年閏四月頃と少し早まる）。1906年六月といえば李伯元の死去が同年三月だから、彼はすでにこの世にはいない。李の死後にも「文明小史」は発表されている。しかも盗用がある。では誰が劉鉄雲の原稿から盗用して「文明小史」に取り込んだのか。李伯元のそばにいたのは欧陽鉅源だ。欧陽をはずしては考えることはできない。結局、盗用問題は「文明小史」の最後部分が李伯元の執筆ではないこととからみあう。欧陽鉅源が続作した、あるいは最初から共同執筆であった。前に新聞広告にでてきた南亭亭長は李伯元の筆名である。だが彼の代表作のひとつである「官場現形記」にしても欧陽鉅源との共作である可能性を考える余地があるのだ（後述）。問題はまだ広がっていく。1961年に回帰するといってもいい。

過去には解決できなかった問題について解決の糸口が出てきた。後の探索により状況が変化したのである。新聞が利用できるというのもその例のひとつだ。周囲の様子が明確になると解答できる範囲も広がる。

上の盗用問題について最初に指摘したのは魏紹昌「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」（1961）である。この論文のなかで、魏は解決できない3疑問を提出した。

1. 李伯元は『繡像小説』の主編であったが、みずからが没書にした劉鉄雲の原稿をなぜ自分でもういちど使用したのか。
2. 劉鉄雲は、盗用についてなぜ抗議をしなかったのか。
3. 「文明小史」と「老残遊記」は当時すでに流行していたが、読者はこの盗用になぜ気がつかなかったのか。

いわれてみれば、なるほどと思える疑問である。しかし魏紹昌は解答のしようもないし追究する気もないと書いている。そういうのだからどうしようもない。1961年以来誰も答えていない。また反応もない。答える条件が整っていなかったといいわけしてもいい。

私は汪家熔との論争に関連して自分なりの考えを提出した（1985）。劉鉄雲の方が李伯元の原稿を盗んだと汪が主張するからだ。それがありえないことを証明するために魏紹昌の疑問にも答えた。さらに中国済南で開催された劉鶚及《老残

遊記》国際学術討論会（1993）でも漢語で報告した（「老残遊記」和「文明小史」的關係）。論旨が細かすぎるのか会場での反応はなかった。そういう場では「老残遊記」を外国人が読んでも近代小説の代表作としてスバラシイとほめあげるのがふさわしく、またそう期待されていたのかも知れない。私の研究とはなんのかかわりもないことだ。あくまでも学術討論会だから私の関心事を報告しただけ。

3度目に書いたのが「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」の謎を解く」（2004）である。こういうのを「しつこい」という。だが、これほどシツコクしても誰も理解しないのだからしかたがない。例外は当然ある。おもしろいと電子メールをくれた中国の研究者もいた。だがこういう例はまれである。

魏紹昌が提出したそれぞれの疑問には、彼が独自に設定した前提がある。文章に書かれてはいないが読めばわかる。以下のとおり。

1の前提：『繡像小説』は李伯元の死去によって3年分全72期を発行して停刊した。

2の前提：劉鉄雲は自分の文章が盗用された事実を知っていた。

3の前提：「文明小史」と「老残遊記」は当時すでに広く流行していた。

見れば1961年当時の知識をもとにして前提が作られている。今はその知識自体が増加しているのだ。考えが違っても当然だろう。

1については前提そのものが成立しない。『繡像小説』の発行が遅延していたことが判明している。李伯元の死後も刊行されていた。しかも盗用したのは欧陽鉅源である。李伯元の死後、欧陽は原稿を続ける必要があった。李伯元が生前に没書にした「老残遊記」原稿が手元にある。これを欧陽鉅源は利用したのだ。李伯元の生前、死後の2回にわたる盗用だ。ゆえに個人名の劉鉄雲と李伯元ではなく作品名を使い「老残遊記」と「文明小史」の盗用事件」と表記するのがより正確だと考える。（追記：「文明小史」は連夢青「鄰女語」からも一部の文章を盗用していた）

2の前提も疑問だ。劉鉄雲は『繡像小説』の編者に原稿を没書にされたあと執

筆を中断している。『繡像小説』には興味を持っていなかったと考えるのが自然である。それとはまったく別に執筆を再開したのは友人にすすめられたからにすぎない。劉鉄雲は盗用の事実を知らなかった（追記：劉鉄雲の息子大神も「關於老殘遊記」で盗用について言及しない。のちの劉一族も同様）。ゆえに抗議もしない。盗用を知っていたというのは魏紹昌の思い込みである。

3の前提も半分は成立しない。「老殘遊記」は人気があつて大いに出版された。幾種類もの版本があることがその証拠だ。この部分はよろしい。私はそれらを集めて本文を比較検討していた。その過程で天津日日新聞版『老殘遊記二集』に遭遇したことはすでに述べた。だが一方の「文明小史」はどうか。1906年に商務印書館から2冊本で発行されたのみ。その後1955年にふたたび単行本が出てくるまで忘れ去られていた（『文明小史』の版本について私が発言できるのは、『清末民初小説目録』を作成しているからだ）。それまで読者も研究者も盗用があることを知らなかった。

ついでに言えば1955年版『文明小史』に「叙引」を書いた阿英は、該書において「老殘遊記」からの盗用部分を削除した。なんのために本文を削除するのか。不可解きわまりない。原文を勝手に削除するという、ここでも「阿英問題」なのである。

阿英が作品の原文を部分的に削除していることは以前に指摘したことがある。「版本のこと——『鄰女語』を例として」（1977）だ。阿英は「鄰女語」を復刻した時、義和団の暴力についてはその箇所を削除している。義和団は帝国主義に反抗していたから評価しなければならないという政治的な判断による。作品に義和団の行動を批判する部分があつてはまずらしい。

その時の判断で政治的に都合の悪い箇所は削除する。しかも削除した箇所を明らかにせず説明もしない。ゆえに阿英の編集した資料集は、貴重ではあるが利用するには注意を要する。欠陥のあるテキストを用いて作品論が成立するはずがないではないか。初出に当ることが重要だ。中国の研究者は何も疑わず全面的に資料集によりかかる傾向があることもいっておく。

さらにつけ加える。阿英は自分の編纂した『晚清戯曲小説目』に「叙記」を書いている。のちの文集に収録されているのを見ると初版にあつた「ソ連」との友



好を謳っていた部分を削除している。その後の中ソ関係を反映しているのだろう。これは阿英ではなく文集編集者の問題である。だがこれも政治によって研究が左右されている実例だ。なんだろう。どこかあやしい。

1955年版『文明小史』の削除についても中国の研究者は何もいわない。阿英が権威だからなのか。

問題が存在していることについて私はすでに公表している。李伯元が死去したあとに継続発行された『繡像小説』がある。それに掲載されている李伯元名義の「文明小史」をどう考えるのか。私は欧陽鉅源の続作だと考えてそう書いた。問題は作品の著者そのものに及んでいるのだ。それを無視して「文明小史」論あるいは李伯元論を書くことはできないだろう。基本があやふやであればその上には作家論、作品論も構築することは無理だ。立論の足元を揺り動かす大きな問題であるといわざるをえない。小さく見えるかもしれない。だがこれこそが基本だ。その基本をおろそかにしている。中国の学界ではタブーであるのかこれについて追究しようとはしない。私は不思議に感じる部分なのである。

不思議といえば李伯元の「官場現形記」に関しても問題が存在する。

## 6 『増注官場現形記』の発掘

「官場現形記」は清末四小説のなかのひとつだ。これに触れない清末小説史はない。

海賊版まで出てくるところから当時どれくらい人気があったのかを逆に推測することができる。

李伯元が経営する世界繁華報館が版元だ。新聞『世界繁華報』に連載しながら並行して単行本が刊行された。活版線装本で分冊出版である。そのほか絵図を添え欧陽鉅源が注をほどこした、いわゆる増注絵図本も出版されるなどやや複雑な状況がある。

従来は世界繁華報館本のみを重視し増注絵図本を軽く見る傾向があった。無理もない。

世界繁華報館は李伯元が経営し『世界繁華報』を発行している。該紙に連載し

たのが「官場現形記」だ。世界繁華報館本は版元の印刷物だから重要にきまっている。小型線装本だが大きな活字で組まれており見た目が堂々としている。

一方の増注本といえば、粵東書局、崇本堂など聞き慣れない書店の刊行物だ。絵図をつけているのは新趣向だが手書きの文字を縮刷した石印本で一目してみずぼらしい。ほとんど海賊版あつかいなのである。魏紹昌は『李伯元研究資料』（1980）でいくつかの版本をならべた。それだけ。系統とか海賊版との関係について説明していない。

その増注本でありながら世界繁華報館が出版したものとすれば、どうなる。元本のほかに増注本を同時に刊行したことの証拠になる。海賊版について再考する必要がでてくる。

「上海世界繁華報館校刊」と印刷した『増注官場現形記』を一部分ながら入手したのは京都の書店であった。最初これを見たとき世界繁華報館本の端本だと思った。題簽には単に「官場現形記」としか記されていない。しかしよく見ると本文に割注がほどこしてある。この注は従来の世界繁華報館本にはないものだ。だから「増注」という。ただし増注だけで絵図はついていない。

つまりこれを下敷きにして絵図をつけたのが粵東書局本であり崇本堂本ということになる。1981年に論文を書いた。『官場現形記』の版本研究には重要な意味を持つ。くりかえせば『官場現形記』については2種類を版元である世界繁華報館が刊行していたという事実だ。そのひとつが欧陽鉅源の増注本だから李伯元の許可を得ているのは当然だ。許可というよりも包天笑の証言をあわせて考えれば「官場現形記」という作品そのものが李伯元と欧陽鉅源の共同作業で成立した可能性が高い。ゆえに筆名の南亭、あるいは南亭亭長は李伯元と欧陽鉅源の共同筆名だとさえ私は考えている。

とにかくこの『増注官場現形記』の存在は、新しい発見であることはいうまでもない。

ところがあの広い中国で同じ『増注官場現形記』の所蔵が見つかっていないらしい。薛正興主編『李伯元全集』（1997）の第5巻は王学鈞編で李伯元年譜などが収録されている。そこでは樽本の所蔵だと書いてあるだけで版本の系統については沈黙したままだ（211頁）。つまり実物を見ていない。探しているがみつか

らないと知らせてきたことがある。私が考えるに図書館で所蔵するにしても『官場現形記』と表示するだけだろう。それが増注であるかどうかまでは区別していない。紛れ込んでいると思われる。

「官場現形記」については多くの論文が書かれている。だが版本に関して説明がない。この『増注官場現形記』に言及がないのは不可解である。版本を明確にしてこそ作品論があるのではないか。

海賊版『官場現形記』に関連して裁判が行なわれたことに触れておく。

これは研究環境の変化があってこそ追究できるようになった課題のひとつだ。以前の中国であれば新聞などの現物は劣化が特に激しく閲覧不可が普通だった。それが影印本で刊行されあるいはマイクロフィルム化が行なわれた。そうなれば資料として利用することが可能だ。全面的に自由に接触できるかどうかは別に問題としてある。だが少なくとも可能性が出てきたというだけでうれしい。以前はその可能性がほとんど皆無だったからだ。

## 7 「官場現形記」裁判

『新小説』第2年第8号（刊年不記）の「新笑史」が問題を生じさせた。ここには海賊版『官場現形記』の裁判があったことが記述されている。ただし『中外日報』という新聞名があげられるだけで具体的な年月日が記載されていない。私はこれに言及しながら訴えられた可能性のある版本について論じた。海賊版を特定することすら行なわれていなかったからだ。

それについて日本のある研究者は、次のように書いた。「……期日の記載すらない雲をつかむような話であった、本来論文で扱うべきものではなかった。まずそれが事実か疑わしい。「新笑史」の記事を裏付ける資料がなにひとつないからである。百歩譲ってそれが事実だとしても、いつおこったか不明である」<sup>\*3</sup>

『中外日報』という手がかりが提示されている。普通はそれを調べてみようと思うのではないか。ところがその日本人研究者は「裏付ける資料がなにひとつない」といって「まずそれが事実か疑わしい」と否定的な態度を示すだけだ。自分で調査する気は最初からないのである。自分が調べないからといってそれを「本

来論文で扱うべきものではなかった」と断言していいものだろうか。

私は上海図書館で該紙のマイクロフィルムを見た。それが利用できる環境に変化している。以前はとてもできることではなかった。2001年のことだ。しかし私の努力が不足していたらしく当該新聞記事を見つけることはできなかった。あるかどうかわからない資料をさがすのはそれほど簡単ではない。ほとんどが失敗するのが私の日常である。

私の力ではそれ以上探索することは無理だった。それから数年が経過した。

状況が大きく変化したのは2007年になってからだ。新聞を調査して「官場現形記」裁判の存在が事実であることを証明した論文（劉穎慧「李伯元《官場現形記》版權訴訟始末」『華東師範大学学报（哲学社会科学版）』第38巻第3期2006）があることを知った。これこそが私の読みたい論文だ。

「官場現形記」裁判の実施月日を特定しているのがすばらしい。劉穎慧の功績を高く評価する。自分ではなにもせずただ批判するだけの日本人研究者とくらべることはそれ自体が適切ではない。つまり比較にならないくらい劉が優秀であるといいたいのだ。

劉は新聞を綿密に調査して広告の内容から裁判の経緯を説明している。私は劉論文の価値を十分に認めている。論文を高く評価したうえで、それでもいくつかの疑問を感じたのも事実だ。

私はこの裁判について調べたことがある。また新聞にも実際に当たっている。だから広告があるということは新聞に報道記事が掲載されている可能性が高いとわかっているのだ。しかし劉論文は広告を引用するだけで報道記事には言及しない。また海賊版だと特定された日本知新社本についての説明がない。劉穎慧の指導教授（らしい）陳大康はこの新聞広告を紹介して日本知新报社の日本人が罰せられていないことに大きな不満を感じていることを別のところで述べている。私が日本知新社本は海賊版であって日本人を装った中国人の刊行物だと以前から指摘しているにもかかわらず、それを知らないらしい。日本知新社本の写真をかかげて資料集（『官場現形記資料』2003）を刊行していることにも気づいていない。なんだろうか。清末小説研究は中国以外では行なわれていないと思っているのだろう。

いくつかの疑問を感じたので私は調査を再開することにした。数年ぶりのことだ。

新聞のマイクロフィルムを取り寄せて（それが可能になっている。わざわざ中国の図書館まで足を運ぶ必要がなくなった部分もある）読んだ。すると劉穎慧が気づかなかった重要な広告が見つかる。さらには新聞報道もあることがわかった。それらを総合すると裁判の真相が浮き出てきたのである。中国人席粹甫が日本人を装って海賊版を製作販売したのが事実だ。

陳大康が不満を漏らした日本人についてはどうか。その新聞報道を読めば、そもそも日本人そのものが存在しないことがわかるのである。陳大康は海賊版についてどうしても日本人に罪をなすりつけたかったようだ。事実が陳大康の誤判断を白日の下にさらす。

資料の調査発掘が重要であることをここでも証明することになった（「官場現形記」裁判の真相」2008）。

資料の発掘が重要だと私は信じて疑わない。しかしその事実をどのように研究に反映させるかは、それぞれに扱いが異なる。立論に際して具合の悪い資料を中国の研究者はどうするか。つぎに紹介する。

## 8 『庚子蕊宮花選』の発掘

李伯元は「花柳界の領袖」である。彼の身近にいた欧陽鉅源は包天笑に告げて李が「花柳界の采配役〔花界提調〕」だったと証言している（1942）。

李伯元が新聞『遊戯報』を発行し花柳界の美女コンテストを行なったことは前に述べた。花榜とか花選とよばれる。科挙の合格者氏名を張り出した形式を取り入れたことからの命名だ。李伯元が批判された時代にはこの花榜花選も批判の根拠になった。妓女コンテストとはけしからんというわけだ。花柳界そのものを現在の価値観で裁断し、そこに差別意識があることすら気づかない。花柳界というだけで問答無用の批判に短絡する。

中国の研究界では批判されるとその事実が先行してそれ以上探索されることがない（後述）。資料を発掘してより深く調査し事実を詳細にするという作業が行

なわれない。それをやると研究者自身が批判される可能性がでてくる。調べてどうするのか、復権をたくらんでいるのではないかと疑われるのだろう。花榜花選についても同じである。過去の文献にそうあるというだけ。引用をして批判の材料にする。実物をさがす必要がない。引用に引用をかさねるだけでよらしい。

これも京都の書店で発掘した活版線装本『庚子蕊宮花選』1冊は、まさに原物そのものである。李伯元が妓女コンテストを実施した経過を記録し関係者が詩を寄せている。第1級の資料であることはいまでもない。なぜ日本で入手できたのか今もって不思議に感じる小型本だ。写真版で『清末小説研究』第5号（1981）に収録したが反響はまったくなかった。

李伯元を批判するときの材料には使う。しかし魯迅のいう譴責小説のひとつ「官場現形記」を書いた李伯元を評価したいばあいこの『庚子蕊宮花選』はじゃまになるらしい。研究者は該書の存在そのものに触れない。『李伯元全集』第5巻（1997）が事前承諾なしに収録したがそれだけのこと。

## 9 吳趸人「電術奇談」の原作探索

問題になっているのに解決がつかない。外国小説の漢訳についていえばいくらかでもある。原作が不明のまま放っておかれる。中国にはあれだけ多くの研究者がいてなぜ未解決にしておくのか。はじめは不思議でならなかった。だが自分で原作探索を体験してみれば、その容易でないことが判明する。外国語がからんでくるからだ。外からながめるだけと自分がやるのとは大いに異なる。

そのひとつの例は吳趸人の「電術奇談」である。

吳趸人の作品に数えられており掲載したのが有名な『新小説』だ。単行本も数種類が出ている。ある版本には中国で映画化されたときの写真が使われている。原作は日本の作品だ。

目録風に記述する。

電術奇談 （一名催眠術 写情小説） 24回

（日）菊池幽芳氏原著 方慶周訳述 我仏山人（吳趸人）衍義 知新主人

(周桂笙) 評点

『新小説』8-2年6号(18号) 光緒29.8.15-刊年不記 [光緒31.6] (1903.10.5-  
[1905.7] )

「衍義」とは日本語でいう「翻案」だ。この表記がまた誤解を生む原因になっている。あとで説明したい。

日本の菊池幽芳原作と表示している。原作者をいわない作品もあるのにくらべればましな方だろう。それにしても菊池幽芳の名前を出していながらなぜ原作品名がないのか。多作の菊池だからとって作品を特定できないわけはなかろう。翻訳作品の原作探索について素人だった私は、その時は素朴にそう思った。初出の1903年からはかなりの時間が経過しているにもかかわらず原作を調べた研究者はいなかったのだろうか。不思議なことだ。

原作が不明だから中国ではそれこそ好き勝手な説明がなされている。翻訳ではないと孫楷第は断言する(1933)。「衍義」と書いてあるところから孫はそう考えたのだろう。原作がわからないのにどうしてそういえるのか。これも無責任な説明だと私は思う。だが中国ではその説明が主流になる。さらに飛躍し再創作だといはじめる研究者も出てくるしまつた。盧叔度である(1980)。これはなんだろうか。まえにも抱いた感想だ。根拠もなく断定する文章にであうと私はなんだろうかと思ってしまう。

私は調査することにした。菊池の名前がわかっている。手がかりはある。

ところが調べるのは簡単だと思ったのは大きな誤りであった。幽芳の全集に収録されているに違いないと予想した。しかし図書館に足を運んで閲覧すれば該当する作品がない。

試行錯誤せざるをえない。天津への長期出張をはさんだから作業は中断する。帰国後、調査を再開した。時間がかかったが『大阪毎日新聞』(1897)に連載されていたのをようやくつきとめた。菊池幽芳「新聞賣子」である。

それを見るとイギリスの懸賞小説から日本語に翻訳したものとある。菊池はイギリス作品から翻訳し漢訳はさらにそれを重訳した。当時の翻訳作品によく見られる形態である。欧米作品を日本語経由で漢訳するというやり方だ。

日本語原文と漢訳を比較対照した。その内容は「恋愛幻想探偵小説である」と理解したからそう書いた。呉趺人の「衍義」と表示があるが日本語にはほぼ忠実な漢訳になっていることが判明する。呉趺人による再創作などではない。これは実物で確認したからわかったことだ。

これを発表したのが1985年である。

王立言は自分の論文で「新聞賣子」について私が行なった説明をそのまま無断借用した(1988)。私はそれを読んで驚いた。本場の研究者に無断借用されるほどになったかといってヘラヘラ笑っている人がいる。なにが本場であろうか。王立言は学術論文執筆の基本規則を知らないのではないか。

王立言、盧濟恩、趙祖謨主編『中国文学通典：小説通典』（北京・解放軍文藝出版社1999.1）の王立言と同一人物だと思う。

「事実是谁が指摘しようが事実にすぎない」。私が中国で中国人から聞いたことだ。その時はあまりにも馬鹿らしく思われ返事をする気にもならなかった。それは事実の発見には研究上の貢献を認めないというのと同じだ。王立言も同様に考えて気軽に無断借用したと思われる。「電術奇談」の原作は誰が調べても「新聞賣子」でしかないか。ここには他人の努力に対して敬意を払うという姿勢がない。それが中国の学術研究だろうか。その行為は学術の国際基準にあわないことを知ってほしいと考えたものだ。

私にしてみれば愉快ではない。王立言のやり方をどう思うかと私は魏紹昌に手紙を書いた。それはよくないと魏は返事をくれた。ところがだ、その魏紹昌自身が前出『老残遊記資料』の刊行をめぐって劉鉄雲の親族ともめていたのである。その資料集はもとはといえば劉厚沢、蕙孫兄弟と魏紹昌の共同編集だった。劉兄弟が資料を提供したのだから当然だ。ところが出版されてみると魏紹昌の名前しか出ていない。なぜそうなったのか外国人の私にわかるわけがない。劉家の人々は魏紹昌に成果を横取りされたと立腹している。文章にして公表しているから事実なのだろう。そうしてみるとこういう類のもめ事は昔からあるらしい。なんだろうか。

「新聞賣子」を突きとめるには多大の労力を使った。再び同じ苦しみを味わうことはないだろう。ところが、約20年後に林訳シェイクスピアでさらに大きな



困難に出会うことになるうとは、その時は思いもしない。

## 10 細かいことをいくつか

「老残遊記」の作者劉鉄雲が1900年に北京で難民救済活動を行なったことはよく知られている。それについて書いた文章を『大阪朝日新聞』に探し当てた。日本の新聞記者西村博の報道記事である。新聞を調査の材料にしたのは、菊池幽芳「新聞賣子」、『繡像小説』の発行遅延問題などでもそうだった。そういう発想が出てきたのは劉鉄雲の行動を新聞報道で追跡したことにつながっていたらしい。今から思えばそうだとわかる。

劉鉄雲は1906年に2度日本を訪問している。政治的な目的があった、いや骨董品の販売がねらいだったと説明される。しかし具体的な日時は不明のままだ。

手がかりを求めて朝日新聞社に電話して質問した。資料室に回されたからだいたい年代を告げてそれに関する資料はないかとたずねた。一言のもとに「調べようがない」という返事だ。調べようがないから私は問い合わせたのだが。その人は調査をするということを理解していなかったらしい。

あとは新聞のマイクロフィルムを丹念に見るしか方法がない。あるとわかっていけば努力のしがいがある。だが、ないかもしれないものを探すのは疲れる。ようやく見つけたのは欄外記事である。折り目のノド部分に掲載されたいわば埋め草風に書かれた記事だ。これに劉鉄雲のことを「観光清人」として報道している。われながら細かい仕事をしているとあきれないでもない。中国人研究者ならばそれと劉鉄雲の政治的評価とは何の関係もないというところだ。しかし事実のひとつひとつを確認したい、というのが私の方針なのだからどうしようもないだろう。

秋瑾の来日問題も同様である。

来日が1904年であることは確かだ。しかし三月四月五月、夏、新秋とそれぞれ異なる。上海から出港した、いや天津から出発して神戸、横浜到着などなど。中国では諸説紛々だ。先行論文をいじくりまわしているだけで新しい事実が提出されるわけではない。中国で女性革命家としてこれ以上ないほど有名な秋瑾の行動についてなぜ不明確なのか。わけがわからない。これは歴史研究者の仕事であ

って文学研究者は無関係らしい。

私は服部繁子の手記を雑誌にみつけた。服部宇之吉夫人で北京から日本に帰国したとき秋瑾を同道したのである。その手記を読むとおおよその行程と時間がわかった。そこで『神戸新聞』を閲覧して詳細を確認した。その結果、秋瑾は服部繁子、高橋勇らと一緒に1904年6月28日北京を出発し同日天津からインデペンデント号に乗船、神戸に上陸したのは7月2日だと判定したのだ。

短文を書いて中国の新聞に投稿したのはこれが今まで知られていなかった事実だからである（「秋瑾東渡小考」1984）。その時、乗ったインデペンデント号は「独立号」と漢訳した。ところがあとで『大阪毎日新聞』などを見ると報道内容が異なっていることに気づく。もう一度調べ直した。その結果、天津出港の日時が6月23日であり乗船したのはバベルスベルグ号だと判明した。服部繁子の記憶違いだったのだ。別の論文でそう訂正したのだがすでに遅かった。漢語で書いた短文が郭延礼編『秋瑾研究資料』（1987）に収録されたからだろう、のちに日本で出版された秋瑾伝ではいずれも「独立号」と誤ったままになっている。

秋瑾の来日月日を特定したとしてもそれだけのことだ。秋瑾の政治活動とは何の関係もない。しかし事実を確定することが重要だと私は考えている。

そういえばこんなことがあった。ほかのところでも書いた気がする。しかし印象が強かったからくりかえさずにはいられない。

1995年韓国ソウルで開催された国際学会でのことだ。私は清朝末期に実施された経済特科について発表した。ここでいう経済は日本語経由で中国にもたらされた今の意味ではない。本来の経世（国）済民からきている。国家有用の人材を臨時につのる。科挙の特別版なのだ。義和団事件が発生するなどしたからその実施についてははっきりしない部分があった。

その経済特科に李伯元と呉趼人が推薦されると従来はいわれていた。だが作家と科挙の特別試験がどう関係しているのかが不明だ。そもそもふたりは本当に推薦されたのか。その確実な証拠はだれも提出していない。

経済特科の実施時期、その内容、参加者などについてはこれも歴史研究者の仕事だと考えられていたらしい。だから文学研究者は、魯迅、阿英、魏紹昌といういわゆる「権威」の記述に全面的によりかかるだけ。自分で調べようとする人は

いなかった。資料にもとづかないから文学研究者の記述は混乱していた。どうでもいいらしい。李伯元、呉趼人が経済特科へ推薦されたといわれるだけで、そのことは彼らの作品評価とは直接結びつかないからだろう。

私は1902年の新聞に候補者名簿が掲載されていることに気づいた。これを追跡すると発見があった。李伯元と呉趼人についての新資料を掘り出したのだ。ふたりは同時に推薦されていた。これは新事実だ。また経済特科の実施については従来からの通説とは時間のズレがあり、それを確定したこともその学会で報告した。

私の発表を司会するためにだけ中国から研究者が夫人同伴で出席している。その中国人研究者は私の発表に対して1年2年の違いは大きな問題ではないと発言したではないか。私は少し驚いた。なるほど中国の研究者は高所から全体を見渡して立論するのだ。試験実施の時期が1、2年違おうとそれは小さな問題にすぎない。李伯元と呉趼人が推薦されていようがどうでもいいらしい。その人からもらった名刺を見ると博士指導なんとか明記してある。大局を見通し大きな問題に取り組みと博士課程の大学院生を指導するのだろう。低い目線では全体の流れを把握できないというつもりがちがいない。それはそれで正しい（ように当時は思った）。中国人研究者にとってはどうでもいい事柄を私は問題にしていると思われる。

もうひとつもっと細かいことである。呉趼人『二十年目睹之怪現狀』初版の刊行年月についてだ。

該作品は広智書局から8冊にわけて単行本で出版された。第4巻（冊と表記する）丁巻の奥付には、「光緒三十二年十一月二日」とある。第5冊戊巻は、「光緒三十二年十二月十六日」である。原物で確認しているから間違いようがない。『清末民初小説目録 初版』（1988）にもそのように記載した。

ところが清末小説研究の権威である阿英は「晩清小説目」（1954/57）において次のように記述している。

第四冊 四十六至五十五回 一九〇六年十二月刊（傍点筆者）  
 第五冊 五十六至六十五回 一九〇六年十二月刊

阿英は光緒三十二年を機械的に「1906年」と西暦に換算し十二月は旧暦のままに表示している。これを私の用語で新暦旧暦混用という。しかも第4冊は十一月とあるべきところを「十二月」だと誤記した。原本に「十一月二日」と記載されているのだから阿英の書き間違い、あるいは誤植であるのは明らかだ。

あらためて調べてみると阿英が誤記したのを中国の著名な研究者全員が40年以上にわたって踏襲しつづけている。2冊ともに十二月発行だと説明するのだ。作品の初版原物で確認するのが研究の基礎だろう。ところが彼らは原物を見るという基本を抜きにして解説し作品論、作家論を書いていたことになる。私は短文を書いて中国の雑誌『読書』に投稿し採用された。

雑誌掲載後しばらくして私が名指しした研究者たちのひとり（裴效維）から手紙がきた。「いわれるとおり原物では確認していない。しかし出版年の誤記と呉趼人評価とは関係がない」と書いてある。あきれた。私は呉趼人評価を問題にしてはいない。単に初出の原物を見ていないのかと問うただけだ。だが誤りを指摘されてその研究者は別の問題にすりかえた。あるいは指摘された意味が理解できなかったらしい。どこかおかしい。

なるほど中国の研究者は大局を把握することに主眼を置くわけだ。印刷物の刊年表記など細かいことにこだわるのは日本人の私くらいだろう。小さい小さい。小さい日本人（私のこと）にできるのは、せいぜいやって資料の整理、目録の作成くらいのことだ。そう思われていると強く感じた。

中国人研究者にとっては私の指摘が細かすぎて問題の存在が見えなかったらしい。誰でもできる小さいことなのだから自分でさっさと片づけておけばいいだろうと考えるのは私だけのようだ。だが蟻ほどの小ささだといってもゆるがせにはできない。だいたいそれでは蟻に失礼だ。正確な細部を基礎にして論文が構成されるというのが私の考えである。

「十一」が「十二」になっている。それだけ。問題はあまりに細かい。しかし私は原本で確認していることだ。中国での表立った反応はないだろうと考えていた。いつものことだ。ところがこの時は違った。反論をして同じ雑誌に文章を掲載した人がいる。竺慶麟である（「阿英先生没有錯」『読書』1998年12期）。

阿英は間違っていないと竺慶麟は主張する。その根拠はなにか。

原本に表示されている「光緒三十二年十一月二日」は、新暦に換算すると「一九〇六年十二月十七日」だ。ゆえに、阿英の記述「一九〇六年十二月刊」は正しいと反論したつもりだ。

私はこれにも驚いた。なぜこのような文章を『読書』の編集者は掲載するのか。反論になっていないからだ。

まず阿英が書いている新暦旧暦混用について竺慶麟は知らない。つぎに新暦で表記したというのなら全8冊ある該書のうち合致するのはわずかに2冊でしかない。これでは残りの6冊が誤記したことになる。自分で確かめなかったのだろうか。

日本人の指摘に脊髄反応する。反論するためにだけ反論しているように思えた。しかも反論するのに熱中してかえって阿英の傷口を広げることに気づかないのだ。私が驚きいぶかるのも当たり前ではなかろうか。

なんだろう。研究界の権威阿英が間違うわけがないと考えているのか。結論が先にあってそれにあわせて資料を読んでいるのがあからさまだ。おかしいことだと思う。

## 11 商務印書館と金港堂の合弁問題

私が商務印書館に興味をいだいたのは「老残遊記」を掲載した『繡像小説』を刊行していたからである。上海で新しい小説専門雑誌を創刊した商務印書館は誰がどのように設立したのか。教科書の編集出版を経て中国有数の会社になったというのではないか。しかも初期のある時期は日本の金港堂と合弁会社であった。もっと詳しく知りたいと思うのも当然だろう。

日本でも合弁問題に触れる論文は書かれてはいる。ところが詳細な経緯がわからない。その事情に詳しい人、たとえば金港堂の関係者もいたはずなのだ。しかし具体的な証言がない。合弁に関しての説明が欠如している。中国側の資料にもほとんど記載がない。

例をあげよう。

「商務印書館大事紀要」 1957

1914年 日本株を回収する（1903年、日本金港堂が上海に来て印刷会社の設立準備をはじめた。本館は、しばらく日本商の資本と技術を利用していたが、本年にいたり全ての日本株を回収した）。

年表だからこのように簡略に書かれているのだろうか。それにしてもおかしな書き方だ。合弁を解消する1914年の項目がある。だが合弁が成立した1903年の項にはなぜ説明せず1914年の1ヵ所にまとめるのか。奇妙な扱いである。理由を知りたいと思った。

詳細がわかってみれば、この記述こそ商務印書館の合弁問題に対する態度表明だったのだ。つまりなるべく合弁には触れたくない。できればその事実をなかったものとして考えたい。

実際にその例がある。本文が1,101頁もある王雲五『商務印書館与新教育年譜』（台湾商務印書館1973）には、金港堂との合弁が1字も記述されていない。不思議といわずになんといえればいいのか。1903-14年の実質10年間にわたる合弁という事実を本当に無視できると考えているのだろうか。私は何度も首をひねる。

中国で公表される文献は王雲五本ほど極端ではないにしても日本金港堂との合弁問題については腰が引けている。触れたくない。ないものと考えたいらしい。その反対に金港堂を吸収してやったと商務印書館の優位をいう文章もある。商務印書館の首脳が書いた文章だから時代背景をそれこそ無視している。研究者のなかにはそれにとびつく人もいる。記述が不安定である。

手がかりはこのばあいも先行論文を読むことから得ることになった。全体の概略は論文を通して理解することができる。それをくりかえすほかに方法はない。

実藤恵秀の文章（1940）に長尾雨山の名前がでてくる。商務印書館に勤務していたという。さらに、中村忠行は「折柄教科書疑獄事件に失脚して悲運を嘆つてみた元高等師範学校教授長尾慎<sup>マツ</sup> [慎] 太郎（雨山）」（1962）と書いている。

教科書疑獄事件といっても当時、私を知るわけもない。ここから調べることにした。

裁判事例集などをひもとく。最終的に有用だったのはこれも日本の新聞報道であった。新聞記事を追跡して長尾雨山がなぜ上海に渡ることになったのかを私ははじめて理解した。秘密の文書があるわけではない。公開されている資料を丹念に探して雨山の裁判についてはその真相がようやくわかったのだ。また金港堂との合弁を知る人に質問もし初期商務印書館の状況を把握したと考えた。これが「金港堂・商務印書館・繡像小説」（1979）である。

そのころは長尾と交流のあった人々が京都にいた。漢学者として高名な長尾がなぜ商務印書館に勤務することになったのか。それを直接、雨山に聞いた人はなかったようだ。私の論文を読んでそんなことがあったのか驚いたと反応があったのを人づてに聞いただけ。昔は本人と話すような雰囲気ではなかったのだろう。それはそうだ。いくら冤罪だとはいえ疑獄事件にかかわっていた。話題にできることではない。

私はこれも純粹に研究だと考えたから論文に書いた。しかしそういう事情であれば関係者にとってはうれしいわけがない。

どう考えても雨山は冤罪だった。そこに力点をおいた文章を別に書いて公表した。すると雨山の親族に論文を送るよう私に勧める人がいる。少し考えてそうした。無実の罪を晴らしたのだからと安易に思ったのが間違いであった。ある親族から届いた返書を読むと、その人は父親の事件について何も知らなかったという。ゆえに美しい思い出に泥水をかけられたように感じたらしい。申し訳ないことであった。

商務印書館にしても合弁の詳細を公表されることは快いことではなかったと思われる。こんなことがあった。

前出論文を添えて私は商務印書館に資料は保存されていないかと問い合わせの手紙を書いた。これも研究上の探求心からにほかならない。できるだけ多くの資料を集めるのが研究には必要だからだ。それに対して商務印書館から回答があった。資料は日本軍が焼いてしまって存在しないという意味の手紙である。嫌味以外のなにものでもない。何度も同じことを書くのは、ここにこそ商務印書館の心情が赤裸々にあらわれているからにほかならない。よけいな調査をするなどという意思表示だと私には思われた。時間の経過とは無関係に商務印書館内部において

従来から受け継がれている精神なのだとわかる。

本にまとめて『初期商務印書館研究』（2000）になった。またこれの増補版（2004）も出し、さらには『商務印書館研究論集』（2006）に後の文章を集めた。こちらには金港堂との合弁を解消した文書を取録している（「商務印書館と金港堂の合弁解約書」初出は『清末小説』第27号2004）。商務印書館が新聞に掲載したものだ。私が『申報』影印版を閲覧していて見つけた。汪家熔の編集する『中国出版史料・近代部分』第3巻（2004）にも収録するが偶然の一致である。（追記：合弁解約書は「商務印書館と日本金港堂終止合弁合同」と題されて次の書籍に収録された。『張元濟全集』第4巻詩文、商務印書館2008）

商務印書館は日本企業と合弁を解消した内部文書をなぜ新聞に公表したのか。ここには当時の政治的背景がある。

1912年に中華民国が成立すると、陸費逵らが商務印書館からとびだして中華書局を設立した。中華書局でも教科書を編集発行し商務印書館の教科書に対抗したのである。陸費逵は元社員だから商務印書館の内部事情をよく知っている。商務印書館が隠しておきたかった金港堂との合弁を攻撃の材料に使った。

異民族支配の清朝から脱して中華民国になった。しかるに商務印書館はいまだに外国資本の日本金港堂と合弁している。そういう商務印書館が編集発行する教科書をお子孫たちに使用させるのか。

まさに時代の流れを背景にした商務印書館攻撃にほかならない。何度も蒸し返される。商務印書館は対抗するためにすでに合弁は解消している証拠として文書を公開したのである。内部文書を新聞に掲載しなくてはならないほどに社会の流れが反日に動いていたことがわかる。

日本企業との合弁がすでに過去のものであったにもかかわらず、その過去そのものが現在の商務印書館を苦しめる。それ以後も政治評価に直面することをくりかえす。隠したい事実であるのはやむをえないように思う。それにしてもなんだろうか。否定すれば自分の気に入らない過去は抹殺できるのか。

私が過去の文献を見て推測すれば、商務印書館は外国人が自社について研究することを基本的に歓迎しているように見える。あるいは興味を持っていると書きなおしてもいい。



たとえば、MANYING IP. *THE LIFE AND TIMES OF ZHANG YUANJI* (北京・商務印書館1985) がある。自社出版であることに加えて漢訳してもいる。葉宋曼瑛著、張人鳳、鄒振環訳『從翰林到出版家——張元濟的生平与事業』(香港・商務印書館有限公司1992) だ。また、フランスの戴仁 (JEAN-PIERRE DRÈGE) 著、李桐実訳『上海商務印書館1897-1949』(北京・商務印書館2000) がある。後者の原本発行は1978年だ (*LA COMMERCIAL PRESS DE SHANGHAI 1897-1949. COLLEGE DE FRANCE, INSTITUT DES HAUTES ETUDES CHINOISES.*)。内容が古くなっても商務印書館は意に介さず漢訳した。

しかし初期商務印書館の、それも特に金港堂との合弁を主としてあつかった私の著作については興味がなさそうだ。拙著を該社から漢訳出版するように橋渡しをしてくださる人があつたが漢訳出版は実現しなかつた。その人は日本語を理解しないから単に初期商務印書館の研究書だと考えたらしい。今から思えば商務印書館が日本金港堂との合弁を隠しておきたかつたなどと書いている書物をあえて刊行するはずがない。

中国の著名出版社が日本の出版社と合弁企業であつたという事実。これは現代中国においてはとても扱いにくい問題であるらしい。政治の風向きが研究に直接影響をあたえるからだろう。タブーあるいは立入禁止区域といったほうが理解しやすいか。

私は純粋に研究課題として両社の合弁を追究している。しかし中国の学界は日本と中国の政治的環境に影響を受けるようだ。研究と政治が合体している。それが合弁問題に言及したりしなかつたりになる原因だと思われる。

私にはほとんど想像できない。だからそういう書き方になる。疑惑が生まれる。結論が先にあるのではないか。

私が行なっていることはただ単に、そう「単に」些細な事実こだわっているようにしか見えないらしい。研究論文の水準にも達していないという判断があるのだろう。

劉鉄雲が北京で難民救済活動を行なつた新聞記事を見つける。彼が来日した月日を確定する。また秋瑾来日の月日と行程、あるいは乗った船名を確認するなど確かにそれだけのことだ。経済特科に李伯元と吳趸人が同時に推薦されていた事

実もわかってみればなんということもない。呉趺人『二十年目睹之怪現狀』の単行本に見える刊行月を訂正することもこれらと同類であるかもしれない。だがいずれも前人が確定できずにいた事柄ばかりだ。それを自分が解決したというところに価値がある。私はそう考える。しかしもっと大きな問題を論じろという声がある。

小さな問題から発展した課題もある。天津日日新聞版『老殘遊記二集』の発掘はいくつかの関連問題を解決することにつながったのではないか。だがここでも事実ではなく大局的視野に立って論じろという声が聞こえる。

では小さなほころびが大きな崩壊につながって驚くことになる事柄ではどうか。それこそ今まで誰も問題があるなどとは思ひもしなかったことだ。論じることを優先し事実の究明をないがしろにした結果、中国の学界が陥った泥沼である。林紓冤罪事件にほかならない。

## 12 林紓冤罪事件

林紓問題を掘り起こすことになったきっかけは、これまた小さいことだった。私は細かなことが気になるたちなのだ。

林紓批判の過程を追うことに決めて関連論文を読んでいた。林紓が書いたある短文が発端である。その文章が林紓批判の根拠のひとつになっている。誰もがその論文を引用して林紓を非難する。しかし私が課題に着手した時は、林の文章そのものを読むことができなかった。初出が不明であるばかりかのちの資料集にも収録されていないのだ。文学革命の「敵」である林紓が書いたものだからそういう扱いなのか。奇妙だといわなくてはならない。

批判の根拠となる論文は読まなくてもいいらしい。あとで実物を探し当てると文章の題名そのものが言われているものとは違う。間違った題名を研究者のほぼ全員が使用していたのだ。実物を読まずに批判している。中国大陸に限らず香港、台湾、日本その他の地域でも同様だ。もっとも当該論文は意外なところに収録されていたことがあとになって判明した。だがそれについて大多数の研究者が指摘していなかったのだから結局は同じことだ。

今だからわかる。小さな事実にこだわらない研究姿勢が林紓問題のような大きな破綻に結びついていた。

林紓についていえば研究者は自分で結論を下すまでもない。彼は文学革命に反対した悪者として長年定着している。それが定説なのだ。だから、そこに破綻があることすら気づかない。

先行論文を写すだけで研究になる。私がそう言っているのではない。張俊才が林紓問題に関係して発言していることだ（「“悠悠百年，自有能辨之者”——重評林紓及五四新旧思潮之争」2005）。くれぐれも誤解のないように。

シェイクスピアとイプセンの作品を林紓が翻訳したことに対して劉半農にはじまり鄭振鐸が決定打を加えた批判が最たるものである。

劉と鄭らの文学革命派は、林紓がシェイクスピアとイプセンの戯曲を小説化して漢訳したと罵った。保守派の代表的文人林紓は戯曲と小説の区別がつかない（区別がつかない論）とあざけるのである。のちの研究者は世界中から集まって林紓を痛罵する列に大喜びして参加した。私はそれを指して「林紓を罵る快樂」という。

参考までに日本の専門家瀬戸博士の説明を引用する。

「林紓はさらに、『ヘンリー四世』などを直接翻訳したが、これらはすべて小説体で訳されており、シェイクスピア作品の翻訳とは認められてはいない」\*4と言いつつ切っている。「シェイクスピア作品の翻訳とは認められてはいない」ということは、林紓が創作したという意味だろうか。よくわからない解説だ。ただし「直接翻訳した」と書いているのだから原作の戯曲を小説体に変えたことを強調しているのは確かだ。日本の専門家瀬戸博士は断言している。ところがそれは正しくない。専門家でさえ間違ふところに定説の強力さを見ることができる。

林訳シェイクスピア、イプセンには、当然ながら底本が存在する。しかしそれは今まで考えられていたシェイクスピア、イプセンの原本ではない。それぞれを小説化したいわば「英文小説化本」があったのだ。シェイクスピアはクイラー＝クーチの、イプセンについてはドレイコット・M・デルの作品である。図式化するならば、原作戯曲→英文小説化本→林訳という順序になる。

鄭振鐸は林訳がもとづいた底本を知らなかった。調べるつもりもなかった。林

紵はクイラー＝クーチ、デルの名前を出していないと言い訳するだろう。だが林訳の『吟辺燕語』があるではないか。該書はラム姉弟の『シェイクスピア物語』を漢訳したものだ。こちらにもラム姉弟の表示はしていない。それと同じことをシェイクスピアの歴史劇、イプセンの戯曲でくり返したにすぎない（探索の詳細は樽本「『林紵冤罪事件簿』ができるまで」を参照のこと）。

錢玄同が王敬軒になりすまし林紵賛美の手紙を捏造する。それに劉半農が答えるかたちでうち合わせ通りに林紵を痛罵する。これが有名な「なれあいの手紙」だ。『新青年』に掲載された。林紵批判を引き継いだのが鄭振鐸である。その流れのなかに林訳シェイクスピア、林訳イプセンがある。

文学革命派は敵を必要としていた。当時、翻訳で著名であった林紵を敵として引っぱり出すために翻訳そのものを問題にした。翻訳で知られている林紵ではあるが、その内容たるや戯曲を小説に変えるほどのデタラメぶりであると批判したのだ。批判するのが目的だから底本をまじめに探索する気はもとからないのである。きわめて政治的な動きであるといわなければならない。林紵批判という結論が最初から決まっていた。結論にあわせて材料を集めた。

林紵は文学革命に大反対したというが、調べてみれば蔡元培に手紙を書いたことと短篇小説を公表しただけだ。書簡の内容は北京大学の教育についての質問にすぎない。また短篇小説は北京大学関係者を皮肉っただけのもの。軍人の徐樹錚に武力で北京大学を抑圧するにしむけたなどはまったくのウワサ、デマである。文学革命派がそういつているだけ。軍が動いた事実は存在しない。

文学革命派は強力な敵を必要とした。彼らは無視されていたからだ。そこで林紵を保守派の代表者に指名し文学革命の反対者代表に仕立て上げたのである。巨大な虚構となって現在まで林紵批判がつづいている。

すでに林紵批判の方針が固まっているのだから事実から掘り起こし再検討する必要はない。もし中国においてそれを実行するとすれば、それは既定の方針に刃向かうことを意味する。そのような研究者はほとんど存在しない（「ほとんど」であることに注目。皆無ではないことを言い添える）。

林紵冤罪事件にほかならない。錢玄同の捏造論文が1918年だからすでに90年が経過した。私は事実を知って驚いたのだ。これはなんだろう。

革命に反対した者という政治的な判定が、文学研究に適応されたという例だ。先に結論があるから個々の噂については検証する必要がない。林紓がいかにも悪辣に文学革命に反対したかを文章で表現することがより重要になる。教科書としての文学史にその例を見ることができる。これは政治的宣伝文であって文学研究ではない。

林紓批判の方針は以前から定められている。私がいくら証拠をあげて林紓は無実の罪をきせられていると主張しても中国の学界は無視するだろう。

結論である。

1、2年の時間のズレは気にしない。作品初版を確認せずに論文を書くことができる。雑誌の発行年などはどうでもいい。盗用問題も作品論には影響をおよぼさないと考えている。研究の対象にすらならない。読まないで非難する。原文で確かめないで引用してすませる。

以上は私が清末小説研究で遭遇した実例のいくつかにすぎない。

似たような事例が重なると私でも気づく。細部にこだわらないというよりも無視する。論じることを特別に重視する。これらは底の部分でなにかを共有しているように思う。

先に結論があってそれに合わせた論文を書いているのではないか。

事実を積み重ねて結論にいたるのではない。自分が独自に到達した結論ではないのだ。逆である。その時々であるべき結論が先に設定されている。どうやら大所高所から見るとというのは「こうあるべきだ」と考える全体の流れを把握するという意味だとわかる。「こうあらねばならない」大局なのだから必ずしも事実とはかぎらない。しかしそれはどうでもいい。当人とは関係のないところで研究するまえから結論が存在しているのだ。細部を無視しても既定の結論にしたがってひたすら論じることが要求される。奇妙だろう。

論文を書く前に結論が決まっているのだから初出がどうの、事実がこうのと調査する必要もない。否定されている文章をわざわざ探し出して読む必然性もないことになる。それは結論にあわせて資料をそろえることにつながる。私が考える研究ではありえない形態だ。

堤はすでに崩れている。

こんなことを知るために私は長年身を削ってきたのか。深く落胆した。大学で現代漢語を学んで論文を書いただけだ。なぜこのような目にあわなければならないのか。不憫でならない。

【注】

- 1) 飯塚朗「解説（老残遊記）」『官場現形記下 老残遊記・続集』平凡社1969.6.5。中国古典文学大系」51。531頁
- 2) 定説というのは、いったん定着してしまうと研究者の思考を束縛する。この定説は誤りだと私が論文に書いたのは1976年のことだった。それから約20年後に刊行された辞典には、やはり「1904年重新在《天津日工<sup>ママ</sup> [日] 新聞》報紙上連載，即初集二十回」（執筆：巖薇青。孫文光主編『中国近代文学大辞典』合肥・黄山書社1995.12。269-270頁）と説明されている。少しがっかりした。
- 3) 大塚秀高「イカロスの翼——再び『官場現形記』の海賊版をめぐる」『中国古典小説研究』第7号2002.3.31。59頁
- 4) 瀬戸宏「中国のシェイクスピア受容略史」『シアターアーツ』11 2000年1号2000.1.31。99頁

## 『繡像小説』問題はどうか論じられているか

『商務印書館研究文献目録』（清末小説研究会2010.6.1 清末小説研究資料叢書13）に収録。『繡像小説』については編者、発行遅延、盗用の問題が存在する。研究者はそれらの問題をどのあたりまで把握しているのかを探る。

李伯元研究から張仕英と王学鈞の著作を検討する。『繡像小説』研究からは王燕と郭浩帆の論文をとりあげる。さらには、文迎霞、汪家熔の論文も視野に入れて評価一覧表を作成した。ただし、2010年までに区切っている。次を参照のこと。「李伯元死後のこと——『繡像小説』発行遅延との関係」本書所収。

商務印書館が発行した小説専門雑誌『繡像小説』をめぐるのは、3件の問題が存在する。編者、発行、盗用だ。

それぞれを簡単に説明することからはじめる。

### 問題の所在

その1——編者問題とは『繡像小説』の主編が李伯元であるかどうかの論争を指す。

編者といっても、中身は主編、編集長である。李伯元だというのが以前からの定説だ。それを否定する人があり世界的規模の論争が



発生した。従来は物的証拠がなかった。定説とはいえ伝聞だったからこそ論争になった。結果的には李伯元が主編であったことが再確認される。だが再確認といってもそれが持つ意味は異なる。

商務印書館が出した1907年の新聞広告に、李伯元を招いて『繡像小説』を主宰してもらったと説明がある。これが決定的な証拠だ。この新聞広告が発見されたのは論争が行なわれた結果である。李伯元が主編であったことには変わりはない。だがそれを証明する資料があるのとないのとは状況がまったく違う。いくら強調してもしすぎではないだろう。

その2——発行問題とは徐々に刊行が遅れていたことをいう。

以前の定説では月2回の発行が守られており主編の李伯元が死去すると同時に『繡像小説』は停刊したことになる。李伯元は光緒三十二（1906）年三月十四日に亡くなった。ゆえに『繡像小説』の停刊も同年同月ということになる。

該誌は、半月刊ではじまったが第13期より刊行年月日を記さなくなる。第72期にも発行についての記載はないのだ。あとは推測にならざるをえない。半月刊が守られたとしたら光緒三十二（1906）年三月十五日が第72期の発行だろう。偶然だが李伯元の死去と一日違いで合致する。このことが李伯元の死去、すなわち該誌の停刊であるとされた理由であるらしい。阿英が断定したから定説になった。しかしあくまでも推測にすぎない。李伯元の死亡と『繡像小説』の停刊はもともと直接の関係はなかった。

新聞、雑誌に掲載された商務印書館の自社広告に注目する。それには『繡像小説』第何期を発行したという告知が順次なされている。これを丹念に追跡すると該誌第72期の刊行は光緒三十二年年末である。新暦で示せば1907年の1月下旬から2月上旬ころになる。定説にくらべて約十ヵ月（閏四月がある）も発行が遅れていた。これが実状だ。以前の定説はくつがえった。

版元の商務印書館にしてみれば、李伯元の死後は別人に主編をまかせればよい。継続して発行することになんの問題もない。李伯元の協力者欧陽鉅源がいる。欧陽を臨時の（あるいは正式の）主編にすれば雑誌は発行できる。事実、刊行は継続されたのである。

その3——盗用問題とは『繡像小説』に掲載された「老残遊記」と「文明小史」



の両作品間に盗用関係があることをいう。

「文明小史」第59回は「老残遊記」第11回から内容を盗用している。1960年代にこの盗用の事実が指摘された。

ここから問題が複雑になる。

この盗用の事実と『繡像小説』の編者問題および発行遅延問題が関係してくる。

「文明小史」第59回を掲載した『繡像小説』第55期は李伯元の死後に発行された。該誌の発行遅延説が出てくる前は「老残遊記」から盗用したのは「文明小史」の著者である李伯元だと説明されていた。しかし死去した李伯元に原稿は執筆できない。李の協力者であった欧陽鉅源が、それまで使用されていた南亭亭長の名前で代作したことになる。つまり李伯元死後に文章を盗用したのは欧陽鉅源であった。

以上の問題3件はすべてが1980年代に提起された。その後、中国の学界では1の編者問題と2の発行遅延問題は取り上げられる。しかし3の盗用問題についてはほとんど黙殺の状態が続いている。現在でもそうである（追記：少しの変化がある。つぎを参照。樽本「李伯元死後のこと——『繡像小説』発行遅延との関係」）。

『繡像小説』をめぐる問題について中国の専門書、特に李伯元研究の専門書はどのように検討しているのか。また一方で小説雑誌を研究対象とした著作はどのように説明しているか。本稿の目的は、『繡像小説』問題に絞ってそれらふたつの側面から記述を追跡するところにある。それぞれの著書は問題が提起されてから長い時間が経過したあとで出版された。資料を収集し十分に考える時間はあっただろう。

## 阿英のばあい

問題の所在を明確にするため定説のもとになった阿英の説明を確認しておきたい。阿英がもつ影響力の強さを認識することになるだろう。

阿英『晚清文藝報刊述略』（上海・古典文学出版社1958.3）から抜粋して翻訳する。

『新小説』が日本で発刊されてのち、これを継いで起こったものに『繡像

小説』がある。半月刊。李伯元主編。光緒癸卯（一九〇三）年五月に創刊され、丙午（一九〇六）年、伯元の逝去によって停刊、全部で72期が発行された。17頁

阿英は李伯元の死去を『繡像小説』停刊の原因にしている。上の説明を見ればあきらかだ。

この文章から約20年前にさかのぼると、阿英はその時因果関係を述べなかった。「繡像小説」は、癸卯（一九〇三）に創刊され丙午（一九〇六）年に停刊した。李伯元主編、半月刊、商務印書館発行」（阿英「清末小説雑誌略」『小説閑談』上海良友図書印刷公司1936.6.10。54頁）と事実を書いていただけ。それでは説明が不足していると考えたのだろうか、のちに記述を上のように少し詳しくした。該誌停刊与李伯元の逝去を因果関係で結びつけた。李伯元の死去が三月だったとは書いていない。しかしそれが原因で停刊したのであれば、その時期は三月ということになる。

『繡像小説』の停刊与李伯元の死去を関係あるものとしたのは阿英が最初ではない。畢樹棠がそう推測している\*1。畢樹棠は「推測」したにすぎないが阿英は「断言」した。のちの研究者のほとんどは阿英の説明を受け入れた。ただし「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係については、畢樹棠、阿英はふたりとも言及していない。

以上を図式化して次のように示す。◎は現在えられている結論に合致している、×は言及がない、××は間違っていることを示す。

阿英 1 編者○ 2 発行×× 3 盗用×

ご注意いただきたい。阿英の「1 編者○」は、定説となったものの「○」である。現在の結論に一致しているという意味の「◎」と区別するために使用した。説明によっては「？」をつけるばあいもある。上の図式は、本稿で取り上げる専門書についても適用する。

申し添えるが『繡像小説』問題に限定して私は評価を下している。本稿で取り

上げるそれぞれの著作全体がそうであるといっているわけではない。誤解のないようにお願いしたい。

## 1 李伯元研究から

李伯元の側から『繡像小説』とのかかわりを追求する著作がある。こちらから検討する。張仕英と王学鈞の著書だ。



### 張仕英のばあい

張仕英『清末小説研究——李伯元の小説を中心に』（日本語。アジア文化総合研究所出版会2009.4.15）である。

発行の日付は示したとおりだ。だが内容は1997年に刊行された私家版がもとになっている。時間からいってその執筆は王学鈞の「李伯元年譜」と同時期である。張仕英の説明を先に見る。

「第三章 上海の新聞、出版界における活躍」のなかに「第六節 李伯元と『繡像小説』」がある。

読み進めて少し落胆したことを思い出す。検討らしきものがなされていなかったからだ。

第3章において『繡像小説』問題はそのまま通過している。従来の定説に従っ

たうえでの記述である。その理由は、第5章の「補記」に書かれた。すこし長い  
が関連部分のみを引用する。

一九八二年以後汪家燊は「關於『繡像小説』一九〇三～一九〇六」（商務印  
書館史資料）之十七、商務印書館総編室印、一九八二年五月）という論文を発表し、  
はじめて『繡像小説』編者問題の議論が引き起こされた。また汪氏の論文に  
対して、樽本照雄は「『繡像小説』編者問題的討論」（『二十世紀中国文学史』  
台湾、学生書局、中華民國八十一年）を発表し、李伯元の死後、『繡像小説』が  
続けて出版されたことを論証し、それを根拠に「『文明小史』の後半部は他  
人によって書かれたものである」と述べた。

さらに、一九九〇年に鄧季方は「『文明小史』四十回非李伯元著作考」  
（『西南師範大学学報』哲学社会科学版、一九九〇年四月二十五日二期）を発表し、  
『文明小史』の二十回以後は他人によって書かれたものであると断言してい  
る。

しかしながら、この問題について多くの学者の議論はいまだ結論に達して  
いない。

本書を執筆するに当たって、筆者は一応従来<sup>ママ</sup>の定説に従って、『文明小史』  
を李伯元の作であると見なして論じたことを附記する。265-266 頁

編者問題にかかわる論争の過程は上の説明の通りではない。もう少し詳細に触  
れられてもいいように思う。だが従来通りの定説によって論じるという方針だか  
ら、詳細にする必要を認めなかったのかもしれない。

また盗用問題についても以下のように述べるだけ（注釈番号は省略した）。

『文明小史』の第五十九回で李伯元は、革命党に関する議論を提起したが、  
その部分の文字は劉鶚（注：劉鉄雲）の『老残遊記』の未発表の第十一回を盗  
用したものなので、中国解放以後に出版された『文明小史』の中からこの部  
分は既に削除されている。254頁

削除したのは阿英である。義和団に関しては肯定する立場からそれを批判する箇所を削除したらしい。しかし作品の本文を勝手に削除する権利が阿英にあるとも思えない。張仕英はそれに言及してもよかったように感じる。

結論としては、以下の図式になる。

張仕英 1 編者○ 2 発行×× 3 盗用？

張仕英の専著は、李伯元を論じて珍しい。だからこそ『繡像小説』問題について詳細な検討があるのではないかと私は期待したのだった。その箇所についてのみ阿英の昔にもどってしまった。とても残念だ。



#### 王学鈞のばあい

王学鈞編著「李伯元年譜」（薛正興主編『李伯元全集』第5巻 南京・江蘇古籍出版社1997.12）である。

『繡像小説』の主編については論争の経過をふまえる。李伯元が主編であったというのが各種資料にもとづいた王学鈞の判断だ（179-180頁）。妥当な結論だと考える。商務印書館の新聞広告が発見される前の著書だから、それへの言及がないのは当然だろう。不足だといっているわけではない。

発行問題に関する王学鈞の説明は、次のようになっている。

劉鶚はかつて1903年に小説「老残遊記」を『繡像小説』に渡して発表した  
が、『繡像小説』第18期まで連載し（『繡像小説』の該期の出版時間は癸卯十  
二月だと書いてあり〔該期《繡像小説》出版時間署癸卯十二月〕それは1904年1月こ  
ろに相当するが、しかし『繡像小説』に書かれた出版時間よりも実際の出版時間は遅  
れていた可能性が高い）、未完のまま中止となった。202頁

発行遅延の可能性が高いとは説明している。だが奇妙である。『繡像小説』は  
第13期より発行年月日を記載しなくなった。だからその第18期に「癸卯十二月  
だと書いてあ」るはずがない。

刊年記載に関する王学鈞の勘違いは、別の箇所にも見える。

《繡像小説》は「老残遊記」第11回の「黄龍子」が「北拳南革」を議論  
する部分を削除した。しかし李伯元の書いた「文明小史」第59回（『繡像小  
説』第55期掲載。乙巳七月すなわち1905年7月<sup>マ</sup>ころと書いてある〔署乙巳七月〕）  
のなかで鄒紹衍が沖天砲にむかって議論をする「北拳南革」の文章は「老残  
遊記」の削除された文章と同じである。203頁

こう書いたあとは盗用問題に説明が移っていく。

『繡像小説』第55期に「乙巳七月」と書いてあるというのも王学鈞の誤解だ。  
刊行年月日の記載はもとからないのである。もう1ヵ所、該誌停刊を説明する部  
分でも同じ間違いをおかしている。

本月（三月）、李伯元の逝去により『繡像小説』は停刊し第72期までがで  
た。第72期には丙午三月と書かれている〔署丙午三月〕。しかし、書かれた  
日付は必ずしも『繡像小説』停刊の本当の日付とはかぎらない。事実は遅れ  
ていた可能性がある。216頁

重要だから何度でもいう。『繡像小説』第72期に発行年月日は書かれていない。

王学鈞の勘違いである。間違いは誰にでもある。ただ彼が3度までもなぜ書き間違ったのか理由がわからない。思い込みであろうか。

王学鈞は書かれていない刊行年月日を基準にする。ゆえにややもすると発行が遅延していた事実を忘れてしまう。

王学鈞の勘違いは「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題について説明するとき大きく影響している。

劉鉄雲は没書にされた「老残遊記」第11回をあらためて書き直す必要があった。それを行なった日時は乙巳十月初三日（1905.10.30）である。劉鉄雲日記の記述からそれがわかっている。この事実をふまえて王学鈞は次のように説明する。

樽本照雄のこの推測（注：劉鉄雲は1905年10月に初集第11回の原稿を復元して書いた）は採用することができる。また推測された時間は「誰が誰を盗用したのか」という問題を判断するのに直接の影響をおよぼす。すなわち劉鶚が補筆した「老残遊記」初集第11回の原稿が完成した時間は「文明小史」第59回の発表時間よりも遅いから、原稿を完成する前に「文明小史」第59回を読んだ可能性がある。このことが問題の複雑性を増加させる。204頁

この部分だけを見ると、王学鈞は『繡像小説』の発行遅延を認めていないことになりかねない。「文明小史」第59回は李伯元の死後に発表されたという事実を王学鈞は見失ってしまった。定説通りに半月刊が守られて刊行されていたと考えている。

以上をまとめる。『繡像小説』発行遅延説に関する王学鈞の考えは、遅延の可能性に触れてはいても確信にはいたっていないということになる。私は王学鈞のその判断について疑問符「？」をつける。

王学鈞は盗用問題について紙幅をとって説明する（203-207頁）。『繡像小説』の主編が李伯元であることを前提にすれば当然、李伯元が劉鉄雲を盗用したことになるという。その逆だとするならば李伯元は『繡像小説』の主編ではないことになる。だが多くの証拠から李伯元は主編だった。劉鉄雲の盗用説は成立しないと彼は断言する。

そうであっても問題は残る。すなわち李伯元が劉鉄雲の原稿を没書にしたにもかかわらず、それからあらためて盗用した理由が説明できない。

王学鈞がこの盗用問題を切り抜けるために提唱するのは概念の変更だ。「盗用 [抄襲]」ではなく「採用 [採取]」だという。「今の人がいう「盗用 [抄襲]」ではなく、彼（李伯元）にしてみれば「採用 [採取]」だったかもしれない」（206頁）。当時の新聞人であった李伯元にとってニュースから話題を採用するのは普通のことだったといたいらしい。これは苦しい説明だ。だいいち劉鉄雲が書いたのは小説の原稿であってニュース記事ではない。ましてやその原稿は李伯元がボツにしたものだ。他人の未発表原稿は新聞紙上に公表されたニュースとは別物である。

説得力がないと王学鈞は自分でも気づいたのか、次のように補足説明する。

たとえば、包天笑がいうように「文明小史」には確実に欧陽鉅源の筆が加わっていたというのであれば、この文章の箇所は李伯元が書いたのではなく欧陽鉅源の筆になるもので、それで「理解できない」ことはない。李伯元は「老残遊記」の原稿を没書にし欧陽鉅源にはそれを告げなかった。欧陽鉅源はうまく書けていると感じ、またそれが李伯元の観点と基本的に一致しているから採用した。この可能性も絶無ではない。206頁

王学鈞はいろいろな可能性をさぐっている。その点は評価すべきだ。ただし上の部分を見るにつけ、とりわけ欧陽鉅源を出しているにもかかわらず結果としては惜しいと私は考える。なにが惜しいのか。これに『繡像小説』発行遅延の事実すなわち李伯元の死去後も雑誌の発行が継続されていたことを考えあわせると正解に到達できたはずなのだ。それができていない。「老残遊記」第11回原稿から盗用した「文明小史」第59回が『繡像小説』に掲載された該誌第55期は李伯元の死後に刊行された。原稿を書くはずのない李伯元にかわる人物としては欧陽鉅源を除いては存在しないのだ。

王学鈞は「この可能性も絶無ではない」と書いているが、絶無どころかこれこそが真相なのである。王学鈞は『繡像小説』の発行が遅延していたことを探求の



途中で忘れてしまったらしい。ゆえに中途半端な結論になったと思われる。これについても私の評価は疑問符つきとせざるをえない。

結論としては、以下の図式になる。

王学鈞 1 編者◎ 2 発行? 3 盗用◎?

## 2 『繡像小説』研究から

雑誌研究の専門書2冊をとりあげて検討する。王燕と郭浩帆の著作だ。



### 王燕のばあい

王燕『晚清小説期刊史論』（長春・吉林人民出版社2002.11）である。

「第五章 勃興期小説期刊（下）——《繡像小説》与《新新小説》」において『繡像小説』を説明する。

主編が李伯元であることについては論争の経過をふまえている（243-244頁）。重要資料である商務印書館の新聞広告を挙げているのでわかる。

ところが王燕は疑問を提出せずにはいられない。李伯元と同時代人の吳趸人、周桂笙らの証言には李が『繡像小説』の主編だったとは書いていない。これはどうにも理解できないと首をひねっている。何人かの研究者がそうであって王燕の

みが例外ではない。

王燕が疑問として特に取り出すのは、呉（胥人）沃堯「李伯元小伝」（『月月小説』第1年第3号光緒三十二年十一月望日1906.12.30）だ。たしかに、『繡像小説』の名前はでてこない。

だが李伯元の死から七ヵ月後に書かれたこの短文をよく読めば、重要な箇所があることに気づくはずだ。

李伯元の著作「官場現形記」「中国現在記」「文明小史」「活地獄」などが読者から歓迎されたことを述べたあと、呉胥人は次のように書いている。

町の商人のなかには、他人の書いた小説を君の名前で出版するものさえいる。社会で重要視されていることが想像できる〔坊賈甚有以他人所撰之小説、仮君名以出版者、其見重於社会可想矣〕

一読して李伯元の作品を高く評価しているだけだと思われるかもしれない。

だが再読すれば呉胥人の真意がわかる。つまり李伯元の名前、すなわち南亭亭長の名前を使って出版する商売人がいると呉胥人は批判しているのだ。これは何を意味するのか。

「官場現形記」裁判を思い浮かべる人がいるだろう。

1904年のことだ。日本知新社が上海において活版洋装本『官場現形記』を発売した。新聞に広告を掲載して大いに宣伝した。著者は「日本吉田太郎」である。李伯元はただちに自作の海賊版であると裁判所に訴えた。日本が前面に出ている新聞広告だ。最初は上海の日本領事館がでてきた。ところが途中で姿を消す。なぜならば中国人の席粹甫が日本人を装って海賊版を制作販売したことが判明したからだ。席粹甫は逮捕され首かせ見せしめ三日の刑に処せられた\*2。

これが有名な「官場現形記」裁判である。ただし呉胥人が「李伯元小伝」において批判しているのはこのことではない。

日本人の吉田太郎が「官場現形記」を書いたことにしてある。呉胥人は「君の名前で出版する」と書いているのだから南亭亭長の名前でなければならない。吉田太郎の海賊版事件とは別物だとわかる。ではなにか。

くりかえすまでもなく呉趼人の「李伯元小伝」は李の死後に書かれた追悼文だ。「李伯元小伝」が掲載された『月月小説』が市場に出たのは光緒三十二年十一月のことだった。その当時、『繡像小説』は同じ上海において継続して刊行されていた。李伯元はすでに死去しているにもかかわらず南亭亭長名の作品「文明小史」「活地獄」はその『繡像小説』に掲載されている。呉趼人はこのことを批判したと理解できる。またそれまで南亭亭長の名前だった「活地獄」が第40回（第70期掲載）になって繭叟すなわち呉趼人に著者名を変更したのもこれと無関係ではないだろう。該誌第70期の刊行年月は呉趼人の「李伯元小伝」が掲載された『月月小説』の刊行とほぼ一致すると推測できるからだ。

私は過去に指摘した。

「李伯元の死後も彼の名を利用している『繡像小説』と金港堂、ひいては商務印書館に対する抗議でなくて何であろう」<sup>\*3</sup>、「李伯元の死後も彼の名前を利用している『繡像小説』と金港堂、ひいては商務印書館への抗議であると読むべきものだ」<sup>\*4</sup>、「文中の「町の商人」とは、商務印書館の人間を指していると考えられる。李伯元の死後も、あたかも李伯元が執筆しているかのように筆名を使用した作品を発表しつづけていることを非難したのである。李伯元の死亡の事実と彼の筆名での作品の関係を知らないければ書けない内容だといえよう」<sup>\*5</sup>。

私が金港堂の名前を出したのは当時、商務印書館と金港堂は合弁会社だったからだ。呉趼人は日本人の資本が入っていることを遠回しに批判したと考えられる。

『繡像小説』の李伯元主編説について王燕は疑問をめぐいさることができなかった。呉趼人の「李伯元小伝」にこそその秘密を解く鍵があったのだが、それに気がつかないままに終わった。そう書くのは王燕が同じ内容の「《繡像小説》概説」（『繡像小説』全10冊 北京図書館出版社2006.4）を後に発表しているからだ。この部分についての私の評価は疑問符をつけて「◎？」ということになる。

次は発行遅延問題だ。王燕は、こう説明する。

『繡像小説』は光緒29年5月初1日（1903年5月27日）上海で創刊された。半月刊、李伯元が主編し商務印書館が発行した。前後全部で72期を刊行し主編の李伯元が死去したため停刊した。233頁

停刊の箇所に注がつけてある。停刊の時期について阿英の1906年4月、樽本の1906年年末および張純の1907年9月の3種類があると書く。

王燕は3説を併記するだけで自分の見解を示していない。少なくともこの注釈ではそのように読める。だが王の説明は書きながらブレてくる。

該誌（『繡像小説』）には遅延の現象があるにしても、しかし清末のその他の刊行物と比較してその程度ははなはだ軽かった。264頁

ここでは王燕は発行遅延説を採用している。しかし過小評価だ。だいいち予定日より「約十ヵ月」の遅れがどうして「その程度ははなはだ軽かった」ということになるのか。発行が遅れていても些細なものだったという根拠のない王燕の考えは次の説明であきらかになる。

李伯元が1906年4月に死去した後ほどなく『繡像小説』は停刊を公表した。264頁

商務印書館が広告で『繡像小説』の停刊を公表するのは光緒三十六年の年末だ。新暦でいえば1907年1月下旬から2月上旬である。王燕の書く「ほどなく[不久]」の時間が不鮮明だ。李伯元の死去が新暦で1906年4月だから「ほどなく」ならばせいぜい5月か6月くらいだろう。実際は新暦でいうと年の改まった1907年初である。どうして「ほどなく」ということになるのか。

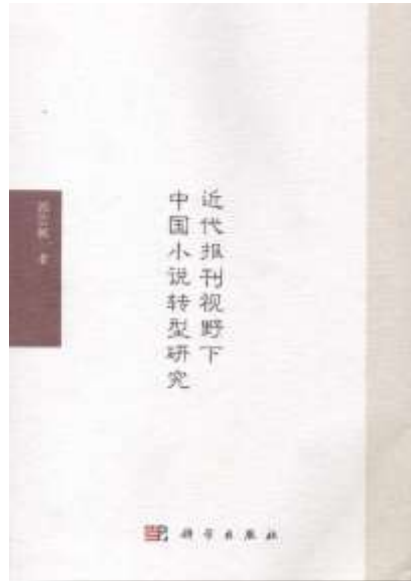
「文明小史」と「老残遊記」の盗用関係についてはその事実があることに触れるのみ（428頁）。考察は行なわれていない。

以上を図式化すると、疑問符をつけた評価になる。

王燕 1 編者◎？ 2 発行×× 3 盗用？

王燕には十分な材料と時間があつた。だが、『繡像小説』問題についての王燕

の検討は残念ながら不十分なものだとわがざるをえない。



#### 郭浩帆のばあい

郭浩帆『中国近代四大小説雑誌研究』（北京・当代中国出版社2003.6）である。

（追記：次が刊行された。郭浩帆『近代報刊視野下中国小説轉型研究』北京・科学出版社2018.4）

「第三章 《繡像小説》」を見る。

編者問題については過去の論争の経過と資料の提出について丹念に追跡し説明している。確実な証拠として商務印書館の新聞広告を挙げるのも適切である。ところが郭浩帆までもが、友人、特に吳趼人の「李伯元小伝」において『繡像小説』への言及がないという（138-139頁）。郭も吳趼人の商務印書館批判には気づかなかったとみえる。残念なことだった。ゆえにこの部分に対しての評価は、疑問符付の「◎？」ということになる。

発行遅延問題についてはどうか。

郭浩帆は『繡像小説』第13期から刊行月日を表示しなくなる事実を指摘する。その重要性を認識しているとわかる。そうして次のように述べる。

半月刊という発行速度から計算すると、1903年5月（創刊）から李伯元が1906年4月に死去するまでちょうど36ヵ月あり、まさに全72期を刊行する

時間に相当するから、これにより『繡像小説』の終刊は1906年4月であるという結論は、基本的にその刊行時間を推測して出てきたものであり確実な根拠はないのである。127頁

郭浩帆は阿英が行なった説明からようやく自由になった。事実をふまれば以上のような結論になるのは必然である。

では論争の過程を把握し各種資料を検討した郭浩帆の考えはどうか。停刊の時期は新暦1907年初であろう（133頁）となる。

以上のように郭浩帆の記述は多くの資料を利用して緻密な論理で組み立てられている。残る盗用問題についても同様の検討がされているのではないかと思った。ところが簡単な言及があるだけなのだ。

『繡像小説』研究についていえば、その刊行時期と終刊の時間を明確にすることはまことに非常に重要なことである。多年にわたって論争されている劉鶚と李伯元の誰が誰を盗用したのか、南亭亭長ははたして李伯元ひとりの筆名であるか否か、『繡像小説』の編集グループなどの問題は、この問題を徹底的に解決したあとに順調に解決できる。ゆえに私たちが引き続き力を入れて考える価値が大いにあるのだ。134-135頁

郭浩帆は『繡像小説』の発行が遅延していたことを明確に認識しそう結論した。新暦1907年初だと書いてもいる。李伯元が死去したのは新暦1906年4月なのだ。あきらかに李伯元の死後も『繡像小説』は継続して発行されている。ここまで明確になっていると私は考えるが郭浩帆にとってはまだ不十分であるらしい。上に見る通り問題の存在が指摘されるだけに終わった。私は意外なことだと思う。

郭浩帆の『繡像小説』問題に関する部分について、私の判定はつぎのようになる。

郭浩帆 1 編者◎？ 2 発行◎ 3 盗用？

ほぼ同じ時期に刊行された王燕と郭浩帆の専門書である。『繡像小説』問題についてふたりの結論は似た部分がある。だが発行遅延問題については意見が分かれてしまった。その原因はなにか。

私が両書の関係部分を読んで思うのは、ひとつは情報量の違いだ。注釈あるいは参考書目を見ると郭浩帆のほうが外国の研究文献を含んで論文量が勝っている。

しかし情報量が多いからすべてがうまくいくとは限らない。その資料をどう解釈するか、結局のところ各研究者の力量にかかってくる。別のことばで言い直せば先行論文である阿英の説明からどれだけ自由であるかどうか、これが決め手になる。その点に関して郭浩帆の方が王燕よりも解放度が比較的高かったといえる。

以下の2論文については、すでに論じたことがある\*6。

文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』第38卷第3期2006.5.15

汪家熔『中国出版通史』7清代卷（下）北京・中国書籍出版社2008.12

ほかの論著と一緒にして判定だけを一覧表にする。

#### 『繡像小説』問題判定表

	1 編者	2 発行	3 盗用
阿英	○	××	×
張仕英	○	××	？
王学鈞	◎	？	◎？
王燕	◎？	××	？
郭浩帆	◎？	◎	？
文迎霞	◎	◎	×
汪家熔	××	◎	×

『繡像小説』の編者、発行、盗用の問題3件について、各研究者の結論一覧表をながめる。

◎印を見ると、編者と発行の問題に関しては時間が経過するにつれて賛同者が増えているようだ。ただし盗用問題は時間に関係なく王学鈞という例外を除いては無視される傾向にあるとあっていいだろう。

編者問題については確実な資料が提出されている。それを疑問視する汪家熔の説明はやはり奇妙だといわざるをえない。実在する決定的な証拠資料を否認するのは研究者としていかなものかと思う。

研究上の意見の相違はどこにも存在する。否認するのはかまわない。だが『繡像小説』の主編は李伯元ではないという証拠資料を汪家熔は提出しなければならない。証拠もなしに李伯元は主編ではなかったと主張するだけでは問題は解決しないのだ。

『繡像小説』の発行が遅延しているという事実はようやく認められてきた。ずいぶん早くから資料にもとづいて指摘したことが研究者の共通認識になったといえる。（追記：発行遅延の詳細な状況は次の年表も参照のこと。陳大康『中国近代小説編年史』全6冊 北京・人民文学出版社2014.1）

この発行遅延説と「老残遊記」および「文明小史」の盗用関係は密接にむすびついている。李伯元の生前から一部語句の盗用（無断借用といってもいい）はあった。しかし「北拳南革」部分の大幅な盗用は李伯元の死後に発生している。この事実に気づかなければ『繡像小説』問題は理解できない。この点について上の一覧表を見てももらえれば、考察の深さからいって王学鈞が飛び抜けている。あとの研究者が言及しない、あるいは説明しても最終判断を保留しているのは普通について理解しにくい。

#### 【注】

- 1) 畢樹棠「繡像小説」『文学』第5巻第1号1935.7.1。270頁。初出では李伯元の卒年について「光緒三十三<sup>ママ</sup>[二]年」と誤植がある。魏紹昌は注釈なく修正している。『李伯元研究資料』1980に収録、462頁
- 2) 樽本「官場現形記 裁判の真相——日本を装った海賊版」『清末小説から』第90号2008.7.1。『清末小説二談』所収。



- 3) 樽本「『繡像小説』の刊行時期」『中国文芸研究会会報』第55号1985.9.30。『清末小説論集』所収
- 4) 樽本「南亭亭長の正体——『繡像小説』編者論争から始まる」『清末小説』第14号1991.12.1。『清末小説探索』所収
- 5) 樽本「李伯元は死後も『繡像小説』を編集したか」『清末小説から』第64号2002.1.1。『清末小説叢考』所収
- 6) 樽本「『繡像小説』研究の現在」『清末小説から』第89号2008.4.1。樽本「『繡像小説』問題」『清末小説から』第96号2010.1.1。『清末小説二談』所収。

## 李伯元死後のこと

### —『繡像小説』発行遅延との関係

『清末小説から』第128、129号（2018.1.1、4.1）に掲載。『繡像小説』発行遅延説は1985年に張純が提出した。樽本がそれに呼応して同年に論文を発表している。新聞広告を資料に使うって該誌停刊はそれまで考えられていた光緒三十二年三月ではなく同年年末だと結論した。同じ方法で同じ結論に到達した中国の研究者が論文を発表したのはそれから約20年後の21世紀になってからだ。なぜそれほどの時間差が生じたのか。それにしても『繡像小説』発行遅延を証明してはいるが主編である李伯元の死去とその後の刊行継続の関係を考えないのは不可解というほかない。作品の著者問題がある。李伯元死後も「文明小史」ほかの作品は掲載され続けている。その作者は誰かという問題だ。多くの中国人研究者が無視をしているなかで、劉霞が『繡像小説』発行遅延説を認定し「文明小史」の著者問題を取りあげたのは当然であるとはいえ珍しい。『繡像小説』刊行一覧（部分）を収録。

李伯元（宝嘉）が主編する小説専門雑誌『繡像小説』（商務印書館発行）は、月2回の刊行を予定していた。しかし実際には早い段階から定期を維持できなくなる。発行は徐々に遅延していった。第13期より発行年月日の表示が消失した理由だろう。終刊の第72期は考えられていた光緒三十二（1906）年三月十五日から大幅に遅れた。同年十二月末の発行である。三月から数えれば刊行は約十ヵ月（閏四月を含む）も遅延した。新聞雑誌に掲載された出版広告に基づいて私がそう指摘したのは1985年のことだ（後述。本稿において雑誌発行年月は基本的に旧暦を使用する）。

30年以上が経過している。その間、各種新聞の発行広告を調査した。発表された関連論文を読み資料を集め記録の精度を高めると上記の結論はより強固なものになる。

『繡像小説』の刊行について1985年以前に流布していた間違っただ説明を復習することからはじめる。

## 1 阿英の断定

最初に登場するのは阿英だ。小説雑誌群は清朝末期に突然出現した。空前の現象だといえる。阿英はそれに早くから注目する先駆的研究者のひとりだった。学界の権威とされる理由のひとつである。

阿英の説明を引用する。簡単な記述だ。翻訳する必要はないと思う（傍線省略）。

[阿英]「繡像小説」刊于癸卯（一九〇三），丙午（一九〇六）停刊，李伯元主編，半月刊，商務発行。線装本，逐回繡像，多名著。（「清末文藝雑誌」『太白』第2巻第10期 1935／のち「清末小説雑誌略」『小説閑談』1936所収、54頁）

『繡像小説』は上海の商務印書館が刊行する活版印刷の線装本だ。中国最初の小説専門雑誌が日本横浜で出版された活版印刷の『新小説』だった。全24冊を刊行して停刊する。ページ数の関係で単純比較するのはむづかしいが、冊数だけを見れば『繡像小説』は全72冊を出している。当時の小説専門雑誌として号数は最多だ。

阿英はこの時点で終刊（停刊）が丙午（1906年）だといっているにすぎない。ただしなぜ丙午であるかの根拠を示さない。雑誌を見たことがない人ならば、阿英が断言しているから雑誌に丙午という記載があると思うだろう。だが第72号には前述のとおり刊年は印刷されていない。

もうひとりの研究者畢樹棠は時間に幅をもたせた。「停刊の年月は不明。たぶん光緒三十二年から三十三年の間だろう [停刊年月不明、約在光緒三十二年之間]」（「繡像小説」『文学』第5巻第2号 1935／魏紹昌は停刊時間についてのこの重要

部分を改竄して『李伯元研究資料』1980に収録、462頁）。

『繡像小説』第72期の発行年月については、畢樹棠の説明のほうが阿英よりも適切だといえる。終刊が丙午（1906年）だと確認できる資料が当時は見つからなかったからだ。

のちに阿英は丙午から時間をさらに絞り込む。李伯元の死去と関連づけたのはそれからほぼ20年後である。

阿英が一步踏み込んだというのはこうだ。李伯元の死去によって『繡像小説』は停刊した。

〔阿英〕因伯元逝世休刊，共行七十二期。（『晚清文学期刊述略』『文藝報』1957年  
第28号／のち『晚清文藝報刊述略』1958所収、17頁）

これが阿英による断定だ。李伯元死去と『繡像小説』停刊を結びつけて最初に断言したのは阿英ということになる。ただし両者がなぜつながるのか阿英は理由を説明しなかった。

その思考過程を私なりに推測すると次のようになる。

李伯元は光緒三十二年三月十四日に死去した（事実）。『繡像小説』が半月刊を守っていたならば第72期の刊行はまさに光緒三十二年三月十五日となる（仮説）。李伯元死去と一日しか違わない。この時間的一致はとても偶然には見えない。だからこそ阿英は「李伯元の死去により休刊した」（仮説）と断定したのだろう。

研究者は誰も阿英の説明（仮説）に対して異論を唱えなかった。学界の権威である阿英の説明を疑う理由がない。出版を証明する証拠資料があるとも思わなかったからだ。引用に引用を重ね阿英説は学界の定説となった。

重要なのは李伯元の死亡と『繡像小説』の停刊を結びつける根拠を阿英は持っていなかった点である。証拠がないにもかかわらず断言した。

1985年に私は資料を提出して雑誌停刊は阿英のいう光緒三十二年三月ではなく同年年末だと指摘した。結果として阿英説が誤りであることを証明したことになる（経緯については後述）。新聞雑誌に掲載された『繡像小説』刊行広告が発行

遅延を裏付けている。調べていけば商務印書館自身が発行遅延を認め新聞に謝罪広告を掲載した事実が見つかる。それらを総合すれば結局のところ阿英の断言には根拠がなかった。

小説雑誌が記載どおりの年月に刊行されるとは限らない。現代でも表示の1ヵ月前に出版されるなど普通のことだ。

『繡像小説』についても単に発行が遅れただけだと研究者は考えるらしい。重要な問題が潜んでいるにもかかわらず理解できていない。反応が鈍い理由だろう。

『繡像小説』のばあいはその事情が基本的にほかと異なる。ただの発行遅延におさまらない問題を抱えている。簡単に紹介しよう。

刊行年月日が主編李伯元の死去と関係する。発行遅延は該誌に連載していた李伯元（筆名は南亭亭長）の作品に影響を及ぼす。著者問題だ。これに別の作品との盗用問題もからんでくる。実際は複雑なのだ。ただの発行遅延とはまるで違う。従来からそのように指摘し続けている。研究者の反応がないだけ。これが現実だ。

21世紀になって中国の研究者もこの発行遅延という点についてだけはその事実があることは認めるまでに変化した。従来は無視していたから大きな進歩だ。ただし発行遅延の事実を確認しただけで以前から提出されている問題については独自の意見がない。なぜそうなのか意味が不明だ。

## 2 問題の所在と研究者の反応

問題とは、李伯元死後に出現している作品の著者にかかわる（本稿では李伯元生前の『繡像小説』主編問題は取りあげない）。

李伯元の死後にも『繡像小説』は刊行されていた。ならばそれに掲載された南亭亭長（＝李伯元と考えられてきた）の署名がある「文明小史」ほかの作品は誰が書いたのか。死者は原稿を作らない。雑誌の発行遅延は南亭亭長という筆名を使用する人物が李伯元だけではないことを示している。これがすでに提出されている問題のなかのひとつである。

『繡像小説』発行遅延を検証するいくつかの論文を読んでも納得がいかないのが正直なところだ。長年にわたり南亭亭長問題を提起しつづけているが、中国の

研究者はなぜこれほど無反応無自覚なのかと思う。「発行遅延がわかった時点で思考が完全に停止している。李伯元の死去がその発行継続途中で発生している事実とその影響について考えていない」（『清末小説二談』2017年。660頁）と私は書いた。問題を問題だと感じない理由はなんだろうか。

具体的な名前を出す。文迎霞（2006）、陳大康（2002、2010、2014）、王文君（2014、2016）らの文章だ\*1。

『繡像小説』発行遅延説は1985年に出現した。中国の張純が提起し私も何度か問題にしている。ようやく公表された比較的詳しい文章が2006年の文迎霞論文だ。反応を示した中国人研究者の論文であっても日本で発表されものはここには含めていない\*2。約20年間という研究時間差が生じている。どうしてそうなったのか。

広い中国には多数の研究者がいる。論ずべき膨大な課題がある。だが清末小説研究の分野はもともと寒々としていた。興味を持つ研究者は少ない。話題にならないのは理解できる。また『繡像小説』は雑誌だから出版研究に分類される傾向がある。1986年に『繡像小説』の主編が李伯元であるかないかについて特集を組んだのは『出版史料』誌だった。視野を広げれば作品とその掲載雑誌という関連で結びついているのではないか。そこを見れば文学研究者の関心を引かなかったのは不可解といえる。

中国の学界では作品について立論することが重視される。だが他人の代作が混在している作品をひとりの著作として論じることはできない。作品研究の基礎である。『繡像小説』発行遅延説はその根本のところ立ちだかっている。その重大問題をなぜ無視できるのだろうか。だから不思議だといっている。

とりあえず発行遅延問題があることを中国学界が認識したところから以下に紹介する。

### 文迎霞のばあい

文迎霞は新聞広告を資料に使用して次のような結論をくだした。

[文迎霞36頁] 光緒三十二年三月、『新聞報』に掲載された刊行広告は第53、

54期だけだった。全72期が刊行されたという広告は同年十二月（1907年1月）によろやく出現したのだ。ゆえに1906年4月に停刊したという説明は成立しない。

光緒三十二年三月份，在《新聞報》上刊登的還只是第五十三、五十四期的雜誌刊行廣告，全部七十二期出齊的廣告到該年十二月（1907年1月）才出現，因此，1906年4月停刊的説法是不能成立的。

文迎霞が書いている「1906年4月」は新曆だ。旧曆「光緒三十二年三月」を大ざっぱに置き換えたもの。「1907年1月」も全部が新曆だ。また「1月」だけでは不正確。同年旧曆十二月は新曆の2月12日まで含むからである。

清朝末年まで中国社会は旧曆を使用していた。わざわざ説明するまでもないだろう。三月とは李伯元の死去をも指す。『繡像小説』が第72期を出して停刊したとされていた三月だ。その三月の新聞広告には『繡像小説』第53、54期しか見えない。文迎霞はここで三月停刊という阿英説を否定した。

はるか以前に結論は得られている。文迎霞が追跡調査して発行遅延を確認したというのであれば意味もあるだろう。しかし李伯元死後にも『繡像小説』が継続刊行されていたという事実をどう考えるか。これについては意見表明がない。問題のひとつはすでに提出してある。南亭亭長「文明小史」が李伯元死後にも発表されているから、南亭亭長＝李伯元という従来の説明ではおさまらない。それをどう考えるか。文迎霞論文にはあるべき思考がうかがわれないので私は落胆する。

### 陳大康のばあい

陳大康は最初から矛盾する説明をしている。文献を無断借用しただけで内容を検討せずに配置したからそうなったようだ。その説明も昔と今のふたつにわかれる。

昔とは陳大康が阿英説を疑わず従来どおりの説明をしていた2002年を指す。今とはすなわち2014年、新聞広告を資料に使用した結果に発行遅延説を表明したことをいう。阿英説を信じて間違っていた過去と阿英説から抜け出しかけてやはり部分的に誤る現在のふたつを対照してみると興味深い。

先に過去の説明を見る。

陳大康『中国近代小説編年』（2002。注を参照）の155頁に李伯元が死去したと記述する。

[編年155]（光緒三十二年三月）十四日（4月7日）李宝嘉卒（1867-1906）。

この記述は正しい。基本的事実である。説明しておくとして陳大康の記述順序は月日の明確な事実は前に、日にち不明の事実は後ろに配置するという編集方針だ。

問題になるのは次の部分である。同じページの日にち不詳部分にまとめて「《繡像小説》至此停刊」と説明する。『繡像小説』第72期は刊年の記載がない。2002年当時、陳大康は阿英の断言どおりに三月十四日の李伯元死去により雑誌が停刊したという仮説が正しいと信じている。だから三月の項目に停刊を配置した。

その時の陳大康は『繡像小説』発行遅延説など眼中にはなかった。1980年代から発行遅延が問題提起されていることを知っていたとすれば無視した（後述）。

李伯元は「活地獄」も連載している。伯元が死亡する直前（と考えられていた）の第40-42回（第70-71期）は繭叟（吳趸人、沃堯）が、第43回（第72期）は茂苑惜秋生（歐陽鉅源）が続作した。他人に執筆をまかせるほど李伯元の病気が重くなっていたと陳大康は考えた。光緒三十二年二月の日にち不詳部分において次のように説明している。

[編年153] 第70、71号に「活地獄」第40-42回が掲載された。該作品はもと李宝嘉の著作であるが、彼は病気が重くなったため執筆することができず吳沃堯（署名は繭叟）が執筆した。

第七十至七十一号刊出《活地獄》第四十至四十二回，此作原系李宝嘉撰，因病劇不能執筆，由吳沃堯撰，署名“繭叟”。

李伯元は病気が重くなったため執筆することができなくなった。それで吳趸人に続作を引き継いでもらった。つまり李伯元は生前に自分の判断で継続執筆を他人に任せたと解釈だ。これが陳大康を含む多くの研究者が行ってきた従来



からの一般的な説明である。その基本には李伯元の死去と『繡像小説』の停刊を結びつけた阿英の断定があるのはいうまでもない。

これだけなら単に陳大康は阿英説を継承していた、で終わる。一応の説明にはなる。

ところが、上の説明とは異なることを陳大康自身が自著のそれより前の部分に書いているから話が混乱する。

[編年100] 李宝嘉が病気で死去したため（注：活地獄）第40-42回は繭叟（呉沃堯）が続作し70、71期に掲載された。茂苑惜秋生（欧陽鉅源）は第43回を続作し『繡像小説』終刊の第72期に掲載されたが未完である。

因李宝嘉患病故世，第四十至四十二回由繭叟（呉沃堯）続作，載於七十、七十一期，茂苑惜秋生（欧陽鉅源）続作第四十三回，載《繡像小説》終刊之第七十二期，仍未完。

ここでは呉趼人と欧陽鉅源が続作したのは李伯元の死後だとする。同一書籍のなかで一方が死後で別の箇所では生前の作品執筆継続だ。陳大康の記述は前後で矛盾している。

この時、陳大康は『繡像小説』発行遅延説を知らないはずだ。参考文献の明示がないからそう見える。ゆえに李伯元が死去して『繡像小説』は停刊したと信じている。停刊した『繡像小説』には呉趼人、欧陽鉅源が続作した「活地獄」が掲載された。だから李伯元が活着しているうちに他人が代筆したというのは理解できる。その一方で、呉趼人、欧陽鉅源らによる続作は李伯元の死後だと説明してはつじつまが合わない。陳大康は立論の整合性を考慮しないのだろうか。不思議な感覚だ。

陳大康が示したこの明らかに矛盾する記述には「典拠」があるといえ意外だろうか。

王学鈞「李伯元年譜」（1997）<sup>\*3</sup>である。

王学鈞は発表された『繡像小説』発行遅延関係論文を丹念に調査収集した。これには張純と樽本の細かな文章も含む。「李伯元研究資料篇目索引」に列挙して

いるからわかる。『繡像小説』発行遅延説があることも王学鈞は十分に承知している。ただし承知していることとそれに賛成することは別だ。

発行遅延説について王学鈞はなぜだか完全には肯定していない。阿英説を全面的に否定することには抵抗を感じたらしい。無理もない。学界の権威である阿英が間違っているなどとは普通の研究者は想像すらしないだろう。ましてや最初に問題提起したのが張純という新進気鋭の人物だ。加えて賛同するのが外国人の樽本である。中国人研究者が率直に興味を示さないのもわかる気がする。

王学鈞は発行遅延説が提起されていることを承知している。だがあくまでも可能性があるというにとどめる。もしかしたら発行が遅延していたかもしれないと説明する。言ってみれば中途半端なままに終始した。その典型的な説明が次の箇所だ。

発行遅延説を受け入れたような、そうでないような、あいまいに記述した部分を示す。

[王学鈞216頁] 李伯元が病気になり亡くなったためその長篇小説「活地獄」は第39回で中断した（『繡像小説』第69期丙午二月，1906年3月）。繭叟すなわち吳趸人が第40-42回を続作し（『繡像小説』第70-71期連載）、さらに茂苑惜秋生（歐陽鉅源）が第43回を続作した（『繡像小説』第72期丙午三月，1906年4月）。全43回が成ったが完成していない。

因李伯元患病、病故，其長篇小説《活地獄》写至第三十九回中断（載《繡像小説》第69期，丙午二月，1906年3月）。由繭叟即吳趸人続写了第四十至第四十二回（連載於《繡像小説》第70至71期）。又由茂苑惜秋生（歐陽鉅源）続写了第四十三回（載《繡像小説》第72期，丙午三月，1906年4月）。共成四十三回。没有写完。

李伯元が「病気になり亡くなった [患病、病故]」。そこで吳趸人と歐陽鉅源が引き継いで執筆した。王学鈞が書いたこの部分を陳大康は無断借用したわけだ。これを見れば陳大康は2002年の時点で『繡像小説』発行遅延説を知っていたことが判明する。しかし上の説明が矛盾していることに陳大康は気づかなかった。

王学鈞の説明ではあきらかに齟齬が生じている。三月に李伯元が肺病で死去し呉趼人と欧陽鉅源が続作した。ここは『繡像小説』発行遅延説を採用したように見える。ところが日付が阿英説を引きずる。欧陽鉅源の第43回を掲載した『繡像小説』第72期の刊行を阿英が断定した三月だと書いてしまう。『繡像小説』第72期が三月発行であれば、その直前まで李伯元は生きていた。李伯元死後に呉趼人、欧陽鉅源が続作したと説明しては矛盾する。

王学鈞は阿英説を遵守しているように見えるが発行遅延説を否定しない。その部分を引用する。

[王学鈞216頁] 本月（注：三月）李伯元逝去により『繡像小説』は第72期を出版して停刊した。第72期は丙午三月と明記しているが記された日にちは必ずしも『繡像小説』が停刊した本当の日にちであるとは限らない。事実上は出版が遅れていた可能性がある。

本月，因李伯元逝世，《繡像小説》停刊，出至第72期止。第72期署丙午三月。但所署日期未必是《繡像小説》停刊的真实日期，事实上可能出版滞後。

王学鈞の大きな勘違いはここにある。「第72期は丙午三月と明記している〔第72期署丙午三月〕」と説明した。『繡像小説』は第13期より発行年月日を記載しなくなった。第72期の雑誌そのものに刊年の記載はない。これが常識だ。王学鈞はどういうわけかその基礎事実を忘れた。専門家でも勘違いすることはあるという例だ。

2014年、陳大康は過去の矛盾し誤った自説には触れずまるで当たり前のように『繡像小説』発行遅延を持ち出してきた。

[編年③970]（光緒三十二年三月）十四日（4月7日）李宝嘉卒（1867-1906）。

ここは[編年155]と同じ。重ねて示すのはこれが基本となる事実だからである。

陳大康の以前とは異なる新しい部分は、発行遅延をつぎのように記述したとこ

ろだ。

[編年③1160] 該期（注：『繡像小説』第72期）は出版時間を表示していない。『新聞報』十二月十七日の広告によれば当然本月（注：十二月）に出版された。

該期末標出版時間，據《新聞報》十二月十七日廣告，當於本月出版。

2002年の説明は光緒三十二年三月停刊だった。陳大康は2014年になって説明を変えた。『繡像小説』第72期の広告が『新聞報』十二月十七日に掲載されているから停刊した該期は光緒三十二年十二月に出版されたと判定する。

陳大康に言われなくともわかっている。新聞を資料にしてはるか昔に判明している事実である。

陳大康が当たり前のようにして提出した発行遅延だ。ところが先に触れた李伯元死後に発表された「活地獄」について奇妙な記述をする。

光緒三十二年十二月「日期不詳之事件」部分を見てほしい。

[編年③1160] この作品（注：活地獄）はもとから李宝嘉（署名は南亭亭長）の著作である。李宝嘉は病気が重くなったため執筆することができず第70、71期に掲載された「活地獄」第40-42回は、吳沃堯（署名は繭叟）が続作した。

此作原系李宝嘉撰，署“南亭亭長”。因李宝嘉病劇不能執筆，第七十至七十一期刊出《活地獄》第四十至四十二回，由吳沃堯続撰，署“繭叟著”。

[編年③970] で三月十四日に李伯元は死去したと説明している。ところがずっとのちの十二月に「李宝嘉は病気が重くなったため執筆することができなくなった〔因李宝嘉病劇不能執筆〕」という。死者の「病気が重く」なることがあるのだろうか。

その表現はどこかで見たおぼえがあるはずだ。2002年に陳大康は、李伯元が生存している光緒三十二年二月のこととして説明していた（[編年153]）。2014年になってその同じ説明文章を使いまわした。使いまわしたことを非難しているの

ではない。事実を記述するばあいは同じ表現になることもあるだろう。だが陳大康についていえば、李伯元が生存していた時の説明を変更しないまま彼の死後にも再度使用した。当然、前後のつじつまが合わない。そのことを言っている。

あまりに珍妙なのもういちど見る。陳大康がここで説明しているのはあり得ないことなのだ。李伯元は三月に死去している。その十ヵ月後の十二月時点で彼の病気が重いと述べる。死者の病気が重いと意味不明であるとなん度でもいう。そのことに陳大康はなぜ気づかないのか。

さらに奇妙なのは、[編年100] で記述したことを [編年②596] でもふたたび利用していることだ。ここも使いまわしである。

内容が同じだから訳さない。

[編年②596] 因李宝嘉患病故世，第四十至四十二回由繭叟（吳沃堯）続作，載於七十、七十一期，茂苑惜秋生（歐陽鉅源）続作第四十三回，載《繡像小説》終刊之第七十二期，仍未完。

この部分はもとが王学鈞論文からの無断借用だ。2002年のことだった。それを変更することなく2014年にも再使用した。

以前の説明では基本的に阿英説を信奉していたから事実と整合しなかった。ところが『繡像小説』発行遅延説を取り入れると昔は間違いだった記述が、こんどは偶然正解になってしまった。もとの王学鈞論文が矛盾していたから過去では不都合だったが現在は合致するという奇妙な現象が生じたというわけ。

陳大康は自らの広告調査を示しながら「活地獄」について前後矛盾する説明をした。いわば自分が以前に記述した説明にふりまわされている。阿英説にしたがった結果誤って説明した部分を、阿英説を否定したあとも訂正することなく再度利用したからだ。この事実は李伯元死後の作品について陳大康が何も考えていないことを証明している。別のいい方をすれば既存の論文から無断借用しただけで昔も今も内容の検討をしていない。立論の前後が矛盾なく成立しているかどうか点検しなかった。陳大康は該書の著者として名前を掲げているただひとりの責任者なのだ。他者に責任を転じることはできない。

そういえば海賊版『官場現形記』の犯人について陳大康が示した断定について私は強い違和感を覚えたことがある。2015年のことだった。

『官場現形記』の海賊版を刊行した犯人がいる。これに対して著者の李伯元が告訴して裁判になったという事件だ。

ここでも新聞の出版広告が資料として役に立つ。

海賊版犯人は、日本と日本人を前面に押し出した出版広告を新聞に堂々と複数回掲載した。あたかも日本の業者であるかのように装った。広告の表面だけを追跡すれば李伯元が日本の海賊出版業者を訴えたように見える。それをうのみにする人が実際に出てくる。

陳大康に先行する論文は劉穎慧「李伯元《官場現形記》版權訴訟始末」（2006）<sup>\*4</sup>である。劉穎慧は新聞広告を手がかりにして海賊版裁判の存在を明らかにした。それまで詳細が不明だった事件に光を当てた。すぐれた論文だ。私は該論文を高く評価する。

だが残念なことに調査が不足している部分がある。広告とは別に裁判記事が複数の新聞（『中外日報』1904.11.22／同日『時報』／同日『同文滬報』）に掲載されていることに気づかなかった。広告を追跡することだけに集中した結果、裁判結果を報道する記事にまで注意がとどかなかったということだ。ゆえに裁判の結果についての詳細な説明はない。ただし劉穎慧は裁判結果を知らないだけで勝手な空想をしていない。余計なものをつけ加えなかった。そこは研究者として良心的だということができる。

裁判記事は犯人が中国人の席粹甫であると明記している。新聞の出版広告に名前を出したその人だ。犯人席粹甫が日本人になりすまして海賊版を印刷販売したのが真相だった。「日本人になりすまし [冒日本人 (之) 名]」という事実は新聞広告には出てこない。報道記事だけに見える。日本および日本人は利用されただけ。海賊版にはまったく関係がない。裁判の途中から日本人の姿が消失する理由である。犯人席粹甫には首枷見せしめ三日の刑（枷示三天）の判決が下った。

問題は陳大康のほうである。

陳大康は劉穎慧と同じ新聞広告を資料に使用した。犯人が掲げたその広告では版元が日本の会社であるとうたっている。しかも、広告文中に東京金港堂の名称



◀ 首枷の例 孔夫子旧书网より引用／▲ (英) 約翰・湯姆遜著、徐家寧訳『中国与中国人影像』桂林・広西師範大学出版社2012. 11／2013. 2第三次

を引用する。陳大康はその日本という単語にこだわった。裁判の途中で日本人が消失したことをいぶかってもいる。結果として中国人の席粹甫だけが罰せられたことに陳大康は大いなる不満を表明した。ついにはあろうことか陳大康は海賊版の主犯が東京金港堂だと断言したのだ\*5。

立論の根拠は海賊版犯人が出した出版広告であるらしい。「らしい」と表現したのは陳大康が根拠を示さないからだ。このどこに信憑性があるというのだろうか。陳大康は犯人の発言を頼りにその表面だけをながめて結論を下した。

陳大康は劉穎慧と同様に裁判記事があることを知らない。それには犯人席粹甫が「日本人になりすまし」と明記してある。肝心の裁判の結末についての知識を持たない。ゆえに陳大康は犯人が打った広告に出現する日本人と日本の出版社が真犯人だと勝手に思い込んだままである。証拠はもともと存在していない。さ

らに日本人は狡猾だからなどと研究とは無関係かつ根拠不明で奇妙なことまで書いている。

陳大康には劉穎慧と同様に調査した事実を述べるだけで終える選択肢があった。ところが陳大康は目についた広告、それも犯人が出稿した広告に見える「日本」「東京」に過剰反応し自由に空想妄想して金港堂主犯説を捏造した。常軌を逸した奇怪な説明である。根拠のない断定をしたといわざるをえない。陳大康自らが自分は研究者ではないと宣言したのとかわらない。

裁判記事を欠いたところまで同じ新聞広告を使用しながら陳大康と劉穎慧は異なる判断を下したことがわかる。

劉穎慧は研究に徹して新聞広告だけを紹介した。一方の陳大康はなぜだか知らないが研究の道を足蹴にし暴走した結果、妄想捏造の暗黒世界に自分から跳びこんでいった。指導される学生\*6よりも指導する教授のほうが冷静さを欠いている。

もうひとつ指摘しなければならないことがある。陳大康は、当時の李伯元を取りまく状況についてなにも把握していないらしい。普通に考えればありえないことを妄想捏造した理由だろう。

海賊版問題が発生する以前にいくつかの事柄が前後してほとんど同時期に進行していた。光緒二十九年（1903）のことだ。便宜的に番号をつけて説明する。

1 光緒二十九年、李伯元は上海の『世界繁華報』に「官場現形記」を連載しはじめた。連載途中で12巻（回）がまとまると自ら主宰する世界繁華報館から線装活版単行本での出版を開始した。初編12巻は光緒二十九年八月十六日の発行だ。その後も継続刊行している。

2 その少し前、商務印書館編訳所所長張元濟は世界繁華報館主人李伯元に手助けを求めるつもりだという手紙を書いた\*7。そうして創刊されたのが『繡像小説』だ。主編はいうまでもなく李伯元である。創刊号は癸卯（光緒二十九年 1903）五月初一日発行だ。

3 商務印書館の夏瑞芳は以前から日本金港堂との合弁を準備していた。正式な合弁会社になったのが光緒二十九年（1903）十月初一日だった。

4 光緒三十年（1904）六月、犯人席粹甫が日本吉田太郎『官場現形記』12巻1冊洋装本を日本知新社の名称を使用して印刷販売した。これに対して李伯元が



裁判を起こしたという経緯である。

1の『官場現形記』が4の海賊版につながる。2で商務印書館と李伯元が関連する。3で商務印書館と金港堂が結びつく。つまり海賊版裁判が発生した時、商務印書館、李伯元、金港堂の3者は同じ組織内のいわば仕事仲間だった。よりにもよってその金港堂がなぜ李伯元本の海賊版を出す必要と理由があるというのだろうか。裁判の結果有罪の判決が下った犯人席粹甫と日本金港堂との接点はどこにも見いだすことはできない。無関係なのだ。

陳大康は犯人席粹甫が出した出版広告に金港堂の名前があるのを見ただけで海賊版作成の主犯は金港堂であると短絡し断定し主張した。

犯人の出版広告になぜ金港堂が出てくるのか。これについて説明する。

その出版広告には「日商朝日洋行知新社発行所」とある。犯人がでっちあげたものだ。東京金港堂と契約を結び該社の刊行物を販売すると述べる（[東京金港堂与本社訂定該堂出版各書本社今為分售處此佈]『中外日報』1904.10.15）。犯人席粹甫は東京金港堂が実在していることを知っていた。事実、商務印書館自らが以前に同様の広告を出したことがあった。犯人席粹甫はそれを覚えていたのは確かだ。

商務印書館と金港堂が合弁会社になったとき商務印書館は合弁の事実を宣伝しなかった。当時の中国社会に向けては隠しておきたい事柄だった。そのかわり「日本東京金港堂代理店」になったと広告した（『申報』1903.12.30／『上海週報』1904.1.1）。犯人席粹甫はそれをそのまま盗用し自分の広告文に書き込んだだけ。実在する金港堂を宣伝に利用して自社広告への信頼性を高めようとしたのが目的だとわかる。すべては虚偽である。犯人の文章に出てくる東京金港堂は名前を悪用された被害者だ。ところが陳大康の主張によれば海賊版の主犯になる。わけがわからない。金港堂が主犯であるというならばその証拠を提出する義務と責任が陳大康にはあると私がいう理由だ。

商務印書館と金港堂が合弁会社であった事実について陳大康は知識を持たないことが明白だ。知らないからこそ出てきた珍説だと私は判断している。証拠も根拠もなく日本金港堂に濡れ衣をきせた。同時に日本人を貶める言辞を書き連ねた。

いかななものかと思われる陳大康の記述2例を紹介した。2例もあれば十分だろう。不注意と無責任な執筆姿勢は変わらないらしい。自爆するのも無理はない。

### 王文君のばあい

王文君は『申報』に掲載された出版広告、受贈感謝記事（『繡像小説』第〇期を受け取った、感謝、という編集部の記事）を丹念に拾い上げた。新聞の種類を増やすことによって『繡像小説』発行遅延の事実がより精密に浮かび上がってくる。ただし停刊については発行遅延説を再確認するだけだ。

王文君へは著者問題が発生することを本人に直接指摘した。ところがそれに反応しない。興味がないのか。応えないのは著者問題など存在しないという認識かもしれない\*8。

陳大康にもどると、彼は『繡像小説』発行遅延説について先行論文があることを完全に黙殺した。研究の蓄積を軽視すると探索が継続されず深化しない。そのことが理解できないようだ。

そういう状況のなかで次の論文が公表されていることをウェブ上で偶然に知った。劉霞「關於《文明小史》的刊行時間」（2012）\*9である。

### 劉霞のばあい

劉霞論文は、題名のとおり「文明小史」の刊行時間に問題を絞っている。該作品を掲載した『繡像小説』の発行遅延に関心を抱いたのは当然だった。

先行研究について次の名前を掲げる。張純、陳大康、文迎霞および日本の樽本だ。

劉霞は、名前を出しただけ。関連する論文名が参考文献にあげてあるが全部というにはほど遠い。またこの論文では問題提起と論争の経過についても説明していない。別の論文\*10も見たが言及はごくわずかだ。劉霞は前述王学鈞「李伯元研究資料篇目索引」を見ている。しかしそこに収集された詳細な論文群は入手できなかったらしい。具体的な引用がないからわかる。現代中国では論争の経過について詳細がすでに不明になっていることを示している。劉霞の碩士論文を読んでそう感じた。

### 論争の経緯

樽本の名前があがっているから論争の当事者のひとりとして私が経緯を簡単に説明する。

『繡像小説』の発行が遅延していたことを最初に指摘したのは、張純『晚清小説研究通信』(1985.4.17)である。

張純は、『繡像小説』第15期に掲載された日露戦争を詠んだ歌に着目した。第15期は、旧暦十一月初一日に発行されたことになっている。ところが日露開戦は、旧暦十二月二十三日(宣戦布告は同月二十五日)だ。張純はそこに時間のズレがあることを発見した。十二月の日露開戦をそれ以前の十一月に書くことはできない。『繡像小説』は考えられていた月日より遅れて発行されたのではないかと考えた。

張純のすぐれた点は掲載された作品の内容に注目したところだ。内部から検討することによって雑誌発行の遅延を証明した。それまで誰も気づけなかった。鋭い感覚であったと私は高く評価する。『繡像小説』発行遅延説を最初に提出した功績は張純にある。研究者はだれでも認めるだろう。

結論として『繡像小説』の終刊は光緒三十三年丁未(1907)九月であると張純は断定した。その根拠も作品に描かれた事柄である。『繡像小説』第15期ではその方法が成功している。成功体験があるから張純は最後まで作品内部からの探索にこだわった。それ以外に発行遅延説を証明する方法があることを認めようとはしなかったのだ(後述)。



樽本『清末小説きまぐれ通信』1986所収

最初に反応したのは樽本「中国の情報ミニコミ紙『晚清小説研究通信』」（『清末小説研究会通信』番外1 1985.5.15）だ。張純の新しい指摘を紹介した。

一方で私は独自の検証方法を模索する。張純とは異なる方向から接近し証明する方法はないだろうかと考えた。資料に裏付けられより確実に説得力のある方法だ。いわば外部からの接触である。

私はそれ以前に「繡像小説総目録」（1973）を編集公表していた。そのほかの雑誌についても総目録作成の作業を継続中だった。また新聞（天津）『大公報』、雑誌『東方雑誌』（商務印書館）も調べた。それらには『繡像小説』が天津に届いたという記事、あるいは商務印書館の出版広告が掲載されているばあいがある。それを思い出した。特に新聞であれば日付のついた資料として利用できる考えたのだ。参考までにいえば、新聞雑誌に掲載された記事、広告に注目する研究者は当時誰もいなかった。後で述べるように新聞を資料として使用することに反対した人もいたのだ。

その頃は日本で手に取ることのできる新聞影印本、雑誌は限られていた。多くの影印本がある現在からは想像できないだろう。日本にある『同文滬報』などを追加し調査結果をとりあえず発表したのが樽本『『繡像小説』の刊行時期』（『中国文芸研究会会報』第55号 1985.9.30）である。

そこから本稿に関係する部分のみを抜き書く。説明を少し加えた。重要なのは、李伯元の死後も『繡像小説』は継続刊行されている事実が引き起こす影響だ。

1 『繡像小説』は従来考えられていた光緒三十二年三月より約十ヵ月遅れて同年末に終刊した。（発行遅延）

2 「文明小史」第54回以降と「活地獄」第24回以降の南亭亭長は李伯元ではなくなる。（筆名、代作）

3 李伯元と劉鉄雲の盗用関係は、一部が成立しない。「文明小史」第59回が「老残遊記」の原稿第11回を盗用したとき、李伯元はすでに死亡しているからだ。（盗用）

4 『月月小説』第3号（光緒三十二年十一月望日）に吳趸人が書きたいわゆる「李伯元小伝」が掲載された。李伯元の死後七ヵ月後に執筆したとある。

わざわざ『月月小説』第3号を選んだ理由はなにか。「町の商人のなかには、他人が書いた小説を君（注：李伯元）の名前で出版するものさえいる〔坊賈甚有以他人所撰之小説。假君名以出版者〕」呉趺人が繭叟の筆名で「活地獄」を『繡像小説』に掲載したのとほぼ同時期である。その意味は、李伯元の死後も彼の名前を利用している『繡像小説』と金港堂、ひいては商務印書館に対する呉趺人の抗議である。李伯元の代作をしていたのは欧陽鉅源しか考えられない。（呉趺人による批判、代作）

ほぼ30年前の文章だ。しかし上につけ加えるべき事項は、なにもない。発行遅延、筆名、代作、盗用、呉趺人による批判。今から思えばこの論文は存在する問題点のすべてを明らかにしている。

張純が予告していた論文の正式発表はかなり遅れた。張純「關於《繡像小説》半月刊的終刊時間」（『徐州師範学院学報（哲学社会科学版）』1986年2期 1986.6.15）である。内容は以前の指摘と変わらない。学術誌に掲載されたから研究者はこちらに言及するのが普通だ。

問題提起と討論の経過を簡潔にしかも同時期に紹介した次の文章がある。石子「關於《繡像小説》終刊時間的討論」（江蘇省社会科学聯合會編『社科信息』第6期 1986）。これに触れた文章をあまり見ない。写真を掲げておく。



雑誌の終刊時期について張純と樽本の意見は一致しなかった。張純は光緒三十三年丁未（1907）九月を主張し、私は光緒三十二年年末だと断定したからだ。

### 資料としての新聞広告

私が新聞雑誌を資料として使用したことについて張純から批判があった。商務印書館が商売のために掲載している広告だから信用できない〔是商務的一種“生意眼”的作法，不足為信〕。「生意眼」すなわち日本語で「商売（ビジネス）目線」というのは、金儲けを最優先することをいう。金儲けのための広告だからでたらめを書いている、信用できないと張純はいう。

張純は誤解をしている。書籍を売るために内容を好意的に誇張して宣伝することはあるだろう。これが「商売目線」だ。しかし『繡像小説』第〇期を刊行したという告知についてどう書けばでたらめになるのだろうか。予告であれば時間の誤差が生じることがあるかもしれない。しかし刊行広告だ。実際に出版されていると考えていい。日付を明示する新聞だからこそ資料的価値がある。

私がくり返してこのことを書くのには理由があるのだ。内容はでたらめだ、信用することはできない。当時これが広告に関する中国人研究者の一般的認識だった。

私が「一般的認識」だという根拠を示そう。

あらためていうまでもなく清末時期文芸の特徴のひとつはその頃陸続と刊行された小説専門雑誌の存在だ。当時日本では雑誌の原物をまとめて所蔵する公的機関はほとんどなかった。小説総目録を作成するために私はそれらを求めて日本国内の図書館を巡るほかなかった。

1980年代になってから清末小説雑誌の影印本が出版された。『新小説』『繡像小説』『月月小説』『小説林』などだ。特に『新小説』の実物は日本において数冊しか目にすることができなかったから全24冊の出現は貴重だった。これらの影印本は資料の空白を埋めてくれる。清末小説研究にどれくらい役立つ出版物であるかはいうまでもない。中国で清末小説雑誌研究の専門論文が出現するのは影印本刊行以後だといっている。

これほど貴重で重要な影印本であるにもかかわらず信じられない編集方針をと

った。雑誌に掲載されている広告をすべて削除したのだ。これでは影印本を作る意味が半減する。担当した編集者にとって広告は資料的価値のないものだったことがこれで理解できる。それにしても影印本作りには研究者が協力していたはずだが、削除に反対しなかったのだろうか。結果を見れば研究者も広告を必要としなかったと考えざるをえない。だからこそ「一般的認識」だという。

張純は作品内部から『繡像小説』の刊行年月を探索するというやり方にあくまでもこだわった。だがその後文章を発表しなくなる。調査に行き詰まったのだろう。私が提案した出版広告を調べるという方法を「信用できない」と排除した結果だと考える。新聞記事、刊行広告を利用するやり方は、のちの文迎霞、陳大康、劉霞、王文君ら<sup>\*1</sup>全員が採用している。研究方法として有効であるという認識が共有されたとわかる。

### 劉霞の広告調査

劉霞は『新聞報』と『中外日報』の出版広告を調査した。「文明小史」の連載時期を探索するための基本資料である。ただし『申報』を調査対象にしなかった理由は知らない。劉霞の文章からいくつかを引用して私が補足説明する。

[劉霞] (注：「文明小史」第60回は、『繡像小説』第56期に掲載された) 半月刊であれば第56期の『繡像小説』は光緒三十一年七月十五日(1905年8月15日)に連載が終わっていなければならない。ところが『新聞報』七月の広告によれば「上海商務印書館『繡像小説』は第39、40期を出版した」とあるだけ。この時『繡像小説』は第40期を発行しただけだとわかる。「文明小史」は第44回を連載してまだ完結していない。

按照半月刊的發行，第五十六期《繡像小説》應該在光緒三十一年七月十五日連載結束，但是依據《新聞報》七月的廣告，只有一則“上海商務印書館《繡像小説》第三十九、四十期已出”。可以看出此時《繡像小説》只發行到第四十期，而《文明小史》連載到四十四回，並沒有完結。

『繡像小説』の発行が今までの予想より遅れている事実を新聞広告によって確

認している。すでに明らかにされていることだ。

そして次の発言につながる。

[劉霞] この広告は、薛正興、阿英のいう「文明小史」は光緒三十一年九月に完成したという説明が完全に間違っていることを証明している。

這則廣告證明了薛正興、阿英說的《文明小史》完結於光緒三十一年九月的說法是完全錯誤的。

ここで劉霞は薛正興という名前しか出してはいない。補足すれば薛正興「前言」(1997) \*12である。「前言」と称しているとおりの概説だ。「文明小史」の掲載状況を次のように説明する。

[薛正興5頁] (注：文明小史は) 光緒二十九年（1903年）五月より光緒三十一年（1905年）九月まで『繡像小説』半月刊に連載された。

從光緒二十九年（1903年）五月到光緒三十一年（1905年）九月，在《繡像小説》半月刊連載」

薛正興は「九月」と書いているがこれは「七月」でなくてはならない。劉霞が「九月」としたのはあるがまを引用したからなのだろう。しかし誤記だから訂正するか少なくとも注記する必要がある。

### 魏紹昌から薛正興へ

薛正興が『繡像小説』第56期（「文明小史」第60回）を「光緒三十一年九月」と誤って書いたのには典拠がある。魏紹昌編『李伯元研究資料』（1980）\*13だ。

[魏紹昌122頁] 『繡像小説』半月刊第1号から56号は一九〇三年五月から一九〇五年九月まで出版された。

連載於《繡像小説》半月刊第一号至第五十六号，一九〇三年五月至一九〇五年九月出版。



『繡像小説』発行遅延説が提起される前の説明だ。阿英説を信じきって記述したからそうなる。それにしても魏紹昌は七月とすべき箇所をなぜ九月と誤記したのか。勘違いだろうが不思議なことだ。

解説すると「一九〇三年五月」というのは典型的な新暦旧暦混用だから注意してほしい。一九〇三年は新暦を示し五月は旧暦を表わす。清末までは旧暦だから混用しても間違いではない。しかしまぎらわしいのは確かだ。この新暦旧暦混用は中国学界においては現在でも見かける表記法になっている。

くり返すが雑誌発行を九月とするのは魏紹昌の勘違い。書くならば七月である。薛正興は疑問を感じることなく間違いを引用した。先行論文の誤った記述を誤ったまま引用する例である。

こう見てくると劉霞が薛正興とならべてあげた阿英は不適切だとわかる。魏紹昌にしたほうがよい。

### 基本的共通認識か

次の説明は理解しにくい。

[劉霞] 学术界の多くの学者にはすでに基本的共通認識となっているが、「文明小史」は確かに「老残遊記」から部分的に盗用しておりそれは欧陽鉅源がやったことに違いない。

学术界的許多学者已基本達成共識，《文明小史》確實是抄襲了《老殘遊記》部分文字，而且應該是歐陽鉅源所為。



包天笑釗影樓

ここは包天笑による証言に少し関連する。よく知られた事実だ。李伯元の原稿

「文明小史」には欧陽鉅源による書き込みがあった〔若「文明小史」等，則我曾見過原稿，確有鉅源的筆墨在內咧〕\*14。欧陽鉅源の名前が出てくるところが重要だ。欧陽と親しかった包天笑だからこそ記述ができた。ただし「文明小史」と劉鉄雲「老殘遊記」の盗用関係については言及していない。そもそも劉鉄雲自身が盗用されたことを知らなかった。だから息子の劉大紳は「關於老殘遊記」（1939）を執筆したがそのことに触れない。孫の劉蕙孫、劉厚沢兄弟、曾孫の劉徳隆も盗用事件に気づいていないのだ。劉氏一族は知らなかったかもしれないが、学界では有名な事実である。

言っておかなければならない。盗用問題が出てきたのは『繡像小説』発行遅延が発見される以前のことだ。盗用を指摘した魏紹昌は李伯元と劉鉄雲の問題だと個人名を前面に掲げていた。李伯元自身が劉鉄雲の原稿から一部を無断借用した（後述）。『繡像小説』は半月刊を守っており李伯元は「文明小史」を完結させたと誰もが信じていたころだからそうなる。

問題が存在することを指摘したのは表面上は魏紹昌が最初だった。彼は阿英の名前に言及せず盗用があることを公表した（魏紹昌「李伯元与劉鉄雲的一段文字案」『光明日報』1961.3.25）。題名を見ればわかるように李伯元と劉鉄雲の個人間に発生した事件だと考えていた。盗用の事実は両作品を比較対照すれば理解できる。だが魏紹昌自身、解決できないことが3点あると述べた。そのうちのひとつは李伯元が自ら没書にした原稿からなぜ一部を盗用して自作の「文明小史」に再度使用したのか。つまり他人の原稿を没書にした本人が、それを自分の作品に再度取り込んだ（盗用した）という不可解な行動に疑問を呈した。李伯元ひとりだけの問題だと考えるかぎりその理由は説明できない。魏紹昌は解決不可能だと最初から放置した。

ところが前述のとおり1980年代に李伯元の死去した後も『繡像小説』は発行されていたことが証明された。筆名南亭亭長は李伯元ひとりに固定したものではなくなる。

私は盗用問題については人名ではなく作品名を出すことにしている。そのほうが実態を反映すると考えるからだ（後述）。

劉霞の上の説明は基本的に正しいように思う。だが説明が不足している。私は

疑問を感じる。劉霞は学术界で多くの学者の基本認識になっているというのが本当にそうなのか。盗用関係は両作品だと提起し、欧陽鉅源の名前を出したのは樽本以外に誰がいたのか思い出さないからだ。前出『中国文芸研究会会報』第55号（1985）のほかに別の研究者が同じような指摘をしたのだろうか。ここらあたりは記憶があやふやだ。当時は研究者からの反応がまったくなかった。だからこそ私は盗用問題を何度も提起したのだ。そういう状況であったにもかかわらず劉霞は「基本的共通認識となっている」と説明する。おかしなことだと思った。

読めば劉霞の碩士論文4頁は張純「再説李伯元与劉鉄雲的<sup>ママ</sup>文字案」を紹介している。ただしどこで発表したものか記載がない。また参考文献にも収録しない。

たどると袁健、鄭栄編著『晚清小説研究概説』（天津教育出版社1989.7、166頁）が比較的詳しく記述している。

張純「再談李伯元与劉鉄雲的<sup>ママ</sup>文字案」（全国第3届「中国近代文学學術討論会」1986.10発表。筆者未見）だそうだ。学会で発表配布した論文らしい。それ以後、刊行物には収録していないから私は読んでいない。

その紹介によると、張純はいわゆる「李伯元与劉鶚文字案」は成立しないと主張する。李伯元死後だから、1. 李の親友でなくてはならない。2. 『繡像小説』の編集に参加した人物でなくてはならない。3. 李伯元の作風に似ていなくてはならない。この3条件を満たすのは欧陽巨[鉅]源しかいないという。

李伯元と劉鉄雲の人名ではなく作品名を使うべきだというのは私の主張とほぼ一致する。また欧陽鉅源を出すところはまったく同じだ。『晚清小説研究概説』の該当箇所は昔に私は読んでいる。同じことを言っていると思ってそのまま忘れてしまったらしい。

なるほど、劉霞がすでに共通認識になっているというのはここらあたりを指すのかもしれない。

## 盗用問題

前述のとおり李伯元の「文明小史」には欧陽鉅源の筆が入っていたという包天笑の証言があった。具体的な例をあげているわけではない。しかし李伯元死後に発表された「文明小史」第57回以降は書き入れどころか欧陽鉅源の代作である

だろう。その代作「文明小史」第59回には劉鉄雲「老残遊記」原稿第11回から「北拳南革」部分を盗用しているという事実がある。

李伯元が存命中であればどうか。劉鉄雲「老残遊記」原稿第11回を没書にしてその前後を書き換えたというのはたぶん李伯元の仕業であろう。作品の掲載を決定する権限を持つのは雑誌の主編だと考えるからだ。ただし欧陽鉅源が関係していたという推測も否定はできない。証拠がないだけ。没書にしたのが李伯元であり、後に原稿から盗用したのが欧陽鉅源だというのが理解しやすい。

「北拳南革」以外にも小さな盗用の事実が見える。

「文明小史」と「老残遊記」の盗用問題を論じたのは魏紹昌だけではない。その直後に発表された太田辰夫「「文明小史」をめぐって」（『神戸外大論叢』第12巻第3号 1961.8.30）がある。

太田は「面白い表現を借りている」（107頁）と指摘する。「恃強拒捕的肘子」「臣心如水的湯」だ。鍋物に入れる食材とスープについて冗談めかして説明した箇所だ。

これが以下の順序で共通する。

「老残遊記」第11回（実際は第12回） 第16期 刊年不記、推定光緒三十年四月

「文明小史」第49回 第45期 刊年不記、推定光緒三十一年十一月

「老残遊記」が「文明小史」に先行する。発表時間から見ても無断借用したのは後者の「文明小史」である。わずかな語句だから「文明小史」につけ加えたのは欧陽鉅源だったといってもおかしくはない。上記のふたつは普通の表現だから盗用ではないという汪家熔がいた。では「老残遊記」以外のどの作品に見えるのかと質問すると返答がなかった。反論するためにだけ反論したらしい。

別の例を見る。

李伯元の「文明小史」第56回の閲兵（軍事演習）を描いた700字前後の部分は、憂患余生（連夢青）「鄰女語」第5回から盗用したものだという。陳平原、李丹らの指摘\*15である。ともに『繡像小説』に掲載された。連夢青は劉鉄雲の「老残遊

記」原稿を『繡像小説』に紹介した人物だ。ふたりは親しかった。その「鄰女語」からも「文明小史」は盗用していたという。以下のとおり。

「鄰女語」第5回（第10期 光緒二十九年八月十五日）[] は上海文化出版社1957.7

「文明小史」第56回（第52期 刊年不記、推定光緒三十二年正月／李伯元は存命。二月十五日に肺病宣言）

両作品の該当部分を3分割して引用する。作品名の前後につけた番号はそれぞれが対応していることを示す。ただし、2については「鄰女語」にはなくて「文明小史」のみにある。つまり「文明小史」2は独自の描写になっている。語句の似た箇所には青色で印をつけた。

#### 1 ● 「鄰女語」

……等到那日袁軍操練行軍之日。不磨易了服色。照着行軍觀陣之例。袖上繫了紅十字的記号。主僕二人。問明道路。一直望城外行軍戰場進發。未到戰場之時。偶見衆將官擁着山東巡撫袁世凱。坐在馬上。身着行[戎]裝。頭戴紅頂。赫赫威風。果然是一員大將的形式。手下衆將官。却[×]都換了行軍樣式冠服。却没有一個服這古時武裝的。前頭打着帥字黃旗。引著袁世凱飛奔而去。等到袁世凱到了操場官廳之時。那邊預備的兵將。大家望地下一齊跪倒口稱迎接大帥。衆声如雷。隆隆震耳。袁世凱下馬入座。座上公案。紅綠相間。儼然一衙門旧式。衆將官捧上冊籍圖画。袁世凱略一展看。使命開操。衆將官皦然関応。各尋自己馬匹。各歸隊伍去了。袁世凱遂入内更衣。也換了短衣包頭而出。袖上双龍金線。却有十三道明記。映著日光。格外閃鑠[爍]耀目。遂伝令請各国教習。一同策馬往来。

#### 1 ● 「文明小史」

大操那日。天剛剛亮。方制台騎着馬。帶着衛隊。到了主營。各營隊官隊長。按礼參了堂。外面軍樂部。奏起軍樂。掌着喇叭。打着鼓。応絃合節。方制台換過衣服。穿了馬褂。袖子上一條一條的金線。共有十三條。腰裏佩着指揮刀。

騎着馬。出得主營。揀了一塊高原。望得見四面的。立起三軍司命的大旗子。底下什麼營什麼營分為兩排。都有嚴陣以待的光景。兩面奏起軍樂。

軍事演習の日、「鄰女語」では袁世凱が、「文明小史」では方制台が現場に到着する。細かい部分は違うが内容は大筋ではほぼ一致する。

「鄰女語」1は主人公が観覧するとき袖に赤十字の記号をつける〔袖上繫了紅十字の記号〕。すこし離れた「文明小史」2に同様の記述〔身上都釘着紅十字の記号〕がある。これが単なる赤い記号なのか、そのまま赤十字印なのかはわからない。ただし紅十字といえは普通は赤十字印だと考えられるから観戦者が表示するのは奇妙な感じをうける。袖に金筋が13本という表記も「双龍」を除けばほぼ同じだ〔袖上双龍金線。却有十三道明記／袖子上一條一條的金線。共有十三條〕。方制台が四方を見渡せる場所を選んだ〔揀了一塊高原〕。これは「文明小史」3の主人公と召使いが観戦するのに最も高い場所を選んだ〔揀了一塊最高地方〕と共通している。

以上は「鄰女語」の描写を「文明小史」が簡略化して取り入れたということが出来るだろう。ところが次の箇所はもとの「鄰女語」にはなくて「文明小史」が加筆した部分だ。

## 2 ● 「鄰女語」 文章なし

## 2 ● 「文明小史」

洋教習一馬當先。喊着德国操的口令。但聽見那洋教習控着馬。高声喊道。安特利特。這安特利特是站隊。兩邊一齊排了開來。洋教習又喊阿格令斯。阿格令斯是望左看。兩邊隊伍一齊轉身向左。洋教習又喊阿格來斯。阿格來斯是望右看。兩邊隊伍。又一邊轉身向右。洋教習又喊阿格克道斯。阿格克道斯是望前看。兩邊隊伍又一齊向前。行列十分整肅。步伐十分齊整。方制台看了。只是拈髯微笑。洋教習又喊勿六阿夫。勿六阿夫是。把槍掬在肩上。兩邊隊伍一齊把槍掬在肩上。洋教習又喊勿六阿澆。勿六阿澆。是把槍立在地下。兩邊隊伍。一齊把槍立在地下。洋教習又喊勿六挨赫篤白蘭山西有。勿六挨赫篤白蘭山西有。是用兩手抱槍。兩邊軍隊。一齊兩手抱着槍。洋教習演習口令。便

退至陣後。這時閱操の各国公使署代表人。各国領事館代表人。跟着參贊書記。以及中国各省督撫派来的道府。余日本也在内。身上都釘着紅十字的記号。東面一簇。西面一團。

外国人教官が洋式軍隊の基本動作をドイツ語で命令する場面だ。ドイツ語らしきものが音訳されている。ただし、その表記が説明と一致しない箇所がある。たとえば「左向け左」と書きながら実際の行動は「回れ左」である。

それらを一覧にする。ネットなどの説明によりながら訳語とドイツ語を掲げるが正確ではないかもしれない。

安特利特 Antreten アントレーテン 整列

阿格令斯 左向け左。動作説明は回れ左。造語：Augen Links アウゲン・リンクス

阿格来斯 右向け右。動作説明は回れ右（ドイツ軍は右回りはなく左回り）。造語：Augen Rechts アウゲン・レヒツ

阿格克道斯 Augen Gerade-Aus アウゲン・グラデーアウス かしら中

勿六阿夫 Gewehr über ゲヴェーア・ユーバー 担え銃

勿六阿澆 Gewehr ab ゲヴェーア・アブ 立て銃

勿六挨赫篤白蘭山西有 捧げ銃 造語：Gewehr Achtung, Präsentiert  
ゲヴェーア・アハトゥング・プレゼンティータト

ドイツ軍は右回りはなく左回りだそうだ。すると「回れ右」と説明するのは間違いとなる。

阿格（アウゲン）は視線、勿六（ゲヴェーア）は銃を意味するだろうと推測する。上海租界にいるドイツ人から聞いたのかもしれない。漢字の一部が共通した配列になっているところを見る。造語ではなかろうか。既存の単語をもとにして漢語風に作ったようだ。

「鄰女語」にはもともと存在しない場面である。ドイツ式というのを強調しなかったのかもしれない。だが、これから甲軍（營）と乙軍（營）が戦う軍事演習

がはじまるという時刻だ。広大な空間が目の前に広がっているのが「鄰女語」の場所設定になっている。それに対して軍隊の基本教練を悠長に繰り返すのでは視界が極端に限定される。そぐわない印象がある。

ところが、上に示した両者の挿絵は反対になっている。「鄰女語」の挿絵は基本教練のように見えて空間が狭い。一方の「文明小史」は広い空間の演習場面だ。



「鄰女語」第5回



「文明小史」第56回

挿絵は本文とは別に描かれるものだから完全に一致するわけでもない。だが似ているようで違うので一言つけ加えた。

考えれば西洋風の軍事演習は珍しい。南亭亭長（李伯元か欧陽鉅源かは不明）はそれだけでは新式軍隊の描写が十分ではないと感じたらしい。唐突に軍事教練をつけ加え、ドイツ人教官にドイツ語を使用させた。それらしい雰囲気を出したつもりか。前後でじっくりとはこないが、南亭亭長は加筆するだけの知識を有していたことがわかる。それとも別の書物たとえば教練教科書などのようなものから引っぱってきた可能性もあるだろう。



次の戦闘描写が両作品でほぼ一致する。青色印は前述「文明小史」1の部分と類似していることを示す。両者がほぼ共通するので彩色はしない。

### 3 ● 「鄰女語」

行軍已分為甲乙二壘。各據一方。遥遥相對。各作相持之狀。不磨主僕遂揀了一塊最高地方。立足觀戰。遠望村民市人。來觀者甚少。不覺太息中國人竟無尚武的精神。如此盛舉。竟不如看戲人多。忽見甲軍偵探來報。乙軍遣馬兵來襲。甲軍遂準備迎敵。分道埋伏。一齊都蹲著[在]草地墳堆裏等候。等到敵兵馬隊來探。一時伏兵齊起。槍聲如連珠一般。甲軍的大砲接着轟發。乙軍馬兵勢不能敵。遂反面而奔。甲軍竭力窮追。剛要奪險據要的時候。又忽為敵軍兩面伏兵包抄[抄]。圍困在垓心中間。甲軍四面衝突。竟無一絲破綻可尋。兩面砲聲槍聲火藥氣直貫雲霄。正在駭目驚心之時。看看甲軍支持不住。忽聞大聲。發於天際。竟若山崩地裂一般。一股黑氣罩著兩軍陣前。以為甲軍此次必覆滅矣。雖明知是個假的。心裏也不覺代為着急。誰知此聲即是甲軍地雷之暗號。遠見乙軍的主將營盤旁邊。不知何時為甲軍所據。乙軍見主將營盤有失。遂解兩軍鏖戰之圍。分作前後應敵之勢。一軍面向外攻。自行斷後。一軍面向內進。回救主營。甲軍進據敵地。正欲奪取敵營。以為滅此朝食之計。不防前面敵兵反攻。立時人馬紛亂。調運不齊。只好分作兩支。暫守歸路。那乙軍的主將見自家兵隊回護。敵兵漸退。抖擻精神。搖動旗鼓。一齊出攻。洶湧之勢。銳不可當。當先進據敵營的兩支兵馬。深恐兵單不敵。遂各向自己軍隊奔去。合做一堆。併力抵禦。乙軍再四猛攻。竟不可破。甲軍亦連發數隊。作救應之狀。將要得手之際。忽為乙軍軍馬隊所衝。頃刻分為兩翼。各不相救。甲軍援兵遂揮動令旗。令各軍退據高岡。憑高望險而守。乙軍仰攻不及。反為甲軍所擊。遂大敗而回。袁世凱遂命鳴金收軍。重複到了官廳。傳令賞賚記功。諸事已畢。遂一路呼喝回衙。

### 3 ● 「文明小史」

說時遲。那時快。兩邊行軍隊伍。已分為甲乙二壘。大家占着一塊地面。作遥遥相對之勢。忽然甲營裏有一騎偵探來報。說是乙營已遣馬兵來襲。甲營預備迎敵。分道埋伏。一箇箇都蹲在樹林裏。草堆里。寂靜無聲。等到乙營馬兵

撲過來。甲營埋伏尽起。槍声如連珠一般。當中夾着大砲。轟天震響。乙營看看不敵。伝令退出。甲營趁勢追趕。追趕不到兩三節路。誰知被乙營的接応。包抄上來。困在垓心。甲營左衝右突。竟無出路。兩面槍砲声。上震雲霄。四面都是火藥气。有兩位年紀大点的道府。一箇箇都打惡心。甲營正在支持不住。忽然天崩地塌一響。黑煙成團結塊。暈得人眼睛睜不開。大家以為甲營一定全軍覆沒了。雖是假的。看的人也覺得寒心。誰知這一響是甲營地雷的暗号。一響過了。黑煙漸完。乙營已不曉得什麼時候。被甲營占了去了。乙營見自己主營有失。把圍登時解了。分作兩隊。作前後応敵之勢。一隊向外邊打。自行斷後。一隊向裏邊打。回救主營。甲營剛剛據了乙營。正打算遣馬兵守住路口。及至看見乙營已經回來了。一時措手不及。只得把兵分為兩隊。守住路口。乙營主將。看見甲營沒有什麼預備。就搖旗吶喊。撲將過來。甲營兩隊兵。覺得自己太單弱了。各向自己軍隊奔去。合做一大股。竭力抵禦。乙營再三猛撲。甲營毫不動搖。甲營又在一大股裏。分出兩小股。作為接応。將要得手。忽被乙營馬兵衝散。頃刻之間。化為兩截。首尾各不相顧。甲營主將指揮自己軍隊。退守高原。乙營仰攻不及。反為甲營所擊。大敗而回。方制台伝令收兵。一片鑼声。甲乙兩營。俱各撤隊。這時也有下午四点多鐘了。方制台依旧騎着馬。下了高原。前呼後擁的回轉衙門。

乙軍の攻撃を甲軍が迎え撃つ。一方的な劣勢に追い込まれそのまま全滅するかと見えた。ところがいつのまにか乙軍の本陣が奪われ激しい攻防戦が展開する。この軍事演習の場面は約700字である。

両者はなによりも大筋が同じだ。語句は共通する部分が多い。先行する「鄰女語」から後の「文明小史」が無断借用したことは明らかだ。

上に見る「文明小史」第56回（第52期）は、刊年不記であるが新聞広告によれば光緒三十二年正月出版と推定される。

この光緒三十二年正月というのが李伯元にとってはきわめて微妙な時期なのだ。李伯元は存命しているが肺をわずらっていた。二月十五日、ついに肺病宣言を行なった。死去はその約一ヵ月後の三月十四日である。

李伯元の肺病宣言から上の「文明小史」盗用問題を少し考える。

## 李伯元の肺病宣言

光緒三十二年二月十五日付『世界繁華報』に広告文「告我良朋」が南亭の署名で掲げられた。南亭、すなわち李伯元が肺病のためその年の正月から招宴はすべて謝絶しているという内容だ\*16。

この正月というのが上の「文明小史」第56回（第52期）と重なる。肺病に苦しみながらの原稿執筆は無理ではなからうか。そう考えればやはり有力な協力者欧陽鉅源の存在は無視できない。軍事演習場面を以前の「鄰女語」から拝借し、新しく教練部分を書き加えたのは欧陽鉅源である可能性があらためて浮上する。

### ○「文明小史」第59回

[劉霞] ……「文明小史」の第59回は確かに李伯元の死後に発行された。

……《文明小史》的第五十九回，確實是李伯元死後發行的。

劉霞は根拠として『新聞報』六月初三日付、『中外日報』六月初二日付を示す。ただし王文君と文娟は『申報』閏四月初九日掲載の広告をあげている。うしろの「『繡像小説』刊行一覽（部分）」をご覧いただきたい。いずれにしても李伯元の死後であることには変わりがない。

[劉霞] 結局のところ「文明小史」の発行時間は1903年5月27日（光緒二十九年癸卯五月初一）にはじまり遅くとも1906年7月22日（光緒三十二年丙午六月初二）までになる。

綜上所述，《文明小史》的發行時間起於1903年5月27日（光緒二十九年癸卯五月初一），最遲止於1906年7月22日（光緒三十二年丙午六月初二）。

劉霞は問題を「文明小史」に絞っている。別の作品「活地獄」ほかについては検討対象にしない。それはそれでひとつのやり方だ。

劉霞が「文明小史」の著者について説明しているのは例外だといっていい。なぜなら文迎霞、陳大康、王文君らは『繡像小説』の発行遅延と作品の関係を考え

ようとはしなかったからだ。

### 3 李伯元死後の影響

確認するために述べておきたい。

李伯元死後に刊行された『繡像小説』には次の3作品がある。

南亭亭長「文明小史」第57-60回、南亭亭長「活地獄」第27-39回、謳歌変俗人「醒世縁」第12-14回。

従来は南亭亭長、謳歌変俗人ともに李伯元だと考えられてきた。しかし作品は李伯元死後も公表されている。別人の続作だとせざるをえない。すると欧陽鉅源以外には該当する人物はいないのだ。これが私の一貫した考えである。

以前から言っている。「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係も再考の必要がある。

前述の魏紹昌が提出した解決不能の問題はどうか。ひとつは原稿を没書にした本人が、その原稿から一部分を盗用するという矛盾だ。

劉鉄雲「老残遊記」第11回は李伯元により没書にされた。その原稿から一部を無断借用（盗用）した「文明小史」第59回は『繡像小説』第55期の掲載だ。該誌第55期は『申報』三十二年閏四月初九日の出版広告に見える。李伯元死後の約二ヵ月近くが経過している。死者は原稿を書くことも盗用することもできない。李伯元は原稿を書きためていたという研究者がいる。もし生前の原稿があったのであれば、なぜ『繡像小説』の刊行に空白期間が生じたのか。説明できない。刊行の空白は李伯元の原稿がなかったことを証明している。

大きな盗用は李伯元死後の事件である。すると李伯元ではない別人が無断借用した。李伯元が劉鉄雲原稿を没書にし、別人が再利用する。そうであれば魏紹昌が提出した疑問は氷解する。盗用したのは李伯元の後継者欧陽鉅源である。李伯元と行動を共にし原稿に手を入れていたのが欧陽鉅源だ。彼以外に代作をする人物を思いつかない。署名は南亭亭長のままで変更していない。

雑誌終刊の第72期まで作者名である南亭亭長を維持し前面に押し出し続けたのであればそういう編集方針だったと理解できる。

ところが南亭亭長を別人に差し替えて連載を継続した「活地獄」がある。続作者のふたりとは、第40-42回（第70-71期）の繭叟（吳趼人、沃堯）、第43回（第72期）の茂苑惜秋生（歐陽鉅源）である。

『繡像小説』第70-72期は光緒三十二年十二月中に発行された。なぜこれらだけ李伯元ではない著者が登場するのか。

ひとつの手がかりは『月月小説』第1年第3号（光緒三十二年十一月十五日）に掲載されているいわゆる「李伯元小伝」だ。李伯元肖像写真は「中国近代小説家李君伯元」と題されている。次ページに吳趼人が小伝を書いた。題名がないから「李伯元小伝」と称している。



『月月小説』第1年第3号

最後部分に李伯元の生卒年月日が明記してある。次のとおり。「君生於同治丁卯四月十八日。卒於光緒丙午三月十四日。卒後踰七閱月。其後死友吳沃堯為之伝」

李伯元の死去を「三月十四日」と日にちまで書くのは、すべて吳趼人によるこの記述を根拠としている。

吳趸人は「李伯元小伝」について李伯元死後七ヵ月を経て書いたとある。同年三月から七ヵ月（閏四月を含む）であれば九月だ。『月月小説』の創刊が同じ九月だから掲載しようと思えばできた。該誌第2号でも同様だ。だが実際に掲載されたのは第3号である。時間順に配置すると以下ようになる。これに『文明小史』の刊行を挿入して示す（編年史の該当ページも記入した）。

光緒三十二年九月十五日『月月小説』第1年第1号 [編年③1094]

○丙午十月初九日（1906.11.24）著者無記名『文明小史』上海・商務印書館 [編年③1114]

光緒三十二年十月十五日『月月小説』第1年第2号 [編年③1115]

光緒三十二年十一月十五日「李伯元小伝」『月月小説』第1年第3号 [編年③1136] 『中外日報』光緒三十二年十一月十六日広告

推定光緒三十二年十二月中『繡像小説』第70-72期（吳趸人、歐陽鉅源） [編年③1160]

前述の『繡像小説』第70-72期（光緒三十二年十二月中）も上に記入した。「李伯元小伝」の後であることにご注目いただきたい。

吳趸人「李伯元小伝」の掲載に『月月小説』第3号を選んだ理由はなにか。そこにもどっていく。

もういちど示す。「町の商人のなかには、他人が書いた小説を君（注：李伯元）の名前で出版するものさえいる [坊賈甚有以他人所撰之小説。假君名以出版者]」

『繡像小説』に連載された南亭亭長の作品に関連するだろう。李伯元死去後の第53期に「文明小史」第57回と「活地獄」第27回の2作品が南亭亭長の名前で掲載されている。「君（注：李伯元）の名前で出版する」の「君の名前」というのは「南亭亭長」ということになる。吳趸人はこの事実を指摘していると考える。

この箇所を見ると、やはり「李伯元の死後も彼の名前を利用している『繡像小説』と金港堂ひいては商務印書館に対する吳趸人の抗議である」。

吳趸人にそこまで書かれてしまえば「活地獄」を南亭亭長名のまま続けるわけにはいかない。連載中止になっても不思議ではない。だがどういう理由からか吳趸人が継続執筆した。第40-42回（第70-71期）である。いったん繭叟（吳趸人）の名前に変更してさらに第43回（第72期）は茂苑惜秋生（歐陽鉅源）がつづけた。そ

れでも評者は願雨楼のままで変更はない。

以上の状況を見ると南亭亭長という筆名はやはり筆名であるにすぎないことがわかる。李伯元と歐陽鉅源の共同筆名と考えるのがよい。李伯元の死後も『繡像小説』が継続発行されていたことがその事実を示している。

『繡像小説』刊行一覧（部分）

光緒	従来	中外日報	申報	新聞報	備考
三十二 丙午 1906	正 67 68	**十五 50	**十五 50 廿九 49-52	**十七 50 廿九 49-52	劉鉄雲日本訪問1回目
	二 69 70	初二 49-52 初六 52	*初六 49-52		初六 遅延広告(中外日報) 十五 李伯元肺病宣言 52 遅延広告
	三 71 72	廿 49-52 廿五 53, 54	*廿四 53, 54 *三十 53, 54	廿五 53, 54	十四 李伯元死去 53文明小史57回、活地獄27回(×李伯元作)
	四				
	閏四		*初九 55, 56		55 文明小史59回、活地獄29回(×李伯元作) 56 文明小史60回、活地獄30回(×李伯元作)
	五				
	六	初二 55, 56 初八 57, 58	初八 57 *十一 57, 58	初三 55, 56 初七 57 初九 57, 58	57 活地獄31回(×李伯元作) 58 活地獄32回(×李伯元作)
	七	廿二 58, 59	*十三 59, 60	廿二 58, 59	59 醒世縁彈詞12回(×李伯元作) 60 活地獄33回(×李伯元作)
	八	初二 60, 61 廿 62-64	*初一 60, 61 *十九 62-64 *廿八 61-64	初一 60, 61 十九 62-64	劉鉄雲日本訪問2回目 61 活地獄34回(×李伯元作) 63, 64 活地獄35, 36回(×李伯元作)
	九		4*初四 62-64		
	十	廿六 65-67		廿七 65-67	初九 『文明小史』商務印書館単行本 65 活地獄37回(×李伯元作)
	十一		*初五 65-67 *廿九 69	廿九 67-69	十五 吳趸人『李伯元伝』『月月小説』1年3号 68, 69 活地獄38, 39回 醒世縁彈詞13, 14回(×李伯元作)
十二	初二 69 十八 72	*初八 68-70 *十八 72	十七 72	初一 蔣維喬、談小蓮と相談 70, 71 吳趸人『活地獄』40-42回 十八 改良広告(中外日報) 72 歐陽鉅源『活地獄』43回	

青色印 第1年24期 第2年48期 第3年72期の実際の完結刊年

黄色印 注意すべき事項

【参照】注と重複している文献がある

光緒三十三年九月初三日(1907. 10. 9)付『時報』『中外日報』ほかに、「商務印書館／南亭亭長／繡像小説」という商務印書館自身の広告(劉徳隆の指摘あり)

[編年③1304]『中外日報』光緒三十三年七月初六日(1907. 8. 14)、初八日、十四日、二十五日、八月初一日、九月初三日、初十日、十一日、十三日、十六日、二十三日。『時報』九月初三日、十三日。『神州日報』七月十三日

文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」『華東師範大學學報（哲學社會科學版）』第38卷第3期  
2006. 5. 15

陳大康「晚清《新聞報》與小説相關編年（1903-1905）」『明清小説研究』2007年第2、3期（總第84、85  
期） 2007発行月日不記

陳大康「中国近代小説史料——《繡像小説》中小説史料編年」『文学遺産 網絡版』劉霞によると2010. 4. 5  
（未確認） 電字版 『新聞報』廣告を主として採録する。陳大康『中国近代小説編年史』全6冊  
（2014）に吸収された

劉 霞「關於《文明小史》的刊行時間」『現代語文』2012年第1期（總第454期）2012. 1. 5

欒偉平「夏曾佑、張元濟與商務印書館的小説因緣拾遺——《繡像小説》創?前後張元濟致夏曾佑信札八封」  
『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期（總第174期）2014. 1. 15。引用して四月朔「商務館現求助於繁  
華報館主人李伯元，其筆墨亦平淺，然此外更無人」

文 娟「附録4：《申報》所刊雷瑠的謝贈文字」1905. 8. 16（陰曆七月十六日）には「第四十九、五十冊  
《繡像小説》」とある。送られてきた写真を見ると「第四十九五十冊繡像小説」となっている  
（2016. 1. 30受参考）。前後左右の資料からたぶん誤植だろうと考える。『文学場域変革中的交融共生  
——掃葉山房説部及雜誌刊行研究』上海大学出版社2015. 11. 275頁

\*印 王文君「就《申報》刊《繡像小説》廣告——與樽本照雄先生商榷」『清末小説から』第114号  
2014. 7. 1 王論文により『申報』部分を訂正加筆した。注：「光緒三十三年五月初一日 第4版 第72  
期」は未記載

\*\*印 陳大康『中国近代小説編年史』全6冊（北京・人民文学出版社2014. 1。ただし、先行文献に見えない  
ものだけを追加した

3\*印 劉穎慧『晚清小説廣告研究』北京・人民出版社2014. 9。ただし、先行文献に見えないものだけを追加  
した

4\*印 文 娟「附録：近代《申報》小説廣告編年」『結縁与流変——申報館与中国近代小説』桂林・広西師  
範大学出版社2009. 3。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

5\*印 文娟2016. 1. 30付メール。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

6\*印 劉 霞「關於《文明小史》的刊行時間」『現代語文』2012年第1期（總第454期）2012. 1. 5。ただし、  
先行文献に見えないものだけを追加した

## 【注】

1) 詳細は次のとおり。文末の「参照」と重複する文献がある。

文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」『華東師範大學學報（哲學社會科學版）』  
第38卷第3期2006.5.15

陳大康『中国近代小説編年』上海・華東師範大学出版社2002.12。略号 [編年]



——「中国近代小説史料——《繡像小説》中小説史料編年」『文学遺産 網絡版』。劉霞によると2010.4.5（未確認） 電字版 『新聞報』 広告を主として採録する。次に吸収された

——『中国近代小説編年史』全6冊 2014.1。略号〔編年②③〕

王文君「就《申報》刊《繡像小説》廣告——與樽本照雄先生商榷」『清末小説から』第114号 2014.7.1

——「再議《繡像小説》的停刊時間——讀《申報》刊《繡像小説》廣告札記」『中国海洋大学学报（社会科学版）』2016年第2期 2016.3.10

- 2) たとえば次の論文がある。郭浩帆「《繡像小説》創辦、刊行歴史追溯」『清末小説』第23号 2000.12.1。2017.5.24ウェブサイト「読国学」に転載
- 3) 王学鈞編著「李伯元年譜」薛正興主編『李伯元全集』第5巻 南京・江蘇古籍出版社 1997.12
- 4) 劉穎慧「李伯元《官場現形記》版權訴訟始末」『華東師範大学学报（哲学社会科学版）』2006年第3期（総第185期）2006.5(15)
- 5) 陳大康「論近代小説伝播中の盜版問題」『文学遺産』2015年第1期 2015.1.15。反論は次のとおり。樽本「注目点4：『官場現形記』の海賊版」『清末小説から』第119号 2015.10.1、35-42頁。要旨：『官場現形記』海賊版について陳大康が珍説を発表している。珍説とは、海賊版を作成したのは日本金港堂だと断言したことだ。証拠は存在しない。新聞広告に出てくる単語を組み合わせて作りあげた妄想捏造である。妄想捏造だという根拠はなにか。日本金港堂は当時商務印書館との合弁会社だったからだ。商務印書館が刊行する雑誌『繡像小説』の主編が李伯元だ。李伯元が執筆刊行している『官場現形記』をなぜ商務印書館との合弁会社である金港堂が盗んで印刷するだろうか。海賊版作成の主犯が金港堂であると主張するならば、その証拠を提出する義務と責任が陳大康にはある。陳大康著『中国近代小説編年史』の書評の一部を先行発表した。残りの部分は未発表。陳大康の珍説を読んで発表する気が失せたからだ。『清末小説二談』所収
- 6) 劉穎慧『晚清小説広告研究』の作者簡介に「師從陳大康先生」とある。
- 7) 樂偉平「夏曾佑、張元済与商務印書館の小説因縁拾遺——《繡像小説》創辦前後張元済致夏曾佑信札八封」『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期（総第174期）2014.1.15。汪家熔は『繡像小説』主編李伯元説に強く反対していた。商務印書館が新聞広告を出して李伯元を主編に招いたと書いているが、それにも疑問符をつきつけた。商務印書館自身の証言を否定する意味がわからない。汪家熔が反対する大きな根拠は、張元済が「品

行不良」の李伯元など招聘するはずがないという勝手な思い込みだ。その思い込みは樂偉平が発掘した張元済の夏會佑あて手紙に李伯元の名前があることによってあっけなく泡のように消えた。

- 8) 樽本「王文君氏へ——『繡像小説』発行遅延問題について／附：『繡像小説』刊行一覧』『清末小説から』第114号 2014.7.1、37-42頁。『清末小説二談』2017収録時に改題して『繡像小説』発行遅延問題について——王文君氏へ」。要旨：王文君が『繡像小説』の刊行遅延説について調査した。その結果、樽本の示した『申報』広告の記事掲載月日に不正確な箇所がある、と批判するのだ。その事実を認める。ただし、いくつかの誤記は刊行遅延説を否定するまでにはいたっていない。誤差の範囲内におさまる。王文君に反論しておいた。目先の事実には精密であろうとして調査を行なう本来の目的を見失ったと私はいう。なんのために調べるのか。樽本説を否定できる新しい発見がないではないか。『清末小説二談』収録時に樽本「王文君論文について」（清末小説研究会ウェブサイト2016.9.4に掲載）を追加する。要旨：王文君が『繡像小説』の発行遅延問題を取りあげている。以前の論文の焼き直し。停刊時間に問題を絞った。しかし停刊時間についてはすでに結論がでている。新しい発見であるということはできない。また以前の論文において樽本が指摘した問題を無視する。畢樹棠論文を魏紹昌編の資料集から引用して間違える。魏紹昌が肝心の雑誌停刊年月について書き換えた事実を知らないからそうなった。研究の基本を実行していないのもよくない。

- 9) 劉霞「關於《文明小史》的刊行時間」『現代語文』2012年第1期（総第454期）2012.1.5 電字版

- 10) 劉霞『《文明小史》研究』煙台・魯東大学硕士学位论文2012.4.20。碩士論文と略す。参考文献に『李伯元全集』をあげるのは当然だ。しかし、『李伯元全集』で代表させるのではなく王学鈞の詳細な「李伯元年譜」は特別に掲載すべきだった。それが適切なあつかいだと考えるからだ。

なお王瑤子『《繡像小説》研究』（揚州大学硕士学位论文2003.5）があることだけを書いておく。



劉霞碩士論文

11) 次を追加する。

劉穎慧『晚清小説広告研究』北京・人民出版社2014.9。

謝仁敏『晚清小説低調研究——以宣統朝小説界為中心』北京・中国社会科学出版社2014.10。

文 娟『文学場域変革中的交融共生——掃葉山房説部及雑誌刊行研究』上海大学出版社2015.11の「附録4 《申報》所刊雷瑯的謝贈文字」

12) 薛正興「前言」薛正興主編『李伯元全集』第5巻 南京・江蘇古籍出版社1997.12

13) 魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12

14) 釧影「清晩四小説家」『小説月報』第2巻第7期（総第19期）1942.4.1／のち「晚清四小説家」とし『李伯元研究資料』1980。28頁

15) 陳平原『二十世紀中国小説史』第1巻（1897年-1916年）（北京大学出版社1989.12）85頁の注4。李丹「《文明小史》：晚清維新歴史的一面鏡子」『四川師範大学学報（社会科学版）』第27巻第5号（総第122期）2000.9.10。81頁。王燕『晚清小説期刊史論』（長春・吉林人民出版社2002.11。428頁）もほぼ同じことを書いているが李丹には触れない。また劉霞碩士論文5頁は李丹を出して王燕には言及しない。

16) 樽本「李伯元の肺病宣言——『繡像小説』発行遅延に関連して」『清末小説から』第69号 2003.4.1、1-13頁。『清末小説叢考』2003所収。要旨：李伯元の死因は肺結核であることは定説になっている。主として友人の証言による。このたび李伯元自身が光緒三十二年二月十五日付『世界繁華報』に広告文を掲載しみずからが肺病であること、招宴を断わる宣言をしている事実を発見した。新出資料である。李伯元が肺病であったことの確証となるばかりか、『繡像小説』の刊行が遅れていた事実と関連するから、さらに資料的価値が増す。すなわち、李伯元の肺病は、彼の死因となっていると同時に『繡像小説』の恒常的発行遅延の原因だということになるからだ。

## 新しい「説部叢書」研究

『清末小説から』第124号（2017.1.1）に掲載。神田一三名を使用。商務印書館版「説部叢書」研究の2論文を紹介評論する。鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』2013博士論文、および付建舟「商務印書館“説部叢書”初集考述」（『漢語言文学研究』2015年第4期 2015.12.15）だ。

鄭方曉論文は「説部叢書」初集本（四集系列）が総324編あると指摘し従来の総322編よりも多い。それは元版（十集系列）に作品の入れ替え2編があるため実質は12編になるからだ。私は元版（十集系列）102編とするのが適切だという。もうひとつ過渡期初集本を3種類提示したところが新しい。ただしその表紙は元版タンポポ文様であり「第一集」と表示する。これは初集の形態ではない。元版を延長した変種だ。商務印書館編訳所が試行錯誤した結果に出現したものと判断した。

付建舟論文は次のことを指摘する。元版（十集系列）が刊行終了したのは「1907年7月」だと。『掃迷帚』再版に掲載される広告に元版（十集系列）刊行終了とある。その再版奥付に表示しているのが「1907年7月」。それを立論の根拠にした。だがそれは再版に見える初版の刊年である。初版にその広告が掲載されている保証はない。ゆえに根拠にすることはできない。資料とすべきは広告ではない。元版（十集系列）の実物を見なければならぬ。その結果付建舟の立論は間違いであることがわかる。実際に刊行された書物の奥付を確認すれば元版（十集系列）刊行終了は1908年である。

商務印書館版「説部叢書」について研究論文を発表する研究者は多くない。その状況については過去に説明した。今回は比較的新しい中国語論文2本を取りあげ紹介評論する。

論文を紹介する前にいままでの研究の様子を簡単にのべる。概略を知ることが、この2本の研究水準を理解する助けになるだろう。

## 1 商務印書館版「説部叢書」をめぐって

商務印書館版「説部叢書」とは翻訳文学シリーズ（叢書）だ（以下、商務印書館版は省略する）。海外小説の漢訳を中心に収録してある。清末民初時期に300編をこえて大量に刊行された。これほどの多種類を叢書としてひとつの出版社が最初に継続刊行した。そういう例は当時の中国にはなかった。画期的だったといっている。のちに著名な作家となる人々が海外文学を知る契機となったことでも知られる。魯迅、周作人兄弟はそれらを読んだばかりではなかった。自分たちで翻訳した作品が当の「説部叢書」に収録されてもいる。

「説部叢書」は大いに売れた。商務印書館の経済的基盤を強化するのに貢献したと思われる。重印の版数がとても多いところからそうと理解できる。商務印書館は商業用印刷から創業し、教科書の編集出版に業務を拡大してそれを基盤にしていた。そこから他分野への事業展開をはかっていた商務印書館にとって「説部叢書」は一般書刊行分野における重要な叢書のひとつだった。

実物を見れば主として薄い冊子だ。背表紙に書名もない。紙質、製本ともに上質とはいいいにくい。表紙と奥付を後から張りつけた平装本であるのは大量販売には向いていた。だがそれは同時に長期保存がむづかしい原因となる。その体裁からして消耗品として扱われたような印象を受ける。数が多く出まわったのもその要因のひとつかもしれない。私は故中村忠行先生から聞いたことがある。戦前の台湾では薬屋の景品として「説部叢書」が配布されていたという。1冊2冊と購入していると徐々に売値が高くなったそうだ。

「説部叢書」は有名だがその成立過程については不明な部分が多い。

商務印書館からして自社の叢書であるにもかかわらず詳細な記録を残していない。どのようにして成立したのかを説明したことがない。社内に研究職の社員は多数いるはずなのに不思議なことだ。また翻訳小説の叢書だから各作品の詳細、たとえば原作、原作者について知りたいが基本的に解説がない。『商務印書館図

書目録（1897-1949）』（1981）には部分的な注記がある。だがはるか昔に刊行した自社目録を写しているだけ。間違っものが混じっている。それを訂正することもしない。さらには該目録にある書籍はすべて刊年不記である。昔の販売用広告のまま。出版社が刊行する図書目録ということはできない。研究資料としては信頼性に欠けるといわざるをえない。残念なことだ。

困った例を示す。困ったとは、読者に誤った印象を与えるという意味だ。商務印書館社史に「説部叢書」の写真掲げるものがある（図1）。



説明文は「《説部叢書》（1903）：周卓訳《紅星佚史》（1907）」とわずか1行にすぎない。だが説明の字句が掲げた写真と一致しない。その結果は読者を惑わせる。

1903と書いている。刊行を開始した年を意味する。当然そこに掲げてある赤色リボン文様の表紙が最初の装丁だと普通に思う。だがリボン文様になったのは1913年の初集本からだ。年代が間違っている。1903年と書くのであれば該当年

の「説部叢書」を掲げるべきだ。それがない。説明文の周卓は周連の誤り。周作人と魯迅の共同筆名だと注するのがよい。また『紅星佚史』に1907と記す。1907年に刊行された『紅星佚史』の表紙は写真のものではない。少なくとも「説部叢書」元版第八集第八編にはそれとは違う意匠＝タンポポ文様を使用していた(図2)。



図2 ウェブより引用

ところがそれを示さず説明もしない。写真にある「説部叢書」初集第78編は1913年以降に出版したものだ。

以上のとおり百周年記念誌であるにもかかわらず、整理して正確に記述するという姿勢が見えない。

すでに失われた出版社であれば詳細が不明であるのもしかたがない。だが商務印書館は現存している。世界的に見て著名な大出版社だといっていい。しかしそれにしてもいかがかと思うくらい「説部叢書」についてその扱いは無責任である。

清末民初時期の翻訳を紹介する論文は、必ずといっていいくらい「説部叢書」

に言及する。ただしそれが刊行されたというだけを述べるものが多い。くり返すが版元そのものが叢書全体の詳細を把握していないことも原因のひとつか。

陳大康『中国近代小説編年史』全6冊（北京・人民文学出版社2014.1）は「説部叢書」を注記しながら基本である元版と初集の区別（後述）をつけることができずに誤る。

「翻訳小説は中国文学ではない」そういつて翻訳小説研究をおろそかにしていた。それがついこのあいだまでの中国学界の実状だ。そういう状況下では研究者は少なかった。また利用できる資料に限られるのもしかたがないだろう。

利用できる資料というのは「説部叢書」そのものが主になる。参照できる先行論文は日本を除いて多くない。

そこで発生するのが資料と研究という2項目だ。

「説部叢書」を資料として収集するのは研究の基礎である。いうまでもない。見ないで論文を書く研究者はいないだろう（たぶん）。

全冊（元版とのちの初集本）を完全に所蔵する個人はどこかにいるのだろうか。いるのだろうが公に聞いたことがない。だからこそ個人的に収集した「説部叢書」を披露したくなるらしい。しかし数多く収集すればそれが研究になるかといえば、そうはならないからむつかしい。どういうことかといえば、「説部叢書」としてこういう作品が刊行されましたと書名をあげるだけでは研究とはいえないからだ。それほど簡単ではない。

一方で地道な研究が継続されているのも事実だ。「説部叢書」収録の各作品について現在まで判明している研究成果のすべてを反映するように努力している目録である。樽本照雄編『清末民初小説目録X2（第8版）』（2016ウェブ公開。追記：2018年に第10版を公開）がある。普通の図書目録が明記しない原作、原作者を可能なかぎり記載する。工具書として利用することができる。

先に触れたように「説部叢書」そのものの成立過程が複雑である。複雑であるからこそ私は興味を覚える。そこに問題があることを認識する人は少ない。謎を解明しようとする研究者が少ない理由のひとつになっている。

読者の理解を助けるために、成立の基本構造について分かっていることを簡単に紹介しておく。



## 2 「説部叢書」の成立

基本的知識として「説部叢書」には元版とのちの初集本という2系統があることを理解するのが重要だ。

それを最初に指摘したのは、1981年の中村忠行論文（以下、中村1981とする。詳細は「参考文献」を参照のこと。以下同じ）だった。元版、初集本という用語は、中村が該論文で使用した。私はそれを継承している。

この元版と初集本に解明すべき問題が集中している。ここでいう問題は謎といってもいい。複雑でなかなか理解することが以前はむつかしかった。

商務印書館は最初、翻訳書を独立した個々の作品として刊行していた。書籍広告のなかでは普通名詞の説部叢書を使いそこにまとめて表示していただけ。この説部叢書は叢書名ではない。

1903年11月19日から商務印書館は日本の金港堂と正式な合弁会社になった。前年の1902年あたりで両者には関係がすでに生じていたのが事実だろう。商務印書館は失火をし、金港堂には教科書事件があった。そのため正式合弁が予定よりも遅れた。叢書の創設には合弁以前に金港堂から助言があったのかもしれない。

1903年、シリーズ名として「説部叢書」があらためて付与された。すでに刊行していた翻訳のうち対象を海外小説に絞りそれらを集める。集編番号を振って組織化する方向に動き出す。一集に10編を収録し全十集で合計100編になる。これが元版である。1905年からそれまでばらばらだった表紙をタンポポ模様統一した（図3 『佳人奇遇』）。1908年、改組して一部作品の入れ替えを行ない同年内に元版十集全100編は完結した（後述）。それを箱詰めにして販売もしている。金港堂との合弁を解消する直前の1913年に「説部叢書」は初集と改称し第1編から第100編までの通し番号に振り直した。また表紙をリボン文様に変更している。1914年1月6日、商務印書館は金港堂との合弁を正式かつ秘密裡に解消した（それを報告する商務印書館株主特別会議は1月31日開催）。実質10年間の合弁事業だった。その合弁解消を記念してリボン模様の初集本を再版する。現在よく見かけるのがこの初集再版本だ。先に説明した商務印書館百周年記念誌に掲



図3 元版 孔夫子旧書網より。奥付なし

載している写真がそれである。その後、継続して2集100編、第3集100編を刊行し第4集第22編をもって1924年に完結した。

本稿では2系統を区別するために元版の集数には漢数字（例：第一集、第二集など）を、初集以降にはアラビア数字（例：2集、第3集など）を使用する（注：2集は第2集ではない。初集は表紙に「初集」と表示し、2集は「二集」である。それ以降は「第三集」「第四集」だ）。

### 3 研究の状況

今でこそ以上のように要点を説明することができる。だが中村1981が公表される以前は、刊行状況についてはほとんど不明だった。だいいち「説部叢書」を専門に論じたのは中村1981が世界で最初だったことをいわずにはならない。それを受け止め日本で研究が継続された（樽本2016に収録）。

中村1981を読まない研究者が迷走するのはしかたがない。そこにある変遷の道筋が理解できなければ、「説部叢書」そのものをいくら収集したとしても研究にはならない（陸昕2001、黄暉2008など）。それだけで終わらせないためには工夫が必要になる。たとえば不明である原作品と原作者を特定するならば研究になりうる。単にこういう翻訳作品がありますとただだけでは不十分であるのはいうまでもない。

### 鄭方曉の研究

鄭方曉2013は博士論文として書かれた。

専門論文ならば中国では付建舟の文章が先行する（後述）。だが博士論文として「説部叢書」を主題とするのは珍しい。以前はなかった。もしあるのならばご教示いただければうれしい。

目次を記して全体の構成を示す。

第1章《説部叢書》的数量与版本系統

第2章《説部叢書》的分類与範圍特点

第3章《説部叢書》作品的個案研究（注：佳人奇遇、夢遊二十一世紀、華生包探案）

第4章《説部叢書》的編訳隊伍

第5章 結 語

附 録《説部叢書》系列目錄（注：此表根據（日）樽本照雄著《新編清末民初小説目錄》相關条目整理）

商務印書館について創業からの歴史を記述する部分がある。鄭方曉は、付建舟が提出した用語「十集系列」「四集系列」を使用している（35頁）。

「十集系列」とは先に示した元版のこと。本稿では統合して元版（十集系列）と称する。「四集系列」とは後の初集以下をさす。初集本（四集系列）と書く。

私が鄭方曉論文に興味をおぼえたのは次の2点だ。

- 1 「説部叢書」の総数を324編とする。

2 元版（十集系列）から初集本（四集系列）へ移行する「初集」の最初の形態があることを示す。

1の総数については、以前から322編だと私は指摘している。過去において数字を示して340種、<sup>ママ</sup>220[320]多部、323種などという人がいた。私が322編とする根拠は簡単だ。初集100編、2集100編、第3集100編、第4集22編を合計すれば322編になる。それだけのことだ。

鄭方曉は324編と書いて2編が増える。その理由は元版（十集系列）の作品入れ替えにある。私が補足説明すれば1908年に実施された改組のことだ。第一集第一編『佳人奇遇』は『天際落花』に、第二編『経国美談』は『劇場奇案』に差し替えられた。第一集の10編という表面上の数には変化がない。しかし入れ替えがあるのだから実質は12編が存在している。その2編を数えれば322編プラス2編の合計324編になる。

なるほど鄭方曉のような数え方も成立する。

しかし私の考えは少し違う。元版（十集系列）についてのみ「全100編（実は102編）」と説明するのが適切だ。

初集本（四集系列）は元版（十集系列）とは別に成立したと考えるからだ。初集本（四集系列）には最初から『佳人奇遇』と『経国美談』は収録されていない。こちらは全322編のままがいい。

両者は関係があるのだからどうしてもそれを反映させたいというのであれば「全322編（元版（十集系列）を含めれば実質は324編）」と説明することも可能だ。

2で鄭方曉がいう「初集」の最初の形態が存在していたことははじめて知った。今まで提示した人はいない。

以前、元版第一集第八編<sup>ママ</sup>『金銀島』（光緒三十年九月首版）という奇妙な版本があることについて書いたことがある。付建舟、朱秀梅『清末民初小説版本経眼録』（上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2010.6。30頁。記号は[付朱]）に写真が掲載されたのが最初だろう。現在、元版『金銀島』は影印本で入手できる。

元版第一集第八編は本来、『英国詩人吟辺燕語』（光緒三十年七月首版／光緒三十一年三月再版／光緒三十二年四月三版）の集編番号だ。ゆえに『吟辺燕語』はのちに

初集第8編になる。

『金銀島』はそれと重複してしまう。発行月を見れば『吟辺燕語』よりも二ヵ月遅れていながら集編番号を先行書物に重複させた。だから奇妙だという。『金銀島』は普通元版第二集第一編に配置される。そこから初集第11編に組み込まれて編番号に矛盾はない。ゆえに元版第一集第八編とする『金銀島』の集編番号はなにかの手違いによる誤植だろう。商務印書館の「説部叢書」管理はそれほど厳格ではない。それにしても普通、集編番号を間違えるだろうか。

それとは違う種類の版本が存在することを鄭方曉は指摘している。集編番号を誤植する『金銀島』を含めて順序を入れ替えて示す。

○『金銀島』光緒三十(1904)年九月首版 第一集第八編 (50頁)

説明：鄭方曉は2系列以外の系統かという。違いうだろう。これについて私は上述のように誤植だと指摘しておいた。元版の表紙は絵図(図4)だ。タンポポ文様に統一される前のもの。扉(図5)と奥付(図6)を示す(付建舟氏に感謝[付朱30]を参照のこと)。



図6 奥付



図5 扉



図4 元版タンポポ文様以前の表紙

○『金銀島』中華民國三年(1914)四月再版 第一集第一編 (49頁)

説明：写真あり(図7)。表紙はタンポポ文様。元版(十集系列)だから「第一一

編」などあるはずがない。しかしないものが実在する。元版（十集系列）第二集第一編のタンポポ文様を参考までに示す（図8）。



図8 元版タンポポ文様 鄭方曉論文より



図7 鄭方曉より。写真不鮮明はもとのまま

初集第11編はある。リボン文様 初集第11編 甲辰(1904)年九月初版／中華民国二(1913)年十二月版（図9、図10）／初集再版 甲辰(1904)年九月初版／中華民国三(1914)年四月再版（図11、図12 孔夫子旧書網より引用）

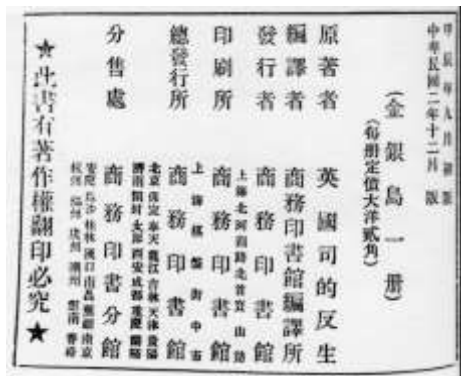


図10 初集初版 奥付拡大



図9 初集初版 表紙



図12 初集再版 奥付拡大



図11 初集再版 表紙

以上を変化の順に示す。

元版第一集第八編<sup>ママ</sup> (誤植 図4、5、6) →元版第二集第一編タンポポ文様 (図8)  
→ (新出) 第一集第一編タンポポ文様 (図7) →初集第11編リボン文様 (図9、10、11、12)

○『回頭看』乙巳(1905)年二月初版／中華民國二年(1913)十二月再版 第一集第一二編 (48頁)

説明：写真あり。表紙はタンポポ文様。タンポポは元版 (十集系列) だから「第一二編」があるはずはない。しかしないものが実在する (写真不鮮明のため掲げない)。

初集第12編はある。リボン文様  
初集第12編 乙巳(1905)年二月初版／中華民國二(1913)年十二月版 (図13)



図13 奥付拡大



○『迦茵小伝』奥付なし 第一集第十三<sup>ママ</sup>[一三]編 (51頁)

説明：写真なし。『金銀島』と『回頭看』がそれぞれ「第一編」「第一二編」だから、『迦茵小伝』も同様に「第一三編」という記載だと推測する。「第十三編」ではないだろう。

初集第13編はある。リボン文様 初集第13編 乙巳(1905)年二月初版／中華民国二(1913)年十二月版 (図14)



図14 巻上表紙

説明で書いたようにタンポポ文様は元版（十集系列）で使用された。あくまでも各集10編の範囲内におさまるものだ。普通ならばそれを超えて第一一、一二、一三編となるはずがない。ないはずのものが存在するから不思議に思う。

上に見るのは1913年、1914年の刊行物だ。時期的に言えば商務印書館が日本金港堂と合弁を解消する前後と重なる。

事実をたどれば「説部叢書」元版（十集系列）は、1913年に初集と改称し編数は第1-100編の通し番号に変更した。同時に表紙をリボン文様に一新した。前述のとおり1914年1月に合弁解消が正式に成立する。それを記念してリボン文様初集100種を再版した。複雑な重版状況が奥付の刊年表記に反映されている。少し見ただけではその変遷を理解するのはむづかしい。

問題になっている元版タンポポ文様の規格外『回頭看』『金銀島』『迦茵小伝』



のいずれもが1913年末から1914年にかけての刊行であるらしい（奥付の写真がないから鄭方曉の記述による）。そこに問題解決の手がかりがあるのではないか。

不思議な規格外3種の集編番号と刊行年月をのちの初集リボン文様と比較対照する。

元版タンポポ文様規格外 / 初集リボン文様

『金銀島』	第一集第一編	1914.4再版	/	初集第11編	1913.12
『回頭看』	第一集第二編	1913.12再版	/	初集第12編	1913.12
『迦茵小伝』	第一集第三編	?	/	初集第13編	1913.12

わずかに3例である。これ以外にも同様のタンポポ文様で第一四編以降の版本が刊行されたかどうかは不明だ。

上の規格外3種のうち『金銀島』は特に奇怪だというよりほかない。なぜなら、リボン文様初集第11編が1913年12月に出版されているにもかかわらずタンポポ文様第一集第一編としてそれよりも遅い1914年4月再版になっているからだ。すでに新しい初集が出ている。あとから前の元版を表紙に使用する規格外版本が刊行されるのはおかしい。なにかの間違いだ。あるいは小さな違いには頓着しなかったか。

どうやら「説部叢書」の編集部、あるいは担当編集者は相当に混乱している。そうとしかいいようがない。同じ作品のタンポポ文様に第二集第一編と第一集第一編というふたつの集編番号を混在させているからだ。

混在する要因のひとつは、「説部叢書」の製本方法にある。本文印刷とは別に表紙と奥付がある。本文は基本的に同じものを使用し表紙と奥付だけを張り付けるのだ。表紙奥付を取りかえれば、新しい書籍として再生することができる。

私は、以上の資料をもとにして次のように推測する。

元版（十集系列）全100編（実は102編）は1908年に改組し完結した。『佳人奇遇』と『経国美談』の2編を含まない全100編は、タンポポ文様のまま重版をくり返して販売だけを行っていた。木箱にまとめて売り出したことは述べた。だがそれまで通りの重版と販売がむつかしくなったと判断されたのだろう。直接の原因

は商務印書館と金港堂の合弁解消だ。

日本金港堂との合弁それ自体は、商務印書館にとって利益のあるものだった。創業以来の経済的危機を金港堂＝原亮三郎の投資によって救われ、さらには金港堂のもつ最新式印刷技術を導入することができた。なによりも大きかったのが長尾雨山、小谷重らを商務印書館に迎えたことだ。彼ら日本人の熱心な協力を得て教科書編集に必要な知識上、技術上の秘訣を知ることができた。これを金額に換算することはできない。

商務印書館に有利な合弁を解消する方向に動かなければならなかったのは、異民族からの独立をはたした中華民国の成立があったからだ。清朝末期まで商務印書館は教科書の編集販売の分野において巨人であった。そこから飛び出した陸費逵らが設立したのが中華書局だ。中華書局は自社の教科書を宣伝する時、商務印書館に日本の資本が入っていることをあげて激しく攻撃した。商務印書館は異民族日本の資本と合弁している。その商務印書館が編集刊行する教科書類を子どもたちに使用させていいのかと。商務印書館からすれば日本金港堂との合弁を解消しないかぎり中華書局からの攻撃を受け続けなければならない。そういう事情、背景があった。

商務印書館は合弁解消をひとつの機会としてとらえ「説部叢書」を継続維持しさらに将来の方向性を模索して試行錯誤したと思われる。商務印書館内部では「説部叢書」の名称は継承したまま一部を更新する方向に動きはじめた。その時点で「初集」という新しい名称とリボン文様を使用する版本もすでに刊行していた。

一方で従来からある「第一集」の名称とタンポポ文様を利用しながら編番号だけをもとの第二集第一編から第一集第一編と付け直した。つまり「第一集」の名のもとに番号を通して振り直すことにより表面上の更新をしようとしたのではないか。商務印書館編訳所による臨時の措置だ。規格外の版本を試験的に製作したのだろう。写真のタンポポ文様を見て私はそう思う。

基本は在庫の本文に表紙と奥付をはりつけるだけだ。変更作業は比較的簡単だったと思われる。わずかな数しか作成されなかったし、おそらく実物は市場にほとんど出なかったのではないか。商務印書館内部で試作した本だと考える理由だ。

その証拠に商務印書館の書籍広告に「第一集第一編」などという表示を見たことがない。鄭方曉が該書をどこで見つけたかは不明だ。少なくとも今までの研究者で言及した人はいない。

当然のように不具合が生じる。従来の「第一集」を使用し表紙もタンポポ文様で同じだから、すでにある「第二集第一編」と紛らわしい。また、今までどおりにタンポポ文様の表紙だから重複延長しただけの規格外になってしまう。合弁会社から独立したことを社会に訴えるためには目に見える変化が必要だ。おおむね商務印書館編訳所内部でそのような議論があったのではないか。

結局のところ元版の第一集から第十集までの全体を「初集」に変更し表紙も新しくリボン文様で統一することにした。作品構成はほぼ従来通りだが見た目が一新する。こうして初集100編から1914年に全体を再版してのちに次の2集100編につながる。

以上はあくまでも私の推測だ。しかし推測といっても「説部叢書」の奥付にある刊行年月を根拠にしている。

鄭方曉は説明して次のようにいう。「編番号を「第一集第十数編」という版本の「説部叢書」は、「十集系列」から「四集系列」へ移行する「初集」の最初の形態に違いない……〔編号为“第一集第十幾編”版本的《説部叢書》應該是“十集系列”向“四集系列”過渡時“初集”的最初形態，……〕(51頁)

重要だからくり返す。「十集系列」から「四集系列」へ移行する「初集」の最初の形態」というのが鄭方曉の考えだ。

わたしはいくつかの点で鄭方曉説に疑問を持つ。

ひとつは販売の有無だ。「初集」の最初の形態」といえば、正式な版本として販売されたように理解される。だがはたして市場に投入されたのだろうか。もう少し資料の提示（たとえば奥付の写真公開）と説明が必要となる。

ひとつは現在見つかっているのが3種類だけである点だ。「初集」の最初の形態」だといいつながら3種類では少なすぎる（追記：「商務版「説部叢書」試行本」本書所収を参照のこと）。

ひとつは掲げてある写真の版本は表紙がタンポポ文様であることだ。しかも「第一集第一編」とあって途中からになる。その前には依然として元版（十集

系列)の第一集が存在している。どうしてもそれを延長したものにしか見えない。

決定的なことがある。「初集」の最初の形態」といいながら、実物に見えるその呼称は「第一集」であって「初集」ではないことだ。もしも表紙が元版タンポポ文様でしかも「初集」という表示があれば「初集」の最初の形態」ということができる。だが実物は「初集」ではない。これでは「第一集」の延長上に発生した変種であって「初集」の最初の形態」ということはできない。

以上をもって鄭方曉のいう「初集」の最初の形態」は正しくないと考える。

私の見方をくり返せば試作品である。漢語でいう「試行本」と同じこと。全体をひとまとめにする方向でとりあえず従来からある呼称の「第一集」を試験的に使ってみたということにすぎない。

金港堂との合弁解消の前後は商務印書館全体がいわゆる混乱状態にあっただろう。それが編訳所に影響をあたえたのではないか。タンポポ文様の第一集に第十編以上の数字をつけた試作品をつくった。販売したかどうかは不明だ。十分に考慮したようには見受けられない。だからこそ混乱しているという印象をもつ。

以下は鄭方曉論文を読んで気になった点をのべる。

樽本照雄編『新編増補清末民初小説目録』（2002。樽目録第3版と略称）に言及がある。ウェブで公開している最新版は利用できなかつたらしい。劉永文『晚清小説目録』（2008）と比較して劉目録の方が樽目録第3版よりもすべての面ですぐれているそう（劉永文所編的《晚清小説目録》，無論是資料搜集的扎实準確性還是体例編排的清晰規範性，都要略優於樽本照雄先生所做的目録）12頁。

鄭方曉の個人的感想だ。それについて私が言うことは特にない。ただし鄭方曉が作成した附録「《説部叢書》系列目録」に問題が発生する。典拠資料について注釈があるが、おかしなものだ。次のように説明する。「此表根據（日）樽本照雄著《新編清末民初小説目録》<sup>1</sup>相關<sup>2</sup>条<sup>3</sup>目<sup>4</sup>整理」。依拠したのは樽目録第3版だという。これはなにか。

劉永文目録のほうが樽目録第3版よりもすぐれていると鄭方曉は断定した。「《説部叢書》系列目録」を作成する際にその優れた劉永文目録を鄭はなぜ使用しなかつたのだろうか。矛盾している。劉永文『民国小説目録』（2011）も利用できたはずだ。鄭が劉永文目録よりも劣る樽目録第3版に依拠したことはどう考

えても不思議かつ不可解に思える。「説部叢書」目録を作成するについては、なによりも内容のより優秀な劉永文目録を使用しなければ意味がないではないか。

「《説部叢書》系列目録」は初集本（2集、第3集、第4集を含む）を主として対象にしている。元版はかろうじて刊年欄に記載がある。欄外に『経国美談』『佳人奇遇』が刊行されたと注をつけるだけ。集編番号についても元版（十集系列）は初集本（四集系列）とは別ものだ。両者を分けて区別がつくような工夫が必要ではなかったか。

中国では阿英目録あたりからはじまって翻訳小説の原作について記述しないのが一般的だ。当時は原作を明らかにする力がなかったのだろう。以後の目録は記述しない方針を遵守しているかのように見える。鄭方曉の一覧表も同様だ。樽目録第3版を参照していながらそこで記述している原作、原著者についてのすべてを無視した。鄭方曉はなぜ独自に注記しなかったのか。それができないのであれば樽目録第3版を写してもよかった。翻訳叢書の専門研究だから原作についての説明があるべきだ。そこを無視したことは研究の後退になる。博士論文としてはもの足りない。

鄭振鐸から引用してあいかわらず間違った林紓批判をくり返している（78頁）。

シェイクスピアの戯曲を小説に書き換えたと批判する。2007年にはすでに真相が明らかにされている。鄭振鐸による林紓冤罪事件であることを知らないらしい。

『梅孽』についても「将伊ト森（今訳易ト生）所作的戯劇《群鬼》改編成了一部文言小説」（78頁）と書いて鄭振鐸と同じく林紓に濡れ衣を着せている。これも2008年にはもともと小説化された英語作品を底本に使用したことが明らかにされている。指導教授からの指導はなかったようだ。

「林紓と商務印書館が協力した最初の翻訳作品は『英国詩人吟辺燕語』に違いない〔林紓与商務合作的の第一本翻訳作品應該是《英国詩人吟辺燕語》〕」（139頁）と書く。誤り。それよりも早く1903年に林訳『伊索寓言』が商務印書館から刊行されている。

「参考文献」の原始文本（180-182頁）に掲げられた諸本には角書を採用していない。理由は不明。

## 付建舟の研究

付建舟2009は中村1981を読んでいないと思う。だが「説部叢書」が2系統に分かれることを独自に把握した。広告を丹念に調査しながら彼の用語で「十集系列（元版のこと）」と「四集系列（初集本のこと）」に区別した。数多くの清末民初版本を実物で検討している付建舟だからこそ可能なことだった。中国人研究者では最初の提起である。鄭方曉もその用語を使用している。

付建舟は実物を収集し「清末民初版本経眼録」シリーズを発表している。現在、5種類を見ることができる。現存する書物にもとづいた堅実な研究を進めているのがわかる。高い評価を得て当然だ。

このたびの新しい付建舟2015の主眼は以下のとおり。

「説部叢書」は「十集系列（元版）」と「四集系列（初集本）」に分かれる。「十集系列」の100種は、「四集系列」の初集である。ここまでは以前の主張のくり返し。次が新しい。「十集系列」は1903年に出版を開始して「1907年7月」に全部を刊行し終わる。年月にカッコをつけた理由は後述する。

「十集系列」の刊行完結を「1907年7月」に特定したところに注目する。私が述べてきた1908年元版（十集系列）完結とは異なる。

付建舟2015の研究方法は、実物の奥付にある初版刊行年月の記載を重視することだ。

例えば『夢遊二十一世紀』の奥付写真を掲げて次のように説明する。

中華民国二年（1913）十二月六版本には「癸卯年四月初版」とある。初版は1903年<sup>ママ</sup>5月である、という。ママとつけたのは日にちのない旧暦を新暦に機械的に変換することはできないからだ。癸卯年四月は新暦になおせば4月27日から5月26日になる。「5月」だけでは不十分だ。正確に書こうとすれば「癸卯（1903）年四月」とするよりしかたがない。

私は付建舟が後の版本の奥付を立論の主な根拠にするところに不安をおぼえる。実物を数多く確認している付建舟にいうのはためられるが、その認識の方法は危険だ。なぜなら六版本にある初版についての記載が間違っている可能性もあるからだ。「説部叢書」は重版をくりかえしているからいくつもの刊年記載がある。

一部を除いて全部が一致することは多くはない。実物を多数手にしている付建舟はそのことをよく知っているはずだ。最終的には初版本そのもので確認することが必要だ。

例を示す。同じ商務印書館が刊行した林訳『伊索寓言』の第十八版の奥付には「丙午年十一月初版／中華民國十一年三月十八版」とある。付建舟にならえば、初版は丙午（1906）年だとしか思えない。事実は違う。初版は光緒二十九（1903）年だ。該書の第八版あたりからどういうわけか初版の表示が間違っている。

私が見るところ再版によって初版を判断するのは不適切だ。重ねていう。「癸卯年四月初版」とある初版の実物を確認することが重要だ。

付建舟が別の例としてあげる『劇場奇案』は、元版（十集系列）と初集本（四集系列）の初版年月がさいわい一致していた。『経国美談』から作品の入れ替えを指摘したのはいい。だが1908年に行なわれた「説部叢書」の改組を証明する版本であることに言及しないのは残念だった。

さて元版（十集系列）が刊行完了した年月が問題だ。付建舟は「1907年7月」と明記している。その根拠はなにか。

彼は『掃迷帚』（光緒三十三年七月初版、宣統元年歳次己酉九月再版）の広告を証拠として提出する（31頁）。

「説部叢書百種」という広告に刊行が完結したと宣言している。該書の奥付にある「宣統元年歳次己酉九月再版」は無視して「光緒三十三年七月初版」の方を根拠にしたらしい。それを「1907年7月」と書き換えた。そうなると中国では見なれた新暦旧暦混用である。

付建舟は勘違いをしている。「説部叢書百種」という広告が初版「光緒三十三年七月初版」すなわち彼のいう「1907年7月」版にも掲載されていると考えたのだ。それはおかしい。宣統元（1909）年歳次己酉九月再版には「説部叢書百種」という広告は確かに掲載されているのだろう。だが初版にもあるという保証はどこにもない。このばあい『掃迷帚』初版に「説部叢書百種」という広告があることを確認する必要があった。それにあるのならば付建舟のいう「1907年7月」完結の傍証とすることができる。だがたぶんそれはない。

付建舟は資料確定の優先順位を間違えている。元版（十集系列）の刊行完結を

把握するためには、実物の奥付を確認することがなによりも優先されなければならない。書籍広告は傍証にはなるだろう。だが傍証を直接の根拠にするためには慎重な扱いを必要とする。

私が写真で奥付があること確認した元版（十集系列）第十集は以下の4種類だ。典拠を文末に記す。

『新飛艇』第十集第一編 光緒三十三年十二月初版 [付二196]

『鉄血痕』第十集第四編 光緒三十四年二月初版 [付三188]

『双喬記』第十集第八編 光緒三十四年三月初版 孔夫子旧书网に写真あり  
(図15)

『双鴛侶』第十集第九編 光緒三十四年六月初版 孔夫子旧书网に写真あり  
(図16)

記号は以下のとおり。

[付二] 付建舟『清末民初小説本経眼録二集』杭州・浙江工商大学出版社2013.1

[付三] 付建舟『清末民初小説本経眼録三集』北京・中国社会科学出版社2013.8



図16



図15

以上の4種をみれば第九編の「光緒三十四年六月」がその中ではいちばん遅い出版で1908年だ。実物がそうになっている（ネット古書店で見た『海衛偵探案』第十集



第十編には奥付がなかった)。

以上を見れば元版(十集系列)第十集の刊行終了は1908年だと考えるのが妥当だ。私は従来から指摘している。付建舟のいう「1907年7月」完結は正しくない。

付建舟は自分で実物の2種類を確認しているはずなのになぜそれを利用しなかったのか。第四編は光緒三十四(1908)年二月初版([付三188])であって広告の「1907年7月」よりも明らかに遅い。確かな証拠を手元においているはずなのに忘れたのだろうか。不思議に思う。

あとは鄭方曉2013との比較になる。

日本にいる私が鄭方曉の博士論文を読んでいる。付建舟論文の欄外注によると目下のところの研究主題は「説部叢書」研究だ。当然、付建舟は鄭の博士論文を読んでいると考えて以下を述べる。

付建舟は鄭方曉が提起した『金銀島』編番号の不具合を説明しない。もとは付建舟自身が前出[付朱30]に収録した版本ではないか。言及があってもよかったように思う。

鄭方曉は「説部叢書」全数324編とした。付建舟は「合集322種」(32頁)と書いて鄭説について話題にしない。

鄭方曉のいう「十集系列」から「四集系列」へ移行する「初集」の最初の形態、私のいう試作品(試行本)に関する付建舟の意見を読みたかった。

#### 【参考文献】

中村忠行「商務版『説部叢書』について——書誌学的なアプローチ」『野草』第27号 1981.4.20

謝菊曾「《説部叢書》和《林訳小説》」『涵芬楼往事』『随筆』第6集 1980.2

陸 昕「説《説部叢書》」『蔵書家』第3輯 2001.6

陸 昕「《説部叢書》搜尋記」黄秀如主編『書の迷恋』台湾・英属蓋曼群島商網路与書股份有限公司台湾分公司2004.4 網路与書10/北京・現代出版社2009.9

陸 昕「從《説部叢書》談搜書所見」『閑話蔵書』北京・学苑出版社2005.8北京第3次印刷所蔵鑑賞書系

黄 惇「也説《説部叢書》」『蠹痕散輯』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2008.2  
付建舟「談談《説部叢書》」『明清小説研究』2009年第3期（総第93期）2009発行月日不  
記

鄒瑞珩「“説部叢書”的胸懷」袁進主編『中国近代文学編年史：以文学広告為中心（1872-  
1914）』北京大学出版社2013.5。注：2種類あることを指摘する。ただし、名称を提  
案しない。ひとつは1903年から刊行しはじめたもの（本稿でいう元版（十集系列））。  
もうひとつは1914年に商務印書館が日本資本（金港堂）を退けてから重版した初集。  
これは最初の「説部叢書」の再版だという。「説部叢書」組織化の変遷についてはそれ  
以上の説明はない。

鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』復旦大学2013 博士論文

付建舟「商務印書館“説部叢書”初集考述」『漢語言文学研究』2015年第4期 2015.12.15

樽本照雄『商務印書館研究論集（増補版）』清末小説研究会2016.5.15 電字版

## 商務版「説部叢書」試行本

『清末小説から』第125号（2017.4.1）に掲載。神田一三名を使用。「説部叢書」元版の表紙タンポポ文様と集番号の「第一集」を継承した版本が存在する。いままで知られていなかった。のちの初集本と併存するこの版本は、試行本であることを説明する。

前稿「新しい「説部叢書」研究」（『清末小説から』第124号 2017.1.1）で触れた「説部叢書」試行本について補足する。

その存在は鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』（復旦大学2013 博士論文。[方曉博]）で知った。

鄭方曉論文に掲げられたのは、白黒で小さくはっきりしない書影だった。それよりも鮮明な画像を孔夫子旧書網で見つけたので別に掲げる。

私はそれらを元版の延長上にある試行本と呼んでいる。

その理由は次のとおり。表紙が元版と同じタンポポ文様である。「第一集」と称している。編番号は「第一編」から始まっているなどだ。初集がリボン文様の表紙に取りかえたのとは基本的に異なる。試行本だと私がいう理由だ。

試行本は現在見ることのできる版本によれば、1913年12月から1914年にかけて刊行された。初集100編の刊行と併存する。ただし初集本は1913年5月刊行のものがあるから、こちらの方が時間的には試行本に先行する。

現在判明している「説部叢書」試行本を次にまとめておく。注には元版から初集に移行したときの集編番号を示した。



従来の元版タンポポ文様



**第一集第一一編 金銀島**（冒険小説）

〔方曉博50〕 中華民國三年(1914)四月再版

注：第二集第一編→初集第11編

**第一集第一二編 回頭看**

〔方曉博48〕 乙巳年二月初版／中華民國二年(1913)十二月再版

注：第二集第二編→初集第12編

**第一集第十三編 迦茵小伝**

〔方曉博51〕 奥付なし

注：第二集第三編→初集第13編

**第一集第一七編／第十七編 埃及金塔剖尸記**

孔夫子旧書網に写真あり。角書なし、中華民國二年十二月再版

注：第二集第七編→初集第17編

**第一集第三五編 洪罕女郎伝**

孔夫子旧書網に写真あり。角書なし、丙午年正月初版／中華民國二年十二月三版

注：第四集第四編→初集第35編。初集で魯濱孫飄流続記を前に移動させたので編数がひとつずれた

**第一集第八十編 朽木舟**

孔夫子旧書網に写真あり。角書なし、□／中華民國二年十二月三版

注：第八集第十編→初集第80編

従来の元版タンポポ文様は多色刷りだ。ひとつの書籍（『迦茵小伝』参照）をみると赤色で「説部叢書」「商務印書館訳印」と印字し、題名と原作者名は緑色、タンポポは藍色だ。タンポポ文様で統一してはいるがその色使いは各本によって異なる。それを特色のひとつとしていた。

しかし試行本の表紙は同じタンポポ文様とはいえ臙脂色で統一されている。見た印象からいえば地味な装丁だ。

それにしてもこの試行本の存在が知られていなかったのはどういう理由からだろう。

ひとつ考えられるのは、やはり試行本としての役割しかなかったことだ。

商務版「説部叢書」といえば、元版よりもリボン文様の初集本が普通に思い浮かぶ。商務印書館自身が自社史の挿絵に掲げるくらい有名だ。出版部数が多かった。その証拠に孔夫子旧書網でも多数の、というよりも圧倒的にリボン文様が掲載されている。だが試行本は文字通り試行のために刊行された。当時の読者の反応をさぐっていたのだろう。印刷部数が少なかったようになんとなく思う。

試行本は元版の第二集から第十集までを「第一集」で統一した。編番号を「第一」などと表示して新しさを表明したつもりだろうか。しかし表紙が元版のタンポポ文様を継承しているところが、初集本のリボン文様とは大きく違っている。

商務印書館が日本の金港堂と合弁を解消したことを刊行物の表紙で明示する。その意図を実現するためには、元版と同じタンポポ文様では不十分だと考えられたとしても不思議ではない。日本から独立して生まれ変わったことを表明するためには「初集」という呼称と表紙のリボン文様が必要だった。そうまでしなくてはならないくらい商務印書館にとって「説部叢書」は読者に歓迎された看板シリーズだったことがわかる。

## 「説部叢書」元版はタンポポ文様

『清末小説から』第126号（2017.7.1）に掲載。神田一三名を使用。商務印書館版「説部叢書」の元版について説明する。特に『金銀島』の第一集第八編が奇妙だ。なぜなら同じ集編番号の『吟辺燕語』が先に刊行されているからである。集編番号が重複している理由が不明だ。『金銀島』はのちにタンポポ文様の第二集第一編が出版された。こちらが本来の集編番号である。このように「説部叢書」についてはいくつかの不可解な現象が発生している。集編番号の重複、わかりにくい刊年記述、試行本の存在などだ。それらは商務印書館編訳所の編集管理が徹底していなかった証拠ではなからうか。多数のタンポポ文様の書影を掲げる。



金銀島 タンポポ文様

→

リボン文様

商務印書館版（以下省略）「説部叢書」の大まかな変遷を表現すれば、元版から初集への変化である。その基本的な変化を可視化するためには、表紙はタンポポ文様（元版）からリボン文様（初集）になったと言ったほうがわかりやすい。

## 1 説部叢書と「説部叢書」

普通名詞の説部叢書は、説部＝小説を集めてシリーズにしたという意味にすぎない。一般に主として創作である。清末時期では、改良小説社、群学社、小説進歩社、沢新書社などが説部叢書を刊行していた。

ただし商務印書館のばあいは少し特異だ。ある時期から外国小説の翻訳に限定したシリーズ名として使用しはじめた。また大量であって収録数が多いことも特徴のひとつだ。文学史で商務印書館の説部叢書と書かれるばあいカッコがついていなくても翻訳小説叢書を指すことが多い。

本稿でいう商務印書館の説部叢書は、カッコをつけない、つけるの2種類で区別する。

カッコなしのばあいは単に小説を集めたものを指しているだけ。翻訳とはかぎらない。カッコ付き「説部叢書」は海外小説の翻訳叢書に特化している。そういう分け方だ。

わざわざ説明するのは、今までその2種類を分けて認識した論文は少ないからだ。

本稿において商務版「説部叢書」がどのように成立したかを考える。すなわち一般名詞の説部叢書から固有名詞の「説部叢書」にどのように変化移行していったかである。また奇妙な集編番号があることを再び取りあげる。それについて新しい版本を追加する。

次のように言い直しても同じだ。「説部叢書」は海外小説の翻訳シリーズとして最初からあったわけではない。はじめは個々の作品として公表刊行していたものを「説部叢書」という名称のもとに再編集してはじまった。

そう考えていいのだろうか。あらためてその状況を探る。

基本部分を説明する。





広告の題は「上海商務印書館新訳説部叢書出版広告」だ。それぞれの価格を明示した既刊の書籍が18種、定価のない「続出書」が4種あがっている。定価を示さない書籍は出版予告だ。

以下に書名だけを書き抜き、それぞれに〔阿英〕と注釈を加える。

〔阿英〕は、阿英「晚清小説目」\*1を指す。阿英目録をここで使用するの、阿英が実物を手にしてその目録を作成したからだ。実物で確認していることが重要である。ただし「説部叢書」はその表示がない。採録対象項目にはなっていないかっただけだ。だいたい後に私は気づいた。ゆえに阿英が記述した作品がはたして「説部叢書」かどうかは判別できない。ここが理解をむつかしくしている原因でもある。刊年を知るためだけの参考資料にしかない。

英国詩人吟辺燕語	〔阿英124〕 光緒三十年（1904）
佳人奇遇	〔阿英127〕 光緒丁未（1907）
経国美談前後編	〔阿英156〕 光緒二十八年（1902）
夢遊二十一世紀	〔阿英153〕 光緒二十九年（1903）
補訳華生包探案	〔阿英151〕 光緒二十九年（1903）
案中案	〔阿英135〕 光緒三十年（1904）
環遊月球	〔阿英164〕 光緒三十年（1904）
黄金血	〔阿英148〕 光緒三十年（1904）
空中飛艇上	阿英目録に商務版は未収録。〔付日61〕の商務版は光緒二十九年八月初版／光緒三十一年九月再版。ちなみに〔阿英127〕光緒二十九年（1903）は明権社の刊行。
空中飛艇中	同上
金銀島	〔阿英126〕 光緒三十年（1904）
美洲童子万里尋親記	〔阿英132〕 光緒三十年（1904）
評註絵図聊齋志異	古典小説
繡像三国志	古典小説
繡像列国志	古典小説
日俄戦紀	戦記
東方雑誌	雑誌

続出書

回頭看	[阿英121] 光緒三十一年（1905）
珊瑚美人	[阿英134] 光緒三十一年（1905）
降妖記	[阿英129] 光緒三十一年（1905）
賣国奴	[阿英160] 光緒三十一年（1905）

この広告に掲げられた説部叢書は、一般的な小説という意味で使用されている。古典小説、雑誌を含めているからだ。翻訳に限定していないところにご注目いただきたい。また上記のように『空中飛艇』は「説部叢書」には未収録だ。これも普通名詞の説部叢書だという理由になる。

阿英目録は前述のとおり「説部叢書」表記の有無について記述していない。刊行されたことがわかるだけ。問題は解決しないのだ。私がここでいう「問題」とは、翻訳シリーズ「説部叢書」に収録される以前に単行本として刊行されていたかどうかという問題である。

### 3 「先元版」など——検証の手段

本稿でも以前と同じく「先元版」という用語を使用する。

元版とは「説部叢書」というシリーズ名称のもとに刊行された最初の書籍群だ。縦書きで「説部叢書 第〇集／第〇編」と印字する。最初は毛筆（元版1型a）で表記され後には活字（元版1型b）に変更される。

この元版に収録される以前の刊行物を「先元版」といつている。小説雑誌に連載された作品を含む。それ以外にもかなりの数があるという印象を抱いていた。阿英目録にある「説部叢書」を表示しない作品は、翻訳シリーズに含まれない単行本だと理解していたからだ。

たとえばヨーカイ・モール著、周作人訳『匈奴奇士録』（1908）がある。はじめは単行本で刊行され、のちに「説部叢書」2集第51編（1915）に収録された。そういう多くの例を見ていたから「先元版」も同じだと考えて不思議には思わなかったのだ。

以前は利用できる工具書といえば阿英目録があるくらいだった。中国で編集刊行された後の目録も、ほとんどが阿英目録を引用してすましているように見えた。だが現在は研究環境が一変している。ウェブの発達によって図書館の書目も公開されている。便利になったものだ。

それよりも書影を掲げるウェブサイトがだいぶ以前から出現しているのは注目に値する。居ながらにして機器を通して目にできる書籍が飛躍的に増大している。

ネット古書店のいくつかは書誌に添えて書影を掲げる。書店関係者が添えた書誌の間違いは無視すればいい。役に立つのは画像の方だ。表紙と奥付は小説目録に欠くことができない。それを見ることができればあいがある。図書館などの蔵書目録には入力間違いが生じる可能性から逃れることはむづかしい。だが写真であればかなり信頼できる。

また中国には影印本を制作販売する専門のウェブサイトもある。注意深く利用すれば実物とほぼ同じものを目にできる。

ウェブを利用してあらためて調査することにした。すると意外なことが判明したのだ。「説部叢書」に収録される前に単行本として商務印書館から出版された先元版は、『経国美談』くらいしかない。もうひとつの『佳人奇遇』もそうらしい。ただし私は実物で確認していない。そのほかの単行本ではない先元版は主として雑誌掲載の作品になる。

広告（写真を引用した）が掲載された『繡像小説』第30期の刊年は推定1905年だ。その時点ですでに「説部叢書」は刊行が始まっている。この広告にはそれが反映されていない。集編番号も明示しておらず「説部叢書」ではない作品もある。古典小説と雑誌を混在させていると再びいう。

#### 4 翻訳シリーズの「説部叢書」

次に『繡像小説』第41期（刊年なし。推定光緒三十一年（1905）八月刊行）に掲載された「本館出版説部叢書」という広告（図2）を見る。

その第一集と第二集の書名を引用する。

それぞれの作品に先元版すなわち初出があれば「←」印のうしろに注記する。

本館出版部叢書	
第一集	第一 佳人奇遇 每本洋七角 第二 續編新編機編 每本洋九角 第三 夢遊二十一世紀 每本洋二角 第四 夢遊學生心理學 每本洋二角 第五 小劍記 每本洋 第六 集中集 每本洋一角 第七 哥倫行社 每本洋二角 第八 夢遊人編 每本洋二角五分 第九 夢遊子洲 每本洋二角 第十 夢遊集 每本洋二角
第二集	第一 金蓮島 每本洋二角 第二 回廊石 每本洋二角 第三 足本遊野小傳 每本洋一元 第四 譯談記 每本洋一元 第五 遺囑夫人 每本洋二角 第六 百國歌 每本洋 第七 維及金蓮島行記 每本洋一元 第八 雜記 每本洋 第九 夢遊人編 每本洋八角 第十 夢遊子洲 每本洋九角 第十一 夢遊集 每本洋一元
第三集	第一 夢遊集 每本洋一元 第二 夢遊集 每本洋一元

2 『續像小説』第41期

×印は先行発表なし、という意味。元版の表紙は前述のように「説部叢書」の集編番号と書名、商務印書館名を縦書きにしている。別表紙とは元版表紙を扉にしてもう1枚の表紙を貼り付けている。いくつかの絵図が目立つが文字だけのものもある。表紙をタンポボ文様（元版2型）に統一したのは1905年からだ。

少しの実物と付建舟著作、ネット古書店などで確認したものだけを次行に記述する。これで刊行情況がわかるだろう。



4



3b



3

○第一集

第一編 佳人奇遇

←先行単行本は『佳人之奇遇』1901、未確認

奥付なし 元版 孔夫子旧書網（図3、3b）／タンポボ文様 複写架蔵 孔夫子旧書網（図4）

注：のちに入れ替えて『天際落花』戊申（1908）五月、未確認



8



7



6



5

第二編 経国美談前後編

←先行単行本あり 刊年不明 孔夫子旧書網（図5、6）

奥付なし 元版 別表紙 複写架蔵（図7、8）

注：のちに入れ替えて『劇場奇案』光緒三十四年六月〔付二25〕



10



9

第三編 夢遊二十世紀

←『繡像小説』1-4期 1903

奥付なし 元版 別表紙 孔夫子旧書網（図9、10）



13



12



11

第四編 補訳華生包探案 ←「華生包探案」『繡像小説』4-10期 1903

奥付なし（光緒二十九年癸卯仲冬序）元版 別表紙 架蔵（図11、12）

注：光緒三十二年歲次丙午孟夏初版／光緒三十三年歲次丁未孟春二版 上海図書館

第五編 小仙源 ←『繡像小説』3-16期 1913-推定1904年四月

奥付なし 元版 孔夫子旧書網（図13）

注：光緒三十一年十一月首版／光緒三十二年歲次丙午八月二版 タンポポ文様 [付二193]

第六編 案中案 ←×

注：光緒三十年五月首版／光緒三十一年三月再版 タンポポ文様 [付三31]

第七編 環遊月球 ←×

注：光緒三十年七月首版／光緒三十二年三月三版 タンポポ文様 [付二17]



16



15



14





19



18



17

第八編 英国詩人／吟邊燕語 ←×

光緒三十年七月首版／光緒三十二年四月三版 元版 架蔵 (別表紙あり? 図14、15、16)

光緒三十年七月首版／光緒三十一年三月再版 タンポポ文様、扉元版 孔夫子旧書網 (図17、18、19)



22



21



20

注：金銀島で第一集第八編がある（後述）。光緒三十年九月首版 元版 別表紙 影印本 架蔵。書影は [付125] より (図20、21、22)





25



24



23



27



26

第九編 美洲童子／万里尋親記←×

光緒三十年甲辰孟冬初版／光緒三十一年乙巳九月二版 タンポポ文様、扉元版 孔夫子旧書網 (図23、24、25)

中華民國元年八月四版 タンポポ文様 台湾華文電子書庫 (図26、27)

注：二版1905年はタンポポ文様である。しかし初版の1904年版がそうであるとは限らない。

鄭方曉53頁\*2は別表紙



30



29



28

第十編 黄金血

←×

光緒三十年十一月首版 元版 別表紙 影印本架蔵 (図28、29、30)



33



32



31

○第二集

第一編 金銀島

←×

第二集第一編 光緒三十年九月首版／光緒三十二年四月三版 タンポポ文様、扉元版 [付125] (図31、32、33)



35



34

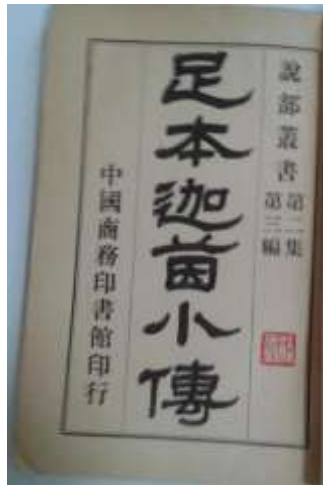
第二編 回頭看

←『繡像小説』25-36期 推定1905年正月-六月

光緒三十一年二月二十日 タンポポ文様 [付二282] (図34、35)



37



36

第三編 足本迦茵小伝

←×

光緒三十一年二月十三日 元版 孔夫子旧書網 (図36、37)

光緒三十一年歲次乙巳二月初版/光緒三十二年歲次丙午九月三版 タンポポ文様、扉元版

孔夫子旧書網 (図38、39、40) [付二150]



40



39



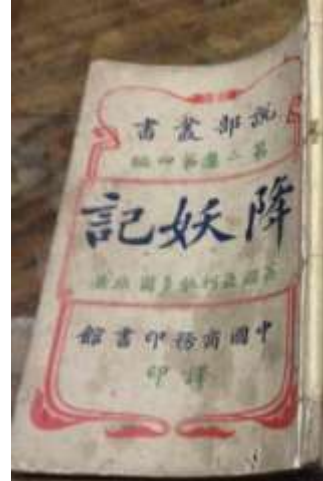
38



43



42



41

第四編 降妖記

←×

光緒三十一年歲次乙巳仲春初版／光緒三十三年歲次丁未季春三版 タンポポ文様 孔夫子旧書網 (図41、42)

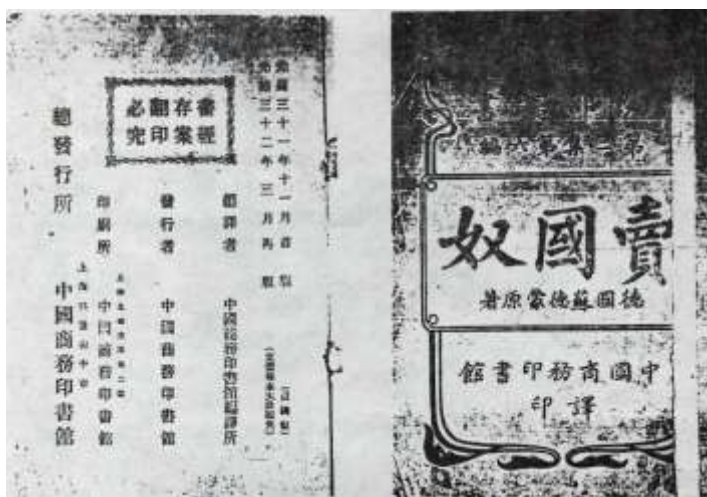
第五編 珊瑚美人

← 『繡像小説』27-41期 推定1905年二月-八月

光緒三十一年四月首版／光緒三十一年九月再版 元版 実藤文庫 孔夫子旧書網 (図43)

光緒三十一年四月首版／光緒三十一年九月再版 タンポポ文様 [付日133]





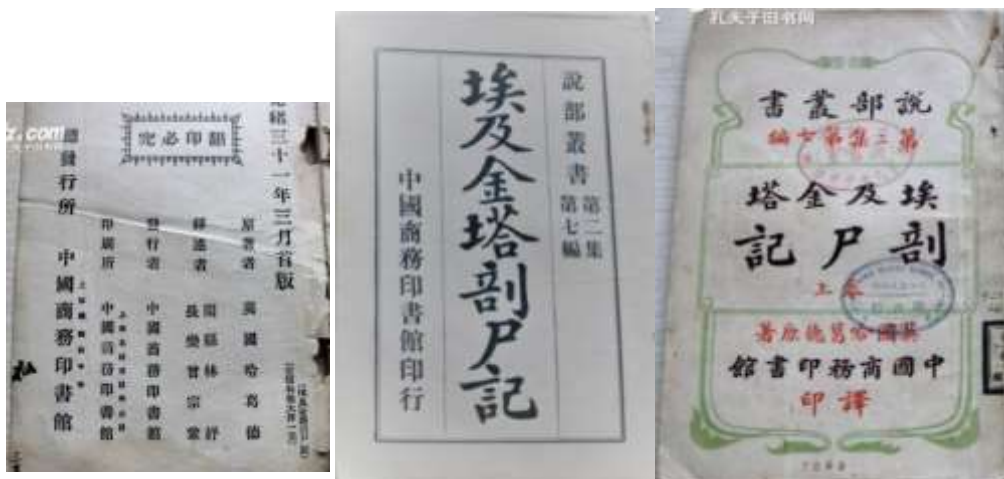
45

44

第六編 賣国奴

←『繡像小説』31-48期 推定1905年二月・十二月

光緒三十一年十一月首版／光緒三十二年三月再版 タンポポ文様 中村忠行複写旧蔵（図44、45）



48

47

46

第七編 埃及金塔剖尸記

←×

光緒三十一年三月首版 タンポポ文様、扉元版 孔夫子旧書網（図46、47、48）

注：第一集第一七編／第十七編 中華民国二年十二月再版 タンポポ文様（注：元版の延長上にある試行本だろう）孔夫子旧書網

第八編 懺情記

←×

光緒三十二年歲次丙午十二月二版 上海図書館 写真なし



51



50



49



53



52

第九編 奪嫡奇冤

←×

光緒二十九年十月首版／光緒三十二年五月三版 タンポボ文様、扉元版 孔夫子旧書網 (図49、50、51)

第十編 英孝子／火山報仇録 ←×

光緒三十一年六月首版／光緒三十二年閏四月再版 タンポボ文様 [付三45] (図52、53) 」

上の一覧表を見てわかることは次のとおり。先元版は、第一編と第二編を除いては『繡像小説』掲載の作品が主となっている。ただし現在判明しているのがそ

うだというだけだ。将来、別の資料が出てくる可能性までは否定できない。

## 5 奇妙な現象——集編番号の重複

興味深いのが『金銀島』だ。関連する書影をふたたび掲げる。



『金銀島』影印本（図21）

『吟邊燕語』（図15）

以前に指摘したとおり、第一集第八編『吟邊燕語』と同じ集編番号で『金銀島』（スティーヴンソン「宝島」の漢訳）がある。

私が見ているのは影印本だ。扉は元版であって別表紙（海上に浮かぶ帆船）がついている。表紙上方右肩に破れがある。扉にも同じ箇所が破損しているのがわかる。

付建舟論文\*3が言及しているものと同一だ。

付建舟はこの版本そのものについて疑問を提出した。それを紹介しながら説明する。

まず表紙についての疑問だ。扉には「説部叢書第一集第八編」とあるが表紙にはその表記がない。それは商務版「説部叢書」の慣例に符合しないという。

それについて付建舟は3条の解釈を提示する。要旨を引用して以下のとおり。

- 1、影印本の間違い。影印本を制作したとき別の表紙をまちがって取り付けた。
- 2、影印本が間違っていなければ、原物が間違っていた。
- 3、原物がまちがっていないならば、初版がそうだった。

別の表紙が間違っているというならば1と2は同じ意味だ。残るは3のみ。

私は原物どおりに影印本が作成されたと考える。上の3に該当する。

その理由。商務版「説部叢書」には、別表紙を貼り付けた例がいくつか存在する。別に掲げた書影を見てもらえればわかる。『経国美談』（図7）、『夢遊二十一世紀』（図9）、『補訳華生包探案』（図11）、『吟辺燕語』（図14）、『黄金血』（図28）などがそうだ。鄭方暁53頁は、『美洲童子万里尋親記』の別表紙も掲げている。『金銀島』も例外ではない。

別表紙は最初から『金銀島』についていた。影印本で見ても実物のままを示している。そう判断する理由を説明しよう。

表紙と扉の右肩部分が同じように破損している。それは最初から別表紙がついていた証拠になる。また、本文の冒頭3文字が破れていて読むことができない。「□□□哲姆者」とある。ところがその3文字は表紙の破損個所から顔をのぞかせている。「霍根司哲姆者」は物語の主人公少年ジム・ホーキンスの名前だ（図54、55、56）。



56



55



54

破損部分が、表紙、扉、本文の3ヵ所ともに一致する。この事実は、最初から表紙がついていたことを示している。

問題は集編番号だ。「第一集第八編」と明示している。この集編番号は『吟辺



燕語』と同一である。奥付の表記が正しいとすれば『吟辺燕語』は光緒三十年七月首版の刊行だ。一方の『金銀島』はそれよりも二ヵ月遅い光緒三十年九月首版となっている。後から刊行された書物が先行するものと集編番号を同じにする。奇妙だ。どう考えても誤記である。

誤記だと判定するのは、この刊行年月のことがひとつ。もうひとつは「第二集第一編」を掲げたタンポポ文様の元版が存在していることだ。重要な資料だからもう一度引用する（図31、32、33）。



33



32



31

第二集第一編 光緒三十年九月首版／光緒三十二年四月三版 タンポポ文様、扉元版 [付125]

元版第二集第一編『金銀島』は後年初集に編入された。その番号は自動的に変換されて第11編である（図57、58、59、60）。不審な点はどこにもない。ならば元版の「第一集第八編」は誤記だったと考えるよりしかたがないだろう。

上の『金銀島』は三版だ。タンポポ文様の再版本があるはず。その刊年は光緒三十一年だと推測している。いつか見てみたいものだ。

## 6 結 論

商務版「説部叢書」元版に第一集第八編という間違った表示をする『金銀島』が実在している。また同じ作品でタンポポ文様の第二集第一編がある。これらは



58



57



60



59

何を意味するのか。

それは商務印書館編譯所の編集管理が杜撰であったことを示している。

もうひとついうならば、奥付に記載された刊年表記が統一性に欠けるように見える。たとえば『小仙源』初集第5編は刊年を「1905.11/1913.12四版/1914.4再版」（1905年版は新暦旧暦混用）と表示している。四版が出たあとに、なぜ再版なのか。読者は理解できずに混乱する。

商務印書館編譯所には版次を決める規則があるはずだ。だがそれを説明した文

章を読んだことがない。

今までの経験にもとづき上記の記載について私が推測してみる。道筋らしきものを少しは示すことができるかもしれない。

上記の1905年11月（新暦旧暦混用）は、該書の元版タンポポ文様初版だ。1913年12月四版は、読者からの評判がよかったことを示している。重版してタンポポ文様の四版になった。その時点で別に初集リボン文様の初版が刊行されている可能性がある。1914年4月再版は、四版よりも刊年は遅れているにもかかわらず再版というか。それは1913年にリボン文様初版（上の奥付には記述なし）を出しそこを起点にして1914年4月に再版したからだ。

以上は推測にとどまる。現在はまだ資料が十分ではない。全部を合理的に関連付けて説明することはむづかしい。

それにしても版数を統一することができなかったのは、外から見るとやはり奇妙だ。あるいは誰が見ても理解できる版次番号を記載することができなかったと言いつても同じだ。やはり編訳所の管理体制に問題があったからだろう。

つげくわえれば試行本の存在も商務印書館内部の状況が混乱していたことを示す。タンポポ文様の元版からリボン文様の初集に再編された。リボン文様の版本は多数が刊行されている。ところが意匠はタンポポ文様を継承したまま使用する色彩を1種類に減じるものが別に存在する。集編番号は名称を「第一集」に統一して「第一編」から始めた。

編番号を「第十一」ではなく「第一」とするのが新しい工夫かと思うだろう。ところがこれも統一されていない。『埃及金塔剖屍記』の試行本では「第一集第一七編」と「第一集第十七編」の2種類を使用している。「第一七編」ひとつになぜまとめなかったのか。これも混乱していることの証拠となる。明らかに編集管理上の問題である。

現在の巨大な商務印書館を見て過去の姿を類推することはできない。創業初期の商務印書館は基本的に小規模な印刷会社だったのだ。印刷業から出版業へ営業分野を拡大する方向で模索していた。大規模発展の機会は日本金港堂との合弁がもたらした。

「説部叢書」の刊行は日本金港堂との合弁が成立した後のことだ。すでにある

翻訳小説を便宜的に収録して叢書の刊行が開始された。のち金港堂との合弁解消が実行される直前に初集へと切り替えた。合弁解消が実現するとすぐさま初集全部を再版している。

商務版「説部叢書」が変化していった背後には、日本金港堂の存在があった事実を無視することはできない。

以上の経緯を見ると「説部叢書」の創設と刊行維持については、不安定要素が多いことがわかる。十分な準備と計画があったようには見えない。緻密に刊行を継続したと考えれば誤るだろう。元版の刊行開始から初集への模様替えまで、試行錯誤しながら規模を拡大していったのが実状だった。

【注】

- 1) 阿英『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8／増補版 上海・古典文学出版社1957.9新一版、北京・中華書局1959.5。略号については樽目録の説明を参照のこと。以下、同じ。
- 2) 鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』復旦大学2013 博士論文
- 3) 付建舟「晚清民国時期《金銀島》漢訳本考述」『清末小説から』第125号 2017.4.1

# 『瑞西独立警史』について

——漢訳「スイス独立史」

『清末小説から』第125-127号（2017.4.1-10.1）に掲載。沢本香子名を使用。『瑞西独立警史』の底本が日本の谷口政徳（暁天逸史）纂訳『（血涙万行）国民之元気』前後編（金泉堂1888.1）であることを指摘する。

本稿において『瑞西独立警史』（以下『警史』と略す）の底本を明らかにし内容を検討する。

副題は別稿と同じに「漢訳「スイス独立史」とした。「建国史」に交換できる。また「漢訳「ウィリアム・テル」」でもよろしい。

スイス独立史、また建国史にはウィリアム・テルが欠かせないというのであればどちらでも可能だ。ただしテルは架空の人物である。ということはテルが登場する作品はすべてが創作となる。

明治時代におけるスイス史関連のある歴史書から説明する。スイス史の概略とテルの関係を知るために必要だ。

## 1 スイス史とウィリアム・テル

1900年代明治時代の日本人が、その認識——テルが架空の人物であることをひろく共有していたようには見えない。

久松義典『万国史略』（集英堂1880.10.29）巻3に紹介されたスイス史を引用する（変体仮名は書きかえた）。短文だから全文を引用し注をつけながら読む。

○瑞西史

瑞西ハ、日耳曼 法蘭西及ひ伊大利ノ間ニ在ル国ニシテ、地勢山谷多ク、風景ノ清奇ナルコト、欧羅巴中ニ冠タリト云フヘシ、国内ノ州ヲ分ツテ二十二ト為ス、

注：スイスの地理的位置を説明する。ドイツ、フランス、イタリアに囲まれ22州に分かれている。22州ということは1815年に成立した連邦国家を指しているのだろう。

其人民ハ、大半牧畜ヲ以テ業ト為シ、古代ニ於テハ、羅馬ニ属シ、又法蘭哥ニ従ヒ、其後日耳曼ノ統轄スル所ト為リ、以テ紀元千三百〇七年代ニ至レリ、

注：スイスの歴史を過去にさかのぼって述べる。ローマ、フランク王国、ドイツに支配された。「千三百〇七年代」と書く。「代」はないほうがわかりやすい。1307年といえはシラー戯曲「ウィリアム・テル」（英語読み。以下同じ）の年代設定と一致する。ウィリアム・テルがリンゴを射抜いた年だ。

初メ日耳曼帝羅德福ノ政ヲ施スニ当リテハ、法ヲ制スルコト公平ニシテ、国人悦服シタリシカ、紀元千二百九十八年、亜爾伯勒第一立チテ帝ト為リ、私意ヲ以テ、苛政ヲ行ヒケレハ、官吏皆之ニ倣フテ、大ニ庶民ヲ虐使シタリ、

注：羅德福はルドルフ1世、その長子が亜爾伯勒第一アルブレヒト1世である。

其間却士勒ト云官吏ノ如キハ、最モ虐威ヲ逞フシ、己カ帽ヲ竿頭ニ懸ケ、国人ニ命シテ、之ヲ拝セシメタリ、時ニ維廉惕爾ト云モノアリ、肯テ之ヲ拝セサリシカハ、却士勒怒リテ、惕爾カ子ノ頭上ニ林檎ヲ置キ、惕爾ヲシテ、之ヲ射セシメタレドモ、終ニ其子ヲ傷ツケス、

注：却士勒はゲスラー。本文ではゲスレルと表記する。本稿はゲスラーを使用。シラー戯曲に出てくる悪代官である。彼も伝説上の人物。維廉惕爾はウィリアム・テル。著者久松はリンゴを射落とす場面をまるで史実であるかのように説明した。

官吏ノ暴虐ナルコト、斯ノ如クナリシカハ、国民之ニ服スルコト能ハス、惕爾ヲ推シテ、長ト為シ、同志者相会シテ盟ヲ立テ、日耳曼帝ハ、尚ホ奉戴スヘキモ、官吏ハ、必ス之ヲ斥逐セント約シ、期日ヲ定メテ、都城ヲ襲ヒ、諸官吏ヲ虜ニシテ、之ヲ放逐シ、其他ノ城塞モ、皆計テ以テ之ヲ拔キ、一滴血ヲ流サスシテ、一大変革ヲ成シ、是ヨリ一國ノ自由ヲ保チテ、人心全ク團結シ、千三百十五年ニ至リテ、終ニ共和政府ヲ立ツルコトヲ得タリ、千五百三十四年ニ至リテ、維廉惕爾ハ死シタレドモ、土人ハ尚之ヲ信セス、其後五百年ニ至リテモ、其友二人ト共ニ、路塞尼爾湖傍ノ洞穴中ニ安寝シ、国難ノ際ニハ、三人皆忽チ甲ヲ擲キテ来リ、土人ヲシテ、其自由ヲ保タシムヘシト伝ヘタリトソ、（後略）

注：テルはここではスイス独立運動の主人公である。1315年はモルガルテンの戦いがあった年だ。テルの死去を<sup>マ</sup>1534年とするのは誤植だろう。「五」と「三」は見誤りやすい。訂正して1334年ならば許容範囲内だ。ただし架空の人物だから死去した年に諸説があるのは不思議ではない。漢訳のひとつ『瑞士建国誌』では1343年あるいは1334年にしている。路塞尼爾湖はルッセン湖でルツェルン湖の訛ったもの。

テルのリンゴ射的を盛り込んだ説明が、スイスの歴史のなかに堂々と収録されている。『万国史略』という立派な書名の刊行物にある記述だから、そのすべてが正史として認識されただろう。日本に滞在していた中国人留学生がもしこれを読んだとすれば、テルが実在の人物であることを疑わなかったのではないか。想像上の人物だと知っていたかどうか。かなりあやしい。

この『万国史略』を材料のひとつに利用して書かれたのが、谷口政徳（暁天逸

史) 纂訳『(血涙万行) 国民之元気』前後編(金泉堂1888.1。以下日本『元気』と称する)だ。谷口は谷口流鶯名で多数の著作を刊行した。その中に『(受験応用) 万国小地誌』(博文館1891.2.1。国立国会図書館デジタルコレクション)がある。「瑞西」を概観してほぼ2頁でしかない。ウィリアム・テルへの言及はない。



図1  
奥付と扉

また彼の編述で『演劇史』(博聞社、春陽社1887.3.1)がある。内容は日本演劇前史、日本演劇本史、西洋演劇史に分かれる。西洋演劇史では日耳曼に言及する。だがそこでもシラーという名前はない。名前がないからといって谷口がシラーを知らなかったことには当然ならない。日本『元気』にウィリアム・テルが登場するのは、別の書物を参照したのだろう。

## 2 『国民之元気』のばあい

書名の『国民之元気』だけではそれがスイス独立、あるいはウィリアム・テルが登場する書物だとは想像がつかない。それらを示唆する単語はどこにもないからだ。



表紙に「MADAME T<sup>ママ</sup>BERESE」とある。BはHの誤記だろう。だがマダム・テレーズは出てこない。意味不明な表示だ。「睨天逸史谷口政徳纂訳」の「纂訳」表示は翻訳だということか。



図2  
奥付と表紙

前編9回、後編11回の全20回で構成される。回数の番号はつけられていない。本稿で第〇回とするのは仮の措置である。

「例言」に本書の成り立ちが説明してある。変体仮名は書き直して引用する(以下同じ)。

一本書は国民の元氣と題し瑞西独立の顛末を記述せしものなり而して書中の事実は概ね正史に據りて少く演義したるに過ぎざれば彼の空中に樓閣を構へし假作ものと全しからず(後略)

日本『元氣』はスイス独立を主題としている。そのことが上の説明を読んではじめて理解できる。シラーの名前がない。シラー戯曲とは無関係だと思はずだ。「正史」に基づいたと書いている。だが具体的な書名をあげてはいない。たぶん

上述『万国史略』を含んだ複数の歴史書を参考にしたのでだろう。創作ではなく歴史であることを強調している。ただしどうしても表紙の「纂訳」が頭の中に残る。

日本『元氣』には漢文で書かれた「瑞西独立小史」が冒頭に置かれる。

固有名詞のいくつかを対照して示す。カタカナは筆者が補った。『万国史略』→日本『元氣』の順だ。

スイスを瑞西と共通して表記する。漢語では瑞士を使う。ルドルフ羅徳福→羅徳布。アルブレヒト1世亜爾伯勒第一→亜爾伯勤。ゲスラー却士勒→却士勤。この2例の末尾をみると字形は似ているがもとの音が違う。日本『元氣』はもとの「勒」を「勤」と誤植しているのではないかと疑う（注；日本語全文にわたっている）。もうひとりの悪代官ランデンベルクは『万国史略』にはないが、日本『元氣』では郎田山として出てくる。

同じく日本『元氣』には次が書かれている。牛2頭を奪われそうになったウンターヴァルデン翁徳瓦丁のメルヒタールに住むヘンリーホンメルキタル顕理渾麥爾希達とその息子アルノルト亜爾那脱がいる。ウェルナー・シュタウファッハー威兒尼土陶弗法もいる。ここまできるとシラー「ウィリアム・テル」そのものだ。ウィリアム・テル維廉惕爾→維簾惕爾のリンゴ事件が日本『元氣』にも書かれている。スイス独立史の転換点になったモルガルテン摩爾加典の戦いは1315年11月16日だと明記する。

こう見てくると日本『元氣』冒頭に置かれた漢文「瑞西独立小史」は『万国史略』よりも説明がかなり詳しい。詳細になっている箇所はシラー「ウィリアム・テル」なのだ。ゲスラー、ウィリアム・テルらを登場させるところで該書のすべてが史実というわけではないことがわかる。著者の谷口は「彼の空中に樓閣を構へし假作ものと全しからず」と書いてはいる。だが少なくとも漢文「瑞西独立小史」はその言葉通りではない。

しかも表紙は「睨天逸史谷口政徳纂訳」だ。また本文の署名は「睨天逸史纂訳補述」となっている。「訳」の1字は底本があることを示しているように思う。

参考までに柳田泉<sup>\*1</sup>から引用する。

「表紙に Madame Thérèse[Thérèse] などと記してあるので、例のシャトリアン（筆者注：エルクマンとシャトリアンの共同筆名）の同名の小説の訳でもある

かと思うと、全然これには縁のないもので、ウィルヘルム・テルを中心としたスウィス独立史を小説化したものである」

柳田は、「ウィルヘルム・テルを中心としたもの」だと書いている。そうなのかと私は読み始めた。ところがテルはなかなか登場しない。

まず大要をのべる（後に詳述）。

虐政を実行したのは悪代官ゲスレル（郇士勤。ゲスラーのこと）とランデンベルク（郎田山）のふたりだった。アルノルト（巫爾那脱）が追われて山中で道に迷ったどりついた家には16、7歳の少女がいた。誘拐されているのだ。

ここに挿し絵が1葉はさまれている。「少女信義ノ為メニ身ヲ猛獅ノ犠牲ニ供ス」と説明してライオンの背にまたがる少女が描かれる（図3）。



図3「少女信義ノ為メニ身ヲ猛獅ノ犠牲ニ供ス」

本文の内容とは結びつかない。実は後ろの第6回で語られる物語に関連する挿絵である。昔、猶太国のある商人が貿易のために旅に出ることになった。娘姉妹に土産は何かと問えば、姉は珊瑚の首飾り、妹は子犬1匹を望んだ。それぞれを入手して帰途につく。日が暮れようとしているところにライオンが出現し

た。命乞いをして最愛の妹娘を与えると叫ぶ。命からがら帰宅したところでライオンが妹娘を要求しにきた。子犬を抱いた妹娘をライオンに泣く泣く渡す。妹娘を連れ帰ったライオンは、実は魔法にかけられた王子だった。犬がその魔法を破ったのだ。スイスの救助犬にからめた変身譚である。その挿絵がなぜ本来あるべき箇所からずっと離れた前のこの場所に挿入されているのか意味がわからない。単なる製本上の手違いか。どのみち史実とは関係なく自由に少女を創作した部分だ。

ウィリアム・テルが出てくるのは、ようやく前編26頁第3回になってからだ。  
「<sup>ワルト</sup>瓦爾徳が継子<sup>ウヰルレム</sup>維廉<sup>テル</sup>惕爾」とある。人名表記が統一されていない。後編5頁第10回では「<sup>ふる</sup>布爾古連<sup>ごれん</sup>の<sup>ウヰルレム</sup>維廉<sup>テル</sup>惕爾」（6頁以降では「惕爾」）と表示される。リンゴ事件が起こり（その挿絵はない）捕縛されたテルは危機を脱出して結局のところ悪代官ゲスラーを射殺した。次の第11回では山中で猪に襲われたが刀で刺しこれを退治する。これはあまり聞かない話だろう。

テルが登場するのは主として第3回、第10、11回だ。あとは第15回に少しの発言が記録され行動についての説明がある。名前だけ出てくるのが第17、18、19回だ。第20回にはテルが総軍の将となりモルガルテン（摩留牙典）でオーストリア軍を破る様子が比較的詳細に描かれている。スイス独立は国民の元気にもとづき奮起したことが要因である。これが書名の由来だ。

以上の大要からわかるのは、テルは出てくるが物語の中心人物ではない。主なる何人かのうちのひとりにすぎない。柳田泉が説明した「ウィルヘルム・テルを中心とした」事実は存在しないのだった。意外に思ったことだ。

日本『元気』はスイス独立史そのままを書いたものではない。年代、場所、人物などの基本的事項は歴史書によっているが、全体から見れば約3割から4割くらいだろう。それに加えて活劇場面と2組みの恋愛関係および兄妹物語（小さいころ誘拐された妹を捜す兄）をからめて構成した。それには前述の変身譚も含まれる。創作部分は約6割から7割というのが私の印象だ。谷口が独自に作りあげたものと思う。だがその巧みであるところを見れば別に拠るところがあるような気もする。今のところどちらか不明である。

くり返す。ウィリアム・テルだけが登場するわけではない。つまりスイス独立

運動を背景にしてそれにウィリアム・テル伝説を組み込んだ冒険恋愛小説というのが妥当だと考える。

日本『元氣』について言及した文章を見ない。少し詳しく紹介した理由だ。

これを底本にして日本にいる中国人が漢訳した。印刷されて『(最新小説)瑞西独立警史』になった。

### 3 『瑞西独立警史』のこと

本稿で紹介する『警史』は以下のとおり。

瑞西独立警史 (最新小説) 18回

陸龍朔 (一説に翔。追記参照) 訳

発行所：日本・訳書彙編社、総售處：上海・開明書店 光緒二十九年五月二十八日 (1903.6.23)



図4 影印本 奥付／表紙

作品名の前半4文字がスイス独立という意味であることは問題ない。ただし後ろの2文字「警史」はわかりにくい。現在、漢語の「警史」は「警察の歴史」という意味で使用されている。だがそれと100年以上も前に刊行された『警史』の書名とはつながらない。「警」に「知らせる、報じる」という意味がある。「警世」ならば世人をいましめる、世人に知らせるだ。スイス独立について中国人に知らせたい歴史だと考える。今「スイス独立警世史」だと理解しておく\*2。

訳とあるだけで原作、原作者についての記述はない。

訳書彙編社は留日中国人学生が日本東京において組織した。その刊行物『訳書彙編』（1900年創刊）は彼らが刊行した早期の雑誌だ。主として政治・行政・法律・経済の翻訳を掲載した\*3。

資料によれば刊行した訳書の一部につきのようなものがある。参考のために示す。

○『波蘭衰亡戦史』第1冊 渋江保著 東京・訳書彙編社 明治34(1901) \*4

羽化生渋江保『波蘭衰亡戦史』 博文館1895.7.18 万国戦史 第10編\*5

○『累卵東洋』乙羽生（大橋乙羽）著、憂亜子（大房元太郎）訳 訳書彙編社 光緒27.11（1901）

大橋乙羽『政治小説 累卵の東洋』東京堂1898.11

○『比律賓志士独立伝』（表紙は「飛律賓志士独立伝」、目次、本文が「比律賓志士独立伝」）（日）崇昭本西著、吳超訳 訳書彙編社1902.10.10

崇昭本西を日本と記すのは阿英の誤り。（比律賓）マリアーノ・ポンセ MARIANO PONCE著、宮本平九郎、藤田季莊共訳『南洋之風雲：比律賓独立問題之真相』博文館1901.2.23の「付録：志士列伝」を漢訳する

○『美国独立史』（美）姜寧氏著、章宗元訳、章宗祥校訂 日本東京・訳書彙編社1902.10.27／1903.2.7再版

原作不詳。OPEN LIBRARYに“A SHORT AMERICAN COLONIAL HISTORY IN CHINESE”名で収録。章宗元は、章宗祥の兄。アメリカに留学したことのある法律家、経済学者\*6。

○『外交通義』（日）長岡春一著、錢承鋳訳 訳書彙編社1902.9.25

長岡春一『外交通議』有斐閣書房1901.4.4

○『訥耳遜伝』（英）羅培索叟著、訳書彙編社輯訳 日本東京訳書彙編社  
1903 伝記叢書1

ROBERT SOUTHEY “THE LIFE OF NELSON” 1813

各国の独立を記述した物が目につく。本稿との関連でそういう種類の書籍を抽出したからだ。

以上の刊行物のなかに『警史』を置けば、なるほど同じ傾向の作品だと納得がいく。いわゆる政治歴史小説に属する。

### 中村忠行説

この『警史』の底本については、中村忠行が触れている。割り注で次のように書く。

山田郁治訳『哲爾自由譚』<sup>ママ</sup>？／光緒廿九年、訳書彙編社刊<sup>\*7</sup>

阿英目録は156頁に『瑞西独立警史』を収録している。それには底本についての言及はない。阿英目録の「翻訳之部」そのものが実物に表示があるばあいを除いて原作、原作者をいっさい明記しない。明らかにしようという努力を放棄している。中国の研究者で底本について説明した人はひとりもない。だからこそ中村の注記が意味を持つ。

中村は書名の『瑞西独立警史』から連想して山田『哲爾自由譚』をあげたのだろう。底本は日本の書籍だと中村が考えた根拠は、おそらく刊行したのが訳書彙編社だからだ。上述のように該社は日本に留学していた中国人学生たちが設立した組織だった。翻訳書の多くが日本語からの漢訳である。それらの中の1種だと推測したのは自然な流れだといえる。しかし底本だと確認することができなかった。中村が「？」をつけた理由だろう。『警史』を見ることができなければしかたのない措置だった。それを受けて「？」を保存したまま『清末民初小説目録X 2 [第8版]』（2016）には記述を増やして次のように説明する。

視而列爾（シルレルSCHILLER）著、松湖漁史（山田郁治）訳述『哲爾自由譚（一名自由之魁）』（甘泉堂、丸善書店、泰山堂1882.10（フリードリッヒ、ファン、シルレル「ウィルヘルム、テル」スツットガルト1869）か？

先行研究は尊重すべきだ。特に翻訳作品の原作については不明なばあいが多い。研究の手がかりになるならば、少しの言及でも目録に記録する。それを調べるのは後の研究者の仕事だ。中村の指摘通りならばさらに対象を掘り下げて調べることができる。違っているならば別の方面からさらに追究して訂正すればよい。

シラー「ウィリアム・テル」であるという。国立国会図書館デジタルコレクションで公開している『哲爾自由譚』を読めば、前編のみであることがわかった。後編は刊行されなかったようだ。一方の『警史』は完結している。ゆえに『哲爾自由譚』は漢訳本の底本である可能性がなくなる。樽目録X2〔第8版〕の「か？」は訂正して「ではない」にしなければならない。底本としたのは前述のとおり日本『元気』なのだ。

ふたつの序がついている。

### 栄驥生序

序の文末には「癸卯清和望日上海脂車栄驥生序於日本東京旅舎」とある。1903年、著者は東京に滞在中であったらしい。「旅舎」だから旅館だろう。ということは旅行であって留学ではなさそうだ。漢訳者の知人でなければ序は書かないだろう。

栄驥生が序で強調するのは、世界が競争状態にあり「優勝劣敗」という天演（=進化）の公理が働いていることだ。優れた者はこの数年間のフィリピン、南アフリカ、日本であって小国ながら自由独立の精神を回復させた。ところが我が「支那」は深く長い眠りについたままだ。自由独立の精神を注入し我が民心を目覚めさせ奮起させるために本書をすすめる。

中国国民はスイス独立運動に学べというのが栄驥生の考えである。

なお、栄驥生は訳者について「雲間陸君龍翔」と書く。該書奥付の陸龍朔とは



異なる。

### 盛時培序

つぎの序の文末には「癸卯四月雲間盛時培鉄顔氏序於日本東京之柳町」とある。著者は1903年に東京在住だとわかる。しかも上海雲間の人だから漢訳者と同郷だ。

盛時培の認識は我が国民を啓発するために本スイス独立小史を出したという。それは司馬遷が『史記』の「遊俠伝」を書いたのと同じ意味だとする。

栄驥生、盛時培ともにほぼ同じ主旨である。当時の中国がおかれた現状を变革したい。そのためには国民への教育が必要だ。小説の効用を認めて利用するという梁啓超流の認識をふたりとも共有している。

盛時培も訳者を「陸君龍翔」とする。そこを見れば奥付の「陸龍朔」の方が誤植なのかもしれない。ちなみに寅半生「小説閑評」は陸龍翔訳としている。

### 楔子

本文は16回だ。日本『元気』が全20回だから本文だけに限れば漢訳は数字的に4回分が少なくなった。しかし漢訳本文には前後に楔子と結尾がつく。日本の底本にそれらはない。『警史』のため特別につけ加えられた。全体で数えれば合計して18回になる。

楔子には20歳前後で絶世の麗人韻蘭嬢が登場する。午後1時からドイツ語読本を教授した。学生は中国人だ。授業が終わると学生たちは自分たちで作った中国の詩を披露する。そのあと韻蘭嬢はスイス開国独立の物語を彼らに話し聞かせることになった。すなわちドイツ語小説体の小冊子『スイス独立警世史（瑞西独立警史）』の梗概である。

この楔子は若い女性韻蘭嬢が中国人留学生に向かってスイス独立史を物語るという作品全体の設定を明らかにする。この女性は外国人であるにもかかわらず、韻蘭とは中国人の名前のようだ。名前のつけようがあったらうに不審なことである。

楔子と対になっている結尾については本稿の最後で触れる。

## 本文

底本と漢訳を順次比較対照しながら気のついたことを述べる。

日本『元氣』の本文冒頭と『警史』の該当部分を参考までに示す。くり返し記号は文字に置き換え、句点を適宜ほどこした。

### ○元氣第1回－警史第1回

遙々たる那の白山は雪か銀か。しら雲の雲間に出るよひ月は緑り色なす湖水を照して研きすましたる鏡の如し。此方に連る山々は之に對て黛を画くにさも似たり。折から漁る舟の艫舵の音水に響きて岸邊を指して来りけるがその舟に乗りしは齡知命を越ると覺しき老夫と筋骨逞ましき一少年と互に言をとり舵の且つ語ひ且漕くその様日内瓦湖の底深き話とこそは知られたり。

1頁

遙遙一山。山嶺白如雪如銀。雪乎銀乎。岩間之雲氣乎。山上明月。下照湖水。澄澈如鏡。衆峰繚繞。群樹周遮。一碧無盡。忽聞欸乃之声有。一漁舟。隱約自岸邊蕩漾而出。乘舟者一老夫。年越知命。与一強銳之少年互言笑。少年操舵盪舟。至湖深處。6頁

はるか遠くの山の嶺は白くまるで雪、まるで銀だ。雪か銀か岩間の霧か。山の明月は湖水を照らし透き通って鏡のようだ。峰々は広がりめぐり木々がまわりを遮り全体が青緑色だ。ふと舟をこぐ櫓の音が聞こえた。漁舟が一艘ぼんやりと岸邊から揺れながら出てきた。舟に乗るのは知命（五十）を超える年齢の老人で精悍な少年と談笑している。少年は舵を操り舟を漕いで湖の深いところまできた。

日本語原文にある「日内瓦湖」はルビを見れば英語でいうジュネーヴ湖だ。これはレマン湖である。漢訳では省略した。

両者を比較すれば大きくは一致している。ただし細かな部分が異なっていることがわかる。

「しら雲の雲間に出るよひ月」を「岩間之雲気乎。山上明月〔岩間の霧か。山の明月〕」と分割して「雲間」を「岩間」に理解したように見える。漢訳はたぶん「雲間」の誤植だ。それとも漢訳者の郷里上海「雲間」と重なるのを嫌ったのかもしれない。

漁舟が向かう先が原作と漢訳では反対だ。原作は「岸边を指して」だが漢訳は「岸边から揺れながら出てきた〔自岸边蕩漾而出〕」とする。

それらは原文から少し離れる。だが小さな違いである。全体の雰囲気は漢訳はよく移植しているといえることができる。

舟の老人が少年にスイスの歴史を語る。そこに出てくる人名が複雑だと漢訳者の判断があったとしても不思議ではない（引用文はルビ省略。波線は筆者）。

是に繼て王位空虚となり綱紀紊乱せしかばカスケール王アルフアンソとボヘミア王オットカーと互に王位に即かんと争しが撰挙侯皆之を拒み遂に瑞西国のハプスブルグ公羅徳布を立て、日耳曼帝と為したりける。 3-4頁

繼是数世。王位空虚。綱紀紊乱。群雄角逐。争求王位。既而立我瑞西国之火沙路公羅徳布為日耳曼帝。 7-8頁

これに継いで幾世かは王位空虚となり綱紀紊乱したため群雄は争い王位を求め、ついに我がスイス国のハプスブルク公ルドルフを立ててドイツ帝とした。

読者にとっては羅徳布ルドルフだけが重要だと漢訳者は考えたようだ。日本語波線部分の固有名詞などは省略して漢訳のように「群雄角逐。争求王位」でまとめた。

ルドルフの息子がアルブレヒトだ。日本『元氣』の漢文「瑞西独立小史」では「亜爾伯勤」と漢字を当てた。ところが本文ではなぜだか「<sup>アルバルト</sup>亜爾的勤」と「的」に変化している。「伯」の方が原音に近いのだが、変更した理由は不明。漢訳は底本通りに「亜爾的勤」とする。舟上の少年が歌う部分（9頁）は日本語底本にはない。漢訳者がつけ加えた創作である。

そういう箇所を除けば、ほぼ逐語訳といってもいいだろう。

スイス史の概略を説明した以上が、物語の導入部分になっている。

○元気第2回－警史第2回

第2回は悪代官とその家来の極悪非道ぶりから物語がはじまる。

シラーによるもとの話はこうだ。

ウンターヴァルデン州メルヒタールに住む農夫父子が被害者である。悪代官ランデンベルクの家来が農夫の牛2頭を奪おうとしたため息子のアルノルトはそれに抗い家来の指を打ち折って逃走した。父はとらえられ熱い鉄棒を両眼に突き刺され失明する。

これが日本『元気』では次のようになる。

却説翁徳丁の人民にヘンリー・ホンメルヒタル顛理渾麦爾希達と云ふものありしが些細の過失あるとて罰せられ二頭の牛を没収されけるが或日郎田山の僕牛に犁を繋ぎ犁夫が麵包を食するとき麦爾希達より奪ひ取りし牛を以て之に増し加へたり。麦爾希達の子にランデンベルク亜爾那脱と云へるものありしが今此体を見て憤怨に堪へず矢庭に馳寄すきて鋤を奮ひ其僕を撃ち二指を切落としたり。6・7頁

ルビなし「翁徳丁」はウンターヴァルデンのこと。「瓦」が抜けている。34頁では「翁徳瓦丁」とある。「顛理渾麦爾希達」はメルヒタールに住むヘンリーという意味だが、これでは姓名のように見える。ここでは具体的にプラウを使う農夫を出して奪った牛2頭を加えている。牛を奪われた父の息子がルビなしの「亜爾那脱」すなわちアルノルト（別の箇所ではアルノルド）である。日本語の「麵包を食するとき」前後の話がつながりにくい。だからからかここを翻訳して『警史』は奇妙なことになる。

有翁徳丁人。名顛理渾 麦爾希達者。偶犯小過。而当罰牛二頭入官。麦爾希達貧無牛。過郎田山之田伴。其僕方繫牛於犁而歸食曰。是皆罰於人而来自也。遂纂マブ[纂]取之。以獻於官。既而其僕怪之。責牛於麦爾希達之子亜爾那脱。怒而鬪。亜爾那脱奮鋤擊其僕。断二指。10頁

ウンターヴァルデンの人、名前をヘンリーホンメルヒタールという者がいた。たまたま小さな過ちを犯し罰せられて牛2頭をお上に納めろということになった。メルヒタールは貧しく牛など持ってはない。ランデンベルクの畑のそばを通りすぎるとその下僕がちょうど牛にプラウを繋ぎ食事に帰るところだ。これらは罰金として来た牛だ、という。そこでその牛を奪いお上に献じた。すると下僕がそれをとがめてメルヒタールの子アルノルトにその牛を要求した。怒って争いになり、アルノルトは鋤を振り上げその下僕を殴りつけ指2本を切り落とした。

翁徳丁はたぶん誤植だろう。別のところで翁徳瓦丁と表示するのが正しい。だが底本がそうなっているから漢訳はならっただけ。

メルヒタール（としておく）とその息子アルノルトは日本『元気』に出てくるそのままを漢訳している。登場人物は同じだが細部が異なる。『警史』ではそのメルヒタールが悪代官ランデンベルクの下僕から牛を盗むことに解釈してしまった。そうなる悪いのはメルヒタールになってしまう。小さな誤解が物語全体の調和を崩した。ここは悪代官ランデンベルクの極悪非道ぶりを具体的に記述する箇所なのだ。それが『警史』ではそうならないから奇妙な理解だという。漢訳者はもとのウィリアム・テル伝説を知らないと見える。頼ったのは日本『元気』のみらしく部分的に解釈を間違えたために本来の話の運びから少しずれてしまった。

逃走したアルノルトは悪代官ランデンベルクの追っ手に追跡されることになった。アルノルトはアルプス山脈中に逃れる。食糧も尽きて疲労もたまったところに木こり小屋を見つけた。出てきたのは「年頃十六七とも覚しき少女」（8頁）だ。『警史』ではそれが「ひとりの少女が出てきたが年はおよそ15、6である[一少女出。年約十五六]」（11頁）と若くなった。少女の名前は梨姿<sup>リシー</sup>であることが後の第10回で明かされる。ここらあたりはもともとから日本『元気』の創作部分だ。

その主人は50歳前後の男だった。アルノルトに一応のもてなしをほどこしたあとと寝るようにと出ていったが夜中に少女がひとりでアルノルトのもとにやってきた。なにか子細があるらしいと警戒する。

巫爾那脱不審<sup>いぶかし</sup>み未だ打解けもせざる少女が更深けて吾が寢所へ忍び来るこそいと怪し必ず子細ぞあるべし。若しや那の男少女を以て情事に託し我を欺く手段にはあらざる歟。左すれば彼は山賊などの類ひならん。果して然らんには少女と雖も用捨せじと思按し短剣を控へて起き直れば…… 11頁

アルノルトが警戒するのは当然だ。『警史』はこの部分を削除して翻訳していない。性的な表現があることを嫌ったのだろう。

少女が告げていうには、主人はゴロツキ拿比留<sup>ナビル</sup>をよびよせ、悪代官ランデンベルクのもとにあなたを送ろうとしている。早く逃げて。アルノルトは娘に実の父かと質問する。この家の主人は山賊戈孿奴<sup>ゴルネイド</sup>であり、彼女は誘拐されてきたと答える。しかも悪代官ゲスラーに見せめられもうすぐ連れていかれる（14頁）。

日本『元気』は主人とゴロツキに分けて書いている。ところが『警史』は主人のことをゴロツキで名前は拿比留だと誤解した（13頁）。しかも次頁ではこの家の主人を山賊戈孿奴（14頁）だと書いて前後が矛盾する。

アルノルトは少女をほっておけずふたり一緒にその家から脱出する。事情を察した山賊ゴルネイドは待ち伏せていた。乱闘が始まる。少女は山賊ゴルネイドに蹴られて谷底に落ちる。そこに法牟牙丁<sup>ハウムガルテン</sup>が助けに駆けつける。山賊ゴルネイドは逃亡した。ここでは説明のないハウムガルテンである。彼については後編37頁で明らかにされる。

少女を巻き込んだこの乱闘場面には、日本『元気』特有の躍動感がある。『警史』は一部人名の勘違いが生じているが、その場面そのものは逐語訳している。

おもしろいのはアルノルトの奇策だ。ハウムガルテンに捕縛される風を装い追っ手を油断させる。時機をうかがい突然反撃にでる。敵を切り倒してその場を逃れた。一場の活劇を日本語のほぼそのままに漢訳している。

### ○元気第3回－警史第3回

『警史』では、底本にある風景描写を少し後方に移動させ、まず壮士威兒尼<sup>ウイルニー</sup>が登場する。兎を追っている。その同じ兎を射抜いたのが「瓦爾徳<sup>ワルトル</sup>が継子維簾惕爾<sup>ウ井ルレムテル</sup>」

だ。国家のために党をただちに結ぶことはせず、時機を待つことにして分かれた。ここからしばらくテルの姿は見えなくなる。

#### ○元氣第4回－警史第4回

アルノルトは逃れてワルトルの家に身を寄せていた。そこに壮士ウイルニーが訪ねてくる。自分の屋敷が悪代官ゲスラーに目をつけられ奪われそうだと訴える。彼が伝えてアルノルトの父親が鋭刃で両眼を抉られたという。アルノルトはそれを聞いて憤慨する。3人が評議をしているところにホウムガルテンが参加する。スイス3州（瑞西シュヴィーツ、烏梨ウーリ、翁徳瓦丁ウンターヴァルデン）の志士を湖水の近くにある魯多利<sup>ルトリー</sup>に集合させるため活動することにした。

このルトリーはシラー戯曲第2幕に出てくるリュトリだ。3地方の代表が集まって同盟の誓いをたてるのでリュトリの誓いという。歴史でいえば1291年に結ばれた誓約同盟である。ここにはウィリアム・テルの姿が見えない。テルはスイス独立運動には距離を置いているという意味だ。注目しておく。

#### ○元氣第5回－警史第5回

当時は衆人に向かって演説することを禁じられていた。ワルトルはある奇策を用いてそれを破る。深山にいる獰猛な野獣を捕獲し見世物にすると宣伝し人々を集めたのだ。我々国民の膏血を吸い苦しめる見えない怪物だと説く。聴衆はそれが亜多弗<sup>アドルフ</sup>だと口々にいい撃ち殺せと叫んだ（39頁）。

『警史』30頁ではワルトルについて同じページで漢字が異なる。瓦爾得と瓦爾徳のふたつで示す。同音による混同だ。誤植ととってもいい。この作品に限らず得と徳は中国では普通に取り違える。

日本『元氣』の漢文「瑞西独立小史」では亜爾伯勤（アルブレヒト）だと表記していた。ここでなぜ亜多弗になるのか理由は不明。一方の『警史』はその人名を出さない（33頁）。底本内部で異なっていることに気づいた可能性がある。

聴衆の中にまぎれていた探偵吏（漢訳は密探）がワルトルを捕まえようとする。彼は聴衆にまぎれて逃げる。川べりにあって月が雲間に隠れたのに乗じて大石を川中に投じた。追っ手はその水音にだまされた。

ワルトルの弁舌が優れていることは千軍万馬よりも有力だ。だから圧制政府が言論の自由を奪う。こう書くのが日本『元氣』だ。漢訳はそれを次のように書きかえる。

以三寸舌。發揚大義。抗政府之威稜。激人民之壯氣。厥後竟成其志。傾除惡暴之政府。而開闢瑞西獨立自治之基。35頁

三寸の舌で大義を発揚し、政府の威力に抗い、人民の壮大な気力を引き起こす。その後によくその志を成立させるのだ。凶暴な政府を倒してスイス独立自治の基礎を開くのである。

小説の主題（スイス独立自治）を前面に押し出し解説した。

○元氣第6回－警史第6回（大幅削除あり）

ここから壮士ウイルニーとアルノルトに話が二分する。

アルノルトは悪代官ランデンベルクを狙いかつ情報収集のために乞食に扮装し撒爾年（サルネン）城（別名ハウスブルク城）、羅斯（ロスベルグ、別の箇所ではロベルク）城に忍び込んだ。ここでいう「城」は、城塞という意味だ。漢訳も「城」にしている。そこで谷底に落ちたあの少女（梨姿リシー）と再会した。

日本『元氣』ではもうひとりの壮士ウイルニーに物語が切り替わる（44頁）。『警史』は改行しないため別の話になっていることがわかりにくい（37頁）。

壮士ウイルニーはウーリへ赴く途中で道に迷った。雪に降りこめられ身動きがとれない。そこへ大型犬が駆けつけ救助された。ここではない「セントベルナルド」にある修道院で訓練した救助犬の説明がある（46頁）。Saint-Bernardを英語読みして「セント・バーナード」のこと。『警史』ではこの部分を省略する（37頁）。

犬に導かれて人家にたどりついた。40歳ばかりの女性が布を織り、かたわらで少女が裁縫をしている。

少女について次のように描写する（ルビ省略）。

「少女は身に縋縋を纏ひて粉装せざれとも天成の美人にて錦繡を着け脂粉を凝



らせしより遙かに勝りて奥床しく昔をしのぶ面影は由緒あるもの、零落て葎の宿に世を避け、んと思はれたり」(47頁)

それを漢訳して「裙樸素風致天然 [衣服は飾り気がなく容姿は優美で自然だ]」(38頁)とする。かなり省略したといえる。

母親は壮士ウイルニーにむかって、救助犬が誕生するきっかけとなったライオン変身譚を語る。その内容はすでに触れたのでここでは述べない。物語のなかで別の話を物語る入れ子状態だ。「アラビアン・ナイト」を連想させる。ここは日本文で約6頁にわたっている。『警史』はこの部分をバツサリ削った。50歳ばかりの主人が家にもどってきたところに話を続けたのだ。漢訳者にとっては救助犬のはじまりを説明するのにライオン変身譚を持ち出すのは全体からすれば余計なことだという判断があったのだろう。小説をスイス独立史で貫徹するためには不必要かもしれない。だがこのライオン変身譚はこの物語に不思議で幻想的雰囲気をもたらしている。そういう小説なのだから『警史』で削除したのは惜しかった。

主人は昔留撒爾ルセルルンに住んでいた列仁克レジンクという。悪代官ゲスラーに全財産を奪われてこの山中に住んでいる。民衆を扇動する演説をしたワルトルが哈不斯堡ハブスボルグの獄に送られると聞かされた壮士ウイルニーは、レジックとともに救うために出かけた。物語の展開につれて登場人物が増えていく。

#### ○元氣第7回－警史第7回

壮士ウイルニーとレジックは、ワルトルを救い出すためにつながれているであろうある屋敷に忍び込んだ。そこでこれも同じ目的で来ていたアルノルトと出会う。ここで分かれていたふたりは合流した。

ワルトルと思われた男は偽者で、3人は偽情報によっておびき出されたのだった。悪代官ゲスラーの兵士が大勢で襲ってきた。激闘がはじまる。3人の奮闘ぶりを「三人は項王樊噲が勇を奮ひ大勢が中へ懸け入り十文字に懸け破り巴字形に追ひ廻はして敵を悩ましけれど」(66-67頁)と中国の例を挿入した。ところが『警史』はそれを無視している。なぜか翻訳していない。

3人ともに捕縛されそうになったとき、どこからともなく矢が射こまれてきて敵は退却していった。その際レジックが拉致される。壮士ウイルニーとアルノル

トのふたりはレジnkを救う救わないで議論をはじめた。とりあえずレジnkの妻子に告げて避難させる必要がある。壮士ウイルニーが知らせに向かった。

どこから射られた矢なのか。『警史』は疑問を書いている(47頁)。そうすれば話が後に続く。伏線のひとつだ。だが日本『元気』にはその語句はない。矢といえばテルに決まっている。そう考えればわざわざ疑問を提出する必要はない。ただ漢訳が施した少しの加筆は中国人読者にとって底本よりも用意周到であるといえることができる。

日本『元気』には多くの人物が登場してきて活動する。また場所が移動する。動きのある描写が続く。人名を含めてこれらをすべて谷口が創造したのだろうか。どこかに別の底本があるのではなかろうか。そういう疑問がやはり出てくる。

#### ○元気第8回－警史第8回

壮士ウイルニーは状況を知らせに雪の中を行って。途中で母子が出てきているのを見かける。母子の会話で娘が壮士ウイルニーに恋慕していることを細かに比較的長く描写する(72-73頁)。『警史』はそれらを無視した(49頁)。漢訳はこうしてページが圧縮される。



「壮士佳人ヲ救フテ逆吏ヲ追フ」

悪代官ランデンベルクの部下5、6人が娘を襲った。壮士ウイルニーが駆けつける。左腕で娘をかばい5、6人との斬り合いになる。

日本『元気』に置いた挿絵を示す。題して「壮士佳人ヲ救フテ逆吏ヲ追フ」である。本文は雪中であるはずだが、挿絵には雪が見えない。壮士ウイルニーの服装、刀を振り上げた姿勢に違和感がある。小さなことだ。

そこに来合わせたワルテルとハウムガルテンが助勢してきた。『警史』は細部を省略しつつ大筋のところをふまえて物語を続ける。悪者を撃退しワルテル、ハウムガルテン、壮士ウイルニー、レジnkの妻子（娘の名前は慧利那）が時間を前後してここに集合した。レジnkが捕まったことを母子に話すことはできなかった。追っ手が迫る危険があるため男ら3人はルートリーをめざして出発した。

#### ○元気第9回－警史第9回

ルートリーには先に到着していたアルノルトがいる。合流したワルテルと壮士ウイルニーたちを称して日本『元気』は「三傑」（95頁）という。『警史』にはその表現がない（59頁）。3傑のなかから「議長」を選出することになりワルテルが推挙された。彼が皆に説くのがスイス人の独立精神である。長い演説のなかの1節を引用する。

夫れ人にして束縛圧制を受けて自由権利なきときは恰も蛻壳と一般にて精神なきものなり。既に精神なくんば誰れか之を生者と為せん。諸君よ鴻毛泰山死は一なり何ぞ精神を励まし蒼天に千古を経て滅びざる権利を得んと欲し給はざる。若し精神を励まし求むるも平和手段にて得難くば劍こそ権を得るの方便なり。97-98頁

「壳」は「殻」と同じ。抜け殻のこと。「鴻毛泰山死は一なり」はいうまでもなく重い軽いの違いはあっても人は死ぬものという意味。上に引用した部分はスイス人の自由を強く求める気概を説明している。

『警史』は逐語訳にはしていない。上に該当すると思われる部分を次に示す。

夫奴隸而生孰若自由而死。苟得自由雖死無憾。況奴隸未必得生。自由未必即死乎。諸君諸君。今日我輩當拚此生命為我国人民於万死中求一活。使天誘其衷。權奸受命。則吾等當遂共和施政。獨立自治。永脫他人之羈絆。諸君勉旃。61頁

奴隸として生きるくらいなら自由の身で死んだほうがましだ。自由を得るのであれば死んでもかまわない。ましてや奴隸が必ずしも生きるとは限らないし自由であれば死ぬともかぎらない。諸君、今日われらはこの生命を捨ててわが国人民のために万死の中にひとつの生を求めるのだ。天の意志で奸悪な権力者が任命されたのであれば、われらは共和の政治を行ない独立自治によって他者の束縛から永遠に逃れなければならない。諸君、勉めよ。

漢訳は底本を離れている。かなり自由に書き換えた。

ひとつ指摘する。ワルテルが議長になってある場所に立ち演説をはじめるとの場所とは「木片を交叉したる圈内」（96頁）だという。ここに割り注がある。「木片ヲ交叉シタル圏／内ハ当時ノ議席ナリ」という。こういう細かな説明は谷口が独自に考案したようにも見えない。別の底本が存在していることを示唆しているのではなかろうか。

ワルテルが具体的に提案したのは、敵の羅斯ロスベルグ城と哈不斯堡ハウスブルク（又の読みはハプスボルク）城を奪うことだった（日99頁／漢61頁）。

明年第一月一日（明年正月朔旦）を蜂起の日に決めた。

日本『元気』は以上をもって前編が終了する。『警史』はそのまま第10回へ続く。いままでのところ漢訳は大きな削除が1カ所あるだけでほぼ底本のままとをなぞってきている。日本『元気』は本文20回だ。『警史』は翻訳部分が16回しかない。漢訳の回数の少なさは第10回以下をみればその理由が判明するだろう。

#### ○元気第10回－警史第10回

悪代官ゲスラーの館。彼はワルトルの演説をスパイしていた方巴斯からの報告を聞いた。アルノルトは水中に消えた。腹心の部下蘇滑多スヨツが言うには、アルノルトが少女梨姿リシーを連れて逃亡したと（日3頁／漢64頁）。

第2回に登場した少女の名前がリシーであることがここで明かされる。

悪代官に刃向かう人物をあぶり出すための策が知らされる。ゲスラーの帽子を竿の先につけ、それに平伏して拝めと人々に命じる。

獵師ウィリアム・テルが登場する。「<sup>か</sup>那の瓦爾徳が継子なる<sup>ふるごれん</sup>布爾古連の<sup>ウイレルムテル</sup>維廉別爾」(5頁。既述のように6頁以降では「惕爾」と表示される)である。「ふるごれん」は、シラー戯曲の「ビュルグレンBuerglen」に相当する。テルが生まれたとされる村だ。漢訳は「維廉惕爾」とだけあって「布爾古連」は省略する(66頁)。意味不明だと判断したためか。

ウィリアム・テルは帽子を無視する。捕らえられる。妻子をこの場に引きたてる。悪代官ゲスラーは息子の頭にリンゴを置いてテルに射るよう命じる。

「弓に矢をつがひ満月の如く引しぼり」(7頁)とある。谷口は弩(ど。クロスボウのこと)にはしなかった。日本はいざしらず中国には古代から使用されていた種類の武器だ。漢訳は「弓」とだけにしてその形状には触れない。テルはリンゴを射落とした(68頁)。

よく知られているようにテルが準備した矢は2本だった。手元に残った1本を見とがめられ、失敗したときは悪代官ゲスラーを殺すつもりだったと白状する。ただちに捕らえられた。日本『元気』でもそうになっている。

ところが『警史』では異なる。リンゴを射落としたあとにテルは奇妙なことを言い出す(日本語訳は改行する)。

惕爾曰。願更得一矢。却<sup>マア</sup>土動疑之曰。汝欲更得一矢。將何用。惕爾大声曰。咄暴人。汝欲害人子。吾欲更得一矢。用以射汝。報吾兒之仇。68頁

テルは「矢をもう1本所望する」といった。

ゲスラーはいぶかりたずねた。「お前はもう1本矢が欲しいというが何に使うのだ」

テルは大声でいった。「フン、悪人め。お前は人の子を殺したがった。おれがもう1本の矢を所望するのは、お前を射ておれの子供の復讐をするのだ」

すでに息子の命を救ったあとだ。さらに1本の矢をわざわざ要求する意味がな

い。また矢はテルのものではないような書き方である。これでは話が通じない。なにかの勘違いをしている。

テルを獄に移送する途中の湖水で突然の雷と豪雨が襲い舟の操縦がままならない。テルの縛めを解いて操らせた。テルは隙を見てひとり岸辺に跳び登り足で舟を押しやる。こうしてテルはゲスラーから逃亡することができた。ここはシラー戯曲のままだ。

テルは古<sup>クスナフ</sup>ス<sup>ナフ</sup>の山に身をひそめ待ち伏せして通過するゲスラーを射殺した（10頁）。

『警史』はこの描写を少し変更して加筆する。すなわちテルはアルノルトの家にいき事情を説明してアルノルトに助言を求める。

ゲスラーを射殺するのは同じだ。しかし助言者としてアルノルトを出現させたのは、はたして有効かつ合理的であるのか。はなはだ疑問である。この場面ではテルが自分の判断によってひとりで行動するほうがよい。より力強く彼にふさわしいと思うからだ。

#### ○元気第11回－警史第11回

山中を行くウィリアム・テルは、野猪に襲われる。刀で刺し踏みにじる。

「野猪」は日本語原文のまま。日本語の猪は漢語ではブタだ。漢語の野猪と同じだからそのままでもよかった。そこを「野豕」と翻訳している。しかも「刀を抜いて斬りつけた〔抜刀斬之〕」をくり返したことにした（71頁）。日本語の「楊爾は足に信して踏にじる」（12頁）は信じられなかったようだ。

漢訳では描写のところどころを簡潔化する。そこで出会った樵のテルについての感想だ。

樵夫も亦楊爾を<sup>きびす</sup>踵より頭まで視上げ視下すにその状貌魁梧にして決然として立たる有<sup>さな</sup>様宛がら地より<sup>はえ</sup>生たる如くなれば益す驚嘆シアナ恐るべき偉丈夫なりと思ひつゝ……13頁

樵夫亦熟視楊爾自頂至踵。若有驚嘆状良久。72頁

樵もまたテルを頭から踵まで熟視し長く驚嘆する様子であった。

漢訳は底本の大筋は把握したまま細部を省略して字数を圧縮する。

テルはこのスイス独立派である樵に命を狙われる。敵のスパイではないかと疑われたからだ。

ところが漢訳では「疑是山魃木魅等類 [山の妖怪ではないかと疑った]」にした。スパイではなく妖怪にしてしまっは緊張感がゆるむ。

樵は堂々としたテルの容貌と態度に感嘆し「嗚吁斯る豪傑を吾が党に加へなば千万人に勝るべしと独言つゝ、……」（15頁）と思う。この段階でテルはスイス独立運動の中心には位置していないことがわかる箇所だ。漢訳はここを省略する。その樵は盟約書を落としていった。

テルは山中に砦を見つけた。そこにはいわゆる3傑がいた。テルの義父ワルテル、壮士ウイルニー、アルノルトである（日18頁／漢74頁）。テルの命をねらった樵がそこに呼ばれて彼の名前は波得満である。盟約書は名簿でもあるらしくそれを出すようにいわれた。ペートルマンは名簿を失ったと白状する。ワルテルは我らの生命を敵に贈ったのと同じだといひ、ハウムガルテンに首を刎ねと命じる。待て、と止めるのは壮士ウイルニー（ここでは仁者。日21頁／漢76頁）である。押し問答の最中にテルが割ってはいる。盟約書を取り出す。おお、それそこ失ったものだ。

第7回において3傑が捕縛されそうになったとき、どこからともなく矢が射こまれてき救われたことがあった。その顛末をテル自身が説明する。

某過る日撒爾年を距る七八里の山間に於て三人のもの奸吏に圍まれ奮激突戦なすを林中より覗ひて以為らく是れ吾が朋友か否らずんば或は吾々と志を同ふするものならんと思ひしかば林中より捕兵を乱射して彼等を逸せしめたり。34-25頁

又前者行於山間。距撒爾年七八里。忽遇三人。為賊吏所迫。奮力激戦。某思此必吾等全志。因見賊勢猖獗。乃隱從林間射之。賊即奔逸。77-78頁

また以前にサルネンから7、8里離れた山間において3人のものが悪役人に迫られて激しく戦っているのに出くわした。私はこれは必ずやわれらの同

志であると思ったし、悪人の勢いが激しいのを見てひそかに林間よりこれを射撃すると悪人は逃走した。

日本『元氣』に出てくる「某」は自分を指して使用している。漢訳も同じ。上に引用した部分の漢訳は、ほぼ逐語訳といていい。

同志たちは明年1月1日に総攻撃を開始することに決定している。自由万歳を一斉に唱える。その様子をうかがっている者がいた（26頁）。ただし、『警史』にはこの小さな箇所を省略する（78頁）。

#### ○元氣第12回と第13回の一部－警史第12回

風景描写からはじまる。

落陽已に晩景を収めて遠山微雲なく玉兔高く窓に飛んで樹影婆娑たり。27頁

「玉兔」は月を意味する。「樹影婆娑」は「樹の影がゆらゆらと揺れている」と辞書にはある。そのまま漢訳でも使うことのできる表現だ。

時斜陽将落。微風四起。窗外鳴禽婉轉。樹影<sup>ママ</sup>婆娑。79頁  
時に夕陽は落ちようとしており微風がまわりにたち、窓の外では動物が低く高く鳴いて樹の影が揺れている。

漢訳の雰囲気は底本とよく似ている。だがそのままというわけではない。日本語と漢語では共通する「玉兔」をわざわざ「窗外鳴禽婉轉」に書きかえる必要があったのか疑問だ。「婆娑」は「婆娑」の誤植だろう。

壮士ウイルニーは、自由の旗を翻して悪代官ランデンベルクの羅斯城（別の漢訳は羅思城）を襲うことを考えて興奮していた。底本にある次の部分は漢訳しなかった。「果して吾偉業成らば我は瑞西の三傑と称せられ自由の率先者と崇められ美名を万世に遺すべしと喜び極つて室中を走り廻りけるが……」（日27頁）



書き換えて次のようにした。「さて成功した後にはどのようにするか、内政の政策はどのようにするかを考える。また外交の方針を定めるなど思わずてんてこ舞いになるのだった〔且思事成之後。如何如何。而布内治之政策。如何如何。而措外交之方針。更不覺手足踏舞〕」（漢79頁）

日本『元気』で自己満足するよりも、『警史』で頭脳を絞る方が壮士ウイルニーにふさわしい。

それにしても心配なのが捕らえられたレジック（エリナの父）のことだ。そこにエリナからの手紙1通を受け取った。父は死刑に決まった。父の命を乞うために悪代官ランデンベルクの側室になるという。さらに壮士ウイルニーを思うエリナの真情が告白してある（日28頁／漢80頁）。ただちにエリナを救うためひとりでサルネンをめざして出発した。

ここまでの日本『元気』の第12回だ。『警史』はそれを無視して続く日本『元気』第13回を取り込む。すなわち壮士ウイルニーはサルネン城（別名ハウスブルク城）に進入し探索して獄舎らしきものに到達した（日31頁／漢82頁）。番兵に見つかり包囲される。知人を訪問しに来たといういいわけが通用するはずがない。そこに「吾が郷人久濶濶ひさしぶりなりし吾が友人よ」と声をかけてきた者がいる。

#### ○元気第13回の一部と第14回－警史第13回

呼びかけてきたのは留慈ルージーだ。壮士ウイルニーは面識もない。危機を脱してルージーの住居へ案内された。ルージーの説明はこうだ。彼はワルトルの家僕だった。息子はホウムガルテン。第2回に突然出現してきたホウムガルテンの素性が明らかになった。ワルトルらは悪代官ゲスラーに対して義兵をあげるだろう。その時は内部から応じるために城塞に入り込んだと説明した（日38頁／漢85頁）。ふたりは事情を密書にしてワルトルに知らせる。ワルトルの指示は、壮士ウイルニーは城塞にあって攻撃があったときには内応するよということだ。

悪代官ランデンベルクの城塞には、独立派（本稿における仮の呼称。のちに本文で民権党と称される）のルージー、壮士ウイルニーが身を偽って潜入している。いわばスパイだ。

○元気第15回－警史第14回

独立派の指導者のひとりワルトルの家にもスパイは入り込んでいた。少女リシーを誘拐し悪代官ゲスラーに献上しようとしていた山賊ゴルネイドだ。アルノルトにその目論見をうち砕かれた。山賊ゴルネイドは、<sup>ルーザル</sup>羅撒の変名でワルトルの家僕となっている。ワルトルが謀反を計画していることを探り金目当てで告訴するつもりだ。主人の留守をねらい夫人<sup>ローザン</sup>瑠黎を脅し財産を奪おうとした。夫人は機転をきかし山賊ゴルネイドをだまして部屋に閉じこめ夫ワルトルの会合先に走った。秘密会議を開催していたワルトル、テル、アルノルト、クワニーの4名は、ただちにワルトル家に駆けつける。山賊ゴルネイドはすでに部屋から脱出していた。計画が露顕したからには取るべき方針はふたつにひとつだ。同志を召集してただちに城塞を襲う。もうひとつは山賊ゴルネイドを追跡する。アルノルトは先手必勝だといひ前者を主張した。ワルトルは少人数での蜂起は危険だと後者を主張し皆の合意を得た。4名は山賊ゴルネイドを追った。湖のほとりに追いつめられた山賊ゴルネイドは湖水に逃れた。

ほとんどスパイ小説か冒険小説のような様相を呈している。山賊ゴルネイドがワルトルの夫人ローザンに横恋慕するなど、もともとシラー「ウィリアム・テル」とは関係がない。テルには特別にリング射的の見せ場はある。だが本作品においてはなんともいうように主要人物のうちのひとりにすぎない。

漢訳は少しの加筆と省略があるが、ほぼ底本をふまえて忠実である。ただし違和感をおぼえる箇所もある。いくつかを示す。

夫人ローザンを描写して日本『元気』『花も羞ずべき年紀三十ばかりなる明眸皓齒の一佳人』（40-41頁）である。それを『警史』は「徐娘半老。風韻猶存〔うばざくらで色気はまだある〕」（87頁）だ。三十歳ばかりまでは漢訳しなかった。両方で女性の年齢についての捉え方が異なるからだろう。印象が少し違うように感じる。

日本語で「野の末山の奥」（42頁）は普通の言いまわしだ。それを漢訳では固有名詞の野末山（88頁）と誤解している。

山賊ゴルネイドはアルノルトに追いつめられた。ワルトル家から盗んだ財宝を背負っていた。それをどうしたか。

日本『元気』「背負たる財物を卸すより早く亜爾那脱を目懸けて擲付」（53頁）というからアルノルトに向けて投げつけたのだ。『警史』「急棄所負財物而逃〔急いで背負っていた財物を捨てて逃げた〕」（93頁）では迫力が不足する。

○元気第16回と第17回－警史第15回

城塞につながれ死刑を宣告されたレジックが「民権党」であることが書かれている（日54頁／漢94頁）。党名が出てくる最初である。娘のエリナは父の命を救うために悪代官ランデンベルクの側室になるために来城するという話だ。壮士ウイルニーは密告しようとして馳せてきた山賊ゴルネイドをつかまえた。ハウムガルテンとともに彼の知った秘密を白状させる。明日が襲撃蜂起だ。

エリナが来城するのを壮士ウイルニーは遠くからながめる。その間に山賊ゴルネイドは逃亡した。見逃したハウムガルテンは自分の失敗を恥じて自殺をはかるが壮士ウイルニーに止められる。この自殺云々という箇所は漢訳では省略する。

謀議が露顕してしまったのであれば、しかたがない。壮士ウイルニーら3名は獄舎につながれたレジックを救出するために突進した。

以上が日本『元気』第16回だ。『警史』はそこで終了しない。日本『元気』第17回をそのまま続けて漢訳している。

テルを首長として羅斯山を襲った。アルノルドは小笛を一声吹き鳴らせば城塞から縄が1本投げおろされた。あらかじめ約束していた少女リシーの仕業である（日64頁／漢訳は省略）。

勢いのあるテルらは城塞を制圧した（日64-65頁）。漢訳は戦いの模様はほぼ省略して結果のみを説明する（漢99頁）。だが少女シリーの姿を見つけることができない。漢訳はここもとばしている（漢99頁）。

羅斯城を奪われたことを知らない悪代官ランデンベルクは、サルネン城で酒池肉林の宴会を開催していた。そばにエリナを侍らせている。山賊ゴルネイドが通報しに来たのを明日にしろと追い返す（日68頁）。漢訳は悪代官ランデンベルクが山賊ゴルネイドを面罵することに変更した（漢100頁）。

城塞の内外から兵を挙げテルらは勝利した。悪代官ランデンベルクは捕まり命だけは助けられてドイツに放逐された。

壮士ウイルニーはエリナと再会する（日72頁／漢103頁）。

日本『元氣』は陥落させた2城塞以外の城についての攻略方法を詳細に説明する。『警史』はスイスの民権党が大勢を制しドイツ官吏を本国に送還したことを述べるのみ（漢104頁）。大幅に簡略化した。

○元氣第18、19、20回－警史第16回

少女リシーとアルノルトが3度目の出会いをはたす。リシーは梨姿と以前は表記していた。日本『元氣』後編81頁では李姿になっている。また『警史』106頁は利姿だ。すべて同音だが漢字が異なる理由を知らない。

リシーの身の上話は驚くべきものだった。母とともに親戚のところから帰宅途中に襲われて誘拐された。犯人はいうまでもなく山賊ゴルネイドだ。詳しい経過を話し、さらに父はルージー、兄はホウムガルテンだという。意外な人間関係が明らかにされる。漢訳では結論部分の父ルージー、兄ホウムガルテンのみを示す（漢107頁）。さらに少女リシーを助けた老婆の子細などを含む説明描写はすべて省きページを進める。漢訳はそのため歴史的背景をいささか欠く結果になった。

アルブレヒト1世は甥ヨーハンに殺害される。1308年のことだ。それを伝えるにきたのがホウムガルテンだった。

日本『元氣』93頁「帝はその姪戎王の為に弑せられ給ひしとの風説あり」はそのまま『警史』107頁に「日耳曼帝為侄戎王所弑」とある。そのためウィリアム・テルが戦っていた敵軍は退却をはじめた。テルは敵軍を追撃し食糧器械（注：武器）を奪い取った（日99頁／漢108頁）。

リシーは行方不明になっていたがワルトルが救った。アルノルトはふたたび会うことができなかった。駆けつけた父ルージー、兄ホウムガルテンとも長い別離をへてようやく顔を会わせた。さらにはリシーを助けた老婆は山賊ゴルネイドと昔は夫婦だった（日104-105頁／漢109頁）というのだから驚く。登場人物のすべてはそれぞれつながっていたのだった。

日本『元氣』第20回は本文約9頁だ。アルブレヒト1世が殺害されたあとの政治的動向がまず説明される。

複数の人名が出てくる。現在の表記と日本『元氣』108頁および『警史』110



## 結 尾

その内容のおおよそを述べる。

韻蘭嬢はスイス人であることが明らかにされる。そのスイスは長く他民族に束縛され圧制のもとで志気を挫かれその知識を閉ざされてきた。ここの「志気」は底本でいう「元気」と同じ意味だ。そこから自由独立の権利を享受できる状況にまでなった。彼女は、貴国すなわち中国の最も有名な倫理学家孟子のことばだといって次のようにいう。

「私はその民の先覚者ではないのか。道理を先に知り後の者が知る。道理を先に理解し後の者が理解する [我非斯民之先覚者歟。先知覚後知，先覚覚後覚]」

上は記憶によったためか原文を少し書きかえている。伊尹のことばを紹介して以下のとおり。「道理を先に知った者に後の者に知らせるようにし、道理を先に理解した者に後の者に理解させるようにする。私は天が生んだ民のなかで先に理解した者（先覚者）である [使先知覚後知、使先覚覚後覚也、予天民之先覚者也]」

（孟子・卷第9 万章章句上）

先人から後人へ啓発のための教育を受け継いでいく。本書『警史』は小国であろうとも自ら努力して独立することができる模範例としてあげている。

## 4 結 論

それにしても『警史』は不思議で奇妙な物語枠を設定したものだと思う。スイス人の若い女性が中国人留学生にドイツ語を教授している。その女性がドイツ語で書かれた書物によってスイス歴史の概略を講釈する。使用言語はドイツ語らしい。その場所はスイスかとも思うが定かではない。スイス人の彼女が中国人留学生にむかってわざわざ孟子から引用して説教する。

この楔子と結尾のもたらす強い違和感はどうだろう。

中国人留学生が美しいスイス人女性に教わっている。といいながら該書のふたつの序はどちらも日本東京で書かれている。原作は日本語だ。刊行は東京神田区駿河台鈴木町十八番地にある訳書彙編社であり印刷は東京並木活版所である。

どう考えてもスイス人の美女を登場させた理由が不明だ。

そういう調和のとれない説明が違和感を抱かせる。楔子と結尾をつけ加える必要はなかった。どうしてもというのであれば、ここは場所を日本にすればまだよかったのではないか。ドイツ語を教える日本人の教授が日本語を使って中国人学生にウィリアム・テル物語を紹介する。そうすればすんなりと前後のつじつまがあうように思う。

そうしなかったのは、漢訳の内容がスイス独立史だから前後も外国風にしたかった。あるいは底本が日本の小説であることを隠蔽したかった。またいかにもドイツ語原作を漢訳したという印象をあたえたかったのか。それにしても栄驥生序および盛時培序は日本に居ることを強調していて違和感がある。

漢訳者の陸龍朔（一説に翔）をはじめとして序を書いたふたりともに、該漢訳本が教育的なスイス史だと強調する。そのためか底本とした『国民之元気』という書名をそのまま漢訳しなかった。漢訳して新しく『瑞西独立警史』とつけたから肩肘張った四角な印象を読者にあたえる。書名と内容が釣り合わない。もとの日本語小説は冒険恋愛小説ということがある。作品自体はまとまった小説だ。陸龍朔（一説に翔）は該作の教育的側面をそれほど強くいわなくてもよかったのにと感じてしまう。訳書彙編社としては歴史を重視する刊行路線に組み入れるための書名変更だったかもしれない。関係者の証言がないから推測にとどまる。

題名の『瑞西独立警史』からは政治歴史もののような印象を受ける。だが中身は立派な冒険恋愛小説すなわち大衆小説だ。

漢訳にはいくつかの小さな勘違い、加筆また比較的大きな省略はある。だがまったくの別物には書き換えてはいない。ほぼ原文に忠実な翻訳になっている。漢訳の水準は良だと判断する。

【追記】2017.9.28 崔文東氏より訳者について教えていただいた。訳者は奥付に見える陸龍朔ではなく陸龍翔が正しい。樊蔭南編『当代中国四千人録』（1936増訂版未見／香港・波文書局1978影印。304頁）の該当部分は以下のとおり。「陸龍翔／字坎生。年四十九歳。江蘇松江人。日本中央大學法科畢業。歴任広東高等裁判廳刑庭庭長、江蘇特種刑事法庭審判員、江蘇民政廳視察員、鎮江県長、

上海県県長」。ご教示に感謝。

【注】

- 1) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究第5巻 春秋社1961.9.15／1966.3.10  
二刷。117頁
- 2) CHEN PINGYUAN (陳平原) 著、VICTOR PETERSEN訳、*THE DEVELOPMENT OF CHINESE MARTIAL ARTS FICTION – A HISTORY OF WUXIA LITERATURE*. CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 2016 は138頁注5において *History of Swiss Independence* という訳語をあたえている。「警」は無視したらしい。
- 3) 丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』東京堂出版1985.9.30。275頁／史和、姚福申、葉翠娣編『中国近代報刊名録』福州・福建人民出版社1991.2。197-198頁
- 4) 楊蔭杭 (1879-1945、日本早稲田大学留学、『訳書彙編』の創刊者のひとり) の編訳という。「楊絳家庭背景揭秘」がウェブサイト『万花鏡』に見える。2016.11.1確認
- 5) 藤元直樹「渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館」国会図書館『参考書誌研究』第60号 2004.3。山本勉「明治時代の著述者 渋江保の著述活動——出版物「万国戦史」を中心に」『仏教大学大学院紀要 文学研究科篇』第43号 2015.3 電字版
- 6) 徐友春主編『民国人物大辞典』石家荘・河北人民出版社1991.5。864頁など
- 7) 中村忠行「晩清に於ける虚無党小説」『天理大学学報』第85輯 1973.3.21、149頁



## 『瑞士建国誌』について

—漢訳「スイス独立史」

『清末小説から』第129号（2018.4.1）に掲載。沢本香子名を使用。鄭哲（貫公）『瑞士建国誌』（1902）について紹介する。日本で執筆して香港で刊行したらしい。ウィリアム・テルを手本にして祖国中国が直面している異民族からの圧制をはねかえしたいという主旨だ。日本語から翻訳した小説だと説明する。『（字血句涙）回天之弦声』、『（血涙万行）国民之元気』、『（維廉的兒）自由之一箭』などを検討したが底本ではなかった。底本探しは振り出しにもどった。

シラー（Friedrich von Schiller, 1759-1805）の戯曲「ヴィルヘルム・テル Wilhelm Tell」（1804）は14世紀のスイスが舞台だ。オーストリアによる圧政からスイスが独立する物語である。

戯曲は3本柱により構成されている。独立運動、ウィリアム・テル（英語読み）、男女一組の恋愛だ。なかでも広く知られているのは獵師ウィリアム・テルだろう。息子の頭の上に置いたリンゴを弓で射るように強いられたテル伝説を組み込んだ（第3幕第3場）。ただしテルに焦点をあてて作劇されているわけではない。あくまでも複数いる重要登場人物のなかのひとりだ。

テルだけがシラー戯曲の中心人物ではない。そこからいくつかの記憶の齟齬が見つかる。

たとえばリンゴ射的の場面は私が持っていた印象とは大いに異なる。テルの矢はリンゴに当たるのかどうか。手に汗握る場面だという思いがあった。ところがシラー戯曲では様子が違う。舞台の手前で悪代官ゲスラーに男女ふたりが抗議し

ている。その奥で矢が射られリングに当たったと一同の声があがるのだ。舞台、作劇上の都合なのだろうが、テルのリングは遠景に押しやられたように見える。

物語はのちにどのようなにも改編されるという例のひとつである。作者が異なれば重点の置き方も違ってくる。ここに注目しておく。

本稿においてウィリアム・テルを主人公にした鄭哲（貫公）『瑞士建国誌』（1902）について考える。テルが登場人物だからシラー原作に関係するのだと考えられている。日本語翻訳を重訳したようでもある。詳細はどうか。

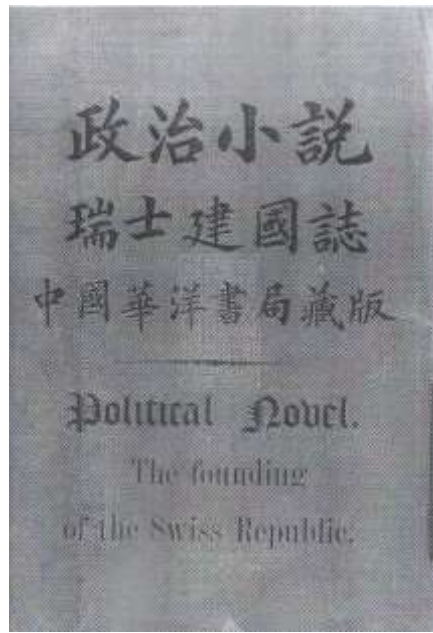
まず『瑞士建国誌』そのものを説明することからはじめる。

広東鄭哲貫公著、李繼耀校字『（政治小説）瑞士建国誌』全10回（香港・中国華洋書局 光緒壬寅（1902））である。

私が見ている上海図書館複写本には奥付がない。「自序」に「壬寅八月二十日」とあるから1902年9月21日以降の刊行だとわかる\*1。



図1 扉



表紙

## 1 序文

最初に序3篇が置かれる。

## 趙必振序

趙必振曰生「政治小説瑞士建国誌序」の文末には「序於日本之争自存齋」とある。日本で書いたらしい。

趙必振（1873-1956、湖南常德の人）は、自立軍を組織し蜂起しようとしたが失敗し日本に亡命した。横浜で『清議報』『新民叢報』の編集などに従事したことがある。

序の内容は小説の効用を称賛するものだ。大意を示しながら説明する。

西洋人は外国に行くときどういふ小説が流行しているかを質問する。それによってその国の人心風俗政治思想がわかるという。（趙必振は中国に存在する多くの旧小説を否定し）イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス各国の振興は小説の効用による。日本が維新の時にも小説によって民智、すなわち人々の智慧をひらいた。中国の知識人もそれにならぬ、<sup>ママ</sup>「佳[佳]人奇遇」「<sup>ママ</sup>経国美譚[談]」「累卵東洋」などが踵を接して出現した。

ここに具体例として掲げられた漢訳作品は、それぞれ以下のとおり。

柴四郎「（政治小説）佳人奇遇」は『清議報』第1-35冊（1898-1900）連載。矢野文雄「（政治小説）経国美談」は『清議報』第36-69冊（1900-1901）連載。大橋乙羽「累卵東洋」は愛善社（1901）印刷を指す。すべてもとは日本の作品だ。

趙必振は次に『瑞士建国誌』へ筆を転じる。

スイスがドイツに隷属していた時、人々は圧制に苦しんだ。偉人ウィリアム・テルが声をあげ、国民は立ち上がり異国の束縛から脱した。

オーストリアではなくドイツとするのは『瑞士建国誌』に出てくるのがドイツだからだ。「異国之羈勒」という表現から自然に1902年当時の中国に話がつながる。すなわち4億（四百兆）の人民が『瑞士建国誌』を読んでスイスにならぬ清朝からの独立運動を始めることに期待をよせる。そうなれば鄭貫公の作品が効用を発揮したことになる。

ここは異民族である清朝からの独立願望を投影しているのがわかる。またこのはっきりとした小説効用論は、説明するまでもなく梁啓超の「訳印政治小説序」からそのままを引き継いだものだ。任公（梁啓超）「訳印政治小説序」（『清議報』

第1冊光緒二十四年十一月十一日1898.12.23)である。

梁啓超は該文において政治小説は西洋人が始めたと言頭に述べる。

中国における小説でよいものは少ない。英雄といえば「水滸伝」、男女といえば「紅樓夢」で総じて盗みを教え淫猥を教えるところから出ない。昔の欧洲各国では小説を変革の手段にしたから一書が出れば全国の議論はそれで一変した。各国政界が日に日に進んだのは政治小説の功績が最も大きかった。英国の名士で「小説は国民の魂だ」とさえ言った人もいる云々。

趙必振は、梁啓超の小説効用論をなぞっている。具体的な小説として『清議報』に掲載された「佳人奇遇」「経国美談」をあげることから理解できるだろう。

### 李繼耀序

つぎの李繼耀「校印瑞士建国誌小引」を見ると、李繼耀は鄭貫公の知人であることがわかる。

李繼耀は1901年に鄭貫公と日本で知りあった。序に「壬寅桂月」と表示し1902年だ。「桂月」は旧暦八月を指す。「去歳」と書くから1901年の出会いとなる。

鄭貫公は大衆を奮い立たせ人々の智恵を補う政治小説がないものかと考えていた。そこで日本書を選んで翻訳することを李繼耀は勧めた。しかし鄭は当時、報館の主筆をつとめていたのでその暇がない。李は香港にもどった。あとから鄭が香港の新聞社に招かれてやってきた。鄭貫公の取りだしたのが『瑞士建国誌』の原稿だった。

原稿が出てくるのはそういう経緯だ。ここに見える「報館の主筆」というのは、鄭が1900年に日本東京で創刊した『開智録』のことだろう。のちに鄭貫公は香港『中国日報』の記者となった。李繼耀は原稿の校訂を行なったと書いている。

『瑞士建国誌』影印本には奥付が欠落しているが香港で刊行されたとすればつじつまがあう。

### 鄭貫公序

鄭貫公（1880-1906、広東香山県の人）は家が貧しかった。太古洋行横浜支店で

買弁をしていた親戚を頼って日本に渡り働いた。横浜大同学校で学び、のち『清議報』の編集者を勤める。馮自由と『開智録』を創刊し鄭貫公は該誌に「摩西伝」も掲載した。1901年、香港『中国日報』の記者となったのは孫文に勧められたからだ<sup>2</sup>。

鄭哲貫公父「自序」の末尾には「序於香海之文明齋」とある。香港で記した。該書の刊行は彼が香港にいた時期に合致する。

著作の意図は文中に書いてある。「よそから出る石でわが玉を磨く [他山之石。可以攻玉]」という語句に集約される。ウィリアム・テルを手本にして祖国が直面している異民族からの圧制をはねかえしたいという意味だ。しかし手本にしてといっても鄭貫公自らがテルになって運動の先頭に立とうというわけではない。そういう英雄がいたことを中国人に知ってもらいたいという範囲内におさまる。啓蒙活動のために外国の政治小説を翻訳する。あくまでも新聞界に在籍する言論人としての役割をわきまえている。

細かいことをいう。小説の舞台となるスイスの時代背景を説明してその中に勘違いがある。「十二世紀」と書いて「中国元朝元貞年間」と注する。元貞は二年まで、西暦でいえば1295-1297年に当たる。13世紀というのが正しい。鄭貫公は知識人であるが世紀という考え方にはなじまなかったようだ。それよりも細かな事実は小説には必要がないという考えなのだろう。

興味深いのは「例言」である。

一是書故事。初由西文訳為日本文。復從日文訳其意。著為小説。転接之多。増刪遺略。在所難免。然小説不比正史。事不必盡有。而理不可無。総求描情写景。明白了利為近旨。

ひとつ。この物語は、はじめ西洋語から日本語に翻訳され、さらに日本語から訳して小説にした。取り次ぎが多いから増加削除省略はまぬかれない。しかし小説は正史とは異なる。事実は必ずしもすべてがある必要はないにしても道理は不可欠だ。総じて情景描写が求められる。その長所は理解しやすい主旨にあることを明らかにした。

後半の「小説は正史とは異なる」という理解からすれば、すこしくらい事実から離れてもかまわないことになる。だからこそ歴史には実在しないウィリアム・テルを主人公にした日本語作品を底本に選んだ。テルが伝説上の人物であることを鄭貫公が知っていたかどうかはわからない。小説は歴史とは違うのだから矛盾するところはない。

前半部分に私は注目する。『瑞士建国誌』の成立過程を説明している。

「ウィリアム・テル」がシラーの原作だから、その日本語訳が鄭漢訳の底本になったと読める。鄭貫公は日本で学んでいるから日本語を経由していても不思議ではない。ただしはたしてシラー戯曲がもとになったかどうかは定かではない。

ところが中国では創作説が根強く存在している。

阿英目録96頁は創作とする。阿英の断定は以下に影響を与えた。

江蘇省社会科学院明清小説研究中心編『中国通俗小説総目提要』（北京・中国文聯出版公司1990.2／1991.9再版。850頁）が本作品を掲載している（孫継林執筆）。創作作品だと考えたからだろう。鄭貫公が日本語からの重訳だと書いているのを無視した。

武禧（劉徳隆）「零七三 鄭哲」（「晚清小説作者掃描（15）」（2008。参考文献を見よ）も同じ。

もうひとつは羅衍軍「歩武瑞士 肇建新邦——鄭貫公与《瑞士建国誌》」（2008。参考文献を見よ）がある。

『瑞士建国誌』は、鄭貫公が「ウィリアム・テル」を底本にしその他の素材を吸収し創作して成ったものに違いない〔《瑞士建国誌》応是鄭貫公以《維廉・退爾》為藍本，并吸收其他素材創作而成的〕19頁

羅衍軍も鄭貫公自序の記述があるにもかかわらず創作だと考えている。日本語翻訳を見つけることができなかつたのがその原因だと思われる。

さて序文を書いた趙必振、李継耀らはともに鄭貫公にとっては日本で知り合った人たちだ。その環境から考えても日本語による翻訳作品を底本にしたことは自然な流れであった。

「例言」からもうひとつを引用する。

ひとつ。小説は人々の智恵を開拓し人心を憤激させるところが貴重だ。本作は文章を敷衍しただけではない。実に人心と社会の道理に対して大いに役立つ。

一小説以能開拓民智。激憤人心為貴。是書之作。非徒敷衍筆墨。実于人心世道。大有裨益。

鄭貫公の述べる小説効用説は、梁啓超の主張と一致している。

## 2 「瑞士国計表」という一覧表

スイスの国勢調査表というべき一覧表が掲載されている（図2）。

瑞士国計表	
西曆一千九百年(即中曆光緒廿六年庚子)	
土地	一萬五千九百七十六方英里
人口	三百一十一萬九千六百三十五名
賦稅	三百八十一萬一千零九十八磅
度支	三百七十六萬四千三百九十八磅
國債	四萬磅
各省合債	一千萬磅
出口貨額	三千一百八十三磅
入口貨額	四千四百一十三萬三千九百五十三磅
預備兵	一十四萬八千四百三十四名
後備兵	八萬五千六百七十六名
表	二十七萬五千名

図2

土地、人口、税金の細かい数字だ。人口は「三百一十一万九千六百三十五名」とある。1の位まで明記して詳細だ。

その年度は1900年（光緒廿六年庚子）とする。13、14世紀が舞台の『瑞士建国誌』であるにもかかわらず1900年（いうまでもなく19世紀。20世紀は1901年から）

の統計数字をあげるのは整合性に欠ける。たまたまそれしか手元になかったのかどうかはわからない。スイスの概要を示すのが主目的だったのだろう。時間の隔たりに問題があるとは意識されなかったらしい。

つぎに掲げられたスイス地図も奇妙だ。

### 3 「瑞士図」という地図——1840年代のもの

スイス全土を簡略に描いた地図が収録されている（図3）。



図3

地図だからなにもないところから自力で描くのは普通にとってむづかしい。どこかにあるものを参照したと考えるのがよい。

たとえば魏源『海国図志』（1843/1847-48増補/1852。3冊 長沙・岳麓書社1998.11）の上冊「欧羅巴州各国図」に「瑞士国図」228-229頁がある（図4）。

これは『瑞士建国誌』所収の地図と似ているにしても細部が異なる。

例をあげると西のレマン湖、別に称して英語のジュネーヴ湖だ。『海国図志』



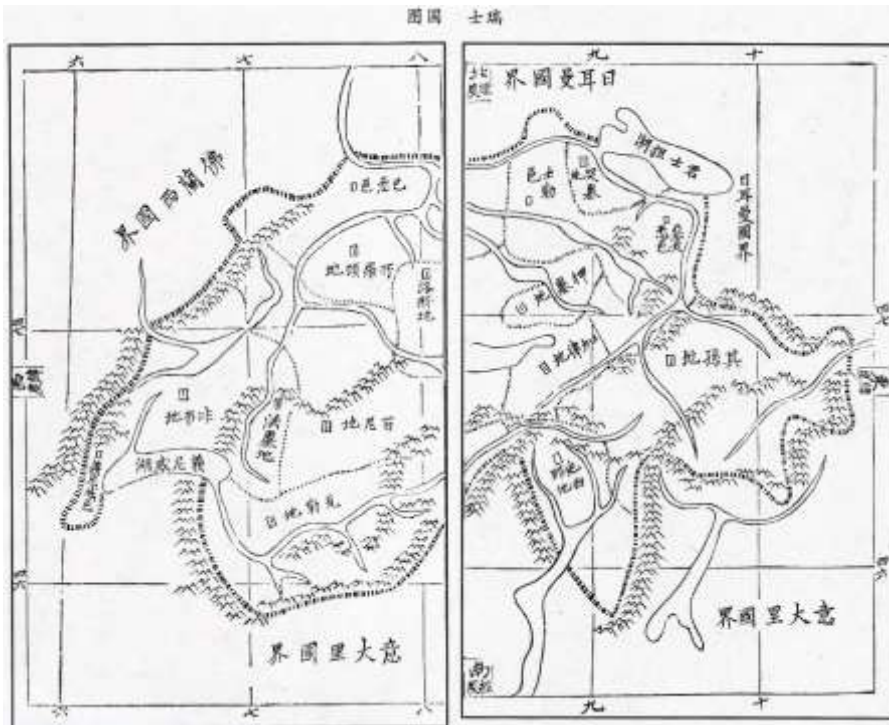


図4

では義尼威湖となっているからジュネーヴ湖でよい。正しい記載だ。

しかし『瑞士建国誌』は同じ湖を官斯丹薩湖としている。英語でコンスタンツ湖、ドイツ語でボーデン湖だ。本来はスイスの東北にある。表示が間違っている。『瑞士建国誌』は正しくない地図を掲載した。『海国図志』は正確に描いているのだから不正確な地図はどこから引用したのか。

『瑞士建国誌』がもとづいた地図は『瀛環志略』である。

『瀛環志略』（道光戊申1848年）は世界各国の事情を概説した地理書だ。その巻5に「欧羅巴瑞士国」がある。これに収録されたスイス地図（図5。ウェブから引用）を下敷きにして模写したのが『瑞士建国誌』所収の地図である。

『瑞士建国誌』はなぜ『海国図志』ではなく一部が間違っている『瀛環志略』を採用したのか。

思うにウィリアム・テルの舞台となる3州が記載されているかどうかの違いによる。

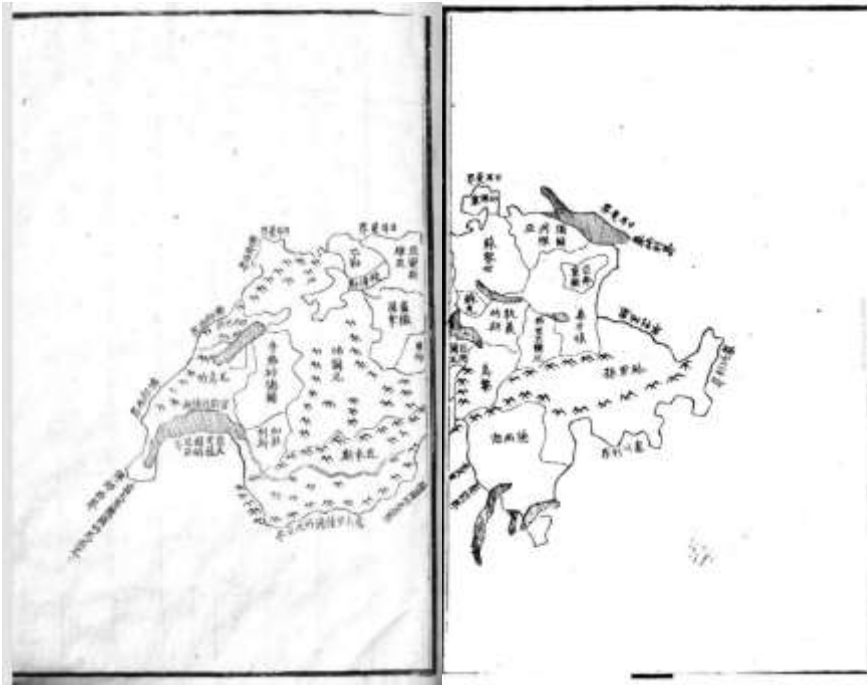


図5

すなわちフィアヴァルトシュテッテ湖（名称は地図にない）の東からシュヴィーツ（執義的斯）、南のウーリ（烏黎）、西のウンターヴァルデン（翁徳爾瓦里的）の3州だ。それらの記載が『海国図志』所収の地図にはなかった。だからその地名を記した『瀛環志略』の地図のほうを一部に間違いがあるがあえて採用したと推測する。

ついでに言えば、せつかくのスイス地図だが1840年代に中国で作図されている。ウィリアム・テルの14世紀とは時間が遠く離れる。これも「瑞士国計表」と同じく大要を示すためのものだ。時代が異なっていようとも人々の知識を増やすことが政治小説の役割だと割り切った鄭貫公の判断だろう。

#### 4 『瑞士建国誌』全10回の大要

各回の内容を簡単に紹介する。「注」に私が気のついたことを記す。シラー戯曲に言及するのは、今の段階で日本語翻訳作品を特定することができないからだ。

比較対照するためにはシラー戯曲しかない（後述）。ここでシラー戯曲を持ち出すのは、正しい方法ではないことはわかっている。暫定的なやり方だとご了解いただきたい。

### ○第1回

12世紀（「自序」で述べたのをくり返している。中国元朝元貞年間というから13世紀が正しい）のヨーロッパ中央にスイスという小国があった。占領したドイツのルドルフ（羅徳福）は、息子のアルブレヒト（亜露覇）を派遣し統治させた。その臣下のヘルマン・ゲスラー（希路曼・倪士勒）は悪辣をきわめた。ウーリ地方に有名なウィリアム・テル（維霖惕露）がいた。故国をドイツから奪回することを親友たちと議論していた。

注：スイスの歴史的状況を簡単に説明して、すぐさま英雄ウィリアム・テルが登場する。ドイツから祖国を奪回するために行動をとると明らかにしている。最初から主人公として出現しているところに注目したい。ここがシラー戯曲とは異なる。

### ○第2回

帰宅したテルは妻ヘートヴィヒ（漢訳名はない）に仲間と故国回復について議論をしたことを告げる。両親の言葉を聞いた息子ヴァルター（華禄他）までもが故国回復を進言する。そこへテルの親友アルノルト（亜魯拿・穆勒得木）が訪問してきた。彼もドイツの人の非道なことを訴える。（独立する）時は来た、機会を失うべきではない。

注：妻の漢訳名がない。息子はひとりだけが登場する。シラー戯曲では弟がいるのを無視した。ないことにしたのは底本か鄭貫公かは不明。メルヒタールに穆勒得木を当てた。これは地名だが、姓として呼んでもいる。だから鄭貫公は最初から姓として理解した。またアルノルトの容貌を説明したうえで「三国志の関羽公が再現したようだ」（9頁）とつけ加えて中国化した。

### ○第3回

アルノルトと父親は牛を連れて畑仕事に出かけた。悪代官ゲスラーの兵士が通りかかり、アルノルトらの牛を見て奪おうとした。父親がそれを阻止する。アルノルトも抵抗して兵士らを罵る。殴り合いになり兵士を撃退した。知らせを聞いた悪代官ゲスラーは手勢を引き連れて襲ってきた。父親は捕まり殴打され、逃れたアルノルトには賞金が懸けられた。話を聞かされた友人たちは同じように憤激した。愛国党と名乗り檄を発して広く同志を集めることになった。

注：シラー戯曲では、アルノルトの父親は両眼に熱い鉄の棒を突き刺された。鄭貫公はそこまでは書いていない。檄文に関しては底本にあるのか、それとも鄭貫公の創作かは今の段階ではわからない。愛国党についてはシラー戯曲には存在しない。

#### ○第4回

スイスには民間秘密結社（会党）がひとつあった。アルノルトは檄文を持ってそこを訪問した。頭目は3人いる。名前は翁徳華丁、師格哇、盧多利だ。彼らと意気投合した。一方、アルノルトと分かれたウィリアム・テルは、斯知念地方の志士威里尼（参考：日本『元氣』24頁壮士ウイルニー）の訪問を受ける。テルに早く行動に出るように勧める。テルたちはアルノルトを探して雷鳴轟く風雨をついて河をわたった。アルノルトと再会し彼の父親が悪代官ゲスラーに殺害されたことを伝えた。テルは檄文を読むと称賛し、その場で一同との宴会になった。テルは「愛国歌」を作り歌った。その後はおのおのが救国救民の演説をした。すでに東方が白んでいる。

注：シラー戯曲第2幕では3地方の代表が集まって同盟の誓いをたてる。リュトリの誓いという。『瑞士建国誌』の底本はそれを改変したものか。あるいは鄭貫公の筆になるのだろうか。ここも不明としておく。テル作「愛国歌」そのものがシラー戯曲には存在しない。

#### ○第5回

アルノルトとテル親子は明年正月に蜂起することを約束して分かれた。ウィリアム・テルは息子と狩りに出かけた。多くとれたので市場で売りつくしたのち茶

楼で夕食にした。外が騒がしい。見に行った。

注：テルと悪代官ゲスラーが直接対立するまでにはもうすこし時間がかかる。

#### ○第6回

町に長い木柱が立てられその頂上に帽子が置かれている。石碑がありそこには、ここを通過する人はかならず脱帽しお辞儀をしなくてはならないと書いてある。そういうことがあるのかとテル親子はそのまま帰っていった。悪代官ゲスラーがこの計略を思いついたのには理由がある。彼はスイスに愛国党という民間秘密結社があることを知り、それを早期に根絶やしする必要を感じた。帽子の掲揚は愛国党員をあぶり出すための手段であった。テルは息子と2、3日相談してから町へいった。帽子が懸けられた柱を両断したから兵士によって捕らえられた。裁きの場においてテルは長年にわたり自分の土地を奪い自分の人民を害するドイツが強盗であることを強く批判する。殺すなら殺せ。

注：シラー戯曲には柱をうち立て帽子を置いた理由についての説明はない。権力をかさにきて人々にお辞儀を強制し侮辱を加えるためのように見える。ところが『瑞士建国誌』では愛国党との関連づけをしているところが異なる。ちなみに日本『元氣』を底本にした漢訳『警史』にもそのような説明がある。謀反人を判別するために利用するという。

鄭貫公のテルは柱をへし折るつもりで出かけた確信犯だ。しかも短慮である。スイス独立運動を指導する主人公として設定しているから、そこからも逸脱せざるを得ない。シラー戯曲でのテルは独立運動からは孤立している。だからこそ帽子に気がつかず捕まると謝ってしまう彼の存在は自然だ。ところが鄭貫公はテルを考えの足りない熱血漢の英雄にしてしまったかのようだ。そういう人物では独立運動という大事業の指導者になる資格がないではないか。人物設定に基本的な無理が生じている。そう書き換えたのは底本の日本語翻訳本か鄭貫公自身なのかはわからない。リンゴを的にする場面は後まわした。

#### ○第7回

リンゴ射的の物語がはじまる。

裁きの場で悪代官ゲスラーはテルに死期が来たことをいう。ただし生き残る機会をひとつ与えた。息子の頭にリンゴを置き、「十数里」離れて射落とせと命じる。当たれば罪を赦して帰宅を認める。失敗すればふたりとも死ぬ。テルは失敗したときは悪代官ゲスラーを殺すことにして矢を1本多く与えてくれるよう要求した。テルは周囲の人々にむかって今後救国のために励み協力するように話す。矢はリンゴを射落とす。テルは堂々とし、悪代官ゲスラーは慌てふためく。テルは先に矢を2本与えるように言った理由をあかす。失敗したときはもう1本の矢でお前のつまらない命を奪うつもりだった。悪代官ゲスラーはその場で死刑に処するところだがテルの仲間が救出にくることを心配した。その夜テル父子を別の場所に移すため舟で水路を行った。突然、雷が轟き風雨がまき上がり舟に水が入ってきて操縦不能におちいった。この窮地から脱出するためには、舟の舵取りも得意なテルに操船をまかせるよりしかたがない。テル父子は操っていた舟から川岸へ飛びのり逃亡した。

注：悪代官ゲスラーがこの法廷において確信犯テルにチャンスを与えることは意味が不明だといえないこともない。的にしたリンゴに当たれば罪をゆるす。ならば柱をへし折った行為を咎めないことになる。わざわざ法廷で裁くことは必要ではない。確信犯に対する悪代官ゲスラーの対処法としては一貫性がないともいえる。ただし悪代官ゲスラーにしてみれば、万が一にもテルが射的に成功するとは思えない。「わし（悪代官ゲスラー）は最初お前に会ったとき、ただの農民だと思った。お前を殺してしまえば罪のない殺しのようなになる。だからこの難題をもってしてお前ら父子が自ら死ぬようにさせようと考えたのだ」これが悪代官ゲスラーの弁明だ。物わかりのいい悪代官ではないか。違和感が生じる。その場のなりゆきでリンゴ射的が偶然に発生したシラー戯曲と比較すると法廷を設けただけ事が過大となって劇的要素が薄れた。

またリンゴとの距離が「十数里」というのはどうか。一里が500メートルとすれば、少なくとも5キロメートルであって現実的ではない。50余歩であればまだ理解できるが、それでも遠すぎる。シラー戯曲では明確な距離指定がない。次の台詞はある。「ゲスラー それではテル、お前は百歩も離れて、木から／林檎を射おとすそうだから、ひとつその腕前を／眼の前で見せてもらおう。さあ、弓

を取れ、——」桜井訳123頁

テルが最初から2本の矢を要求したことに改変したのにも問題がある。シラー戯曲では2本目の矢を隠し持っているのを悪代官ゲスラーが尋問してテルの口を割らせたのだった。明らかに異なる。矢を要求したということは、テルは弓矢を持参していなかったことになる。奇妙だ。もともと自分の矢であるものを2本持たせるように要求したというのであれば納得しないわけではない。どのみち説明が不足している。

#### ○第8回

テル父子が悪代官ゲスラーから逃れて林中で気づいたのは、その時こそスイス愛国党が蜂起する日だった。テル父子はアルノルトと合流した。テルは仲間に向かってリング射的の様子、舟で脱出した経緯などを説明した。故国を回復するためにはまず悪代官ゲスラーなどの賊を殺さなければならない。同胞万歳、スイス万歳。一方の悪代官ゲスラーはテル父子を追跡していた。それを待ち伏せていたテルは矢を放って彼を殺害したのち愛国党の人々と再合流する。人々はテルを大元帥に、アルノルトを大將軍に、ヴァルターを先鋒に任命した。

注：シラー戯曲ではテルの息子ヴァルターは10余歳だ。「先鋒」に任命された息子は鄭貫公の設定では青年ということか。孤立しているはずのテルが大元帥に任命されるとはシラー戯曲から大きく離れる。

#### ○第9回

アルブレヒトは悪代官ゲスラーがテルに射殺されると知らされた。怒ったアルブレヒトは、陸と水から攻撃するためにドイツ兵数千名を動員することにした。一方で愛国党の人数は増加していた。テルは「同盟恢復歌」を作る。テルは手に大鉄斧を持ち頭には銀兜をいただき身には鎧をつけモルガルテン（馬路加汶）地方へむけて進む。アルブレヒトはそれを迎え撃つ。戦いの結果アルブレヒトは敗走した。ドイツ兵数千は愛国党数百人に破れた。テルは共和政体を樹立し独立を恢復した。西暦1315年、中国元朝廷<sup>マ</sup>佑四年のことである。

注：第4回の「愛国歌」とこの「同盟恢復歌」は鄭貫公の創作だろう。1315

年であれば中国元朝延佑二年に当たる。中国暦となぜ不一致なのか理由は不明。

○第10回

君主専制ではなく民間から議院を開き選挙によって総統を選ぶことにした。テルは総統にならないことを決意し何度もあげられたが職にはつかず隠居した。1343年、中国元朝元統二年にテルは死去した。葬式で読まれる長い祭文が続く。その後、悪代官ゲスラーを射殺した洞穴にはテルを記念する銅像が建てられ皆は参拝をした。中国の清明節のようだ。スイスが共和国となった後の状況が理想郷であるかのように説明される。

注：シラー戯曲の時制は1307年にまとめられている。鄭貫公の『瑞士建国誌』は、モルガルテンの戦いが1315年だからそれを出すために時期をふくらませた。また1度の勝利だけでスイスの独立が成立したわけではない。変更したことになろう。ここでも西暦と中国暦の換算間違いがある。テルが死去した1343年は元朝至正三年でなければならない。元朝元統二年であれば1334年である。またテルを追悼する長文があり、これはいかにも中国人の手になるものだ。

『瑞士建国誌』はウィリアム・テルを主人公にして首尾が一貫している。完結したひとつの小説だ。

注において『瑞士建国誌』がシラー戯曲とは異なっているところをいくつか指摘した。いってしまえばシラー戯曲とは直接の関係がない。戯曲をもとにして鄭貫公が創作したという可能性はほとんどない。

念のために記す。大きな違いはウィリアム・テルを物語の主人公に設定したところだ。底本とした日本語翻訳がそのようになっているのを踏まえていると考えられる。ゆえに基本をいえば『瑞士建国誌』とシラー戯曲を比較することに意味はない。今の段階で底本が不明だから便宜的にシラー戯曲を出した。そこであらためて底本問題が出現する。

それにしてもテルの死去を1343年だと明記したのには違和感がある。架空の人物だから死去の時間も架空であっていいという考えだろうか。たとえば久松義典『万国史略』（集英堂1880.10.29）では、テルの死去を千五百三十四年と誤植し



て示す。1334年だろう。また死因を溺死として1350年とするものもある（コルリール Collier 著、河津孫四郎訳述『西洋易知録』知新館1870、巻之4下6丁ウー7丁オ。国立国会図書館デジタルコレクション）。鄭貫公が1343年という具体的な数字を示したのには何かの根拠があるはずだ。ここも底本のままなのか。

以上のようにいくつかの疑問が出てくる。次は日本語訳本を見ていく。

日本ではドイツ語から直接翻訳されたものがいくつか刊行された。原題が英語読みの「ウィリアム・テル」でありながら、別の名前をあたえられている。

## 5 漢訳に関係がありそうな日本語訳

参考文献で示した木村毅、齋藤昌三ら、柳田泉、井澤睿子、徐黎明にもとづきいくつかの作品を発行順で一覧する。ウィリアム・テル関係ということでまとめた。シラー戯曲に限定していない。あくまでも参考だからはじめから対象外のものも含めてある。訂正した部分があることを言うておく。便宜的に番号をふった。

記号について結論を先にいう。×は漢訳の底本ではないことを示す。

1 ×シルレル（フリードリヒ・フォン・シラー）著、齋藤鉄太郎訳『瑞正独立自由の弓弦』（ウィリアム・テル）、出版人白水増吉、1880.12.26。

注：未完。散文体。柳田泉編『明治文化資料叢書』第9巻翻訳文学篇、風間書房1972.9.15所収

2 ×視而列爾（シルレル）著、松湖漁史（山田郁治）訳述『哲爾自由譚 一名自由之魁』前編、甘泉堂、丸善書店、泰山堂1882.10。

注：前編のみ。国立国会図書館デジタルコレクション

3 蘆田束雄『（字血句涙）回天之弦声』12回 乾坤2冊 出版人：鎗田政治郎、賣捌人：一光堂、1887.11。

注：半窓睡仙。冒頭に「瑞西国沿革紀事」が別にある。国立国会図書館デジタルコレクションは初版。下巻第2丁が落丁。架蔵のものは出版人：伊藤武彦、賣捌人：金鱗堂、1888.10再版。初版とは挿絵の位置が異なる箇所がある。後で説明する。

4 谷口政徳（睨天逸史）編訳『（血涙万行）国民之元気』前後編、金泉堂  
1888.1

注：シラー原作ではない。漢文「瑞西独立小史」あり。後で説明する。

5 霞城山人（中川霞城）訳「（維廉的兒）自由之一箭」『少年文武』創刊号一  
第2年第3冊（1890.1.17-1891.3.30）連載

注：シラー戯曲の翻訳。脚本のまま。部分複写で見ると。後で説明する。

6 ×巖谷小波訳「脚本 瑞西義民伝」『文藝倶楽部』第9巻第15号1903.11.1。  
ウイヘルム テルの一節

注：巖谷小波翻訳「瑞西義民伝」上演、1905.3明治座

7 ×（シルレル「ウイヘルム、テル」）徳田秋江（浩司）著『シルレル物語』富  
山房1903.12.24。通俗世界文学第9篇。

注：小説化本。国立国会図書館デジタルコレクション

8 ×シルレル原著、佐藤芝峰訳『うみるへるむてる』秀文書院1905（一名瑞西  
義民伝）。完訳

上の日本語訳本に『瑞士建国誌』の1902年刊行を当てはめる。

未完である1と2が外れる。678は1903年以降の発表だからこれも底本に  
はならない。

底本の候補作品として残るのは345だ。

### 3 『（字血句涙）回天之弦声』のばあい

「例言」から引用する。

……一ニ知留連氏ノ<sup>シルレル</sup>惕爾譚ニ依リ傍ラ二三ノ瑞西史ヲ以テ参考ニ供スルノ  
ミ故ニ往々架空ヲ免カレス 1丁ウ

これは、半窗睡仙「自序」にある「<sup>シルレル</sup>西留連氏の惕爾譚に依り」（4丁ウ）と重  
なる。「シルレル」すなわちシラー戯曲のなかのウィリアム・テル物語を中心に  
したということらしい。



柳田泉が「内容はスイス民権沿革の演義体小説である。もちろんシルレルの『ヴィルヘルム・テル』その他を材料にしたものであるらしいことは、一見して明白である」（88頁）と書いている通りだ。

『回天之弦声』（以下『回天』と略す）の冒頭に「瑞西国沿革紀事」を配置したのは日本の読者の理解を助けるためだ。

第1回、獵師維尼（ウキルニー／ヴェルニー）、牧者格王尼（ウワーニー／クオニー）、水夫格男泥（クワデー／ルーオディー）が登場する。カッコの前者は『回天』のルビであり、後者はシラー戯曲の表記だ。そこに波武我天（バウムガルテン／同左）が血を浴びたままで追われてくる。代官を殺したという。暴風雨が来るから舟は出さない。いや乗せろ。ここに来かかった維廉惕爾（ウルヘルムテル）が文字通りの助け船を出した。

ここはシラー戯曲をもとにしていると言っていい。だが『瑞士建国誌』とは異なる。

テルが登場するのは第4回までにすぎない。『回天』を「ウィリアム・テル物語」とするのは無理がある。テルは主要登場人物のなかのひとりなのだ。奇異な印象が発生するのはリング射的の場面がないからだ。これには驚くとともに落胆

する。第3回で<sup>アルミト</sup>垂爾美杜が<sup>ルトリ</sup>魯多利の深谷で襲われ（死去し）たとある。第5回には彼の息子<sup>アルナダス</sup>垂爾那脱が身よりなく叔父に財産を狙われる。アルナダスは旅に出る。

第8回 アルナダスが展開する長文の「書生論」12丁オ-16丁ウはウィリアム・テル物語とは関係がない

第9回 アルナダスは悪代官（『回天』では奉行）ゲスレルの老臣<sup>ルゲル</sup>留原の娘<sup>アーリー</sup>垂黎に会う。ルゲルがゲスラーに差し出した諫言状（21丁ウ-26丁オ）が珍しい。ゲスラー側内部の様子を説明した書物は少ないのではなかろうか。「人民有リテ而シテ後始メテ政府アリ政府アリテ而テ後人民有ルニ非ルナリ。故ニ人民ハ本ナリ政府ハ末ナリ」（22丁ウ）などと真つ当なことばを綴っている。

第11回より老人<sup>フライヘルランアツテングワウゼン</sup>浮来辺保温垂天高善（シラーでは男爵アツテングハウゼン）が登場する。甥の<sup>ルーデーツ</sup>留田通（シラーではルーデンツ）との会話が長い。大筋はシラー戯曲第2幕第1場だ。

第12回終わりには、次のような説明がある。

維廉<sup>ママ</sup>愾<sup>ママ</sup>〔愾〕爾、須達夫、華辺留、阿留那脱等の諸士与に慷慨有為の士なりと。嗚呼。諸士は何れの処に如何なる日月を送るや。読者と与に之を後日に見んとすと。坤47丁オ

ウィリアム・テル、シュタウファッハー、アルナダスらの名前を出すだけ。彼らがどのように活躍したかは述べない。こうして『回天』乾坤2冊は完結する。モルガルテンの戦いはなくテルの死去もない。これを一般には肩すかしという。

『回天』の中身は「ウィリアム・テル伝」ではない。ましてや「スイス独立史」というわけでもない。それらは背景に組み込まれてはいる。しかしスイスは独立しない。全体から見れば中途半端な結末で放り出した未完製品だ。『瑞士建国誌』がウィリアム・テルで統一されているのと比較しても、作品として首尾が整ったものだとはとてもいうことができない。

『回天』は『瑞士建国誌』の底本ではない。

徐黎明は日本の『国民之元氣』（後述）と『回天之弦声』をあげて人名地名などの類似点を指摘する。その結論は次である。

「意識と創作部分がとても多く、文体上言語上すでにとっても中国化している『瑞士建国誌』は、それが日本を源流にしているとはいえ当時日本に流布していたいくつかの資料を参考にしたとほぼ判断できるだけだ。その中で特に重要なのは蘆田東雄の『回天之弦声』である〔意識和創作部分極多、文体上語言上已經極為中国化的《瑞士建国誌》、其日本源頭、只能大致判断是参考了当時日本流行的幾種資料、其中最為重要的、則為芦田東雄的《回天之弦声》〕」（325頁）

私は『回天』は『瑞士建国誌』の底本ではないと判断している。参考にしたかどうかともわからない。

徐黎明がもうひとつ結論的に述べるのは「日本語底本を明確に探し当てることはむつかしい〔難以清晰地覓到日文底本〕」（339頁）だ。こちらの意見には賛成する。

ついでに触れる。徐黎明はいまだに林紓がイプセン戯曲を小説にして翻訳したと書いている（326頁）。それが誤りであることが明らかにされたのは2007年だ。中国は広いから情報が伝わっていないらしい。

#### 4 『（血涙万行）国民之元氣』のばあい

漢文で書かれた「瑞西独立小史」が冒頭に掲載されている。歴史的な知識があれば作品の理解がすすむという著者の考えなのだろう。

「例言」には基づいたのが歴史書であると書いてある。するとシラー戯曲とは違うことになる。

ウィリアム・テルはなかなか登場しない。後編第10回に「<sup>ふる</sup>布爾古連<sup>ウイレムテル</sup>の維廉別爾」（6頁以降では「惕爾」）として出てくる。テルが生まれたとされる村は「ビュルグレン Buerglen」だ。それを布爾古連とした。テルは物語の主人公ではない。

スイス独立史を基礎におきながら紙幅の多くは別物だ。独立運動の中心となる人物ふたりをめぐる恋愛物語に、小さいころ誘拐された妹を探す物語がからめられる。また魔法にかけられたライオンは王子だったという変身譚までも挿入されてもいる。全体の印象からいえば冒険恋愛小説なのだ。

結局のところ該作は『瑞士建国誌』の底本ではない。別作品の底本になった。すなわち、陸龍翔（朔とするのは誤り）が翻訳した『瑞西独立警史』（日本・訳書

彙編社、光緒29（1903））である（別稿「『瑞西独立警史』について——漢訳「スイス独立史」」を参照のこと）。

## 5 「（維廉的児）自由之一箭」のばあい

最初に参考文献の説明を見た。以下のように書いてある。

木村ら49頁 明治19年「得廉自由の一箭」シルレル、中川霞城、少年文武『『ウイルヘルム・テル』の訳で、却々巧な訳しぶりであつたやうに思ふ」  
柳田188頁 「維廉得自由の一箭」SCHILLER: WILHELM TELL（23年発表）

該訳文の部分的複写を見ている。木村らと柳田の示す題名が一致しない。「維廉的児」ウィリアム・テルは、もともと角書あつかいである。

第1幕第4場から一部分をまず霞城山人訳文から引く。参照のために桜井訳をうしろに掲げる。

悪代官ランデンベルクの命令で父親が両眼を抉られたと聞いたアルノルトのことばだ。

【霞城山人】貴き天の恩物は、此の両眼の明なり、野山を走る獣より、空飛ぶ鳥も水遊ぶ、鱗族迄も皆活て、生を喜ふ其訳は、日光の恵あればこそ、——草木でさへも嬉し気に、午影の方に向ふぞや、それにいとしや父上には、四方摸りて烏婆玉の、盡きぬ闇夜の其中に、独り蕭然おはすとは、（後略）

36頁

【桜井】おお、てんからたまわったものの中で、眼で見る光が一番大事です、どんな生き物もです。——植物のような物でさえ、飲んで光の方へ向きます。

それなのに僕のおやじはくらやみの中で不運にひたっていねばなりません、とこやみの中にです。（後略）45頁

霞城山人の日本語訳は、語句を補いながらこなれたものになっていることがわかる。とはいえ戯曲のままだからこれも『瑞士建国誌』とは関係がない。

以上いくつかの関連書籍を見た。いずれも『瑞士建国誌』の底本ではなかった。底本探索は振り出しにもどった。別の方面から探る以外に方法がない。

【注】

- 1) 徐黎明も同じく上海図書館所蔵本を見たという。刊年を1902年とするが根拠を示さない。奥付があるかどうかについても明確に説明していない。318頁
- 2) 馮自由「鄭貴公事略」82-85頁『革命逸史』初集 商務印書館1939.6/1945.2重慶第二版/1945.12上海初版

【参考文献】

- シラー作、桜井政隆、桜井国隆訳『ヴィルヘルム・テル』岩波文庫、1929.2.5/1984.4.5  
二十五刷
- 木村毅、齋藤昌三『西洋文学翻訳年表』岩波書店1933.7.5。岩波講座世界文学
- 柳田 泉『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究第5巻 春秋社1961.9.15/1966.3.10  
二刷
- 柳田 泉「政治小説年表」『政治小説研究』下 明治文学研究第10巻 春秋社1968.12.25
- 吉武好隆「第四章 葦田東雄（半窓睡山）の翻案作品」『近代文学の中の西欧』教育出版センター1974.11.5 比較文学研究叢書1
- 宮下啓三『ウィリアム・テル伝説——ある英雄の虚実』NHKブックス348。1979.7.20
- 井澤睿子「齋藤鉄太郎訳「瑞正独立の弓弦」について」『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第12号 1991.3.31
- 谷川道子「ドイツ文学」原卓也、西永良成編『翻訳百年——外国文学と日本の近代』大修館書店2000.2.10
- 藤田保幸「広義翻訳作品としての蘆田東雄『字血句涙・回天之弦声』の性格」『表現研究』第74号 2001.10.31
- feimeng「歩武瑞士，肇建新邦——鄭貴公与《瑞士建国誌》」ウェブ「水木社区」2005.9.26。

注：これにあるシラー戯曲との比較を削除したものが羅衍軍論文らしい。

羅 衍軍「歩武瑞士 肇建新邦——鄭貫公与《瑞士建国誌》」『文教資料』2008年6月号下旬刊 2008.6.25

武禧（劉徳隆）「零七三 鄭哲」「晚清小説作者掃描（15）」『清末小説から』第90号 2008.7.1

徐 黎明「翻訳・政治・政治小説——略論《瑞士建国誌》在東亜的翻譯与伝播」『翻譯史研究』2015 上海・復旦大学出版社2015.12



## 漢訳リサール辞世詩

—魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪

『清末小説から』第126-128号（2017.7.1-2018.1.1）に掲載。荒井由美名を使用。魯迅はフィリピン人リサールの辞世詩を読んだことがある。魯迅がリサールの名前に言及しているところからわかる。問題になるのは『魯迅全集』1957年版につけられた注釈だ。リサールの「墓中呼声」は梁啓超が漢訳したことがあると説明する。ところが梁啓超の漢訳がいつどこに発表されたのかを明らかにしない。のちの1981年版ではさらに詳しくリサール辞世詩の原題は「我的最後の告别（我が最後の別れ）」といい、梁啓超漢訳は「墓中呼声」だと明記する。ここでも梁啓超漢訳詩の具体的な公表時間、掲載誌などは不明のまま。2001年になって梁啓超が漢訳したというリサール辞世詩はみつからないと疑義が提出された。それ以来、調査が進み馬君武の漢訳、あるいは真吾重訳「墓中呼声」が発掘され、これらが梁啓超漢訳という誤解を生みだした。そこまで明らかにされている。ただし従来の研究者の視界には重要な事項が完全に欠落している。日本である。日本を抜きにしてリサール辞世詩を語ることはできないのだ。リサールの生涯と辞世詩を紹介したのは、日本語翻訳で刊行されたマリアノ・ボンセ原作『南洋之風雲』なのである。研究者が言及することのない該書こそが、この問題を解く鍵にほかならない。附録として「リサール辞世詩の翻訳対照表——清末の日訳、漢訳を中心に」を作成した。

魯迅の文章そのものが問題になっているわけではない。議論の中心は『魯迅全集』にほどこされたひとつの注釈だ。フィリピン人リサールの詩に関連している。梁啓超を巻き込んでいるから注目される。長期間にわたって討論されてきた。私が見るところ魯迅はリサールの作品とどのように関わったかと問うことだ。

## 1 魯迅「雑憶」から

魯迅は「雑憶」（1925）において外国の詩人を数名挙げた。清朝末期に一部中国の青年には革命思潮が盛んであり、復讐と反抗を叫ぶ者は共感を覚えたと述べる。その文脈のなかでパイロン、ミツケヴィッチ、ペターフィおよびリサールの名前を出した。本稿で取りあげるリサールに関する部分の原文を引用する。

飛獵賓的文人而為西班牙政府所殺的釐沙路<sup>[7]</sup>，——他的祖父還是中国人，中国也曾訳過他的絶命詩<sup>\*1</sup>。

フィリピンの知識人でスペイン政府に殺されたりサール<sup>[7]</sup>——彼の祖父は中国人で、彼の辞世の詩は中国でもかつて翻訳されたことがあった。

フィリピン人リサールの「辞世の詩 [絶命詩]」（本稿でいう「辞世詩」または「臨終の辞」）は中国で翻訳されたことがある。それだけを述べた文章にすぎない。魯迅は表記して「絶命詩」というのみ。一般に知られている詩の題名も書いていないし具体的な説明があるわけでもない。

魯迅はリサールの辞世詩を読んだから彼の名前を出したのだろう。だがスペイン語で書かれた原詩ではないはずだ。英語に翻訳されたものとも違う<sup>\*2</sup>。翻訳だとすれば日本語訳か、あるいは漢訳か。清末に読まれたというのだから漢訳を指すのかもしれない。ただしその詩は誰が翻訳していつどこに発表したのか。魯迅はなにも書いてはいない。そこで文中に見える注釈7が問題になる（後述）。

リサールについて魯迅が触れた文章がもうひとつある。『魯迅全集』1981年版第8巻「随感録」である。

「フィリピンではリサールの小説を1冊だけ入手した [斐律賓只得了一本烈賽的小説]」79頁

この「随感録」は1918年4月から1919年4月の間に書かれたという。また作者の手稿によったと注される。

魯迅はリサールの漢訳に烈賽と釐沙路のふたつを当てた。

東京時代の魯迅がリサールの小説を山田美妙訳で読んだことについては、周作人の証言があることに注目されたい\*3。しかしリサールの辞世詩については、上のようにあいまいなままだ。

そこを調査するのが研究者の役割になる。『魯迅全集』の注釈番号7を見てみよう。

## 2 梁啓超と「墓中呼声」——問題の発生

私の知る範囲内で『魯迅全集』1957年版\*4の注釈が時期的には早い。後の説明の基礎となっている。注釈番号7は1957年版も後の1981年版でも同じ。ただし内容が異なることは後に述べる。

まず1957年版から引用する。

[7] 釐沙路 (J. Rizal, 1861-1896), 或訳扶西・黎利, 菲律賓愛国詩人。為当時占領菲律賓の外国統治者西班牙人所殺害, 他的絶命詩《墓中呼声》曾由梁啓超訳為中文。549頁

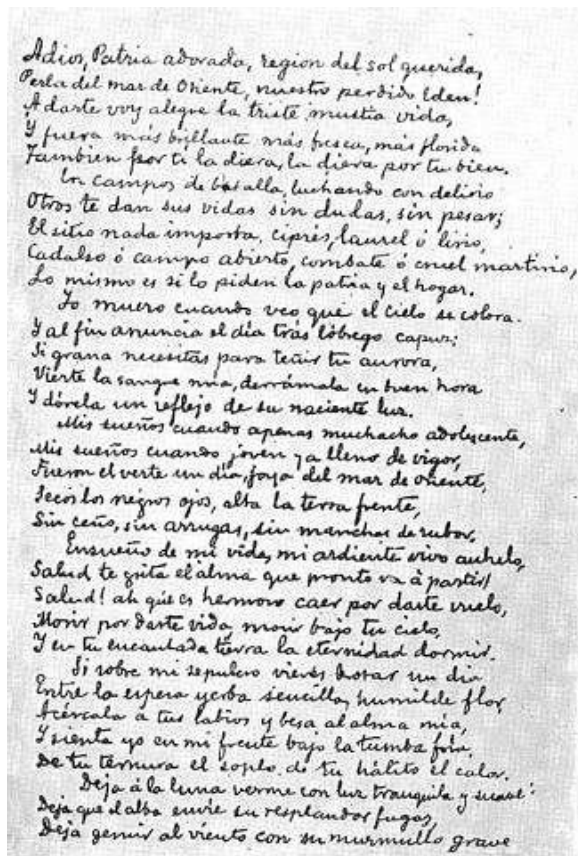
リサル釐沙路 (J. Rizal, 1861-1896)、あるいはホセ扶西・リサル黎利と訳す。フィリピンの愛国詩人。当時フィリピンを占領していた外国の統治者スペイン人に殺害された。彼の辞世の詩「墓中からの呼び声 [墓中呼声]」はかつて梁啓超により漢訳されたことがある。

リサールの辞世詩と梁啓超の翻訳があると簡潔に説明している。

リサールのスペイン語原詩は、後に別人により名づけられ「MI ÚLTIMO PENSAMIENTO. [我が臨終の感想]」、あるいは「MI ÚLTIMO ADIÓS [我が最後の別れ]」と呼ばれて定着している。1連(節)5行、全14連70行によって構成された詩である。

原詩の題名が一定していないのは、リサルが処刑される前の作詩に題名そのものがなかったからだ。事実、ネット上で見ることのできるリサールの原稿らしきものには題名が書かれていない。記念館に展示してあるのは同時代人による複

写原稿だろう。実物は紛失したという\*5。



リサール辞世詩

ネットより引用

ところが上記『魯迅全集』注釈によると辞世詩の題名は「墓中からの呼び声 [墓中呼声]」だ。スペイン語原題の「我が臨終の感想」あるいは「我が最後の別れ」とは離れる。なぜその漢訳題名なのか。

もうひとつ。梁啓超が何語に基づいて漢訳したのか不明だ。さらにいつどこに発表したのか。いくつもの疑問が普通に出てくる。

なにも解決されないまま結論としてリサールの辞世詩「墓中呼声」は、梁啓超によって漢訳されたという説明である。

上の説明はとてもあいまいだ。誤解を招く表現だといわざるをえない。

あらためて指摘しておきたい。1957年当時、リサールの辞世詩——漢訳者不明の中国でいう「墓中呼声」は梁啓超の名前と並置されているにすぎない。梁啓超が漢訳したというその題名が「墓中呼声」ではないのだ。ご注意願いたい。リ

サール辞世詩（基づいた言語不明）を梁啓超が漢訳したことがあるというだけのこと。

ただし字句の表面をたどっていくと「墓中呼声」という漢訳題名が梁啓超と結びつく。無理矢理だが梁啓超の漢訳が「墓中呼声」だと読めないことはない。だから最初からそう誤解するのが普通になっている（後述）。

それにしても奇妙な注釈だと思う。

スペイン語でいう「我が臨終の感想」「我が最後の別れ」が漢訳されるとなぜ「墓中からの呼び声 [墓中呼声]」になるのか。リサール辞世詩の内容からそうなるかと思いはする。それよりも、注釈者は「墓中呼声」という題名をどこから引いてきたのか。根拠があるはずだがその説明はない（後述）。

さらには梁啓超の漢訳があるというだけ。くり返すが、いつどこに発表したかなどの具体的な記述はない。

わざとあいまいにした注釈のように見える。その理由は注釈者が伝聞だけに依拠し実物で確認していないからだろう。固有名詞を出せばなにかの手がかりになるという判断があったはずだ。しかしそれは同時に解釈の混乱を招く恐れを生じさせた。

実のところ後には注釈をかさねて変な方向にねじ曲がった。梁啓超が漢訳してその題名が「墓中呼声」であることにしてしまうのだ。ここには根拠のない論理の飛躍がある。

後にほどこされたその注釈は1957年版をもとにしてリサールについて少し詳しくなっている。異なるのは梁啓超部分を大胆に書き換えたことだ。『魯迅全集』1981年版の注釈該当部分のみを引用する。

他的絶命詩《我的最後の告別》，曾由梁啓超訳成中文，題作《墓中呼声》。

227頁

彼の辞世の詩「我が最後の別れ [我的最後の告別]」は、かつて梁啓超により漢訳され「墓中からの呼び声 [墓中呼声]」と題された。

この注釈で新しいところがある。リサールの詩が「我的最後の告別 [我が最後

の別れ]」という一般に流布する題名であることを明らかにした点だ。

そこまでは、いい。問題はもとの注釈に出てきていた「墓中呼声」について奇妙な記述変更を行なったことだ。すなわち梁啓超がリサールの原詩を漢訳して「墓中呼声」と題したと。根拠も示さずそう断言した。無責任な注釈だ。

1957年版では「墓中呼声」と梁啓超の名前を並置するだけだった。両者に直接の関係はない(傍点筆者)。それが1981年版になるとリサールの詩を梁啓超が漢訳して「墓中呼声」と題したと明記している。重要な箇所だから再度書いた。

そこまで記述しながら梁啓超の「墓中呼声」は、いつどの媒体に掲載されたのかは言わない。不十分な注釈だ。これが新しい問題を引き起こすことになる。

日本語訳をした北岡正子はこの原注をそのまま翻訳した。そこだけを引用する。

彼の辞世の詩「わが最後の別れ」は、梁啓超によって中国語に訳され、「墓中の呼び声」[原文「墓中呼声」]と題された。295頁

訳注において記述の変化を説明する必要があるとは考えなかったらしい。だから魯迅がリサール辞世詩を読んだのであれば、どういう翻訳であったのかについても解説しない\*6。

誤解のないようお願いしたい。私は批判しているのではない。『魯迅全集』の注釈がそうなっているのを日本語に翻訳しただけだと言っている。リサールの辞世詩は梁啓超が漢訳して「墓中呼声」になったと認識していることがわかる。それが普通の受け止め方だ。日本でも同じように解説する文章があるがここでは触れない。

この注釈に問題があることは21世紀になって明らかになった。1980年代当時それが間違っていることに気づく研究者はひとりもいなかったのだ。これが事実である。

梁啓超の漢訳についてはもともとあやふやな注釈だと考える。しかし驚いたことに今ではこれが定説になっている。

たとえば、『魯迅大辞典』(2009)\*7の「厘沙路」から関係部分を翻訳して示す。

その辞世の詩「我が最後の別れ [我的最後の告别]」は、かつて梁啓超により漢訳され「墓中からの呼び声 [墓中呼声]」と題された。778頁

『魯迅全集』1981年版の記述とほとんど同文だ。

この時点で世紀のかわった8年前の2001年にはすでにひとつの疑義が提出されていた。本当に梁啓超の漢訳なのかと。『魯迅大辞典』はそれを無視する。あるいは単に存在を知らなかっただけかもしれない。

### 3 疑義の提出——『黎薩爾与中国』

梁啓超が漢訳したという従来の説明だった。これに対して疑問を表明したのは、周南京ら主編『黎薩爾<sup>リサール</sup>与中国』(2001)<sup>\*8</sup>である。



『黎薩爾与中国』

「前言」において『魯迅全集』第1巻第549頁の注釈に言及する。頁数から

1957年版だとわかる。関連箇所を翻訳して示す。注目すべきは後半部分だ。

また『魯迅全集』第1巻第549頁の紹介によると梁啓超はかつてリサールの辞世詩「墓中呼声」を翻訳したことがある。残念なことにいろいろと方法を講じて探したが、今にいたるまでまだ梁氏の漢訳文を探し当てていない。後日の補充を待つのみ。

重要なのは専門家による長年の調査にもかかわらず梁啓超の訳詩は未発見だと明記している点だ。

冒頭にかかげた「前言」にそう書いたのには理由がある。該書に収録されたりサール辞世詩に関する複数の文章は、いずれも最初の漢訳者が梁啓超であり「墓中呼声」と題したと記述しているからだ。それらを冒頭文であらかじめ否定したというわけ。

該書に収録した凌彰（298、314頁）、施穎洲（343、356、397頁）、呉文煥（436、437頁）、巖萍と龔勳（439頁）たちの文章に出てくる。興味深いのは梁啓超の漢訳だといって別人である陳天懐の訳詩を引く研究者がいることだ。邦帰（430、433、434-435頁）である。さすがに、これには編者による訂正がほどこされた。

それらを見れば、わざわざ否定しなければならないほどいわゆる梁啓超訳「墓中呼声」がしっかりと定説になっていることがわかる。

#### 4 疑義の再提出——江樺論文

前出『魯迅全集』1981年版の注釈を再度問題にしたのは、江樺「黎薩《訣別詞》又一中訳本及訳者」（2008）<sup>9</sup>である。

リサール辞世詩を梁啓超が漢訳して「墓中呼声」と題したと1981年版の注釈を引用する。江樺は『黎薩爾与中国』の主編者のひとり呉文煥と面識があるらしい。呉文煥から聞いた話だと続ける。同じ主編者の周南京は梁啓超の訳詩を求めて梁の孫に問い合わせたという。それでも見つけることができなかった。『梁啓超全集』にもない。



江樞は次のように発想した。

- 1 梁啓超はリサール「訣別詩」を漢訳したことはなかった。
- 2 梁啓超は漢訳したが『梁啓超全集』には収録されなかった。
- 3 リサール「訣別詩」は確かに漢訳されて「墓中呼声」となったが、翻訳したのは梁啓超ではなく別人である。

上の3条は可能性からいえば確かにありそうだ。妥当な推測だと考える。『黎薩爾与中国』の主編者周南京が探して見つからない。そうならば残るのは3番目の別人が漢訳して「墓中呼声」としただけになる。

江樞が新しく見つけたのは真吾重訳「墓中呼声」（『語絲』第5巻第4期 1929.4.1影印本。32-38頁）だ。



文末に真吾（本名崔功河<sup>\*10</sup>、1902-37）による説明がある。最後部分に「原文はスペイン語である。今、英語より重訳した。聞くところによれば梁啓超がかつて文言で翻訳したことがあるというが、残念ながら私は見たことがない」（38頁）

と述べる。

真吾によれば、梁啓超の漢訳があるという伝聞は以前から存在していたらしい。しかしそれ以上の詳しい説明はない。伝聞だからだ。真吾自身も見たことがない。

前出『魯迅全集』1957年版の注釈は、真吾の説明を無断借用したものとわかる。注釈には真吾の文章から引用したことを明示しなかった。だから無断借用という。しかも真吾重訳「墓中呼声」から真吾の名前をはずして題名だけを採用した。無神経な注釈のつけ方だとしかいいようがない。

江樺の新しい発見はリサール作、崔真吾重訳「墓中呼声」の存在を明らかにした点だ。その結果『魯迅全集』のリサール辞世詩についての注釈は誤りであることが確定した。

## 5 李海の指摘

李海の日本語論文「梁啓超は『墓中呼声』を訳したか」（2009）<sup>\*11</sup>は、論の進め方が江樺論文とよく似ている。だが江樺の文章について李海は言及しない。それを参考にしたかどうかは知らない。参考にしていなければ偶然の一致だろう。

『魯迅全集』1981年版の注釈を紹介し「この注釈では、はっきりとリサールの絶命詞は梁啓超によって訳されたと書かれている」（59頁）と述べる。その点に李海は疑問を抱いた。主として前出『黎薩爾与中国』を利用して先行研究を検討した。フィリピンにおいても「梁啓超は初めてリサールの絶命詞を漢訳した者として定着していた」（62頁）と書く。

李海の立論が江樺論文と似ていると私がいうのは、ふたつの可能性を挙げた点を指している。以下のとおり。

- ①梁が訳したが、その詩は未発見である。
- ②梁がその詩を訳しておらず、他の人が訳していた。64頁

江樺の発想とほぼ同じだとわかる。

李海が取りだすのは馬君武が訳した「リサールの絶命詞」だ。「1903年3月17<sup>マ</sup>

[12]日『新民叢報』第27号に掲載された」（64頁。65頁では3月12日と正しい）と指摘する。これが新しい。



ただし馬君武の訳詩を魯迅が読んでいたかどうかについて李海は述べない。漢訳があるというだけ。「読者が馬君武の訳を梁啓超の訳だと誤認したのではないかと筆者は考えている」（同前）というのだが、意味不明。『魯迅全集』の注釈を指しているのであれば注釈者が「読者」になるのだが、そうだろうか。一般的な読者だという意味か。梁啓超がリサール辞世詩を訳したという風説があることを言っているように読める。「読者」の内容が不明だ。

またリサール原詩は14連あるが、馬君武の訳詩「臨終之感想」は10連しかない。10連をさして「全詩」（65頁）と呼び「その全詩を挙げておこう」（同前）と引用する。14連と10連では数が合わない。少なくとも4連を漢訳していない事実を明記すべきだった。もしかしてこの時点ではリサール原詩が14連であることを知らなかったのだろうか。まさかと思う。

李海はつぎに真吾「墓中呼声」を提出する。前述したとおり真吾訳詩については江樺の言及が先行する。くり返して申し訳ないが李海は江樺論文については触

れていない。

胡従経が作新社版いわゆる『学生歌』にリサール辞世詩「菲律賓愛国者黎沙児絶命詞」が掲載されていると指摘した。『学生歌』の刊行は1904年だから馬君武の訳詩の方が1年早い。また李海のいうように『学生歌』所収の漢訳は『新民叢報』に掲載された「署名君武の訳詩と同一物である」（71頁）。その『新民叢報』との関係で「馬君武が訳したリサールの絶命詞が梁啓超の作と誤認された可能性が十分にあると思う」（71頁）となる。

李海論文の新しいところは、馬君武の訳詩を見つけたことだと重ねていう（李海論文をたぶん読んでいない楊麗華は同じことを2011年に書いている）。

後に李海が名古屋大学博士論文（2014）<sup>\*12</sup>として提出した文章には、今取りあげている部分に注釈の追加がある。

しかし筆者の研究では、これまで発見された最も早い段階でのリサールの絶命詞の訳詩は、1903年梁啓超が主筆を務めていた『新民叢報』に掲載された馬君武のものである<sup>354</sup> 140頁

354 本文の脱稿後、筆者は『飛律賓志士独立伝』（1902年10月10日発行）という呉超が翻訳した書籍の中に、リサールの絶命詩を発見した。ただし、この訳作は訳者の日本語能力が不十分であったため、意味すら満足に伝わらなかった。140頁

「訳者の日本語能力が不十分であったため、意味すら満足に伝わらなかった」と述べる。すなわち李海は自注において、呉超の漢訳は意味が伝わらないほどに悪いという自分の意見を表明した。呉超の漢訳に対しての評価は低い。ただしそう断言したのみ。どこがどのように「意味すら満足に伝わらなかった」のか具体的な内容については説明しない。李海は自分で馬君武の訳詩を先に発見したから、それを過大視してしまったようだ。ここは呉超訳と馬君武訳を比較対照し検討する必要があった。

もとにもどると、李海が発掘した馬君武の漢訳はなににもとづいたものか。英語からの重訳か、それとも別の翻訳だろうか。これについても言及がない。

奇妙なことだと思う。馬君武の訳詩は前述のとおり1903年に公表されている。呉超訳はそれよりも前だ。漢訳リサール辞世詩の最初の漢訳者は呉超であるとしなければならない。博士論文執筆時に見つけて追加の注をほどこした。だから単行本にしたときにはその箇所に当然書きかえがあるだろうと私は考えた。発表順からいえば呉超訳が先行し馬君武訳が後になると。そう説明してこそ立論の合理性が保たれる。

李海『日本亡命期の梁啓超』（2014）<sup>\*13</sup>である。

確認する。呉超漢訳は1902年10月10日の刊行だ。一方の馬君武漢訳の公表は1903年3月12日だ。明らかに呉超のほうが馬君武よりも早い。だが李海はその事実を無視する。李海著『日本亡命期の梁啓超』306頁でも博士論文と同文であるのには少し落胆した。訂正すべき個所が訂正されていない。

調査不足である。基本的なことだ。『飛律賓志士独立伝』は呉超による漢訳作品という点に注意をはらうべきだった。呉超には依った底本が存在する。だからこそ呉超訳なのだ。漢訳の底本を探さなければならない。その当たり前すぎる発想が李海にはなかったらしい。ここに気づいていれば立論は新しい展開を見せただろう。李海は問題を解く鍵、すなわち彼のいう『飛律賓志士独立伝』を手中にしていたのだ。しかしそれが鍵であるという認識がなかった。惜しいというほかない。

## 6 陳漱渝論文

公表の時間順に並べれば次は陳漱渝論文になる。あらかじめ断わっておく。すべての関連論文を本稿で取りあげる考えはない。

陳漱渝「心靈的感応」（2011）<sup>\*14</sup>を読んで不可解に思う。魯迅が日本に留学していたときリサールの「絶命詩」に触れたが、それは梁啓超が訳した「墓中呼声」であった。陳漱渝は当たり前のようにそう説明する。間違いだと指摘する複数の論文がすでに公になっているにもかかわらずだ。

そればかりか梁啓超「墓中呼声」だといって以下の詩句を示す。

方見天際破曉，我即与世長辭，朦朧夜色已尽，光明白日将至；若是天色黯淡，有我鮮血在此；任憑祖國需要，傾注又何足惜；洒落一片殷紅，初昇曙光染赤。

陳漱渝はこの部分訳がいつどこに掲載されたのかを書いていない。追跡検証することが不可能である。根拠の不確かな文章だ。

ネットで検索すれば陳漱渝よりも前に同じ詩句を掲げているものがある。付志剛「伝奇黎刹」（『光明日報』2011.8.16付 電字版）だ。これも根拠を示していない。発表時間を見れば付志剛が先で陳漱渝が後だ。陳漱渝が付志剛論文を見て引用したのだろうか。説明がないからわからない。

それよりもはるか以前の1978年に陳堯光が「方見天際破曉」以下の詩句を示していた<sup>\*15</sup>。フィリピンのリサールが処刑される前に書いた辞世詩の一節というだけ。梁啓超の名前は出していない。作者、公表媒体、時間など肝心な情報が皆無である。信用することはできない。

それ以来、梁啓超の名前を出したり出さなかったりはするが同じ詩句がくりかえし引用されているようだ。これほど長期間にわたって見え隠れしている。出处不明でかつ根拠がない。しかしそれが梁啓超による漢訳であると陳漱渝は堂々と自信をもって主張している。不可解なことだとふたたびいう。

## 7 孟昭毅と鄭寧人がまとめる

孟昭毅、鄭寧人「菲律賓作家黎薩爾与20世紀中国文壇」（2014）<sup>\*16</sup>は、リサール辞世詩が中国に伝えられた状況もふくめて説明している。関連部分だけを以下に引く。

1896年、リサールは処刑される前に辞世詩を書いた。それを妹に渡し、アイランド系（一説にスコットランド系）の女性ジョセフィン・ブラッケン<sup>\*17</sup>が香港に持ち込んだ。1897年、リサールの親友マリアノ・ポンセがそれを香港で発表したという。

孟鄭論文では以下にリサール辞世詩を漢訳した人々を順に紹介する。本稿に関

係する人ふたりだけを取りあげる。

1 1904年、『教育必用学生歌』が「菲律賓愛国者黎沙兒絶命詞」を収録する。いわゆる『学生歌』に漢訳リサル辞世詩を収録するとき題名をあたらしく「菲律賓愛国者黎沙兒絶命詞」と付け、さらに「訳者未署名」とした。

これは李海論文に出てきた。私が説明すれば、馬君武の文章名が「菲律賓之愛国者」だ。『学生歌』は馬の文中に登場する「黎沙兒」と「絶命詞」を結合して題名を付けたとわかる。馬君武の同じ文章に示されている「臨終之感想」は『学生歌』では採用しなかった。その理由は不明。馬君武漢訳が先に公表され、それが『学生歌』に収録されたという経緯だ。李海が日本でそれを指摘した。だが孟鄭は李海論文を読んでいないらしい。ゆえに馬君武への言及はない。李海のは日本語論文だから無理もないか。

孟鄭はこの『学生歌』を魯迅は知っていたはずだと書いている。その可能性はないことはない。だが確かな証拠は存在しない。

2 梁啓超が2番目の訳者だという。その根拠はここでも『魯迅全集』の注釈だ。依拠するのは凌彰論文である。もともなった凌彰「魯迅評介黎薩爾的重要意義」（1992）<sup>\*18</sup>から直接引用する。

辞世詩については、『魯迅全集』第1巻549頁の注釈紹介によれば梁啓超が漢訳して「墓中呼声」という。「釐沙路」は日本語の「リサル」の音訳だから、ここから推測すると梁啓超は日本語から辞世詩を転訳した。125頁

この「リサル」云々は凌彰の推測であって全集の注釈にあるわけではない。

すでに否定されている梁啓超漢訳説だ。しかし何度も蒸し返される。その後の学界は梁啓超漢訳「墓中呼声」についてひとつの混乱状況を呈しているといっている。真吾重訳「墓中呼声」はあるにしても、梁啓超の漢訳は探し当てることのできないのだ。だがいまだに『魯迅全集』と『飲冰室文集』に見えるなどという根拠のない記述もでてくる。具体的な頁数を明示していないことが根拠不十分であることを示している。

以上に紹介した論文群は、重要な鍵語を見失っている。日本である。

## 8 リサール辞世詩の日訳と漢訳

魯迅は清朝末期だと時間を特定してリサール辞世詩の漢訳があると述べた。1911年以前に漢訳が発表されていたことになる。

結論めいたことを先に述べる。魯迅が読んだ可能性のあるリサール辞世詩の翻訳複数を以下に掲げるが、それらの中からひとつだけを指定するのは困難だ。あくまでも可能性があるという段階に止まる。それくらい多様な翻訳が発表された。

中国人研究者、あるいは中国系フィリピン人研究者の視界から完全に欠落している部分がひとつある。無視できないものを無視している。それはリサールやボンセたちが滞在したことのある日本だ。

ボンセはフィリピン独立軍から派遣されて日本で武器弾薬調達の活動に従事していた。1898年以來のことだ。その関係で日本の政治家、民間の援助者と多数の親交があった。宮崎滔天からは「本君（ボンくん）」（『三十三年之夢』岩波文庫、324-325頁）と呼ばれていくらい親しかった。この人間関係の中には孫文もふくまれている。また妻が日本人女性であることも知られる。

リサールの親友ボンセが無題の辞世詩を受け取り香港で公表したのであれば、ボンセこそがスペイン語題名「我が臨終の感想 MI ÚLTIMO PENSAMIENTO.」の名づけ主であっても不思議ではない。事実そうだった。また日本で翻訳刊行された『南洋之風雲』（1901）の原作者がボンセなのだ。

多言語を使いこなす能力を持つリサールは1888年に日本を旅行したことがある。横浜からアメリカ経由でヨーロッパに渡るのだ。彼は日本滞在中に末広鉄腸（重恭）と知りあった。鉄腸はリサールを主人公にする小説『唾之旅行』を書いた。押川春浪の小説にもリサールが登場することは有名なことだ<sup>\*19</sup>。そのリサールにも日本人女性の恋人がいた。

以上のように日本ではリサール、ボンセに関連する書籍も出版されている。中国、フィリピンの研究者がそれに言及しないのは意外な気がする。

前述のとおりリサール辞世詩が世に出たいきさつを見てもボンセの存在は重要な意味をもっている。そのボンセ原作『南洋之風雲』は「ドン、ホセー、リサー



ル氏伝」にページを割いている。辞世詩も収録する（全部で152-165頁）。ここは重要なところだ。

リサール辞世詩が日本においてかなり早くに翻訳されていることに注目してほしい。時間的に見れば最初はスペイン語とその日本語翻訳が同じ刊行物の中に出現した。つぎに漢訳された。そういう順序である。魯迅が日本に留学していた時期とほぼ重なるのだ。以下に示す略号は本稿附録の「リサール辞世詩の翻訳対照表」と共通する。

●略号は【宮本】

（比律賓）マリアーノ・ポンセMARIANO PONCE著、宮本平九郎、藤田季荘共訳『南洋之風雲：比律賓独立問題之真相』博文館1901.2.23。扉は「MARIANO PONCE／CUESTION FILIPINA.／比律賓 マリアノポンセ著……」。以下『南洋之風雲』と称す。



表紙 扉と奥付は別稿に掲げる

『南洋之風雲』は「フィリピンでは宝典として珍重されている」（木村毅「ホセ・リサールに関する日本文献」『ホセ・リサールと日本』後ろから2頁）という。

木村が1940年代のフィリピンにおける体験談『南の真珠』\*20を書いているからその部分を引用する。

或る時、マリヤノ・ボンセに関する話をしてみると、彼（注：ホセ・バンツグ Jose P Bantug）はボンセが日本で出版した書物がある筈だと云ふのだ。それは博文館から明治三十四年頃出た「南洋の風雲」といふので、私は何かの役に立つかも知れないと思つたから、鞆の底に持参してゐたので、取出して示した。／『あつ、これだ、これだ』／とバンツグ氏は眼の色を変へて云ふのだ。／『これが比律賓には、破本が一冊国民図書館にあるだけだ。多分、それはボンセ自身の所有書だつたものだらう。こんなに新しい、完全なのは、残念ながら、この国にはないのだ』／と云つて、手ばなしかねるやうにする。273頁

考えるに印刷物としては日本語に翻訳された『南洋之風雲』しか存在しないからだろう。ボンセは最初から日本人を想定してスペイン語で原稿を書いた。出版にいたる経過は不明だ。私の推測だが、ボンセは原稿を知人である宮本に直接送ったのではなかろうか。あるいは手渡したか。その後スペイン語のまま、または英語に翻訳のうえ出版されたことはなかったらしい。2017年4月現在調査した結果、スペインとフィリピンあるいは英国図書館の所蔵目録には日本語訳の『南洋之風雲 *CUESTION FILIPINA*.』そのものしか掲載していない。原稿が残っているとも聞かない。だからこそ「珍重されている」。

該書にはリサール作「我が臨終の感想 *MI ÚLTIMO PENSAMIENTO*.」が、スペイン語（159-161頁）と日本語訳「臨終の辞」（162-165頁）の両方で収録される。

このマリアノ・ボンセこそリサール辞世詩が世に出てくる際に重要な役割をはたした人物だった。

1897年、香港においてボンセは無題のリサール辞世詩に題名「*MI ÚLTIMO PENSAMIENTO*. [我が臨終の感想]」をつけて1枚物の印刷で配布した\*21。

そういう経緯がある。そのボンセが書いた『南洋之風雲』なのだ。これに掲げ

られたスペイン語のリサール辞世詩そのものの信頼性は高い。

リサール辞世詩は本文の説明では「我が臨終の感想」となっている。訳者の宮本らはそれを「臨終の辞」と題して日本語に翻訳した。訳者識として「茲に唯原詩の意を万一に髣髴たらしめんことを期するのみ、読者乞ふ諒せよ」とある。

前出柳田「日本文学におけるホセ・リサール」から引用する。

この書（注：『南洋之風雲』）は、いわばヒリッピン独立運動史ともいってよいので、独立運動について、その由来、原因、経過、それに貢献した志士義人、運動の現状などを歴史的、批評的に論評した実に貴重な文献である。そうしてリサール関係からいえば、志士小伝の中で、彼の正しい伝記が比較的詳しく紹介され、独立運動史上の立場とともに政治小説『ノリ・メ・タンヘレ』、『エル・フィリフステリスモ』の内容の大略も語られたことは、大きな喜びであった。中でも、その「わが臨終の感<sup>ママ</sup>」という最後の詩が全文（原文訳文とも）掲げられて、日本の読者にいようなない感激を与えたものである。66-67頁

『南洋之風雲』の刊行は、リサール辞世詩が日本で知られる契機となった。

第1連のスペイン語原詩（参考までにその日訳をそえる。出典については附録を見てほしい）および宮本訳を示す。1連5行の原詩をどのように反映しているのか。可視化するため宮本訳には筆者による改行を施す（以下同じ）。

Adios, Patria adorada, region del sol querida,

さようなら、愛する祖国、なつかしい太陽の地よ、

Perla del Mar de Oriente, nuestro perdido Eden!

東洋の真珠、今はなきわが楽園よ！

A darte voy alegre la triste mústia vida,

喜んで、君に捧げよう、貧しく萎びたこの命を、

Y fuera más brillante más fresca, más florida,

いや、たとえ輝きにみちていて、いっそう清らかで、花咲くような私であっ

たとしても、

E[T]ambien por ti la diera, la diera por tu bien.

やはり、君のために、この命を捧げよう、君のしあわせのために、この身を捧げよう。

【宮本】最愛の本国よ。天恵に浴し

東海の真珠に比ぶなるエデンの樂園と思ひしに、

我は今汝を跡にして逝かんとす。惨怛たる我生命は

汝のために捨つるを喜ぶ。我生にして多く光榮あれば

尚汝の前途を守護せむに。（汝とは本国を指す以下皆然）

宮本の日訳は、少しの省略と前後語句の移動はあるにしてもほぼ原文どおりになっている。

これは東京時代の魯迅が読む可能性のあった日本語作品のなかのひとつだといっている。

●略号は【美妙】



魯迅がリサールの小説を山田美妙訳『血の涙』（1903）で読んでいたことは本稿の注で説明した。ならば同じ美妙がフィリピン人アギナルドを主人公にした『（比律賓独立戦話）あぎなるど』前編（内外出版協会1902.9.11／9.21再版）を見ている可能性を否定できない。

該書は、かなりの分量を割いてリサールの生涯を紹介する。また辞世詩全部が美妙調に翻訳されている。リサール作、山田美妙訳「わが末期のおもひ」（180-187頁）である。宮本訳を底本にして再創作、つまり作り直したものだろう。

その第1連を参考までに引用する。

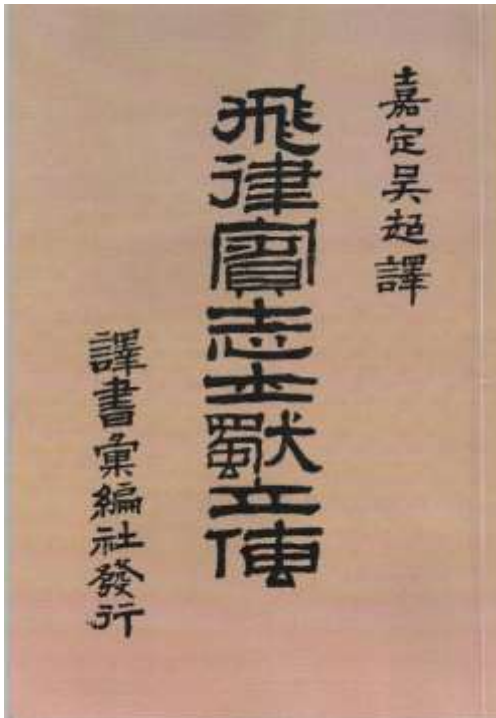
【美妙】ひさかたの

天のめぐみのいとあつき	あゝわがみくに、此みくに、
さてもいつくし東海の	かゞやく真珠、イイデンの
花のみそのに比ふべき	そを今われはあとに見て
死ぬをうれしと云ふ迄に	なりぬる身かな、なりし哉。

リサール原詩は宮本訳をへて美妙の工夫により日本調に再度翻訳されたことがわかる。

●略号は【呉超】

(比律賓) 崇昭本西著、(嘉定) 呉超訳『比律賓志士独立伝』(表紙は「飛律賓志士独立伝」。目次、本文が「比律賓志士独立伝」) 日本・訳書彙編社 明治三十五(1902)年十月十日/光緒二十八年九月九日発行 影印本



題名が表紙と本文ほかで異なるのは当時のこととて普通に見られる。本文の表記である『比律賓志士独立伝』を使用する。

漢訳者の呉超は原作者の名前を本西（ボンセ）と明示する。だが宮本平九郎、藤田季荘共訳『南洋之風雲』博文館（1901）を省略した。底本について明記しない。このように説明が不足するのは当時においては別に珍しいことではない（後述）。

日本東京で刊行された。該書が読者として想定しているのは、当然ながら日本滞在中の中国人および中国大陸の知識人であることはいうまでもないだろう。

漢訳ではボンセに「本西」の2字を当てた。呉超は滔天のいう「本君（ボンくん）」を知っていたようだ。あるいは直接の接触があったのかもしれない。

調査の結果すでにその底本が前述のとおり『南洋之風雲』であることは確認した。しかし全訳ではない。底本所収の写真はもとより本体、つまり主要部分ははぶいている。「附録 志士列伝」だけを翻訳するというやや変則的な刊行物だ。そうした理由は不明。

また著者である「ドン、マリアーノ、ボンセ氏伝」をなぜ省略したのか。この「志士列伝」に含めてもよかった。本体なしで附録だけの漢訳という点に不満はある。しかし本稿に関していえば、列伝の中にリサール伝が収録されていることに注目すべきだ。「利刹乎羅氏伝」である。しかもリサール辞世詩は、その中に「臨終之感想」として掲載された（14-16頁）。題名は宮本が示した「我が臨終の感想」をそのまま漢訳したもの。

比較対照するため再度宮本の日訳を示したうえで呉超の漢訳を見る。

【宮本】最愛の本国よ。天恵に浴し

東海の真珠に比ぶなるエデンの樂園と思ひしに、  
 我は今汝を跡にして逝かんとす。惨怛たる我生命は  
 汝のために捨つるを喜ぶ。我生にして多く光榮あれば  
 尚汝の前途を守護せむに。（汝とは本国を指す以下皆然）

【呉超】最愛之本国兮。浴天恵

比東海之真珠。思恵定之樂園兮。

念本国而不止。慘憺我之生命兮。  
去本国而有何喜。我生而多光榮兮。  
尚守護本國之前途。

リサール原詩の **Eden** は日本語に訳されて「エデンの樂園」になった。呉超はそれを「<sup>エデン</sup>恵定之樂園」に漢訳した。直訳である。ちなみに現代漢語では「伊甸園」と表記する。

宮本が注記した「汝とは本國を指す以下皆然」は漢訳にはない。その理由は、リサール原詩、すなわち宮本日訳に見える「汝」を呉超は宮本が示した「本國」に置き換えたからだ。注記する必要がなくなった。

「本國」にしたことを除けば、呉超訳はほぼ逐語訳になっていることがわかる。リサール辞世詩の漢訳として呉超のものは当時、広く知られていた可能性がある。ただし多くの漢訳を収集している『黎薩爾与中国』に言及がないことをいぶかる。現在ではまったく忘れられているらしい。もとになったポンセ『南洋之風雲』が記録から脱落してしまっているからその漢訳も同じ運命にあったということか。

呉超は該書の一部を漢訳しただけだった。全訳したものが別に存在する。

#### ●略号は【同是】

つぎで紹介するのは、ポンセ原作『南洋之風雲』の全訳だ。上海・商務印書館が刊行した。

初版と改訂版がある。目録風に示す。ただしポンセ原作については重複するから省略する。

まず初版から。

飛獵濱独立戦史

飛獵濱棒時著 中国同是傷心人訳

上海・商務印書館 光緒28 (1902) .11首版 戦史叢書1=3

[樽本C][実藤400]飛獵濱棒時著『飛獵濱独立戦史』商務印書館 光緒28年 (1902) 活版 戦史叢書1集3編。

孔夫子旧書網に写真あり。線装本。題簽は戦史叢書／飛獵濱独立戦史、扉は飛獵濱独立戦史／戦史叢書第一集第三編、本文に飛獵濱棒時著、中国同是傷心人訳。奥付は、訳述者：東京留学生、上海・商務印書館、光緒二十八年十一月首版

[中日730.250]宮本平編、戦史叢書第3編[中日730.251]戦史叢書1集3編。首都図書館所蔵 棒時、同是傷心人『飛獵濱独立戦史』商務印書館 光緒二十八(1902) 戦史叢書第1集。また、天津図書館所蔵 (菲律賓)棒時撰『飛獵濱独立戦史』商務印書館 光緒二十七(1901)。中国国家図書館所蔵 中国同是傷心人訳『飛獵濱独立戦史』商務印書館 光緒二十七(1901)



孔夫子旧書網より引用

図書館の所蔵目録によれば1901年の初版がある。1901年が正しいとすれば、呉超漢訳よりも先行する可能性が出てくる。はじめは単体で刊行され、のちに「戦史叢書」に収録されたと考えられないこともない。しかし該版は確認することができないためあくまでも推測にとどまる。1902年版は東京都立図書館実藤文庫に収蔵。また孔夫子旧書網の写真で部分を見ることができる\*22。

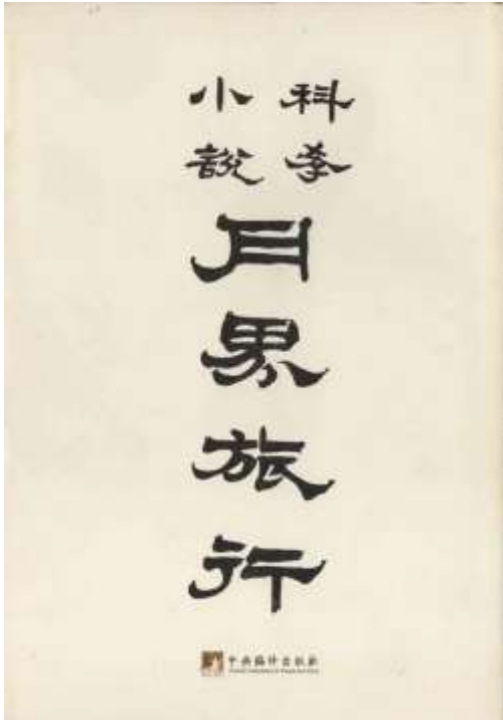
著者と漢訳者の表示から、飛獵濱の棒時（ボンセ）に対して中国の同是傷心人



が対になっている。

傷心人だけならば麦孟華の筆名だ。別に曼殊、曼殊室主人もある。康有為の弟子。若くして梁啓超とともに有名で「梁麦」と呼ばれた。戊戌政変後日本に逃れ梁啓超を助けて『清議報』に文章を発表した。また大同高等学校の校長をつとめる。『新民叢報』に執筆。その麦孟華が日本滞在中に漢訳したとすれば时期的には合致する。ただし同是傷心人が麦孟華であるという確証は今のところ、ない。奥付は「訳述者：東京留学生」とする。それとあわせて「同是」をつけているところを見ると麦孟華に近い人物の筆名かもしれない。

原作者のボンセ（棒時）を出すのは当然のことだ。しかしそれを日訳した宮本平九郎と藤田季荘の名前がない。しかも原題の『南洋之風雲』もなければ、発行した博文館と刊年も書かない。つまり基づいた底本について説明しない。現代から見れば不十分な記述に見えるだろう。しかし清末時期において翻訳作品が底本の存在を無視するような扱いをすることは珍しいことではない。該書の表示に関しては呉超漢訳のところで触れた。底本に言及しないのは、言ってみればまことにありふれたことなのだ。そういう時代だった。



たとえば同時代の周氏兄弟による翻訳がある。

魯迅は、『(科学小説)月界旅行』を中国教育普及社名で刊行した。1903年のことだ。原著者、訳者の表示が本文と奥付とでは異なる。本文は「美国 培倫原書／進化社訳」、奥付は「美国培倫原著／中国教育普及社訳印／発行所：進化社」だ。ヴェルヌの漢訳が1字違い。訳者名が異なる。統一のない表示といえよう。

影印本

なぜヴェルヌがアメリカ人になっているかといえば、底本にそうあるからだ。井上勤訳『(九十七時二十分間)月世界旅行』(1886)は英訳を底本に使い日訳して「米国ジュールスベルン氏著」と表示した。ただし表紙、奥付などに日訳者井上勤を記載しない。わずかに「辨言」において「月界旅行原書。為日本井上勤氏訳本。……書名原属「自地球至月球在九十七小時二十分間」意」と説明するのみ。井上勤の名前を出しただけましというもの。『浙江潮』に途中まで連載した「地底旅行」では「(英)威男<sup>ママ</sup>著」と記す。イギリス人とするのも依った日訳をそのまま漢訳しただけ。底本の明示はない。

周作人『(言情小説)匈奴奇士録』(1908)は「(匈牙利)育珂摩耳(ヨーカイ・モール)著」とのみ示す。底本は英訳だがその英訳者名を書かない。しかも後に周作人はその英訳者名をベイン(ROBERT NISBET BAIN)だと記述した。記憶違いである。しかし研究者は周作人の文章を疑わず検証せず引用し続けた。長年にわたって底本を探し当てることができなかつた理由である。英訳底本の訳者がビクネル(PERCY FAVOR BICKNELL)であると明らかにしたのは、2014年の日本においてであった。1世紀以上の時間が経過しているではないか。

よく知られた例をもうひとつ紹介する。

林紓+魏易共訳『英国詩人吟辺燕語』だ。漢訳題名はそのまま「シェイクスピア戯曲物語」である。しかし莎士比(シェイクスピア)著とだけ書いて底本としたラム姉弟の名前を出していない。清末という時代において周氏兄弟がやったのと同様に普通に見られることだ。

隠れた底本を明らかにする。それが研究者の仕事だろう。その役割を最初から放棄する人がいるのも事実だ。林紓を批判するためにラム姉弟の名前がないその表面だけをつかんで根拠にする。その人は清末の翻訳は底本を明らかにする習慣がなかったという実状について無知であることを自分から認めたことになる。すすんで自爆するのはなぜか。私の理解をこえているといわざるをえない。

さて底本の「序」は「飛獵濱独立戦史序」にしている。もともと宮本が漢文で書いた。だからこちらの序もほぼそのままだ。ただし語句の一部に変更がある。例をあげれば、国名を書きかえる。宮本の漢文は国名については日本語である。抽出して次のとおり。露(ロシア)、独(ドイツ)、支那、米合衆国(アメリカ)、

比律賓（フィリピン）、英（イギリス）、仏（フランス）などを使う。呉超は漢訳せずにそのままにしていた。同時傷心人はそれらを俄、徳、中国、美合衆国、飛獵濱、法に置き換える。そう漢訳した。ただし英がそのままであるのは、日本語と漢語が共通するからだ。

該書を漢訳していくつかの変更がある。

以下の文章などは削除された。「例言」「ドン、マリアーノ、ポンセ氏伝」「比律賓独立軍々歌（其一）（其二）」「比律賓独立軍国家訳」「写真 31葉」「比律賓群島全図」などだ。

1902年といえは商務印書館と金港堂が合併することを前提に業務提携を準備していた時期だ。当時、商務印書館には写真版を作成する技術をまだ持たなかった。写真31葉が削除された理由だろう。

本文は全14章ある。附録の「志士列伝」もそのままだが、最後部分の「名士追録」は漢訳されていない。

本稿の主題であるリサールについてはどうか。底本の「ドン、ホセー、リサール氏伝」は漢訳されて「利沙魯氏伝」である。

呉超がリサール名を漢訳して「利利乎羅」だった。両者は明らかに異なる。異なるとはいえリサールを表わしていることに違いはない。

リサールが多く外国語に通じていたと説明する。母語はタガログ語だ。そのほかスペイン語、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語という。日本語学習についての説明は底本の宮本訳を含めて3種類を引用する（傍線省略）。

【宮本】極東なる日出帝国の文芸美術を慕え為めに日本語を修む。153頁

【呉超】極東慕日出帝国之文藝美術。為修日本語。10頁

【同是】慕日本之文藝美術。又脩日本語。5丁オ

宮本が日本を「日出帝国」と表記すれば、呉超はそれをそのまま受け入れた。呉超漢訳は文章自体も日本語にひきずられてほぼそのまま。翻訳らしさが薄れており読んだ中国人は理解に苦しんだのではなかろうか。同是傷心人はそこは避け

てただの「日本」に漢訳した。全体を見ればこちらの方がわかりやすい漢訳だ。

さてリサール辞世詩である。これが期待はずれだった。辞世詩を示す直前の部分を引用する。

【宮本】氏銃刑に處せらるゝ前数日獄内に於て ミ ウルチーモ ベンサミエント Mi Ultimo Pensamiento  
(我が臨終の感想)を賦して懷を遣れり。之を讀て誰か感憤一掬の涙を賤かざるものぞ。歌に曰く、(注：このあとスペイン語原詩と日訳が続く) 158頁

【吳超】氏處鎗刑之前数日。於獄中賦有詞。因觸臨終之感想。而以此遣懷者。凡有志之士讀之。誰不為之一掬其淚哉。其詞曰。(注：このあと漢訳が続く) 14頁

【同是】利氏處銃刑之前数日。曾於獄内賦詩遣懷。至今讀之。尚覺沈沈悲憤。淚血俱下也。其終身之大目的。不外以其身為飛獵濱人作犠牲。争獨立耳。7丁オ

リサール氏は銃刑の数日前、獄内において詩を作り胸中の思いを述べた。今、それを讀むと深い悲しみと怒りを感じ血涙がともに出てくるのだ。彼の終身の大目的は、フィリピン人のために身を犠牲にし独立を争うこと以外にはなかった。

同是傷心人は明らかに文章を書き換えている。その結果がリサール辞世詩の削除だ。吳超が日訳を忠実に漢訳して「臨終之感想」全部を収録した事実とどうしても比較してしまう。同是傷心人によるリサール辞世詩の未訳は残念な処置であった。

ついでだから同是傷心人の文章が以下に無断借用されていることを指摘する。華亭雷瑯輯『各国名人事略』(上海・掃葉山房 光緒三十一(1905)年正月再版)「利沙魯」(卷10志士5オ)である。これには「利氏處刑之前数日。曾於獄内賦詩遣懷。至今讀之。尚覺沈沈悲憤。淚血俱下也」(卷10志士6ウ)という文章がある。同是傷心人『飛獵濱獨立戰史』の上記箇所と見比べれば「銃」がないだけで同文だ。

後の改訂版は約10年後に出てくる。これも簡単に紹介したい。同じく目録風

に示す。



孔夫子旧書網より引用

菲利濱獨立戰史

商務印書館編訳所訳

上海・商務印書館 辛亥（1911）.10初版／1913.10三版

『飛獵濱獨立戰史』1902の改訂版

孔夫子旧書網に写真あり。上海・商務印書館 辛亥（1911）年十月初版／中華民國二年十月三版[樽本C]商務印書館編訳所訳『菲利濱獨立戰史』商務印書館（奥付破損）影印本。「菲利濱獨立戰史序」の署名は「辛亥十月。緑天居士。據旧本校改刊行」[涵歴17]「斐利濱獨立戰史」本館（商務印書館）清宣統辛亥十一月（1911）[阿学201]『菲律賓獨立戰史』商務版、1911刊[阿辛175]『菲律賓獨立戰史』商務版、1911刊[述略149]『飛獵濱獨立戰史』商務版、1911刊。天津図書館所蔵、商務印書館編訳所訳『菲律賓獨立戰史』1913。また、首都図書館所蔵1911刊、中国国家図書館所蔵1913刊

書名が初版と改訂版とでは異なる。フィリピンの漢訳が変化した。清末の『飛

獵濱独立戦史』が中華民国直前になって『菲利濱独立戦史』に変更された。

原作者ポンセの名前はない。訳者は同是傷心人ではなく商務印書館編訳所訳に変更された。初版に日訳者と題名が不記だからこの改訂版にも記載はない。

宮本「序」は初版では「明治三十四年歳次辛丑一月日本宮本平序」だった。改訂版では書き換えて「辛亥十月。緑天居士。據旧本校改刊行」とする。それを見れば緑天居士が筆をとって該書全体を修改したように読むことができる。ただし緑天居士については不詳。同じ号を持つ陳石瀬がいるが別人。年齢があわない。

初版は底本『南洋之風雲』所収の写真を収録していなかった。改訂版は初版とは異なる写真3葉を掲げる。では緑天居士は『南洋之風雲』を見ていないのかといえ、そうとは断定できない。

初版では省略した「ドン、マリアーノ、ポンセ氏伝」だ。呉超漢訳、同是傷心人漢訳にも収録されていない。だがこの改訂版では、附録「菲利濱独立志士伝」の冒頭に「棒時氏伝」と題して漢訳掲載している。ただし目次には表示しない。初版では省いたものを改訂版では漢訳のうへ収録している事実がある。ポンセ原著『南洋之風雲』を見ている証拠になる。

残念なのは、改訂版でもリサール辞世詩が省略されたことだ。

時間の順に見ていけば、次が馬君武だ。

### ●略号は【君武】

馬君武の「非律賓之愛国者」である。「茶余随筆」（『新民叢報』第27号1903.3.12。書影はすでにかかげた）と題された3篇のなかのひとつだ。署名は君武。

フィリピンの愛国者とは、黎沙兒（リサール）を指す。リサール「臨終之感想」を知ることになった事情を少し書いているから関連する2ヵ所を引用する。

フィリピン革命史を読んで、わがアジアには幸いにも愛国の豪傑がひとりいることをひそかに喜んだ。リサール（黎沙兒）D. J. Rizal という。3頁

リサールは、まことにフィリピンの大詩人である。フィリピンの自由を愛する学生で日本に滞在する者がいて私は彼ととても密接に交際した。酒に酔い興がのってくると私のためにリサールの名作「臨終の感想」を大声で歌っ

た。「臨終の感想 [臨終之感想]」とは、リサールが処刑される数日前に作った辞世詩 [絶命詞] である。同上

原文で「非律賓革命史」というのはなにか。もうひとつ、フィリピン学生が歌った原文「臨終之感想」は何語なのか。

後者から考える。

フィリピン人同士ならばスペイン語の原詩であるのがわかりやすい。タガログ語の可能性もある。しかし中国人の馬君武のために歌ったというのだ。馬君武に理解してもらうためには日本語を使用しただろう。英語ならばまだ考慮の範囲内だ。フィリピン人が漢訳を歌うとは考えられない。

1901年、日本に来る前の馬君武は英語とフランス語を学習している\*23。

最初の英訳は1898年にシンガポールで刊行されたリサール伝記の中にあるという\*24。

刊行の時期を見れば馬君武がこの英訳を読んだことも考えられなくはない。ただしシンガポールから該書が日本に輸入されたかどうか確かめるのはむづかしい。

ここは馬君武らが居住していたのが日本である事実を重視すべきだ。馬君武が文章を発表した1903年以前であることに注目する。リサールを紹介した文章、しかも日本で読むことができそうな書物は以下のものがある。

- 1 【宮本】 日訳『南洋之風雲』（1901）は「ドン、ホセー、リサール氏伝」。「臨終の辞」あり。説明して「我が臨終の感想」
- 2 【美妙】『（比律賓独立戦話）あぎなるど』（1902）。「わが末期のおもひ」あり。
- 3 【呉超】 漢訳『比律賓志士独立伝』（1902）は「利利乎羅氏伝」。リサール辞世詩「臨終之感想」あり。
- 4 【同是】 漢訳初版『飛獵濱独立戦史』（1902。のち改訂版『菲利濱独立戦史』（1911）は「利沙魯氏伝」。リサール辞世詩なし。

以上の4種類のうち4番目の『飛獵濱独立戦史』は、リサール辞世詩を漢訳していない。考察の対象からはずれる。

日訳は1と2だ。両者ともフィリピン人学生が馬君武に歌って聞かせた可能性はある。美妙の日訳は高唱するのに向いているかとも思う。

馬君武が漢訳したリサール辞世詩は、その基本が宮本日訳の『南洋之風雲』にあるということは間違いなかろう。それに加えて呉超漢訳は無視できない。

馬君武が行なった説明をもう一度見なおす。すなわち「臨終の感想 [臨終の感想]」とは、リサールが処刑される数日前に作った辞世詩 [絶命詞] である」だ。この原文を示す。「臨終之感想者。黎沙兒臨刑前数日所作之絶命詞也」である。

ふたつの部分に注目する。「臨終之感想」と「黎沙兒臨刑前数日」である。どこかで見たことのある表現だと思われるだろう。

再度、呉超より引用する（下線は筆者）。

【呉超】氏處鎗刑之前数日。於獄中賦有詞。因觸臨終之感想。而以此遣懷者。凡有志之士讀之。誰不為之一掬其淚哉。其詞曰。（注：このあと漢訳が続く）14頁

下線部分がほとんど一致しているのは明らかだ。馬君武はリサール辞世詩を漢訳する時、宮本日訳と呉超漢訳を参照したと考えていだろう。そうするともうひとつの疑問が解決する。すなわち馬君武が書く「非律賓革命史」は、『南洋之風雲』を指すと判断する。

呉超訳と馬君武訳（日本語訳をつける）のふたつを並べる。呉超訳の底本が『南洋之風雲』であるから宮本日訳もあらためて示す。

【宮本】最愛の本国よ。天恵に浴し  
東海の真珠に比ぶなるエデンの樂園と思ひしに、  
我は今汝を跡にして逝かんとす。惨怛たる我生命は  
汝のために捨つるを喜ぶ。我生にして多く光榮あれば  
尚汝の前途を守護せむに。（汝とは本国を指す以下皆然）

【呉超】最愛之本国兮。浴天恵



比東海之真珠。思恵定之樂園兮。  
念本国而不止。慘憺我之生命兮。  
去本国而有何喜。我生而多光榮兮。  
尚守護本国之前途。

【君武】 去矣 我所最愛之國 別離兮在須臾  
さらば 我が最愛の國よ もうすぐお別れだ  
國乎 汝為亞州最樂之埃田兮 太平洋之新真珠  
國よ 汝はアジアの最も楽しきエデンだ 太平洋の新しい真珠だ  
慘怛兮 捨汝而遠逝 我心傷悲  
悩ましい 汝を捨て遠くへ逝く 我が心は悲しい  
我命甚短兮 不能見汝光榮之前途／一解  
我が命ははなはだ短かった 汝の光榮の前途を見ることはできないのだ／1  
連

馬君武の漢訳に見える「最愛」「汝」「真珠」「慘怛」「捨」「逝」「光榮」という単語は、宮本日訳と共通する。それは当然ながら呉超漢訳ともほとんどを共有している。

ただ行数が一致しない。宮本日訳の「天恵に浴し」が、ない。「汝のために捨つるを喜ぶ」の「喜ぶ」もない。書き換えて、自分の心が傷つき悲しいだけ。「汝の前途を守護せむに」ではなく「汝の光榮の前途を見ることはできない」と悲觀的表現に書きかえる。

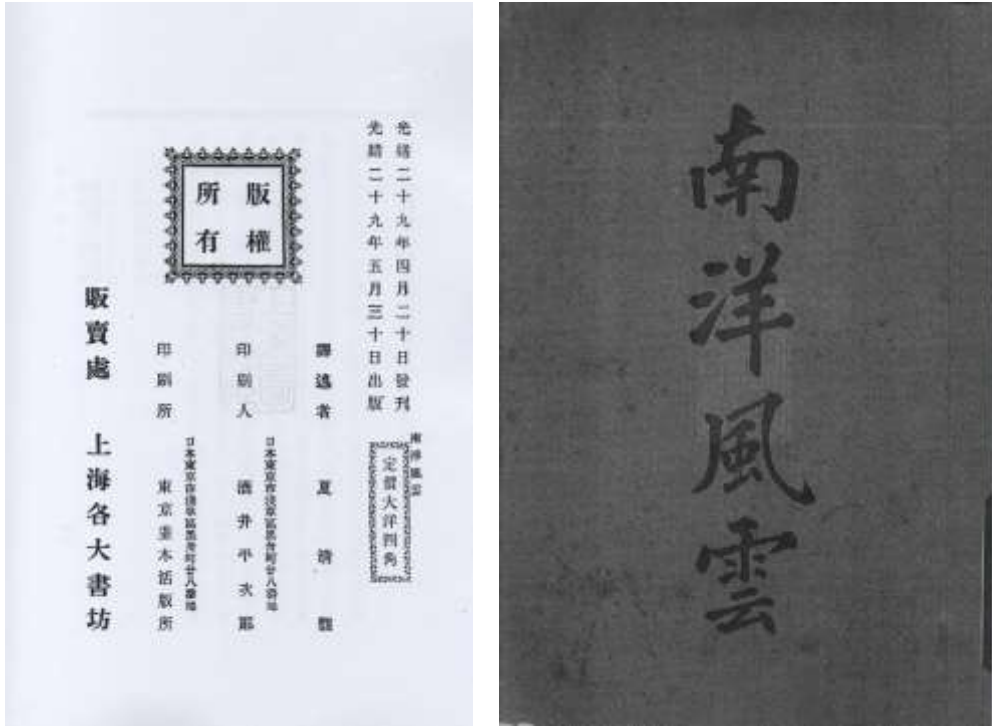
馬君武の漢訳は原詩とはだいぶ印象が異なる。ひたすら悲しい調子に塗り替えた。原詩にある祖国のために死ぬ喜びを消し去ったのだ。

私の考えは次のとおり。馬君武の漢訳は宮本日訳と呉超漢訳のふたつを参照しながら、馬独自の創造をつけ加えて成立した。翻訳そのものではなく半分は創作だ。リサール辞世詩の大意を伝えるのが目的だったのだろう<sup>\*25</sup>。

●略号は【清馥】

馬君武漢訳の直後に『南洋風雲』という翻訳書が刊行されている。目録風に記

述する。



### 南洋風雲

(飛律賓文豪本西氏原著) 夏清馥訳述

印刷所：東京並木活版所 光緒二十九年四月二十日（1903.5.16）発刊、五月三十日出版（注：旧暦五月三十日は存在しない。五月二十九日ならば1903.6.24）天津図書館所蔵、出版社不明1903。また上海図書館所蔵、東京並木活版所  
光緒二十九（1903）年五月三十日

ついでながら、書名は同じだが呉烈『南洋風雲』（世界書局1941）とは別物。

訳者の夏清馥については次に言及がある。前出潘喜顔『清末歴史訳著研究（1901-1911）——以亜洲史伝訳著為中心』252頁「150 江蘇人，清末留日学生，軍国民教育会会員。訳《南洋風雲》、《印度滅亡戦史》」。

『印度滅亡戦史』（開明書店1902）は孔夫子旧書網に書影が掲げてある。扉に「穎荃訳稿」、本文に「嘉定夏清馥編訳」、奥付に「編訳者：夏清馥」と明記され

る。

また書目によれば次の翻訳書がある。(日)三宅驥一著、夏清馥訳『達爾文』(開明書店 光緒二十九(1903)年。底本は三宅驥一『チャールズ、ダーウイン』民友社 1896.10.17 世界叢書第1冊)

夏清馥については次の名簿に名前が見える。房兆楹輯『清末民初洋学学生題名録初輯』(1962)<sup>\*26</sup>の「日本留学中国学生題名録」33頁に「夏清復 穎荃／二十二／江蘇嘉定／二十八年十一月／地方公費／同文書院」とある。

1902年、東京に着いた。字が同じで夏清馥と夏清復は同音だから同一人物だ。また『南洋風雲』の「序」には「上海魂序于日本東京」と署名される。この上海魂は『江蘇』第1-2期(1903.4.27-5.27)に「説脳」上下篇を掲載している人物だ<sup>\*27</sup>。つまり上海魂は夏清馥の筆名だと考えられる。

『南洋風雲』は、ポンセ原著の日訳『南洋之風雲』を底本にした漢訳版だ。漢訳書名からしてそのままであることがわかる。アギナルド、ポンセとリサールらの肖像写真とフィリピン群島全図を掲載している。それらは日訳版にしか収録されていない。底本にしている証拠である。ただし本文、奥付にも原作者ポンセと宮本ら日本人訳者の名前がない。かろうじて「凡例」に「飛律賓文豪本西氏原著」と示してあるだけ。

印刷所の名前が掲げられているが出版社の記載がない。夏清馥が翻訳し制作刊行した私家版らしい。

先の「凡例」に見える「本西氏原著」から表記の本西(ポンセ)つながりで呉超訳を参照していることがわかる。事実、同じく「凡例」に次のようにある。「今特依飛律賓志士独立伝一書／開明書店發行」。すでに紹介したように呉超訳『志士独立伝』の発行所は訳書彙編社だ。開明書店とするのは間違い。また本西とだけにして「崇昭本西」の崇昭は省略している。名前だとは思わなかったのかもしれない。

『南洋之風雲』の全訳ではあるが、底本と異なる箇所がいくつもある。

日訳に多く収録してある写真は減らして2葉のみ。上海魂序于日本東京とする「序」は新しく書き下ろした。底本の「例言」の内容を書き直して「凡例」に入れ替える。「ドン、マリアーノ、ポンセ氏伝」は未訳。ただしピラール、リサー

ルと合わせて「附録：愛国文豪三大家伝」に内容を要約してまとめる。「比律賓独立軍々歌」は省略。

底本は14章に附録「志士列伝」で構成されている。しかし夏清馥の漢訳は全16章と附録に変化している。それには夏なりの理由がある。ポンセ原著は戦史の体裁であってフィリピン全般の紹介になっていない。そこでフィリピン群島、南洋事情などの書籍から広く材料を集めて説明を加えた。しかも訳者注釈という形でかなりの分量が追加されている。原書の面目が一変した理由だ。ゆえにポンセ原著の日訳を基本にするといってもそれは一部にしかならない。フィリピン共和国憲法101条は、わずかに合計9条を抽出しているだけ。夏清馥が自由に改編してほとんど別の著作になっているといってもいい。

前述のように底本の「志士列伝」は「愛国文豪三大家伝」に編集しなおして漢訳した。その時、黎沙児（リサール）「絶命詩〔辞世詩〕」は、『新民叢報』掲載の馬君武漢訳を引用したと注釈でのべる。呉超訳を見ているがこちらは採用しなかった。基本的に馬君武漢訳と同じだ。少しの文字の入れ替えと誤植がある。本稿の附録に掲げておいた。

夏清馥の注釈に『飛律賓志士独立伝』すなわち呉超漢訳と馬君武の名前があがっているのは興味深い。そこから理解できることがひとつある。すなわち、日本にいた中国人留学生たちのあいだでポンセ原作『南洋之風雲』はよく知られていたという事実だ。リサール辞世詩の日訳は宮本ら、および美妙のものがある。漢訳したのは呉超、馬君武だ。それらを見れば、該書はよく知られていたとわかる。

### ●略号は【学生歌】

一般には『学生歌』と略して呼ばれるという。正式な書名は『教育必用学生歌』正統両編（上海・作新社 光緒三十（1904）四月）だ。ただし、該版は未見。これに黎沙児作、訳者未署名「菲律賓愛国者黎沙児絶命詞」が収録されている。その題名については「題為訳者所加」という説明がある。

以下に収録される。

『中国近代文学大系』第11集第28巻翻訳文学集3（施蛰存主編）上海書店1991.4。202-206頁収録

胡從経「愛国強音 革命曉角——作新社版《学生歌》」『胡從経書話』北京出版社1998.1. 318-319頁所収。『黎薩爾与中国』172-180頁にも収録

原本には、訳者未署名とあるらしい。もとは馬君武の漢訳だ。それを明記すべきだった。つけ加えることはない。

## 9 結 論

リサール辞世詩の翻訳は、以上のように多数ある。魯迅が読んだのはこれだ、とひとつに特定することはむづかしい。その手がかりを魯迅は提示していないからだ。あくまでも魯迅が目にした可能性がある日訳と漢訳だということにとどまる。まとめる。

リサールあるいは彼の辞世詩を紹介した文献は、清末の1911年までに区切れれば日本と中国において全部で7種類を数える。私が見ていない英訳はある。ただし日本に輸入されていたかどうかは不明。また私の知らない文献があると思うが、今のところとりあえず7種類だ。

日本に留学中の魯迅が読んだかもしれないという範囲内に限定する。

はじまりはひとつ。ポンセ原作、日訳『南洋之風雲』1冊が根底に存在している。日本でのみ刊行されたという事実に注目すべきだ。残りの6種類はその1本から派生したものである。

リサール辞世詩に絞ると宮本日訳（1901）が初出だ。それに依拠した美妙日訳（1902）、呉超漢訳（1902）、馬君武漢訳（1903）の順である。夏清馥漢訳（1903）所収の辞世詩は基本的に馬君武訳だ。漢訳を含めてすべて日本において発表、出版された。

馬君武漢訳は全訳ではない。しかしリサール辞世詩の漢訳には含まれる。『学生歌』（1904）は馬君武漢訳と同じだが上海での刊行だから優先順位は少し後退する。

ポンセ原作は、異民族であるスペイン人による圧制に苦しみ、そこから独立しようとするフィリピン人の苦闘を描いている。アメリカに裏切られて自らの独立運動が危機にさらされている。まさに現在進行中のフィリピン情勢を生々しく活

写している作品だ。異民族の清朝に支配されている漢族の留学生たちが日本において該書を目にした時、漢訳する意義を感じたのも当然だろう。だからこそ複数の漢訳が短期間に刊行された。独立運動の過程で犠牲となったリサールの辞世詩が、中国人留学生たちに強い印象を与えたのも理解できる気がする。リサールの名前を出した魯迅は、その情況を実体験した彼ならではの反応だったと考えられる。魯迅が「雑憶」（1925）において、清朝末期に一部中国の青年には革命思潮が盛んであり、復讐と反抗を叫ぶ者は共感を覚えたと述べたとおりだった。

魯迅が清末に見た可能性がある翻訳は、日訳と漢訳で以上のようなものである。

#### 【注】

- 1) 『魯迅全集』北京・人民文学出版社1981北京第1版／1982北京第1次印刷（1981年版と称する）第1巻 221頁
- 2) 魯迅の英語については次を参照。孟慶澍「彼此在場的読与写：1907年的周氏兄弟」『中国現代文学研究叢刊』2017年第3期（総第212期） 2017.3.15
- 3) 周啓明（作人）『魯迅的青年時代』北京・中国青年出版社1957.3。「一二 再是東京」  
「他又得到日本山田美妙所訳的，菲律賓革命家列札爾（後被西班牙軍所殺害）的一本小説，原名似是“社会的瘡”，也很珍重，想找英訳来对照翻譯，可是終于未能成功」42頁。  
中島長文編『魯迅目睹書目 日本書之部』私家版 1986.3.25の59頁に「フィリピン リサル著、山田美妙訳『血の涙』内外出版協会1903.10」と掲載される。該書は国立国会図書館デジタルコレクションで読むことができる。原題「ノリ、メ、タンベレ Noli Me Tangere」と説明がある。ラテン語で「ノーリー・ミ・タンジェレ」は「私に触れるな」という意味。リサールの小説が何か、あるいは周作人の証言があることについて1981年版の原注、およびその学研版『魯迅全集』10の訳注（伊藤虎丸。127頁）でも言及はない。
- 4) 『魯迅全集』第1巻 北京・人民文学出版社1957.5。1957年版と称する。
- 5) Miguel A. Bernad, “The Nature of Rizal's Farewell Poem”, *Budhi: A Journal of Ideas and Culture*, 5 (36.1), 2002. p. 195
- 6) 『魯迅全集』1 墳・熱風 学習研究社1984.11.22／1986.12.10第二刷。原注295頁
- 7) 《魯迅大辞典》編委会編『魯迅大辞典』北京・人民文学出版社2009.12

- 8) 周南京、凌彰、吳文煥主編『黎薩爾与中国』香港・南島出版社2001.5
- 9) 江樺「黎薩《訣別詞》又一中訳本及訳者——写在黎薩甥孫女的《爺爺扶西・修訂本》発行前夕」『世界日報』広場欄 2008.12.8 電字版。江樺は中国系フィリピン人。本名吳建省
- 10) 魯迅、柔石、王方仁、許広平らと朝花社を結成した。丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』東京堂出版1985.9.30。190頁には崔新吾（采石）で記載される。丸山昇執筆
- 11) 李海「梁啓超は『墓中呼声』を訳したか——リサールの絶命詞<sup>てつめいし</sup>をめぐって」『名古屋大学中国語学文学論集』第21輯2009.12。「ママ」としたように李海は絶命詩と絶命詞を混在させている。引用文は原文のまま。
- 12) 李海『梁啓超研究——その日本滞在期を中心に』名古屋大学博士論文 2014.3 電字版
- 13) 李海『日本亡命期の梁啓超』桜美林大学北東アジア総合研究所2014.7.2
- 14) 陳漱渝「心霊的感応——魯迅と菲律賓作家黎刹」『天津日報』2011.8.31（29?）電字版
- 15) 陳堯光「菲律賓愛国者の声音——読何塞・黎薩爾的名著《不許犯我》」『人民日報』1978.2.10 電字版。夏曉虹氏よりご教示いただいた。感謝。
- 16) 孟昭毅、鄭寧人「菲律賓作家黎薩爾与20世紀中国文壇」『華文文学』2014年第1期 2014.2.20 電字版
- 17) Josephine Bracken, 1876-1902。処刑の直前に結婚した。凌彰「東海の壯歌——論黎薩爾の絶命詩」（『黎薩爾与中国』所収。316頁）では、リサールの辞世詩を持ち出したのはブラッケンだとする。
- 18) 凌彰「魯迅評介黎薩爾的重要意義」『魯迅研究年刊（1991-1992）』北京・中国和平出版社1992.10
- 19) 柳田泉「日本文学におけるホセ・リサール」木村毅編『ホセ・リサールと日本』アポロン社1961.6.10。木村毅「第3章 ホセ・リサールと日本文学」『日本に來た五人の革命家』恒文社1979.5.30／12.31第二刷。花野富蔵「比島の志士ホセ・リサール」『日本文化』第79冊 日本文化協会1942.6.1
- 20) 木村毅『（マニラ紀行）南の真珠』全国書房1942.10.30
- 21) 前出 Miguel A. Bernad, “The Nature of Rizal's Farewell Poem”, p. 192
- 22) 鄒振環は「《法国革命戦史》与“戦史叢書”」（『訳林旧踪』南昌・江西教育出版社 2000.9。110頁）において、訳者について「中国国民叢書社訳」と書いている。間違い。また、潘喜顔『清末歴史訳著研究（1901-1911）——以亞洲史伝訳著為中心』（復旦大学

博士論文 2011 電字版。48頁)も同様。これも間違い。171頁に「5-033-205《飛獵濱独立戦史》,【飛律賓】棒時撰,東京留学生訳」と書いているのに一致しない。日訳に言及しないことも鄒振環と同じ。

- 23) 曾誠「馬君武」朱信泉、宗志文主編『民国人物伝』第7巻 北京・中華書局1993.11。  
陳春香「馬君武の外国文学訳介与日本影響」『広西大学学报(哲学社会科学版)』第29巻第3期 2007.6。楊麗華「第4章 翻訳家馬君武」『中国近代翻訳家研究』天津大学出版社2011.4。81頁注1で馬君武の漢訳が作新社版『学生歌』よりも早いことを指摘する。
- 24) Howard W. Bray *Biography of Dr. José Rizal by Ferdinand Blumentritt* Singapore: Kelly & Walsh. 1898. 未見。前出 バーナド Bernad, p. 193による
- 25) 熊柱、李高南校注『馬君武詩稿校注』桂林・広西師範大学出版社2016.7には未収録
- 26) 房兆楹輯『清末民初洋学学生題名録初輯』台湾・中央研究院近代研究所1962.4
- 27) 上海魂のみについては次に言及がある。李曉萍『晚清《女子世界》(1904-1907)中婦女知識与典範之建構』東海大学中国文学系研究所2012.6 博士論文 電字版

【附録】リサール辞世詩の翻訳対照表——清末の日訳、漢訳を中心に

スペイン語原詩は『南洋之風雲』より引用。誤植も原文のまま。訳文の傍点、ルビは省略。一部のくりかえし記号は書き換える。便宜のために連番号をほどこす。参考として原詩に施した日訳は安井祐一『(フィリピンの近代と文学の先覚者)ホセ・リサールの生涯』芸林書房1992.11、74-82頁より引用した。

MI ÚLTIMO PENSAMITENTO.

【宮本】臨終の辞(本文の説明は「我が臨終の感想」)訳者識「茲に唯原詩の意を万一に髣髴たらしめんことを期するのみ、読者乞ふ諒せよ」

【美妙】わが末期のおもひ

【吳超】無題(本文の説明は「臨終之感想」)

【同是】漢訳なし

【君武】臨終之感想(絶命詞)

【清馥】絶命詞(基本的には馬君武漢訳による)

【学生歌】菲律賓愛国者黎沙兒絶命詞(題為訳者所所加)



1

Adios, Patria adorada, region del sol querida,

さようなら、愛する祖国、なつかしい太陽の地よ、

Perla del Mar de Oriente, nuestro perdido Eden!

東洋の真珠、今はなきわが樂園よ！

A darte voy alegre la triste mística vida,

喜んで、君に捧げよう、貧しく萎びたこの命を、

Y fuera más brillante más fresca, más florida,

いや、たとえ輝きにみちていて、いっそう清らかで、花咲くような私であったとしても、

E[**T**]ambien por ti la diera, la diera por tu bien.

やはり、君のために、この命を捧げよう、君のしあわせのために、この身を捧げよう。

【宮本】最愛の本国よ。天恵に浴し東海の真珠に比ぶなるエデンの樂園と思ひしに、我は今汝を跡にして逝かんとす。惨怛たる我生命は汝のために捨つるを喜ぶ。我生にして多く光栄あれば尚汝の前途を守護せむに。(汝とは本国を指す以下皆然)

【美妙】ひさかたの

天のめぐみのいとあつき

あゝわがみくに、此みくに、

さてもいつくし東海の

かばやく真珠、イイデンの

花のみそのに比ふべき

そを今われはあとに見て

死ぬをうれしと云ふ迄に

なりぬる身かな、なりし哉。

【吳超】最愛之本国兮。浴天恵比東海之真珠。思恵定之樂園兮。念本国而不止。惨怛我之生命兮。去本国而有何喜。我生而多光栄兮。尚守護本国之前途。

【同是】漢訳なし

【君武】去矣 我所最愛之國 別離兮在須臾 國乎 汝為亞洲最樂之埃田兮 太平洋之新真珠 惨怛兮 捨汝而遠逝 我心傷悲 我命甚短兮 不能見汝光栄之前途／一解

【清馥】去矣。我所最愛之國。別離今[兮]在須臾。國乎。汝為亞洲最樂之埃田兮。太平洋之新珍[真]珠。惨怛兮。捨汝而遠逝。我心傷悲。我命甚短矣[兮]。不能見汝光栄之前途／一解

【学生歌】【君武】と同じ 異同箇所のみを示す 惨怛 [惨怛] ← [] 内が原文 ○解なし。以下同じ

2

En campos de batalla, luchando con delirio,

戦場では、人々が烈しく戦っている、  
Otros te dan sus vidas, sin dudas, sin pesar;  
信じて、惜しまず、君に生命を捧げている、  
El sitio nada importa, ciprés, laurel ó liris[o],  
どこでもいい、糸杉、月桂樹または菖蒲の茂み、  
Cadals[s]o ó campo abierto, combate ó cruel martirio,  
処刑台とか曠野原、戦闘とかむごい殉死、  
Lo mismo es si lo piden la Patria y el hogar.  
どれも同じだ、祖国と同胞が望むのなら。

【宮本】遅疑せず、悔恨せず、国人は皆生存競争の戦場に赴く。苟且にも本国の為めとしあれば惨刑酷待に逢ふとも、陣頭の露と消ゆるとも、柏桂の木影に仆るとも、如何てか辞すべきぞ。

【美妙】いで見よかしな、はらからの 我国人のますらをは  
修羅のちまたに勇み行く。 世のため国のためならば  
もとより何をいとふべき。 つみ着るべきか、よし着なん  
野辺のこやしか、よしならん

【吳超】不遲疑。不悔恨。国人皆赴生存競争之戰場。苟且乎本国之為。必逢慘刑而酷待。雖消陣頭之雨露。雖仆柏桂之木影。如何可辭。

【同是】漢訳なし

【君武】不遲疑 不傍徨 我國民奮勇兮赴生存競争之戰場 人苟為本国而流血兮 消柏桂之木影暴原野之嚴霜 固不辭也／二解

【清馥】不遲疑。不傍徨[徨]。我國民奮勇兮。赴生存競争之戰場。人苟為本国而流血兮。消柏桂[桂柏]之木影。暴原野之嚴霜。固不辭也／二解

【学生歌】【君武】と同じ 傍徨 [傍徨]

3

Yo mueso cuando veo que el cielo se colora  
黒いとばりがあがり、空があけ染めて、  
Y al fin anuncia el dia trás lóbrego capuz;  
ついに日の出を告げるときに、私は逝くのだ、  
Si grana necesitas para teñir tu aurora,

あけぼのを染めるのに紅がいるのなら、

Vierte la sangu mia, derrámala en buen hora

わたしの血で染めよう、頃よいときに撒き散らし、

Y dórela un seflejo de su naciente luz.

さしのぼる君の光で金色に照らせ。

【宮本】暗憺たる夜色去りて旭日紅を潮する比我は逝かなん。暁光の紅なるを欲せば我血を絞りにて之に注ぎ以て一段の光彩を添えよ。

【美妙】物すごかりし夜は消えて 旭日まばゆくのぼる頃  
我はこの世を去る身ぞよ。 いで天晴れの思ひ出に  
其しのゝめのそらのいろ 此精血をしぼり取り、  
色あざやかに染めてもよ。

【吳超】暗憺之夜色去。而旭日潮紅。可比我逝。暁光之紅。絞我血以注之。添一段之光彩。

【同是】漢訳なし

【君武】夜色暗澹 如悲我之将逝兮 風蕭蕭而不長 曉日何時而復出兮 将灑我一腔之鬱血以添其曙光也／三解

【清馥】夜色暗澹如悲我之将逝兮。風蕭蕭而不長。曉[曉]日何時而復出兮。将麗[灑]我一腔之熱[鬱]血以添[添][其]曙光也／三解

【学生歌】【君武】と同じ

4

Mis suènos cuando apenas muchacho adolescente,

成人したばかりの頃の、わたしの夢、

Mis suènos cuando jóven ya n[ll]eno de vigor,

すでに逞しい青年になった頃の、わたしの夢、

Fueron el verte un dia, joya del mar de Oriente,

それは、いつの日か、お前を、東海の宝石を、見に行くことだった。

Secos los negros ojos, alta la tersa frente,

若者の黒い瞳は輝き、つややかな額は広く、

Sin s[c]lenos, sin arrugas, sin manchas de rubor.

顔には憂いの色もなく、皺やシミもなかった。

【宮本】年漸く壮なる我夢想と血気満々たる我夢想とは、他日汝が涕泣せず、嘯喊せず、

冷眼軒眉し東海の珠寶として光輝を四表に輝かすを見んを望む。

【美妙】やがては見なん、さて見よや 汝わが国も虐政に  
 絞りし袖のつひに乾て、 眉うちのべて東海の  
 美玉のひかり世のなかに 輝かすべき日有らんを、  
 我はその日を見め、待ため、 さて見め、待ため、見め、待ため、  
 今より死にて見め、待ため。 無漏の夢ぢに見め、待ため。  
 年若けれどこのわれの、 血氣有れども此われの  
 今は最後の夢うつゝ、 そのうつゝにて見め、待ため。  
 其うつゝにて見め、待ため。

【吳超】我夢想他日之本国。不涕泣。不嘖喊。冷眼軒眉。望東海之珠寶。見光輝照乎四表。

【同是】漢訳なし

【君武】我年漸壯兮 我心漸遠 我願未酬兮 我命將斬 我最愛之國乎 太平洋之新真珠  
 乎 我雖死不瞑目兮 以觀汝揚光輝於六區也／四解

【清馥】我年漸壯兮。我心漸遠。我願未酬兮。我命將斬。我最愛之國乎。太平洋之新珍【真】  
 珠乎。我【雖】死不瞑【目】兮。以觀汝【揚】光輝於六區也／四解

【学生歌】【君武】と同じ

5

Ent[s]ueno de mi vida, mi ardiente vivo anhelo,  
 我が生涯の夢、今も燃え立つような私の憧れ、  
 Salud, te grita el alma que pronto va á partir  
 乾杯、わたしの魂が君に叫ぶ、もうすぐ出発だ、  
 Salud! ah que es hea[r]moso caer por darte vuelo,  
 乾杯！おお、何と素晴らしいことか、君に翼をあずけて倒れるとは、  
 Morir por darte vida, morir bajo tu cielo,  
 君に身を托してゆく、君の空の下で死を遂げる、  
 Y en tu encantada tierra la eternidad dormir.  
 そして君のうるわしい大地でとこしえに眠るとは。

【宮本】我は畢生の熱情もて思念す。ア、我が將に逝かんとするを汝は嘆かむ。ア、我は  
 汝の飛躍自由なるを得るため、汝の天を戴きて死し、永久此の樂土に靈を托するを悦ぶ。

【美妙】死にゆく我を汝や国、 さてとも哀と見るかそも。

見るかそもとも思ひやり、	思ひつめつめ思へども……
さて泣きなせそ、悲しむな。	汝のために死ぬ身なり。
汝に自由得させんと	思ふばかりに死ぬ身なり。
汝をおほふ大その	下はなれ得で死ぬ身なり。
わがなき魂はとこしへに	汝の土にのこりてん、
離れず残るそれを只	死に行く胸のたのしみに。

【吳超】我歎畢生之熱情思念。將伸息無期。得飛躍自由。戴本国之天而逝。喜託靈魂。永久留此樂土。

【同是】漢訳なし

【君武】去矣 我最愛之國兮 我滿腔之熱情 与我身而永化 國乎 汝而終能得飛躍之自由兮 我戴汝之天以死 遂永托靈於此土 我何憂兮／五解

【清馥】去矣我最愛之國兮。我滿腔之熱情兮。与我身而永化。[國乎] 汝而終能得飛躍之自由兮。我戴汝之天以死。遂永死[托]靈於此土。我何憂兮／五解

【学生歌】【君武】と同じ

6

Si sobre mi sepúlcro vieres brotar un dia

いつか、わたしの墓に茂る草むらに、

Entre la espesa yes[r]ba sencilla, humilde flor,

ひっそり咲く花を見つけたら、

Acércala á tus labios y besa al alma mia,

君の唇を寄せて、私の魂に口づけしてくれ、

Y sienta yo en mi frente bajo la tumba fria,

すると、冷たい土の下の、わたしの額につたってくる、

De tu ternura el soplo, de tu hálito el calor.

君の息吹きは君のやさしさ、君の吐息は君の温もり。

【宮本】他日我墓上の荒草裡に一輪可憐の花開くを見ば、汝之に接吻して我靈の宿るを知れ。かくて汝の親愛なる熱情の吹嘘が冷棺中なる我額上に注ぎ来るを感ぜむ。

【美妙】やがてむぐらの我墓に	一輪の花さきもせば、
死にし此身のたましひの	こもると見てよ、汝、国、
その唇をすへよかし。	思ひはとほれ、こけのした

眠るこの身に触れよかし。(注：次の7と合併)

【吳超】他日見我墓上之荒草。有一輪可憐之花開。本国之人接吻之。而知我靈之宿。若本国之親愛者。感熱情之吹嘘。来注我冷棺之額上。

【同是】漢訳なし

【君武】死矣 他日我墳墓之上 長一叢之荒草兮 開數枝可憐之花 国乎 汝之親愛熱情 与我永不相遺 時往往於我墓上吹嘘其花草兮 我之神靈何有乎 嘆嗟也／六解

【清馥】死矣。他日我墳墓之上長一叢之荒草兮。開數枝可憐之花国乎。汝之親愛熱情与我永不相遺。時往往於我墓上吹嘘[其]花草兮。我之神靈何有乎嘆嗟也／六解

【学生歌】【君武】と同じ 一叢叢 [一叢之]

7

Deja á la luna verme con luz tranquila y suave,

月には、安らかな優しい光を浴びせてもらおう、

Deja que el alba envíe su resplandor fugáz,

暁には、君のそのひと時の輝きを射してくれ、

Deja gemir al viento con su murmullo grave,

風には、君のおごそかな声でうなってもらおう、

Y si descende y posa sobre mi cruz un ave,

またもし一羽の鳥が舞いおりて、わたしの十字架にとまったら、

Deja que el ave entone su cántico de paz.

鳥には、平和の歌をうたってもらおう。

【宮本】安静溫柔なる月光の我を照すに任せよ。曙光の雲霧を披くに任せよ。風伯の怒号するに任せよ。鳥あり、来たりて我墓標に息れば、之をして平和の頌歌を唱ふるに任せしめよ。

【美妙】(注：前の6と合併)

静にいこふ月しろを

墓にそのまゝ宿せかし。

雲晴らしゆく朝日影

かゞやく儘に照らさせよ。

おたけびの声吹く風の

只荒れすさぶ儘にせよ。

鳥もこよかし、わが墓に

とまらばとまる儘にせよ。

平和をうたふ儘にせよ。

【吳超】安静溫柔。任月光之照映。任風伯之怒号。任披曙光之雲霧。有鳥来而息我墓。任

唱平和之頌歌。

【同是】漢訳なし

【君武】委我骨於我所最愛之国之原野 我心已足兮 況有安靜之月来相照映兮 溫柔之風来相披拂兮 嬌好之鳥 来棲我之墓 唱和平之曲兮 此皆我国之慰我於死後者也／七解

【清馥】委我骨於我所最愛<sup>マ</sup>之<sup>マ</sup>国之原野<sup>マ</sup>兮。我心已足<sup>マ</sup>兮。寂寞<sup>マ</sup>況有安靜<sup>マ</sup>之月<sup>マ</sup>来相照映兮。溫柔之風以<sup>マ</sup>来相披拂兮。嬌音婉轉<sup>マ</sup>好<sup>マ</sup>之鳥<sup>マ</sup>来棲<sup>マ</sup>以啼<sup>マ</sup>于我之墓上<sup>マ</sup>唱和平之曲兮 其<sup>マ</sup>此皆我国之慰我靈乎<sup>マ</sup>於死後者也／七解

【学生歌】【君武】と同じ

8

Deja que el sol ardiendo las lluvias evapore

太陽は、わたしの呼び声につづいて、燃えたち、

Y al cielo toru[m]en puras con mi clamor en pós;

水気を干し、空を澄みわたらせよ、

Deja que un sér amigo mi fin temprano llore

友は、わたしのはかない命に涙を流してくれ、

Y en las serenas tardes cuando por mi alguien ore

そして、晴れわたった晩、誰かがわたしのために祈りをあげているときには、

Ora tambien, oh Patria, por mi descanso á Dios!

おお祖国よ、君もまた、私が神に抱かれて安らぐように、祈ってくれ。

【宮本】炎熱のために蒸発せる雨水の我が憤を天に伴ひ還るに任せよ。友朋の我早生を悼むに任せよ。ア、本国よ。人我がために神明に祈らば、汝亦高潔の意思を以て我極樂往生を神明に祈れ。

【美妙】暑さに雲と立ちのぼる	雨のしづくよ、かぎりなき
怨みをつれて大そらに	伴なひかへる儘にせよ。
年若して死ぬわれを	友のかなしむ儘にせよ。
あゝいつくしき我国よ、	此世の人のわがうへを
拝むと見なば国もまた	わが安らげき終焉を
わがため祈れ、いさぎよく。	

【吳超】任炎熱之蒸發。雨水之颺零。我還伴天而憤恠。添朋輩之悲思。吁。本国有祈我於神明者。亦其高意。而我祈神明。極樂往生。

【同是】漢訳なし

【君武】漢訳なし

【清馥】漢訳なし

【学生歌】【君武】と同じく漢訳なし

9

Ora por todos cuantos murieron sin ventura,

不運の死を遂げたすべての者のために、

Por cuantos padecieron tormentos sin igual,

不当な苦しみを受けた者たちのために、

Por nuestras pobres madres que gimen su amargura,

悲運に泣いた哀れな母親たちのために、

Por huérfanos y vin[u]das, por presos en tortura,

孤児や未亡人のため、拷問に苦しんだ捕囚たちのために、祈ってくれ、

Y ora por ti que veas tu redencion final.

そして、ついに祖国に解放が訪れるよう、君自身のために、祈ってくれ。

【宮本】 楽を享けずして死する人のため、無上の憂苦に煩悶する人のため、不幸をかこつ可憐なる天下慈母のため、鰥寡孤独と苛責に逢ふ捕虜のため、將た贖罪の歩趨を採れる本国のため、我は神明に祈らん。

【美妙】 我はいのらん人のため、	快樂を知らで死にし人、
うきに苦しみがく人、	子を失ひてなげく母、
とりことなりしをのこども、	何れ劣らぬ世の中の
うきめを見たる人のため	我は祈らん、祈りてん、
祈りてん、また、国のため、	ありし昔の罪は今
つぐなひかへす時を得て、	今やゝ代はる国のため。

【吳超】 或不得享自由之樂。或長受此压制之嚴。或為国民而逢捕虜。或思独立而極艱難。我敢任事。為祈神明。

【同是】漢訳なし

【君武】漢訳なし

【清馥】漢訳なし

【学生歌】【君武】と同じく漢訳なし





Deja que la are el hombre, la esparza con la azada

ひとにその土を耕させ、鋤でならし、

Y mis cenizas antes que vuelvan á la naba,

また、わたしの遺骸は、消えないうちに、

El polvo de tu alfómbra que vayan á formar.

その粉を敷きつめて、君の絨毯にしてくれ。

【宮本】我墓荒廢に委し十字架石碑の墓標なきに至るとも農夫の鋤犁を入るゝに任せよ。我遺骸は漸燼する前に本国の雑草を蔽ふ塵埃中に混入して田野の肥料とならん。

【美妙】より我墓は荒れはてゝ よし鋤鋤のかゝるとも、  
只その儘に為せよかし。 うつせみの身はいたづらに  
腐りはせじな、わが国の 草に交はり、塵に入り、  
只わが国を肥やしてん。(注：次の12と合併)

【吳超】我墓委荒廢。任入農夫之鋤犁。至十字架石碑之墓標。我遺体漸燼。前蔽本国之雜草。混入塵埃中。而為田野之肥料。

【同是】漢訳なし

【君武】男兒誠愛國 死則已矣 又何為此囂囂 任我墓之荒廢兮 以我墓十字之石標兮  
飽農夫之鋤犁 任我遺體之漸燼兮 混入本國之雜草兮 為田野之肥料／＼八解

【清馥】男兒誠愛國。死則已矣。〔又〕何為此囂囂任〔我〕墓之荒廢兮。以〔我墓〕十字碑為〔之〕石標兮 飽農夫〔之〕鋤犁之礪 任〔我〕遺體之漸燼兮埋荒〔混入本國之雜〕草〔兮〕而為田野之肥料／＼八解

【学生歌】【君武】と同じ

12

Entónces nada importa me pongas en olvido,

そうしてくれたら、忘れ去られてもかまわない。

En〔Tu〕 atmósfera, tu espacio, tus valles cruzare;

わたしは君の大气、君の空間、君の谷間谷間にただよう、

Vibrante y limpia nota seré para tu oido,

わたしは、君の耳にひびきわたる清らかな調べ、

Aroma, luz, colores, rumor, canto, gemido

かおり、ひかり、いろ、そよめき、さえざり、うなり、こそ、

Constante repitiendo la esencia de mi fé.

わたしの胸中の鳴りやまぬ響き。

【宮本】 汝が我を忘るゝと否とは我に於て頓着せず、我霊は常に汝の天地の間を稊翔しつゝあらん。我は汝の耳に取り劉唳なる楽譜となり、長へに我信する主義を繰返しつゝ同胞に鼓吹する所あらん。

【美妙】（注：前の11と合併）

そもそも国は国のため、

死にゆくわれを忘るゝか。

よし忘れてもいとはじを。

只わが霊は国を恋ふ。

迷ひて去らず、行きかへり、

おもひを変へて、くに民の

くり返し、又くりかへし、

矢竹ごゝろの一すぢを

忘るゝ事も有るべきか。

我はいとはず、忘るとも。

国の中有に立ちまよふ。

やがて楽しき天楽に

耳に入れてん、くりかへし、

死ぬまで張りし我むねの

くりかへし又くりかへし。

【吳超】 本国其忘我否耶。我靈魂常稊翔於本土天地之間。

【同是】 漢訳なし

【君武】 漢訳なし

【清馥】 漢訳なし

【学生歌】【君武】と同じく漢訳なし

13

Mi Patria idolatrada, dolor de mis dolores,

わたしが熱愛した祖国よ、わたしの悩みのなかの悩みよ、

Querida Filipinas, oye el postrer adios.

愛するフィリピンよ、聞け、最後の声を。

Ahi te dejo todo, mis padres, mis amores.

もはや、みなともお別れだ、ちちはは、いとしき人たちよ。

Voy s[dl]ondo[e] no hay esclavos, verdugos ni opresores,

わたしは往くのだ、奴隷のいない、冷血漢のいない、圧制者のいないところへ、

Dónde la fé no mata, dónde el que reina es Dios.

まことが踏みにじられないところへ、神が治者であるところへ。

【宮本】最愛の本国よ、最愛の同胞よ。惨の又惨なる我臨終の辞を聞け。我は此土に我家族と満幅の愛情とを名残として逝かん。我は是れより奴隷もなく、劊夫もなく、逆主もなく、神の照臨まします真理の安宅たる彼土に旅立せん。

【美妙】さていつくしき我国よ、                   さて懐かしきはらからよ、  
むごき限りの臨終の                                   わがくり言を聞けよかし。  
さらば別れぞ、この土に                           血筋のものといとをしき  
思ひを残し、わらは行く、                       さて行くさきは奴婢も無し、  
獄卒もなし、暴君も、                           汚吏も無し無し、神のみぞ  
只おはします、「大道」の                       いと安らけきすみかなる  
たのしあの世にいざ行かん。

【吳超】吁嗟乎。最愛之本国兮。最愛之同胞兮。惨莫惨於聞臨終之辞。我与本国有満幅之愛情而竟逝。想明神照臨。為真理之安宅。覓留此土。

【同是】漢訳なし

【君武】我最愛之本国 我最愛之同胞 哀矣怨矣 其一聽我臨終之辞 留満幅之愛情於此土 我其逝矣 逆主乎 劊夫乎 賊吏乎 奴隷乎 其將以此真理之安宅為窟穴矣／九解

【清馥】我最愛之本国。我最愛之同胞。哀矣怨矣。其一聽我臨終之辞。留満幅之愛情於此土。我其逝矣。逆主乎。劊夫乎。賊吏乎。奴隷乎。其將以此真理為[之]安宅為窟穴矣／九解

【学生歌】【君武】と同じ

14

Adios padres y hermanos, trozos del alma mia,  
さようなら、ちちはは、兄弟たち、わたしの魂の形見たち、  
Amigos de la infancia en el perdido hogar,  
今はなきわが家で遊んだ幼友達、  
Dad gracias que descanso del fatigoso dia;  
感謝を捧げてくれ、わたしは苦しみの日日を離れて休息につくのだから。  
Adios, dulce estrangera, mi amiga, mi alegu[ri]á,  
さようなら、思い出深き外国の地よ、いとしいひとよ、わたしの喜びであったものよ、  
Adios, queridos se/res morir es descansar.  
さようなら、わが同胞よ、死は休息なのだよ。

José Rizal.

【宮本】慈親よ、兄弟よ、愛児よ、竹馬の諸友よ。いざさらば、我は困厄に処せる後今や  
楽土に就かん。いざさらば、我神魂は逝いて奇しき溫柔なる悦樂を享けん。いざさらば、  
同胞よ。死は休息なるぞかし。

【美妙】さらばぞさらば懐かしき 親よはらから子よ友よ  
くるしみを經て今はしも 我は楽土に出でぞ立つ。  
さらばぞ聞きね、魂は やさし、楽しき溫柔の  
さとの快樂を受くるなり。 さらばよさらば、いざさらば、  
死は休息と思へかし。

【吳超】慈親乎。兄弟乎。愛児乎。同志之諸友乎。少閑。我處困厄後而就樂土矣。少閑。  
我神魂去而享悦樂矣。少閑。同胞乎。死者休息矣。

【同是】漢訳なし

【君武】諸友乎 慈親乎 兄弟乎 愛児乎 我何忍離汝 我何忍離此最可愛之國 我何忍  
離此最可哀憐之國 我生也勞 我死也樂 我人世之工已盡於此日兮 我同胞其勉盡未來之  
責任兮 我最愛之國方幼稚 我最愛之同胞方幼稚 前途之命運 尚未定兮／＼<sup>〴</sup>解

【清馥】諸友乎。慈親乎。兄弟乎。愛児乎。我何忍離汝。我何忍離此最可愛之國。我何忍  
離此最可[哀]憐之國。我生也勞。我死也樂我人世之[工已]盡於此日兮。我同胞其勉盡未來之。  
責任[兮]我最愛之國方幼稚。我最愛之同胞方幼稚前途之命運<sup>〴</sup>。尚未定兮／＼<sup>〴</sup>解

【学生歌】【君武】と同じ 之乙己 [之工已] 今日 [此日]

## 『比律賓志士独立伝』の底本

『清末小説から』第128-130号(2018.1.1-7.1)に掲載。沢本郁馬名を使用。日本崇昭本西著、呉超訳『比律賓志士独立伝』1902年の底本を特定する。該翻訳書の底本については謎だった。目録には原著者の国籍を「日本」と表示している。これが謎を生じさせる原因のひとつだ。「本西」という日本人はいないだろう。もしかしたら「西本」ではなかろうか。目録しか利用できる資料がないばあいに陥る混乱状態だ。実物を手にしてはじめて研究がはじまる。

翻訳作品『比律賓志士独立伝』は、阿英「晩清小説目」には未収録だ。彼が編集した別の目録に掲載されている。阿英「辛亥革命書徴」\*1である。この「辛亥革命書徴」は同じ題名で時間を経て3ヵ所に存在する。

### 1 問題の発生

その3ヵ所にある記述を下に並べる。同じように見えるかもしれない。だが、書名に奇妙なところがあることに気づくはずだ。

[阿学203] 比律賓志士独立伝 <sup>マ</sup>日本崇昭本西著 呉超訳 一九〇二刊 訳書彙編社版 一冊

[阿辛180] 比律賓志士独立伝 <sup>マ</sup>日本崇昭本西著, <sup>マ</sup>呉超訳。一九〇二年刊, 訳書彙編社版。一冊。

[述略154] 非<sup>ママ</sup>律賓志士独立伝 日本崇昭本西<sup>ママ</sup>著，吳超<sup>ママ</sup>訳。一九〇二年刊，  
訳書彙編社版。一冊。

傍線があるなしの違いが問題ではない。3本の書目は基本的に同じものだ。ところが同一作品であるにもかかわらず書名の1字が異なっている。2本は「比」で1本は「非」と表記が違う。編集途中でだれかが手を入れたらしい。

フィリピン（昔はヒリッピン、フィリッピンなどと表記した）は、現代漢語では「菲律賓」と表記する。もうひとつの「比律賓 bilübin」では北京語で発音してもフィリピンにはならない。だから漢訳者の吳超がなぜ「比律賓」を採用したのか理由は不明。日本語では「菲律賓」もあるが「比律賓」を使う。日本語音であれば両者は同一だ。

上記作品の「非」および「比」という異なる表記を前にすれば誰でも不審に思う。当時の書籍は表示場所によって題名が違うことが普通にある。目録を見るだけではどちらが正しいのかわからない。

もうひとつ著者の国籍を「日本」としているところに違和感がある。日本語の比律賓を使い、著者が日本人ならばつじつまがあう気がする。記述の違いは別にしてもだ。

日本人の原作ならば著者の名前に「崇昭本西」はありえない。順序を逆にした「西本昭崇」ならばあるかもしれない。そう書いたこともある。だが奇妙なことに「西本昭崇」で調べても何も出てはこないのだった（後述）。

書名に不一致がある。日本人でありながら「崇昭本西」と存在しそうな名前前にしている。

以上の問題は作品の実物を見ずには解決できない。目録の記述だけに頼ることの危険性を示す例のひとつだろう。

目録の記述に関連して少し横道へ。

## 2 樽目録がほかと違うところ

あの目録はそう書いている、この目録にはこうある。それらをいくらながめても解答に到達することは少ない。上がいい例だ。

研究は実物を手元において進めるものだ。その原則を知る人にとっては、以下に述べることは理解しがたいかもしれない。だが日本において清末の創作、翻訳を研究対象にするとその原則は簡単に崩壊する。

作品の実物を見ることができなかつた時代は、目録の記述を頼りに問題を考えしていた。

中村忠行は実物にもとづいて立論する研究姿勢をくずさなかつた。しかし不足する部分は阿英目録の記述を使用せざるをえない。そうして清末翻訳小説について多数の論文を発表した。推測して正しいばあいもあるがその逆もあった。実物を見る機会が失われていた当時（1980年代まで）のことだ。しかたがない。研究の原則が崩壊しているというのはそういうことだ。

しかし現在は目録の記述のみを根拠にして論文を書く時代ではなくなりつつある。これが大きな変化だ。

もとはといえば阿英だけが特別だった。彼は自分が所蔵する清末小説の実物によって目録を編集したのだ。当時すでにあった目録は阿英が参照したとしてもほとんど役には立たなかつただろう。商務印書館の『涵芬楼新書分類目録』は文学類に400種近くの翻訳小説と約120種の創作作品を収録していると阿英自身が紹介している（『晚清小説史』1頁）。それでも阿英の所蔵する1千種以上に比べれば見劣りがする。

というように清末小説に特化した比較的規模の大きい目録は阿英の時代には存在しなかつた。くり返すが彼は実物を見て目録を作成している。ゆえにその記述を引用して「阿英目録によると」と書くことができる。それでも記述の不一致が生じている部分があるのは事実だ。

問題が発生するのは阿英目録以後に編集刊行された書籍類においてである。中国で公開された小説目録、年表は、参照した典拠資料を明示しないことが普通になった。表面だけを見て阿英目録にならつたからだ。参考文献をまとめて掲げるものもあるが、そのことを指しているのではない。個々の作品について典拠を示していないという意味だ。少数の例外を除いて誰もその発想をもとから持たなかつた。



った。

阿英は実物を手元においてそのまま記述した。ほかの目録は参照しなかっただろうからその記載もない。だが後の研究者は、阿英が実物に基づいていたという事実を無視した。参考文献を記載しない部分だけに注目して阿英目録をまねた。あるいは中国でも実物が入手できない状況があったか。その結果、先行する目録を引き写しただけですませるものも出てくる。典拠を書かないからどの部分が自分で確認したものか、どこが引用なのか区別することが不可能だ。

例をひとつあげる。劉永文『晚清小説目録』（2008）がある。単行本部分は先輩学者の目録を多く参考し引用したと書く（説明2頁）。だが具体的な文献名はあげない。ただ配列についてのみ『新編増補清末民初小説目録』（樽目録第3版 2002）を参考にしたという（同前）。それ以外の文献名は見られない。ゆえに参考引用したという先輩学者の目録についていちいち注記するはずもない。結果として細部についての信憑性がゆらぐ。劉永文が自分で単行本を確認したのか、それとも先行目録を写しただけなのか区別ができない。そこが弱点だ。最終責任者は必然的に名前を冠している劉永文になる。彼の名前のみが掲げられているから当然なのだ。引用するならば「劉永文目録によれば」と書かざるをえない。配列について参考にした樽目録第3版に責任を転嫁することはできない。

劉永文目録に弱点があることを理解したのが鄭方曉（2013）<sup>\*2</sup>である。鄭方曉は賢く、劉永文目録の弱点をわざと指摘しない。それどころか逆に劉永文目録がすべての点において樽目録第3版よりも優れていると鄭方曉は高く評価した（12頁）。そのように書かなければ指導教授、論文審査員たちの同意が得られないとよく認識していたと思われる。鄭方曉の本音は「付録《説部叢書》系列目録」（163-179頁）を見ればわかる。鄭方曉は「説部叢書」目録を作成するにあたって樽目録第3版の方に依拠したのだった。すべての点において優れているはずの劉永文目録には一顧だにしていない。一見不可解に思える鄭方曉の選択だ。しかし商務印書館「説部叢書」について研究するには樽目録に頼らざるをえなかったのが事実だろう。

ただ奇妙に思うことがある。翻訳研究の博士論文でありながら上の「説部叢書」目録には原作をまったく明記していない点だ。樽目録に書かれている原作を引用

することすらしていない。指導教授は鄭方曉を指導しなかったのだろうか。論文審査によく合格したものだと思ふ。中国学界に從來からある翻訳軽視の傾向が露呈したということだろう。またはるか昔の樽目録第3版ではなく清末小説研究会ウェブサイトで公開している最新版を利用すべきだった。蛇足ながらつけ加えた。

樽目録は從來からある目録とは編集方針が基本的に異なる。樽目録第2版（1997）より典拠資料を明記する。樽目録第3版は2002年に中国で刊行した。樽目録第8版（2016）では748種の参考文献を列挙した。作品のひとつひとつにそれらの文献を注記するようにつとめたのだ。それぞれの典拠そのものが記述責任を持つ。ゆえに「樽目録によれば」という書き方は基本的にできないようになっている。アメリカに住む馬泰来は早い時期からその点をよく理解していた<sup>\*3</sup>。彼は数少ない理解者のひとりだといつていい。

典拠を明らかにすることが小説の実物に近づく手がかりになるだろう。これが私の判断である。

なぜ「手がかり」というのか。くりかえすが実物にたどりつくための手がかりだ。目録の最終目的を作品そのものに到達するところに置いている。2次資料にもとづいた記述に間違いがあるのはしかたがない。実物で確認すれば解決するだろう。

そう考えるにいたったのには、目録編集をした過去の経緯があるからだ。

小説目録を作成する手順を考えれば、阿英のように実物を手元において編集するのが原則だろう。だが日本という外国の地では、清末小説を扱う際の原則手順を実践することができなかった。本来ならば中国の研究者の仕事だ。そう何度も私は説明してきた。そう言いながらあえて樽目録第8版（注：2018年現在は第10版）を公表しているのは理由があるのだ。

清末小説関係の資料は日本にはほとんど所蔵されていない。それが中国で「文化大革命」が開始（1966）される以前からの一般常識だった。今から半世紀以前のことでないか。当時は実物で確認できる状況ではなかったと重ねていう。数種類の小説雑誌が日本国内に分散していただけといつても過言ではない。それらにもとづいて小説総目を作成したことがある。小説単行本の実物がまとめて保存

されている場所などない。日本で刊行された中国最初の小説専門雑誌『新小説』全24冊ですら日本には全冊揃いを<sup>・</sup><sup>・</sup>実物で所蔵する機関はなかったし現在もない。1980年代に不完全な影印本（広告ページを削除する）が出版されるまでは、そういう状態だったのだ。

日本で清末民初小説目録を編集するにあたって、実物を確認することは最初からあきらめるほかない。1980年代当時できることといえば清末部分に関しては阿英目録を基本にすえる。それに自分で作成していただくの清末雑誌総目録から作品を補充することだった。阿英目録は小説雑誌に掲載された作品を収録対象にしているところが新しい。彼以前は単行本を主体にするのが常識だった。雑誌それ自体が清末に出現した新しい形態だったのだ。阿英目録の十分ではないところを私の雑誌総目録でいくらかは補うことができる。さらに民初小説目録は最初から存在しなかった。清末と民初を分断することなくひとつながりのものとして把握するという認識がなかったからだ。それをつないで一体化する。そのためには多くの2次資料から必要事項を採取するほかない。だからこそ目録には典拠を明記する必要があるという私の考えが生まれた。典拠をたどっていけば、それが蔵書目録であれば実物にたどりつく可能性も出てくる。阿英目録しかなかった時代は、研究といっても手探り状態だったのだ。

しかし「文化大革命」以後、1980年代、90年代より研究環境が変わりはじめた。特に作品の実物、本文をめぐるの中国における環境変化が著しい。

中国の図書館で小説の実物を閲覧できるばあいもある。ものによれば複写することも可能だ。世紀を跨いだ現在では、影印本であれば購入できる。あるいはネットで全文が画像で提供されていることもある。ただし不安定だ。昨日まで全文を読むことができたにもかかわらず今日は読めない。そういう変更が日常的にあるということだ。ネット古書店から実物を購入する可能性まで出てきている。中国に行くこともできなかった時代を知る私は感慨を深くする。ネット古書店では、すでに売却されてしまった書物でも書影が保存されていることがままある。表紙、本文の一部分、奥付を写真で確認できれば大いに役立つ。またネットを利用して図書館の蔵書検索ができるのも便利だ。

現在の樽目録はそれらを総合して成立している。新しい資料が出てくるたびに

注釈を追加する。1988年の初版から2016年までの28年間に作り直して前述のとおり第8版になった(注:30年間で第10版)。実物で確認した書物も、2次資料の不確かな書籍情報も同一に扱う。過去の目録が間違っている箇所もそのまま残す。正しいもので書き換えてしまえば誤っていた事実が消えてしまうからだ。樽目録は過去の研究成果を保存することを意図している。

だが中国人研究者は、樽目録について中国で編集刊行された小説目録と同じだと考えるらしい。典拠資料を明記していることに気がつかない。いくつかの論文に樽目録第3版という旧版を引用しているのを見かけた。中国では個人のネット接続を制限しているという。樽目録最新版は閲覧できないとある中国人研究者から聞いた。だから当然のように紙媒体の古い樽目録を使用し、それについて不足部分を指摘しているのだ。古すぎる。「樽目録にはこう記述している」といつものおり疑問もいれずに書く。間違い。そのような指摘はもともと無効である。ここは樽目録の注釈部分に明示している典拠資料そのものを掲げなければならない。

ひとことでいえば利用方法を間違えている。樽目録の基本を理解することができない利用者が多いといわざるをえない。残念なことだと思う。事例をみつけるたびに実名を掲げて利用方法が違ふと私が指摘する理由だ。

閑話休題。

本稿で問題にしている該書の影印本を入手した。

### 3 『比律賓志士独立伝』とその底本

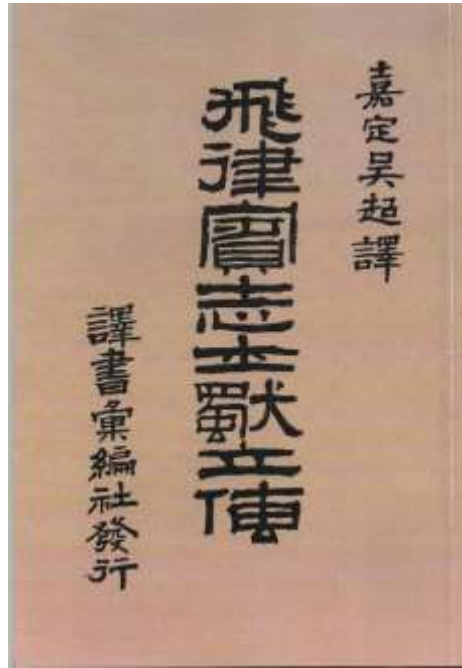
表紙は「飛律賓志士独立伝」だ。目次、本文が「比律賓志士独立伝」(本文の表記を使用する。以下、『志士独立伝』と称す)。清末に発表された作品の中には作品名の表記が表紙、扉、目次、本文、奥付で一致しないばあいがある。不思議なことではない。『志士独立伝』もその類だ。

本文は「比律賓 崇昭本西著／嘉定 吳超訳」である。奥付の発行所は「日本東京神田駿河台鈴木町十八番地／訳書彙編社」、刊年は「明治三十五年十月十日／光緒二十八年九月九日発行」となっている。明治と光緒を併記するところか

ら、いかにも中国人留学生が日本で刊行した書籍だとわかる。序が3頁、目次が



奥付



表紙

2頁、本文わずかに36頁のいわば小冊子だ。

やはり実物（ここは影印本）を見なければわからない。

著者崇昭本西の国籍は「比律賓」だった。ゆえに「日本」とするのは阿英による誤記であることが判明する。実物に基づいて記述しているはずの阿英でさえ誤ることがある。日本と記述する目録は、典拠を示さなくても阿英の目録から引用して誤ったことがわかる。

例をあげるならば、張曉編著『近代漢訳西学書目提要 明末至1919』\*4だ。

[漢訳3437]「<sup>ママ</sup>非律賓志士独立伝」、(日)崇昭本西著

書名を間違い、ポンセの国籍を「日本」のままにしている。実物で確認しなかった、あるいはできなかった。

中国人の吳超がフィリピンを漢訳して日本語の「比律賓」を使用するのはいさ

さか腑に落ちない。表紙の「飛律賓」ならばまだ原音に近いのだが。

フィリピン人の著作を漢訳したことは事実だ。ではその底本にはなにを使用したのか。表紙、本文、奥付にも説明、記述はない。

ところが該書冒頭を飾る漢文で書かれた「序」の文末に「宮本平撰」とある。これが決め手になった。

原本は（比律賓）マリアーノ・ポンセ MARIANO PONCE 著、宮本平九郎、藤田季荘共訳『南洋之風雲』（博文館1901.2.23）である。扉と本文には「比律賓独立問題之真相」と副題がつく。



扉は「比律賓 マリアノポンセ著」となっている。現在、多くはこちらのマリアノを使用する。

該書扉にはスペイン語で原書の表示がある。CUESTION FILIPINA. UNA EXPOSITION HISTORICO-CRITICA DE HECHOS RELATIVOS A' LA GUERRA DE LA INDEPENDENCIA. 直訳すると「フィリピンについて」、あるいは「フィリピン問題」となる。扉に示された副題スペイン語には誤植があるかもしれない。意識して「独立戦争に関する事実の重要な歴史的真相」としておく。日本語訳「比律賓独立問題之真相」とほぼ同じだ。

原文はスペイン語で書かれたと考えるほかない。収録してある「比律賓独立軍々歌」、リサール「臨終の辞」などはスペイン語も示している。訳者の宮本平九郎、藤田季荘はともに外務省翻訳官だった<sup>45</sup>。

#### 4 底本『南洋之風雲』

底本『南洋之風雲』には漢文で書かれた「序」がある。末尾に「明治三十四歲次辛丑一月／潮来 宮本平撰」と表示される。著者は宮本平九郎で間違いない。

『志士独立伝』に収録された「序」は底本とほぼ同文だ。その内容の概要を紹介する。

日本人の宮本から見たアジアの情勢は、欧米の列国が弱小国を圧迫している事実だ。ロシア、ドイツが支那を、イギリスが南アフリカを、アメリカがキューバ、フィリピンに対して取っている態度がそれだ。アメリカに狙われたのがフィリピン（比律賓。漢訳も同じ）である。ポンセは憂国の士でありフィリピンの独立自主の基礎を築こうとしている。日本に流れきて宮本のもとを訪ねた。フィリピンを談じて悲憤慷慨する云々。

語句について修改している小さい部分がある。中国人から見て手を入れたくなった箇所らしい。たとえば底本が「宜如此耶」としたその「此」を改めて「宜如是耶」とするなどだ。

だが日本語に強く影響を受けた漢訳だと思う。たとえば、国名の表示だ。日本

語と漢語では外国名の表示は基本的に異なる。宮本は漢文の中で使用する国名は日本語である。露（ロシア）、独（ドイツ）、支那、北米合衆国（アメリカ）、比律賓（フィリピン）、英（イギリス）、仏（フランス）などである。しかし、呉超は漢訳していない。日本語のままを使用する。

最後部分に削除が少しある。以下に底本から引用しておく。

近者著一書、曰比律賓問題、附以比島志士小伝、其意在説所以比人与米人構難寔出不得已、兼闡明比島事情、以欲煩我邦志士一読焉、邦人通比島事情者極少、或遽断以為蒙昧之民、

底本『南洋之風雲』の全体構成、つまりフィリピンがアメリカと戦わざるをえない理由、またフィリピン事情を明らかにしているという説明だ。ここを削除した理由は呉超がその本体を翻訳しなかったからである。『志士独立伝』は附録の「志士列伝」のみを取りあげて漢訳したのであった。

ついでだから細かい修改もあげておく。

然觀此書 → 今觀是篇  
頗有我邦古武士之風 → 頗有古武士之風  
刻成、余因書所感以辨卷首 → 是為序

ここでも「此」を「是」に書き換えている。それくらいのことだ。細部に手を入れたが全体の主旨に変更はない。

## 5 『南洋之風雲』と『志士独立伝』

底本『南洋之風雲』の目次を以下に紹介する。

潮来宮本平撰「序」（注：漢文。一部分を削除して『志士独立伝』に収録する）  
潮来生識「例言」



ドン、マリアーノ、ポンセ Don Mariano Ponce 氏伝（注：無記名。執筆は宮本平九郎だろう）

比律賓独立軍々歌（其一） フェルナンド、グレーロ氏作歌 ホセー、デ、シーロス氏作曲

比律賓独立軍々歌（其二） ラーウロ、マタアス氏作歌 セスチーノ、ロドリーゲス氏作曲

比律賓独立軍国家訳

写真 31葉（注：ポンセ、リサール肖像を含む）

比律賓群島全図

第一章 緒言

第二章 比律賓独立戦争の起因

第三章 ビアック、ナ、バトー条約

第四章 米西戦争の当初に於ける比米両軍の関係

第五章 ガヴィーテ州に於ける比律賓独立軍の奏功及群島の統一

第六章 米国当局者とアギナルド将軍との秘密会見

第七章 馬尼刺市攻撃前に於ける比国独立軍の状況、比米両国衝突の端緒

第八章 比律賓群島独立の宣言

第九章 馬尼刺市の包囲攻撃

第十章 馬尼刺市占領後に於ける米軍の暴状

第十一章 マローロス市に於ける比律賓共和国議会の解説

第十二章 比律賓共和国憲法の概要

第十三章 比律賓共和国憲法

第十四章 比律賓群島領有に関する欧米人の反対意見

附 録：志士列伝 137-197頁（注：この部分を漢訳）

『志士独立伝』は、宮本の漢文「序」を引用し、日本語の「附録：志士列伝」のみを漢訳したものだ。もともと附録だから漢訳本文は前述のとおり36頁の小冊子にしかない。

各伝について題名の日本語原文と漢訳を対照する。

アギナルド將軍伝	圭拿羅陀將軍伝
ドン、マルセーロ、イラーリオ、デル、	ピラール氏伝 皮辣符路氏伝
ドン、ホセー、リサール氏伝	利利乎羅氏伝（辞世詩「臨終之感想」あり）
ガリカーノ、アパシブレ博士伝	愷古維培博士伝
イシドーロ、デ、サントス博士伝	奚路尋司博士伝
フェリーペ、アゴンシリヨ氏伝	華配昂喬氏伝
マルセリーノ、デ、サントス氏伝	苗待新司氏伝
アントニオ、ルーナ將軍伝	都元羅那將軍伝
グレゴリーオ、デル、ピラール將軍伝	浩託包羅將軍伝
パンタレオン、ガルシーア將軍伝	平台槐佳將軍伝
トマス、マスカルド將軍伝	培非卡託將軍伝
ピオ、デル、ピラール將軍伝	飄羅蒲路將軍伝
イシドー、トルレス將軍伝	奚路土司將軍伝
ルシアーノ、サン、ミゲール將軍伝	路曉生華將軍伝
テオフィーロ、デルガード將軍伝	調牢理古將軍伝
ホセー、パウア將軍伝	化消蒲阿將軍伝
サンチアーゴ、バルセローナ博士伝	新浩飄拿博士伝
ラモン、アバルカ氏伝	辣蒙阿耶氏伝
アントニーノ、ヴェルヘル博士伝	道豪華富博士伝
ホセー、マリア、バーサ氏伝	喬那派刹氏伝
イサベロー、デ、ロス、レイエス氏伝	実薄斯先氏伝
テオドーロ、サンデーコ氏伝	調討生喬氏伝
エミルアーノ、リエゴ、デ、ヂオス將軍伝	妙料廉岳將軍伝
名士追録	（省略しており漢訳なし）

## 6 崇昭本西の謎——孫文、日本人お清との関係

原作者マリアノ・ポンセの名前が漢訳されて崇昭本西となるのはなぜか。

まず本西から説明する。

漢字にするばあい一般には馬里亜諾・蓬塞、または彭西、棒時などと表記される。そちらのほうが Ponce の音に近い。本西を北京語 Benxi で発音するとポンセからすこし遠ざかる。わざわざ本西にした理由があるはずだ。

その解答は宮崎滔天『三十三年の夢』\*6のなかにあると考える。

関連箇所を引用する(ルビ省略)。冒頭行に名前を抜き出し [ ] 内に林啓彦改訳『三十三年之夢』(1981)\*7の該当する箇所を参考のために示す。滔天自身がフィリピン人ポンセとの出会いを証言している。

『三十三年之夢』187-188頁 ○○○君=ポンセ君 [128頁 ×××先生=彭西先生]

余(注:宮崎滔天)や志支那大陸に存するものなり、しかして香港に至りて菲島の人士と交結す、みずから顧みて、また多情に過ぎるを感ぜずんばあらず。しかれども、余はこれを抑制すること能わざりき。否、あえて抑制することなくして、その情に従えり。そのはじめて○○○君(のちに菲国独立軍の外務総長)と相い見るや、彼、慷慨禁ずる能わざるものの如く、テーブルを拍いていっていわく

人はその信頼するところのものに欺かるるより、はがゆきはなし。我が国の現状、実にしかり。君知らずや、さきに米国のスペインと鬨を生ずるや、我らをして内応せしめて、事平ぐに至らば自主独立を許すを誓う。我らはその言を信じて、命を賭して戦えり、自主独立を希うが故なり。しかしてスペインは敗走せり、皆おもえらく、自主独立の民たるを得んと。いづくんぞ知らん、米国のために隷属を強いられんとは。ああ、われらまさに何をなすべきか。自由のためにスペインと戦いしわれらは、今また自由のために米国と戦わざるべからざるなり。しかり、ただ戦争の一法あるのみ。亜州狭国の友よ、卿らまさに、如何んかわれらの心事を憐まんとするぞ

と。情やすでに悲し、その言豈に多く聞くに忍びんや。

以上長く引用したのは、フィリピン独立軍の「〇〇〇」がすなわちボンセであるからだ。

『南洋之風雲』で宮本「序」がボンセについて「フィリピンを談じて悲憤慷慨する云々」と書いていた。その内容は滔天の記述を見れば推測できる。

「<sup>きん</sup>鼻を生ずる」とは、いざこざ、不和が生じるという意味。ここでは米西戦争をいう。

ボンセが自ら語ったフィリピン、スペイン、アメリカの関係とその推移について滔天は上のように記録した。

スペインの支配下にあったフィリピンでは独立運動が起こっていた。独立派内部での分裂もありアギナルド将軍はスペイン殖民地当局と媾和条約（ビヤック・ナ・バトー条約）を結び武器引き渡しの代償を受けて香港に亡命する。1897年のことだった。香港においてフィリピン委員会を組織し会長はアギナルド、書記長はボンセ（1896年、滞在していたスペインのマドリッドより香港到着）が選ばれた。委員会の主たる活動は革命政府のために武器弾薬を調達することだ。

1898年8月（『南洋之風雲』5頁。一説に6月29日、7月7日）、ボンセはフィリピン独立軍代表者として日本に派遣され横浜に潜伏した。その目的は調査および日本政府にフィリピン独立の支援を求めることだ。具体的にいえば武器弾薬の調達である。しかし日本はアメリカとの協調を主とし局外中立を発表する。そのためボンセの対日本政府工作は不首尾であった。

アメリカはアギナルドにフィリピン独立を約束してスペイン軍を襲わせた。スペイン降伏後、アメリカは約束を反故にしアギナルドら独立軍に対する掃討を開始した。1899年、フィリピンとアメリカの戦争（比米戦争）がはじまった。ボンセの活動は急がされることになる。

青木周蔵外務大臣にあてた大浦兼武警視總監の1899年5月31日付報告書がある（句点は筆者。以下同じ）<sup>\*8</sup>。

馬尼刺叛徒ノ派遣員ハ本邦ヨリ兵器ノ供給ヲ得ント熱望セルコト久シク從テ種々ノ手段ヲ運ラシ以テ其目的ヲ達セントセリ。現ニ去ル三十年四月中窃カ

ニ横浜碇泊中ノ米国帆船「ガージニヤ」号噸数千三百八噸竝ニ同市居留地七十七番館「イトンブラツト」商会ノ倉庫ニアル元込銃二百挺「ゲベール」銃三千五百挺ヲ購入シテ馬尼刺ニ輸送セント試ミ又大阪ニ於テモ外商ノ手ヨリ村田銃ヲ買入レントシタル聞ヘアリシカ昨年十月ニ至リ叛徒ノ大統領「アギナルト」ノ秘書官「ボンセ」ハ麴町区飯田町二丁目五十三番地写真師鈴木真一ニ銃器ノ周旋方ヲ依頼シ鈴木ハ故川上大将ノ眷顧ヲ受ケ居ルヨリ大将ハ陸軍大臣及福島大佐ニ謀リ遂ニ「モーゼル」「スナイドル」ノ兩銃ヲ合セテ六万挺ヲ払下クルコトニ決シタルニ同年十二月下旬ニ及ヒ日本政府ハ米国政府ヨリ叛徒ニ関スル照会ニ接シ為メニ右銃器ハ断然払下ケサルコトニナリタレハ「ボンセ」ハ勿論鈴木モ頗ル落胆シ引續キ川上大将福島大佐ニ迫リシモ容易ニ許サルヘキ見込ナキヨリ鈴木ハ「ボンセ」ヲ故勝伯ニ紹介シ同伯ノ手ヲ経テ再ヒ川上桂ノ兩大将ニ運動シタル結果「モーゼル」銃百四十挺「スナイドル」銃八十挺ヲ払下クルコトトナリシモ是亦不調トナリシ。「ボンセ」ハ断念セス其後モ福島大佐ニ迫ル所アリシモ其目的ヲ遂クルニ至ラス。依テ其方法ヲ転シ鈴木ト懇意ナル飯田町五丁目三十五番地居住区會議員東村守節カ元陸軍ニ奉職シタルコトアル者ナルヨリ同人ニ買入方ノ相談ヲ為シタルニ容易ニ承諾シ古銅錢商ヨリ見本トシテ三種ノ銃器ヲ持帰り「ボンセ」ニ示シタルニ銃一挺ニ弾薬百発ヲ付シ金八円ト云フヲ五円ニ値切りタルヨリ破談トナリ續テ十文字信介ヨリ六種ノ銃器ヲ取寄セタルモ価格相談纏ラス。其後或ル学校ノ名義ヲ以テ陸軍省ヨリ払下ケント試ミタルモ一校二十挺ニ限りニシテ且ツ廢銃ニシテ用ヲ辨セス。此ニ於テ「ボンセ」モ止ムナク獵銃ヲ買入ルハニ決シタルモ其輸送方ニ困却シ鈴木真一所有ノ汽船住吉丸噸数千四百四十八噸ヲ馬尼刺迄一航海七八万円位ニテ借入レタシト相談セシモ鈴木ハ二十万円ニアラサレハ迫之ニ応セス。是レ「ボンセ」カ横浜ナル上海銀行ニ多額ノ預金アルヲ知ルニ因レリ。是ニ於テ「ボンセ」ハ鈴木ト手ヲ絶チ今回ハ山縣五十雄（万朝報英文記者）ノ手ニテ兵器ヲ得ント奔走セシモ目的ヲ達スル能ハス。結局去月下旬香港在留銃器商米人某ヨリ多数ノ兵器ヲ買入レ同港ヨリ独逸船ニ搭載シ馬尼刺ニ送致スルニ至リシモノナリト云フ

上の報告書はアメリカ公使にあてた文書の「附記」である。細かな数字まで明らかにしてポンセらの武器弾薬調達に関する活動を報告している。ポンセの工作は多くが失敗に終わった。日本政府によってその実状は逐一把握されていたことがわかる。

それよりも以前に梅屋庄吉は香港で「梅屋照相館」という写真館を開いていた。孫文に紹介されポンセにも会っている。梅屋は中国革命派、フィリピン独立派に対して資金を支援する存在だった。

1899年、横浜において滔天、平山周、孫文、ポンセらが顔を会わせた。「孫文、対陽館に來訪、Mariano Ponce (マリアノ・ポンセ) の要請をうけフィリピン独立軍のための武器調達を依頼。三月、横浜外国人居留地一二一番館の孫文寓居で平山(周)とともにポンセに紹介さる」(『滔天年譜稿』『三十三年之夢』462-463頁)

ポンセは、孫文、梅屋、滔天、平山ら民間の人脈をたぐって武器弾薬を購入しようとした。

衆議院議員中村弥六が登場する。号は背山、背水。儒学者の家に生まれ、教師を経て内務省に入りドイツに留学したことがある。衆議院議員に当選したあとポンセの依頼を受け武器払い下げの運動に尽力した。その弾薬は布引丸に積まれ日本からフィリピンにむけて輸送された。ところが運悪く沈没(1899.7.21布引丸事件)したことによりフィリピンには届かなかった。

その後の経過は次のとおり。滔天がポンセの承諾を得て保管されていた残りの武器を孫文に流用しようとしたところ中村がすでに無断で売り払っていたということが明らかになった。滔天はそう書き残している。簡単にいえば、そういう経緯である。

少し時間をもどして武器払い下げの運動について滔天の証言を紹介する。

『三十三年之夢』227頁 ポンセ君

すでにして背山は、その運動に着手せり。しかして菲島委員ポンセ君は、全権を孫君に依托して敢えて干渉せず、背山と孫君の間には余と南万里とありて、相互の伝信機となりたり。すでにして警察の目は、更に余らの挙動を注視するに至れり。

背山とは中村弥六のこと。孫は孫文（逸仙）。南万里とは平山周を指す。

前述のように弾薬を搭載した布引丸は寧波沖、あるいは上海沖で暴風雨のために沈没してしまった。

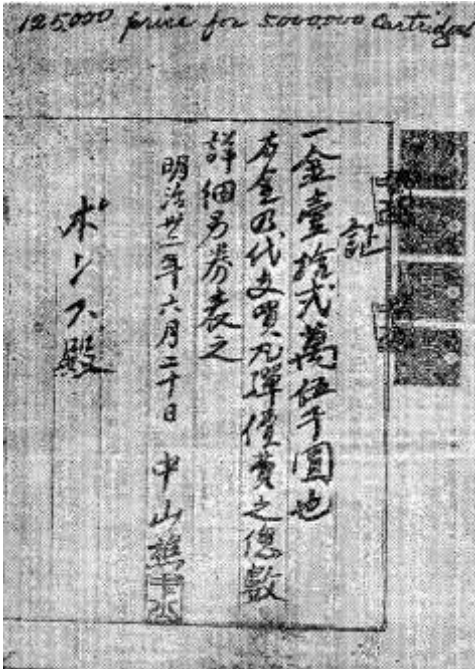
西郷内務大臣より青木外務大臣にあてた1900年2月6日付「布引丸一件調査ノ結果回答ノ件」がその状況を報告している\*9。

客年十一月廿一日送第二八三号ヲ以テ汽船布引丸カ比律賓叛徒ニ供給ノ目的ヲ以テ弾薬其ノ他軍需品ヲ搭載シ居リタルトノ風説ニ関シ在本邦米国公使ヨリ申越候件ニ付事実ノ有無取調方御照会之趣了承。右ハ篤ト取調候處汽船布引丸ハ東京市住中村弥六ノ所有ニシテ明治三十二年七月十三日船長石川伝外船員三十四人乗組神戸港ヲ抜錨シ門司港ニ於テ航海用石炭凡ソ五百噸ト外ニ弾薬凡ソ三百噸ヲ積ミ込ミ便乗客トシテ日本人某三名麻尼刺人一名乗り込ミ七月十七日同港抜錨長崎港ニ寄港シ長崎税関ニ仕向港上海トシテ届出テ同十九日出帆シ航海中同廿一日午前上海沖ニテ海難ニ罹リ沈没シ船長以下十九人ハ今ニ行先不明ニシテ他ノ船員ハ救助セラレタリ。然ルニ右弾薬ハ東京火薬商大倉米吉カ横浜在留独逸国「シー、ウキンベルゲル」商会ニ売渡シタルモノヲ門司港ニ於テ布引丸ニ積込ミタルモノニ有之。而シテ比律賓ニ輸送スルノ目的ナリシ事実ハ分明不致。且仮ニ比律賓ニ輸送スルノ目的ナリシトスルモ現行刑法ニハ右ノ如キ事実ヲ処分スルノ明文無之候ニ付右様御了承相成度此段及御回答候也

上記に関係してボンセお清の証言がある\*10。名前のとおりボンセの妻だ。インタビューした磯海国敏は次のように書いている。

我がボンセ氏の手許には明治三十二年六月二十日附を以て謎の人物『中山樵』の名を以てマリアノ・ボンセに手交した弾丸五百万発の代金十二万五千円の受取証が保存されて居り、布引丸が同年七月十五日前後に門司の港で遠洋航海に就く準備として四百七十七噸の石炭を門司の平岡商店より買った時

の代金二千二百廿三円廿二銭の請求書が残されてゐた。



中山樵（孫文）のポンセ[セ]あて受取証  
神戸大学ネットより引用

中山樵はいうまでもなく孫文のこと。外交文書の内容とポンセお清の所有する資料を照らし合わせる。布引丸に積み込んだ弾薬（銃器は含まれていないらしい）は日本人商人がドイツ商会に売り渡した。それをポンセの代理人になった孫文が中山樵の名前を使用して購入したことになる。だからポンセの手元に孫文が支払いのためにあらかじめ受け取った資金の「受取証」が保管されている。

中村弥六が弾薬購入に関係して私腹を肥やした。そういう滔天の指摘がある。

『三十三年之夢』324-325頁 本君（ポンくん）[266頁 「本君」を「背山」に誤る]

すなわち知る、この間また背山私するところのもの甚だ少なからざるを。しかして、未だその私書偽造の奸策に出でたるを知らざるなし。翁すなわち  
ポンくん  
本君および先生の実状を述べて小倉の同情を求め、強いて三万金を出ださん  
ことを請う。

小倉は小倉商店、すなわち大倉喜八郎を指すというのが普通の解釈らしい。た



だ外交文書に「東京火薬商大倉米吉」の名前がある（888頁上）。こちらは大倉だから少しまぎらわしい。

最後は滔天による総括である。あらかじめ説明する。ポンセの依頼により調達した弾薬は布引丸の沈没で失われた。これが文中に見える菲島（フィリピン）事件だ。残った武器を孫文に渡すつもりが中村弥六によって転売されていたという経緯があった。こちらが惠州事件に関係している。

『三十三年之夢』352頁 本（ボン）君<sup>\*11</sup> [243頁は省略している]

回顧すれば半生一夢、すべてこれ失敗の夢迹なり。夢迹追懐しきたりて痛恨の情に堪えざるもの、実に菲島事件と惠州事件の二となす。しかして菲島の事、彼の如くにして破れ、惠州の事また此の如くにして破る。思うてここに至れば、余は実に背山の肉を食い、血を啜るもなおかつ慊らざらんとす。ああ豈に余のみならんや、志を同じゅうし道をともしたるものは、みな然らん。いわんや孫君、本君<sup>ボン</sup>においてをや。しかれども翻って考うれば、皆これ自己不明不徳のいたすところ、罪を背山一人に帰してころを責むるは、道にあらざるなり。しかし、彼を責むるはみずから責むるに如かず、人に求むるはみずから求むるに如かず。ああ、われそれ終生山門の人とならんか。

上に見える「本（ボン）君」はポンセを指しているのが重要だ。ポンセという名前から宮崎は彼のことを「本（ボン）君」と書いた。

漢訳者呉超は滔天と交友があったのかも知れない。あるいは滔天の著作を読んでいた可能性もある。ポンセのボンに宮崎が使用した「本」を当てた。すなわち「本西（ボンセイ）」である。ここは呉超の工夫だと考えたい。

では「崇昭」はどうか。こちらは簡単には解決できない。

漢訳者呉超はフィリピン人の名を翻訳して2文字に簡略化する傾向を有している。すこし上述の名前の漢訳から抜き出す。

ガリカーノ Galicano（愷古）、イシドーロ Isidoro（奚路）、フェリーペ Felipe（華配）、マルセリーノ Marcelino（苗待）、アントニオ Antonio（都元）、グレゴリーオ Gregorio（浩託）、パンタレオン Pantaleon（平台）というぐあい

だ。

原音と漢訳は一致しているようなそうでないようでもあり断定できない。Gregorio (浩託)などは、北京語音とは一致しないように思える。呉超の使用する地方音が影響しているかもしれない。

それにしても マリアノ Mariano が崇昭になるだろうか。

私はここでひとつの仮説を提出したい。崇昭はポンセが日本で使用した別名だと考える。読みは「たかあき」あるいは「あきら」ではなかろうか。

そう考える根拠はポンセの妻が日本人だからだ。

以下は前出『台湾日日新報』のインタビュー記事による。

日本人宇田川キヨ（清）、東京神田生まれ横浜育ち。父は宇田川鶴次郎。横浜の同家に寄寓したのが仮名サン・ペーレのポンセだった。フィリピンのスペイン官憲の目を逃れて日本に亡命中である。そこには「之亦日本に亡命中の中山孫逸仙氏も盛んに出入し」ていた。スペイン公使館に要求されて刑事による監視があった。張り込みの刑事が仲人になりポンセ32歳、お清18歳のふたりは結婚した。ポンセお清の証言。

「ポンセは日本に長く在住して居りましたし日本好きでしたので（日本語が）大層上手でしたから不便はありませんでした、衣服も妙高寺山の実家に居た頃は日本のキモノ許り著てゐましたし日本食は何でも好んで食べました」

日本語を話し和服を着て日本食を好んだポンセは、写真で見ると日本人と見えないこともない。その彼が崇昭という別名を持っていたとしても不思議ではなかろう。またそれを漢訳に使用した呉超は、そこまで知っていたことになる。

## 7 ポンセの肖像

ポンセの肖像をいくつか紹介する。

### a スペイン・マドリード雑誌『連帯』時代

宮本の説明によると雑誌『連帯』の編集長として。中央が社長（ピラール）と左に専任編集員（リサール）である。3頁の説明は以下のとおり。「該雑誌（『連帯責任 La Solidaridad』注：一般には『連帯』と称する）の社長はマルセーロ、イラ

ーリオ、デルピラル氏にしてホセー、リザール及アレトーニオ、ルーナの二氏専任編輯員たり。是等諸氏は皆比律賓群島の政治界に於て名声赫々たる者にしてポンセ氏が莫逆の友たり」



『南洋之風雲』所収  
左よりリザール、ピラル、  
椅子に座ったポンセ



『あぎなるど』166頁

b 年代不明

山田美妙『(比律賓独立戦話) あぎなるど』後編244頁の次(内外出版協会1902.9.30/12.12再版/中公文庫1990.8.1)に収録。「香港に着したるアギナルドの一行」と題した集合写真がある。その右肩にポンセのみ枠中に示される。

また同書に収録された「比律賓の亡命志士 その一人 マリアアノ、ポンセ氏」という文章は、『南洋之風雲』所収の「ドン、マリアーノ、ポンセ」と基本的に

同じである。

c ポンセ（和服）と孫文



同じ写真について別の説明がある。1899年ではなく1901年1月とする。横浜でフィリピン独立軍代表ポンセ（彭西）と。これはネットの説明。

ポンセお清の証言をくり返す。「ポンセは日本に長く在住して居りましたし日本好きでしたので（日本語が）大層上手でしたから不便はありませんでした、衣服も妙高寺山の実家に居た頃は日本のキモノ許り著てみましたし日本食は何でも好んで食べました」

ママ  
1899年 孫文と 横浜ポンセ宅にて  
(Pichoriサイトより)

d 孫文、アメリカ人記者とポンセ



1901年 孫文が日本でLook誌の記者に会う（ネットから引用）

写真の説明には惠州起義（注：1900年）の状況を聞いているとある。右から孫中山、リンチ（G. Lynch 漢訳：林奇）、後ろ右にポンセ（Mario Ponce 漢訳：彭西）など。典拠は上海孫中山故居紀念館編『孫中山——紀念孫中山先生誕辰130週年』（上海人民出版社1996.10。未見）だ。

疑問がひとつある。どう見ても写真cの孫文とポンセの服装と一致している。すると写真cは写真dと同じく1901年1月に撮影したものだろう。

## 8 来日以前のマリアノ・ポンセ

以下は「ドン、マリアーノ、ポンセ氏伝」（『南洋之風雲』1・5頁所収）による。固有名詞は原文のまま。

1867年3月24日（一説に1863.3.23）、フィリピン、ルソン島ブラカーン州バリワッグに生まれる。十九歳の時、著作 *Folk Lore Bulakeno*（ブラカーン俗話）を書く。1886年、スペインのバルセロナ大学に留学、のちマドリッド大学へ遊学する。スペインによるフィリピン群島への抑圧と圧制を著述した『比律賓史考 *Efemerides Filipinas*』がある。1889年、スペイン・マドリッド在住のフィリピン志士と『連帯責任 *La Solidaridad*』を発行し編集長をつとめる。1896年、スペイン政府より発行禁止を命令される。「社長はマルセーロ、イラーリオ、デルピラール氏にしてホセー、リザール及アレートーニオ、ルーナの二氏専任編輯員たり」（3頁）。1894年、「西班牙時代以前に於ける比律賓群島文明史考究の資料」という論文を書く。1896年8月、フィリピン群島の革命戦争起こる。ポンセはスペインよりフランスに逃れ、同年10月香港に到着、亡命者たちと「比律賓群島革命期成会 *gunta Revolucionaris de Filipinas*」を組織した。1897年12月、フィリピン人とスペイン人とのあいだにビアック、ナ、バトー媾和条約が締結され革命の統領アギナルド將軍は部下の將校40余名を引率して香港に渡航、在香港の志士と比律賓委員会（*Comit Filipino*）を組織しポンセを書記長にする。その後、アメリカ、スペイン戦争によるフィリピン独立戦争が再燃し、1898年8月、ポンセはフィリピン政府の代表者として日本に派遣された。

## 9 漢訳に対する疑問

ボンセが該書を書いた目的は、フィリピンが直面している状況を日本人に理解してもらいたかったからだ。第1章「緒言」に「余は真心余の敬愛する日本人に望む、請ふ先づ余の本国の政治的社会的状態の真相を知悉せられんことを、而して之を知らんとするに当り決して故意に事実を抹殺し正当の判断を失はしめんとするを目的とせる書籍に據るなからんことを」（4頁）とある。

そういう著者の希望を無視して漢訳がその本体そのものを削除したのはなぜであろうか。附録の「志士列伝」のみを取りあげて翻訳した理由が不明である。推測すれば漢訳者の呉超は、ボンセを本西と訳すなど彼との面識を有していたらしい。だからこそ不可解さを感じるのだ。

以上のような疑問は残る。該書の全訳は、『飛獵濱（菲利濱）独立戦史』『南洋風雲』へと続く。

### 【注】

- 1) 張於英（阿英）『学林』第6輯1941.4掲載。略号は〔阿学〕。数字は頁数。以下同じ／張静廬輯注『中国近代出版史料初編』上海上雑出版社1953.10所収。略号は〔阿辛〕／阿英『晚清文藝報刊述略』上海古典文学出版社1958.3所収。略号は〔述略〕。樽本注：同じ目録のはずだが〔述略〕にはいくつかの作品が未収録。
- 2) 鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』復旦大学2013 博士論文
- 3) 馬泰来「無中生有的最早林訳《葛利佛利葛》」『清末小説から』第86号 2007.7.1
- 4) 張曉編著『近代漢訳西学書目提要 明末至1919』北京大学出版社2012.9
- 5) 国立国会図書館デジタルコレクションの『官報』につきのような記録がある。  
賜三級俸 外務省翻訳官 宮本平九郎 『官報』第4984号 1900.2.15  
叙従六位 正七位 宮本平九郎 『官報』第4986号 1900.2.17  
依願免本官 外務省翻訳官 宮本平九郎 同上  
宮内省御用掛被仰付 休職外務省翻訳官補 藤田季荘 『官報』第5060号 1900.5.18

- 宮内大臣官房勤務ヲ命ズ 宮内省御用掛 藤田季荘 同上  
任事部官 休職外務省翻訳官補 藤田季荘 『官報』第5583号 1902.2.17
- 6) 宮崎滔天著、島田虔次、近藤秀樹校注『三十三年の夢』岩波文庫青122-1、1993.5.17  
／参照：白浪庵滔天（宮崎寅藏）『三十三年の夢』国光書房1902.8.21（扉は白浪庵滔天  
『三十三年之夢』）国立国会図書館デジタルコレクション
- 7) (日) 宮崎滔天著、佚名初訳、林啓彦改訳、注釈『三十三年之夢』広東・花城出版社、  
生活・読書・新知三聯書店聯合出版1981.8
- 8) 「事項三一 布引丸一件 五六二」『日本外交文書』879-880頁 国立国会図書館デジ  
タルコレクション
- 9) 「事項三一 布引丸一件 五六八」前出『日本外交文書』887-888頁
- 10) マニラ本社特置員・磯海国敏「日支比間の国際秘話／ボンセお清物語／比島革命政府  
の重任を帯びて来朝／当年の志士ボンセ博士」『台湾日日新報（新聞）』1934.3.4-9 神  
戸大学経済経営研究所・新聞記事文庫・政治（48-131）電字版。磯海国敏がフィリピン  
でスペイン風の邸宅に子どもたちと住むボンセお清にインタビューした記事。同行した  
のは万里野平太。マニラ日本総領事館井沢副領事の筆名（『国民新聞』1933.5.4 神戸大  
学経済経営研究所・新聞記事文庫・東南アジア諸国（7-064））
- 11) 国立国会図書館デジタルコレクションではルビは「ほんくん」。

#### 【参考文献】

- 宮崎滔天『支那革命軍談』法政大学出版局1967.9.10
- 木村 毅『布引丸——フィリピン独立軍秘話』春陽堂1944初版未見／恒文社1981.9.30
- 戚 志芬「孫中山和菲律賓独立戦争——中菲友誼史上的一頁」『近代史研究』1982年第4期  
1982.10 電字版
- 波多野勝「フィリピン独立運動と日本の対応」『アジア研究』第34巻第4号 1988 電字版  
—— 『満蒙独立運動』PHP新書144 2001.3.1
- 兪 辛焯『孫文の革命運動と日本』六興出版1989.4.10 「東アジアのなかの日本歴史」9
- 早瀬晋三「フィリピンをめぐる明治期「南進論」と「大東亜共栄圏」」『重点領域研究総合  
的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラ  
ダイムを求めて』27 1996.11.30 電字版
- 小坂文乃『革命をプロデュースした日本人』講談社2009.11.23

## 瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の嘘

『清末小説から』第125号（2017.4.1）に掲載。瀬戸宏『中国のシェイクスピア』（2016）において展開された林紘批判を検討する。瀬戸博士は「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と書き、林紘がまるで詐欺を働いたかのように説明している。これは事実にもとづかない妄想である。「林紘を詐欺師に認定し林紘の名誉を毀損する瀬戸博士」の面目躍如といったところだ。「附録」としてアマゾン日本（Amazon）カスタマーレビューを収録する。本稿と同趣旨で文字数を圧縮したもの。

林紘は戯曲を小説体に変えて翻訳した。これが従来からあった林訳批判の主要な根拠だ。林紘は戯曲と小説の区別をつけることができない（「区別がつかない論」）。それほど無知だといって痛罵され続けた。銭玄同と劉半農が開始し、胡適が追認し、鄭振鐸が決定づけ、阿英が強調した。中国の学界はその見解を公式に維持し続けている。中国現代文学史の諸版を見ればそれが納得できる。

しかし林訳の底本はシェイクスピア戯曲ではない。戯曲を小説に書き直したラム姉弟、クイラー＝クーチ（Qと称する）の著作なのだ。イプセンの戯曲はドレイコット・M・デルが小説化している。小説を漢訳して小説になるのは当然である。戯曲を小説体に変えて翻訳したと林紘を批判する根拠が崩壊する。なによりも林紘の文章を読めば彼自身が戯曲と小説をはっきりと区別していることがわかる。

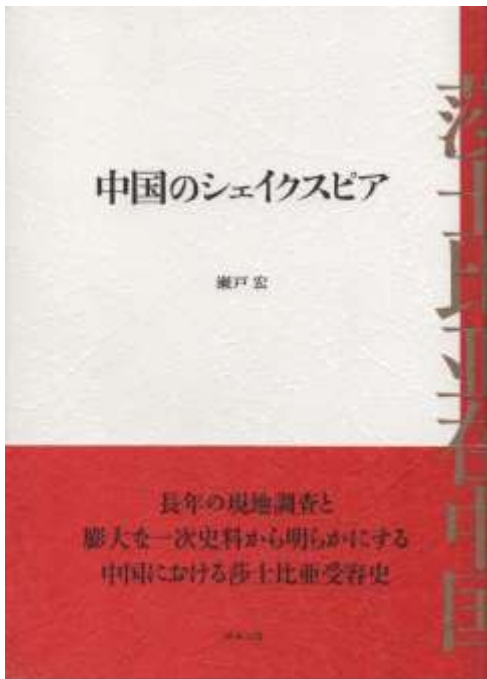
林紘はやってもいないことをやったと批判されてきた。明らかに冤罪である。21世紀のはじめまで長期間にわたって濡れ衣を着せられてきたというのが歴史



的事実だ。

しかし瀬戸博士はどうしても林紘を批判攻撃し一方の銭劉胡鄭阿らを擁護支持したいらしい。そこで「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と語句をつくり林紘がまるで詐欺を働いたかのように説明した。それを理由にして林紘批判を継続している。

無実の罪を着せられた被害者林紘が、瀬戸博士によって銭劉胡鄭阿らを誤解錯覚させた「詐欺師」になる。被害者が反対の加害者に認定される。それは林紘を批判した銭劉胡鄭阿らが加害者から被害者に成りすますことを意味する。被害者へ「昇格」するらしい。被害者であればどのように林紘を批判し罵っても許されるというのが瀬戸博士の理屈だ。



瀬戸宏『中国のシェイクスピア』（2016）\*1において瀬戸博士が展開した林紘批判について3点を指摘する。

## 1 シェイクスピア原作である

なによりも注目すべきことがある。林紘、魏易共訳『英国詩人吟辺燕語』（1904）

に掲げられた林「序」だ。その「序」を読めば、シェイクスピア作品が戯曲であることを林紘は明確に理解している。彼は戯曲と小説を厳密に区別して語句を書き分けている。「区別がつかない論」はもとから成立しない。林紘は底本の小説を小説として漢訳しただけだ。

「区別がつかない論」を主張する人は、林「序」を真摯に読んでいないといわざるをえない。文学革命派に反対した保守派の代表者だと林紘のことを最初から色眼鏡で見ているから誤読する。私の知る限り、銭劉胡鄭阿らはもとより後の中国、香港、台湾、欧米、日本の研究者で林「序」をあるがまま正確に読んだ人はいない。林紘は戯曲と小説の区別をつけていないとする結論が先にある。先入観（色眼鏡）をもって林「序」を読むから林紘が書いたことを理解することができない。阿英も「区別がつかない論」を林「序」に当てはめたから誤読した。そうなるのは必然だった。銭劉胡鄭阿らの主張が現在でも中国学界の主流なのだ。大多数の研究者がそれに追従している。例外がないことに私は驚いた。

瀬戸博士はそういう人たちの中のひとりだ。中国学界で公認されている既成の結論にはじめから追従しているから林紘「序」を読んだが理解することができなかった。自分の立論に不都合な記述は曲解した。林紘は戯曲と小説の区別がつかないという「区別がつかない論」を堅持した。それを基礎にしてすべてを解釈した。新しく「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と言いかえてそれをくりかえし書いている。

関連する箇所を引用する。

林紘は、シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである。96頁

シェイクスピア、イブセン作品ではなくなったものをシェイクスピア、イブセン作品として紹介した林紘 97頁

戯曲を小説化したもの、すなわちシェイクスピア作品ではなくなったものをシェイクスピア作品そのものとして翻訳紹介した事実は変わらない。101頁

同時に林紘がシェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として翻訳紹介したのも事実であり 107頁

瀬戸博士が上のように主張する根拠はひとつだけだ。以下のとおり（下線は筆者）。

林紓は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず、依拠した底本の著者を記さず、これが鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因となった。106頁

「林紓は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず」という見解を林紓がラム姉弟、Q、デルの名前を出さなかった点に直結させた。「区別がつかない」から底本著者の名前を出さなかった。その逆も成立するというのが瀬戸博士の理屈だ。

何度もいうが『英国詩人吟辺燕語』の「序」において林紓は戯曲と小説を区別している。それが事実だ。瀬戸博士は林「序」の日本語訳を提示した。読んだことはわかる。しかし内容は理解できなかった。あるいは自説に不都合な部分は無視した。

私は日本現代中国学会2008年度関西部会文学分科会において林「序」のなかの語句複数を具体的に示し、その内容を説明するよう瀬戸博士に対して直接要求したことがある。林紓は区別がつかなかったのか否かそれを判断するための重要語句である。瀬戸博士はあいまいな回答に終始した。多数の参加者が目撃している。私がある場で林紓が区別をつけていたと解答を示したにもかかわらず瀬戸博士の文章にはそれが反映されていない。あいかわらずあいまいな訳語をつけたまま平気である。平気というよりもわざとそうしているのだろう。林紓が戯曲と小説の区別がつかないというために意図的にあいまいにしていると思われる。「自説に不都合な部分は無視した」「あるいは自分に不都合な記述は曲解した」という理由だ。

ラム姉弟の名前を出さないことは、批判の根拠にはならない。ましてや「区別がつかない」の論拠にもならない。ほとんど同時に刊行されたもうひとつの漢訳シェイクスピア物語がそれを証明している。

『海外奇譚』の訳者（名前不記）は、「<sup>ママ</sup>海外奇譚叙例」において原書が「詩体」

でありラム（蘭卜）が散文に書き直したと明記している。しかし、表紙には「英国索士比亜著」と示してシェイクスピアのみを掲げるのだ。



『海外奇譚』影印本

清末民初時期の翻訳には原作者名を示さないことが多かった。漢訳者の名前すらないものが存在する。原作も不明な作品はいくらでもある。それが当時の翻訳界の実状である。研究者ならば誰でも知っている常識とっていい。

原作、原作者、訳者のすべてを明示すべきだというのが現在の常識であれば、それをもって過去を裁断するのは誤りだ。ラム姉弟の名前を出さずシェイクスピアだけ押し出すのは当時の常識でいえば別に珍しいことでもない。ラム姉弟の名前がないから「林紓は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず」と瀬戸博士は短絡する。文学史についての知識がないことを自分から進んで白状してどうするのか。

林紓が「序」において戯曲と小説を区別している事実を無視する。事実にもとづかない妄想を瀬戸博士は書き連ねているだけだ。そればかりか林紓のことを指して鄭振鐸らを誤解錯覚させた（はっきり書けば、騙した）「詐欺師」だと認定する。林紓を加害者に仕立て上げた。事実に基づかない瀬戸博士の書き方は悪質である。

瀬戸博士の主張する「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」は、その内容を詰めていくとおかしなことになる。

林紘の底本はもとから小説なのである。ゆえに戯曲を小説にしたという従来の批判が成立しないことは瀬戸博士にも理解できたらしい。奇妙なのはその上で、林紘は戯曲と小説の区別ができないと従来どおりの主張をくり返すところだ。底本の著者名を出さなかったことだけを根拠にした。林紘が戯曲と小説の区別ができないからラム姉弟とQの作品をシェイクスピア作品として紹介したという。瀬戸博士はいかにも林紘が「詐欺」をはたらいたという印象をあたえるように表現だけを創出した。新しい資料はなにも提出せず、既存の資料をこねくりまわしそういう風に言いかえるのが瀬戸博士の行なっている研究であるらしい。言葉をもてあそぶだけ。林訳批判という結論が先にあって（色眼鏡）すべてそれにあわせて立論するのが現代中国学界では普通のやり方だ。そういうところも瀬戸博士は追従している。

「シェイクスピア作品ではない」というのであれば、シェイクスピアと同時代のベン・ジョンソンの作品とかだと思うだろう。他人の作品をシェイクスピア作品だといって紹介したのであれば林紘を「詐欺師」だといってもいい。またシェイクスピア作品に基づかないラム姉弟、Qの別作品をシェイクスピア作品として紹介したのならば「詐欺師」でもかまわない。念のためにいえば、瀬戸博士は「詐欺師」という単語は使用していない。わざわざ「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」ともってまわったいい方をする。その意図は「詐欺」という単語を使用せず「詐欺」を想起させようとするところにある。自分はその単語は使っていないと言い逃れるつもりだ。

シェイクスピア戯曲に基づいて小説に書き換えたラム姉弟、Qの作品は「シェイクスピア作品ではないもの」のだそうだ。ここに言葉のごまかしがある。

ラム姉弟、Qのシェイクスピアものはシェイクスピア作品そのままではないことは当然だ。小説に書き換えたのだから。しかしシェイクスピア作品から完全に独立した別物であるかのように説明するのは正しくない。もともとシェイクスピア作品だからこそ書名にシェイクスピアを使用している。シェイクスピア原作であることには違いはないのだ。それを「シェイクスピア作品ではないもの」と書い

でシェイクスピアとは無関係でまったくの別物のように印象づけようとしている。悪意のある書き方だと私は考える。近松門左衛門作品（96頁）についても同様だ。

シェイクスピア作品は小説に書き直してもシェイクスピア原作であることは揺るがない。シェイクスピアの名前と切り離しては存在しえないのだ。

## 2 二重基準である

瀬戸博士は林訳シェイクスピアについて「詐欺」を匂わせて批判する。しかしその林訳『吟辺燕語』にもとづいて勝手に台詞を創作した文明戯に対しては、紹介はするが問題視はまったくしない。

瀬戸博士の文章を引用する。

文明戯『肉券』はその幕表の冒頭に「是劇出自英国文豪莎士比亚所著」とあるように、シェイクスピアから出た作品であるという自覚をもっている  
77頁\*2

「自覚をもっている」どころではない。当時の書籍に莎士比亚と明記している。時期的にいえば林紘批判が始められる前である。

范石渠原著、趙驥校勘『新劇考』（1914／2015）\*3の「《肉券》本事」から引用する。翻訳するまでもない。

是劇出自英国文豪莎士比亚所著，林琴南及白萃所訳之《吟辺燕語》…… 41  
頁

林訳の共訳者は魏易だ。なぜか白萃と誤記している。ここにラム姉弟の名前はない。シェイクスピア（莎士比亚）だけだ。

もうひとつ、鄭正秋編、趙驥校勘『新劇考証百出』（1919／2016）\*4の346頁「西洋新劇」にも「肉券 莎士比亚名著 冥飛」とある。ここにもラム姉弟の名前はない。『英国詩人吟辺燕語』にもとづいた文明戯全篇は莎士比亚だけを掲げてい

る。

シェイクスピア戯曲をラム姉弟が小説化した。その小説を底本にして林紓たちが漢訳する。その漢訳にもとづいて勝手に脚本をつくったのが文明戯「肉券」である。

瀬戸博士は次のように説明する。

（文明戯「肉券」の）脚色者がシェイクスピア『ヴェニスの商人』を知らず、観客もまた同様であったことは間違いない。78-79頁

結局、文明戯『肉券』は、端的に言えば、あらずじと人名はシェイクスピアから借りているが、内容は実質的に中国の劇なのである。80頁

実際には、文明戯劇団は『吟辺燕語』諸編を上演する際、脚色という作業を経なければならなかった。そして上演舞台は、第一章でみたようにシェイクスピアの元の作品とは大きく異なったものとなったのである。96頁

文明戯「肉券」はラム姉弟の名前を提示していない。林訳にもとづき自由に脚本をつくった。シェイクスピア戯曲とは直接の関係がない。それをシェイクスピア作だと書籍に記述している。

包天笑が林紓の「肉券」を改編して「女律師」（1911）を作った。瀬戸博士はそれを以下のように説明する。「林訳『肉券』に基づき包天笑が脚色したものであることがわかるが、包天笑『女律師』は『ヴェニスの商人』の忠実な圧縮ではない」（74頁）

包天笑も莎士比亞著とだけ記す。これが実際に上海で上演された時、1914年7月15日付『申報』に「《女律師》為莎士比亞名劇」だと広告している\*5。

瀬戸博士説にしたがえば、これらこそ「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と痛罵すべき箇所だ。文明戯の関係者も「詐欺師」に認定しなければ主張の一貫性を保つことができない。しかし瀬戸博士は林紓は批判しても文明戯については知らぬ顔を決め込む。これはまぎれもなく研究における評価の二重基準である。自分を研究者だと考えるのであれば二重基準の採用は致命的な欠陥だ。

### 3 責任問題

研究者の責任問題について瀬戸博士は「本論文発表も、筆者なりの責任の取り方の一端である」(107頁)と書く。「責任の取り方」とあるくらいだから林紓に濡れ衣を着せた責任を感じているのかと思う。

瀬戸博士は、Q本、デル本が林訳の底本であることを知らなかった。演劇に関する事柄であるにもかかわらず、「中国現代文学演劇研究の末席に連なっている」(317頁)瀬戸博士がなぜ自分の手でそれらを明らかにできなかったのか。あるいは林紓批判について中国学界で認められた定説に疑問も持たず追従してきたのは正しかったのか。そう自らの不明を恥じてこれまでの事大的研究姿勢を反省し外に向かって表明するのが一般的で常識的な「責任の取り方」ではなかろうか。ところが瀬戸博士は違う。彼は責任を取らないし反省もしない。自分が誤解錯覚したのは林紓に原因があるからだと考えた。自らの無知を棚にあげ林紓に責任を転嫁し瀬戸博士は被害者に成りすました。悪いのは他人ということにした。それをそのまま過去の銭劉胡鄭阿に向けて投影した。どこが「筆者なりの責任の取り方」なのか。論理的な整合性が皆無だ。不可解で不思議な思考法だといわなくてはならない。

瀬戸博士は事実にもとづかず根拠もなく従来よりも一層激しく林紓を批判した。これが瀬戸博士の「筆者なりの責任の取り方」だそうだ。「責任の取り方」の意味が普通とは正反対である。常識をこえている。奇妙なことこのうえない。

私はすでに指摘している。「区別がつかない論」を口にした瞬間、その人の無知を射抜く。瀬戸博士はそれを認知できなかった。さらには、評価において二重基準を採用しその論文をはばかりことなく公表してもいる。研究にとって致命的欠陥があるという認識がない。さすがに私がいうところの「林紓を詐欺師に認定し林紓の名誉を毀損する瀬戸博士」だけのことはある。面目躍如といったところだw



【注】

- 1) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29
- 2) 瀬戸宏「文明戯「肉券」について」（『中国文芸研究会会報』第54号1985.7.30）16頁。  
「文明戯「肉券」はその幕表の冒頭に「是劇出自英国文豪莎士比亚所著……」とあるように、シェイクスピアから出た作品であるという自覚をもっている。「シェイクスピア」と表記する。また「……」を使用する。  
瀬戸宏『中国話劇成立史研究』（東方書店2005.2.25）128頁では「文明戯『肉券』はその幕表の冒頭に「是劇出自英国文豪莎士比亚所著……」とあるように、シェイクスピアから出た作品であるという自覚をもっている」というように「……」を使用する。
- 3) 范石渠原著、趙驥校勘『新劇考』上海・中華図書館1914.6／上海・文匯出版社2015.10  
復刻本による
- 4) 鄭正秋編、趙驥校勘『新劇考証百出』上海・中華図書集成公司1919.4.10／北京・学苑出版社2016.1影印本による
- 5) 范石渠原著、趙驥校勘『新劇考』162頁の注1

【附録 書評】

瀬戸宏『中国のシェイクスピア』（アマゾン日本）

アマゾン（Amazon）日本のカスタマーレビュー（2017.3.5）に投稿し掲載された。題名は「瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の嘘」。アマゾン中国にも同趣旨の漢訳（「瀬戸博士所說的“不是莎士比亚作品的文章”是谎言」2017.5.8）を投稿しこれも掲載されている。漢訳は本書には収録しない。漢語レビューについての動向は「あとがき」で少し触れる。文末の「追記」を参照のこと。

林訳小説で著名な林紘（りんじょ）は、戯曲と小説の区別がつかないほど無知だった。シェイクスピア戯曲を小説にかえて漢訳した。イブセン戯曲を小説にして漢訳した。中国学界ではそう批判して百年近くも林紘を罵り続けている。日本の学界も含めて世界の研究者が追随して例外がない。

しかしそれは事実ではない。ラム姉弟、クイラー＝クーチ、ドレイコット・M・デルらが戯曲を小説化している。それらの小説を底本にして漢訳すれば小説になる。林紘らに落ち度はない。劉半農と銭玄同が開始し、胡適が追認し、鄭振鐸が決定づけ、阿英が強調した林紘批判だった。しかし劉半農らは小説化された底本があることを知らず探しもせず林紘を批判したのだ。戯曲を小説化したとやってもいないことを理由に批判されたのだから林紘にしてみれば冤罪だ。中国学界は林紘とその後裔に謝罪して当然である。

ところがこのたび瀬戸博士は、林紘はやはり戯曲と小説の区別がついていないと重ねて主張する。その根拠はラム、クイラー＝クーチの名前を出さずにシェイクスピアのみを前面に押し出したことだ。戯曲と小説の区別がつかないから「シェイクスピアではない作品をシェイクスピア作品として紹介した」と批判する。瀬戸博士は林紘に騙されて誤解したというわけだ。林紘が書かなかった底本を調べるのが研究者の仕事のはずだ。ところが瀬戸博士は自分で底本を探さず、林紘が正確に記述しなかったから自分が間違っただけではないかと難癖をつけた。瀬戸博士は自分の不勉強を棚に上げ林紘に責任転嫁した。それをそのまま劉半農らに投影し林紘を批判した彼ら（瀬戸博士を含む）加害者は被害者に成りすました。被害者の林紘は加害者に転落する。被害者は加害者林紘をどのように批判し罵ってもいいらしい。ここには不明な林紘の底本を自分で探し出そうという真摯な研究姿勢は見られない。中国学界が公認する林紘批判にどこまでもついていこうとする事大的研究があるだけだ。林訳『英国詩人吟辺燕語』（ラム作『シェイクスピア物語』）の「序」を読めば、林紘が戯曲と小説を厳密に区別していることがわかる。瀬戸博士はあらかじめ下した「区別がつかない」という結論に適合させるために、わざと語句を曖昧にして日本語訳するという小細工まで弄している。林紘が区別をつけることができないと思わせるように印象操作する。

もうひとつは評価の際に二重基準を採用することだ。瀬戸博士が専門とする文

明戯は小説である林訳にもとづき勝手にセリフを作って上演した。これこそ「シェイクスピアではない作品をシェイクスピア作品として紹介した」ことになる。だが、瀬戸博士は林紓批判はしても文明戯については批判をしない。この評価における二重基準は研究者としては致命的な欠陥だ。自爆をしている。「林紓を詐欺師に認定し林紓の名誉を毀損する瀬戸博士」は研究者としての生命はもはや、ない。

私が今まで読んできた漢訳シェイクスピア関係の論文のなかで、瀬戸博士のものは最悪最低である。税金から研究費を支給してもらい、税金から刊行費用までだしてもらったことに私は納得しない。マイナス5という評価がないので1とする。

**【2018.5.6追記】** アマゾンの読者書評に投稿した(2017.3.5)本稿は気がついてみると削除されている。星5として再度投稿する。

**【2018.5.8追記】** 本カスタマーレビューはアマゾンから再度削除された。現在はアマゾンで見ることができない。

## 瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の事実

清末小説研究会ウェブサイト（2018.1.19）に掲載。「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」。瀬戸博士が林紓を批判して表現する文句だ。これは使用する相手を間違えている。事実は逆である。林紓を批判した人々に使うのがふさわしい。

「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」  
（瀬戸宏『中国のシェイクスピア』2016）

瀬戸博士はこう書いて林紓を批判する。

「シェイクスピア作品ではないもの」とは、ラム姉弟『シェイクスピア物語』とクイラー＝クーチ（以下Qと略す）が莎氏歴史劇を小説化した複数の作品を指す。

林紓は底本としたラムとQの名前を出さなかった。漢訳イブセンのドレイコット・M・デルも同様だ。瀬戸博士によるとそれが林紓批判者たちの誤解、錯覚を引き起こしたという。劉半農、鄭振鐸らは林紓に騙された人々になる。錢玄同、胡適、阿英たちも犠牲者だ。瀬戸博士を含む研究者全員を欺いた責任はすべて林紓にある。瀬戸博士の見解ははっきりしている。林紓は「詐欺師」だという意味だ。

文明戯シェイクスピアも同じくラムの名前を出さない。それどころかラム本の林訳から台詞は創作した。だがこれについては博士独自の論理を適用しない。瀬戸博士の基準によれば、文明戯関係者は「詐欺師」ではないらしい。これを評価の二重基準という。

私は次のように書いた。「瀬戸博士は林紓批判はしても文明戯については批判をしない。この評価における二重基準は研究者としては致命的な欠陥だ。自爆をしている」

従来は濡れ衣を着せられた林紓を中心に述べてきた。本稿は林紓批判派の立論について紹介する。以前と重複する部分がある。ご了解いただきたい。

おさらいをする。

中国において劉半農と鄭振鐸が代表する林紓批判派（文学革命派）は、林紓が「戯曲と小説の区別がつかない」と主張してそこに批判の論拠のひとつを設定した。「区別がつかない論」を掲げる目的は林紓が文芸について無知であることを強調するためだ。当時「現代の文豪 [當代文豪]」と称賛された林紓は無知だと非難したかった。

「戯曲と小説の区別がつかない」の表現を変えたのが瀬戸博士の上記「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」だ。「シェイクスピア作品ではないもの」がラム本、Q本を指す。「シェイクスピア作品」はそのまま莎劇である。

瀬戸博士の言いかえには、実は重要な意味の変更がある。林紓に対する見方の強引な歪曲だ。中国の文学革命派が主張していた林紓の無知は姿を消す。瀬戸博士は、林紓は無知ではなく意図的に漢訳底本の作者を隠蔽したというのだ。そこには林紓に対する瀬戸博士の強い悪意が表出している。

瀬戸博士がそのようにわざわざ言いかえた意図は、林紓を「詐欺師」に認定するためだ。林紓は積極的に読者、研究者を騙した。今までの研究者は林紓を無知であると批判して林紓に対しては加害者であった。しかし林紓は嘘をついていたということに転換させる。虚偽であるものを読者、研究者にわざと提供したと断定する。読者、研究者の全員は林紓に騙されたことにする。その瞬間に林紓を批判していた研究者は加害者から被害者へと変身する。瀬戸博士は林紓に騙された被害者のひとりだから何を言っても許されるという認識だ。被害者は加害者よりも精神的な優位に立つらしい。奇妙な論理だと思う。しかし瀬戸博士ご本人がそう固く考えている。文章を読めばそうなる。

まとめる。

事実はひとつだ。林訳ラム本にはラムの名前はない。この事実を中国の文学革命派は林紘の「無知」だと批判した。ところが日本の瀬戸博士は、林紘が「詐欺」を働いたと強調した。瀬戸博士の悪意が全開している。

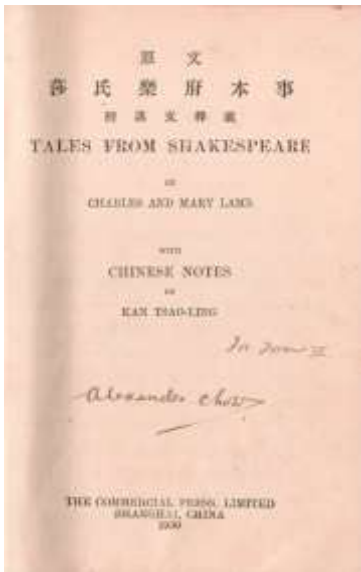
## ラム本のばあい

なんどでも振りかえる。

王敬軒（錢玄同）と劉半農が組んで展開したのが「なれあいの芝居 [双簧戲]」だ。手紙による問答の形で『新青年』第4巻第3号（1918）に掲載した。そのなかで林紘批判の根拠として具体的に提出した作品のひとつが林訳『吟辺燕語』だ。ラム姉弟『シェイクスピア物語』を底本にしたが、林紘はラム姉弟の名前を出さなかった。当時の翻訳習慣からすれば別に特異なことではない。だが錢玄同と劉半農はそこをつかんだ。林紘は「豆と麦の区別もつかない [不辨菽麦]」。莎劇を小説に書き換えて翻訳したと批判する原型を提示した。長年言われてきているから周知のことだろう。

錢玄同と劉半農は北京大学教授だ。ふたりともに『吟辺燕語』の底本がラム本であったことを知らないはずがない。

林訳批判が提出される以前から、中国においてラム姉弟『シェイクスピア物語』の原文は広く流布している。読む気があれば普通に英語で読むことができた。



扉



奥付

英語学習用に刊行されている。拉穆著、平湖甘永龍註訳『原文莎氏樂府本事附漢文釈義』（上海・商務印書館1910）である。「莎氏」はシェイクスピア、「樂府」が戯劇、「本事」は物語。訳せば「シェイクスピア戯劇物語」となる。

北京大学の学生でさえ『吟辺燕語』がラム本を底本にしていることを知っていた（『吳宓日記』1911年分）。

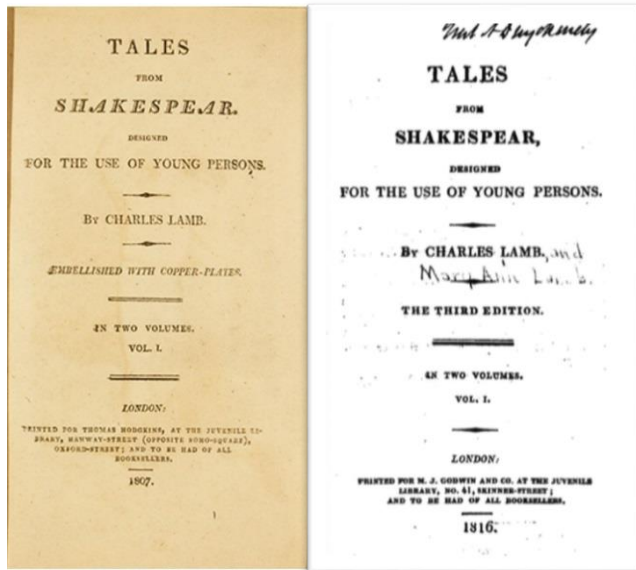
また莎劇についての評論も発表されている。東潤（朱世溱）「莎氏樂府談」（『太平洋』第5-9号、1917-1918）という。そこでは林訳『吟辺燕語』への言及がある。

中国におけるラム本については、そういう周囲の状況だった。『吟辺燕語』にラム姉弟の名前がなくとも底本がラム本であることは中国の知識人であればわかっていたはずだ。

銭劉ふたりの「なれあいの芝居」に続いて登場したのはこれも北京大学教授の胡適だった。胡適も銭劉にならって知らぬ顔でわざわざ林紘を批判した。『吟辺燕語』について発言しているのは確実だ。

林琴南はシェイクスピア [Shakespeare] の戯曲を記述体の古文に翻訳した！これは本当にシェイクスピアにとっての大罪人である。

林琴南把 Shakespeare 的戯曲訳成了記叙体的古文！這真是 Shakespeare 的大罪人。「建設的文学革命論」『新青年』第4卷第4号



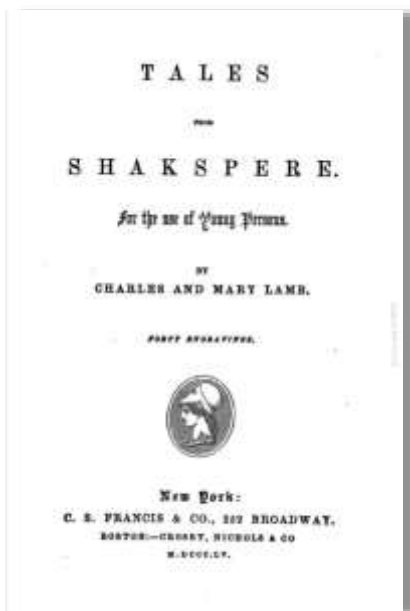
Shakespeare

新青年  
 案譯者之上。  
 林琴南把 Shakespeare 的戯曲，譯成了記叙體的古文！這真是 Shakespeare 的大罪人，罪在圓室。  
 怒，拂袖而起。不知道這位偵探穿的是不康橋大學的廣袖制服！這樣譯書，不如不譯。又知  
 （第四卷第四號）  
 三〇六

瀬戸博士は「胡適の文学素養からみて『シェイクスピア物語』を知らなかったとは考えにくい」(99頁)と書く。「考えにくい」どころか胡適が記述した **Shakespear**<sup>ママ</sup> という綴りはラム本に見られる。胡適が示したのはラム本にほかならない。

瀬戸博士は「ここでの記述は一九一六年『雷差得紀』以下の翻訳を指しているのであろう」(99頁)と説明してQ本を示唆する。しかし、該書の書名は『**HISTORICAL TALES FROM SHAKESPEARE**』だ。胡適が示した **Shakespear**<sup>ママ</sup> ではない。アメリカ留学帰りの北京大学教授胡適が間違える箇所ではないだろう。

ラム本シェイクスピアの綴りにはいくつかの種類がある。「海外奇譚叙例」に書かれているのは「**Tales From Shakspere**<sup>ママ</sup>」だ。研究者のひとり(宋莉華を指す)が、**Shakspere** は誤りだと書いて漢訳者の無知を嘲笑した。実際にそう綴るラム本が存在することを知らない。



<sup>ママ</sup>  
Shakspere

文学革命派は、ラム本の存在を知りながらラムの名前がないことをテコにして林紓を批判した。その根底には林紓を無理矢理保守派の代表者に指名し何がなんでも批判するという明確で強い意図が存在する。

この事実を瀬戸博士が示した語句を使用して説明しよう。

文学革命派は林訳『吟边燕語』が「シェイクスピア作品ではないもの」だと知っていた。知ってはいたが林紓がラムの名前を出さなかったことに便乗してそれ



「をシェイクスピア作品として紹介した」といって林紘を批判した。

瀬戸博士が林紘を「詐欺師」だと非難するために作り出した語句は、文学革命派に対して一層適合して当てはまる。文学革命派は林紘とは異なり意図的に知らぬ風を装った。ラム名がないことをわざと林紘批判の根拠にしたのだ。瀬戸博士は自分の語句を林紘ではなく文学革命派にこそ献上すべきだった。そうすれば文学革命派の悪辣さをより明瞭にすることになっただろう。瀬戸博士にかわって私が実行した。

「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」を林紘に対して使用すれば、それは嘘になる。だが文学革命派に適用すれば事実となる。文学革命派こそがラム本、Q本という「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」人々であるからだ。

瀬戸博士の説明を文学革命派に対応させると、林紘には批判される理由がないことがわかる。瀬戸博士がどのように否定しようとも林紘冤罪事件なのだ。

## Q本のばあい

鄭振鐸は「区別がつかない論」を主張した中心人物だ。

林訳シェイクスピア、林訳イプセンは戯曲から直接漢訳して小説化したと彼は説明した。鄭振鐸「林琴南先生」（『小説月報』第15巻第11号、1924）である。文章は林紘を追悼する形をとっている。しかし鄭振鐸こそ「林紘にとっての大罪人 [林紘的大罪人]」にほかならない。

鄭振鐸は商務印書館に勤務し『小説月報』の編集長だった。林訳は1903年の『伊索寓言』から商務印書館がその多くを刊行し続けている。林訳は「説部叢書」に収録され、特別に集めて「林訳小説叢書」を出版した。林紘の死後も単行本は出版されている。林紘は商務印書館の創業者たちと深い人間関係で結ばれていた。その事実と背景を知っている読者、研究者は、鄭振鐸の文章が商務印書館の林紘に対する公式な態度表明だと受け止めたであろう。鄭振鐸は商務印書館の内部情報をにぎっているはずだ。林訳シェイクスピア、林訳イプセンに関しても表面に出てこない事実を知っているだろう。その彼が林紘について「区別がつかない論」を唱えるのだから決定的だといえる。誤りであるはずがないと誰もが思い込んだ。

だからこそ2007年に林訳シェイクスピアの底本がQ本であり、林訳イプセンの底本がドレイコット・M・デル本だとする指摘があるまで83年間にわたって研究者全員が鄭振鐸の誤りに気付かなかった。

鄭振鐸は自らの無知にもとづいて林紘を非難したのだ。鄭振鐸こそはまさに「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」といって林紘を批判した人物だった。

鄭振鐸が底本の存在を知らなかったのはしかたがないとは思わない。鄭振鐸を擁護支持するならばその研究者は中国学界の追随者だ。今までの林紘批判とかかわるところがない。だいいち林紘冤罪事件をどう考えるのか。

瀬戸博士は、林訳の底本が明らかにされたあとも林紘について「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と主張する。自爆しているという自覚がないのだろう。あいかわらず中国学界に事大して林紘批判の報告を行っている。

林紘をめぐる瀬戸博士の言説は、研究が政治に奉仕する中国学界では通用するかもしれない。しかし日本を含む学問研究の世界では無効なのである。

## 漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序・補遺

『清末小説から』第127号（2017.10.1）に掲載。前稿（『林紓冤罪事件簿（統合増補版）』所収）の補遺。林訳シェイクスピアの底本について新しい発見が2007年になされた。林紓が無実の罪であることを証明する。ところが中国学界においては現在にいたるまで林訳批判、林紓批判は継続されている。その理由は文学研究のわくを超えた政治判断が支配しているためであることをいう。欧米で発表、刊行された英文著作がある。ひとつは中国で英文のまま出版され、別の1種類は漢訳されている。林訳批判が世界を循環して正しくない評価が強化されているのが現状だ。

ラム『シェイクスピア物語』の初期漢訳2種類に関する問題である。

基本をいえば研究者の理解力が問われている。また2種類のうちのひとつは林紓冤罪事件につながる。中国現代文学研究に独特のものであり政治との関連で内情は複雑になる。同題前稿を補充する。重複する箇所があるがご了承いただきたい。

中国におけるシェイクスピア受容史は、具体的にはふたつの漢訳からはじまった。すなわち英国索士比亜著、漢訳者名不記『海外奇譚』（1903。刊年は未確認）および英国莎士比著、林紓＋魏易共訳『英国詩人吟辺燕語』（1904）だ（書誌の詳細は樽目録を参照のこと）。いずれも英文のラム姉弟『シェイクスピア物語』を底本とする。

それ以前はシェイクスピアの名前だけが多様な漢字を当てて伝えられていた。シェイクスピア戯曲（莎劇と称する）の漢訳が出現するのは1920年代になってか

らだ。日本よりも時間的にはずっと遅れる。

一方で英文ラム本は一部の人々に読まれてはいた。それが大きく変わるのは1903年あるいは1904年に漢訳ラム本が出現してからだ。より多くの読書人が知ようになる。当然ながら戯曲（莎劇）そのものではない。だが莎劇（詩）の概要を知るには有用であり特に林訳『吟辺燕語』は中国で広く読まれた。林訳が多くの読者に歓迎され普及したことは、商務印書館の「説部叢書」「林訳小説叢書」「小本小説」などに収録されているところからも理解できるだろう。

若い頃に『吟辺燕語』を好み影響を受けたと書く郭沫若の自伝はよく紹介される。後に莎劇そのものを読んだが『吟辺燕語』ほどには身近な物には感じなかったと述べた（『少年時代 [私の幼少年時代]』127頁）。

ところが中国の学界にはその初期漢訳について否定的に評価する傾向が定着している。漢訳ラムは作品として翻訳文学史上に大きな意味があるにもかかわらずだ。否定的に見るのは中国文学研究者だけにある独特の現象ではなかるうか。

いままで言われている大筋は次のとおり。

漢訳者たちはもとの戯曲を小説の形式に書き換えて漢訳した。戯曲と小説を区別することができなかった。

これが「区別がつかない論」だ。世界の研究者たち全員は、陰に陽に主として林紓をそう批判しつづけて約1世紀が経過した。

長年にわたり広く流布した言説だから深く考える研究者はいないのだろうか。あまりに奇妙な主張なので本当にそう考えて賛同しているのかと疑問に思わないでもない。

よく考えてほしい。ラム本は莎劇（詩）をもとにして書き直した小説なのだ。もとの小説を底本にして漢訳すれば小説にしかならない。どこに戯曲を小説に書き換えたとする余地があるというのだろうか。多くの研究者が知らぬ顔をするから不可解という。

林訳の底本がラム本だと把握しながら宋莉華は次のように書く。林紓は莎劇をまったく理解しておらず『吟辺燕語』はラム姉弟が書き換えたものだとは知らなかった\*1。つまりラム本を書いたのはシェイクスピアだと林紓は誤解していた。宋莉華は阿英の意見を取り入れてくり返している。これでは書きかえが問題では

なく、それ以前にシェイクスピアとラムの「区別がつかない」ということだ。ただ罵るだけ。このように林紘を貶め批判非難謾罵嘲笑することだけが続いている。

先に言っておく。漢訳2種類の序文を読めば、訳者たちが莎劇（詩＝シェイクスピア戯曲）とラム散文（小説）をはっきりと区別していることがわかる。研究者はどこを読んでいるのかと私は不思議に思う。

さらにいえば林訳シェイクスピアの底本はラム姉弟のほかはクイラー＝クーチが、林訳イブセンの底本はドレイコット・M・デルが小説化した作品である。小説を漢訳して小説になるのは当たり前だと再びいう。林訳を批判する研究者たちがクイラー＝クーチとドレイコット・M・デルがいたことを知らなかっただけ。批判の根拠となる事実はもとから存在しない。林紘はやってもいないことを理由に批判された。これを冤罪という。

基本的事実として重要だから重ねて指摘する。ふたつの漢訳ラムは、莎劇（莎詩といっても同じ）とラム散文を厳密に区別している。研究者がそれを読みとっていないのだ。ここまでは翻訳文学研究という範囲内の問題であると明記しておく。

## 1 林訳批判および林紘批判の本質

林訳『吟辺燕語』を根拠にして林紘批判という政治運動がはじまったのは1918年のことだ。漢訳刊行から14年後という長い時間が経過している。その間、清朝が崩壊し中華民国が誕生した。林紘の翻訳になにか不都合な箇所があれば誰かが指摘し問題を提起する時間的余裕は十分にあった。

たとえば林訳は底本がラム姉弟本であることを隠しているとか、戯曲を小説に書き換えて読者をペテンにかけているとか。14年間にそういう批判が提出されたであろうか。結論をいえば皆無である。底本を明らかにしないのは当時では珍しいことではない。また知識人は『吟辺燕語』がラム『シェイクスピア物語』であることを知っている。表立っていわないだけ。

なにしろ漢訳の書名が『英国詩人吟辺燕語』である。「英国詩人」はシェイクスピアを指す。「吟辺燕語」は戯劇物語を意味する。訳書名全体が『シェイクスピア戯曲物語』そのままなのだ。別の表記を示せば『莎氏楽府本事』となる。シ

エイクスピアが『シェイクスピア物語』を書いたと考えるならば、意図的にねじ曲げて解釈している。宋莉華をあげておいた。曲解にもとづく林紓批判が中国に存在するのは事実だ（後述）。



『新聞報』1904. 9. 12

版元の商務印書館が1904年9月12日付『新聞報』に「説部叢書」広告を出している。『吟辺燕語』について誤解の生じないように宣伝している。冒頭部分を引用する。説明をする箇所に樽本が下線をほどこした。

英国詩人吟辺燕語／閩中林琴南先生善訳小説膾炙人口毋待贅言今又訳英詩人  
莎士比筆記莎為歐洲詩聖其所著述梨園演唱至今勿衰此為其詩之紀事凡二十則  
……\*2

「英詩人莎士比筆記」の「筆記」は「物語」を意味する。すなわち英国詩人シェイクスピア物語である。「此為其詩之紀事」の「此」は『吟辺燕語』を、「其詩」

は莎劇（詩）を、「紀事」とは物語を意味する。『吟辺燕語』とは「莎劇（詩）の物語」だと説明する。『シェイクスピア物語』にはほかならない。莎劇そのものとは別だと明記してある。莎劇と区別して間違えようのない説明だ。出版の最初から版元の商務印書館によって明確にされていたことにご注目いただきたい。

商務印書館はこの広告を何度も新聞に掲載している。1904年9月22日付『中外日報』などだ。だから林紓は莎劇とラム本の区別がつかなかったと主張する知識人はだれもいなかった。仮にいたとすれば、その人は自ら無知であることを認めたことになる。あえて「区別がつかない」と主張したとしたら特別な意図を別に持つ。商務印書館の広告から14年後、実際に「区別がつかない論」を主張して特別な意図をあらわにした青年集団が出現するのだ。

甘永龍注『原文莎氏楽府本事（附漢文釈義 英文本）』（上海・商務印書館 庚戌（1910）年五月）という書籍が刊行されている。「TALES FROM SHAKESPEARE／BY CHARLES AND MARY LAMB／WITH CHINESE NOTES／BY KAN TSAO-LING」とある。英文を本体にして漢語の注釈をつけた英語学習書だ。大いに利用されたい。清末に刊行され民初の1912年にはすでに三版を出している。参考までに述べると1915年六版、1919年十六版、1922年十九版、1927年廿四版などがある。中国でも英文ラム本が簡単に入手できた事実を示している。

林訳『吟辺燕語』を読んだ学生がこの英文本を見れば、『吟辺燕語』の底本であることを理解するかもしれない。

学生の呉宓は1911年の日記に『吟辺燕語』はラム本だろうと記述している<sup>\*3</sup>。呉宓は気がついた。彼は日記にそう書いただけ。それを公表してラム兄弟の名前を出さないのはけしからんと林紓を非難したわけではない。そうする必要もない。

東潤（朱世溱）は「莎氏楽府談」（『太平洋』1917）において、林琴南がラム（林穆）本を翻訳したと明確に指摘する<sup>\*4</sup>。事実だけを述べている。そこに批判する雰囲気は感じられない。いずれも1918年以前の事柄だ。

ラム本を知っている人々は『吟辺燕語』の底本であることを理解している。漢訳を読んで楽しむ。ただそれのみ。ラム姉弟の名前がないからといって読者を騙しているなどという人はいない。誰も問題にはしなかった。

そうして1918年だ。林紓批判が突然開始された。攻撃の目標は漢訳者のわか

らない『海外奇譚』ではなかった。不明者を批判しても意味はない。中国の青年が自分たちの力量を発揮するためには敵が巨大であればあるほどよい。翻訳でも著名な林紓こそ敵としてふさわしい。批判運動はつぎの人々が主導している。

劉半農と錢玄同（筆名王敬軒）がなれあい芝居（このばあい手紙）を書いて攻撃を開始した。それ以前は林紓の名前など出てきたこともない。なにもないところだから強引という言葉が当てはまる。王敬軒が林紓は「現代の文豪」だと絶賛して『吟辺燕語』をあげる。劉半農がそれに反論して林紓には文学の知識がなく「豆と麦の区別もつかない〔不辨菽麦〕」と貶める。そういう筋書きだ。王敬軒は当時の保守派知識人を想定して設定されている。そこから当時の中国では『吟辺燕語』が高く評価されていた実態を逆に知ることができる。

劉半農の反論は『吟辺燕語』にラム姉弟の名前がないことだけを根拠にする。彼はラムの名前をわざと出さない。知らないふりをした。あくまでもシェイクスピア作とだけ表記した点をつく。戯曲と小説の区別がつかないと批判した。林紓は戯曲を小説にかえて翻訳したという意味だ。胡適がそれを追認した。攻撃文章発表の舞台となったのは雑誌『新青年』である。背後には陳独秀と周氏兄弟がいる。全員が北京大学の関係者だった。当時の校長は蔡元培である。林紓の死後は鄭振鐸が『小説月報』（商務印書館刊行）で別の林訳シェイクスピアを根拠にして林訳批判を決定づけた（後述）。さらに阿英が林紓の「無知」を強調した。現代文学史をいどころ錚々たる人物たちが林紓批判を継続した。戯曲と小説の区別がつかない。そうくり返して主張し続けた。林紓を批判するにあたり、彼が翻訳した作品『吟辺燕語』その他を根拠にしている。

今から思えば奇妙なことはある。まず林紓たちは反論しなかった。文学革命派を最初から相手にしなかったからだ。もっとも林紓死去後の批判に対しては反論もできない。

もうひとつは、林紓を支持擁護して文学革命派に反論する知識人も出現しなかった。実際にはいたかもしれないが文学史では無視された。

研究者全員が林紓を批判した。そうなる基本構造はつぎのとおり。負の結論、すなわち林訳批判が最初から用意されており、それを序文の解説に適用する。結論に合うように序文を読む。研究の順序が逆である。世界の研究者たちが序文を



誤読する理由だ。管見によれば驚くべきことに例外がない\*5。

中国学界で公認されている林紓批判は政治運動の結果である。文学革命派の正統性を主張するために、数えで六十七歳という高齢の林紓を引きずり出し有無をいわず反対派の首領に設定した。そういう全体の流れを是認する。その守旧派の代表であり多数の海外小説を翻訳して特別に著名な林紓が、戯曲と小説の区別をつけることができなかつた。戯曲を小説に書き直して漢訳した。文学について無知である。林紓は外国語ができない翻訳家だ。侮蔑を含ませてそう説明すれば有力な批判材料になると考えたのだろう。虚偽の上に成立している批判と非難だ。それが現在まで続いていることの方がある意味で異常だろう。

政治問題だから本来の文学研究とは基本的に関係がない。普通の文学研究であれば林紓たちが採用した底本を特定することからはじまるはずだからだ。しかし林訳批判開始の当初から林訳シェイクスピア底本の探索はまったく行なわれなかつた。ラム姉弟の名前も出さなければクイラー＝クーチ、ドレイコット・M・デルなど探索する気配さえもない。今でもその研究は一部を除いてほとんど存在しない。外国語が関係するから簡単ではないのだろう。

研究者たちが実践しているのはすでにある林訳批判をくり返すことだけ。新しい発見をせず既存の批判文を複写し再生産するのは、文学研究を装った政治文書でしかない。翻訳研究に見せかけているがその実態は文学革命派を擁護し支持するための林紓批判という政治運動なのだ。認識しているしていないは別にして基本方針がそうと決まっている。

中国で「文化大革命」が終了したあとの話だ。当時の事情を告白した研究者がいた。ある人物を批判する政治運動があった。その研究者は述べる。批判文を書きたくはなかつた。しかし当時の上級がどうしても書けと命令してくる。それを断れば自分も反革命と同類だと認定される。それは自らの死を意味する。保身のためにしかたなく文章を公表した。しかし、とその研究者は弁明する。自分は事実だけを書いた。批判はしていない。そういう言い逃れもできるのか。もう40年近く前の文章だ。文章を書くことが自分の生命と直結している。同時代の日本とは根本的に違う世界が中国にはあるとあらためて思ったことだ。何をどのように研究し書いてもよい自由が日本にはある。研究者生命は別にして自分の肉

体的命にかかわることは基本的にはないだろう。

そのことを思い出したのは、現在の中国学界における林紓批判も同じことではないかと考えるからだ。上級の決定がすべてを支配している。

現代中国における政治と文学研究の優先順位について書いておく。

政治が上位にあり文学研究はその下位に置かれる。別のいい方をすれば、文学研究は政治に奉仕しなければならない。いうまでもなく毛沢東「文藝講話」の世界だ。政治の基準が変更されるとそれに応じて文学研究も変化する。その逆のばあい、文学研究で新しい事実の発見によって評価が変化する可能性が生じても、政治基準の変更には至らない。あくまでも政治が優先する。いくつか例をあげよう。

## 2 評価逆転の実例

1950年代の中国で胡適批判が激しく展開されたことがある。「文化大革命」以後は、その批判運動などまるでなかったかのように胡適を高く評価する論文著作が量産されている。同じ人物について利用される文献、資料も同じでありながら結果としての評価が負から正に逆転するのだ。政治の基準が変更されたことがわかる。

劉鶚（鉄雲）とその作品「老残遊記」も評価が逆転した実例のひとつだ。

劉鉄雲は小説「老残遊記」でも知られている。しかし彼はたまたま小説を書いただけで職業作家ではない。黄河治水工事に参加し、黄河流域の地図を作製もし治水専門書を書いた。甲骨文字の収集と研究、数学、医学、音楽の分野にも造詣が深かった。1900年の義和団事件に際して北京で難民救済活動を行なった。さらには実業家でもあった。運塩会社を設立し外国資本の導入による鉱山開発、鉄道敷設を建議したこともある。

中華人民共和国成立後、外国に依存せず自力で発展すること（自力更生）が政治方針であった時代には、外資導入を主張した劉鉄雲は賣国奴（漢奸）だと批判された。賣国奴が書いた「老残遊記」は批判の標的になった。「文化大革命」中は彼の後裔、親戚縁者、「老残遊記」研究者まで巻き込んで広範な批判運動が実

施されたのが事実だ。1970年代末、中国はそれまでの社会主義的計画経済から市場経済へと変換した。経済改革と対外開放（改革開放政策）である。外国資本を積極的に導入する方針が決まると劉鉄雲のとなえた外資導入は先駆的主張だと称賛されることになった。まさに180度の評価逆転である。

劉鉄雲学会という名目で名誉回復（平反）大会が開催された。私は学術研究会だとばかり考えて足を運ぶと会議への参加を拒否された。説明によると上級が外国人参加の許可をださなかったそうだ。平反大会の様子は外国人には見られなくなかったらしい。それ以後「老残遊記」評価はそれまでの否定から肯定に変わった。

「老残遊記」批判論文に対して1962年に反論を書き劉鉄雲を擁護した研究者がいた。その人は「文化大革命」中には劉鉄雲を擁護したという理由で肉体を含むひどい批判を受けたという。私はのちにその人に会って直接質問したことがある。なぜ擁護論文を公表したのか。私の問いに次のように答えられた。「論文を発表したのは純粋な学問研究の問題だと思ったからだ。まさか政治運動だったとは考えもしなかった」

中国に住んでいる中国人研究者であってもどこまでが研究でどこからが政治なのか理解しにくいようだ。政治基準がどうなっているのか個人の段階ではわからないようになってきているらしい。

商務印書館が一時期日本金港堂と合弁会社であったのは歴史的事実だ。だれも否定することはできない。これについての評価がその時々で揺れる。

1903年、商務印書館は日本金港堂と正式に合弁会社となった。だが商務印書館は表向きその事実を隠した。その一方で新しい国文教科書を編集刊行したことについては、日本人長尾楨太郎（雨山）らの協力があったと大いに宣伝したのだ。隠したいことは自然に漏れる。清末という時代に日本との合弁会社であることが商務印書館本来の業務に差し障りをいくつも生じさせた。中華民国が成立すると商務印書館からとび出した陸費逵らが中華書局を設立しこちらも教科書の編集出版を開始する。彼らは商務印書館に勤務していたから日中合弁については熟知している。中華書局は商務印書館にならい、自社編集の教科書を新聞広告で宣伝した。その時、商務印書館を攻撃する材料に日本との合弁を利用したのだ。新しい

中国の子供に異民族と合弁している商務印書館が編集刊行した教科書を使用させるのかと。重なる攻撃にさらされた商務印書館は1914年に日中合弁解消を発表した。実質10年間の合弁会社だった。

日本金港堂と合弁会社であった事実は、商務印書館（内の上級）にしてみればどうしても隠しておきたい歴史であるようだ。社史でもほとんど触れない。言及したばあいでも日本資本を吸収してやった、あるいは迫られてしかたなく、と表現が正負の間で揺れた。そういう状況だから合弁の事実そのものを知らない研究者も多い。

転換点は1992年あたりだと思う。

商務印書館の指導者のひとりが比較的詳細に合弁について証言した内部文書があった。1992年になってそれがようやく公表された。それまでは部外秘だったらしい。また鄒振環「商務印書館与金港堂——20世紀初中日的一次成功合資」（『出版史料』1992年第4期）がその論文名どおりに日中合弁の成功を述べた。時期的に重なる。

私の『初期商務印書館研究』は、2001年に商務印書館汪家熔から翻訳刊行したいと連絡をもらった。歴史的事実を冷静に見るという流れのなかにあったのかもしれない。

要求されて出版同意書を送ったが説明もなくそのまま放置された。刊行が実現しなかったのは拙著に商務印書館が直視したくない歴史的事実が書かれていたからだろうか。あるいはその刊行を望まない政治的情況に変化したのかもしれない。日本と中国をとりまく外交関係によって両社の合弁が取りあげられたり無視されたりを基本的にくり返すという理由だ。

そういう政治優位の状況下において、中国の一般研究者がとることのできる対処法はひとつだけある。公表される論文の内容を注意深く吟味する。それを頼りにどこまで書くことが許容されるのかを推測する。上位にある政治は、自分で定めた基準を隠蔽することによって下位の文学研究を自在に操作する。それが中国の政治であるとわかる。学術研究だから普遍的に公正な評価が下されると思うのは幻想にすぎない。

### 3 林紓批判の現在

私の見るところ、林紓を批判するという政治的基本方針が決まっており現在も継続されている。それ以外の見解は容認されない。つまり林紓についてはほかと違う見解を公表することは憚られるらしい。憚るものにも異論があるということを知らない。知っていたとしても公に表明することができない。林訳を含んだ林紓批判は中国学界において公認されている。わずかに底本の探索は許容の範囲内らしいとはわかる。だが私が読んだ限り林紓批判を否定する論文はほとんど存在しない。例外といえるのは欧陽健「福州近代文化巨人林紓在民国」(2007)<sup>\*6</sup>あるいは張俊才+王勇著『頑固非尽守旧也』(2012)<sup>\*7</sup>くらいだ。後者では出版許可がおりたことを張俊才自身が驚いていた。

林紓批判が先に結論として存在している。研究者はそれにあわせて資料を取捨選択し、批判に役立ちそうな箇所を抜き出し、結論に沿うように解釈をする。漢訳ラムの序文を読んだとしても結局は林紓批判になるように読解する。研究者はそれが不自然だとは感じない。そういう前例しか見ていないからだ。これが政治を文学研究に優先させる構造である。

公認された林紓批判を疑ってみるという健全な研究姿勢がない。ましてや定説を否定する材料、証拠を探し出すという努力は最初から放棄している。というよりもその視点がもともと存在しない。だからこそ政治問題であって学術研究ではないという。

現在の中国では林紓批判を否定する文章を書いたとしても学生ならばまず指導教授が受け取らないだろう。研究者であれば刊行物の編集者が掲載を拒否するはず。今まで公表された論文を読んでの推測だ。中国学界は林紓評価について厳しく統制してきたと考える。いうまでもないが将来はどうなるかわからない。

それでは自由であるはずの香港、台湾、日本、欧米の研究者はどうか。私の知る限りこれも例外なく林紓批判を継続している。日本でもある人(瀬戸博士)は自らすすんで林紓批判の文章をいまだに発表している。世界中の大多数の研究者が事大主義的研究姿勢を堅持しているといえる。本人たちは文学研究をしている

つもりかもしれない。政治問題だという自覚がないのだろう。

2007年、私は林訳の底本がクイラー=クーチ、ドレイコット・M・デルの小説化本であることを明らかにした。クイラー=クーチによる林訳シェイクスピアは1916年と林紘死去後の1925年に公表された。デルにもとづく林訳イプセンは1921年の刊行だ。1916年から数えれば約90年間も底本が不明のままだった。結果として林紘は無実の罪を着せられた冤罪であることが証明された。

戯曲を小説化した本が存在していることに研究者の誰ひとりとしてなぜ気づかなかったのか。その理由は簡単だ。林紘は戯曲を小説の形式に書き換えて漢訳した、戯曲と小説の区別がつかなかった。この結論がはるか昔1924年の鄭振鐸論文によって下されていたからである。誰も異論を唱えたことのなかったその説明は、政治的な結論であるために再検討する人はいない。政治が優先するのだ。文学研究を積み重ねて事実を追究する姿勢は、中国学界の政治基準からすれば叛逆行為に見えるだろう。誰が手を出すだろうか。政治的結論であることを知らない人は確定された研究成果だと誤解をしたままだ。

文学研究であれば新しい発見はそれまでの評価を一変させる可能性を普通は生む。文学史を書きかえるところまで発展するだろう。

しかし現在にいたるまで中国学界はそれが林訳批判を否定する証拠になることを認めようとはしない。張俊才さえもクイラー=クーチ、ドレイコット・M・デルには触れない。政治が文学研究に優先しているからだと再びいう。ネット上で事実への言及は見られる。ただし小説化した底本が発見されたという指摘にとどまる。林紘の冤罪認定にはつながらない。新しい事実の発見は既定の政治基準には少しの影響も及ぼさない。そうならないように操作しているとしか見えない。相変わらず林訳批判、林紘批判がある。林紘に関しては文学研究ではなく統制された政治運動である。

#### 4 新しい文献2点

前稿を書いたあとで入手した文献について2本を追加する。以下の2点について検討したい。

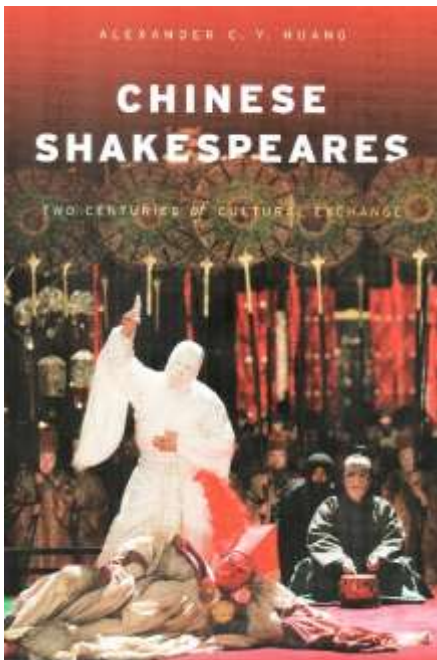
論文の執筆者は初期の漢訳者たちが小説と戯曲を区別していた事実を把握しているだろうか。

もうひとつ、クイラー=クーチが莎劇（詩）を小説化した事実を知っているか。以上のふたつが評価の基準である。本稿の目的はそれを確認することだ。

本稿で取りあげるのは、以下の2種類。

1 (美) 黄詩芸著、孫艶娜、張曄訳『莎士比亚的中国旅行：從晚清到21世紀』上海・華東師範大学出版社2017.4

原書は、C. Y. HUANG, *CHINESE SHAKESPEARES: TWO CENTURIES OF CULTURAL EXCHANGE*. COLUMBIA UNIVERSITY PRESS, 2009 である。この原書は前稿において言及した。説明に重複する箇所があると思う。原書には漢字表記がなかったのでHUANGを「フアング」と読んでおいた。原書の表記はALEXANDER C. Y. HUANGだ。漢訳の著者紹介は英文表記でALEXA HUANGとなっている。漢字表記が黄詩芸だとはじめて知った。C. Y. が詩芸になるのかどうかはわからない。



孫艶娜「訳者後記」によると原書は高い評価を得た。米国現代語学文学協会 (Modern Language Association of America. Aldo and Jeanne Scaglione Prize for

Comparative Literary Studies) とニューヨーク大学 (Joe A. Callaway Prize for the Best Book on Drama or Theatre) から表彰されているという。アメリカの学術水準を示していると考えられる。

ふたりが分担して漢訳した。それにもとづき本稿において漢訳部分には【張擘】を使用する。【フアング】原書も参照するのは当然だ。

2 孫艶娜『莎士比亚在中国 SHAKESPEARE IN CHINA』英文 開封・河南大学出版社2010.9 英語博士文庫



孫艶娜はフアング原書を漢訳したひとりだ。上記の著作は英語で書かれている。叢書名からわかるように英語博士論文をそのまま単行本にしたらしい。引用文には【孫艶娜】を使用する。

理解の分岐点ふたつについて、それぞれの説明を見ていく。

## 5 初期の漢訳者たちが小説と戯曲を区別していた事実を把握しているか

『澥外奇譚』と『吟辺燕語』に分ける。



○『澥外奇譚』のばあい

理解するための要点は「海外奇譚叙例」（表紙のみが澥外。それ以外は海外）に書かれている。研究者が引用しない箇所が実在しているのだ。重要であるにもかかわらず過去においてそれに言及する人はほとんど見ない。それを「叙例」から引用する（傍線は原文のまま）。

一是書原係詩体。経英儒蘭<sup>ママ</sup>上行以散文。定名曰 Tales From Shakspere  
(後略)

本書はもとが詩の形式である。英国の学者ラムによって散文にされ、題名をつけて『シェイクスピア物語 Tales From Shakspere』という。

Shakspere は誤植ではない。シェイクスピアにはいくつかの綴りがある。その中のひとつだ。ところがここを見た前出宋莉華は誤記しているという。無記名漢訳者について英語をいくらか知っているだけの新型知識人であると罵る（284頁）。

最初から否定的な結論を下して読むからそういう誤った評価になる。無記名漢訳者を批判しながら宋莉華自身は訳書名を『澥外奇談<sup>ママ</sup>[譚]』（283-287頁）とすべて間違えて気にしない。

よく見かけるのは根拠もなく誤植だと判断し Shakespeare と勝手に書き直す例だ。研究者としてはやってはならない行為だという認識がない。あるべき引用のしかたはそのままに綴り注釈をつける。今まで見てきた論文はほとんどが間違っている。たぶん書き直した引用文をくり返して再引用するからだと推測する。「叙例」から直接引用する陳歴明も書き改めている<sup>88</sup>。

ラムが莎劇（詩）を書き直して小説にした。無記名漢訳者はそう明確に説明している。ここを知らないと誰もが引用する「叙例」に見える「戯本小説」と「詩詞小説」がわからなくなる。漢訳者は小説と戯曲の区別がつかないという先入観をもって見るからこのふたつの語句を誤読するのは当然だ。張擘の漢訳を示すが、その前にフアングの英語原文を見ておこう（下線は樽本。以下同じ）。

【フアング】 Shakespeare is the finest poet in the world. His plays and fiction sweep the world like wind and are immensely popular. p.51

シェイクスピアは世界で最高の詩人だ。彼の芝居と小説は風のように世界に吹き渡り非常に人気がある。

【張曄】 氏乃絶世名優，長於詩詞。其所編戲本小説，風靡一世，推為英国空前大家。31頁

【フアング】 Shakespeare's works have been available in French, German, Russian, and Italian. Without even having read his works, Chinese intellectuals have praised him. It is my hope that my translation will remedy the unfortunate situation and enrich the world of fiction. p.71

シェイクスピアの作品は、フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語で入手が可能だ。彼（シェイクスピア）の作品を読むことなく中国の知識人は彼を称賛した。私の翻訳が不幸な状況を改善し小説の世界を豊かにするのが私の希望である。

【張曄】 訳者遍法[、]徳[、]俄[、]意，幾乎[於]無人不誦，而吾国今学界，言詩詞小説者，又輒嘖嘖称索氏。然其書向未得誦，僕竊恨之，因亟訳述是編，冀為小説界上增一異彩。51頁

フアングは「叙例」を2ヵ所に分けて紹介した。原文と異なっている部分がある。前者は周兆祥からの孫引き。後者は孟憲強からの孫引き。張曄は英語をそのまま漢訳していない。「叙例」原文の方を参照して引用した。そのため英文とは一部が異なってしまった。

フアングは、「絶世名優」、「推為英国空前大家」を省略した。そうして原文で重要な意味をもつ「戲本小説」を「plays and fiction 芝居と小説」に分解して把握している。シェイクスピアが小説を書いたことになる。そこで自分の解釈が奇妙だと気づかなくてはならなかった。しかし「区別がつかない論」を信じて疑わないから、自分が悪いのではなく無記名漢訳者が間違っていると逆の判断を示

した。ここは『シェイクスピア物語』を意味していると理解すべき箇所だ。

フアングは後者の「詩詞小説」は無視した。ただし訳者の張曄がそれを補った。「言詩詞小説者，又輒嘖嘖称索氏。然其書向未得讀」だ。私が訳す。「『シェイクスピア物語』についていう人はいつもシェイクスピア氏を称賛するのだが、その書はこれまで読むことができなかつた」これが原文の意味である。

ここに出てくるラム『シェイクスピア物語』は英語本だ。ラム本を英語で読んで中国の知識人はそれをもとにしてシェイクスピアを賞賛した。「これまで読むことができなかつた」というのは今まで漢訳されていないという意味だ。だからこそ『シェイクスピア物語』を漢訳して『海外奇譚』を刊行したとなる。論理的に筋の通った説明である。

ところがフアングも張曄も、この「叙例」で出てくるのは「Shakespeare's works シェイクスピアの作品」すなわち莎劇だと思い込んでいる。そこから「his works 彼（シェイクスピア）の作品」と書くところがまず誤り。『海外奇譚』が漢訳ラムであることをすっかり忘れている。つまりラム『シェイクスピア物語』の説明をしているにもかかわらず、それを莎劇だと勘違いするのだ。

その基本が理解できないから後半部分の解釈が奇妙なことになる。原文から離れてしまう。「彼（シェイクスピア）の作品を読むことなく中国の知識人は彼を称賛した」とはなんだろうか。作品を読まずにシェイクスピアを賞賛することがありうるだろうか。当時の知識人は少なくともラム本を読んで莎氏を称賛した。ラム本は莎劇（詩）にもとづいているのだから無関係というわけではない。フアングの説明はきわめて不合理で不思議である。不思議というよりも中国の知識人をこれほどばかにした説明もない。シェイクスピアの名前だけを見て彼を称賛することになるからだ。

孟憲強『中国莎学簡史』（1994）<sup>マ</sup>の4[8]頁（フアング、張曄のふたりともなぜか頁数を間違う）から引用した部分は孫引きに基づいた英訳である。張曄が漢訳しての引用文〔〕内の読点は原文にはない。またいちぶの漢字が異なる。孟憲強が加えて書き換えたものを張曄がそのまま写したとわかる。初出を見たわけではなさそうだ。

誤解の原点は戈宝権の引用ではないかと私は思っている。孟憲強を含めて研究

者たちの多くは『海外奇譚』そのものではなく、戈宝権が示した引用文のみにもとづいてそこだけの引用をくり返していたという意味だ。

戈宝権は原本にあるシェイクスピアの綴り **Shakspere** を書き改め普通に見る **Shakespeare** にした。原文にはない記号「、」を使用し「於」を「乎」に書き換えた。また具合が悪いことに「叙例」の冒頭部分しか引用しなかった。本稿で最初に示した蘭ト（ラム）が出てくる箇所があることを示さなかったのだ。

李偉民『中国莎士比亚批評史』（2006. 308-309頁）<sup>\*10</sup>に引用する「叙例」は、戈宝権「莎士比亚作品在中国」（『莎士比亚研究』創刊号 1983）からの孫引きだと書いている。もう一度いう。戈宝権は冒頭の1条だけを引用したにすぎない。全文は示していない。これが後の誤解を生む原因になったと考える。「叙例」に見られる前述の重要な部分を引用した研究論文を以前はほとんど見ない<sup>\*11</sup>。

中国の多くの研究者は孟憲強も含めて『海外奇譚』そのものを見ずに戈宝権が引用した不完全な「叙例」だけを引用してすませた。正しい把握ができないはずだ。

張曄がフアングの英語論文を漢訳する際に「叙例」の原文らしきものを引くことで漢訳にかえた。中国人研究者は漢語原文をそのまま示すことが多い。その内容を改めて説明しない。だから「戯本小説」「詩詞小説」を正しく理解しているかどうかは不明なのだ。その中身が何か把握しないまま引用しているのだと思う。まさにそこに弊害が出現する。張曄はフアング英語原文を直接漢訳しなかった。孟憲強が引用した「海外奇譚叙例」から漢語原文を孫引いて漢訳にかえた。そのことによりフアングが「叙例」の漢語原文をどのように理解したのかがわからなくなった。

鍵語は「戯本小説」と「詩詞小説」だ。

『海外奇譚』はラム『シェイクスピア物語』の漢訳であることが基本である。この無記名漢訳者は莎劇（詩）とラム散文を厳密に区別している。「叙例」においてシェイクスピアを紹介する部分に「戯本小説」「詩詞小説」とわざわざ表記した。ここは後ろの「小説」に注目しなければならない。シェイクスピアが小説を書いたと解釈すれば、それがまったくの誤りであることは誰にもわかるだろう。自分は理解しているが『海外奇譚』に漢訳した中国人は理解していないと断定す

る人は傲慢である。

戯本すなわち莎劇にもとづく小説だ。詩詞すなわち莎詩にもとづく小説である。『シェイクスピア物語』を指している。上の「叙例」にでてくる「戯本小説」と「詩詞小説」はふたつとも『シェイクスピア物語』を示していると考えるのが正解だ。『海外奇譚』の無記名漢訳者は、正しく理解している。にもかかわらず研究者の方が誤読する。当時の漢訳者は「区別がつかない」はずという先入観があるからだ。ゆえに「戯本小説」「詩詞小説」の小説部分だけを取りあげて、無記名漢訳者はシェイクスピアが小説を書いたと誤解している、と評者自身の無知を晒して平気だ。

もうひとつの原因は前述のように、ほとんどの研究者は「叙例」の全文を読んでいない。戈宝権からはじまり孟憲強あるいは李偉民が引用した一部分のみを手がかりにして解釈しようと試みる。

ただし全文を読んだはずの瀬戸博士は「其所編戯本小説，風靡一世，推為英国空前大家」を次のように翻訳する。「その編んだ戯曲小説は一世を風靡し、英国空前の大家とされた」（瀬戸宏『中国のシェイクスピア』2016<sup>\*12</sup>。96頁）そこを解説して「シェイクスピアが小説を書いたというのも誤解である」（同前）という。これが前出「評者自身の無知を晒して平気だ」の実例である。瀬戸博士は自らの無知を「叙例」の執筆者に押しつけて間違っている（ここは私の前稿をくり返した）。無記名漢訳者は理解していないという先入観をもって「叙例」を読むから正しく理解できないのである。（日）瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中国』（2017<sup>\*13</sup>。87頁）においてもそのままに漢訳している。漢訳した陳凌虹も瀬戸博士と同じく正しく把握することができなかった。

フアングの英訳を見れば誤読がわかる。もういちど説明する。「戯本小説」を「彼の芝居と小説 His plays and fiction」に分離した。分離させてはならない語句なのだ。なんどもいうが『シェイクスピア物語』を指している。

「詩詞小説」は無視したが、フアングの記述をたどっていけば「シェイクスピアの作品 Shakespeare's works」に結びつく。原文の「小説」をなかったことにしたとわかる。シェイクスピア作品であれば戯曲になってしまう。原文ではラム『シェイクスピア物語』が全世界で読まれていると説明しているのだ。すると

莎劇（詩）そのものになるから事実とは異なる。

フアングは英訳で自分の無理解を示した。張擘がそれを漢語原文の孫引きで隠蔽してしまったことになる。あるいは張擘もフアングと同見解だから不審には思わなかったか。

孫艶娜も「叙例」の冒頭を引用し英訳する。彼女が「叙例」には別の部分があることを知っているかどうかは不明。言及がないから知らないのだろう。注では原文を示しているが、これも李偉民のものに依っている。曾孫引きになる。「戯本小説」と「詩詞小説」はどう理解しているだろうか。

【孫艶娜】The book was written by the Englishman Shakespeare (1656-1616). He was extraordinarily good at poetry. His dramas became terribly fashionable and he was regarded as the greatest writer in England. p.98

本書は英国人シェイクスピア（1656-1616）によって書かれた。彼は詩において特別にすばらしかった。彼の戯曲はとても流行し彼は英国最大の作家だと見なされた。

シェイクスピアの生年が間違っている。その原因は依った李偉民の孫引きが「千五百六年生」と誤記をしているからだ。孫艶娜はシェイクスピア研究の専門家だから誤りは注釈をつけて訂正すべきだった。

この間違いはどこかで見たことがある。思い出した。前稿ですでに検討していた。YANNA SUN, *SHAKESPEARE IN CHINA*. (DRESDEN: 2008.4 電字版)だ。YANNA SUN という署名（漢字表記はない）、英語論文でありドレスデンで公表された博士論文だからドイツ人研究者だとばかり思った。だから姓をとりあえずサンと読んでおいた。なんのことはないこの YANNA SUN は、孫艶娜を現代漢語のピンインで表記したものにほかならない。

それにしても没年をこえた生年があるはずがない。博士論文で誤記しそれを審査したドレスデンの教授たちも見逃した。中国で単行本を出すにあたり担当編集者も気づかなかったということらしい。不思議（杜撰）なことがあるものだ。

ここでもあらためて指摘しておこう。「叙例」に出てくる「戯本小説」を

「His dramas」と考え莎劇（詩）だと断定した。間違い。『シェイクスピア物語』である。

【孫艶娜】 Shakespeare's works were welcomed by the reader in France, Germany, Russia and Italy. p.98

シェイクスピアの作品は、フランス、ドイツ、ロシア、イタリアの読者によって歓迎された。

この「Shakespeare's works」は「叙例」にはない。孫艶娜が補足した。前の部分で「戯本小説」を莎劇だと誤解したからここもそれを引きずっている。補足するならば『シェイクスピア物語』にしなければならない。

【孫艶娜】 In contrast to the situation in European countries, none of the Chinese people has ever really read his works, although later on, in particular the intellectual classes sang high praise of Shakespeare when talking about poetry and novels. pp.98-99

ヨーロッパ各国の状況とは対照的に中国人はだれも彼の作品を本当に読んだことがなかった。しかしのちに特別な知識階層において詩と小説について話すときシェイクスピアを絶賛した。

この部分はフアングの解釈と同じだ。孫艶娜がドイツで博士課程にいたときフアングは「学外の指導教授 [校外導師]」だったという。偶然の一致かもしれないが解釈が同じなのも不思議ではない気がする。

「中国人はだれも彼の作品を本当に読んだことがなかった」の「彼の作品」とは、孫艶娜の解釈によれば莎劇になる。誰も読んだことがないのに絶賛するという矛盾に気づいていない。

孫艶娜も原文の「詩詞小説」を「詩詞 poetry」と「小説 novels」に分離した。詩と小説に一般化したうえで突然のシェイクスピア称賛というつながりになる。文章の前後で話のつじつまが合わない。彼女も「詩詞小説」を二分させて支離滅

裂状態に導いた。

孫艶娜は「叙例」を誤読して無記名漢訳者の理解度を不当に低く評価する。そればかりか中国の知識人をひどく貶めている。

○『吟辺燕語』のばあい

結論からいう。林紓は『吟辺燕語』の序において莎劇（詩）とラム『シェイクスピア物語』を厳密に区別している。次の用語を使い分けられていることを見ればわかる。

「詩家之莎士比」とある。莎劇は詩だ。ゆえに詩人のシェイクスピアを指す。戯曲家のシェイクスピアとしても同じ。「莎氏之詩」は莎劇（詩）を意味する。

それに対して「莎士比筆記」「莎詩之記事」「莎氏紀事」などは、小説の『シェイクスピア物語』を示して使用している。表現に変化をもたせただけで内容はひとつだ。

林紓がこれらの語句を区別していることを研究者は理解しているか。これがもうひとつの要点である。すなわち林紓が戯曲と小説を区別していることは、この用語を使い分けられているのを見ればわかるはずだ。

【フアング】 Lin had no knowledge of any foreign language or culture, nor did he feel the need for such knowledge. In Lin and Wei's collaboration, Wei would therefore orally render the stories and the main plot into Chinese, which Lin would then adapt to the style of classical Chinese and, in the case of dramas, to the conventions of *chuanqi*. p.78

林は外国語、あるいは外国文化を理解しなかったし、理解しなければならぬとも考えなかった。彼らの共同作業では、魏易が物語と主となる筋を口頭で中国語に翻訳するとそれを林が古典中国語の形に書き換え、戯曲であれば伝奇の形に書き換える。（注：英文のイタリック体は日訳ではゴシック体にした）

【張擘】 林紓不懂外語或外国文化，也不認為非懂不可。在他們的合作中，魏易用中文為他講述故事的主要情節，林紓邊聽邊將它改写成文言文，戲劇類的



作品一般都改為傳奇。55頁

林紓たちの翻訳方法を説明している。魏易が口述し林紓が文言文で記述する。そこまではいい。問題は「伝奇」である。

林紓が「in the case of dramas, to the conventions of *chuanqi*. 戯曲であれば伝奇の形に書き換える」とフアングは書いている。

フアングの説明によると「伝奇」とは、唐代におこった短篇小説、また元朝末期に流行した戯曲だという（272頁注53。【張曄】249-250頁注182）。どちらの意味で使っているのか。伝奇は短篇小説なのか戯曲なのか。はっきりしない。しかしフアングが例に出すのは梁啓超「新羅馬伝奇」だ。すると戯曲になる。

フアングのこの説明によれば、魏易の名前を出して戯曲というのだから『吟辺燕語』についての説明にほかならない。伝奇が戯曲の意味ならば、『吟辺燕語』は小説だから当てはまらない。また戯曲であれば戯曲の形に書き換えるということになる。『吟辺燕語』を前には意味をなさない。奇妙なことだ。

伝奇が小説の意味であれば、戯曲を小説に書き換えることになる。

フアングは『吟辺燕語』がラム本の漢訳であることを知っている。林紓は小説化されたものをそのままの小説に翻訳したにすぎない。底本が小説であり戯曲ではないにもかかわらず、どうして「in the case of dramas, to the conventions of *chuanqi*. 戯曲であれば伝奇の形に書き換える」と述べるのか。

ここから理解できるのは、フアングが従来からある俗説——戯曲を小説に書き直して漢訳したという固定観念から逃れることができていないことだ。

【フアング】 According to Lin, while the two longtime collaborators sat leisurely at night, Wei “coincidentally mentioned a few entries from Shakespeare's notebooks,” which prompted Lin to “rush to the light to draft a translation.” It took him only twenty days to finish the book, which he identified as a collection of “chronicles by Shakespeare.” It is noteworthy that in Lin's preface, Shakespeare——not the Lambs——was identified as the author. p.78

林によると、ふたりの長年の協力者が夜にゆっくりと座っていると魏が「ふとシェイクスピアのノートから1、2作を提示した」そうだ。林はそれに促されたように「灯火に身をよせ翻訳しはじめた」。わずか20日で完成し、彼はそれらを「シェイクスピアによる物語集」と称した。注目に値するのは林の序言において著者としてラム姉弟ではなくシェイクスピアを指定したことだ。

【張擘】據林紓講述，他們兩人常在晚間閑坐，魏易有一次“偶拏莎士比筆記一二則”，林紓“就灯起草”，僅二十天就完成了訳稿，他把它称作“莎詩之記事”。值得注意的是，林紓在前言里指出原作者是莎士比亞，而不是蘭姆姐弟。  
55-56頁

下線部分をよく見てほしい。林序の原文、フアングの英語とそれの日本語訳を示す。

莎士比筆記 Shakespeare's notebooks シェイクスピアのノート  
莎詩之記事 chronicles by Shakespeare シェイクスピアによる物語集

原文に合わせて英訳しようとしたらしい。だが後者は「莎詩」であるのに「Shakespeare」のみに置き換えるのは不十分だ。忠実な翻訳であるように見えて、その中身が不明であることを指摘されたらどうするのだろう。「Shakespeare's notebooks シェイクスピアのノート」は何を指しているのか。筆記帳、手帳などに置き換えても意味不明であることは同じだ。英訳しながら理解していたのだろうかとは私は疑問に思う。

林紓はラム本には言及していない。しかし20日で漢訳が完成したという。ラム本が20作品を収録しているのとは一致する。ここから見てもラム本を底本にしたことは明らかなのだ。

瀬戸博士も不確かな訳語しか与えていない。しかし裏の事情は違おうだろう。瀬戸博士のばあいは意図的なものだ。私が研究発表会でそれぞれの語句の内容はなにかと直接質問した。だが彼は個々の内容についてぐだぐだ言うだけで明確に答

えることができなかつた。のちの文章でもあいまいにしたまま訂正しようとはしない。私は数本の論文で同じように指摘したにもかかわらず瀬戸博士は一貫してすべてを無視した。林紓が区別できなかつた「証拠」とするためにわざと不明確なかたちに放置したとしか考えられない。林紓が理解していないことにする印象操作である。

フアングは致命的な誤解を表明していることになる。林紓はラムの名前は出していないが『シェイクスピア物語』について述べている。フアングにはその基本が理解できていない。ここでも林紓は戯曲と小説の区別がつかないという先入観を持つために誤解したのだ。

林紓が莎劇（詩）とラム『シェイクスピア物語』を区別していることにフアングは気づくべきだった。以前から語り継がれている強固な俗説を自分で打ち破る知識と勇気がなかつた。

## 6 クイラー＝クーチが莎劇（詩）を小説化した事実を知っているか

これについて判別することは簡単だ。林訳シェイクスピアの底本にしたクイラー＝クーチ本に言及しているかどうかが決め手である。

【フアング】 Although Shakespeare's history and Roman plays were excluded from Lin's 1904 text, they were serialized as prose novels, also “translated” by Lin, in *Short Story Magazine (Xiaoshuo yuebao)* in 1916.  
p.7

シェイクスピアの歴史劇とローマ劇は林の1904年の本からは除外されていたが、1916年林によって小説として「翻訳」され『小説月報』に連載された。

【張曄】 雖然林紓1904年的版本中没有収録莎士比亞的歷史劇和羅馬劇，它們是以白話小說的形式連載於1916年的《小説月報》上，仍由林紓“翻譯”。  
序言7頁

奇妙な説明だ。1904年の林訳『吟辺燕語』はラム本だ。もともと歴史劇は収録されていない。1916年に漢訳されたのがクイラー=クーチ本を底本とした作品だ。「translated 翻訳した」とカッコに入れたのは、莎劇を小説体に変えて「翻訳した」と考えているからだ。フアングもそれを漢訳した張擘もクイラー=クーチの小説化本があることを知らない。

【フアング】 Not only had Lin himself published rewritings of other Shakespearean plays as serialized novels and individual books, …… p.72

林自身がそのほかのシェイクスピア劇を書き換えた連載小説、単行本を発表しただけでなく、……

【張擘】 除了林紓發表的根據莎劇改写的連載小説和單行本之外，…… 52頁

上の『小説月報』掲載分と単行本のことをくり返している。林紓は底本の小説をそのまま小説として翻訳したのが事実だ。書き換えてはいない。別の箇所では具体的な作品名を掲げて説明はもう少し詳しくなっている。

【フアング】 In 1916, he went on to “translate” more Shakespearean plays—history and Roman plays that were not included in *An English Poet* in 1904—with Chen Jialin, who, like Wei Yi, orally rendered the plays into Chinese. Under transliterated title, such as *Leichade ji*, Lin's renditions of *Richard II*, *Henry IV* and *Julius Caesar* appeared in the *Short Story Magazine*, and *Henry VI* was published as a single volume with Commercial Press. These later works clearly identified William Shakespeare as the playwright, but it is not clear whether they were based on any specific edition. p.73

1916年に彼はシェイクスピア劇をさらに「翻訳」していった——歴史劇とローマ劇は1904年の『英国詩人』には含まれてはいなかった——魏易がしたように、陳家麟が口頭で戯曲を中国語に翻訳した。たとえば「雷差得紀」

のように「リチャード2世」を翻訳し、「ヘンリー4世」「ジュリアス・シーザー」は『小説月報』に登場し、さらに「ヘンリー6世」は単行本として商務印書館から出版された。これらの後の作品はウィリアム・シェイクスピアが劇作家であることをはっきり示しているが、しかしそれらがどういう版本にもとづいているのかは明らかにされていない。（イタリック体は日訳ではカッコに入れた）

【張曄】1916年他繼續翻譯其他莎劇作品，包括1904年版的《吟辺燕語》中沒有收錄的歷史劇和羅馬劇，這次林紓的合作者是陳家麟，他和魏易一樣，為林紓把莎劇口訳成中文。《理查二世》、《亨利四世》和《朱利烏斯・愷撒》等劇本經他翻譯陸續發表在《小説月報》上，訳本的表題通常採用音訳的方式，如《雷差得記[紀]》。《亨利第六遺事》則由商務印書館以單行本的形式發行。這些後期作品都明確了劇作者是威廉・莎士比亞，却未交代訳者採用的是何種版本。53頁

『An English Poet 英国詩人』というのは『吟辺燕語』のこと。

フアングが林訳題名を使用したのは「雷差得紀 *Leichade ji*」のみ。あとは莎劇の原題を示した。張曄はそのままには漢訳していない。「亨利第六遺事」だけは林訳どおりの書名になっている。なぜ「亨利第四紀」「凱徹遺事」を使用しなかったのか。また「雷差得記[紀]」と漢字を間違えている。もうひとつ、フアングが“translate”と引用符をつけた「翻訳」には特別の意味を持たせている。つまり戯曲を小説に変えて「翻訳」したということだ。張曄はその引用符を使用していない。理由は不明。

フアング、張曄ともに林訳の底本がクイラー=クーチであることを知らない。大きな問題である。次も同じだ。

【フアング】Lin also worked with an anonymous translator on *Henry V*, publishing it in the *Story World (Xiaoshuo shijie)* in 1925. p.73

林は氏名不明の訳者と協力して「ヘンリー5世」を1925年の『小説世界』に発表した。

【張曄】林紓還与一位不知名的訳者合作翻譯了《亨利第五記<sup>ママ</sup>[紀]》，1925年發表在《小説世界》上。53頁

フアングはシェイクスピア研究の専門家なのだろう。アメリカの名誉ある学術賞を受賞しているくらいだ。ただし林紓については知識が不足している。林紓が死去したのは1924年だ。上記の漢訳は死後の発表であることを説明してもよかった。張曄は英語が堪能であるのはわかる。だが林訳題名の「紀」を「記」と誤記して正確な題名を書くことができない。林訳作品には不案内らしい。

細かいことだがフアングは林訳の底本の中に日本語、ドイツ語、スペイン語を含めている（p.75。【張曄】54頁）。日本語は蘆花『不如帰』を指しているだろう。しかし林訳が底本にしたのは英訳であって原文の日本語ではない。スペイン語はセルバンテス『ドン・キホーテ』だろうが、これも底本は英語だ。ドイツ語も同様。もしも『梅孽』の「(徳) 伊ト森著」を言うのであればドイツは誤記だしもとがイプセンだ。細かい部分が誤っている。林訳についての研究が十分ではないと思わせる。

次は孫艷娜の説明を見る。

【孫艷娜】 Then in 1916 with the help of Chen Jialin, Lin Shu retold five of Shakespeare's original plays, namely, *Richard II*, *Henry IV*, *Henry V*, *Henry VI* and *Julius Caesar*. Unfortunately, he translated these plays once again in classical Chinese prose instead of the form of drama. pp.18-19

そうして1916年に林紓は陳家麟の助けによってシェイクスピアのもとに戯曲の5作を書き換えた。すなわち、「リチャード2世」「ヘンリー4世」「ヘンリー5世」「ヘンリー6世」および「ジュリアス・シーザー」である。残念なことに、彼はそれらの戯曲を脚本の形ではなくもういちど古代中国語の散文に翻訳した。

「ヘンリー5世」は、1916年ではなく1925年の発表だ。説明が正確ではない。脚本のままではなく小説の形に改編して翻訳した。中国では「定説＝俗説」と

なっている説明をここでもくり返している。誤解は本当に根深いと感じる。シェイクスピア研究の専門家は、中国における林紓批判を疑うことなく信じているからだ。それに対して異論が提出されているという事実気づいていない。

もとの英文博士論文は2008年にドレスデンで公表された。その時点でクイラー=クーチの存在はすでに明らかにされている。中国大陸と異なりドイツのドレスデンではネットを経由して日本からの発信を受信できるだろう。その気があればだが。時間的に間に合わなかったというのであれば、范伯群「原原本本（二題）」（『書城』2008年8月号（総第27期））もある。単行本にする2010年までには参照する時間の余裕があったのではなかろうか。（念のためにクイラー=クーチを紹介した次の書評がある。劉錚「【書評】林琴南的功臣（張治『中西因縁』）」『東方早報・上海書評』2012.11.25 電字版。さらに「微瑕」部分のみを引用してウェブ上の「豆瓣讀書」2012.11.25に掲載）

小説化された底本があったことを知らないのは、専門書として致命的欠陥だと思う。林紓を理由なく貶めてはなはだしい。書き換えてはいないにもかかわらず戯曲を改編したと林紓に濡れ衣を着せているからだ。

## 7 結 論

入手した著作2種類は新しいと考えたから増補になるはずだった。ところが読んでみれば前稿で検討した専門書だ。

シェイクスピアの専門家たちが、中国の初期漢訳2種類に収録された序を読んで解釈を誤っている。あらためて確認した。残念なことだといわなければならない。英文原書を漢訳して原著者の把握のしかたが見えなくなる箇所があることも判明した。

大きな構想を持った著作は細部の正確さに支えられる。私はそう考えている。どんなに壮大な構想であろうとも、原文を誤読して細部が不正確であれば著作全体の構造を支えきれないのではなかろうか。

フアング英文著作とその漢訳、および孫艶娜の英文著作には、戯曲と小説の「区別がつかない」という明確な表現は使用されていない。表面だけ見ればあた

かも冷静に「事実」しか述べていない専門研究であるかのようだ。その「事実」が意味しているのは林紘が戯曲を小説に書き換えたという従来からある俗説のことだ。研究論文に徹して厳密に記述しているように見えるとすればかえって悪質であるということも可能だろう。明らかに間違っている俗説を継続支持して林訳批判を基礎部分で推進しているからである。彼女たちが公表しているのは正しくない解釈なのだ。客観的に見れば、自分たちの誤った認識を初期の漢訳者たちに押しつけること自体が、批判運動に加担していることを意味する。

ヨーロッパにおいて英語で書かれた博士論文が中国でそのまま刊行される、またアメリカで出版された専門書が中国で漢訳された。林訳批判の書物が世界を循環してその正しくない評価が一層強固に定着するという状況を作り出している。中国の学界はいまだにその流れの中にある。

【注】

- 1) 宋莉華『近代来華伝教士与児童文学的訳介』上海古籍出版社2015.11 中西文学文化関係研究叢書。287頁「他（林紘）对莎士比亚戏剧并不了解，不知道此書（『吟辺燕語』）為蘭姆姐弟的改編本」
- 2) 周羽「林訳《吟辺燕語》的誤解与魅力」袁進主編『中国近代文学編年史——以文学広告为中心（1872-1914）』北京大学出版社2013.5。179頁。写真は同書からの引用。また、[編年②746] [編年⑤2597] にも光緒三十年八月初一日（1904.9.10）の広告文を収録する。略号について樽目録を参照のこと。
- 3) 「自修課程／Tales from Shakespeare “Tempest”。／商務印書館説部叢書中之《英国詩人吟辺燕語》，蓋即訳此書之事实者也」注釈番号は省略。吳宓著、吳学昭整理注釈『吳宓日記』第1冊（1910-1915）北京・生活・読書・新知三聯書店1998.3。123頁
- 4) 東潤（朱世溱）「莎氏楽府談」より2ヵ所を引用する。「後有林氏述其事迹為莎氏楽府本事。吾国林琴南訳之。則稱為吟辺燕語」『太平洋』第1巻第5号 1917.7.15。2頁／「林氏吟辺燕語訳自英人林穆之莎氏楽府本事原書」『莎氏楽府談二』『太平洋』第1巻第6号 1917.8.15。1頁
- 5) 樽本「漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序——「区別がつかない論」再び」『林紘冤罪事件簿（統合増補版）』清末小説研究会2017.1.15 電字版



- 6) 欧陽健「福州近代文化巨人林紓在民国」『閩江学院学報』第28卷第6期2007.12
- 7) 張俊才+王勇著『頑固非尽守旧也：晩年林紓的困惑与堅守』太原・山西出版伝媒集団、山西人民出版社2012.1。ほかの論文については樽本「中国現代文学史における林紓の位置」、「『吟辺燕語』批判の謎」を参照。
- 8) 陳歴明「莎劇最早的漢訳本：《海外奇譚》」『外国語（上海外国語大学学報）』第39卷第1期 2016.1.20。88、89頁
- 9) 孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学出版社1994.8
- 10) 李偉民『中国莎士比亞批評史』北京・中国戯劇出版社2006.6
- 11) 「叙例」の全文は、影印本で読むことができる。また、『中国近代文学大系』11集28巻翻訳文学集三（上海書店1991.4）に収録される。しかし Shakspere を書き改める。前述宋莉華が284頁に引用する。瀬戸博士『中国のシェイクスピア』66頁に部分翻訳がある。漢訳した陳凌虹本『莎士比亞在中国』56頁は原文を引用するが Shakspere を書き改め、もとの「命」を「名」に誤る。
- 12) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29
- 13) (日) 瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中国：中国人的莎士比亞接受史』広州・広東人民出版社2017.1

## 2014年の林紘評価

『清末小説から』第130号（2018.7.1）に掲載。沢本香子名を使用。呉仁華主編『革新与守固——林紘国際学術研究会論文集』（北京・商務印書館2017.5）は、2014年福州「林紘研究国際学術討論会」の論文集だ。そのうちの呉仁華、陳平原、夏曉虹、陸建徳、王勇の論文を取り上げる。林紘批判の根拠となっている「戯曲と小説の区別がつかない論」はどのように説明されているのかを知るためだ。もともとなった王敬軒（錢玄同）と劉半農の「なれあいの芝居」には言及する。だが驚いたことに「区別がつかない論」は全員が無視している。2014年当時では立入禁止区域であると判断する。

林紘の名前を冠した学会が開催されている。

私が知っているだけで最近の3学会がある。2013年北京「林紘文化研究高峰論壇」、2014年福州「林紘研究国際学術討論会」、2016年北京「林紘与近現代中国文化轉型学術研討会」だ。それ以外にも開催されたかもしれない。

林紘の名前を前面に押し出しているのが特徴だ。いうまでもなく林紘批判ではない。過去において推し進めていた激しい林紘批判の軌道を修正する。そういう意味を



持たせていると考えられる。

呉仁華主編『革新与守固』（2017）\*1は、上記2014年福州で開催された学会の報告文集だ。

林紓と商務印書館は深い人間関係で結ばれていた。ほとんどの林訳書が上海の商務印書館から出版されている。該論文集も商務印書館が刊行を引き受けた理由かもしれない。

林紓は戯曲を小説化して翻訳した。すなわち戯曲と小説の区別がつかなかった（「区別がつかない論」）。これが林紓を批判するひとつの根拠である。

ほかの決まり文句をいくつかあげる。外国語ができなかった翻訳家、2流3流の価値のない外国小説を大量に翻訳した、誤訳削除が多い、短篇モデル小説を書いて文学革命派を攻撃した、北京大学校長の蔡元培に詰問する手紙を送った、蔡元培に反論されて一瞬で敗退した、軍閥の武力を背景に北京大学に圧力をかけた、などがすぐに思い浮かぶ。負の要素を拡大して強調した林紓批判である。それらのうち外国語を理解しなかったことのみが林紓本人も認めている事実だ。

本稿においては「区別がつかない論」を焦点とする。これは文学研究の範囲内の問題だ。議題にすれば、当然ながら林訳批判を推進した錢玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英に触れざるをえない。その後ろに蔡元培、魯迅、周作人もいる。問題は相当に大きい。

「区別がつかない論」を正視すればそれ自体が成立しない不適切立論、すなわち誤りであることがわかる。その誤りを認めれば中国翻訳史上の林紓冤罪事件は解決し林紓再評価に結びつく。そう私は考えている。

上記の学会に参加したのは林紓研究の専門家たちである。専門家は「区別がつかない論」についてどう考えているのだろうか。はたしてこれについて意見を表明する研究者はいるのか。現在私が抱いている関心事のひとつだ。

国際を称する称さないにかかわらず、中国で大規模学会を開催する際には関係機関の承諾が必要だ。参加者についても当然選択する。報告の結果を論文集にまとめる段階では掲載審査があるだろう。参加者全員の論文が収録されているわけではない。厳選されているはずだ。だからこそこの論文集には2014年当時における中国学界の林紓に対する認識と評価が表現されていると考えてよい。

該論文集は「前言」を含む21本の文章を選んで収録する。論文名を見るだけで教育、翻訳、研究、詩歌、戯劇、絵画、交遊、家書などなど林紘の生涯を概観して多彩な側面を取り取りあげていることがわかる。

前述のとおり私の現在の興味が林紘の翻訳を中心とした評価問題にある。「区別がつかない論」に関して2014年の時点でどの程度まで公表が許可されているのか。そこが知りたい。

本稿では私が判断してそれに関係の深い文章、箇所だけに言及する。ご注意ください。それぞれの論文を紹介するのが本稿の目的ではない。言うまでもないが各論文の価値を判定しているわけでもない。もともと各論と私の関心とが一致しているとは限らないのだ。論文を書いた研究者が主張したい箇所とは違う部分を取り出すこともあるだろう。ご了承を願う。

林紘について中国学界はどのように扱っていたのか。呉仁華「前言」が細心に工夫をこらし、実は的確に指摘している。

いわく「中国近現代文化、歴史の発展における林紘の地位を正確に位置づけるように我々は希望している〔我們既希望將林紘在中國近現代文化、歷史發展中的地位準確定位〕」（1頁）。ここは現状を変更してもらいたいという希望を述べている。つまりこれまでは林紘の歴史的地位を正確に位置づけてはいなかったという意味である。

あるいは「多数の清末民国思想史著作のなかで林紘は「欠席」している〔在多數的晚清、民国思想史著作中，林紘是“缺席”的〕」（同前）である。ここは過去の実状を解説している。清末民国思想史において林紘を排除していたことを認めているわけだ。

私の考えを述べる。林紘がそのように待遇されてきた原因のひとつは、1910年代の五四前からはじまる文学革命派による林紘批判だった。さらに従来の中国学界がそれを認め主導してきた。以前からいつている。「勝者の文学史」において林紘は敗者の烙印を無理やり押された。批判の対象となった林紘に与えられる場所は基本的に存在しない。特別に呼び出す時は負の評価を負わせるだけ。林紘批判が学界の基本方針だった。

以上のことは現在の中国では直截的に書くことができないらしい。書いていな

いだけで多くの研究者は従来の経緯と今の動きを了解しているのだろう。そこに新しい動きが見られた。林紓の名前を冠した国際学会が開催されるのだ。変化があると感じているに違いない。いままで設定されていた評価基準は、少しだが明らかに変更されている（追記：次の文章は言及している。王桂妹「重估五四反对派：従林紓的“反動文本”《荊生》《妖夢》談起」『西南大学学报（社会科学版）』2017年第43卷第4期 2017.7 電字版）。

冒頭の**陳平原**「古文伝授的现代命運——教育史上的林紓」が興味深い。彼が25年前に書いた文章と同じような箇所が出てくる。しかし微妙な説明が加えられている。

林紓が書いた北京大学の教授たちをモデルにした短篇小説だ。林紓の「荊生」「妖夢」は「明らかに人身攻撃だ [明顕帯人身攻撃]」（6頁）という\*2。

この部分は以前の記述と重なる。過去の文章は次のとおり。

1917年、胡適、陳独秀らが『新青年』において新文化運動を提唱すると林紓は文章を書いて反対し、さらに小説を作り当てこすって攻撃した [1917年、胡適、陳独秀等在《新青年》倡導新文化運動後，林紓著文反对，并作小説影射攻撃]\*3

林紓が攻撃したという見解は昔も今も変化しない。

ただし現在はここに追加説明がある。王敬軒（錢玄同）と劉半農の「なれあいの芝居（双簧戯）」を出してくる。「これは林紓が小説を書いて陳独秀、胡適らを罵ったのと五十歩と百歩の違いしかない [這与林紓写小説罵陳、胡，不過是五十歩与百歩的差別]」8頁。

林紓からの一方的な攻撃だとしていた記述から、文学革命派の行動に対しても一定の疑問を呈する方向に修正したように見える。あるいは以前から考えていたことを公表できるようになった。

『新青年』第4巻第3号（1918.3.15）に掲載された陳独秀と劉半農の「なれあいの芝居（手紙）」である。林紓批判の起点であり基礎となった。その直後に胡適が同じ『新青年』第4巻第4号（1918.4.15）において劉半農の用語を訂正しな

から追認するという展開だ（後述）。

陳平原の論文は「なれあいの芝居（手紙）」に言及している。しかし奇妙なのは劉半農が批判した林訳『吟辺燕語』に触れないことだ。つまりのちに林紓批判の根拠となる「戯曲と小説の区別がつかない論」を説明しない。それがもともとから成立しないことを言わない。言わないのは、そうは考えていないからだろうか。

これで思い出すのは張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也』（2012）<sup>\*4</sup>だ。該書は林紓を再評価する。だが「区別がつかない論」については解説しない。陳平原に先行して同じ判断のように思われる。そういえば、林佩璇「林紓」（2017）<sup>\*5</sup>も同様に無視をしていた。いずれも奇妙に一致するのが印象的だ。

問題はやはり「区別がつかない論」に収斂する。

陳平原の論文には「なれあいの芝居（手紙）」がある。だが、「区別がつかない論」は存在していない。知らないのかといえば、それはあり得ない。なぜならば樽本照雄『林紓冤罪事件簿』（2008）と『林紓研究論集』（2009）を掲げているからだ（32頁）。樽本本の主題のひとつが「区別がつかない論」である。存在を知っている。だが敢えて取りあげない。

以上の状況を見て私が判断するのは、中国学界においてそこは立入禁止区域ではないかということだ。そうならば納得する。陳平原の林紓に対する見方が、現在の中国学界の現状を示しているのだろう。

一般の研究者はなにを手がかりにして林紓に関する執筆許可範囲を知るのだろうか。そのひとつが陳平原論文ではないかと私は推測する。中国の研究者は学界の風向きを読む。ひとりの文章が後の方向性を示す。これが従来からある中国学界の見なれた光景だ。ただし陳平原論文について当たっているかどうかは知らない。証明のしようもない。あくまでも私の感想にとどまる。

つづくのは夏曉虹「一場會発生的文白論争——林紓一則晩年佚文的發現与釈読」である。未公開の文章を発掘して新しい発見がある。とてもよい。

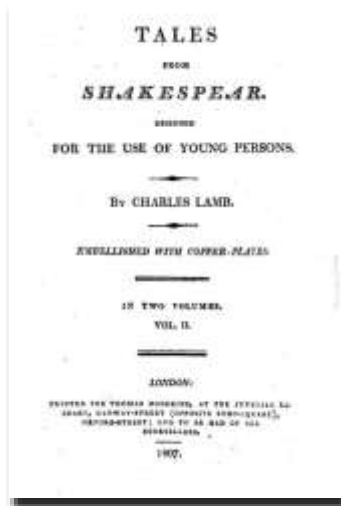
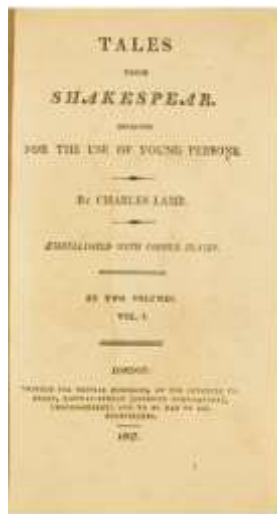
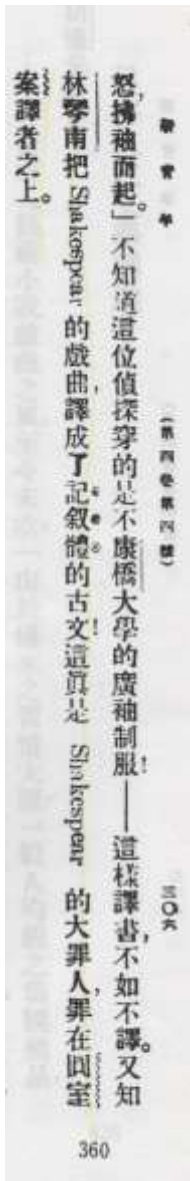
新発見の文章は、失われたはずの張銘「読<益世報>芸渠<偶談>書後」（1924。題名のカッコは夏曉虹のママ）という。王芸渠が『益世報』に発表した「偶談」についての（実質は林紓の）読后感だ。『晨报副刊』に渡したが主編の孫伏園の反対で掲載されなかった（35頁）。

文中にある「百人の胡適之」は胡適だ。「千の某雑誌」は『新青年』を指す。その批判には負けないと林紘はいう（37頁）。それらの単語が胡適「建設的文学革命論」（『新青年』第4巻第4号 1918.4.15）を示しているのはすぐにわかる。胡適の主張は古文ではなく白話を使用して翻訳せよというものだった。

夏曉虹は胡適の論文が基礎になっていると指摘する。正しい。次の箇所を引用しているのはもっと興味深い。

又知[如]林琴南把 Shakespeare 的戯曲，訳成了記叙体的古文！這真是 Shakespeare 的大罪人，罪在《圓室案》訳者之上。43頁

「[如]」は夏曉虹の注である。原文の誤りを正した。シェイクスピアの名前が英語で2カ所に出てくる。前の「Shakespeare」は胡適の原文ではない。夏曉虹の引用間違いだ。後ろの「Shakespear」と同じく現在表記しているのとは異なり末尾の「e」を欠いている。胡適は確かに「Shakespear」と綴っているのだ。影印本から該当部分を再度示す。シェイクスピアの原語綴りにご注目いただきたい。誤植ではない。そう表記するラム『シェイクスピア物語』がある（ネットから引用）。



上記の「e」を欠いた綴りは、胡適が『吟辺燕語』の底本がラム本であることを知っている証拠となる。しかし胡適はその事実を意図的に隠蔽した。知らぬ顔をしなければ劉半農を弁護することができない。

夏曉虹が上の文章を引用した目的は、胡適が林紓と『圓室案』の訳者を区別していることをいうためだ。私はそれとは違う文脈で上の胡適の文章に深い興味を感じる。

林紓は戯曲を「記叙体」すなわち散文（小説）体の古文で翻訳した。だから「シェイクスピアにとっての大罪人である」となる。林紓が古文を使って翻訳したことについて胡適は批判をした。

胡適はなぜここで **Shakespear** を出してくるのか。夏曉虹は説明していない。これには文章公表の前後関係が存在するのだ。

胡適の「建設的文学革命論」は、その同誌前号に掲載された文章を直接継承している。すなわち前出『新青年』第4巻第3号（1918.3.15）の王敬軒（錢玄同）と劉半農の「なれあいの芝居（手紙）」にはほかならない。

劉半農は林訳『吟辺燕語』について次のように林紓を批判した（傍線省略）。

吟辺燕語本来是部英国的戲考，林先生於『詩』『戲』兩項，尚未辨明，其知識實比『不辨菽麥』高不了許多； 274頁

劉半農は『吟辺燕語』を根拠にして林紓を批判している。のちにいう「区別がつかない論」の原型を提出した。

上記の文章の鍵語は『吟辺燕語』「戲考」「詩」「戲」および「不辨菽麥〔豆と麦の区別もつかない〕」である。

林紓の知識は「豆と麦の区別もつかない」よりもまったく高くはないという。最低だという意味だ。

劉半農の文章は冒頭を読み飛ばしてしまいそうになる。「吟辺燕語はもとは英国の戲考である」というなんでもなさそうな表現だからだ。

『戲考』とは、上海・中華図書館が1913年から出版しはじめた京劇の脚本集だ。そこから劉半農は『吟辺燕語』の原本は莎劇そのものだと考えていることに



なる。だから「詩」と「戯」のふたつを区別できない。「豆と麦の区別もつかない」となり林紓批判が出現する。『吟辺燕語』はあくまでも莎劇から直接小説化したものでなければ劉半農の批判は成立しない。彼はそれを強調した。

劉半農のいうところから従えば「詩」と「戯」が対立する。両者を対立させているのだが、ここには矛盾がある。くり返せばもとの戯曲（莎劇）を小説に漢訳して『吟辺燕語』になった。そういう関係でなければ林紓批判につながらない。だがもとの戯曲を「戯」で表記してしまうともうひとつの「詩」とは何かがわからなくなる。当時の中国でもシェイクスピアは詩人である。莎劇は詩の形式で書かれているから当然だ。だから劉半農のいう「詩」は莎劇そのものになる。すると劉半農が提出するのは「莎劇」に対立する「戯曲（莎劇）」になってしまう。これでは論理的に成立しない。「豆と豆の区別がつかない」では矛盾する。「豆と麦の区別もつかない」どころではない。その論理的不整合にいち早く気づいたのが胡適であった。

重要な箇所だからもう一度関係部分の原文を引用する。

林琴南把 **Shakespear** 的戯曲，訳成了記叙体的古文！這真是 **Shakespear** 的大罪人

胡適の主眼は「古文」批判にある。だが同時に劉半農の記述に矛盾があることを理解してその箇所を書き直したとわかる。林紓は **Shakespear** の「戯曲」を翻訳して「記叙体」すなわち散文（小説）体にした。

劉半農が示した「戯」は「戯曲」のままだ。しかし「詩」では論理が成立しないから胡適は「記叙体」に変更した。「詩」と「戯」を入れ替えても同じ。これではじめて「戯曲と小説の区別がつかない」となって論旨がかみ合う。

胡適は林紓『吟辺燕語』がラム本を底本にしていることを知っている。その証拠は **Shakespear** とラム本の綴りを書いているところだ。事実を知っていながら林紓は戯曲を小説体で翻訳したと書いた。劉半農とおなじく虚偽にもとづいた批判である。「シェイクスピアにとっての大罪人である」と誇大に表現して林紓批判をはじめた劉半農を追認し支持した。

この部分について瀬戸博士の指摘があるので引用する（注釈番号は省略）。

翌月、胡適は「建設的文学革命論」を『新青年』第四卷第四号（一九一八年四月）に発表し、ここでも林紘のシェイクスピア紹介に触れ「林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文で訳した。本当にシェイクスピアの大罪人だ」と述べた。胡適の文学素養からみてラム『シェイクスピア物語』を知らなかったとは考えにくい。ここでの記述は一九一六年『雷差得紀』以下の翻訳を指しているのであろう。これが胡適の錯覚であるのは樽本氏の指摘の通りである。しかし小説化された底本が明記されていない以上、当時の条件では胡適を一方向的に責めることはできないであろう。99頁<sup>\*6</sup>

瀬戸博士の説明で奇妙なのは、劉半農の林訳批判について『吟辺燕語』ではなく「一九一六年『雷差得紀』以下の翻訳を指しているのであろう」とする箇所だ。劉半農がわざわざ『吟辺燕語』を出しているのになぜここに『雷差得紀』を挙げるのか。意味不明。

「胡適の文学素養からみてラム『シェイクスピア物語』を知らなかったとは考えにくい」という。ならば林紘はラム本にもとづいているから漢訳が小説になるのは当然だ、と胡適はなぜここで書かなかったのか。そうすれば林訳批判にならないことを胡適は承知していた。胡適はラム本を知っていて知らぬ風を装ったのだ。これについての理解力が瀬戸博士には不足している。

また論文の時間的流れという前後関係を読みとることができなかった。『吟辺燕語』を掲げた劉半農に続いて出てきたのが胡適の論文だ。それらはつながっていると知るべきだ。

なによりも林訳『雷差得紀』などについて瀬戸博士は別の箇所で「『吟辺燕語』と異なりほとんど反響を呼ばず、初出のままに終わり単行本発行あるいは再刊行はされていない」（93頁）と書いている。「ほとんど反響を呼ばない作品を根拠にしては説得力もなければ意味もない。

さらに瀬戸博士は「小説化された底本が明記されていない以上」と述べる。ラム姉弟の名前を出さなかった林紘に責任のすべてを押しつけた。林紘を批判する

加害者が被害者になりすました瞬間である。逆にいえば批判されて被害者であった林紵が加害者に変身するということだ。

五四直前から陳独秀は保守派から攻撃を受けていると主張していた。林紵を攻撃しながら林紵に攻撃されていると言い張ったのだ。林紵を保守派の首領と認定して無理やり引きずり出したのは王敬軒（錢玄同）と劉半農の「なれあいの芝居」にほかならない。それまで林紵の存在などほとんど注目されてはいなかった。

加害者であるにもかかわらず被害者を装うのは文学革命派の基本姿勢である。

瀬戸博士は調べることが仕事であるはずの研究者としての責任を放棄している。中国学界の動向に事大する瀬戸博士の研究姿勢を照射して十分だ。林訳について（田漢漢訳『ハムレット』を含めてもよい）新しい発見をするつもりも努力もしないのが瀬戸博士だ。反論するために反論する。そのためなら何でも使う。瀬戸博士のやり方は、林紵を批判するためなら虚偽であろうが利用しつくす中国の文学革命派と内実は同質である。

錢玄同と劉半農がつくりあげた「なれあいの芝居（手紙）」にしてから虚偽である。それを追認支持した胡適の該当部分も虚偽にまみれている。敵と認定した相手に対しては虚偽行為も平気で犯すのが文学革命派のやり方だった。しかし中国においてはこれこそが中国文学史上、評価する価値のある賞賛し誇るべき正当な行動だった。そう認定されている。私は大きな疑問を持つ。

夏曉虹はせっかく胡適の特徴的な一文を引用しながらその背景、前後関係については説明をしていない。立論の趣旨には関係がないという判断なのだろう。

中国の近現代文学研究を代表するふたりの北京大学教授がともに林紵の「区別がつかない論」に言及しない。論文の主旨が違うことはわかっている。だがふたりとも「区別がつかない論」を見ながら口を閉ざしそのまま通過しているようにしか思えない。2014年当時は触れるべきではないという認識があったのだろう。だからこそ立入禁止区域だと私はいう。

**陸建徳**「文化交流中“二三流者”的非凡意義——略説林訳小説中的通俗作品」は錢玄同と劉半農の「なれあいの芝居（手紙）」について次のように説明する。

「錢玄同と劉半農は「なれあいの手紙」事件を作り出して悪意をもって林紵を攻撃したが、これはまったく誇大宣伝の性質のものであり職業道徳に違反してお

りその影響は大きいものがあつた [錢玄同与劉半農製造“双簧信”事件悪意攻撃林紆, 純属炒作性質, 有違職業道德, 其影響却是深遠的]」81頁

そう指摘するのはよい。だが林訳『吟辺燕語』についての説明がない。

また鄭振鐸が1924年に林紆の逝去後に発表した「林琴南先生」から引用するのもよい。しかし鄭振鐸の「区別がつかない論」に言及しない(82頁)。

陸建徳は長年定説となっていたよく見なれた説明をここでもしている。①は欄外注釈だ。引用翻訳しておく。

林訳小説のなかで歴史類が多く割合を占めている。彼が陳家麟と共訳したシェイクスピア戯劇5種はすべて歴史劇(翻訳は戯劇をもとにした物語にすぎない)である [林訳小説中歴史類占有很大比重, 他与陳家麟合訳莎士比亞戯劇五種, 全部是歴史劇(訳本只是戯劇本事)]。93-94頁

①林紆は小説の形式でシェイクスピア戯劇を翻訳して人々に非難された [林紆以小説型式翻訳莎士比亞戯劇, 為人所詬病]。94頁

まだこんなことを書いているのか。これが私の正直な感想だ。

林訳莎劇については1924年に鄭振鐸が指摘したのがはじまりだった。林紆は莎氏の歴史劇を小説にかえて翻訳した。くり返すが林紆は戯曲と小説の区別がつかなかった「区別がつかない論」である。中国学界では83年もつづいた定説であった。

鄭振鐸の主張が間違っていたことは2007年に明らかにされている。林訳の底本はクイラー=クーチの『シェイクスピア歴史物語』である。林紆は莎劇を小説化して翻訳していない。底本の小説を翻訳して小説になっているだけだ。批判される根拠はない。林紆にしてみれば濡れ衣、冤罪である。陸建徳の論文は2014年の学会で公表配布されたのだろう。新発見があつてすでに7年も経過している。その結果がこれだ。

陸建徳は中国社会科学院文学研究所に所属しているという(所長。専門は英米文学)。中国学界の中心的研究機関のひとつではないか。陸建徳は外国人著作の漢訳を含めて中国国内の研究情報の収集には積極的なようだ。しかし外国における

研究動向には鈍感と見える。それにしても出席者たちからの指摘はなかったのだろうか。論文審査をして通過させた関係者もこれについては知識を持っていなかったことがわかる。学界として学術情報を共有しようという考えはないらしい。いろいろと疑問が出てくる。

学界の定説を信じこみ問題が存在することにさえ気づいていない研究者がいる。林紵の翻訳を論じる陸建徳を見てあらためて実感することだ。

**王勇**「林紵与杜亜泉」も王敬軒（錢玄同）と劉半農の「なれあいの芝居」について説明している。

（王敬軒と劉半農の問答）これこそが現代文学史上で興味津々に語られる「なれあいの芝居」あるいは「なれあいの手紙」である〔這就是現代文学史上津津樂道的“双簧戲”或“双簧信”〕。337頁

これが文学史で見られる以前からの表現である。楽しみに林紵を罵って当然であるという態度だ。

ただし現在の王勇による説明には少しの変化が見える。次のとおり。

この「なれあいの芝居」が以前にはいかに文学史家より称賛されたか、また現在は少ない研究者によってその手段の卑劣さがいくらかは批判されているとはいえ、その結論からいえば白話文学の影響を確実に拡大したし、社会の関心を引き起こし、また違う意見を持つ者の反対をも巻き起こしたのだった〔不管這場“双簧戲”以前如何被文学史家所称道，現今又如何被一些研究者批評其手段之卑劣，僅就其結果而言，確實擴大了白話文学的影響，引起了社会的關注，也引起了一些持不同意見者的反对〕。337頁

「なれあいの芝居」が卑劣な手段であったことをいう研究者がいる。そう指摘することが変化だといえないこともない。

また劉半農が林訳の不足を数えあげたことにも言及する。すなわち、1 価値のない作品を翻訳した、2 誤り、削除、改変が多すぎる、3 外国ものを中国化

してしまった。これに対して王勇は、劉半農の指摘は事実ではないし公平ということではできないと否定する。逆に林訳を積極的に評価するのだ。

林紘の翻訳がすべてすぐれた作品であるということではできないが、少なくとも相当な部分は時間の試練を乗り越えることができたし、当時の文学の翻訳として最高水準を代表していた〔我們不能說林紘の翻訳件件都是精品，但至少有一部分是經得起時間考驗的，代表了那個時代文學翻譯的最高水準〕。338頁

王勇は劉半農の主張を批判しているのは明らかだ。

ところが王勇の立論にはやはり欠落がある。「なれあいの芝居」を取り上げそこに『吟辺燕語』を提起する（337頁）。しかしそれ以上筆を進めない。劉半農が林紘を批判して述べた例の「豆と麦の区別もつかない」を無視するのだ。劉半農の林訳批判の重要な要素である「戯曲と小説の区別がつかない論」そのものである。これを取り上げてこそ林紘擁護になるという考えが王勇にはないらしい。

こまかいことだが指摘しておく。『東方雑誌』に掲載された「空谷佳人」を林紘訳とする（335頁）。誤り。雑誌初出は訳者不記である。1907年に単行本になったとき（英）博蘭克巴勒著（仮名。空谷blank valleyを音訳したもの）、商務印書館編訳所訳と表示した。架空の人物を原著者のように装わせただけ。

以上を見ればおよその研究状況がわかる。現在の学界では「なれあいの芝居」を取り上げることはできる。だが「戯曲と小説の区別がつかない論」に踏み入ることはない。

鄭振鐸のいう「区別がつかない論」は中国学界では立入禁止区域ではないか。その推測はやはり当たっているかもしれない。それより前に立入禁止区域があることさえ認識していない可能性もあるだろう。

2014年当時の林紘評価は以上のとおりだ。本稿は2017年の「翻訳家としての林紘——「区別がつかない論」の現在」につながる。

『天演論・茶花女遺事』 壹佰貳拾年紀念特藏（北京・商務印書館2017.3）には林訳『茶花女遺事』が影印されている。それにつけられた陳建華「序二」は嚴復と

ともに林紘を高く評価する。基本的には林紘再評価の方向で動いているのだろう。



林紘評価が今後どのように動いていくのか、今のところ判然としない。興味をもって見ていきたい。

【注】

- 1) 呉仁華主編『革新与守固——林紘国際學術研討會論文集』北京・商務印書館2017.5

目次は以下のとおり。

呉仁華「前言」

陳平原「古文伝授的現代命運——教育史上的林紘」

夏曉虹「一場曾發生的文白論争——林紘一則晚年佚文的發現与釈読」

宋声泉「文学革命時期“林紘敗北”問題新探——兼論共和話語与新文学合法性的建立」

陸建徳「文化交流中“二三流者”の非凡意義——略説林訳小説中の通俗作品」

黄錦珠「林訳言情小説《巴黎茶花女遺事》の日常性」

劉 城「林紘《韓柳文研究法》の學術史意義」

郭 丹「林紘の楚辞読本与楚辞批評」

朱曉慧「心頭未蓄風波險，一任蒲帆向那邊——從《畏廬詩存》題面詩看林紘的生命情調」

胡全章「詩世界里先維新——林紘《閩中新樂府》の詩歌史意義」

- 徐 瑛「身世原非杜拾遺，淒涼偏讀拾遺詩——試析杜甫對林紘詩歌創作的影響」
- 盧仁龍「画壇又譜広陵散——《〈林紘書画集〉序》」
- 林 農「略論林紘的繪画」
- 王少羽「西方文化的引薦者与国学傳統的衛道士——林紘晚年談中西方繪画」
- 鄒自振「林紘与近現代之交的閩都戲劇」
- 宋一明「林紘致陳宝琛三札考釈」
- 蘇建新「交友——結社——從師：琴南先生在榕生平軼事考辨簡評」
- 郭道平「嚴復、林紘交遊考論」
- 王 勇「林紘与杜亜泉」
- 包立民「《林紘家書》和家教」
- 吳仁華、郭丹「林紘的文化品格与大学文化建設」
- 2) 6頁注3に「妖夢」の『新申報』掲載を「1919年3月<sup>18</sup><sup>22</sup>日」と誤る。3月19-23日が正しい。陳平原が誤ったのは実物で確認せず『林紘研究資料』85頁にある誤記を写したからだろう。
- 3) 以下の2種類で同文。陳平原『二十世紀中国小説史』第1卷（1897年-1916年）北京大学出版社1989.12。271頁。また、『中国現代小説的起点——清末民初小説研究』北京大学出版社2005.9。283頁
- 4) 張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也：晚年林紘的困惑与堅守』太原・山西出版伝媒集団、山西人民出版社2012.1
- 5) 林佩璇「林紘」方夢之、莊智象主編『中国翻譯家研究（歴代卷）』上海外語教育出版社2017.4
- 6) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29



## 翻訳家としての林紓 —「区別がつかない論」の現在

『清末小説から』第128号（2018.1.1）に掲載。神田一三名を使用。林佩璇「林紓」（方夢之、莊智象主編『中国翻訳家研究（歴代巻）』上海外語教育出版社2017.4。799-830頁）を検討する。中国学界が林紓批判についてどの程度まで、どの範囲まで執筆を容認しているかを理解するのが目的だ。林佩璇は林訳に高い評価を与える。「林紓の翻訳の成果は近代中国翻訳界において最高のものであるばかりか、中国翻訳史上において達成できた人はほとんどいなかった」である。従来からある負の側面に重点をおいた林訳批判は行っていない。ただし林訳批判の根幹である「区別がつかない論」については完全に無視する。言葉さえ使用しない。それは、「区別がつかない論」を否定すればそれを主張した錢玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英らを批判することになるからだ。現在の中国学界ではそれは許していないことがわかる。いわば立入禁止区域だ。

翻訳家林紓を評価しようとするばあい、ひとつの問題が出現する。五四直前の1918年に発生した林紓批判そのものを分離あるいは無視できるだろうか。林訳批判を考慮しなくていいのかと言っても同じだ。

先に言えば分離するのはむつかしいと考える。なぜなら林紓の翻訳そのものが林紓を批判する根拠のひとつとなっているからだ。林訳批判と林紓批判は重なる部分が多い。研究者は林訳批判をどう把握しているかという問題にもなる。

復習すれば次のように言われ続けている。

林紓は戯曲を小説にして翻訳した。戯曲と小説の区別がつかない。称して「区

別がつかない論」という。主として林訳シェイクスピアと林訳イプセンを根拠にしている。ここが重要箇所だ。

さらには翻訳家でありながら外国語を理解しなかったことも非難される理由のひとつに数えられる。そこで多数にのぼる共訳者の存在が意味を持つ。

以上が林紓を批判するとき使用される常套句の一部である。「区別がつかない論」は林紓以外に使用されることはない。ゆえに林訳批判の根幹をなしているといっている。

従来からある林紓批判について現在はどうのように説明しているか。2017年に公表された論文1篇を取りあげる。林佩璇「林紓」(2017)<sup>\*1</sup>である。本稿では「区別がつかない論」に注目して該論文を検討する。

## 1 林佩璇論文

林佩璇論文は『中国翻訳家研究(歴代巻)』という巨冊刊行物(本文だけで918頁)に収録されている。書名にあるように「翻訳家」を主題にした論文ばかりを集める。

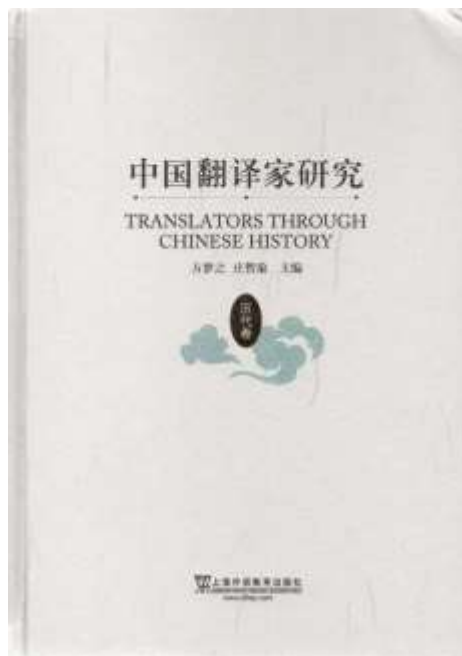
林佩璇論文の構成は以下のとおり。

第1節 生平簡介、第2節 翻訳活動、第3節 著訳簡介、第4節 翻訳思想、第5節 翻訳影響、参考文献。

表題からおおよそ理解できるだろう。林紓の生涯を紹介しながら論点は翻訳に絞ってある。また先行著作をあげて説明しているのも親切だ。

いくつかの部分を紹介する。

著者の基本的な論調は次の説明に見ることができる。



林紓による外国小説の翻訳紹介は、中国の民衆に豊富な西洋文化を輸入し、当時の国民の文学文化視野を大きく切り開いた〔林紓の外国小説訳介為中国民衆輸入豊富的西方文化，極大開拓了当時国人的文学文化視野〕801頁

特に珍しい見解ではない。五四以前の林訳については以上のように説明するのが普通だ。従来は「ただし」と続けて林訳の「否定面」を全面的に展開し非難していた。林佩璇論文にはそれがない。

林訳に対する肯定的な見方は、共訳者についての評価にも表われる。林紓が翻訳に際して役割分担をしたと説明するのだ（804-805頁）。外国語に堪能な協力者が口訳し、林紓がそれを筆述する。口訳者が20余名もいたことにより異なった外国の200種を上まわる多数の作品を刊行することができた。林佩璇は共訳者の存在を林訳の肯定的側面であると見定めた。

従来の文学革命派による見解では、共訳者たちがいることを否定的に説明していた。外国語ができなかった林紓だから作品の選択権が協力者の方にあったと非難したのだ。翻訳する必要のない2流3流の作品を刊行した原因というわけ。2流3流というのはハガード、ドイルなどの冒険小説、探偵小説を指している。文学革命派から見たばあい大衆小説は批判の対象になった。林佩璇は劉半農の意見を引用して林紓が価値のない作品を翻訳したと言及している（824頁。後述）。

林紓が作品につけた序、序文などに注目する。林佩璇はそれによって林紓の考えを理解することができるという。従来からある普通のやり方だ。しかし『英国詩人吟辺燕語』が抜けている（807頁。後述）。

林佩璇の文章は林紓の著作について広く紹介する。雑記、評論、遊記、教科書類、創作（小説、詩歌）などだ。

林紓が翻訳という仕事をとおして表現したかったのはなにか。林佩璇によると「愛国」である。

翻訳とは愛国という実業だ〔訳書即愛国実業〕 804頁

愛国之情 805頁

林紓の愛国と社会改良の思想はその書物を翻訳するという熱い思いで一貫し

ていた [林紘的愛国与社会改良思想貫穿其訳書情懷] 806頁

林佩璇は、林紘の翻訳をまとめて次のように表現する。

林紘の翻訳の成果は近代中国翻訳界において最高のものであるばかりか、中国翻訳史上において達成できた人はほぼいなかった [林紘的翻訳成就不僅在近代中国翻訳界首屈一指，在中国翻譯史中也很難有人能夠企及] 824頁

最大級の賛辞だといっているだろう。林訳に対する負の評価は皆無である。

林紘翻訳の研究については次のようにまとめた。

20世紀前半は非難の声が称賛の声よりも多かった。しかしここ20、30年から翻訳類型の多元化が出現したことにより否定の声はますます少なくなった (825頁)。林佩璇による説明は、最近における林訳評価の変化を反映していると考えていい。

では林紘批判に関して林佩璇はどう具体的に記述しているのか。

古文と白話文に関する論争に触れる。ただし林紘は「巻き込まれた」という認識だ<sup>\*2</sup>。従来から言われているような林紘から積極的に反論したものではないことになる。妥当な見解だと思う。

文学革命派を揶揄して林紘が書いた短篇小说はどうか。

「荊生」と「妖夢」の作品名を掲げるだけ (811頁)。内容を紹介しないし批判もしない。今までの林紘批判ではこの2篇を必ずといっていいくらい取りあげた。小説の内容と当時の政治状況を強引に結びつけ、林紘は軍閥の力を借りて新文化運動を打倒しようとしたと非難攻撃した。無根拠にもかかわらず林紘の「悪辣さ」を証明する証拠とするのである。林佩璇論文にはそれがない。

シェイクスピア関連では陳家麟と共訳した「雷差德<sup>マ</sup>[得]紀」「亨利第四紀」『亨利第六遺事』「凱徹遺事」の名前を挙げる (813頁)。それ以上は説明しない。以前ならば戯曲を小説にかえて漢訳したと決まって批判する箇所だ。その批判はない。またクイラー=クーチ本が底本だとも言わない。林紘の翻訳を論じる専門家がクイラー=クーチ本を知らないとは考えにくい。意図的に言及していないのだ

ろう。

魏易の協力による漢訳本を紹介する箇所では、林訳批判の根拠になった著名な『吟辺燕語』を出さない（814頁）。だから漢訳ラムにも言及がない。ここも意思をもって説明していないと判断する。

毛文鍾との共訳本である漢訳イプセン『梅孽』（816頁）がドレイコット・M・デル本を底本とすることに触れない。ましてや戯曲と小説の区別がつかなかったとも述べない。

林訳について従来からある批判点はすべて指摘しない。それが林佩璇の基本姿勢であるとわかる。

## 2 評価の現状

劉半農が林訳を批判したことは前述した。林訳批判について林佩璇が紹介するのは、劉半農が「復王敬軒書」の中で展開した次の2点だ。原稿の選択が妥当ではなく価値のない作品を翻訳した。もうひとつは誤訳が多く原作の精神をまったく失ってしまい様相が一変した（824頁）。

林佩璇は鄭振鐸についても説明する。鄭振鐸は林訳がもたらした貢献を肯定しながら、林紓が原文を任意に削除したことを批判したという（825頁）。

林紓批判に関連して劉半農と鄭振鐸のふたりをあげるのは適切である。劉鄭は林紓批判を強力に推進した重要人物だからだ。

しかし奇妙なことがある。今まであるのが当然だった指摘がない。林佩璇は劉鄭のふたりが提起した、より重大で根本的な批判的言辞を慎重にしかも全面的に削除している。例の「区別がつかない論」である。戯曲を小説にかえて翻訳した。これこそが林訳批判開始の最初から前面に押し出されていた非難の理由なのだ。

林訳批判を推進した主な人物を確認しておく。次のとおり。

王敬軒（錢玄同）の投書に反論するかたちで劉半農が批判を開始した。胡適がそれを追認する。鄭振鐸が決定づけて阿英が強調した（後述）。

これが林紓批判の基本かつ主要な人脈である。錢劉胡鄭阿5人のつながりはどうしてもはずすことができない。

この背骨を形づくっている論点は、林紓が戯曲を小説体にして漢訳したことにある。戯曲と小説の区別がつかなかったと5人は主張した。のちの研究者はみなその視点を支持し継承して林紓を批判し続けて現在に至っている。

林佩璇は『吟辺燕語』を出さないから漢訳ラムに言及しない。そればかりか漢訳クイラー=クーチ（シェイクスピア）、漢訳ドレイコット・M・デル（イプセン）についても口をつぐんでいる。

これらの沈黙はなにを意味しているのか。

林訳研究ならばあつてしかるべき林紓批判への言及、説明がない。さらには過去から現在に継続されている林紓批判をくつがえす重要証拠が実在することを言わない。林佩璇はこの問題＝「区別がつかない論」に関連するすべてを無視したということだ。だいいち「区別がつかない論」を示す語彙を使用していない。触れないことが特別の意味を持つ。

「区別がつかない論」を理解するため時間経過にそって発生した事実をあらためて並べる。

- 1 1904年 莎士比著、林紓+魏易訳『英国詩人吟辺燕語』が刊行される。
  - 2 1918年 王敬軒（錢玄同）が林訳を賛美する。劉半農が反論し林紓は「詩」と「戯」の区別がつかないと罵る。事前にふたりが打ち合わせたなれあいの手紙だ。
  - 3 1918年 胡適は劉半農の使用した用語が不適切だと理解し「戯曲」と「記叙体（小説）」にすぐさま訂正する。加えて、林紓はシェイクスピアにとっての大罪人だと罵る。
  - 4 1924年 鄭振鐸が林訳シェイクスピアと林訳イプセンを根拠にして林紓は小説と戯曲の区別がつかなかったと断定する〔林先生大約是不大明白小説与戯曲的分別的〕。
  - 5 1938年 阿英が林紓はラム本と莎劇の区別がつかなかったと批判する。
- 
- 6 2007年 林訳シェイクスピアと林訳イプセンには小説化された底本が存在したことが明らかにされる。クイラー=クーチ本とドレイコット・M・デル本

である。

7 同 年 「区別がつかない論」の根拠が崩壊する。

8 同 年 「区別がつかない論」を主張していた錢玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英らは誤っていたことが判明する。

9 同 年 林紘は濡れ衣を着せられていた。冤罪だった。

10 同 年 林紘冤罪事件の責任を追及すれば錢玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英という錚々たる人々が浮かび上がってくる。

5と6の間に区切り線を入れた。前後で時間的に長い空白がある。また林訳評価の内容が質的に一変するからだ。

7から10まで分けて書いたが、それらは6が発見された瞬間に生じる必然的結果である。

さかのぼって1の『吟辺燕語』刊行が1904年、2の林訳批判が1918年だ。14年間の空白はなんだろう。その間、誰も林訳に「問題がある」ことに気がつかなかったということか。

ここでいう「問題がある」の内容は次のとおり。

『吟辺燕語』の底本はラム姉弟の『シェイクスピア物語』だが、林紘は莎士比(シェイクスピア)の名前だけを出した。ラムの名前はかかけていない。だからといってラムの存在を隠したなどという人は当時いなかった。そのころの翻訳界では底本を明記する習慣は定着していなかったのだ。知識のある人は『吟辺燕語』の底本がラム本であることを理解した。ラム本は当時の中国で英語学習用書籍として刊行されていた事実がある。簡単に入手できた。知っている人は『吟辺燕語』と容易に結びつけただろう。くり返すがラム本であることを明記しないのはけしからんと林紘を非難する人は皆無だった。

14年は短い時間ではない。清国が滅亡して中華民国が成立している。その間『吟辺燕語』は多くの読者に歓迎された。商務印書館版「説部叢書」の元版、初集、また「小本小説」に収録されているくらいだ。『吟辺燕語』に対する悪い評判は立たなかった。だから奇妙な空白期間だと言う。そうして突然文学革命派からの林紘批判が始まった。批判の根拠に『吟辺燕語』が使用されたのだ。14年

間なにもなかったのだから「突然」というのには意味がある。

林訳批判をはじめた劉半農もラム本であることは黙っていた。知らないふりをしたというしかない。彼は林紓が莎士比だけを掲げた点を逆手にとった。莎劇は戯曲だが、林紓はそれを漢訳して小説にかえた。「戯曲と小説の区別がつかない」論の原型を提出して林紓を批判したのだ。もしも劉半農がラム本の存在を林紓批判の根拠とすれば、彼の主張する「豆と麦の区別もつかない [不辨菽麦]」はもとから成立しない。小説であるラム本を漢訳して小説になるのは当然だからだ。

劉半農による奇妙な林紓批判というべきだろう。林訳はラム本を底本にしたのが事実だが、劉半農はその事実をわざと無視した。莎劇が底本だと無理矢理こじつけた。莎劇そのものにしなければ劉半農の立論は成立しないからだ。その根拠は林紓がラムの名前をだしていないことのみ。「莎士比著」と表記した事実だけに寄りかかった。はっきり言えば劉半農は虚偽にもとづいて林紓を批判した。劉半農の反論を引き出した王敬軒（錢玄同）もそれを承知している。胡適は劉半農の使用した語句を修正しただけ。基本的に劉半農の説明を支持した。アメリカ留学帰りの胡適はラム本があることを知っていた。胡適は承知の上で林紓が「シェイクスピアにとっての大罪人」と断言したのだ。劉半農の虚偽に賛同したことになる。

不思議といえば林紓を擁護する知識人がいなかった。ラム本を漢訳したのが『吟辺燕語』だから劉半農の批判は成立しない、と表立って主張する人が見あたらない。

劉半農による最初の林訳批判が1918年だった。鄭振鐸の林訳批判は1924年だ。鄭振鐸は『吟辺燕語』を林訳批判の根拠にすることは不可能だと理解していた。林訳の底本はなにしろラム本なのだ。そこで彼はなんの説明もしないまま林訳批判の根拠となる作品を『吟辺燕語』ではなく別の林訳シェイクスピアと林訳イブセンに入れ替えた。これこそが鄭振鐸が自信をもって提出した林訳批判の確実な証拠である。まさかそれらが誤りであるとは想像もしなかったのだろう。のちの研究者全員もその「まさか」に気づかなかった。奇奇怪怪というべきだ。

2007年に林訳批判の根拠が崩れた。クイラー=クーチ本とドレイコット・M・デル本が存在すると指摘があった。林紓が戯曲を小説にして翻訳した事実のもと



から存在しなかった。小説を漢訳して小説になっただけ。どこにも林紓の落ち度はない。批判者に知識が欠けていただけだ。

1918年を起点にすれば単純に計算して89年間だ。1924年からならば83年間になる。83年から89年にわたって間違っただけ林訳批判が継続していた事実を研究者たちはどう考えているのだろうか。

一連の流れを普通に見れば、異常な状況であるとわかる。今まで研究者の全員が黒と信じていたことが2007年になって一瞬で白に変化したのだ。これほどの激変はそうあるものではない。従来の文学史の記述を覆す。そればかりか林紓を批判して「区別がつかない論」を持ち出せば、自動的に銭劉胡鄭阿5人の責任問題が発生する。5人に追従したのちの研究者たちも同様だ。林紓を狙って放った批判の矢がもどってきて自分自身を射る。

現在の中国学界は上の6あたりまでは容認しているように見えないわけではない。だが林佩璇論文を手がかりにして実状をたどると欠落した箇所があると判明する。「区別がつかない論」だ。どうやらこれとだけは関連づけさせたくないらしい。

林佩璇の論文は、表面的に見るとせいぜいが上の4あたりまでになる。ただし「区別がつかない論」をまったく持ち出さないのは見てきたとおりだ。

林佩璇は「戯曲と小説の区別がつかない」問題をまるで実在しないかのように目をつぶって通過した。

林紓らは翻訳する際に小説を底本にした。漢訳して結果として出てきたのが小説であるのは当然だ。林訳についていえば非難の原因となるはずの戯曲はもともと存在していない。鄭振鐸らは存在しないことを根拠にして林紓を批判したことになる。だが研究者たちは圧倒的に鄭振鐸らを支持した。

林紓にしてみれば身に覚えがないことだ。無実の罪をきせられて批判された。これはいうまでもなく冤罪である。上に示した時系列でいえば9に該当する。

林佩璇論文を読むと中国学界がどこらあたりまで書くことを容認しているかがわかる。

林訳については今まで負の側面だとしていたのを正の側面に置き換えそれを前面に押し出す。肯定的姿勢に変更した。

残されたのは「戯曲と小説の区別がつかない」問題だけらしい。このいわゆる立入禁止区域にさえ進入しなければあとは比較的自由に書いてもよいとわかる。それはいくつかの論文を読めば理解できる。クイラー=クーチ本、ドレイコット・M・デル本があることを指摘するものが見えるからだ<sup>\*3</sup>。そこまでは許容範囲内らしい。ただし「区別がつかない論」に結びつけることは別である。

銭玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英といった先達が深く関与している。ここに踏み込めば文学史の書き換えが必要となるはずだ。林紓が冤罪であったことを認定しなければならなくなる。五四時期前後における文学革命派の林紓批判が、客観的資料の存在により間違っていたとせざるをえない。さらには責任者が指摘される事態が出現する可能性もある。そこまではやりたくない。現在のところは「区別がつかない論」と彼ら5人を結びつけさえしなければいい。そういう中国学界の判断なのだろう。

林佩璇は「区別がつかない論」について触れることを自主規制したのか。それとも出版社の「上級」から指示があったのか。それはわからない。林佩璇論文には「区別がつかない論」を提出していないという事実だけがある。あまりに明らかだから書くのはためらわれるが、林訳を研究する人が「区別がつかない論」を知らないはずがない。従来から林訳批判の重要点である。だからこそ林佩璇は意図的に隠蔽したと考える。

陳大康『中国近代小説編年史』（2014）<sup>\*4</sup>の例を思い起こす。

『繡像小説』の発行が遅延していた。この問題については日本と中国において1980年代から討論する文章が発表されている。だが中国学界は問題があることを認めなかった。

この問題の根底には阿英がいる。阿英は『繡像小説』の半月刊が守られたと考えていた。発行遅延などまったく発想しなかった。主編者李伯元の死去によって『繡像小説』は停刊したと阿英は断言したのだ。それが文学史上の常識になった。

しかし実は阿英の断定には根拠も証拠もなかった。ないにもかかわらず研究者たちは疑問も持たず長年にわたって阿英の断定を支持し追従した。阿英は学界の権威である。阿英が間違っているとは誰も思わなかった。研究者たちは半月刊が遵守され李伯元が死去すると停刊したと論文に虚偽を書き続けた。

問題が提起されてほぼ30年後、陳大康はまるで自分が発見したかのように『繡像小説』の発行が遅延していると説明した(序2頁)。阿英に誤解の原因があることには触れない。また発行遅延を主張していた先行論文のすべてを完全に無視した。

そういう例がある。林紓批判の根拠にされている「戯曲と小説の区別がつかない」にしても、数十年後に突然それは正しくないと言い出す可能性もある。私は別にそれを期待しているわけではない。

言及がなされない部分に重要な問題が隠されている。五四直前の林紓批判から五四以後に展開された林紓批判は歴史に存在した事実である。その史実を客観的に把握したうえでどのように評価するのか。それは中国学界の内部問題にほかならない。私が進めている研究とは直接の関係はないのだ。

#### 【注】

- 1) 林佩璇「林紓」方夢之、莊智象主編『中国翻訳家研究(歴代巻)』上海外語教育出版社2017.4。799-830頁
- 2) 原文はつぎのとおり。「1917-1919年、林紓卷入近代中国文学界有關古文与白話文的爭論, 1917年發表《論古文之不当[宜]廢》一文, 1919年發表《論古文白話之相消長》回応蔡元培、劉半農等人, 表達自己對保留古文的想法」809頁
- 3) 参考までにいくつかの文献を示す。網羅しているわけではない。

#### ○シェイクスピア関係

劉宏照「附録2 林紓訳作目録」『林紓小説翻譯研究』上海世紀出版股份公司、上海訳文出版社2011.10 学人論叢。359頁

張 治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「經典」』上海社会科学院出版社2012.8。184頁

張旭、車樹昇編著『林紓年譜長編(1852-1924)』福州・海峡出版發行集團、福建教育出版社2014.9。256頁

楊麗華『林紓翻譯研究——基於費爾克拉夫話語分析框架的視覺』北京・中国社会科学出版社2015.5。18頁。附録「林紓翻譯作品目録」153頁

#### ○デル関係

劉宏照「附録2 林紓訳作目録」371頁

楊麗華『林紓翻譯研究——基於費爾克拉夫話語分析框架的視覺』18頁

4) 陳大康『中国近代小説編年史』全6冊 北京・人民文学出版社2014.1

# 文明戯「ハムレット」について

—「鬼詔」と「竊国賊」

『清末小説から』第127号(2017.10.1)に掲載。文明戯「ハムレット」の初演年月日はすでに瀬戸博士によって指摘されている。1916年5月7日である。ところが別の資料が提出された。同じく『申報』掲載の上演広告だ。影印本によって確認すれば、初演は少しさかのぼる同年4月28日であった。あらためて瀬戸博士の発見した5月7日の新聞広告を読んでみる。そこで意外な事実が判明した。初演ではないにもかかわらず瀬戸博士は初演だと主張するためにわざと広告の後半部分を無視したのだ。演劇始まっていろいろのすばらしい芝居であると絶賛した部分だ。その内容はすでに上演されている事実を示している。瀬戸博士が主張したい初演と矛盾するため意図的に削除したとわかる。瀬戸博士が誇る荒唐技術である。自分の専門分野である文明戯研究でもその手法を使用していた。

## 1 脚本など

文明戯「ハムレット」の脚本は残っていない。もともと文明戯(中国の早期話劇)には脚本はなかった。「幕表」があるだけ<sup>\*1</sup>。一方で意外と脚本は残っているという指摘はなされている<sup>\*2</sup>。だがそれにも「ハムレット」は含まれていない。

「幕表」とはものの本によれば新劇の登場人物表、登場の順序、主要な台詞などを記録したものという。「表」というくらいだから一覧表か。普通、保存される性質のものではなさそうだ。

演劇の最終目的は上演することだ。その途中過程の脚本には重きがおかれな

のも無理はなかろう。新劇の筋を考えて演出する実作者にとって「幕表」は必要かもしれない。だが脚本を書いて台詞を明記したところでそれを当時の役者が読みこなせたかどうかは別の問題だ。演出家が役者にあわせて口立てで台詞を変えていく。役者がかわれば台詞も変化し続ける。作る側から言えば、脚本がなくても困らないし残らなくても不便ではない。

このように常識的なことを述べるのには理由がある。シェイクスピア作品を文明戯に仕立てるには、なにを手がかりにするだろうか。手元に抛るものもなく、ただ「ハムレット」という題名だけをたよりに新劇の粗筋を空想し組み立て台詞を創作できるだろうか。そういう素朴な疑問が出てくるからだ。（以下、シェイクスピアを莎氏、シェイクスピア戯劇の意味で莎劇などを使うこともある）

中国におけるシェイクスピア受容史について、それに近いありそうもないことを研究者が平気で記述している。清末の知識人はシェイクスピアの名前だけを知ってシェイクスピアを絶賛したと説明する。これほど当時の知識人をばかにした文章はない。そう書いている研究者がその矛盾に気づいていないのも不可解なことのひとつだ。清末の知識人が莎氏を賛美するには、それなりの根拠があるはずだとは思わないらしい。先行論文を読んで最初から否定的な視線しか持たないのが原因だ。

研究者自身が同様のことを行なっているからそれを投影しているのだろうかと思ってしまう。莎氏と莎劇に関連して「林紓批判」という名称だけを見て中身を吟味せず自分も追随して林紓批判を実行しているという意味だ。

## 2 徐半梅の文明戯「ハムレット」

徐半梅が『話劇創始期回憶録』（1957）\*3で次のように回想している。

民鳴社が活動を停止したあと徐半梅は数人と上海広西路の小型劇場笑舞台に劇団を組織した（87頁）。

有一回春雨連綿一星期多，我們正上演莎士比亞的《哈姆萊特》，廣告上的題目，我們用了兩句民間俗語，叫“天要落雨，娘要嫁人。”哈姆萊特王子的

這一出悲劇，便是為了他母親嫁人。88頁

ある時、春の雨が1週間余りも続いたことがあった。私たちはちょうどシェイクスピアの「ハムレット」を上演していたから広告の題目に民間の俗語を使い「雨降りで、母ちゃんは嫁に」とやった。ハムレット王子のこの悲劇は彼の母親が嫁いだためであった。

徐半梅は笑舞台の新聞広告について書いている。毎日のように出稿した新聞広告の文面はそのつどかえられたから上はそのひとつだ。

調べれば1971年に林彪が毛沢東暗殺計画に失敗し空路モンゴル方向に逃亡したときのことらしい。毛沢東が「行かせろ」といって「天要下雨，娘要嫁人」を口にしたという。そう伝えられているというだけ。事実かどうかは知らない。

寡婦である母親が再婚するという。息子はそうさせたくない。母親が息子に衣服を洗うようにいう。洗って乾けば再婚はとりやめよう。ところが長雨がつづいて衣服はとうとう乾くことがなかった。「雨降りで、母ちゃんは嫁に」というわけ。

春の長雨にハムレットの母親が再婚することを重ねた。うまい宣伝文句のように見える。中国の俗語としては、運命に対しては人力で制御しようがないという意味だ。長雨と再婚部分が重なり、ハムレットが父の仇を討って最後は全員が死ぬのが定められた運命ということならば一致する。

徐半梅は袁世凱の名前を出して3月のことだという。すると1916年に該当するだろう。予測するまでもない。袁世凱が皇帝になろうとしたとき舞台人は戯劇で大いに袁世凱を罵ったと徐半梅は説明している（85頁）。ただし彼は「シェイクスピアの「ハムレット」[莎士比亞的《哈姆莱特》]」と書いているだけにとどまる。上演した時の題名が「鬼詔」なのかあるいは「竊国賊」なのかについては言及していない（後述）。また袁世凱批判を込めて上演したとも明記はしない。前後の文脈からそう読めるということはいえる。

文明戯「ハムレット」の背景にあるというのはこうだ。袁世凱は1915年に共和制を廃止し帝制を復活させた。1916年1月より帝位につき、年号を洪憲とし国号を中華帝国に改めた。

ウェブを見ると2篇の文章が目についた。袁世凱を批判するために莎劇「マクベス」を改編して「竊国賊」にしたという説明がなされている。そう書くふたつの文章はともに同じ新聞広告を引用掲載している。文章は2016年4月の発表だ。シェイクスピア没後400年を記念したものと思う。

徐半梅のいう「ハムレット」がなぜ「マクベス」になるのか。

文章2篇の該当部分を紹介する。

### 3 新聞広告「竊国賊」

著者と題名は以下のとおり。

○羅昕「晚清民国時期的莎士比亚中文版都長啥様？」ウェブサイト『澎湃新聞』  
2016.4.20 電字版

漢訳シェイクスピアの歴史を紹介している。文明戯「竊国賊」についての説明を示す。

「1915年12月25日、袁世凱は翌年より「洪憲」と改元することを宣告すると大衆の反対を激発させた。そのような背景のもとでシェイクスピアの経典「マクベス」は翌年「竊国賊」に改編された。この莎劇は一時センセーションを巻き起こしたといえることができる」<sup>\*4</sup>

もとにしたのは莎劇の「マクベス」だと明記している。

次の文章も似たようなものだ。

○施晨露「莎士比亚在中国，這些故事你應該知道」ウェブサイト「上觀」2016.  
4.23 電字版

同じように文明戯「竊国賊」を説明して次のとおり。

「1916年、袁世凱が返り咲いて皇帝と称したことに対して新民社は「マクベス」を改編した文明戯「竊国賊」を上演し申報に大きな広告を出した」<sup>\*5</sup>

莎氏の「マクベス」をもとに改編して「竊国賊」にしたと説明している。ただし施晨露は新民社の興行だと述べて徐半梅の笑舞台とは異なる。当事者の証言と食い違うのが奇妙だ。

さて羅施のふたりとも莎劇だといっているが、よった版本が何であるかは説明し



ない。英語から直接漢訳したのか、その過程にはまったく言及しない。あまりにも明白で常識的な事実だから説明する必要はないという判断だろうか。それにしても両者ともにほぼ同様な記述であるのは不可解に感じる。

2篇の文章がともに掲載している新聞広告を引用する。



1916年《申報》上の《竊国賊》広告（ネットより引用）

劇場名あるいは劇団名が見えない。広告の一部分を切り取った印象を受ける。本来は表示してあったのを引用するにあたって上部を切除したのかどうかは不明（後述）。上から順に見ると「編演（鄭正秋）主任」とある。脚本創作と演出を鄭正秋が担当したという意味だ。

次は出演役者の名前が並ぶ。資料だから以下に示す。

周楽天、吳湘濤、徐青樵、沈冰血、徐半梅、韓達心、李悲世、汪優游、鄒劍魂、張嘯天、徐寒梅、羅笑倩、張利声、王羞華、邵迺琨。

5番目に徐半梅の名前が出ている。役者として舞台に立っていた。徐半梅の回憶録とこの新聞広告から見て笑舞台のものと考えてよい。

上演日時と演目を示して「三月二十六夜准演正秋新編名劇／竊国賊」だ。鄭正秋の名前を2度も出して宣伝になるくらい有名人であったことがわかる。題名に添えられた絵図は中国の皇帝がかぶる礼帽で「冕」という。前後に簾（旒）がつく。斜めに立てかけられたのは「笏」だろう。「竊国賊」の上演時に使用されたというよりも、ただの挿絵かもしれない。黄愛華は『時報』の上演広告を見て

「時装新劇」つまり現代劇だと書いているからだ\*6。

劇の内容を説明しているから冒頭だけを見よう。

「身は臣下でありながら君主を盗み国を盗み君主の后と私通する。身は弟でありながら嫂を盗み政権を盗み人の子に盗賊を父と認めさせる」\*7

その内容はどう見ても「ハムレット」だ。「竊国賊」という題名で上演されたのは間違いない。羅昕と施晨露がどうして「マクベス」だということのかわけがわからない。ふたりともに勘違いするということのも奇妙な話だ。

#### 4 文明戯「ハムレット」の成立と上演

文明戯の莎氏ものは、林紓+魏易訳『英国詩人吟辺燕語』（1904）にもとづいて改編した。そう解説した文章をよく見かける。これが一般常識なのだろう。

注に示した鄭正秋『新劇考証百出』の「莎士比亞著「颯媒」」に趙驥が注釈をつけて次のように説明する。

「この劇（注：颯媒）は林紓、魏易合訳の『吟辺燕語』からできている。『吟辺燕語』は1904年に商務印書館より出版された。表紙には「原著者英国莎士比亞、翻訳者閩県林紓、仁和魏易」と表記してある。実のところ該書はラム姉弟の『シェイクスピア物語 [莎士比亞戲劇故事集]』を訳したものである」208頁

『吟辺燕語』に収録されているのは「颯引 THE TEMPEST」だ。それを文明戯にして「颯媒」に改題したのかどうかは不明。また林訳ではシェイクスピアを莎士比と表記するのが正確だ。一般に莎士比亞というのとは異なるから注意されたい。

『吟辺燕語』に収録された「ハムレット」は題名を「鬼詔」という。父親の亡霊（鬼）が出現して弟に殺されたことを告げる（詔）ところからの命名だ。

趙驥は文明戯「鬼詔」について、そのもとになったのが『吟辺燕語』の「鬼詔」だと注をつけるべきだった（190頁）。単に莎氏の原作が *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark* だというのでは不十分である。この注釈だと莎劇から直接漢訳して脚本を作ったようにしか読めないからだ。また上演記録に言及しないのももの足りない。

鄭正秋『新劇考証百出』において「莎士比亞名著「鬼詔」」の粗筋が紹介されている（190-191頁。190頁は「莎士比亞著」と記す／影印353-351頁）。だが鄭正秋はそれが『吟邊燕語』の「鬼詔」にもとづくものだとか「竊国賊」に改題されたなどとは解説しない。どこでいつ上演したのかも書かない。周辺の事情説明ではなく文明戯「鬼詔」の内容を記録するのが主目的だからだろう。

それにしても鄭正秋が表題にしている「鬼詔」がまぎらわしい。『新劇考証百出』に「鬼詔」とあるから上演時もそのままの劇名だと普通は受けとめる。しかし文明戯の題名として実際に使用されたのかどうかはわからない。

混乱させるのは董健主編『中国現代戲劇総目提要』（2003）<sup>\*8</sup>でもある。1918年の項目に「劇名：鬼詔」を配置している。どう見ても「鬼詔」が題名だ。「訳編者待考」として鄭正秋を忘れている。粗筋は鄭正秋『新劇考証百出』からそっくり引用した。「竊国賊」だという説明もない。またなぜ1918年の上演にしたのか根拠は示されていない。1918年に「鬼詔」という劇名で上演したのかもしれないが、そこは不詳とするしかない。

「鬼詔」は鄭正秋の書き間違い、あるいは記憶違いの可能性はある。少なくとも1916年の段階で『申報』の新聞広告には「竊国賊」となっているのが事実だ。

上に見る『申報』の広告について羅昕、施晨露ともにその掲載年月日を明記していない。見れば上演が「三月二十六夜」と書かれている。「（1916年）三月二十六日」かと推測はする。今の段階で確定できないのでカッコを使った（後述）。

これとは別に1916年5月7日の新聞広告が紹介されている。瀬戸博士『中国のシェイクスピア』（2016）<sup>\*9</sup>より引用する。

文明戯では他のシェイクスピア作品と同様に『吟邊燕語』の『鬼詔』を脚色した作品が何回か上演されている。ただし、文明戯最盛期の春柳社、新民社、民鳴社ではなく、もう少しあとの上演であった。その最初は、申報で確認できる限りでは一九一六年五月七日に笑舞台で上演された『竊国賊』である<sup>[2]</sup>。「竊国賊」とは、国を盗む賊、悪人という意味である。広告文には「莎翁戯をみて竊国賊をみなかつたら非常に惜しい。ただ鬼詔は吟邊燕語<sup>ママ</sup>みえるが、最も有名で、最も脚色が難しく、最も演じにくく、配役が最も難し

い。思いがけず、正秋先生の脚色は非常に良く、名を竊国賊と改めた。脇役もまたよい。優游の王の弟、剣魂の後、悲世の女である」とある。これを見ると、鄭正秋が脚色し、自らハムレットを演じたいらしい。191頁

瀬戸博士の説明によると、文明戯「ハムレット」は最初から「竊国賊」という劇名で上演された。1916年5月7日のことだ。最初というのだからこれが初演になる。ここは瀬戸博士の新発見である。2005年の『中国話劇成立史研究』111頁では1916年9月3日に上演したと書いているが、さりげなく訂正したのだろう。

脇役者の名前を出して「優游の王の弟、剣魂の後、悲世の女」という。前出「三月二十六夜」の新聞広告に見える汪優游、郁剣魂、李悲世らがあてはまる。読者はお気づきであろう。瀬戸博士の記述には前出の新聞広告と一致しない箇所がある。写真を見る限り「三月二十六夜」の広告がすでに存在する。『申報』の舞台広告は1916年5月7日が最初ではないことになる。瀬戸博士は同じページで「この上演は好評だったようで、同年八月六日、九月二十九日にも上演されたことが、申報上演広告からわかる」と書く。文脈からいって瀬戸博士が発見した5月7日は初演だと断定していることがわかる。だが明らかに「三月二十六夜」の新聞広告と齟齬をきたしている。

上の広告文で『吟辺燕語』と「鬼詔」の名称を出しているのは興味深い。そのうえ「最も脚色が難しく」とも述べている。つまり鄭正秋は莎劇そのものから漢訳して脚本を作ったわけではないと明記しているのだ。莎劇にもとづきラム姉弟が小説化した『シェイクスピア物語』がある。それを林紓と魏易が漢訳して『吟辺燕語』にした。瀬戸博士が説明するとおり、鄭正秋はそのなかの「ハムレット〔鬼詔〕」にもとづき脚色して文明戯に仕立てた。莎劇とはいいいながらラムの小説である林訳の粗筋だけを主として利用した。つまり台詞についていうと原作の莎劇と文明戯「竊国賊」は基本的には別物である。鄭正秋による創作劇だといっていい。ところが広告では「莎翁戯」つまりシェイクスピア戯劇そのものだと宣伝している。鄭正秋も自著に「莎士比亞名著」と記して莎氏を前面に押し出した。

これこそ瀬戸博士のいう「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア

作品として紹介した」(96頁) ことにほかならない。瀬戸博士はそういつて林訳を批判した。だがこの文明戯「ハムレット」について瀬戸博士は批判しない。評価の二重基準を適用して平気である。

調べてみると瀬戸博士の上記引用と説明は奇妙で不可解で、はっきりいえば虚偽を混ぜ込んでいることが判明する。

## 5 一歩深める

そこにある文献を使用したにすぎないからいくつかの箇所が疑問のままに残った。

『申報』に見える「三月二十六夜」と記した広告の正確な掲載年月日が不明確だ。

文章に添えられた写真は修正されているのではないか。劇場名、あるいは劇団名を表示する部分が削除されていると思われる。普通はどこで上演するか明記するだろう。それがなければ新聞広告を出す意味がない。

瀬戸博士は「その最初は、申報で確認できる限りでは一九一六年五月七日に笑舞台上で上演された『竊国賊』である」と断言した。しかし「三月二十六夜」の広告はそれよりも時間的に先行するように見える。どちらが正しいのか。

以上の疑問は、新聞の実物で確認しなければ解決できない。

ということで『申報』影印版で確かめた。

「竊国賊」の広告についていうと1916年4月27日(陰暦三月廿五日)、同年4月28日(陰暦三月廿六日)の2種類があった。瀬戸博士が発見した5月7日より前に掲載されている。2種類ともに示す。

広告にある「三月二十六夜」は陰暦だった。中華民国元年から新暦を採用したが、民国5年になっても演劇界あるいは一般社会の日常生活では旧暦を使用していたことがわかる。陰暦三月廿六日(新暦4月28日)に上演するから前日の廿五日と当日の廿六日に広告を打った。これを見る限り「竊国賊」の初演は瀬戸博士のいう1916年5月7日ではなく、それより前の同年4月28日である可能性が高



1916年4月27日



1916年4月28日

い<sup>\*10</sup>。

劇場名の箇所が切断されていることも確認した。掲載した写真を見てもらえれば「笑舞台」であることがわかる。

念のために瀬戸博士が発見した5月7日の広告も見た。奇妙なことに瀬戸博士が翻訳して引用した広告文は全文ではなかった。全体のほぼ半分にすぎない。しかも前部にかたよっている。

## 6 瀬戸博士の嘘

冒頭に大きく「●看戯不看竊国賊太可惜」、次に小さく「▲看西装戯不看竊国賊更可惜」とあるが、瀬戸博士はそれらを省略した。

また引用最後部分の「優游の王の弟」と訳した箇所の上には「故」1字があり、下の文章に続いている。続く後半を翻訳引用しなかったから「故」とつながらなくなった。瀬戸博士は前後を取り繕うためにこの1字を無視した。

そこを含めて全文を引用する。瀬戸博士によって省略された箇所は黄色で示す。



1916年5月7日

活字の大きさは均一にした。実際の模様は写真を見てほしい。

●看戲不看竊国賊太可惜

▲看西装戲不看竊国賊更可惜

▲看莎翁戲不看竊国賊更大大可惜

莎翁戲 惟鬼詔（見吟辺燕語）最有名 而最難編 最難演 脚色最難配得當  
 万不料正秋先生編得非常之好 改名竊国賊 而配角又宜 故優游之王弟 劍  
 魂之后 悲世之女郎 均經人嘖嘖稱贊 而正秋之太子 更能以至誠摯之至情  
 至理動人 自有新戲以來 從未有過如此有價值 如此演得好 受歡迎之好戲  
 也

瀬戸博士は広告文の前半を訳し「これをみると、鄭正秋が脚色し、自らハムレットを演じたい」と説明して自分で推測するような書き方をした。しかし瀬

戸博士が省略した広告文後半には「正秋之太子」つまり鄭正秋のハムレットであると明記している。瀬戸博士の書き方では正確な説明になっていない。

脇役について瀬戸博士は「脇役もまたよい」と訳して現在形である。初演の広告だと考えているからそう翻訳したのだろう。だが実はこの部分は過去形なのだ。

「(脇役もよかった) だから優游の王の弟、劍魂の後、悲世の娘はすべて人々からしきりに褒めそやされたのだった [故優游之王弟 劍魂之后 悲世之女郎 均経人嘖嘖称赞]」

まだ幕も上がっていないのに「人々からしきりに褒めそやされた」と書くのは奇妙だ。だからこそ瀬戸博士は原文の「故」1字とうしろの関連する部分を削除したとわかる。もとの過去形を現在形へ意図的に変更するという小細工である。

瀬戸博士が弄した小細工を漢訳者の陳凌虹<sup>\*11</sup>はどう処理したか見てみよう。

陳凌虹は瀬戸博士の日本語をそのままには漢訳していない。『申報』の新聞広告から直接引用している。だから瀬戸博士がわざと削除した「故」1字も陳凌虹はゆるがせにせずそのまま引用する(180頁)。その処置は正しい。だが瀬戸博士の正しくない引用に縛られ後ろに続く「均経人嘖嘖称赞」を示してはいない。陳凌虹はこの部分がないと前後の文脈が通らないことを理解していただろう。しかし瀬戸博士の歪んだ引用を正すことはできなかった。というよりも、もし訂正していたら瀬戸博士の立論はその瞬間に崩壊するからそれはできない。ということとは陳凌虹もまた共犯者である。

ハムレットを演じた鄭正秋を、全体をまとめて人々を感動させたとほめあげて広告文最後の部分に続く。次がさらに重要だ。注目されたい。

「新劇が始まって以来、これほど価値があり、これほどうまく演じられ、人気を博したすばらしい芝居はいままであったことがない [自有新戯以来 從未有過如此有價值 如此演得好 受歡迎之好戯也]」

「いままであったことがない [從未有過]」とまで書いている。辞書的にいえば、空前の、前代未聞の、かつてない、などという意味だ。単なる宣伝文句で軽い表現だということではできない。なぜこの重要な部分を瀬戸博士は無視するのか。

全文を読めば1916年5月7日(旧曆四月初六日)の夜に最初の上演を行なうという予告の宣伝であろうはずがない。すでに上演されていることが明らかにされ



ているからだ。予告だと考えると強い違和感が生じる。時間が前後して辻褃があわない。

くり返す。5月7日が初演であれば、舞台が開く前から観客に大歓迎されたことになる。文章として成立しない。それとも当時の新聞広告だからでたらめの内容でも宣伝になればいいのだというか。ありえない。

広告に見える「いままであったことがない〔従未有過〕」という語句は、「竊国賊」がすでに上演されたことがあるから使用された。そう考えるのが自然だ。初演は1916年5月7日ではない。それ以前だ。証拠となる資料がある。前出1916年4月28日（陰暦三月二十六日）の新聞広告だ。

瀬戸博士は自分が発見したいいわゆる「初演」の新聞広告についてその後半部をなぜ紹介しなかったのか。

新聞広告は文明戯「ハムレット」が観客から絶賛された事実を明記し大いに宣伝しているのだ。引用紹介する価値があると私は考える。

広告の価値ある後半部を特別に意図して無視したことは、普通に見れば奇妙な措置だと感じられる。だがそこには瀬戸博士の隠した深慮遠謀がある。

瀬戸博士は文明戯「ハムレット」が上演された「その最初は、申報で確認できる限りでは一九一六年五月七日」だと断言した。1916年5月7日が初演であれば、新聞広告に書かれているすでに上演された時の状況説明と矛盾する。かといって5月7日以前の『申報』に「竊国賊」の上演広告を見つけることはできなかった（調査不足である）。5月7日が初演だとどうしても主張するために重要部分をわざと省略するという荒唐技術を使用したのだとわかる。直視したくない事実を切り捨てた。瀬戸博士は自分の発見を正当化するためにそれと矛盾する不都合な部分を無視したのだ。

すでにある結論にあわせて文献を意図的に読み、原文の論旨を強引にねじ曲げる。瀬戸博士がラム姉弟『シェイクスピア物語』の漢訳2種類を批判したとき披露した手法にほかならない。否定的な結論を用意したうえで序文を解釈しようとする。正しく記述している原文を誤りだと決めつけた。瀬戸博士の誤読である。訳者が戯曲と小説を厳密に区別しているにもかかわらず、瀬戸博士は自分の考える結論にあわせるためにわざと曖昧に翻訳した。印象操作である。

瀬戸博士は自分が専門とする文明戯研究でもそのやり口を実行していた。それを見て私は意表の外だとは思わない。

これほどの荒唐技術を駆使する能力を有するのは瀬戸博士を置いてほかにはないと断言できる。なるほど「林紓を詐欺師に認定し林紓の名誉を毀損する瀬戸博士」だけのことはある。

【注】

- 1) (趙驥)「附録1：鄭正秋、《新劇考証百出》与上海早期新劇」鄭正秋編、趙驥校勘『新劇考証百出』上海・中華圖書集成公司1919.4.10／北京・学苑出版社2016.1影印本。  
239頁
- 2) 飯塚朗「資料1 現存する「文明戯」脚本目録」『中国の「新劇」と日本——「文明戯」の研究』中央大学出版部2014.8.1 中央大学学術図書85。
- 3) 徐半梅『話劇創始期回憶録』北京・中国戯劇出版社1957.7
- 4) 原文は次のとおり。1915年12月25日、袁世凱宣布第二年改元“洪憲”，這激起了民衆們的反对。在此背景下，莎士比亞經典《麦克白》於次年被改編成《竊国賊》。這部莎劇可謂轟動一時。【追記】文明戯「竊国賊」の原作を「マクベス」と誤るのは、先行する複数の間違った記述に依拠したからだ。孟憲強『中国莎学簡史』（長春・東北師範大学出版社1994.8）11頁「為了抨擊袁世凱称帝，鄭正秋的葉風新劇社上演了根據《麦克白》改写成成的《竊国賊》，……（後略）」。139頁、459頁でも繰り返している。またつぎもある。謝天振、查明建主編『中国現代翻譯文学史（1898-1949）』（上海外語教育出版社2004.9）273頁「如1916年，袁世凱称帝，鄭正秋主持的葉風新劇社將《麦克白斯》改編成幕表戲《竊国賊》」
- 5) 原文は次のとおり。1916年，針對袁世凱復辟称帝，新民主社上演了《麦克白》改編的文明戯《竊国賊》，并在申報上登出大幅廣告。
- 6) 黄愛華「上海笑舞台的變遷及演劇活動考論」袁国興主編『清末民初新潮演劇研究』広州・広東人民出版社2011.1、302頁。『時報』1616.5.18-31笑舞台演出廣告。
- 7) 全文は以下のとおり。為人臣而竊君竊国 私通君后 為人弟而盜嫂盜政權 強人子認賊作父 此其人為何如人 此其事為何如事 此其時為何如時 此其勢為何如勢 認賊作父 戴賊為君 此其恥為何如恥 父仇不共戴天 而母且夫事乎殺父之仇 不得已裝瘋做

戯 以動娘心 到頭来大家難逃一死 此其慘為何如慘 以其人其事其時其勢其恥其慘  
一一演之于舞台之上 則其戲為何如戲 明眼人于此 其亦来洒一掬傷心淚乎

- 8) 董健主編『中国現代戲劇総目提要』南京大学出版社2003.12。133頁
- 9) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29。(日) 瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中国：中国人的莎士比亞接受史』広州・広東人民出版社2017.1。180頁
- 10) 1916年3月11日付『民国日報』に広告があるという。郝嵐「林紓与“娛樂化”的莎士比亞」(『読書』2005年第12期、電字版／「林訳与“林訳小説”」陳錦谷編輯『林紓研究資料選編』上冊 福建省文史研究館編2008.6所収)。これは2009年1月8日付ウェブサイト「豆瓣読書」のfeimo「林紓与“娛樂化”的莎士比亞」と同文。さらに張治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「經典」』(上海社会科学院出版社2012.8。192-193頁)も同様。ただし上演日時が明記してあるかどうかは不明。『民国日報』は未確認のため記録するにとどめる。  
【2017.11.14追記】1916年3月11日付『国民日報』には該当する広告は掲載されていなかった。  
【2017.12.7追記】旧曆三月十一日(1916.4.13)付『国民日報』も見たが該当する広告はなかった。  
【2017.12.29追記】王建開論文については別稿を参照のこと。
- 11) 陳凌虹は日本語著作『日中演劇交流の諸相——中国近代演劇の成立』思文閣出版社2014.8.20を刊行している。

## 文明戯「ハムレット」と『民国日報』の広告

『清末小説から』第129号（2018.4.1）に掲載。神田一三名を使用。文明戯「ハムレット」はその演目を「竊国賊」という。『申報』には確かに広告が出ている。上海で初演された。1916年4月28日（陰暦三月廿六日）である。ただし王建開、郝嵐および張治が『民国日報』の1916年3月11日に「竊国賊」の広告があると記述している。ならば初演はそちらの可能性もある。だが該当する『民国日報』を見れば「竊国賊」広告は存在しない。確認できないまま謎として残るかに思えた。研究者のひとりに問い合わせた。すると『民国日報』関連の資料を保存していないという。そのかわりに『申報』1916年4月28日を示した。それがあることについて私は以前に指摘している。結局のところ『民国日報』説は怪しい。怪しい源泉は曹樹鈞、孫福良『莎士比亞在中國舞台上』かと思った。ところがさらにさかのぼる汪義群論文が見つかって驚いたことだ。

結論を先にいう。存在を否定せざるをえないという結末である。早急すぎるというのであれば、問題を解決するにはもう少し時間がかかるといってもいい。ある新聞広告が問題だ。そこから文章を引用した中国人研究者に対して、本当に見たのかと疑問を提出することになる。

説明する。

文明戯「ハムレット [竊国賊]」の上海初演はいつなのか<sup>\*1</sup>。年月日を特定したい。これが課題だ。

文明戯の初演を確かめるためには、発行年月日を記載した新聞が資料になる。

『申報』に掲載された文明戯「竊国賊」の上演広告が使われる理由だ。

瀬戸博士は該紙1916年5月7日付広告を発見した。それに先行する広告は示さない。普通に考えてその5月7日が初演ということになる。当の広告から文章を引用して瀬戸博士が説明している。これから上演するという予告だ。瀬戸博士の紹介を読んだ人は5月7日に初演された動かぬ証拠だと考えるだろう。

しかし5月7日（旧暦四月初六日）の該当広告を見れば疑惑が生じる。そこに書かれた内容は以前に上演したことを説明しているからだ。なぜそのような違いがあるのか。

新聞広告には次の部分がある。だが、瀬戸博士は意図的に無視して紹介しなかった。その箇所は以下のとおり。

新劇が始まって以来、これほど価値があり、これほどうまく演じられ、人気を博したすばらしい芝居はいままであったことがない

自有新戯以来 従未有過如此有価値 如此演得好 受歡迎之好戯也

注目点は次の語句だ。「これほどうまく演じられ、人気を博したすばらしい芝居 [如此演得好 受歡迎之好戯]」だと役者と観客の様子を述べている。ここを見ればすでに上演されていることが明らかだ。さらに「いままであったことがない [従未有過]」という字句につながっている。すでに公演された事実を強固なものにする。「新劇が始まって以来 [自有新戯以来]」のすばらしい芝居だという。自讃を含んでいるにしても好評だった。

瀬戸博士の説明によれば広告掲載の当日が初演でなくてはならない。ところが広告文面は瀬戸博士の説明を否定する。「竊国賊」は5月7日に上演されたが初演ではない。

新聞広告は過去の上演について述べている。初演はさらにさかのぼると推測することができる。だが瀬戸博士の読解によるとこれから上演される未来のことに変容する。過去と未来の区別がついていない。どうしてそうなるのか。

一見不可解な記述だ。しかし瀬戸博士の文章を読んだことがある人なら理解するだろう。もともと思考方法がそうになっている。先に結論を下すという例のやり

方だ。

5月7日を初演日だとまず断定する。その結論になるように実在する広告文を脳内で改変しながら読む。自説に好都合な部分だけを抽出し、都合の悪い事実は無視破棄する。その結果、上に見るように過去を未来にすり替えた。瀬戸博士が常用する荒唐技術だ。瀬戸博士にしてみれば日常のことであって奇妙とは思わないのだろう。

影印本で調べると『申報』の1916年4月27日（陰暦三月廿五日）および翌日の4月28日（陰暦三月廿六日）に「竊国賊」上演予告の広告が掲載されている。瀬戸博士が指摘した5月7日ではない。それ以前の4月28日に上演されている。この事実を新聞によって確認することができる。「竊国賊」の初演は5月7日ではなく4月28日である可能性が高い。

「可能性」と言うのは、さらにさかのぼる1916年3月11日付『民国日報』の広告を紹介する文章があるからだ。これが本稿の問題である。

そういうのは次のふたりだ。あとで見つけたもうひとりの論文1本を追加する。さらにそれらの源泉となった書籍を最後に紹介する。

郝嵐「林紓与“娛樂化”的莎士比亚」(2005)<sup>\*2</sup>および張治『中西因縁』(2012)<sup>\*3</sup>である。両者ともに広告文の一部を引用する。引用しているから実物で確認したと思う。重要なことがある。広告に上演日時を明記しているのか。これへの言及はない。

もし3月11日付『民国日報』に上演日時の記載があれば、『申報』広告の4月28日上演よりも早まる。実際の上演は3月なのか、あるいは4月なのか。私が興味を持つ理由だ。

3月であろうと4月であろうと重要な問題ではないという人が必ず出てくる。いつものことだ。重要な問題でなければ、そういうその人が簡単に指摘してくれないか。自分でできないことをいちいち批判してどうするのだろう。批判をするためにだけ批判をしている。

さて郝嵐と張治は広告の一部を引用している。3月11日という日付と文章を掲げている。くり返すが実物で確認していなければ書くことができない。普通はそう考える。

『申報』掲載の笑舞台「竊国賊」広告がある。前述のとおり1916年4月27日（陰曆三月廿五日）、同年4月28日（陰曆三月廿六日）に連続して掲載された。それらを根拠にして「竊国賊」初演は1916年4月28日（陰曆三月廿六日）であると私は推測している。



『申報』1916. 4. 28

今問題にしている広告本文のみを『申報』から原文のままに再度引用する。新聞広告では句読点は使用せず1字空きで表している。黄色で示した部分については後述する。

爲人臣而竊君竊國 私通君后 爲人弟而盜嫂盜政權 強人子認賊作父 此其  
 人爲何如人 此其事爲何如事 此其時爲何如時 此其勢爲何如勢 認賊作父  
 戴賊爲君 此其恥爲何如恥 父仇不共戴天 而母且夫事乎殺父之仇 不得已  
 裝瘋做戲 以動娘心 到頭來大家難逃一死 此其慘爲何如慘 以其人其事其  
 時其勢其恥其慘 一一演之于舞台之上 則其戲爲何如戲 明眼人于此 其亦  
 來洒一掬傷心淚乎

シェイクスピア原作『ハムレット』のあらすじを述べている。最後には関係者

全員が死亡するところまで書く。観客は涙を流すだろうと予測までする。広告だからありうる。今夜シェイクスピア原作の『ハムレット』を上海で上演するという予告だ。孟憲強らが書いている『マクベス』ではないことにご注意いただきたい。

ただし文明戯はシェイクスピア原作といいながら莎劇そのものではない。よく知られている。林訳『吟辺燕語』所収の「鬼詔」の筋書きを借りて鄭正秋が台詞を創作した。これが文明戯「竊国賊」だ。

郝嵐は1916年3月11日付『民国日報』に「竊国賊」の広告があると指摘する。さらにそこから引用するのだ。『申報』と『民国日報』という異なる新聞でありながら文面を見る限り広告文は一致している。広告主が同じなら媒体が異なっても同文であることは不思議ではない。

しかし郝嵐が示したのは広告の全文ではない。上記の黄色部分は省略している。しかも省略したことを説明しない。あたかも一文でつながっているような引用のしかただ。「動」1字を写し忘れていた。正確な引用になっていないのは残念なことだ。

また張治が引用しているのは冒頭部分のみ。「為人臣而竊君竊国，私通君后，為人弟而盜嫂盜政權」は郝嵐の引用と最初部分が一致する。

『民国日報』に掲載されたという以上の引用は、『申報』の広告文と同一である。同じ広告を別の新聞に使いまわすことはあつたらう。

本稿ではさらに王建開「藝術与宣伝」（2005）<sup>\*4</sup>を加える。

王建開も177頁の欄外注に『民国日報』1916年3月11日から「竊国賊」の宣伝文を引用している。ところがこれが省略部分までも郝嵐が示したものとまったく一致するという不可思議さだ。初出の刊行年月を見れば王建開の方が郝嵐よりも公表が早い。郝嵐が王建開を引用したのだろうか。省略箇所まで同じになるのだからそうとしか考えられない。

結局のところここで問題が生じる。王建開、郝嵐、張治の三人が見た、あるいは示している1916年3月11日（陰暦二月初八日）付『民国日報』だ。該紙該号を写真で見てもその広告が存在しない。

新聞では芝居関係の広告はまとめて掲載されるのが当時の習慣だ。天蟾舞台、



群仙茶園、大舞台、民興社、丹桂第一台、新舞台が広告を出稿している。だがどこにも演目の「竊国賊」はない。引用している広告文が、ない。あるはずのものがいないから奇妙だと思う。



『民国日報』1916. 3. 11

過去の経験から「1916年3月11日」は旧暦ではないかという推測が生じる。新暦旧暦混用は『申報』で実例を見た。そこで『民国日報』1916年4月13日（陰曆三月十一日）の複写を入手した。次のものだ。



『民国日報』1916. 4. 13  
(陰曆三月十一日)

丹桂第一台、群仙茶園、天蟾舞台、新舞台、民興社の広告が重なる。大舞台は

広告を出さなかった。ここにも「竊国賊」の広告は見えない。

王建開、郝嵐、張治の三人が引用している新聞広告が存在しない。どこにある文章なのだろうか。奇妙で納得のいかない結末という理由だ。

郝嵐に問い合わせた。しばらくして返答があり『申報』1916年4月28日の広告が添付されている。それは知っている。肝心の『民国日報』については説明がなかった。

私が調べた結果によると『民国日報』の広告は怪しい。3月11日付広告の存在については大きな疑問符をつけざるをえない。

古書で購入した1本を紹介する。曹樹鈞、孫福良『莎士比亚在中国舞台上』(1989)<sup>\*5</sup>である。



興味深い。おおよその内容はつぎのとおり。

内容提要、張君川「序」、第1章 莎士比亚与中国的戲劇創作、第2章 莎士比亚在中国舞台上（上）など、また「附録」1、莎士比亚戲劇在中国舞台上演出紀事（1902-1989）がある。

なにが「興味深い」といえば、文明戯「竊国賊（ハムレット）」の『民国日報』1916年3月11日上演広告から文章を引用していることだ。その引用文はず

でに紹介した王建開、郝嵐らと同文である。なるほど『莎士比亞在中国舞台上』が誤りの源泉かと思った。ところがその先があるのには驚いた。

曹樹鈞と孫福良が連名で公表した論文（『民国日報』に言及なし）が中国莎士比亞研究会編『莎士比亞在中国』（1987）<sup>\*6</sup>に収録されている。該書には汪義群「莎劇演出在我国戲劇舞台上的變遷」が見える。



この汪義群論文93頁にそのまま「竊国賊」の広告が引用されており「見1916年3月11日《民国日報》」（103頁）とあるのだ。曹孫論文と汪論文は同じ書籍に収録されていることにご注目いただきたい。

曹樹鈞と孫福良のふたりは汪義群論文を読んでいるはずだ。彼らふたりの引用は汪義群論文にもとづくと考えていだろう。

発表時間を見るかぎり『民国日報』についての言及は次の順序になる。汪義群→曹樹鈞と孫福良→王建開→郝嵐→張治だ。順番に引用していったということではないだろう。汪義群論文が最初であってそれをのちの全員が写したのではなかろうか。典拠を明示していないから推測するだけ。

まとめる。

1916年3月11日付『民国日報』に「竊国賊」の広告があると最初に指摘した

のは汪義群である。それを曹樹鈞と孫福良、王建開、郝嵐、張治らは各人で現物を確認せず書き写した。文章の一部を省略した箇所まで一致しているという不思議さだ（張治は冒頭部分のみ）。

残る問題は汪義群が提示した『民国日報』1916年3月11日の広告だ。すでに実物写真で確かめたように当日該紙に「竊国賊」の広告はない。ありもしない広告を汪義群はどこで見たのだろうか。不可解だといわざるをえない。問題を解決するにはもう少し時間が必要だ。

【注】

- 1) 樽本「文明戯「ハムレット」について——「鬼詔」と「竊国賊」『清末小説から』第127号 2017.10.1
- 2) 郝嵐「林紓与“娛樂化”的莎士比亚」『読書』2005年第12期（総第321期）2005.12.1、電字版。同「林紓与“林訳小説”」陳錦谷編輯『林紓研究資料選編』上冊 福建省文史研究館編2008.6所収。これは2009年1月8日付ウェブサイト「豆瓣読書」のfeimo（郝嵐）「林紓与“娛樂化”的莎士比亚」と同文。また、郝嵐「莎士比亚在1916年前的中国」『清末小説から』第91号 2008.10.1においても同じ広告文を引用する。
- 3) 張治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「經典」』上海社会科学院出版社2012.8。192-193頁
- 4) 王建開「藝術与宣伝：莎劇訳介与20世紀前半中国社会進程」台湾『中外文学』第33巻第11期（総第395期）2005.4。37頁／張衝主編『同時代的莎士比亚：語境、互文、多種視域』上海・復旦大学出版社2005.12所収。177頁
- 5) 曹樹鈞、孫福良『莎士比亚在中国舞台上』哈爾濱出版社1989.4
- 6) 中国莎士比亚研究会編『莎士比亚在中国』上海文藝出版社1987.12

## 莎劇のようなもの

—文明戯シェイクスピア

『清末小説から』第131-132号(2018.10.1-2019.1.1)に掲載。神田一三名を使用。文明戯シェイクスピアは莎劇と称している。ただしその発生の経過をみていくと複雑なものであることがわかる。直接には林訳『吟辺燕語』が存在する。それを使用し粗筋をたどるだけで台詞は創作した。その林訳『吟辺燕語』はラム姉弟『シェイクスピア物語』を底本にして漢訳したもの。莎劇を小説化したラム本を漢訳したのが林訳『吟辺燕語』だ。つまり英国の戯曲から小説へ、それを漢訳してから最終的に中国の戯曲へという変化をたどっている。文明戯は「莎劇のようなもの」にならざるをえない。林訳批判と結びついているから興味深い。『申報』の広告に見るいくつかの莎劇のようなものを紹介する。研究論文では取り上げられることがそれほど多くない。新聞広告だから公演月日はわかる。だが実際にどのように演じられたかその内容は不明のまま。おおよその状況を知ることができるだけ。文明戯研究にある困難さを指摘する。「文明戯シェイクスピア一覧」を作成し附録として文末に置く。

本稿の題名は、副題である文明戯シェイクスピアを指す。

文明戯の主宰者はシェイクスピア(莎氏)の戯曲(莎劇)だと宣伝している。だが莎氏原作ではあっても莎劇そのものではない。基本的には別物である。その理由は簡単だ。文明戯シェイクスピアは莎劇から直接漢訳してはいないからだ。台詞についていえば翻訳ですらない。ほとんど創作だといっていいたいだろう。莎劇の名前をかりて一部は中国風に改変したともいわれる。

## 1 林訳と文明戯

文明戯シェイクスピアの根底には林訳『英国詩人吟辺燕語』（1904）が存在する。これは周知のとおり。『吟辺燕語』はラム姉弟『シェイクスピア物語』を翻訳したものだ。ラム姉弟は莎劇を小説化し林紘+魏易がそれを漢訳した。小説を翻訳したから小説になったにすぎない。ところが文学革命派は、林紘たちが無知だから戯曲を小説に書き換えたと言ったと非難した。林紘に対して行なった根拠のない誹謗すなわち中傷である。

文明戯は林訳小説をもういちど戯曲に書き換えるという複雑な過程を経て成立した。図式化すれば、莎劇→ラム姉弟小説→林訳小説→文明戯という流れになる。莎劇から文明戯にいたるまで中間に英語と漢語の小説2種類を経由している。

文明戯シェイクスピアは、新聞に掲載した公演広告に莎氏原作をうたい莎劇を意味する単語を大書した。しかし『吟辺燕語』が存在していることは一部を除いて基本的に触れない。触れたとしてもラムの名前を広告で提出することはまったくくない。その内容は莎氏原作から遠く離れたものだ。成立の過程を理解すれば容易に想像できる。

文明戯シェイクスピアは林訳から粗筋を借りただけ。台詞は創作した。その脚本は残っていない。ラム本の林訳によって莎劇の概略は伝えられたかもしれない。だが文明戯の台詞そのものは莎劇とは似てもつかないものにならざるをえない。

孟憲強『中国莎学簡史』（1994）\*1がある。鄭正秋が袁世凱を批判するために「竊国賊」を作った時のことを次のように説明している。

演出をする時、鄭正秋は新しく作った挿入歌を加え戯曲の影響力を強化し観客の憤怒の感情を歌うと一節ごとに喝采の声があがるという藝術的効果を獲得したのだった [在演出時鄭正秋還加上了新編的插曲，加強了戲劇的感染力，唱出了觀衆的怨憤之情，獲得了一句一彩的藝術效果]。11頁

ここを見れば文明戯「竊国賊」は莎劇の「ハムレット」とは別物であることが

明らかだ。しかも上演日時が推移し役者も入れ替われば、それにつれて台詞が変化するのは目に見えている。当事者の証言によれば、脚本がないから台詞の相当部分が役者の自由に任されていたともいう。「莎劇のようなもの」と称する理由だ。

いうまでもなく翻訳にも時代の流れがある。莎劇は最初から戯曲のままに漢訳しなければならぬなどと私は考えていない。

外国作品は多種多様な形で中国に移入された。原書に使用された言語も各様だ。書かれた原語に基づかなければ翻訳ではないという人がいるだろうか。そういう硬直した思考では翻訳は成立しない。林紓らが翻訳したスペイン、ロシア、日本作品などは、ほとんどが英語からの重訳だ。

当時は日本語経由で漢訳された作品も多い。あるいはフランス語原作から英語訳を経て重訳した例も少なくはない。たとえば胡適はドーデ作「最後の授業」をあたかもフランス語原作から直接漢訳したように装った。しかし実際は英語に重訳したものを底本にした漢訳である。胡適が擬装した理由は林紓批判と関係する。外国語ができなかった林紓は協力者が原書から翻訳するのを聞きながら文言を用いて筆記した。林紓の間接訳を批判するためには胡適自身は直訳したと装う必要があったということの意味する。

それらを否定するならば中国の翻訳史には空白時期が発生するだろう。いろいろな経路を通して漢訳が生まれた。まことに普通で当然のことではなからうか。

ラム本を漢訳した『吟辺燕語』が刊行されると読者は大いに歓迎した。郭沫若自伝『少年時代』（1951/1957）には『吟辺燕語』を賞賛した回想部分（127頁）がある。林訳を擁護するとき必ずといっていいくらい紹介される。逆に林訳批判のときには言及されない。無視である。賞賛があろうがなかろうが『吟辺燕語』そのものは重版をくり返している。その時代的要望に合致したということだ。またそれにもとづいた文明戯が出現するのもその必然性があった。中国の当時の状況においてはそれぞれが存在する価値がある。それらを踏まえて莎劇から全訳された田漢漢訳『ハムレット』が出現するという順序だ（単行本は1922年刊行）。

瀬戸博士は林訳『吟辺燕語』について「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と批判した。ならば『吟辺燕語』をもとに創

作したにもかかわらず莎劇だと宣伝した文明戯に対しては、その2乗の批判をするのが当然だろう。それをしないから評価の二重基準だと私は指摘している。

現在の政治基準を過去に押し当てて判定することには意味がない。林訳は批判するが文明戯に関しては問題視せず黙過するという評価の二重基準は、研究として成立しない。私はそう言っているにすぎない。

## 2 文明戯の新聞広告

出発点は文明戯「ハムレット [竊国賊]」だ。『申報』と『民国日報』の一部広告を調べた。

『申報』には文明戯「竊国賊」の広告が複数回掲載されている。こちらは影印本で確認できる。広告があるというもうひとつの『民国日報』については謎だ。汪義群、曹樹鈞+孫福良、王建開、郝嵐、張治たちはそろって該広告が『民国日報』に掲載されたと記述している。しかし彼らが明記した日付の該紙上に「竊国賊」の広告を見つけることができない。奇妙な結末だった\*2（後述）。

そこで本稿だ。文明戯「ハムレット」の前後に出された広告を見る。

劇団あるいは劇場側は新聞に広告を掲載し莎劇だと宣伝している。くり返すが莎劇のようであって実はそうではないのが文明戯シェイクスピアだ。

郝嵐「林紓与“娛樂化”的莎士比亚」（2005）がいくつかの作品を掲げている。『申報』の広告を紹介する前におおよそを知るためにそこから引用して以下のとおり。（ ）は筆者の注。原題を日本語で示す。

1913年 鄭正秋の「肉券（ヴェニス商人）」

1916年まで 「竊国賊（ハムレット）」、包天笑編訳「女律師（ヴェニス商人）」、「黒將軍（オセロ）」、「姉妹皇帝（リア王）」、「新南北和（マクベス）」

上演されたときの題名を並べただけ。具体的な説明はない。ひとこと述べれば、包天笑「女律師」を上演したのは女子学生だ。職業演劇の文明戯には入らない。

同じく郝嵐の「莎士比亚在1916年前的中国」（2008）\*3によると文明戯につい



ては次のとおり。少し詳しい。

1913年7月に鄭正秋が新民社「肉券（ヴェニスの商人）」を上演した。12月9-23日は呉我尊らが長沙寿春園で「馴悍（じゃじゃ馬馴らし）」などを上演。1914年に新劇同志会が「女律師」を、陸鏡若の春柳劇場が「鑄情（ロミオとジュリエット）」「馴悍記」「倭塞羅（オセロ）」などを上演。1915年旧暦五月十二日（6.24）には民鳴社が「借債割肉（ヴェニスの商人）」を上演した。1916年に上演最多の文明戯莎劇は「ヴェニスの商人」で5劇団が、次は「馴悍」「鑄情」でともに2回という。「ハムレット」は1916年に徐半梅の笑舞台「韓姆列王子」、導社「篡位盜嫂」（原名「乱世姦雄」）、鄭正秋の蕪風新劇「竊国賊」がある。ほかは同年5月に笑舞台「女律師」、7月「黒將軍（オセロ）」となる。

こちらには包天笑「女律師」を掲げない。

以下は重複する部分もあるが前出孟憲強による。

「黒將軍」は1916年7月に笑舞台<sup>44</sup>で公演された（459頁）。「姐妹皇帝（リア王）」は作品名「口孝与心孝」で掲げられる（140頁）。

同一作品に複数の文明戯題名がある。上演した劇団が異なるからだろうか。また同頁に「新南北和（マクベス）」として「巫禍」あるいは「竊国賊」を出す。「竊国賊」は「ハムレット」だから孟憲強の勘違い、あるいは間違っただけを引用した。「竊国賊」を「マクベス」とする誤りが今でも拡散しているのが現状だ。文明戯の内容そのものが不明だから題名を取り違えることも生じるのだろうか。

### 3 『申報』 広告の莎劇

『申報』の広告を見ると「竊国賊」以外にも莎劇と称する作品がいくつか上演されている。以下にそれらを簡単に紹介する。1916年の文明戯「竊国賊」前後に公演されたものに限って広告の実例をいくつか示す。文明戯シェイクスピア全般については巻末の「文明戯シェイクスピア一覧」を参照のこと。

本稿で掲げるのは関係部分の見出しを中心にした広告文だ。説明するために掲載日順に a b c を振る。

広告に共通して大きく掲げているのは「沙翁劇」「莎士比亜名著」という表現

だ。莎氏の原作であることを強調する。しかしそれらが林訳『吟辺燕語』を底本に使用していることは間違いない。新聞広告の一部ではそれを明らかにした<sup>65</sup>。題名が共通するところからも林訳の存在がわかる。当時、中国では莎劇の漢訳はまだ刊行されていない。前述のとおり莎劇原文にもとづいた中国最初の単行本は田漢漢訳『哈孟雷特（ハムレット）』だ。1922年の出版である。それ以前は莎劇関連でまとまったものといえばラム本の漢訳である『海外奇譚』（1903）と『吟辺燕語』（1904）しかなかった。

a 1916年1月20日（民国四年旧曆十二月十六日）

民鳴社 注意／沙翁劇／出現 「十六夜演洋装劇一／獄配」「十七夜演洋装劇二／医諧」

特大で「注意／沙翁劇／出現」と掲示する。莎劇であることをそれほど強調し

たかった。

広告の説明文冒頭は大活字で「この人こそが劇作家の祖先である [此老却是劇本家的老祖宗]」と打ちあげる。莎氏を指して「英国の名前を知られた詩人のシェイクスピア [英国鼎鼎大名之詩家莎士比亜]」だと説明した。

漢語の「詩家」は日本語の「詩人」である。莎劇は詩だからそれで間違いない。日本語の「劇作家」、広告の漢語「劇本家」と内容は同じだ。莎氏の時代には彼を指して「詩人」と呼んだ。「劇作家」ではないところに注目してほしい。文明戯の関係者も林紓と同様にほぼそれを受け継いでいる。詩人と劇作家を区別する現在の見方を当てはめることはできない。

それにしても上の広告にはラム姉弟も林訳『吟辺燕語』も提示しない。莎氏を直接持ち出す神経が太い。もっとも一部の広告で示しているといってもせいぜいが『吟辺燕語』どまりだ。その著者がラム（蘭姆）であるところまでは明らかにしていない。明記する必要を認めなかったものか。莎氏の名前だけで十分だという判断が働いたのかもしれない。それくらい厚顔でなければ中国では演劇人として通用しないのだろう。

旧暦十六日夜に上演する「獄配」は、莎劇でいえば **MEASURE FOR MEASURE**（尺には尺を）である。『吟辺燕語』所収の題名と同じ。新聞掲載の当日に上演したとわかる。

翌旧暦十七日夜に予定している「医諧」も同じく『吟辺燕語』にある **ALL'S WELL THAT ENDS WELL**（終わりよければすべてよし）だ。

ふたつの文明戯を紹介して次のように述べる箇所は興味深い。

「獄配」は我が国の人々の家族制度についての観念を改良することを促進するだろう [獄配可以促進吾国人改良家族制度之観念]

「医諧」は我が国の人々の婚姻階級についての思想を打破するだろう [医諧可以破除吾国人婚媾階級之思想]

劇団が出した新聞広告だ。そこには主催者の思考が反映されていると考えていい。文面を見るかぎりいずれも社会改革、つまり人々の考えを変える効用を期待

していることがわかる。演劇を演劇として楽しむという姿勢ではない。文明劇の劇団の中には、政治宣伝のために演劇をしていた人がいたと知られている。新民、民鳴、啓民、開明、民興などの劇団名を見れば大体の傾向が予想される。上の例もその中に入れることができるだろう。

広告は以前に上演された莎劇としてつぎの3作をいう。すなわち、「肉券」**THE MERCHANT OF VENICE**（ヴェニス商人）、「馴悍」**THE TAMING OF THE SHREW**（じゃじゃ馬馴らし）および「冤乎」**MUCH ADO ABOUT NOTHING**（から騒ぎ〔驥36〕。記号は本稿巻末一覧）である。

「肉券」は鄭正秋が脚本化して公演したのは1913年7月だ。そう孟憲強は書いている（139頁。458頁では3月）。「馴悍」も同年12月、呉我尊らによって長沙で上演された（458頁）。1916年から見れば3年前のことだ。「冤乎」の上演については不明。

最後に今後の予定に触れているのが興味深い。

シェイクスピアの著名な悲劇「鬼詔」と「鑄情」の2作はすでに脚本作りと演出を進めている〔莎翁之著名悲劇（鬼詔）（鑄情）二劇亦已從事編排〕

一見して上の文句は奇妙だとわかる。なぜなら莎劇そのものを使用するのであれば「脚本作り」をする必要はない。しいて言えば英文原本から漢訳しているというくらいの表現になるはずだ。ここから文明戯の裏事情が透けて見える。すなわち題名からして林訳を利用していることを示す。この2作品ともに林訳『吟辺燕語』の題名そのままなのだ。「鬼詔」**HAMLET**（ハムレット）と「鑄情」**ROMEO AND JULIET**（ロミオとジュリエット）にはかならない。

それらをもとにして脚本をあらたに作っていることが明らかだ。「鬼詔」は「竊国賊」と改題され、この予告より約3ヵ月後に笑舞台で公演が実現する。「鑄情」については後述。

b 1916年1月21日（民国四年旧曆十二月十七日）

民鳴社 十二月十七夜戲准演西装新劇 注意／沙翁劇／出現 「医諧」



c 1916年 3月 17日 (民国五年旧曆二月十四日)

笑舞台 准十四夜開幕／開演莎士比亞名著「假面具」

電話 一三五五

廣西路 頭路

夜戲 價目 月樓六角 特座五角 特座四角 頭座三角 四座二角

日戲 價目 月樓四角 特座三角 特座二角 頭座一角

特別請新劇大名家演尚新劇

吳王張徐韓李汪鄒張梅沈王周 謝天樂僧梅血冰梅寒天晴魂謝遊汪世悲心遠梅半聲利華秦壽湘

陳隆孫孫徐陳邱馬汪路吳兆汪尤鄒顧馬張顧張陸曾張沈章朱李 汝又大小奇奇氣魁紹夢天就許範西覺清顧大顧一冷有影亮淡鏡恨 英天凌痛玉情月聲野龍霞兒其遠雲因風顧公誠影觀年英天月明恨

准十四夜開幕

開演莎士比亞名著「假面具」

假面具

祖看老 究竟編如的

ここにある「假面具」広告は「莎士比亞名著」を強調している。莎氏の名作というのだが広告の内容説明<sup>8)</sup>を読んでも原作がなにか思いつかない。孟憲強によると「一報還一報」だという<sup>9)</sup>。

「一報還一報」は漢語の題名で中身は MEASURE FOR MEASURE (尺には尺を)だ。すると不思議なことになる。この「假面具」は1月に1夜だけ上演した



「獄配」と同じである。再度公演するに際して改題したのだろうか。では孟憲強はなぜ「獄配」との関係について説明しないのか。理由がわからない。

劇団が異なる、あるいはある程度の時間をおけば改題する可能性はあるかもしれない。民鳴社から笑舞台への変更、また1月20日夜から3月17日夜という期間はその「ある程度」になるのか。しかし普通は告知するのではなかろうかと疑いもする。題名は違うが内容がほぼ同じであれば観客もとまどうだろう。それとも題目を変えなければならぬほどに内容も改変しているのだろうか。いくつもの疑問が生じる。そこを説明する研究者は見当たらない。

孟憲強(141頁)は鄭正秋『新劇考証百出』から上演された文明戯シェイクスピアを抽出している。ただし文明戯の題名と莎劇の原題を示しているだけ。『吟辺燕語』の記述からふたつを抜き出す。( )内は莎劇の漢訳題名。

《維也納大公》(《量罪記》)

《假面具》(《一報還一報》)

『吟辺燕語』は20種を収録する。孟憲強はそれに対応させて20種の文明戯題目を掲げ、もとになった莎劇の題名を注記している(ように見える)。

ところが上の2種を見るとおかしなことになる。「量罪記」と「一報還一報」はともに「尺には尺を」の漢訳題名だ。すると同一作品が別名の文明戯になったことを示す。20種あるはずのものが19種にしからず1種が行方不明である。孟憲強はこれについて説明する必要があった。それが無い。先行する文献を単に集めただけで検討しなかったらしい。孟憲強が知らずに行方不明にした作品は「仙獐」A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM(夏の夜の夢)である。文明戯「夏夜夢」だという。

巻末の「文明戯シェイクスピア一覧」をご覧いただきたい。『吟辺燕語』の20作品が文明戯になったときどのような題名で上演されたかをまとめた。

林訳「獄配」は、文明戯での題名はほかに「假面具」「退位」「維也納大公」などがある。当時の文明戯関係者は題名を統一するのを感じなかったらしい。

d 1916年3月21日（民国五年旧曆二月十八日）

笑舞台 特請新劇大家開演高尚新劇（役者名省略）十八夜准演雙齣好戲／「哀情新劇 禽海石」「莎士比亞名著 冤縁」

電話三五五

廣西路頭

夜戲價目  
月樓六角  
特前五角  
特前四角  
頭座二角

日戲價目  
月樓四角  
特前三角  
特前二角  
頭座一角

特請新劇大家開演高尚新劇

周王沈徐張鄒汪李韓徐張王吳  
天樂伯瘦血冰梅寒天晴魂劍遊優世悲心達梅半聲沈華朱李  
陳徐孫孫徐陳邱馬江駱吳范汪尤邵顧馬張張顧張陸曾張沈章朱李  
汝又大小奇奇魯魯紹夢天娥若競酒壹清顧大傾一冷有影彙淡鏡恨  
英天渡齒玉梧月聲野錦霞兒良現因風顧公城影觀年英天月明恨

戲好齣雙演准夜八十八

著名亞比士莎 劇新情哀

冤縁 禽海石

▲冤家變成親家 親家忽又變為冤家 而冤家卒成親家 其中曲折如何 請來一觀 便知端的。仇敵が親戚になり、親戚が仇敵にまた変わる。ところがついには親戚になる。この説明か

大きく「冤縁」と表示した上段に「莎士比亞名著」と掲げる。下段には劇の内容説明らしいものがある。冒頭を示すと次のとおり。「▲冤家變成親家 親家忽又變為冤家 而冤家卒成親家 其中曲折如何 請來一觀 便知端的」。仇敵が親戚になり、親戚が仇敵にまた変わる。ところがついには親戚になる。この説明か



ら莎劇のどれに該当するのか理解できるのだろうか。ところが趙驥は論文36頁の注釈において「鑄情」だと根拠を示さずに指摘する。今、確認はできないが趙驥の記述に従う。そうすると1月20日に予告をしていた「鑄情（ロミオとジュリエット）」が「冤縁」という題名になったとわかる。ただし具体的にどのような脚本になったのかは不明のままだ。誰も説明をしていない。文明戯については不思議なことが多い。専門家はどうか考えているのか知りたいところだ。

e 1916年4月23日（民国五年旧曆三月廿一日）

笑舞台 二十一日日戲正秋優遊登台准演／「莎士比亞名著 假面具」

二十一日一月三年辰丙曆舊

十五三電 五百千話

路汕路廣 口頭中

一期二特三期四特月戲日二期四特三期五特六期月戲夜  
一角兩角三角四角五角六角

演准合登游優秋正戲日日一十二

具面假 著比莎 著亞士

本後劇名編新生先游優演准夜一十二月三

錄槩畫礁紅

本吾始本夜得妙時爲之 顯正當處越編 大大觀▲者有 地盤紅!!!▲鏡器▲  
若光終末的前者乎 且劍能快得 度甚江運過小林在 大則步也聽 哈之也好  
望終未紅本 時之律之講名尋爾登奇人說卒 好其 滿此哈封! 哈好好  
聯一前奇能在不人 爲源勝強名 已爲有必 好收後前讚阿!美看!好  
被去日前聲要此再利平術欲 而英固不 何題必 好根莫本察察哈聲!好  
備去日河聲要此再利平術欲 而英固不 何題必 精到既之也哈喜!好  
來會了後球看劇來如術白之 甘 何編等大有編等 大舉和好個!!!紅燈出  
此看然後 不 此之 爲綠 相凡則人有大人 笑 此其堂看哈 能出  
遇 則看須 戲易噴編游益舞響必 味曲必 特必地如大前哈 畫此  
前故始本全看尤 大天觀之以 之有不者折有不 笑更步此笑本哈 照同

哈好好  
!!!!!!  
哈哈好  
!!!!!!

前出cと同じ。新聞広告を示すだけで説明は省略する。





別稿ですすでに紹介した。新聞広告を示すだけで説明は省略する。

h 1916年4月30日（民国五年旧曆三月廿八日）

笑舞台 廿八日優遊正秋登台演双齣好戲「雌雄俠」「莎士比亞名著 殺滄」

広告の冒頭は大活字で「四喜之一」と示す。続けて「四悲四喜○悲以竊国賊為首○喜以殺滄為冠」だ。悲劇の最高が「竊国賊（ハムレット）」であることはわかる。だが四大喜劇のひとつ「殺滄」が最高だといわれてもなにを指すのか思い当たらない。原作を特定するための材料が示されていないからだ。

ここでも趙驥36頁が原作を指摘して「馴悍」「馴悍記」という。THE TAMING OF THE SHREW（じゃじゃ馬馴らし）になる。しかし上記のように新聞広告だけでは判断のしようがない。趙驥がなぜ「馴悍」だということのか根拠を示していないからにわかには信じられない。好意的に見れば趙驥は特定するだけの資料を独自に入手したのかもしれないと思う。今、確認はできないがそれに従う。





i 1916年5月7日（民国五年旧曆四月初六日）

笑舞台 初陸日夜准演正秋先生新編莎翁名劇／「竊国賊」



こちらも紹介した。新聞広告を示すだけで説明は省略する。

#### 4 台詞の一部

巻末の「文明戯シェイクスピア一覽」を作成して感じるところがある。それを少しのべる。

研究論文に先行文献を引用することは普通のことだ。ただしそのばあいは論文名を示す必要がある。それをしなければどうか。誰でもが知っている事実であればいちいち明示する必要はないという判断もありうる。しかし文明戯のような特別な研究分野で先行文献を明記しないのはいかなものかと思う。せめて参照文献名くらいあげてもいいだろう。ところが中国の研究者の一部では典拠の明記が徹底していない。無断借用を当たり前のようになっているらしい。

前述した例をもういちど示す。

文明戯「ハムレット [竊国賊]」の広告が『申報』（1916.4.27、28）にある。影印本で確認した。ところがそれよりも前の『民国日報』（1916.3.11）に掲載されていると書く論文があった。

最初に指摘したのは汪義群（1987）だ。するとそれに続いて曹樹鈞＋孫福良（1989）、王建開（2005）、郝嵐（2008）、張治（2012）らが同じことを述べる。広告文までも抜き出す。先行文献名の明示がないから各人がそれぞれ新聞で調べたと思うだろう。ところが奇妙なことに私が調べた該当日付の『民国日報』には「竊国賊」の広告は掲載されていなかった。つまり新聞の日付について汪義群は誤記した。上記の研究者たちは誤記であることを知らずに引用し続けた。自分で調べれば該当号に「竊国賊」の広告が掲載されていないことがわかったはずだ。自分で確認をする手間をはぶいた。

私は『民国日報』を掲げた郝嵐に直接問い合わせたことがある。『民国日報』の広告掲載は正確なのかと質問した。『申報』の広告写真を添付したのは私が別の資料を把握していることを示すためだ。単なる質問ではないことを普通の研究者ならば理解するだろう。

郝嵐は電子メールのあて先を変更していた。それが混乱の原因か。航空郵便を使用したりしてやりとりに支障が生じる。郝嵐の対応はちぐはぐだった。彼女はようやく探したと『申報』の紙面を添付ファイルで送ってきたのだ。私はすでにそれをメールに添付したではないか。しかも『民国日報』については回答がない。意思が疎通していないようだった。結果としてそうなった。理由は知らない。郝嵐は自分が書いた『民国日報』の該当号に関して沈黙した事実だけが残った。見ないと判断せざるをえない。もとの文献を示さないこととあわせ研究者としては杜撰な資料処理だと思う。

事実ひとつにしても確かめるためには困難がともなう。文明戯については研究上独特の困難があるらしい。

ごく大まかにいって文学作品には本文が残っている。戯劇であれば脚本がある。音楽ならば楽譜が存在するだろう。それらが研究するための基礎資料になる。しかし文明戯にはその根拠となる資料がほとんどないことを知った。

外部と内部に分ける。

外部とは文献資料で確認できることだ。『申報』影印本が刊行されてから資料として利用できるようになった。新聞広告のいくつかを見れば、上述のように文明戯シェイクスピアが公演された事実はわかる。研究者はそれを引いて報告している。外部はいくらか明らかにされつつある。

しかし内部、つまり戯曲の内容については詳細がわからない。いくつかの脚本は雑誌などに掲載された。しかし文明戯シェイクスピアの脚本はないらしい\*10。

鄭正秋ら当事者による説明は林訳『吟辺燕語』にもとづいた粗筋にすぎない。具体的にどのような台詞だったのか、それは不明だ。演者による変更が上演のたびに発生したから台詞は残らなかった。あるいは最初から残す考えがなかった。それが文明戯の特色であり具体的な状況だったといわれればそうかもしれない。実際に見た人の記録があれば参考資料になるだろう。だがそれを紹介する先行文献を見ない。私も一応はさがした\*11。ひとつだけそれらしい台詞、それもごく一部を見つけたので紹介する。

「ヴェニス商人」においてシャイロックが「肉1ポンドを切り取らせろ」というあの有名な箇所だ。

参考までに基本となる莎劇の台詞とその坪内逍遥訳（もともと改行なし。ルビ省略）を掲げる。

【莎劇】 Go with me to a notary, seal me there  
Your single bond; and in a merry sport,  
If you repay me not on such a day,  
In such a place, such sum or sums as are  
Express'd in the condition, let the forfeit  
Be nominated for an equal pound  
Of your fair flesh, to be cut off and taken  
In what part of your body pleaseth me.

【坪内逍遥訳】 わしと一しよに登記所へござらっしゃい、あそこで、貴下の  
一判で可い、証書に御捺印なさい。それから、ほんの戯談に、かういふこと

を約束しておきませう、万一、貴下が云々の日限までに、云々の場所に於て、証書面の金額を御返済なさらんやうな場合には、其科料として、貴下さんのそのお肉を、ちょうど一ポンドだけ、貴下のお肉体の何物からでもわしの好く処から切取っても、異議はないといふことを。(2002。396頁。莎劇原文も同左)

シャイロックの短い有名な台詞だ。私が見て要点はみつつある。

ひとつ目は、証書に署名をすること。ふたつ目は、いかにも冗談めかしている箇所。みつつ目は、彼が望む箇所の肉1ポンドを切り取るということ。

署名をして契約を結ぶのが重要だとすぐに理解できる。結んだ契約は動かすことができない。冗談だといっているからまさか実行するとは思わないように見せかける。しかし契約は契約だ。好きな部位の肉1ポンドを切り取ることに違いはない。肉1ポンドは約450グラムだ。量としてはかなり大きい。シャイロックは1ポンドの肉を切り取るにより合法的に宿敵アントーニオーを殺す考えだとわかる。

この3点をラム本はつぎのように小説化した。

【ラム】 only Antonio should go with him to a lawyer, and there sign in merry sport a bond, that if he did not repay the money by a certain day, he would forfeit a pound of flesh to be cut off from any part of his body that Shylock pleased.

【野上弥生子訳】ただアントーニオーが自分と一緒に弁護士のところへ行つて、もし約束の日に金が支払へない時には、彼の身体からどこでもシャイロックの望み次第のところを切り取つて、一ポンドの肉を提供すると云ふことを、借用証書に冗談半分に署名して貰ひたいと申しました。(岩波文庫1952。144頁)

ラム本はシャイロックの台詞を地の文章に書き換えている。だからラムは莎劇にはない「Antonio」を補足し、また「you」を「he」に、同じく「me」を



「Shylock」に置き換えた。これが小説化ということだ。ただし要点ははずして  
いない。

借用証書を作成する。冗談半分に署名する。（シャイロックの好きな部位の）ア  
ントーニオの肉 1 ポンドを切り取る。3 要点のすべてがある。

ラム本は莎劇の台詞、たとえば“in a merry sport [冗談で]”などをほぼその  
まま使いながら原意を伝えているということが出来る。

林紓らはラムの文章を次のように漢訳した。

【林訳「肉券」】歇洛克復笑曰。我必假金。然必同赴律師定約。果如期而金  
不完者為約爽。請剗先生肉一鎊為償。此戲約也。先生其哂笑而從我耶。2頁

シャイロックはにやりと笑って言った。「金は必ずご用立てします。ただ  
し弁護士のところへ一緒に行って契約を結ばなくてはなりません。もし約束  
の日に金が支払えないならば違約となります。賠償としてあなたさまの肉 1  
ポンドを抉りださせてください。これは冗談ですよ。あなたさまは笑って従  
われるのじゃないですかね」

林紓は契約 [約]、冗談 [戯]、肉切り [剗肉] 1 ポンドという 3 要点のひとつ  
も逃がしてはいない。魏易が口訳しているから当然、直訳にはならない。だが原  
文の意味するところは押さえている。しかも莎劇とおなじくシャイロックの台詞  
にしているからラム本よりも適切だということもできる。

林訳が漢訳題名を「肉券」にしたのは、肉の契約 [券] に焦点をあわせたから  
だ。

林訳「肉券」にもとづいて脚本を作ったのが文明戯「肉券」である。題名を同  
じにして林訳が底本であることを隠さない。

公演回数が多い。人気があったということだ。そのなかの 1 回は 1914 年 5 月  
5 日に举行された六劇団合同公演だった（参照：文明戯シェイクスピア一覧）。そ  
の観劇評がある。珍しい。林訳の小説をどのような台詞に書き換えたのか。興味  
深い。

「薄情な小人（注：笑吾の扮するシャイロック [薛禄克]）を描写して行き届いて

いる」と笑吾の演技を賞賛する。続いては台詞の引用だ。

署券時言：“割肉事，不過頑笑而已，如果逾期不償，難道定要割肉不成？”

此語補来極佳。蓋當時薛雖存心復仇，口中必有此等言語也；\*12

契約に署名するときに言う。「肉を切り取る [割肉] なんてのは冗談 [頑笑] にすぎません。もし期限をすぎて返せないとなっても、まさか本当に肉を切り取るとでも？」この言葉の補足はきわめてうまい。当時、シャイロックは復讐する下心を持っていたとはいえ、口ではそのように言う必要があったからだ。

この台詞は執筆者の義華が記憶にもとづいて大意を残したものか。あるいは実際に発言されたそのままを書きとめたようにも見える。台本が残っていないからわからない。断片であるのが残念だ。上の記録を見れば、肉は出てくるが1ポンドが消失している。実際の台詞になかったのか、あるいは1ポンドという表現は義華にとっては重要ではなかったから記憶に残らなかったこともありうる。

義華の説明で私がおもしろく感じるのは、「まさか本当に肉を切り取るとでも？」という箇所を補足だととらえていることだ。「補足」と説明している箇所に手がかりがある。つまり文明戯「肉券」がもとづいた林訳『吟辺燕語』の「肉券」にはその反語部分がもともと存在していないことを義華は知っていた。だから「補足」と説明した。たしかに義華の書くとおりだ。林訳「肉券」では「これは冗談ですよ。あなたさまは笑って従われるのじゃないですかね」とあった。文明戯では冗談を軸にして表現を変えた。「まさか生身の人間から肉を切り取ることなどありえない」と補足したほうが観客にとっては理解しやすいものになる。莎劇はもとよりラム本にもない表現だ。文明戯では以上のように書き換え補足した実例である。

文明戯の台詞といっても上のようにごく一部分しか残っていない。逆にいえばこれだけ具体的な台詞の記録はかなり珍しい。もっとも、探せば出てくる可能性はあるだろう。

見ればわかる。文明戯は実物の莎劇ではない。文明戯「肉券」はラム本を底本

にした林訳『吟辺燕語』を使用している。ト書きと台詞の一部を見れば契約、冗談、肉切りは備わっている。ただ1ポンドが見えない。この部分の大筋は一致しているといえるだけ。当時の観客を視野に入れて台詞を書き換えて補足が確かにある。ただしほかの場面がどうであったかまではわからない。

公演そのものに対する義華の評価は非常に高い。それとは別に細部が異なるのだから「莎劇のようなもの」とならざるをえないのも当然だろう。

最後に文明戯「肉券」を紹介する文章から該当する部分を『新劇考』（1914）と『新劇考証百出』（1919）から引用する。

『新劇考』

薛禄克

薛（禄克）故与安（東尼）有夙嫌，署券時，謂逾期不償，須罰割肌肉一磅。

[范42頁]

薛（禄克）故与安（東尼）有夙怨，署券時，謂逾期不歸趙，当割肉一磅為罰。

[范44頁]

『新劇考証百出』

歇洛克

乃与安（東尼）訂約。苟逾期勿償者。須割胸頭肉一磅。【鄭177、346頁】

シャイロックの漢訳に薛禄克と歇洛克（林訳で登場）を当てる。音訳だからどちらでもかまわない。

上記の3文章を見れば表現がそっくりだ。契約、肉切り1ポンドはあるが冗談がないところまで共通する。似ているのだが「肌肉」は筋肉だし「肉」はそのまま、「胸頭肉」は胸肉か。シャイロックが望む部位は特定されていないから胸肉ははずれる。というように微妙に違うのも台詞そのものを採取していないからだ。

私の知るかぎり義華の紹介を除いて文明戯シェイクスピアについての具体的な内容（脚本、台詞）を示す資料が把握できない。その結果、学術論文が外部資料を提示するだけに終始するのも当たり前だ。

【注】

- 1) 孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学出版社1994.8。11頁で「竊国賊」は「麦克白（マクベス）」にもとづいて改編すると誤る。139頁でも同様に誤る。
- 2) 神田一三「文明戯「ハムレット」と『民国日報』の広告『清末小説から』第129号 2018.4.1
- 3) 郝嵐「莎士比亞在1916年前的中国」『清末小説から』第91号 2008.10.1
- 4) 黄愛華「上海笑舞台の変遷及演劇活動考論」袁国興『清末民初新潮演劇研究』広州・広東人民出版社2011.1
- 5) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29。76頁に『申報』1914.4.5広告を翻訳引用している。84頁注22の原文は次のとおり。「女律師取材於吟辺燕語内肉券一則為英国莎翁最有價值之作」。同じ引用は次にもある。劉寧寧『莎士比亞在上海（1949年前）——以《申報》為中心』（上海・華東師範大学硕士学位论文2016.5.17）38頁。また趙驥「鄭正秋對於莎士比亞演劇之貢獻」（『雲南藝術学院学报』2016年第3期 2016.9.25）35頁も同様。同じく趙驥37頁に次の広告が引用してある。「竊国賊」について『申報』丙辰八月初六日（1916.9.3）の民鳴社広告という。「取材於商務印書館出版之《吟辺燕語》中《鬼詔》一節」
- 6) 松浦恆雄「文明戯の実像——中国演劇における近代の自覚」『中国における都市型知識人の諸相——近世・近代知識階層の観念と生活空間』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター2005.3.31。240頁
- 7) 欧陽予倩「談文明戯」『中国話劇運動五十年史料集 第一輯』北京・中国戯劇出版社1958.2。87頁。徐半梅は7人の同志（のち9人に増加）を集めたと書いている。『話劇創始期回憶録』北京・中国戯劇出版社1957.7。87頁。ただし、『申報』1917年1月4日までの民鳴社広告が記録されている。瀬戸宏『民鳴社上演目一覽』翠書房2003.2.28を参照。黄愛華307頁は「到1917年1月民鳴遊藝社解散」と書く。
- 8) 「假面具一劇○為莎翁生平第一傑作○其中写一勢利朋友○為了要娶老婆○假仁○義○做好做歹○等到老婆到手○老婆的裙帶錢用完○則又千方百計○与之離婚○一而又与富有金錢的寡婦○鬼魅鬼眼○又要同他結婚○幸而這位寡婦奶奶○洞燭其奸○不為所惑」
- 9) 「《假面具》（《一報還一報》）」141頁。「（1917年）2月14日，笑舞台公演根據《一報還一報》改編的《假面具》」459頁
- 10) 包天笑改編「女律師（ヴェニス商人）」（『女学生』第2期1911。未見）がある。林訳『吟辺燕語』にもとづいて脚本化した（瀬戸宏『中国のシェイクスピア』73-75頁）。

ただし女子学生が公演したもの。これを職業演劇である文明戯に含めることは不適當だ。

- 11) 次を参照した。倪百賢、王潮鳳編「《申報》戲曲文章索引」『上海戲曲史料薈萃』総4期 上海藝術研究所1987.9.20。趙海霞『近代報刊劇評研究（1872-1919）』濟南・齊魯書社2017.10
- 12) 義華「六大劇団聯合演劇之品評」『新劇雜誌』第2期1914初出未見、傅謹主編『中国話劇百年典藏 理論卷1（1906-1929）』北京・人民文学出版社2017.4。92頁

### 附録：文明戯シェイクスピア一覧

林訳『吟辺燕語』の原題順に配置し便宜的に数字をつけた。改行して文明戯の題名を示す。年月日の明確なもの順。参考文献の略号が判別しづらいかも。略号の数字は頁数を示す。根拠があるというためだけに記した。×印は間違いを意味する。参考文献の順番を見ればどれが最初に指摘したのかがぼわわかるだろう。陰暦は旧暦と表示する。

- [范] 范石渠原著、趙驥校勘『新劇考』上海・中華図書館1914.6／上海・文匯出版社2015.10復刻本による
- [鄭] 鄭正秋編、趙驥校勘『新劇考証百出』上海・中華圖書集成公司1919.4.10／北京・学苑出版社2016.1影印本
- [匡] 匡映輝「解放前我国舞台上的莎翁戲劇」『戲劇報』1986年第4期（総第347期）1986.4.18
- [申] 倪百賢、王潮鳳編 朱建明校「《申報》戲曲文章索引」中国戲曲志上海卷編輯部『上海戲曲史料薈萃』総4期（第4集）上海藝術研究所1987.9.20
- [汪] 汪義群「莎劇演出在我国戲劇舞台上的變遷」中国莎士比亚研究会編『莎士比亚在中国』上海文藝出版社1987.12
- [曹] 曹樹鈞＋孫福良『莎士比亚在中国舞台上』哈爾濱出版社1989.4
- [孟] 孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学出版社1994.8。140-141、458-459頁を参照した
- [王] 王建開「藝術与宣伝：莎劇訳介与20世紀前半中国社会進程」台湾『中外文学』第33

卷第11期（総第395期）2005.4。

- [郝] 郝嵐「莎士比亚在1916年前的中国」『清末小説から』第91号 2008.10.1
- [趙] 趙驥「笑舞台与上海文明戲」『杭州師範大学学报（社会科学版）』2010年第2期 2010.3
- [驥] 趙驥「鄭正秋對於莎士比亚演劇之貢獻」『雲南藝術学院学报』2016年第3期 2016.9.25
- [黃] 黃愛華「上海笑舞台的變遷及演劇活動考論」袁国興『清末民初新潮演劇研究』廣州・廣東人民出版社2011.1
- [愛] 黃愛華「笑舞台与文明新戲後期劇壇」『中国現代文学論叢』第8卷第1期 2013.8.1
- [華] 黃愛華「笑舞台的崛起及其对文明新戲後期劇壇的意義」『首都師範大学学报（社会科学版）』2015年第4期（総第225期）2015.8.25（注：題目だけあげて上演日時が不明確なものは採取していない）
- [張] 張治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「經典」』上海社会科学院出版社2012.8
- [春] 瀬戸宏「申報所載春柳社上演廣告（下の一）」『長崎総合科学大学紀要』第30巻第2号 1989.11
- [新] 瀬戸宏「新民社上演演目一覽」『撰大人文学』第9号 2001.9
- [民] 瀬戸宏『民鳴社上演演目一覽』翠書房2003.2.28
- [近] 趙山林、田根勝、朱崇志編著『近代上海戯曲系年初編』上海世紀出版集团、上海教育出版社2003.7
- [中] 趙山林『中国近代戯曲編年（1840-1919）』上海・華東師範大学出版社2008.9
- [李] 李爽学『中外文学關係論稿』台湾・聯経出版事業股份有限公司2015.1
- [瀬] 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29。67-68頁に見える作品名の誤記はいちいち指摘しない
- [寧] 劉寧寧『莎士比亚在上海（1949年前）——以《申報》為中心』上海・華東師範大学碩士學位論文2016.5.17

1 ◆肉券 THE MERCHANT OF VENICE ヴェニスの商人

（→女律師 [瀨73] 包天笑1911年頃城東女学 [瀬84] 1912（注：素人演劇で文明劇ではない）

→女律師 [王36] 1912.12

→肉券 [曹219] 鄭正秋領導的文明戲職業劇団新民社1913.3公演

→肉券 [孟458] 鄭正秋領導的新民社1913.3公演

- 肉券 [匡58] 1913.7鄭正秋組織新民新劇社
- 肉券 [郝21] 鄭正秋領導的新民社1913.7公演
- 肉券 [汪92] (威尼斯商人) 鄭正秋導演1913
- 肉券 [曹73] 鄭正秋1913
- 女律師 [曹219] 陸鏡若組織新劇同志会公演1914.2.16
- 女律師 [孟458] 陸鏡若新劇同志会1914.2.16演出
- 女律師 [近254] 1914.3.5上海六大文明戲劇團組成新劇公会, 進行聯合公演 (注:[中336] で1914.4に移動させる)
- 女律師 [瀨76] 申報1914.4.5新民社廣告 [新127] 同左
- 女律師 [驥35] 申報1914.4.5新民社廣告
- 女律師 [寧23] 申報1914.4.5新民新劇社
- 女律師 [寧38] 申報1914.4.5
- 女律師 [中336] 1914.4上海六大文明戲劇團組成新劇公会, 進行聯合公演 (注:[近254] 1914.3.5から移動させる)
- 肉券 [驥39] 申報1914.5.1廣告
- 肉券 [黃303] 申報1914.5.5笑舞台演出廣告
- 肉券 [驥36] 上海新劇公会六大劇團聯合演劇、申報旧曆4.11 (1914.5.5) ([驥36] 女律師、肉券、借債割肉)
- 肉券 [新128] 新報1914.5.13新民社廣告
- 肉券 [驥36] 新民社1914.5.13
- 女律師 [瀨80] 1914.5.29新民社 ([新129] 同左)、7.15 ([新131] 同左)、11.7 ([新131] 同左) [瀨81] 1914.11.30新民社 ([新132] 同左)
- 肉券 [新130] 申報1914.6.14新民社廣告
- 肉券 [愛85] 六大劇社參演1914.6
- 女律師 [鄭177] 申報1914.7.15新民社廣告
- 女律師 [驥37] 1914.7.15新民社上演
- 女律師 [范162注1] 申報1914.7.15
- 女律師 [曹73] 六大劇團聯合公演1914
- 女律師 [郝21] 新劇同志会1914公演
- 女律師 [瀨81] 1915.1.29民鳴社 [民14] 同左
- 女律師 [寧40] 申報1915.1.29廣告

- 女律師 [曹74] 又名借債割肉。陸鏡若1915.2.16 [曹76] 陸鏡若春柳劇場1915
- 借債割肉 [匡58] 民鳴社旧曆1915.5.12 (1915.6.24)
- 借債割肉 [曹73] 民鳴社旧曆1915.5.12 (1915.6.24)
- 借債割肉 [曹220] 民鳴社旧曆1915.5.12 (1915.6.24)
- 借債割肉 [孟458] 民鳴社旧曆1915.5.12 (1915.6.24) 演出
- 借債割肉 [王36] 民鳴社旧曆1915.5.12 (1915.6.24)
- 借債割肉 [郝21] 民鳴社旧曆1915.5.12 (1915.6.24) 演出
- 女律師 [匡58] 春柳劇場1916.2.16
- 女律師 [汪93] 民国日報1916.5.25笑舞台広告
- 女律師 [曹78] 民国日報1916.5.25広告
- 女律師 [王36] 民国日報1916.5.25笑舞台広告
- 女律師 [郝23] 民国日報1916.5.25広告
- 女律師 [曹220] 笑舞台1916.5公演
- 女律師 [孟459] 笑舞台1916.5公演
- 女律師 [郝17] 笑舞台1916.5公演
- 女律師 [黄305] 民国日報1916.7笑舞台広告
- 女律師 [驥39] 申報1916.9.3
- 借債割肉 [驥38] 1916.9.22 [驥39] 申報1916.9.22広告
- 女律師 [汪92] 1916
- 女律師 [驥37] 申報1918.1.10鳴新社。借債割肉 [驥39] 申報1918.1.10広告
- 肉券 [寧41] 申報1922.9.10笑舞台広告
- 肉券 [鄭177、346]
- 女律師 [孟140]
- 肉券 [曹77]
- 女律師 [曹77]
- 一磅肉 [曹77]
- 一磅肉 [孟140]
- 借債割肉 [曹77]
- 借債割肉 [孟140]
- 女律師 [瀬82] 笑舞台

2 ◆馴悍 THE TAMING OF THE SHREW じゃじゃ馬馴らし



(→馴悍記 [申26] 申報1913.10.31癡僧「紀“新民新劇社”演出之《馴悍記》(即《新旧夫妻》)」[瀬76] 申報1913.10.15新民社廣告(シェイクスピアとは無関係であろう)[瀬81] 1914.7.14新民社廣告([新131] 同左)、1914.11.10新民社廣告([新131] 同左))

→馴悍 [曹219] 春柳同人吳我尊等人与湘春園漢調戲班, 在長沙壽春園演出1913.12.9-23

→馴悍 [孟458] 吳我尊等人1913.12.9-23公演

→馴悍 [郝21] 吳我尊等人1913.12.9-23公演

→殺淫 申報1916.4.30笑舞台廣告

→殺淫 [驥36] 馴悍、馴悍記 [驥39] 申報1916.9.3

→殺淫 [寧77] 申報1916.4.30笑舞台廣告(注: 原作が馴悍だとは指摘していない)

→馴悍 [孟458] 1914年先後演出

→馴悍記 [曹220] 陸鏡若春柳劇場1914

→馴悍記 [郝21] 陸鏡若春柳劇場1914演出

→馴悍 [鄭178] 申報1917.5.26春柳劇場新劇同志會廣告

→馴悍 [鄭178、346]

→馴悍 [曹76] 即馴悍記。陸鏡若

→馴悍 [曹77]

→馴悍 [孟140]

### 3 ◆ 學誤 THE COMEDY OF ERRORS 間違いの喜劇

→學誤 [鄭179、347]

→學誤 [曹77]

→學誤 [孟141]

### 4 ◆ 鑄情 ROMEO AND JULIET ロミオとジュリエット

(→若邈久嬭新彈詞 [李229] 1910。民謡体。第2幕第2景)

→鑄情 [孟458] 1914年先後演出

→鑄情 [曹220] 陸鏡若春柳劇場1914

→鑄情 [郝21] 陸鏡若春柳劇場1914演出

→冤縁 申報1916.3.21笑舞台廣告

→冤縁 [驥36] 鑄情

→鑄情 [鄭181、348]

→鑄情 [曹76] 陸鏡若

→鑄情 [曹77]

→鑄情 [孟141]

5◆仇金 TIMON OF ATHENS アテネのタイモン

→仇金 [鄭182、349]

→仇金 [曹77]

→仇金 [孟141]

6◆神合 PERICLES, PRINCE OF TYRE ペリクリーズ

→柏立格而 [鄭183、349]

→柏立格 [曹77]

→柏立格 [孟141]

→沈珠記 [曹77]

→沈珠記 [孟141]

7◆蠱傲 MACBETH マクベス

→新南北和 [汪92] 1916

→(演題不記) [匡59] 1916鄭正秋将莎士比亚的《馬克白斯》改編成幕表戲

×→竊国賊 [曹80、220] とするは誤り

×→竊国賊 [孟140、459] とするは誤り

→巫禍 [鄭185、350]

→巫禍 [曹77、80]

→巫禍 [孟140]

→新南北和 [曹77]

→新南北和 [孟140]

8◆医諧 ALL'S WELL THAT ENDS WELL 終わりよければすべてよし

→医諧 申報1916.1.20民鳴社廣告

→医諧 [驥39] 申報1916.1.20廣告

→医諧 申報1916.1.21民鳴社廣告

→医諧 [民25] 申報1916.1.21民鳴社廣告

→医生女 [鄭186、351] 趙驥は注で「女<sup>ママ</sup>医生」とする

→医生女 [曹77]

→医生女 [孟141]

9◆獄配 MEASURE FOR MEASURE 尺には尺を

→獄配 申報1916.1.20民鳴社廣告

- 獄配 [民25] 申報1916.1.20民鳴社広告
  - 獄配 [驥39] 申報1916.1.20広告
  - 假面具 申報1916.3.17笑舞台広告
  - 假面具 [寧42] 申報1916.3.17笑舞台広告
  - 假面具 申報1916.4.23笑舞台広告
  - ?→退位 [寧43] 申報1916.4.28笑舞台広告 (注: 該号には掲載されていない)
  - 退位 [驥37] 申報1916.6.17笑舞台 [驥39] 申報1916.9.3
  - 退位 [驥39] 1916 [驥39] 申報1918.9.9広告
  - 假面具 [曹78] 1917年旧曆2.14 (1917.3.7) 演出的《假面具》(《一報還一報》)の改編
  - 假面具 [曹221] 1917年旧曆2.14 (1917.3.7) 笑舞台公演、根據《一報還一報》改編
  - 假面具 [孟459] 笑舞台1917.2.14公演根據《一報還一報》改編的
  - 假面具 [匡59] 1917年旧曆2月笑舞台再次演出了根據莎劇《一報還一報》改編的
  - 假面具 [寧41] 申報1918.9.9「退位」([寧43] 獄配、一報還一報、量罪記 [朱生豪])
  - 退位 [驥36]
  - 假面具 [曹77]
  - 維也納大公 [鄭188、351]
  - 維也納大公 [曹77]
  - 維也納大公 [孟141]
  - 假面具 [孟141] 《一報還一報》MEASURE FOR MEASURE とする
- 10◆鬼詔 HAMLET, PRINCE OF DENMARK ハムレット
- 殺兄奪嫂 [匡58] 民国初年四川雅安川劇団
  - 殺兄奪嫂 [曹80] 民国初年四川雅安川劇団
  - 殺兄奪嫂 [曹220] 民国初年四川雅安川劇団
  - 殺兄奪嫂 [王36] 民国初年四川雅安川劇団的地方戲
  - ×→竊国賊 [汪93] 民国日報1916.3.11笑舞台広告 (該号に広告なし)
  - ×→竊国賊 [曹79] 民国日報1916.3.11広告 (該号に広告なし)
  - ×→竊国賊 [王36] 民国日報1916.3.11笑舞台広告 (該号に広告なし)
  - ×→竊国賊 [郝23] 民国日報1916.3.11広告 (該号に広告なし)
  - ×→竊国賊 [張192] 民国日報1916.3.11広告 (該号に広告なし)
  - 竊国賊 申報1916.4.27笑舞台広告
  - 竊国賊 申報1916.4.28笑舞台広告

- 竊国賊 申報1916.5.7笑舞台広告
- 竊国賊 [瀬191] 申報1916.5.7笑舞台広告、8.6広告、9.29広告
- 竊国賊 [寧23] 申報1916.5.7笑舞台
- 竊国賊 [黄302] 時報1916.5.31笑舞台広告
- 竊国賊 [趙55] 時報1916.5.31笑舞台
- 竊国賊 [驥37] 申報1916.6.17笑舞台
- 竊国賊 [寧23] 申報1916.8.6笑舞台 [寧44] 同左
- 竊国賊 [民26] 申報1916.9.3民鳴社広告
- 竊国賊 [驥37] 申報丙辰八月初六日 (1916.9.3) 民鳴社
- 竊国賊 [民28] 申報1916.11.25民鳴社広告
- 篡位竊嫂 [匡59] 導社1916 (原名乱世姦雄)
- 篡位竊嫂 [孟459] 導社1916公演 (原名乱世姦雄)
- 篡位竊嫂 [郝17] 導社1916公演 (原名乱世姦雄)
- 竊国賊 [曹80] 鄭正秋葉風新劇社 (原題を麥克白と誤る)
- 竊国賊 [曹220] 鄭正秋葉風新劇社 (原題を麥克白と誤る)
- 竊国賊 [孟459] 鄭正秋葉風新劇社1916公演 ([孟140、459] は原題を麥克白と誤る)
- 竊国賊 [郝17] 鄭正秋葉風新劇社1916公演
- 哈姆雷特 [匡59] 笑舞台1916年春
- 漢姆萊特 [曹78] 笑舞台1916年春
- 韓姆列王子 [曹220] 笑舞台1916年春
- 韓姆烈王子 [孟459] 徐半梅等人笑舞台1916公演
- 韓姆烈王子 [郝17] 徐半梅等人笑舞台1916公演
- 竊国賊 [汪92] 1916
- 篡位盜嫂 [曹220] 導社公演 (又名乱世姦雄) 1916
- 竊国賊 [驥38] 1916 [驥39] 申報1918.9.9廣告
- 竊国賊 [驥39] 申報1917.12.15廣告
- 竊国賊 [驥37] 1918.6.16、8.7、8.18 [驥39] 申報1918.4.28廣告 [驥39] 申報1918.6.16  
廣告 [驥39] 申報1918.8.18廣告
- 竊国賊 [驥38] 1918.8.7 [驥39] 申報1918.8.7廣告
- 太子装瘋 [寧41] 申報1923.9.22笑舞台広告
- 乱国奸雄 [寧45] 1925.12.29

→鬼詔 [鄭190、353]

→鬼詔 [曹77]

→竊国賊 [曹77]

→竊国賊 [驥36]

→篡位盜嫂 [曹80] 導社公演 (又名乱世姦雄)

→篡位盜嫂 [孟140]

11◆環証 CYMBELINE シンベリン

→金環鉄証 [寧77] 申報1916.6.20笑舞台広告

→金環鉄証 [黃303] 時報1916.7笑舞台 [愛91] 同左 [華101] 同左

→金環鉄証 [趙55] 民国日報

→指環恩仇 [鄭195、356]

→指環恩怨 [曹77]

→指環恩仇 [孟141]

→金環鉄証 [瀨82] 笑舞台

12◆女変 KING LEAR リア王

→姉妹皇帝 [黃305] 民国日報1916.7笑舞台広告

→姉妹皇帝 [汪92] 1916笑舞台

→姉妹皇帝 [驥36]

→口孝与心孝 [鄭192、354]

→口孝与心孝 [曹77]

→口孝与心孝 [孟140]

→姐妹皇帝 [曹77]

→姐妹皇帝 [孟140]

13◆林集 AS YOU LIKE IT お気に召すまま

→従姉妹 [鄭197、357]

→従姉妹 [孟141]

14◆礼哄 MUCH ADO ABOUT NOTHING から騒ぎ

→冤乎 申報1916.1.20民鳴社広告の中に見える

→怨偶成嘉偶 [鄭199、358]

→怨偶成佳偶 [曹77]

→怨偶成佳偶 [孟141]

→冤乎 [驥36]

15◆仙猿 A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM 夏の夜の夢

→夏夜夢 [鄭200、359]

× [曹77] 未収録

× [孟140-141] 未収録

16◆珠還 THE WINTER'S TALE 冬物語

→皇后再生記 [寧24] 申報1922.10.10笑舞台

→像活 [鄭202、360]

→像話 [曹77]

→像話 [孟141]

17◆黒脊 OTHELLO オセロ

→奥賽羅 [曹220] 陸鏡若改編演出1914

→倭塞羅 [郝21] 陸鏡若春柳劇場1914演出

→奥瑟羅 [孟458] 1914年先後演出

→春夢 [春339] 申報春柳社1915.4.3廣告 (春夢為英国莎士比亞名著, 原名倭塞羅)

→春夢 [瀨81] 陸鏡若春柳社1915.4.3

→黒將軍 [汪93] 民国日報1916.7.17笑舞台廣告

→黒將軍 [曹78] 民国日報1916.7.17廣告

→黒將軍 [王36] 民国日報1916.7.17笑舞台廣告

→黒將軍 [郝23] 民国日報1916.7.17廣告

→黒將軍 [曹221] 笑舞台1916.7公演

→黒將軍 [孟459] 笑舞台1916.7公演

→黒將軍 [郝17] 笑舞台1916.7公演

→黒將軍 [黃305] 民国日報1916.7笑舞台廣告

→黒將軍 [汪92] 1916笑舞台

→禍国將軍 [民29] 申報1917.1.1民鳴社廣告 (莎士比亞名著)

→黒將軍 [寧41] 申報1923.11.7笑舞台和平新劇社廣告

→倭塞羅 [鄭224、369] 鏡若訳編

→倭塞羅 [黃303] 陸鏡若訳編

→倭塞羅 [曹76] 陸鏡若

→倭塞羅 [曹77]

→倭塞羅 [孟140]

→黒將軍 [曹77]

→黒將軍 [孟140]

→黒將軍 [黄303]

→黒將軍 [瀬82] 笑舞台

→黒將軍 [驥36]

→禍国將軍 [驥36]

18◆婚詭 TWELFTH NIGHT; OR WHAT YOU WILL 十二夜

→學生兄妹 [鄭204、361]

→學生<sup>ママ</sup>姐妹 [曹77]

→學生<sup>ママ</sup>姐妹 [孟141]

19◆情惑 THE TWO GENTLEMEN OF VERONA 二人の貴公子

→情惑 [鄭206、363]

→情惑 [曹77]

→情惑 [孟141]

20◆颯引 THE TEMPEST テンペスト

→颯<sup>ママ</sup>媒 [鄭208、364] 趙驥は注で颯引の誤りと疑う

→颯<sup>ママ</sup>媒 [曹77]

→颯<sup>ママ</sup>媒 [孟141]

→春夢 [驥36]

◆原作不明

盜情 [驥39] 申報1916.4.14「笑舞台三月一夜準演正秋新編莎士比亞名著《盜情》」(注：  
旧曆と新曆が一致しない)

盜情 [寧41] 申報196.4.14笑舞台広告 [寧77] 同左

女説客 [驥37] [驥39] 申報1916.9.3

女国手 [寧41] 申報1916.6.16笑舞台広告 [寧77] 同左

女国手 [驥37] [驥39] 申報1916.9.3

歡喜冤家 [寧41] 申報1917.10.16鳴新社広告 [寧77] 同左

双双双胞胎 [寧45] 申報1920.9.16笑舞台広告

双双双胞胎 [寧41] 申報1920.11.27和平社笑舞台新劇部広告

## 田漢漢訳『ハムレット』の底本

『清末小説から』第129-131号（2018.4.1-10.1）に掲載。荒井由美名を使用。田漢漢訳『ハムレット』は莎劇原文から直接漢訳した最初のものとして中国学界では高く評価されている。1921年に一部分が雑誌に掲載され、翌1922年に全訳の単行本が出た。ところが翻訳研究の基礎である底本の特定がなされていない。ほとんど100年近くが経過しているにもかかわらずだ。坪内逍遙の日本語翻訳に基づいたという説明がある。だが英語の莎劇テキストを見ないで漢訳することがあるだろうか。そこを不明にしたまま田漢漢訳『ハムレット』を論じることができるかと考える方が奇妙だろう。田漢は1916-22年のあいだ18歳から24歳まで日本に滞在していた。日本におけるハムレット研究、翻訳の影響を受けていたことは確かだ。それだけで終わりというのは研究の不徹底さを露呈している。田漢が使用した莎劇原本を探究する。結論を先にいえばロルフ本である。今まで誰も指摘しなかったことだ。

田漢漢訳『ハムレット』がある。漢訳シェイクスピア戯曲のひとつだ（本稿では以下、基本的にシェイクスピアを莎氏、シェイクスピア戯曲を莎劇と称する。引用は除く）。中国で最初に戯曲の形式をもって翻訳された。小説型式ではないことが重要だ。学界ではこの点が特別に強調される。

それを力説するのはそれなりの背景がある。ラム姉弟『シェイクスピア物語』を漢訳した漢訳者不詳『海外奇譚』（1903）あるいは林訳『英国詩人吟辺燕語』（1904）を念頭に置いているからだろう。前者には「第十章 報大仇韓利徳殺叔」で、後者には「鬼詔」（ハムレットは漢姆来徳）と題して収録される。または文明



戯「ハムレット [竊国賊]」（1916）も視野に入れている。

中国学界において林紓自身に対する否定的見解は、少し改善されたとはいえる。だが『吟辺燕語』についての評価が低いことは変わらない。ラム本がもとは児童向けの書物だというのがその理由のひとつかもしれない。最初から小説化した著作だ。しかし劉半農らはそこを無視した。林紓は莎劇を勝手に小説化してけしからん、と五四直前から非難を続けてきたのが事実である。中国学界では戯曲と小説の区別がつかないのだろうか。

林訳の評価が低いのは、過去において林紓批判が激しく展開された影響を被っているだろう。それにしても林訳『吟辺燕語』にもとづいて創作した文明戯「竊国賊」などは批判しない。評価の基準が一貫していない。奇妙なことだ。文芸とは別に袁世凱批判という政治判断があるものと思う。現在の中国学界では文芸と政治は切り離すことができない。

戯曲から翻訳した田漢漢訳について、高い評価をあたえるのはよい。しかし研究の不足している部分があることにも触れるべきだ。

田漢の漢訳『ハムレット』は、1921年に一部分が雑誌に先行掲載された。全訳の単行本が刊行されたのは翌1922年である。

日本において戸沢姑射による最初の全訳出版が1905年だ。それと比較すれば17年の時間差が生じている。ちなみに坪内逍遙の全訳は1909年のこと。いずれも田漢漢訳よりもはるかに早い。

当たり前のことを書いておく。翻訳研究において底本を特定することは基本かつ出発点である。

田漢漢訳について底本特定は、すでに行なわれていると思っていた。なにしろ田漢漢訳の雑誌初出が1921年だ。ほぼ1世紀近い時間が経過している。ところがいくつかの先行論文を読んでも底本について説明したものがない。坪内逍遙の日本語翻訳に言及する論文はある（後述）。だが田漢が莎劇を漢訳するにあたって英文原書のどういう版本を使用したのかを述べない。重大問題であるにもかかわらずその解説がない。

くり返す。田漢漢訳『ハムレット』は、中国で最初に戯曲の形式をもって翻訳された。常識的に考えて莎劇の英文原本を見ないで漢訳はできないだろう。それ

とも田漢は莎劇そのものではなく坪内日訳だけに依拠したというのか。にわかには信じがたい。そこが不明なままだ。

奇妙に感じる。底本を特定できないのに田漢漢訳の到達度をどのように判定するのだろうか。比較対照する材料がないではないか。それは研究として有効なのかという疑問につながる。簡単にいえば、ただそこにあるというだけで来歴の不明な原文を莎劇そのものとして利用している。底本について検討もしないのは研究の手続き上あってはならない。

これでは底本の探究をせずにイソップ、アラビアン・ナイトの漢訳を論じているのと状況はかわらない。多くの異版が存在するにもかかわらず、底本を不明のままにして漢訳の質を問うのは不毛なことだ。立論それ自体が成立しない。それが理解できないようだ。珍しく底本を明示していると思えば先行論文の無断借用だったことがある。ここは宋声泉を指す。実名を出さなければ事の重大さを理解しないからだ。

林紓らは莎劇を小説体になおして漢訳した。中国学界がそう批判し続けたのは周知の事実だ。小説化した底本があることを知らない。というよりもわざと知らないふりをした。そこから深刻な間違いが生じる。文学史上まれに見る冤罪事件だと私はいつている。それを不思議だと思わないのが不思議なところ。底本の特定が研究の出発点であるという認識がないらしい。研究よりも政治を優先させた結果なのだ。

本稿の目的のひとつは、田漢漢訳『ハムレット』の底本を特定することである。底本が判明していないという事実から出発している。どこまでが明らかになっており、どこからが不明なのかを確認する必要がある。必要だから過去の研究を一部おさらいすることになった。その結果、あれがない、これもないと否定的な表現が自然に多くなるという現象が生じた。書きながら自分でもいかなものかとは思う。だが本当のことだからしかたがない。気になる人は最後の結論だけをお読みください。

まず田漢の漢訳題名が混乱していることから始める。田漢自身が引き起こした矛盾だ。

田漢は日本に留学していたとき『ハムレット』の漢訳に取り組んだ。漢訳『ハ

ムレット』の冒頭部分を公開した時に題名と本文の1字が異なってしまった。不統一である。一見小さな部分異同にすぎない。しかし私がわざわざ書くのは、この事実を説明する論文をほとんど見ないからだ。

## 1 哈孟雷徳と哈孟雷特

田漢漢訳『ハムレット』の訳語表記はふたつある。雑誌初出に「哈孟雷徳」と「哈孟雷特」が混在する（傍点は筆者。以下同じ）。

「徳」と「特」の1字が異なる。無気音と有気音の違いだ。両者ともに日本語にすればハムレットではある。英語原音に近いのは、無気音の「徳」だといってよい。ちなみに前述の『海外奇譚』では「韓利徳」だ。また林訳『吟辺燕語』は「漢姆来徳」とする。いずれも「徳」を当てている。

田漢はのちに漢字の不一致に気づいたらしい。単行本では『哈孟雷特』に統一した。

漢字表記が2種類あることにご注目いただきたい。そういうのには理由がある。雑誌掲載時の「哈孟雷徳」を普通の文献は出さない。無視する論文が大部分だからだ。

確認するためにあらためて書いておく。雑誌発表の詳細は以下のとおり。

### 1 雑誌初出

莎士比亞原著、田漢初訳「哈孟雷徳」第1幕第1-3場<sup>\*1</sup>『少年中国』第2巻第12期1921.6.15／影印本 「訳叙」「代序」あり

これには説明が必要だ。『少年中国』の該号目次では「哈孟雷徳（劇本）」と表示する。本文の題名も「哈孟雷徳」だ。

目録作成のばあい、本文題名と目次の表記が異なる時（よくある）は本文を優先して採用する。これが原則である。

田漢漢訳は本文題名と目次は同じ「哈孟雷徳」だ。ゆえに採取するのは「哈孟雷徳」でよい。

奇妙というか事態を複雑にしているのは、本文中に登場するのが「哈孟雷特」



であり柱も同様の綴りにしているからだ。ただし、本文にも「哈孟雷德」とする箇所がある（42頁）。それは単行本では「特」に訂正された（5頁）。つまり初出は混在というわけだ。「徳」と「特」の1字違いの矛盾を無視するのはよくない。

私が見た研究論文は多くが雑誌初出と後の単行本の題名を区別しない。2種類の表記があることを知っているのかどうかは不明だ。手元にあるいくつかを紹介しよう。

専門資料のひとつ『田漢專集』（1984）\*2からその箇所を引用する。

一九二一年

ハム雷特<sup>ママ</sup> 莎士比亞著 田漢訳／《少年中国》第2卷第12期；単行本，中華書局1922年出版。681頁

『少年中国』の巻期は明記する。だが1921年の項目に収録するだけで月日を記述しない。中国の一般書籍では普通のことだ。しかし専門資料なのだから記載のあるままに月日を記録するのが望ましい。

それよりも重要なことがある。最初から題名そのものが間違っているのはどう  
いうことだろうか。現在一般に使用している「ハムレット」にするのは正しくない。  
これを見る読者は初出と単行本の題名がそうなっていると誤解するだろう。前述  
のように初出は「哈孟雷德」が正しい。「本文中では哈孟雷特とする」くらいの  
注釈をつけるのが当然だ。また単行本の題名も示すべきだろう。それが無い。

小谷一郎、劉平編『田漢在日本』（1997）<sup>\*3</sup>収録の年表に出てくる。単行本に  
ついても引用する。

1921年（民国10 大正10） 23歳

4月16日 訳完莎士比亞劇作《哈孟雷特<sup>マ</sup>[德]》。発表時又写《訳叙》。（《少年中国》第2巻第12期）441頁

1922年（民国11 大正11） 24歳

11月 訳著《哈孟雷特》一書由中華書局出版。為《少年中国学会叢書》  
之一。445頁

『少年中国』初出の漢訳題名が間違っている。「訳叙」のほかに「代序」があ  
ることを書かない。「4月16日」は翻訳完成の日付である。『少年中国』の刊年  
ではないことにご注意を。

小さなことに思えるだろう。しかし重要なところだ。なぜなら雑誌で確認した  
か否かが問われるからだ。記述内容の信頼性が問題になる。事実は細部に露出す  
る。その認識がないと思われる。

記述の不足をすべての文献について検討しているわけではない。専門書の例を  
出した。ごく基本的なところで孟憲強『中国莎学簡史』（1994）<sup>\*4</sup>を紹介してお  
く。わかりやすいから巻末の「中国莎学年表」から関係部分を引用する。

1921年

田漢訳《哈孟雷特<sup>マ</sup>》在《少年中国》第2巻第12期発表、此為中国第一次  
用劇本形式的白話翻譯的莎氏压卷之作。459頁

1922年

冬、田漢訳的《哈孟雷特》由中華書局以“莎翁傑作集”第一種為名出版。  
459頁

ほかの説明とほぼ同じだ。これ以後である。だいたいの論文は戈宝権「莎士比亚作品在中国」（1983）<sup>\*5</sup>あるいは孟憲強によって記述しているらしい。

たとえば李長林、楊俊明「莎士比亚作品在中国的傳播」（1999）<sup>\*6</sup>がある。田漢漢訳を説明して次のとおり。「後來他訳的《哈孟雷特》在《少年中国》第2卷第12期（1921年）發表，此為中国第一次用劇本形式的白話翻譯莎士比亚的劇作」（91頁）。これはほとんど孟憲強の文章とかわらない。

あるいは次の著作がある。李偉昉『梁実秋莎評研究』（2011）<sup>\*7</sup>から関連部分の一部を引用する。

（1921年）田漢在《少年中国》雜誌第2卷12期上發表訳作《哈孟雷特》，這標志着中国第一次有了以完整的戲劇形式并用白話文翻譯的莎士比亚作品。57頁

雑誌初出の題名が間違っている。上の文章に続けて単行本の序にある「某莎翁学者……」を引用する。欄外注に1922年刊行の単行本を示す。「某莎翁学者……」以下の文章が雑誌初出の掲載ではないことがわかるようにはなっている。やはりここは雑誌での題名が「哈孟雷德」であると説明する必要があるだろう。

それよりもせつかく引用した「某莎翁学者……」の文章だ。この「某」が誰なのか。どういう書籍から引いてきたのか。そういう疑問が自然に出てくるはずだ。しかし李偉昉の解説はない。引用するだけ。この興味深い謎については後で説明する。

漢訳題名を区別している例外がある。簡単に紹介する。張向華編『田漢年譜』（1992）<sup>\*8</sup>からの引用だ。

一九二一年 二十三歳

四月十六日 為訳作《哈孟雷德》（英国莎士比亚作）發表撰《訳叙》，説：自

己聞舅父遇害後“哀憤填膺”，現“稍稍平靜，則取莎翁《哈孟雷特》Hamlet 劇訳之以寄其情。”“訳此劇時，態度頗嚴肅而慎重。”載《少年中国》二卷十二期。51頁

六月十五日 発表訳作《哈孟雷特》第一卷一至三場。歳《少年中国》二卷十二期。51頁

一九二二年 二十四歳

十一月九日 為訳著《哈孟雷特》出版単行本写《訳叙》……（後略）61頁

（十一月）本月 訳著《哈孟雷特》一書由中華書局出版，為《少年中学学会叢書》之一。……（後略）61頁

雑誌初出が「哈孟雷德」であり単行本が『哈孟雷特』だと区別しているのがよい。雑誌「訳叙」から一部語句を引用して実物によって確認していることがわかる。雑誌表題は「哈孟雷德」でありながら「訳叙」の中では「哈姆雷特」を使用しているのだ。本文中と柱は同じく「哈孟雷特」であると注釈を加えればもっとよかった。もうひとつ「代序」があることにも言及すべきだ。

該書も田漢についての専門書でありながら漢訳する際に使用した底本については言及しない。ここがすべてに共通する不十分な箇所だ。

単行本は以下のとおり。

## 2 中華書局単行本（本文横組み）

試訳者田漢、莎翁傑作集『哈孟雷特』上海・中華書局1922.11／1936.3八版（架蔵。もうひとつの影印本は奥付なし）。表紙は「少年中国学会叢書」。扉は「少年中国学会文学研究会叢書」。「訳叙」（1922.11.9）があるが雑誌初出のものとは別。

単行本は題名の1字を変更している。この異なった部分を見てほしい。

田漢自身も漢訳に使用した底本について説明していない。底本を明記しないのは清末民初時期の中国においては普通のことだ。1921年になっても田漢はその慣習にならったものか。その結果、田漢が使用した莎劇原本の底本は現在にいたるまで明らかにされてはいない。そのかわりに日訳本が出てくる。あるいは日訳



表紙



奥付

本があるから莎劇原本の探索は行なわれなかった。後に詳しく述べる。

結局のところ明確にするのは後の研究者の仕事だ。そうあって欲しかった。

## 2 瀬戸博士の記述

田漢は日本語を底本にして漢訳したという主張がある。そう書く研究者は莎劇原本について説明をしない。

瀬戸博士の専門書『中国のシェイクスピア』（2016）<sup>9）</sup>から関係部分を引用する。

完全な中国語訳の出現は、やはり五四運動の後であった。一九二一年田漢訳『哈孟雷特<sup>ママ</sup>[徳]』が最初で、『少年中国』第二卷第十二期に発表され、翌一九二二年中華書局より単行本が発行された。当時の田漢に『ハムレット』



を訳せる英語力があつたか疑問で、日本語からの重訳の可能性が強い。(後略) 189頁

雑誌初出の題名が間違っている。実物で確認しなかったことがわかる。見ていて間違っただけであれば不注意だ。上文前半は戈宝権の説明(注5参照)とかぶさる。

瀬戸博士は田漢の英語力に疑問を呈し日本語経由での重訳を主張する。ところが田漢の「英語力があつたか疑問で」というだけでその証拠を出さない。「可能性が強い」と強調した。また底本にしたはずの日本語の版本について説明はしない。重訳というから莎劇原本については無視をする。先行論文を受け入れただけなのか、あるいは自分で調査した結果なのか記述がないから判然としない。

田漢が日本に来たのは1916年18歳の時だった。1919年に東京高等師範学校聴講生となる。1920年、東京高等師範学校文科第三部(英語)に入学した(『田漢在日本』433-438頁)。

そうして1921年23歳で莎劇『ハムレット』の漢訳冒頭部分を雑誌に発表している。東京高師に在学中の翻訳である。この事実が瀬戸博士の記述に影響を与えたのかどうかはわからない。くり返すが瀬戸博士は疑問と可能性をいうだけで根拠を示さない。具体的な説明がない。それが問題だ。

聴講生になるよりも前の1918年に東京で原書を読んだと田漢自身が単行本「訳叙」に書いている[我読此劇原書在民国七年侍舅氏梅園先生居東京時]。瀬戸博士はそれについては知らぬ顔をした。

瀬戸博士の記述は説得力が皆無である。単なる印象を述べているだけにしか見えない。専門書だと思って引用した。だが新しい発見はなにもなかった。その程度のものらしい。

瀬戸博士は『澠外奇譚』の漢訳者が正しく説明していることに対して誤解であると批判した。あらかじめ下した結論を強引に押しつけたからそうなる。また林訳『吟辺燕語』について林紘の理解が不十分であるような印象操作をした。胡適の林訳批判について間違っただけの説明をした。文明戯「竊国賊」は林訳『吟辺燕語』の「鬼詔(ハムレット)」にもとづき台詞を創作している。まさに瀬戸博士のいう「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」そ

のものだ。しかし林訳批判はするが文明戯批判はしない。研究における二重基準である。文明戯「竊国賊」の初演ではないものを初演であると文献操作をした。そうして田漢漢訳『ハムレット』では証拠を示さずに日本語からの重訳説を強調した。そうだろうなと思うだけ。

陳凌虹は、瀬戸博士の該当部分を次のように翻訳している。

《哈姆雷特》的中文全訳本出現在五四運動之後，最早為1921年田漢翻譯的《哈孟<sup>ママ</sup>雷特》，發表於《少年中国》的第2卷第12期，翌年由中華書局出版單行本。對於田漢是否有足夠英語能力翻譯《哈姆雷特》尚存疑問，因此筆者認為他的翻譯底本為日文版。178頁<sup>\*10</sup>

日本語原文とほぼ同じだから訳さない。ただし漢訳の一部が原文とは異なる。日本語原文では「日本語からの重訳の可能性が強い」とある。陳凌虹はそこを訳して「筆者認為他的翻譯底本為日文版 [彼の翻訳の底本は日本語版であると筆者は考える]」に変更している。陳凌虹の基準からいえば日本語原文の「可能性が強い」は、「底本は日本語版である」という断定になるようだ。読者からいえばこちらの漢訳の方が理解しやすい。

### 3 劉瑞論文

莎劇『ハムレット』の完訳は田漢によってなされた。一般の書籍ではこれくらいの説明で終わる。事実だからそれでよい。日訳からの重訳という不確かなものを出さないだけ研究者としてはかえって誠実だということができる。いちいち紹介するまでもないので注にまとめておく<sup>\*11</sup>。

それらの中にあって劉瑞「日本訳莎活動影響下的《哈孟雷特》翻譯」(2016)<sup>\*12</sup>は一步深めて検討しているところが新しい。「深めて」というのは英語原文、坪内逍遙日訳と田漢漢訳の3種を比較対照していることを指す。

劉瑞の紹介によると日本坪内逍遙訳からの転訳説が複数あるという(39頁)。名前だけを引く。孫大雨(1987)、楊義と李憲瑜(2009)、陳啓明(2008)など

だ。

上にあげていない論文の具体例をひとつだけ紹介しよう。

李春江『訳不尽的莎士比亚：莎劇漢訳研究』（2010）\*13だ。主たる内容は次のとおり。田漢が『ハムレット』を漢訳したが、それは坪内日訳にもとづくもので莎氏の原著ではなかった。そう説明している。

1921年、田漢在《少年中国》第2卷第12期上发表了用白話翻譯的《哈孟雷特<sup>ママ</sup>》，這是莎士比亚戲劇的第一個中文全訳本，它表志着中国的莎士比亚翻譯与研究<sup>ママ</sup>工作又進入了一個嶄新的階段。不過他所依據的是日本人平内逍遙的日文訳本，不是莎氏原著。40頁

李春江も雑誌初出の題名を誤る。また『少年中国』に掲載したのは『ハムレット』の冒頭部分だけだ。それを「シェイクスピア戲劇の最初の中国語全訳本」と書いて単行本との区別がついていない。中華書局から出した単行本の説明がない。読み飛ばしそうになるが奇妙な説明だ。さらに坪内を平内と誤記する。日本語が不自由なのだろう。そうして田漢が依拠したのは莎劇そのものではないと強調する。坪内日訳についての具体的な説明がない。またそれによったという証拠を提出しない。自分で独自に検討したかどうかは不明。先行論文を不完全に引き写したもののか。

日訳からの重訳説については漢訳の実物を見れば疑問がすぐに出てくる。

田漢は雑誌初出の「代序」に莎劇原文の一部分を引用している（後述）。ここを読めば日訳重訳説が出てくる余地はない。だから李春江も引用を引用しているだけではないか。あるいは実物で確認せずに論じているのではないかという疑惑が生じる。

田漢は単行本の別「訳叙」においてもハムレットの独白を引いている。“<sup>ママ</sup>t [T]o be or not to be, that is a [the] question.”と誤植が2ヵ所あるにしても英文のままだ。この著名な台詞を田漢が間違っただけを知らない。

田漢が莎劇の英文を示しているにもかかわらず李春江は平[坪]内逍遙の日本語訳本に依拠したと説明する。これは理解するのがむづかしい。英語原文を見せて

いるのだから田漢は莎氏原作を英文で読んだだろう。普通はそう考える。それとも李春江は田漢単行本で確認していないのだろうか。

劉瑞論文にもどる。

細かいことだが指摘しておく。田漢漢訳の雑誌初出題名を「哈孟雷特」と間違える。根拠は李長林と楊俊明の論文だとする(38頁)。了解しがたい。劉瑞は田漢単行本を見ただけで雑誌は手に取らなかったということだろうか。中国では『少年中国』そのもの、あるいは影印本を入手することが困難なのかもしれない。全部だとはいわない。だが多くの論文が同じように誤記するのは奇妙な感じだ。

劉瑞は前述のように莎劇原文、坪内、田漢を比較対照していくつかの例を示した。従来研究者よりも詳しく検討した。これは高く評価できる。

その結論はこうだ。田漢は莎氏の原著から直接に逐語訳する方針で翻訳した。その翻訳過程で坪内逍遙1909年の日訳本を参考にした(41頁)。ほぼ妥当な結論だと思う。

ただし説明が不足する部分がある。田漢は莎劇原文にもとづいて漢訳したのはいい。ではその莎氏の原文とは何版なのか。劉瑞は説明しない。つまり重要な探索がなされていない。劉瑞が引用する英文は参考文献で示している梁実秋の中英対照本<sup>\*14</sup>のようだ。ならば梁実秋が使用した莎劇原文についてひとこと説明すべきだった。

もうひとつ。劉瑞は坪内日本語訳本だけしか提出していない。そこにはためらいもなければ説明もない。いきなり坪内日訳本であると決めつけている。その根拠はなにかを言わない。なぜ坪内なのか。先行論文が坪内しか掲げていないからかもしれない。だが参照した日訳本は坪内本だけだったのか。ほかにも日訳本があったのではないか。いくつかの可能性を示して絞り込む必要があった。底本を特定するばあいには必要な手続きがある。そこまで想像力は働かなかったようだ。残念なことだった。

また後述するが田漢単行本には説明に不思議な箇所がある。書名と著者名の英文表記、あるいは田漢「訳叙」に引用する「某莎翁学者」、また紹介された沙翁の略歴など。これらについて劉瑞は解説しない。そこまでは調査が及ばなかったものと見える。

本稿は日訳からの重訳説を提出する論文については掘り下げない。目的は田漢漢訳『ハムレット』の底本そのものを追究することだからだ。

#### 4 手がかりとしての単行本『哈孟雷特』

田漢漢訳『ハムレット』を日本語訳と結びつける。その考えは彼が日本に滞在していた事実と無関係ではない。日本人との交流もあった。ゆえに田漢は日本における莎氏と莎劇についての研究動向を知っていただろう。その影響を受けていないはずがない。そう推測するのは自然の流れだ。

田漢が使用した、あるいは参考にした各種書籍を追跡する必要がある。言うのは簡単だ。しかし実行した人はいない。

莎氏と莎劇について多数の研究文献が日本にもある。これに加えて英語で書かれた参考書が存在するだろう。田漢が見た関係書を探すには大きな困難があるのはいうまでもない。今まで誰も探索に着手していない理由だ。

絞り込めば現在のところふたつの資料が基礎になる。すなわち田漢漢訳『ハムレット』の雑誌初出と単行本そのものだ。当たり前と思われるか。ふたつしか存在しないのか、と落胆する必要はない。ふたつもあると考えれば後の調査につづく。

この資料2件にはいくつかの手がかりが示されている。実物を見ればすぐに理解できる。しかし従来の研究者はそれを手に取ったかもしれないが検討はしなかった。引用したが追究はしなかった。発想がなかったのだろう。底本探索が進まなかった理由だ。日訳にしる莎劇原文にしるそれらを特定するための手続きを踏んでいないということでもある。

漢訳の底本を特定しようとする研究者は多くない。ほとんどの人が先行文献を引用して終わりだ。イソップ、アラビアン・ナイトなどの例でわかっていた。そういう研究環境の中では田漢漢訳『ハムレット』も例外ではなかった。

まず単行本から問題になる箇所を簡単に指摘しておく。疑問だけを先に抽出提示し説明はあとにする

扉前に書名と著者名の英文表記がある（影印本には未収録。写真は後掲。以下同

じ)。

THE/Tragicall Historie of/HAMLET/Prince of Denmarke./By William  
Shake-speare.

このページは初版と後版では配置場所が異なる。それはよいとして、表記されたその英語綴りが現在とは異なる。一見してかなり古いことに気づく。そのはずは莎劇原本の初期になる第1クォート (Quarto 四つ折本、1603)、第2クォート (1604) に見える表記だ。のちのフォリオ (Folio 二つ折本、1623) とは違う。

普通に考えて日本にいる田漢がこれらの貴重本を実物で見たとは想像できない。

坪内逍遙は次のように書いている。「就中、一六二三年の第一フォリオ全集の如きは、十数年以前ですら三千ポンド以上 (三万圓以上) で売買されたといふから、今日では、価格が倍加したであらうのみならず、恐らくもう市場には出ないであらう」「第一フォリオの複製版は、私は不幸にして毎に入手の機会を失つたので、まだ早大図書館にも演劇博物館にも備へ付けてないが、一六三二年の第二フォリオの複製は幸ひに早大だけでも二部ある。クォート一の複製の如きも既に幾回となく出来てゐるのだが、それらも早大にはない」<sup>\*15</sup>というくらい当時の日本では貴重な版本だ。

莎氏の綴りはいくつかある。Shake-speare と分割して表記するのは現在ではすたれてしまった。

これら原文の題名と署名はどこから引いてきたものか。これが最初の疑問だ。田漢は説明していない。

単行本の「訳叙」(雑誌初出の「訳叙」とは別物)は「某莎翁学者」が莎氏とイプセンを論じたときカッコを使用して紹介する。この引用文はどの文献から持ってきたものか。また「某」とは誰のことをいうのか。なぜ「某」とだけ書いて実名を出さないのか不可解だ。出たくない理由があるのかもしれない。それならばいっそのこと引用しなければよいのと思う。田漢にとってはどうしても紹介したかった文章なのだろう。

つづけて莎氏の生涯を習作期、喜劇期、悲劇期、老成期と区分けする。



見によればそれらについて指摘した研究論文を見つけることができなかった。

簡単に検討しただけで以上のような疑問が生じている。それらがすべて底本探究の手がかりになる。

## 5 日本語訳『ハムレット』から

要点はふたつある。田漢漢訳『ハムレット』単行本（1922）は中国最初の全訳であること。もうひとつ。田漢は日本に滞在していたこと。それは1916-22年のあいだ、彼が18歳から24歳までの長期間にわたる。日本での『ハムレット』翻訳、研究と田漢漢訳とのあいだには密接な関係があったであろうと予想される。

莎劇原作について初期のクォート、フォリオに溯ることはしない。もともと貴重本だ。前述のように田漢がそれらを手にしたとは考えられない。漢訳の底本にしたのはずっと後に出版された多数の版本のいずれかだろう。これが出発点だ。

田漢が日本で見たと考えられる日訳本は限られてくる。ラム本ではなく莎氏の戯曲（莎劇）をもとにした日本語訳、それも完訳である。さらには田漢漢訳以前に出版された単行本だ。そうなれば多くはない。

河竹登志夫『日本のハムレット』（南窓社1972.10.31）、国立国会図書館『第73回常設展示 ハムレットを日本語で』（1996 電字版）、榊原貴教「ハムレット翻訳作品年表」（電字版）などを参考にして国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧した。

土肥春曙、山岸荷葉翻案『莎氏悲劇 ハムレット』（富山房1903）あるいは山岸荷葉翻案『沙翁悲劇 はむれつと』（春陽堂1908）などは日本化している。田漢漢訳の参考にはならないように思える。

要件を満たす日本語『ハムレット』完訳本は、次の2種類に絞ることができる。

1 戸沢姑射（正保）、浅野馮霊（和三郎）共訳 沙翁全集第1巻『ハムレット』大日本図書株式会社 1905.9.8（以下戸沢、戸沢日訳と称する）





2 坪内逍遙（雄蔵）『ハムレット』早稲田大学出版部1909.12.25／1923.12.10十八版（以下坪内、坪内日訳と称する）



上の書誌は私が所蔵する実物にもとづく。またウェブで読むことができる。

## 6 戸沢日訳と田漢単行本

戸沢姑射（正保、1873-1955）は、東京帝国大学英文科卒業、のち東京外国語学校長。菊池清（幽芳）は兄という。

戸沢日訳と田漢単行本がつながっている。つまり影響関係があるということだ。

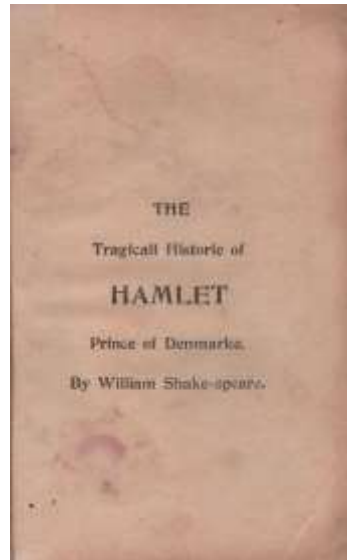
それを証明する事柄はふたつある。ひとつは両書の絵図、もうひとつは田漢「訳叙」である。

戸沢日訳に収録されたいくつかの写真図版が興味深い。田漢単行本と共通する箇所があるからだ。

第2クォート版表紙の写真がある。戸沢は1604年と説明するが写真をよく見れば1605年だ。



戸沢



田漢

ふたつを並べると一目瞭然だろう。田漢単行本は第2クォート版写真の文字だけを抜き出した。第2クォート版の写真では Shake の次の s が変形となっている。田漢単行本ではそれを反映して Shake-speare と分かち書きをしたとわかる。

劇中劇の絵画（1842）はダニエル・マクリース（Daniel Maclise、1806-70）作。戸沢日訳と田漢単行本は同じ。ただし、戸沢日訳図版右下に見える Exerr Plar（意味不明）を含めて田漢単行本では掲載時に底辺部分を少しだけ切除した。

すべての絵図が一致しているわけではない。異なる絵図もある。

戸沢日訳に収録する莎氏立像（Portrait of William Shakespeare、1849）はフォード・マドックス・ブラウン（Ford Madox Brown、1821-93）作のもの。



戸沢



田漢

ラム姉弟『シェイクスピア物語』のひとつ（Collins' Clear-Type Press, 1900?）に収録されているらしい。



Ford Maddox Brown<sup>ママ</sup>作／戸沢



TALES FROM SHAKESPEARE, LONDON & GLASGOW. COLLINS  
'CLEAR - TYPE PRESS. (C/V)

Collins' Clear-Type Press ネットより引用

戸沢がラム本から引用したかどうかは不明だ。

田漢単行本は別の版画に差し替えた。こちらの原画はチャンドス・ポートレイ

ト (The Chandos portrait) と呼ばれる。伝 John Taylor (1585-1651) 画。それを写した。



原画の写し



田漢



幼児莎氏 (拡大図)

田漢単行本で新しく追加した銅版画もある。「幼児シェイクスピアと喜劇、悲劇」と名づけられる (George Romney、1734-1802 画、 Benjamin Smith 刻 1803)。幼児莎氏がふたりの女性 (喜劇と悲劇) に育てられるという架空の物語を銅版画にしたもの。喜劇の顔はハミルトン (Emma Hamilton) を写したと伝えられる。この銅版画はある版本から引いてきた。後述する。

田漢単行本の莎氏銅版画がどういう版本に使用されたものかは不明。田漢自身が収録を手配したのか。あるいは中華書局の担当編集者の指示かどうかもわからない。もっとも当時、田漢は中国に帰国しており彼自身が発行元の中華書局に勤務していた（『田漢年譜』60頁）。

田漢単行本と戸沢日記を結ぶもうひとつのものは「訳叙」だ。

## 7 田漢単行本「訳叙」の問題

田漢単行本と表示するのは雑誌初出の「訳叙」と区別するためだ。本文そのものは長くない。1頁半のなかで3段落にわかれる。1段目は「某莎翁学者」が言ったという莎氏の人物描写は油絵、イプセンのそれは大理石という記述だ（後述）。2段目は莎氏の作者生涯を4分して解説する。3段目は『哈孟雷特』漢訳にいたる経過を簡述する。

戸沢日記との関係があるため2段目から先に説明する。

田漢は莎氏の作者生涯を「(一) 習作期」「(二) 喜劇期」「(三) 悲劇期」「(四) 老成期」に分ける。「(四) 老成期」は題名だけで内容には言及しない。理由は不明。

「(一) 習作期」は単に莎氏24歳から31歳までの時期だと述べるだけ。作品名はあげない。

「(二) 喜劇期」は少し詳しい。以下に引用する（傍線は省略）。

直到三十二歳作『威尼斯的商人』，纔發揮了他作劇的天才。自時而後，縱其如江如海如火如荼的才氣，草成無數世界文壇稀有的喜劇；以此受知於 Southamton, Essex 兩伯爵，及 Pembroke 侯爵：是為第三<sup>ママ</sup>[二]期，莎翁最得意的時期也。然曾幾何時，前日之保護者皆淪於慘境。S., E. 兩伯且坐謀叛一繫倫敦塔，一登斷頭台。莎翁自身也頗受嫌疑，又兼慈父見背，益憂傷抑鬱不能自聊，遂成第三期的各種悲劇，而「哈孟雷特」一劇沈痛悲愴為莎劇四大悲劇之冠。誦 Hamlet 的獨白，<sup>ママ</sup>to be or not to be, that is <sup>ママ</sup>a question. 不啻誦屈子離騷。現代多「哈孟雷特」型的青年，誦此將作何感想？ 1-2頁



32歳になり『ヴェニス商人』を書いてようやく劇作の天才を發揮した。この時以後、その大海のような溢れんばかりの猛烈な勢いの才気をほとぼしらせ世界文壇にはまれな喜劇を無数に書いた。それによりサウサンプトン、エセックス両伯爵およびペンブルック侯などに知られた。これが第三<sup>三</sup>[二]期であり莎翁が最も得意な時期である。しかし間もなく昔の保護者はみな悲惨な境遇に陥ってしまった。サウサンプトン、エセックス両伯爵は謀反のためにひとりロンドン塔につながれ、ひとり断頭台に登らされた。莎翁自身も嫌疑を受け、また慈父にも死なれてひどく悲しみふさぎ込んでしまい気をやすめることができず、ついに第三期の各種悲劇を書いた。『ハムレット』という劇が深刻悲惨で四大悲劇の最優秀作である。ハムレットの独白 *to be or not to be, that is a question.* を読めば、あたかも屈原「離騷」を読むようである。現代の「ハムレット」型の多くの若者は、これを読んでいかなる感想を抱くであろうか。

ハムレットの著名な独白（冒頭を小文字の t に、the を a に誤る）を引き、屈原と現代の若者を出した部分は田漢の筆になる。だが上記のように莎氏の伝記を簡単に述べるにあたり田漢が依拠した日本語の文章が存在する。田漢はそれを明記しなかった。

戸沢日訳は浅野和三郎「沙翁評伝」を収録する。これが田漢単行本「訳叙」の種本だ。

浅野は莎氏の生涯を「その第一期」から「その第四期」までに区分ける。「一五九五年に出せる「ジョン王」にいたる迄、凡そ四篇を出せり。以上を沙翁の修業時代といふべく、之をその第一期となす」（4頁）が田漢のいう「(一) 習作期」に相当する。

浅野「その第二期」から符号「……」を使用し中略しながら田漢「訳叙」と重なる部分を引用する（傍点は省略。以下同じ）。

一五九六年沙翁が傑作の一なる「ヴェニス商人」出て、この時を以て沙翁の第二期に入る。……（中略。「ヴェニス商人」で見せる莎氏の技量を絶賛す

る) 当時の沙翁は少壮活躍の元気に富み、血湧き腕鳴りて、失敗の何物なるやを知らず、蹉跎の何物なるやを味は、ざりし時代なれば、重もに筆を喜劇に染め、……(中略。具体的な作品名をあげる) 是等の諸作は喜劇として世界文壇に匹儔を見ず。……(中略。作劇の内容を評価する) 沙翁の一身にとりても、この時代が最も得意幸福の時代にして、渠は是等の諸作によりて財を剰し、名を揚げ、サウザムプトン伯、エセックス伯、ペムブローク侯など、当時有力者の眷遇を受け、又女王の愛顧をさへ蒙りぬ。されど現世の有為転変は、何人の場合に於てもかはることなく、沙翁の身は俄然逆境に沈淪するに至りぬ。渠の保護者の多くは皆失意の境に陥り、中にもエセックスの如きは、叛逆の汚名を負はされて断頭台の露と消え、沙翁自身も多少之れと聯関して、苦楚を嘗めたり。(後略) 4-5頁

両者を比較対照すると田漢が浅野の日本語にもとづき要点を押さえながら要約していることがわかるだろう。英国貴族の名前は別の資料で英語綴りを調べたようだ。浅野は沙翁と書き、田漢は莎翁として共通する。朱東潤は莎氏としていた。

田漢単行本「訳叙」が戸沢日訳の文章を取り入れていることは明らかだ。では戸沢日訳『ハムレット』そのものが田漢漢訳の底本なのか。あるいは戸沢が底本とした英文原作が田漢の漢訳した書物か。それほど簡単に解決する問題ではない。さらなる検討が必要だ。

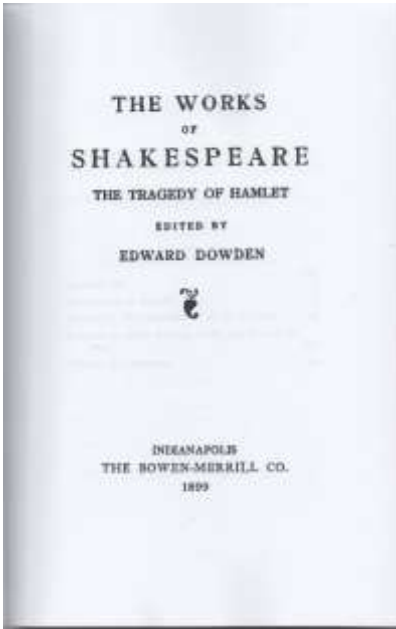
## 8 戸沢日訳のダウデン

戸沢日訳には「ハムレット」引がある。底本について次のように明記している。「原書は主としてメシユエン社発兌、ダウデン氏校訂の「ハムレット」を採用したり」

私が見ているのは次のとおり。

The works of Shakespeare: the tragedy of Hamlet / edited by Edward Dowden. / London: Methuen and Co., 1899





影印本。ウェブでも読むことができる

訳者である戸沢自身がそう書いている。エドワード・ダウデン編になる『ハムレット』が戸沢日訳の底本であることは確かだ。

ではダウデンが田漢漢訳の底本でもあるのか。それについて私は否定的な見解をもつ。ダウデンは各種テキストの異同を注釈する学術的に価値のある刊行物だ。ただし挿絵は1葉も収録していない。

もう一度いう。細部に事実が露出している。これが従来から示している私の考え方だ。

例を示す。登場人物の一覧を掲げるのが普通の現行本である。人物の配列を見る。上位3名を抜き出すのはここが問題になるからだ。

【ダウデン】CLAUDIUS, *King of Denmark.* / HAMLET, *Son to the late, and Nephew to the present King.* / FORTINBRAS, *Prince of Norway.*

【戸沢】クロウヂアス (Claudius) 丁抹国王 / ハムレット (Hamlet) 先王の子、現王の甥 / フォーチンブラス (Fortinbras)

戸沢日訳の底本がダウデンだから登場人物の順序が同じなのは当然だ。ところ

が、田漢漢訳はどうか。

【田漢】克魯底亜斯，丹麦王。／哈孟雷特，前王之子，今王之姪。／波樂紐斯，侍従長。

クローディアス、ハムレットの次はポローニアスだ。ダウデンおよび戸沢とは異なっている。田漢漢訳ではフォーティンbras（華廷普拉斯，挪威世子）は人物表のだいぶ後ろ、墓堀人のつぎに配列されている。

田漢漢訳の底本がダウデンであるならば人物表の順序を変更したことになる。漢訳にあたってわざわざそういう手間をかけるだろうか。しかも田漢漢訳の人物表はカーテンを開く小姓の挿絵になっている。



ここが大きく異なる点だ。またこの絵図が重要な意味をもつ。挿絵は底本を探索するときの基本的な手がかりになる（例外だったのは林訳『伊索寓言』）。

ダウデン以外の版本を探さなければならない。戸沢日記「研究書目」に掲げる次の版本がさらなる探索対象になる。

(a) <sup>ママ</sup>*The Glove Edition*, edited by Clark and Wright, 1 vol. (Macmillan.) 其価

廉にして正確、標準本として愛用せらる。15頁

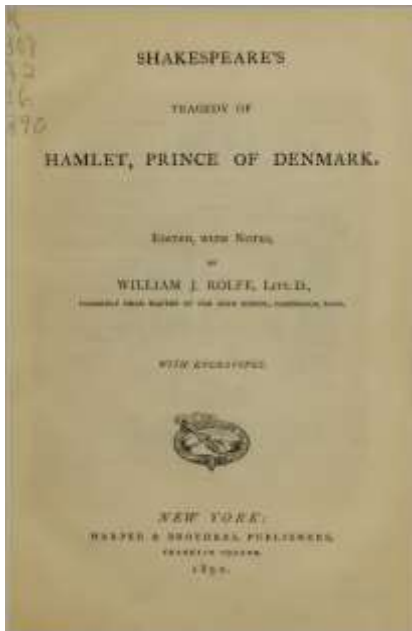
戸沢の説明によると当時の日本では一般に普及していた版本のようだ。

私が見ているのは1882年版のグローブ（Globe Edition）である（THE WORKS OF WILLIAM SHAKESPEARE, LONDON: MACMILLAN & CO LTD, 1956も参照している）。挿絵はない。登場人物の配置は田漢単行本と一致する。しかし挿絵がないから底本ではないだろうと判断した。

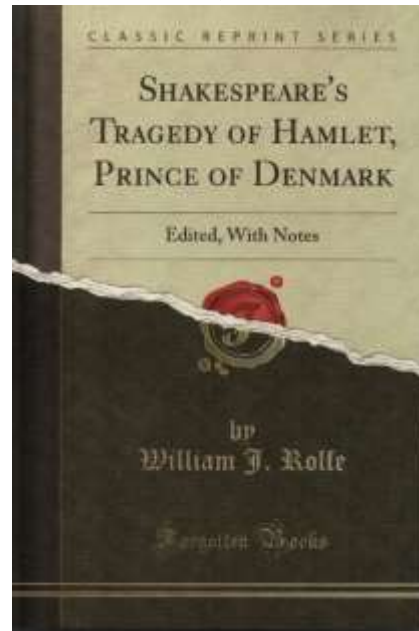
## 9 ロルフとの共通点

いくつか見た版本の中にロルフを見つけた。検討した結果を先にいえば、ロルフが田漢漢訳の底本だと考えて間違いなからう。

SHAKESPEARE'S / TRAGEDY OF / HAMLET, PRINCE OF DENMARK.  
/ EDITED, WITH NOTES, / BY / WILLIAM J. ROLFE, LITT.D., / NEW  
YORK: HARPER & BROTHERS, PUBLISHERS, 1890



扉 OPEN LIBRARY より引用



影印本

ウィリアム・ジェイムズ・ロルフ (William James Rolfe, 1827-1910) は文学博士 (Litt.D.)、アメリカの莎氏研究者だという。

田漢単行本とロルフにはいくつかの共通点がある。

登場人物表の絵図と掲載順位が同じ。ロルフの特徴のひとつは多数の銅版画を収録することだ。前述したように田漢単行本は戸沢日訳から部分的に引用をしていた。それとは別にこのロルフから登場人物表の絵図と幼児莎氏銅版画を借用している。先に拡大図を掲げた。ここでは田漢単行本からページ全体を再度引用する。



Hamlet 登場人物表



幼児莎氏 ロルフ



田漢

ハムレットといえば、第3幕第1場に出てくるあの有名な台詞だ。

発行の順にグローブ（1882）、ロルフ（1890）、ダウデン（1899）の該当箇所を示す。語句は同じである。注目してほしいのは符号の使い方だ。さらに戸沢日訳、坪内日訳、田漢漢訳も併記する。参考までに1930年代から莎劇の漢訳を公表している梁実秋訳も添える。

### 第3幕第1場

【グローブ】 To be, or not to be: that is the question: 66頁

【ロルフ】 To be, or not to be, — that is the question: 95頁

【ダウデン】 To be, or not to be: that is the question: 98頁

【戸沢】 定め難きは生死の分別 123頁

【坪内】 <sup>ながら</sup>存ふるか、存へぬか？ それが疑問ぢや…… 110頁<sup>\*19</sup>

【田漢】 還是活着的好呢，還不活的好呢？ ——這是一個問題： 73頁

【梁実秋】 To be, or not to be: that is the question: 134頁

死後還是存在，還是不存在， ——這是問題；135頁<sup>\*20</sup>

田漢の「生きるのいいのか、それとも生きないのいいのか？ ——これが問題だ」の「？」は英文には使用されていない。坪内日訳にはそれがある。田漢がそれにならって付加したものと思う。もうひとつの「——」はロルフと一致する。その符号は他に例を見ない。ついでに、梁実秋漢訳の符号は英文にはない。

語句が同じバージョン間では符号のような小さな部分が重要な意味を持っていると私はいう。

田漢は戸沢日訳の挿絵のほかに解説を参照したことは述べた。しかし日訳の「定め難きは生死の分別」では田漢漢訳から離れる。

上記部分だけならば田漢漢訳は、ロルフおよび坪内日訳との関連が強いように見える。それを検証するためにもういちど田漢単行本「訳叙」を取りあげる。

## 10 田漢のいう「某莎翁学者」

田漢単行本「訳叙」にもどる。説明を後まわしにした1段目である。くり返すと「某莎翁学者」が言ったという莎氏の人物描写は油絵、イブセンのそれは大理石彫像という記述だ。

田漢単行本「訳叙」の冒頭を引用する（傍線は省略）。

某莎翁学者拿莎士比亜所描写の人物和易卜生所描写の相比，謂『莎翁の人物遠觀之則風貌宛然，近視之是則筆痕狼藉，好像油画一樣；易氏の人物則鬼斧神斤毫髮逼肖，然使人疑其不類生人，至少也僅是人類某一時期中的姿態，好像大理石的彫像一樣。』現在中国の美術館裏大理石彫像可搬来不少了。那麼再陳列一些油画不更豐富些嗎？所以引起了我選訳莎翁傑作集的志願。1頁

あるシェイクスピア学者が、シェイクスピアの描写する人物とイブセンの描写するものを比較して次のようにいった。「シェイクスピアの（描く）人物は遠くから見ると風采容貌がそれらしいが、近くで見ると筆跡が乱雑でまるで油絵のようだ。イブセンの人物はといえば、鬼神が斧で刻んだように産毛も頭髪も真に迫っているが生身の人間ではないと疑う気にさせる。少なくとも人間のある一時期の姿勢態度にすぎずまるで大理石の彫像のようである」現在、中国の美術館には少なくない大理石の彫像が運び込まれている。ではいくつかの油絵を陳列すればさらに豊富になるのではなからうか。そこで私はシェイクスピア傑作集を選訳する願望を抱いたのである。

田漢単行本「訳叙」2段目が戸沢日訳の所収する解説を要約したものだった。ではこの1段目も戸沢から引用したのではないか。当然そういう推測が出てくる。だがそれは違う。ここは戸沢ではない別人の文章にもとづいてその内容を要約引用した。

カッコで一括りにしているからあたかもまとまった箇所から引いてきたかのような印象をあたえる。それは田漢が施した工夫のようなものだ。「某」として著者名を出さないのもたぶん原文が誰のものか不明確にするための技巧ではないかと疑う。

こちらの引用元は、坪内雄蔵「近松対シェークスピア対イブセン」（1911）<sup>\*21</sup>

だ。莎氏とイブセンに分けて2カ所でそれぞれを解説している。

之れを要するに、シェークスピアの作の人物は一寸見たる所は生きた人間に相違ないやうに見える、手を以て捕へられさうにも見えるが、傍へ近づいて更によく見ると態度や風采や何やかに何処か実物でないと思はれるやうな箇所が目立つて来て、何だか簡粗なやうな所が見える。奥行もありげに見えるが、模糊朦朧として居て、何処迄が奥行だか分らぬ。恰も油絵を見るやうな趣。355頁

イブセンに至つては、前から見ても後から見ても左右から見ても如何にも生きた人間らしく出来て居る。目鼻立ちから四肢五体の末まで明白にはつきりと写し出されてあるが、それが余り明白過ぎて冷やかにいかつく、何となく真に生きてゐる人間とは思はれない所が見える。少なくともあらゆる人間が常に皆こんな風にして居るのではないと云ふ感じが起る。かう云ふ人間もあるかも知れぬが、是れは或場合に於ける或人間の姿勢である、態度であると思ふ。十九世紀以後の大理石の彫像でもあらうか。355-325頁

油絵（田漢「油画」）と大理石の彫像（田漢「大理石彫像」）が一致する。田漢の説明は坪内の文章を要約していることがわかる。本来ならばまとめてカッコで囲むものではない。原文のままの引用漢訳ではないからだ。要約したことがわかるような書き方ができなかつたのだろうか。

というよりもこれを含めて「某莎翁学者」と書いたのは田漢の工夫だったように思う。つまり田漢は自分の著作に坪内逍遙という日本人の名前を出したくなかつたからではないか。出版当時、日中関係が政治の上で更に悪化していた事情を反映しているのだろう。雑誌初出「訳叙」には易漱瑜と一緒に上野で桜を見物したことを書き込んでいた。だが単行本ではそれらを削除する。前述のとおり『ハムレット』原書を読んだのが1918年に易梅園と「東京」にいた時だったとわずかに書くだけ。沙翁の伝記を紹介した箇所にもそれが戸沢本にもとづいているとは説明していない。できるだけ日本の影を消去したかつたと思われぬ。逆に考えれば表面では消去したくなるほどに奥では深く日本からの影響を受けてい

たということだ。

## 11 雑誌初出「哈孟雷徳」

本稿では雑誌初出の「哈孟雷徳」を検討する。田漢は『ハムレット』を日本で翻訳した。単行本にする時訂正したと説明している（単行本「訳叙」2頁）。手を入れる前の漢訳はどういうものだったのかを知りたいと思うからだ。

### 1 「訳叙」と「代序」

雑誌には「訳叙」（1921.4.16）と「代序」が冒頭に置かれている。

田漢は母方のおじ易梅園（また易象）に連れられて日本にやってきた。のちの妻易漱瑜は彼の娘だ。

「訳叙」ではその易梅園が死去したことに触れる。長沙において軍閥に殺害されたという（『田漢在日本』441頁）。易漱瑜と桜見物をしておじを偲ぶ。おじの死を知ったときは悲しみと怒りが胸に満ちていたが、少し落ち着いてから莎氏（田漢の用語では莎翁）の『ハムレット』の漢訳に自分の思いを託すことにした。「一九二一年，四月十六日，田漢識於江戸西郊之月印精舎」と記している。三島、上野、江戸と日本に関係する単語を盛り込んでいることがわかる。

つぎの「代序」はおじ易梅園を喪失したことに関係して人間不信の気持ちをハムレットの独白（第2幕第2場）で代弁させる。

注目されるのは原文を引用してそれに漢訳を添えていることだ。英文を示しているのは珍しい。また重要資料であるにもかかわらずこの原文について説明する論文を見ない。

文章を区切りながらロルフ、戸沢日訳、坪内日訳を掲げる（ルビ省略。以下同じ）。田漢1で雑誌初出を、田漢2で単行本の漢訳を示す。英語原文に異同があるばあい、[]を使う。必要があれば注記する。

【ロルフ】 I have of late — but wherefore I know not — lost all my mirth,  
forgone all custom of exercises ;



【戸沢】さて身は近頃何故にや、たのしいといふ事少しもなく、あらゆる遊戯も廃してしひ、

【坪内】予は近来……何故かは知らねども……悉く歡樂をば失うたわい、諸芸をも廃てしまうた。

【田漢 1】我近来——我也不知道為着甚麼緣故——把我一切的歡樂都失掉了，把我一切遊戯的習慣都忘記了；

【田漢 2】我近来——我也不知道為着甚麼緣故——把我一切的歡樂都失掉了，把我一切遊戯的習慣都忘記了；

気づくのはロルフと田漢漢訳が使用している符号の場所が一致していることだ。ロルフに「-」と「;」があれば田漢も同じ場所に置く。戸沢にはふたつの符号がない。ただし坪内には「……」はあるが「;」がない。

*exercises* は身体を動かす運動だ。戸沢は「遊戯」に、坪内は「諸芸」と訳した。田漢は戸沢訳を採用したように見える。「歡樂」は坪内と共通する。*custom* は田漢により辞書どおりの「習慣」である。英語原文を読んでいるから逐語訳したかったらしく田漢独自の漢訳になった。

【ロルフ】 and indeed it goes so heavily with my disposition that this goodly frame, the earth, seems to me a sterile promontory ;

【戸沢】 何とはなしの悲しさが深く性根に沁み渡り、此立派な世界も、身には荒果てたる野原と見え、

【坪内】 能い堪へられぬ憂愁の、我胸臆に鬱積して、地球といふ此立派なる大組織も、予に取つては荒れ果てた岬も同然。

【田漢 1】 而且实在我的胸臆之間百憂叢集乃至連地球這個盡善盡美的大組織，在我看起来不過一個荒涼的海角；

【田漢 2】 而且实在我的胸臆之間百憂叢集乃至連地球這個盡善盡美的大組織，在我看起来，也不過一個荒涼的海角；

*it goes so heavily with my disposition* とは自分の気質、傾向、性向がひどく

なるという意味だ。戸沢はそれを「何とはなしの悲しさが深く性根に沁み渡り」と訳した。一方の坪内は「能い堪へられぬ憂愁の、我胸臆に鬱積して」である。田漢は原文の *indeed* を「实在」で表わし日本語訳と異なることを示す。彼独自の漢訳である。あとは坪内の「胸臆」を共有し、「憂愁」は「百憂」に「鬱積」は「叢集」へと置き換える。*this goodly frame* が坪内では「此立派なる大組織」になり田漢が「這個盡善盡美的大組織」と受ける。「立派なる」は「盡善盡美的」に相当する。「大組織」は坪内と共有する。*promontory* を坪内は「岬」にしたのを田漢は漢語で「海角」に置き換えた。

田漢の漢語は確かに坪内の用語と共通する箇所がある。坪内の使用する漢字が漢語と同じ意味を持つばあいは、田漢が坪内日訳を参考にして漢訳すれば同じになることもあるだろう。

田漢は単行本を出すに当たって訳文に手を入れたと述べていた。上の例を見るかぎり小規模だ。コンマ符号を追加し「不過」を「也不過」にしたくらいのもの。

【ロルフ】 *this most excellent canopy, the air[,] look you, this brave o'[v]erhanging firmament, this majestic roof fretted with golden fire, — why, it appears no other thing to me than a foul and pestilent congregation of vapours.*

【戸沢】此の美しい青天井、此の大気、此大空、此の金色の星を象眼にしたる大屋根も、たゞ忌まはしき毒瓦斯の、簇れる處とより外思はれぬ程、

【坪内】此空といふ世に美しい天蓋も、あれ、あの壯麗の穹窿も、燃ゆる黄金を鏤めたる雄大無双の碧落も……はて、我目には、只もう汚い穢らしい毒瓦斯の漲る場所とばかり見ゆるわい！

【田漢 1】高空這個極優美的天蓋，你看，這個糾糾高懸的蒼穹，這個鏤着黄金之火の，雄大無边的碧落，——甚麼在我的心目中間不過一団汚穢的毒氣。

【田漢 2】高空這個極優美的天蓋，你看，這個朗朗高懸的蒼穹，這個鏤着黄金之火の，雄大無边的碧落，——甚麼，在我的心目中間也不過一団汚穢的毒氣。

英文の the air[,] は、カッコ内に示したコンマを田漢が打ち忘れたことを意味する。誤植だろう。ついでにいう。『田漢全集』第19巻172頁では不足を補い訂正している。初出雑誌のままではない。本来は注釈をつける箇所だ。中国で実行している本文引用の基準が日本で普通に考える全集本とは違う。

もうひとつ、原文の o'erhanging を田漢は overhanging に書き換えた。莎劇の初期版本<sup>\*22</sup>では orehanging または ore-hanging となっている箇所だ。グローブ、ロルフ、ダウデンともに o'erhanging としている。書きかえは田漢独自の判断であるらしい。

原文には符号「——」がある。戸沢は底本としたダウデンにそれが施されていないため当然のように無視した。坪内と田漢は符号の種類は違うが存在しているそのままを反映させている。ただし坪内が「見ゆるわい！」と感嘆符を使用した箇所は、ロルフに「！」はない。田漢はこの符号について坪内を採用しなかった。

坪内と田漢の共通する単語をあげる。「天蓋」「雄大」「碧落」「汚い穢らしい[汚穢]」である。

田漢はここでも初出の「不過」を単行本で「也不過」にしている。コンマ符号を加えて細かい手入れだということができる。

【ロルフ】 What a piece of work is man ! how noble in reason ! how infinite [in] faculty ! in form and moving how express and admirable ! in action how like an angel ! in apprehension how like a g[G]od ! the beauty of the world ! the paragon of animals !

【戸沢】 又人間とは何たる造化の妙工、高き理性、無限の能力、形態美しく、挙動正しく、行状は天使の如く智慧は神の如し、げに世界の花、動物の鑑とは人間の事、

【坪内】 人間は、ま何たる造化の妙工ぢや！ 理智には秀で、能力には限がない！ 風姿といひ、挙動といひ、いみじうもあり、ふさはしうもあり！ 行為は天使の如く、智慧は神にも似た此人間！ 世界の華とも万霊の長とも思ふ此人間！

【田漢1】 人類這個東西是怎麼一個造化的妙工！理智怎樣的高！能力怎樣的

広！風姿動作怎樣的特別而可誇！行為怎樣的像一個天使！智慧怎樣的像一個神明！真個是世界的花！万物の靈長！

【田漢2】人類這個東西是怎麼一個造化的妙工！理智怎樣的高！能力怎樣的広！風姿動作怎樣的特別而可誇！行為怎樣的像一個天使！智慧怎樣的像一個神明！真個是世界的花！万物の靈長！

原文は [in] faculty! と in がある。田漢は写し忘れた。また、g[G]od! と g の小文字が原文だ。しかし田漢は大文字にする。誤記なのか、常識に従って直したのかは不明。

原文を見れば「！」を多用していることがわかる。坪内は「行為は天使の如く」のあとには「！」を置いていない。また「世界の華」でとどめず後ろの文章につづけた。そのため「！」を省略した。しかし田漢は原文にあるがまま「！」を使用する。英文に忠実であることが理解できる。これを見ても田漢が漢訳したとき莎劇そのものを底本にしていなかったという説明は成立しない。

坪内は「智慧は神にも似た此人間！ 世界の華とも万靈の長とも思ふ此人間！」として原文にはない「此人間」を挿入した。田漢はそれについては坪内日記を採用しなかった。

それでも坪内と田漢の語彙は一致するものが多い。「造化」「妙工」「理智」「能力」「風姿」「行為」「天使」「智慧」などだ。

比較する例として梁実秋と朱生豪の漢訳を示す。それらの訳文と対照するのは理由がある。坪内日記とは関係のない梁実秋、朱生豪の用語を見るためだ。田漢とはどれくらい異なるかを知りたい。

【梁実秋】人是何等巧妙的一件天工！理性何等的高貴！智能何等的広大！儀容举止是何等的匀称可愛！行動是多麼像天使！悟性是多麼像神明！真是世界之美，万物之靈！ 111頁

【朱生豪】人類是一件多麼了不得的傑作！ 多麼高貴的理性！多麼偉大的力量！多麼優美的儀表！ 多麼文雅的舉動！ 在行為上多麼像一個天使！ 在智慧上多麼像一個天神！ 宇宙的精華！ 万物の靈長！ 49頁<sup>\*23</sup>

田漢／梁実秋／朱生豪の順に単語を対比する。

造化的妙工／巧妙的一件天工／了不得的傑作、理智／理性／理性、能力／智能  
／力量、風姿／儀容／儀表、行為／挙止／挙動、天使／天使／天使、智慧／悟性  
／智慧

見れば、田漢と朱生豪が一致するのは「天使」と「智慧」くらいだ。田漢の漢訳用語が坪内日訳にかなり近いことがあらためて理解できる。

【ロルフ】 And yet, [to me,] what is this quintessence of dn[u]st?

【戸沢】 去りながら今の此身には此人間てふ土の精も果して何、

【坪内】 その人間が、予に取つては、只の塵埃ぢや。

【田漢 1】 但是在我看来，這是一些甚麼灰塵的神髓？

【田漢 2】 但是在我看来，這是一些甚麼灰塵的神髓？

田漢が示す英語の 1 文に 2 ヶ所も誤植がある。どうしてそうなったのか。印刷段階での事故か、田漢の書き間違いか、別の理由があるのかは不明。

そもそも“*And yet, [to me]*”の箇所に *to me* がなければ、それに相当する田漢漢訳の「在我看来」が宙に浮いてしまう。『田漢全集』第19巻(172頁)では注釈もつけず本来の正しい語句に訂正している。適切な処理だとは思わない。

該文の前では人間礼讃だった。最後の 1 行においてその人間そのものを突き放す。塵からできた人間の真髓、精華、本質だというのだから塵に回帰してしまう。塵としての人間が何だということかという反語である。ロルフにある「？」を田漢も使用し坪内にはならなかった。

雑誌初出時に第 2 幕第 2 場の漢訳を提出している。これは田漢がすでに全体の漢訳を終了していたことを示す。『田漢在日本』(441頁)が漢訳完成を1921年4月16日とするのは、雑誌初出「訳叙」末尾にそう記録しているからだろう。

莎劇『ハムレット』の第 1 幕は 5 場で構成されている。そのうちの 3 場を田漢は雑誌初出に掲載した。本稿では雑誌掲載の第 1 場のみを検討する。ロルフが底本であること確認するために莎劇原文と日訳 2 種類、田漢漢訳を比較対照する。

同時に田漢漢訳の質と傾向を探る。

## 2 第1場

ノルウェイに敵対するデンマークのエルシノーア城である。塔上見張り台が舞台だ。歩哨に立つ衛兵4名（内ひとり途中退場）と先王の亡霊が主な登場人物である。



第1幕 雰囲気のある銅版画 ロルフから

ト書きから見ていく。

【ロルフ】 *Elsinore. A Platform before the Castle.*  
FRANCISCO at his post. *Enter to him BERNARDO.*  
【戸沢】 エルシノーア 宮城前の見張場

フランシスコ（兵士）立番して居る、ベルナルド（士官）交替に入来る（時は真夜中頃）

【坪内】エルシノーア。宮城前の高台。深夜。

兵卒フランシスコ立番してゐる。こゝへ組頭バアナードー入来る。

【田漢 1】兀爾西樂児宮城前面の高台。

仏蘭西斯科方守着衛。伯納爾多登場向他那兒来。

【田漢 2】兀爾西樂児。宮城前面の高台。

仏蘭西斯科在那里守着衛。伯納爾多登場向他走来。

莎劇原文と日訳 2 種類は異なる。戸沢はフランシスコ（兵士）とベルナルド（士官）のように階級をつける。また坪内も兵卒フランシスコと組頭バアナードーにする。莎劇原文にはそのような説明的単語は書かれていない。なぜ日訳のようになるか。簡単な理由だ。登場人物表に戸沢は兵士、武官と、坪内は兵卒、武官（組頭）とつけているからだ。日訳に際して説明的に付加した。それらは莎劇原文に **a soldier** また **officer** とあるのをそのまま取り入れた。田漢も単行本では人物表を漢訳して、一兵士、軍官としている（雑誌初出では人物表は未掲載）。だが莎劇の原文ト書きに使われていないのだから漢訳しなかつただけ。ここを見るだけで田漢漢訳は坪内日訳の重訳ではない。重訳説は根拠のない主張だということがわかる。

もうひとつある。戸沢と坪内は時間を「真夜中頃」「深夜」とする。だがグローブ、ロルフ、ダウデンともに時間の記述はない。原文にはないト書きだから田漢も漢訳していない。

田漢は初出で「方」としたのを単行本では「在那里」と書き換えた。ト書きまでもより口語化させた。

交替できることを喜んだフランシスコの台詞の一部に次のようにある。

【ロルフ】 *'t is bitter cold, And I am sick at heart.*

【戸沢】 酷い寒さで、心から弱り果てましたところ

【坪内】 厳う寒うござる、心が切なうてなりませぬ。

【田漢 1】此地寒冷極了，心都痛起来了。

【田漢 2】此地怪冷的，我站得討厭起来了。

**sick at heart** とは気が滅入る、悲観する、悩むという意味だ。「心から」「心が」とわざわざ日訳するまでもない。田漢は日訳に引かれたものか「心が痛くなってきた」と最初は漢訳した。漢語で非常に悲しいという意味だ。ここも莎劇原文（ロルフ）に忠実であるといえる。後に手を入れて「いやになってきた」と変更したことがわかる。

バーナードーがそれまでの様子をたずねる。

【ロルフ】 **Have you had quiet guard ?**

【戸沢】 別條もなかりしか

【坪内】 何も別條はおじやらなんだか？

【田漢 1】 你守衛的時候還安靜嗎？

【田漢 2】 你守衛的時候還安靜嗎？

坪内の「おじやらなんだか」はまことに芝居の台詞としてあてはまる。見張りに立っているのはわかっている。だから田漢のようにわざわざ「見張っていたとき [守衛的時候]」と漢訳する必要はない。しかし、田漢は原文の **guard** をどうしても翻訳したかったようだ。ここでも田漢は莎劇原文にこだわり坪内から離れる。

バーナードーの連れが登場する。そのト書きを示す。

【ロルフ】 *Enter HORATIO and MARCELLUS.*

【戸沢】 とホレーシオ（ハムレツ／トの信友：割り注）マーセラス（士／官）登場

【坪内】 若き学者ホレーシオと組頭マーセラス入来る。

【田漢 1】 何勒淑与馬歲勒斯登場。

【田漢 2】 何勒淑与馬歲勒斯。登場。



前のト書きと同じ。ここでも戸沢と坪内はふたりともに名前の前後に役柄を記入して説明する。田漢がそうしないのはここも前と同じく莎劇原文に書かれていないからだ。適切な判断だと考える。

ホレイショーとマーセラスが合い言葉をいう。その台詞をホレイショー／マーセラスの順に示す。

【ロルフ】 **Friends to this ground. / And liegemen to the Dane.**

【戸沢】 御国を愛する／大君の臣民共

【坪内】 此国の良友。／まつた王家の忠僕。

【田漢 1】 我們是本国的良友。／丹麦王的忠僕。

【田漢 2】 我們是本国的良友。／丹麦王的忠僕。

田漢の「良友」「忠僕」は坪内を取り入れた。しかし坪内にはない「丹麦王 [デンマーク王]」は原文の **the Dane** を忠実に漢訳した結果だ。

先に交替していたバーナードがふたりを出迎える。ホレイショーはどこだと聞けばホレイショー自身が答える。

【ロルフ】 **A piece of him.**

【戸沢】 ざつと其様な者でムる

【坪内】 まづは其様なもので。

【田漢 1】 有一点兎像他。

【田漢 2】 有一点兎像他。

どこにいるのか、という質問が前にある。普通は「ここにいるぞ」と答えるだろう。それが **A piece of him.** というのだからわかりにくい。a piece of は辞書的にいえば「……のようなもの」だから戸沢と坪内のように翻訳するのは間違っていない。しかしそれでは前後の文脈からして理解しにくい。piece は断片、部分という意味だ。ホレイショーが「自分は彼の一部分」と発言する。野島秀勝

はそれを「彼の片割れなら、ここに」（12頁）と訳し「ホレイショーの手を意味しているのは確実」と注釈している。納得する。

田漢は独自に判断したのか、日訳のふたつが一致しているのでそれを採用したのかは判別できない。だがわかりにくいのは一緒だ。

ここは従来から議論のあるところだという。梁実秋は田漢とほぼ同じ「有点兒像他」とする。注をつけて「是他的一部份」と訳すべきで普通の冗談だという解釈だ。朱生豪は「有這麼一個他」と訳す。参考までに示した。

バーナードーが出迎えの挨拶をする。普通の台詞だ。

【ロルフ】 Welcome, Horatio; welcome, good Marcellus.

【戸沢】 ようこそ御下出されたホレーシオ殿、マーセラス殿ようこそ

【坪内】 ようこそホレーシオどの。ようこそマーセラスどの。

【田漢1】 歡迎得很，何勒淑；歡迎得很；馬歲拉斯好友。

【田漢2】 歡迎得很，何勒淑。歡迎得很，好馬歲拉斯。

good Marcellus の good は訳さないものらしい。だが田漢はそこにこだわった。「好友」「好」とわざわざ漢訳せずにはいられなかった。日本語訳は無視したことになる。この部分は田漢の使用する符号が変化してロルフと異なっている。理由は不明。のちの単行本でも符号の不一致は生じている。

莎劇原本に異同があることを次に指摘する。グローブ、ロルフ、ダウデンともに一致する箇所だ。だから日訳も田漢漢訳も同じ。問題はなさそうに見える箇所に問題がある。あの物、つまり亡霊は出現したかという台詞は誰が言ったのか。

【ロルフ】 *Marcellus. What, has this thing appear'd again to-night?*

【戸沢】 マーセ 何と今夜も又彼のものは現はれましたか

【坪内】 マー え、彼の物は今宵もまた出ましたかな？

【田漢1】 馬 甚麼哪，那個東西今晚又出現了沒有？

【田漢2】 馬 甚麼哪，那個東西今晚又出現了沒有？

「マーセ」「マー」「馬」はすべてマーセラスを示す。田漢漢訳は坪内に似ている。

何が問題かと言えば、莎劇原文ですでに発言者が異なっていることだ。第1クォートとフォリオはマーセラスの台詞だ。しかし第2クォートはホレイシヨールにしている。互換可能らしい。

グローブ、ロルフ、ダウデンともにマーセラスだから日訳も田漢漢訳もそうする。野島訳は第2クォートのホレイシヨールを採用する。

ちなみに登場人物評に掲げられる先王の亡霊 **Ghost** は、戸沢が「霊」、坪内が「亡霊」、田漢は「陰魂」（梁実秋「鬼」、朱生豪「鬼魂」）としている。

先王の亡霊について「**this thing** あの物」と書いている。別の箇所の表現が微妙に異なっている。まとめて示す。

【ロルフ】 **this dreaded sight** / **this apparition** / **it**

【戸沢】 彼の恐ろしの幻 / 彼の妖怪 / 其妖怪

【坪内】 怪異 / 怪しい物 / ×（訳語なし）

【田漢1】 那個怪象 / 那個怪物 / 他

【田漢2】 那個怪像 / 那個怪物 / 他

田漢はロルフの **this** を「那個」に、**it** を「他」に漢訳する。原文を忠実に翻訳するようにつとめていることがわかる。戸沢が「彼」「其」としているのに似る。と同時に坪内の「怪しい物」を取り入れている。この部分ではロルフ、戸沢、坪内は田漢の中ではほぼ等価値である。

バーナーダーがホレイシヨールたちに昨夜見た亡霊の状況を説明しているところに先王が出現する。そのト書きの順序が坪内だけほかと違う。ト書きの直前から引用する。

【ロルフ】 **The bell then beating one, —**

*Enter Ghost.*

【戸沢】 折しも鳴るは一時の鐘——

と先王の亡霊現出る

【坪内】折しも鳴渡る一時の鐘……

マー しつ、だまらしめ。あれ、あそこへ現れました！

先の王ハムレットの亡霊現れる。

【田漢 1】自鳴鐘剛打一点馬歳拉斯和我自己，……！

陰魂登場

【田漢 2】自鳴鐘剛打一点，馬歳拉斯和我，……

陰魂登場

ト書きの位置が違うのは坪内の底本がほかと異なるのが原因だろう。田漢は雑誌初出に「！」を使用しているが、単行本では削除した。ロルフにはもとから感嘆符は使われていない。ト書きの位置について再びいえば田漢漢訳と坪内とは違っている。こういう小さい箇所が大きな意味を持つ。田漢漢訳は坪内から離れるのである。

さきほど亡霊をロルフが示して *it* を使用し田漢がそれを「他」に漢訳すると指摘した。重複するようだが同じような箇所をつぎにあげる。バーナードーのホレイショーに向けた台詞だ。

【ロルフ】 *Looks it not like the king? mark it, Horatio.*

【戸沢】何と先王に似申した姿であらうが、よう御覧あれホレーシオ殿

【坪内】ホレーシオどの、先君のお姿に其儘でござらうかの？

【田漢 1】你看他不像先王陛下嗎？注意他，何勒淑。

【田漢 2】你看他不像先王陛下嗎？意注他，何勒淑。

2箇所に出てくる *it* を日訳は両者とも翻訳しない。日本語はそれで十分成立する。だが田漢は *it* を「他」に直して省略しない。こういうところに莎劇原文を忠実に漢訳しようとする田漢の翻訳姿勢を見ることができる。初出の「注意」は単行本では手直ししている。

ホレイショーに与えられたつぎの台詞にはむつかしい単語が含まれる（日本語

のくり返し符号は文字に直す)。

【ロルフ】 What art thou that usurp'st this time of night,  
Together with that fair and warlike form  
In which the majesty of buried Denmark  
Did sometimes march? by heaven I charge thee, speak!

【戸沢】 そもそも汝は何者なれば、静けき夜半を我物顔、故陛下がそのかみの、気高く勇ましかりし御姿を、妄りに装ひ擬らうや、其訳語れ、イザ聞かう

【坪内】 汝本来何者なれば、故のデンマーク大君の武しく荘厳しい御軍装を借り奉つて、此様な深夜には横行するぞ？ 敢て汝に命ずるわい、語れ。

【田漢 1】 你是甚麼鬼怪敢在晚上這個時候任意横行，并且穿着丹麦的先王陛下曾經御過的華美威嚴的軍服？我敢命令你，說！

【田漢 2】 你是甚麼鬼怪敢在晚上這個時候任意横行，并且穿着丹麦的先王陛下曾經御過的華美威嚴的軍服？我敢命令你，說！

this time of night は「夜のこの時刻」だ。先に鐘が1度鳴ったと台詞があった。戸沢は「夜半」に、坪内は「此様な深夜」とした。それでいい。田漢は原文のままに「在晚上這個時候」だ。

理解しにくいのは原文の *usurp'st* である。だいいちその綴りそのもので辞書には出てこない。*usurp* ならある。『商務書館華英字典』（癸卯1903年四月十四日／1915.6.20十三版）には *Usurp* 「霸佔，強霸，侵奪，僭，篡奪，攘」と説明する。ヘボン（ヘプバーン）『和英林集成』（影印本）の英和部分には「*Muri ni kurai wo toru, kurai wo ubaitoru, sandatsu suru.*」と記述して英華字典と同じだ。「時刻を篡奪する」というのは理解するのがむづかしい。

そこで戸沢は「静けき夜半を我物顔」とした。我が物顔にやり放題と理解する。一方の坪内は「此様な深夜には横行するぞ？」と訳し原文後ろの *Did sometimes march?* と一体化させてしまった。野島日訳の「草木も眠るこの深夜を侵し」というのがわかりやすい。

戸沢の「我物顔」を田漢漢訳は「任意」に、坪内の「横行」をそのまま利用した。

戸沢「御姿」、坪内「御軍装」の「御」は敬意を表わしているにすぎない。ところが田漢はなぜか惑わされたらしく「曾經御過的」として動詞扱いだ。動詞としては「御車」などが確かにある。だが上の部分では「穿」と同じ意味で使用したように見える。詳細不明。梁実秋は「並且妄穿丹麦先王曾經穿過的威武堂皇的軍装」とする。これは理解できる。

日訳も漢訳も by heaven「天に代わって」を無視している。そうする理由はわからない

符号の使い方を見る。亡霊が出ていく。ホレイショーが亡霊にむかって叫ぶ。

【ロルフ】 Stay! speak, speak! I charge thee, speak!

【戸沢】 停れ、其訳語れ、イザイザ、其訳語れ

【坪内】 待て！ 語れ、語れ！ 敢て汝に命ずるわい、語れ

【田漢 1】 停着，你說，你說，我命令你，說！

【田漢 2】 停着！ 你說，你說！ 我命令你，說！

田漢は雑誌初出でいくつかの箇所に感嘆符号を打ち忘れた。単行本ではそれを補いロルフと一致させた。坪内には最後部分の感嘆符がない。田漢は細かく修正している。

マーセラスは自国の軍備増強について疑問を提起する。次はその一部分だ。

【ロルフ】 And why such daily cast of brazen cannon,  
And foreign mart for implements of war;  
Why such impress of shipwrights, whose sore task  
Does not divide the Sunday from the week;

【戸沢】 いかなれば、かく日々に巨砲を鑄、又は外国より戦道具を購入るゝぞ、  
いかなれば船大工は、平日休日の差別もなく、痛ましき迄追使はるゝぞ、

【坪内】 毎日の大砲鑄造、まつた外国より夥しい武器の買入、剩さへ船大工を駆

集めて休日も与れぬ苛酷い賦役。

【田漢 1】為甚麼每日要那樣鑄造銅砲，而且又從外国買入那些軍械；為甚麼每星期禮拜日都不讓休息強迫那些造船的工匠作工；

【田漢 2】為甚麼每日要那樣鑄造銅砲，而且又從外国買軍械進來；為甚麼每週的禮拜日都不讓休息強迫那些造船的工匠作工；

ロルフと田漢漢訳の符号「；」が一致している。戸沢、坪内とは違う。

私が注目するのは、原文の **brazen cannon**（真鍮の大砲）と **the Sunday from the week**（日曜と週日）の部分だ。

戸沢は「巨砲」、坪内は「大砲」で材質まで訳していない。**brazen** は英華字典では「銅做的」とある。田漢はそこから「銅砲」とした。また原文の **Sunday** を日訳では「休日」とする。田漢は、「禮拜日」として原文を直訳した。田漢は莎劇原文を忠実に翻訳しようとしているのが明らかだ。漢訳が日訳からの重訳だと主張する研究者は、こういう細かい部分を見ていないのではなからうか。

坪内の「まつた外国より夥しい武器の買入」を利用して田漢は初出で「又從外国買入那些軍械」と「買入」を共有する。だが単行本では「又從外国買軍械進來」と書き直してより自然な現代漢語にしている。

田漢はロルフにもとづき符号を含めて忠実に漢訳しようとした。これが基本だ。ところが当てはまらない箇所もでてくる。そこを指摘しておきたい。

ホレイショーが先王ハムレットについて説明する。

【ロルフ】 **our valiant Hamlet – For so this side of our known world esteem'd him –**

【戸沢】 武勇絶倫と遠近に、其名も高き故陛下なれば、

【坪内】 名に負ふ勇猛の先君とて、

【田漢 1】 我們武烈的哈孟雷特老王，威名蓋世，

【田漢 2】 我們武烈的哈孟雷特老王，威名蓋世，

田漢は原文の「–」をどうしたわけか削除した。

もうひとつ奇妙な部分がある。

先王ハムレットがノルウェイ王と決闘をするくだりでひとつの決まりを説明する。賭けられた命と領土は勝者が取る。決闘するふたりが賭けるのは同じものだ。命には命を、領土には領土だ。当然だろう。ふたつに差があるならば賭けは成立しない。

【ロルフ】 Against the which a moiety competent  
Was gaged by our king;

【戸沢】 又我王にも、之に相応しき賭をなされ、

【坪内】 もつとも之に対して相当の所領を賭けられたれば、

【田漢 1】 那麼我們的先王當然也會把他所有的疆土之一半，打下賭來；

【田漢 2】 那麼我們的先王當然也會把他所有的疆土之一半，打下賭來；

戸沢、坪内ともに、先王ハムレットが賭けたのは同じものであると翻訳している。ところが田漢が漢訳して、先王が賭けたのは領土の半分（他所有的疆土之一半）だとする。日訳の「相応しき」「相当」とは違う。

competent は形容詞だが equivalent という注釈もある。「十分なもの」「相当なもの」と理解する。問題は moiety だ。英華字典は「一半」「半分」「一股」と説明する。田漢はこの辞書の説明（これが一般的ではあるが）を採用した。この部分について田漢は戸沢も坪内も無視した。

戸沢が底本としたダウデンはそこに a portion, not necessarily a half. という注をつけている。「分け前」「取り分」であって半分とは限らない。戸沢、坪内の日本語訳でいい。

考えるに田漢はあくまでも莎劇原文に忠実な漢訳をめざした。日訳は参照にとどめた。たよりのひとつが英華字典だ。それにもとづき自分独自の翻訳をしようとした。そういう田漢の姿勢がここでは裏目に出たと思われる。賭が成立するには賭ける物がお互いに同じでなければならないという一般常識を忘れたこともあるだろう。

ここは田漢の誤解である。ただしそれを嘲笑してはならない。誤りだと批判す



る必要もない。ここに見る彼の誤訳はとりもなおさず田漢が莎劇原文にもとづいて自力で漢訳しようと試行錯誤しながら悪戦苦闘していた事実を私たちに教えてくれる。田漢漢訳が日訳を単に重訳したのであれば起こり得なかった誤りだ。田漢が独自の漢訳をしたいと望んだからこそ生じた。田漢以前には莎劇から直接漢訳した『ハムレット』はなかったのだ。独力でそれを漢訳しようとした熱意があったことを知れば小さな誤訳は文字通りの瑕瑾であるにすぎない。

田漢は莎劇『ハムレット』を漢訳するにあたり大きな努力を払った。底本とする原作英文を選択し、日訳を集め、日本語の関係文献を読んでいた。

それを瀬戸博士は「当時の田漢に『ハムレット』を訳せる英語力があつたか疑問で、日本語からの重訳の可能性が強い」と説明して切って捨てた。田漢に対する不当に低い評価である。田漢が莎劇『ハムレット』を漢訳するという大仕事をひとりで切り開く努力とやりとげた成果を瀬戸博士は無視したのである。

林訳の時もそうだったが先行する翻訳についての敬意と配慮が不足しているといわざるをえない。それは中国学界の従来からの姿勢と一致している。つまり瀬戸博士は中国学界に事大して一貫しているという意味だ。林紓と田漢について独自の観点もなければ自分で新しい発見をするわけでもない。

どのみち田漢漢訳が日本語からの重訳であると主張するのは間違っている。

さらに1例をあげたい。

ホレイシヨアの説明が続く。決闘に敗れたのは先のノルウェイ王である。その息子（同名の）フォーティンブラスが失った領土を回復しようと画策している。

【ロルフ】 which is no other —

As it doth well appear unto our state —

But to recover of us, by strong hand

And terms compulsative, those foresaid lands

So by his father lost:

【戸沢】我が要路の人には明白、武力を用ひ強迫し、亡父が失ひし件の領地を、取還さむの下心

【坪内】一定暴威を以て父が旧領を取戻さん結構と廟議一決、

【田漢 1】 這不在講——丹麥國的人誰都知道——他是想用強硬的手段和強迫的條件把剛纔說過的父親所失掉的地方從我們手裏恢復轉去：

【田漢 2】 這不在講——丹麥國的人誰都知道——他是想用強硬的手段和強迫的條件把剛纔說過的父親所失掉的地方從我們手裏恢復轉去：

ロルフと田漢漢訳が符号で一致していることはすでに指摘している。

その符号で困んだ *As it doth well appear unto our state* である。戸沢は「我が要路の人には明白」とした。坪内はより簡潔に「廟議一決」としたから少し理解しにくい。田漢は「デンマーク国の人であれば誰でも知っている」とロルフを直訳する。

*compulsative* は莎劇版本によって *compulsatory* などとあって表記が違う。一般の辞書には収録されない。英華字書でも同じことだ。近い単語に *compulsion* 「勉強、強逼、用権勢」、また *compulsory* 「強迫的、勒迫的」がある。田漢はそれらを手がかりに戸沢の「強迫し」を参照したようだ。「強迫的」と漢訳して正しい。つまりここでは坪内ではなく戸沢を選択した。しかしあくまでも基本はロルフ原文に基づいていることはいうまでもない。

先王の亡霊が再び登場した。ホレイショーが亡霊に話しかける台詞の一部だ。たびたび出現する理由のひとつを質問する。

【ロルフ】 O, speak!

Or if thou hast uphoarded in thy life

Extorted treasure in the womb of earth,

For which, they say, you spirits oft walk in death,

[The cock crows.

【戸沢】 おゝ云ひて見よ、さては生前、不義の宝を地中に埋め置けば、亡魂此世に迷ふと聞く、

【坪内】 おゝ、語れ！……或は噂の如く、生前地中に埋めおいたる不浄財に執念残つて、能い浮ばずに彷徨ふか？

【田漢 1】 啊，你說！或者像人家傳說的，你生前把所得的不義之財埋在地下，

死後你的靈魂還捨不得他所以常常出来彷徨。

鷄鳴

【田漢2】啊，你說！或者像人家傳說的，你生前把所得的不義之財埋在地下，死後你的靈魂還捨不得他所以常常出来彷徨，——

〔鷄鳴

田漢漢訳の「鷄鳴」はロルフの *The cock crows.* とト書きの配置場所がそのままだ。ところが戸沢の「と雞の鳴声する」および坪内の「鷄鳴く。」が上に見えない。それは彼らの底本がロルフではないからにすぎない。

*Extorted treasure* とは、不正に得た財宝、強奪した財宝、という意味である。戸沢は「不義の宝」とし、坪内は「不浄財」と訳した。田漢漢訳の「不義之財」は戸沢の「不義の」、坪内の「財」が一致する。ちなみに梁実秋は「勒索暴斂的財宝」、朱生豪は「搜括得来的財宝」と漢訳している。田漢に比較すると説明口調であるといえる。

坪内の「彷徨ふ」と田漢の「彷徨」が同じ。

田漢はここはロルフによりながら坪内と戸沢の語句の一部を折衷採用したように見える。漢字が同じなのだから。

亡霊はうろついている。バーナードとホレイショーはそれぞれに *'T is here!* *'T is here!* と同じ台詞を口にする。

戸沢は「ソレ其處に」「コレ其處に」と変化をつけた。坪内は「こゝちや！」「こゝちや！」と重複させる。田漢は雑誌初出が「在此地！」「在此地！」で、単行本では「在這裡！」「在這裡！」に書き換えた。坪内によったというわけではなくロルフそのままである。ただし田漢は単行本の漢訳で最後に「——」をつけ加えた。ロルフから離れる。理由不明。

鷄が鳴いて亡霊は消失した。ホレイショーは鷄の鳴き声で亡霊が消えた理由を説明する。雄鳥の鳴き声で海、火、地中、空中にさまよい迷う霊たちは自分たちの居場所にもどっていく。

【ロルフ】 *The extravagant and erring spirit hies*

To his confine:

【戸沢】 彷徨ひありく亡者共、急ぎ己が火宅に走る

【坪内】 彷徨ふ精霊も懼れ隠る

【田漢 1】 一切不安分的魔鬼都要捨命的奔回巢穴：

【田漢 2】 一切不安分的魔鬼都要捨命的奔回巢穴：

confine が問題だ。居場所としたが、もともと閉じこめられていた場所という意味である。田漢は「巢穴」とした。参考までに梁実秋は「原居」、朱生豪は田漢と同じく「巢穴」とする。また野島は「それぞれに定められたおのが領分」(22頁)と訳している。

坪内は訳語を当てなかった。田漢の漢訳は戸沢の「火宅」とも違う。「巢穴」を使用したことこそ田漢の工夫だった。ここにロルフにより原文を忠実に漢訳しながら独自性を主張しようとする田漢の誠実な翻訳姿勢を見ることができる。

小さな箇所を引用する。ホレイショーは今夜目撃したことをハムレットに報告することにした。そのハムレットをどう呼ぶか。

【ロルフ】 young Hamlet

【戸沢】 ハムレット君

【坪内】 ハムレット様

【田漢 1】 少哈孟雷特

【田漢 2】 少哈孟雷特

young だから朱生豪は「年輕的哈姆雷特」とした。梁実秋は無視。田漢は若いという意味の「少」を1字当てて簡潔な漢訳としている。ここも独自なところだ。

最後にロルフから少し離れる田漢漢訳を示す。同じくホレイショーの台詞。王子に報告するのが妥当ではないかとマーセラスに問う場面だ。

【ロルフ】 Do you consent we shall acquaint him with it,

As needful in our loves, fitting our duty?

【戸沢】御同意ならばさやう致さう 君を思ふ誠よりも、臣たる務めの上よりも、至当の事とは思されませぬか

【坪内】又此事言上は、さるは王子を思ふ吾等の真情まつた忠勤でもございませぬ。

【田漢 1】我以為依我們情誼上和責任上都應該去報告他，你們贊成不贊成呢？

【田漢 2】我以為我們情誼上和責任上都應該去報告他，你們贊成不贊成呢？

莎劇原文では、ハムレットに知らせるのを賛成してくれるか、で1文をまとめている。戸沢のように次に「君を思ふ誠」「臣たる務め」がくる。これが原文だから重訳するならば戸沢のままよい。だが田漢はそうしなかった。2文の前後を入れ替えて「賛成してくれるか？」を後ろに配置した。ここも田漢独自の工夫だ。

これまで具体的に見れば十分ではなかろうか。

私は田漢が底本とした莎劇原文を特定した。日本語訳2種類との関係も明らかにした。研究者の誰も提示することがなかったことである。そう念を押すのは理解しない人があるかもしれないからだ。

## 12 結 論

田漢は『ハムレット』を漢訳するにあたり莎劇原文のロルフ（1890）を底本に採用した。英漢字典も使いながら彼独自の漢訳をめざして模索したのが事実だ。これは強調されていい。ロルフ本の傍らに戸沢日訳（1905）と坪内日訳（1909）を置いて参照しつつ翻訳作業を続けた。日訳本は参照したがどちらかの片方に全面的に依存したわけではない。基本は英文のロルフだ。日訳は時に採用し時に無視しての翻訳だった。あくまでも田漢が主体となって制御した。漢訳単行本（1922）につけた「訳叙」には戸沢日訳所収の解説と坪内逍遙の文章（1911）から部分的に引用要約したものを収録する。英文原本、日訳本に掲載されたいくつかの挿絵を集めて単行本に添えた。

「当時の田漢に『ハムレット』を訳せる英語力があつたか疑問で、日本語からの重訳の可能性が強い」。「中国現代文学演劇研究」の専門家瀬戸博士はそう書いた。瀬戸博士は田漢の英語能力を不当に低く評価し田漢を侮辱している。資料に基づかず証拠も提出しない瀬戸博士の記述は、軽率であると同時に無責任である。いうまでもなく正しくない。

以上が田漢漢訳『ハムレット』の底本に関する私の結論である。

#### 【参考文献】

- 『田漢全集』第19巻訳著 石家莊・花山文藝出版社2000.12  
シェイクスピア作、野島秀勝訳『ハムレット』岩波文庫2002.1.16／2009.5.25第七刷  
小谷一郎「田漢と日本（一）：「近代」との出会い」『日本アジア研究：埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要』創刊号 2004.3.31 電字版  
夏 嵐「田漢的戲劇翻譯——以日文劇作翻譯為中心」大阪大学『言語文化研究』42 2016.3.31 電字版

#### 【注】

- 1) 単行本「訳叙」で田漢は「四場」を発表したと書く。「三場」の誤記。
- 2) 上海戲劇学院、柏彬、徐景東等編選『田漢專集』江蘇人民出版社1984.3 中国当代文学研究資料叢書
- 3) 小谷一郎、劉平編『田漢在日本』北京・人民文学出版社1997.12
- 4) 孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学出版社1994.8
- 5) 戈宝権「莎士比亚作品在中国」中国莎士比亚研究会編『莎士比亚研究』創刊号、杭州・浙江人民出版社1983.3所収。337頁。また『中外文学因縁——戈宝権比較文学論文集』北京出版社1992.7。464頁。次のとおり。「莎士比亚的戲劇作品、直到1919年“五四”運動以後、方被用白話文和完整的劇本形式介紹過來。首先是田漢在1921年訳了《哈孟雷特》<sup>ハムレット</sup>、发表在当年出版的《少年中国》雜誌上、1922年作為《莎翁傑作集》第一種由中華書局出版」
- 6) 李長林、楊俊明「莎士比亚作品在中国的傳播——《中国莎学簡史》再補遺」『中国

文学研究』1999年第2期 1999.4.30

- 7) 李偉昉『梁実秋莎評研究』北京・商務印書館2011.9
  - 8) 張向華編『田漢年譜』北京・中国戲劇出版社1992.12
  - 9) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29
  - 10) (日) 瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亚在中国：中国人的莎士比亚接受史』広州・広東人民出版社2017.1
  - 11) 中国人の研究論文をいくつか示す。網羅しているわけではない。
    - 周兆祥『漢訳《哈姆雷特》研究』香港・中文大学出版社1981 香港中文大学中国文化研究所比較文学与翻訳中心専刊1  
6頁「最初正式把莎劇全齣訳成中文劇本形式的是田漢，他用白話文翻《哈孟雷特<sup>ハムレット</sup>》，發表在1921年的《少年中国》雜誌上，1922年由上海中華書局出版，題為「莎翁傑作集」  
355頁「田漢1922年出版《哈孟雷特》，成為把莎劇全齣訳成白話劇的第一人」
    - 戈宝権「莎士比亚作品在中国」中国莎士比亚研究会編『莎士比亚研究』創刊号 1983.3  
337頁「莎士比亚的戲劇作品，直到1919年“五四”運動以後，方被用白話文和完整的劇本形式介紹過來。首先是田漢在1921年訳了《哈孟雷特<sup>ハムレット</sup>》，發表在当年出版的《少年中国》雜誌上，1922年作為《莎翁傑作集》第一種由中華書局出版」
    - 孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学出版社1994.8  
12-13頁「1921年他在《少年中国》2卷12期上發表了《哈孟雷特<sup>ハムレット</sup>》，第二年冬天由中華書局作為《莎翁傑作集》第1種出版，這是中国文壇上第一次用劇本形式以白話訳訳的莎氏的压卷之作」。100頁にもほぼ同文がある。459頁にもあることは本稿で前述した。
    - 李偉民『中国莎士比亚批評史』北京・中国戲劇出版社2006.6  
15頁「1921年和1924年，田漢用現代漢語訳了全本的《哈孟雷特<sup>ハムレット</sup>》和《羅蜜欧与朱麗葉》」
- 注：全本『哈孟雷特』の刊行は1922年。1921年は一部分のみを發表。李偉民の間違い。  
英語論文の例
- 彭鏡禧 CHING-HSI PERNG “Chinese *Hamlets*: A Centenary Riview”, Shakespeare: Authenticity and Adaptation, De Montfort University, Leicester, UK, 2000.9.7-9 電字版  
In 1921, Tien Han published *Ha-meng-lei-te*, his translation of *Hamlet* in spoken Chinese (Chou 6, Meng 12). It marks China's first attempt at rendering a Shakespearean play in full. p.7

1921年は雑誌に掲載したもの。題名に1922年単行本の『哈孟雷特』を重ねるのは正確ではない。

○孫艷娜『莎士比亚在中国 SHAKESPEARE IN CHINA』英文 開封・河南大学出版社2010.9 英語博士文庫

注に引用するのみ。注番号は省略。

In 1921 Tian Han (1898-1968), a playwright and translator, ambitiously attempted to translate ten plays of Shakespeare within three or four years—in fact, he did the first complete Chinese translation of Shakespeare, that of *Hamlet*, which was published by the China Publishing House in 1922, and afterwards of *Romeo and Juliet* in 1924. He was the first to translate a complete Shakespeare play in its original dramatic form into modern Chinese. p.20

- 12) 劉瑞「日本訳莎活動影響下の《哈孟雷特》翻訳——從田漢訳莎的日文転訳之爭談起」『東方翻訳』2016年第2期（総第40期）刊年不記
- 13) 李春江『訳不尽的莎士比亚：莎劇漢訳研究』天津社会科学院出版社2010.11
- 14) 劉瑞の記述は以下のとおり。「莎士比亚. 哈姆雷特（中英对照）[M]. 梁実秋, 訳. 北京：中国廣播電視出版社, 2001.」私が見ているのは次のとおり。梁実秋訳『四大悲劇（莎士比亚叢書・中英对照）』北京・中国廣播電視出版社、台湾・遠東圖書公司2002.1。「例言」によると底本は牛津本、W. J. Craig 編とある。調べると1914年刊行という。劉瑞が該書の刊年を2001とするのは奥付にある図書在版編目（CIP）データの表示2001.7によっている。実際の刊年と異なる理由は不明。梁実秋の漢訳は1936年商務印書館から刊行された。梁実秋訳『丹麦王子哈姆雷特之悲劇』上海・商務印書館1936.7／影印本。英文未収録。表紙に「莎士比亚的」とある。「中英对照」本は後のものと思う。また次もある。梁実秋訳『哈姆雷特（中英对照）』台湾・遠東圖書股份有限公司2017.1四版 莎士比亚叢書32。
- 15) 坪内逍遙（雄蔵）『シェークスピア研究栞』早稲田大学出版部1928.12.3。71頁／新修シェークスピア全集第40巻、中央公論社1935.5.15。92-93頁
- 16) 華亭雷瑠編輯『各国名人事略』硯耕山莊 光緒三十一(1905)年正月再版 実藤文庫
- 17) 王国維「莎士比伝」『教育世界』第159号1907.10初出未見／姚淦銘、王燕編『王国維文集』第3巻 北京・中国文史出版社1997.5
- 18) 東潤（朱世溱）「莎氏楽府談」1-4『太平洋』第1巻第5-9号 1917.7.15-1918.1
- 19) 別訳をひとつ。「世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢや。To be, or not to be: that is



- the question:」733頁。シェークスピア著、坪内逍遙訳『ザ・シェークスピア（愛蔵版）』第三書館2002.8.15
- 20) 梁実秋訳『丹麦王子ハムレット之悲劇』上海・商務印書館1936.7／影印本。英文未収録。表紙に「莎士比亞的」とある。漢訳して「活着，還是不活着，——這是問題；」54頁
- 21) 坪内雄蔵「近松対シェークスピア対イブセン」『劇と文学』富山房1911.10.23
- 22) Q1、Q2、F1。ウェブサイト [Hamlet webpage](#) を参照した。
- 23) 朱生豪訳、吳興華校「哈姆莱特」『莎士比亞全集』9 北京・人民文学出版社1978.4

## あ と が き

今まで公開した文章をいくつか集めた。分類するとおおよそ以下のとおり。

過去の清末小説研究に関する概括、雑誌『繡像小説』、商務版「説部叢書」、翻訳あるいは漢訳シェイクスピア関係などを緩やかにまとめる。

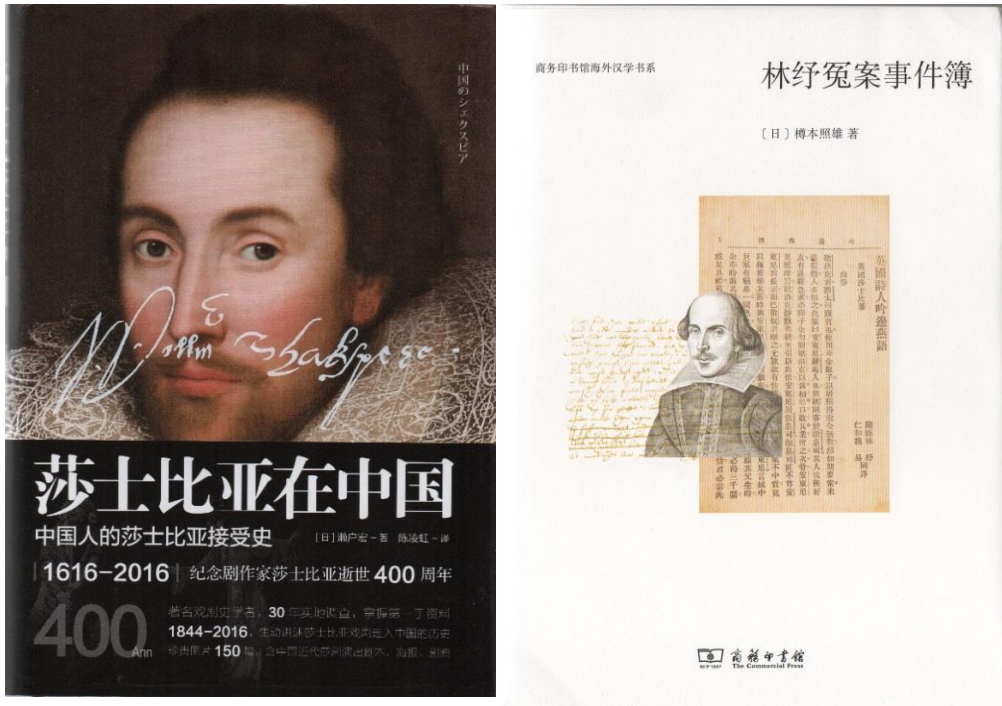
日本における清末小説研究を振り返ったのは1991年だ。加筆して2000年くらいまでの状況説明だと考えてほしい。それ以降については古二徳論文（英語）を紹介しておいた。私個人の研究について述べたところは以前の文章と重複する部分がある。ご了解ください。

重複といえば『繡像小説』、「説部叢書」、漢訳莎氏関係などについては同じ主張をくり返している。それは私の関心の持ち方が深く、同時に持続度が強いという意味だ。そうするだけの価値を有する研究課題だということもできる。

私は現在、文章の発表場所を主としてウェブサイトには置いている。清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp> にほとんど全部の論文、論文集、小説目録を収納する。公開中の季刊誌『清末小説から』を含めて誰でもがネットを利用して文献ファイルのダウンロードができる状態だ。実際に閲覧されている。

ただし読者からの具体的な反応はそれほど多くはない。清末民初小説の研究分野ではそれが常態であり普通のことなのだ。研究者が少ないから読者も限られてくる。注目を引かない。慣れている。

ところが本書に収録したある文章については違った。その中で言及した研究者のひとりから自筆による丁寧な、かつ長文のお手紙をいただいた。日本語で書いてある。ネット上の私の論文がたしかに読まれているという証拠だ。ありがたいことだと思った。たまにはそういうこともあるというささやかな喜びだ。



林纾訳シェイクスピアを含む書籍が漢訳刊行された（上図の左）。該部分について私はアマゾン（亜馬遜）中国の買家評論（カスタマーレビュー）に漢語の短文を投稿した。該文は現在も読むことができる。小さな反応があった。

2017年8月に北京の商務印書館で創立120周年を記念する国際学会が開催された。『澎湃新聞』の記者がそれに参加してアマゾン中国に該書評があることを知ったらしい。董牧杭が長い紹介文「日本知名学者為何到中国亞馬遜來謾罵同行？」（『澎湃新聞』ウェブサイト2017.8.16）を發表した。研究に国境があるという奇妙な思考が題名にあらわれている。学術研究とは関係のない文章だ。董の文章に釣られてアマゾン中国の該当欄に投稿する中国人が3名いた。私が真摯に力を込めて書いた漢語文章を冷やかすだけの傍觀者にすぎない。

ついでながら一言。アマゾン中国に投稿した漢語原稿には元になった日本語の文章がある。2017年3月からアマゾン日本に掲載されていた。読者書評は長い間私のその1件より増えることはなかった。ある時気づくとそれが消えている。理由は知らない。誰かがアマゾン日本に削除依頼をしたのだろう。2018年に同

文を再度投稿して掲載される。だがこれもすぐに消されてしまった。現在は消去されたままになっている。そういう状況である。

アマゾン日本に再度掲載された様子は画像データで保存していた。そのままを清末小説研究会ウェブサイト（2018.5.7付）に掲げている。文章そのものは念のため本書にも収録した。

デジタル情報は一度公開されると複製物が残る。公開を妨害しようと考えてもそれは失敗する。自分にとって不都合なものだからといって抹消隠蔽することは結局のところ不可能である。これがネット社会の現実だ。

林訳といえばもうひとつ漢訳本が出た。（日）樽本照雄著、李艶麗訳『林紓冤案事件簿』（商務印書館2018）という。日本で刊行された『林紓冤罪事件簿』（清末小説研究会2008）を底本とする。日本語の「冤罪」が漢語では「冤案」になった。ある中国人研究者は「商務印書館海外漢学書系」シリーズに収録されたのは最適だといってくれた。恐縮です。

正直なところ拙著の漢訳本が実際に刊行されたことに私自身が驚いた。出版される可能性はないと考えていたからだ。その理由を述べる。

林紓あるいは林訳にまつわる中国学界の動向が背景にある。1980年ころまでは林紓批判一辺倒であった。今は一部分に林紓再評価らしい動きがたしかに見える。林紓関係の論文を読んでいて微妙に変化しているように感じる。しかしその基本はやはり林紓批判で一貫しており動かない。

林紓は原作の戯曲を小説にかえて翻訳した、戯曲と小説の区別がつかないと主張する「区別がつかない論」が根をはっている。林紓を批判する根拠のひとつだ。以前は常套句のように使われた。だが本書に収録した「2014年の林紓評価」と「翻訳家としての林紓」を見てほしい。その有名な語句が中国人研究者の現在の論文には出てこない。その徹底していることがかえって問題の大きさを私たちに教えてくれる。ゆえにそれを「立入禁止区域」と表現した。実在していることはわかっているが誰も踏み込まない。まるでどこかから指令が出ているかのようだ。

表面にあらわれないにしても「区別がつかない論」を根底で信奉している限り根本的かつ全面的な林紓再評価はできない。いままでの中国学界はそうであったと私は理解する。

私は林紘個人とその訳業を自分なりに検討した。新しい資料を提出して林紘批判に利用される「区別がつかない論」は虚偽だと立証したとおりだ。結論として拙著は林紘を全面的に肯定する内容になった。

「冤罪事件」という書名からそれがわかるだろう。林紘にかぶせられたのは無実の罪である。根拠を提示したうえで明らかにした。中国学界における林紘批判、林訳批判を基本から覆す。従来は存在しなかった視点で書いている。

中国学界が判定しているものとは逆の見解を表明したのだ。私がいくら「林紘冤罪事件」だと指摘しても見る目、聞く耳を持たない。中国学界の主流とは意見を異にする拙著の漢訳本は刊行されないだろうとの予測につながる。

日本では拙著に言及した人はほとんどいなかった。考えれば当然のことだ。もし賛同の意を表すればその評者の師匠筋、指導教授、先輩同輩後輩研究者を否定することになる（ここは過去の研究者全員が間違っていたという婉曲表現）。かといって事実に基づいて林訳批判を否定している拙著を非難することもできない。非難すれば評者自身の無知をさらすことになるからだ。残された道はひとつしかない。拙著の存在を無視する。発言しない。これが研究者としての自分を安全な場所に避難させる最良の方法である。

例外はどこにもある。瀬戸博士だ。新出資料など眼中にない。わざわざ出てきて従来からの批判路線を堅持しつつ以前を上回って林紘を非難した。沈黙するという賢明な選択肢があったにもかかわらずだ。瀬戸博士にとって林紘批判は確信であることがわかる。

瀬戸博士が行なっている林紘批判について私が何度も取り上げる理由を述べる。瀬戸博士の林紘批判はすでに研究の範囲を超えているからだ。林紘に対して人身攻撃を実行した。根拠のない誹謗、すなわち中傷なのだ。林紘本人の人権を蹂躪しているといわざるをえない。研究界から足を踏み外した。私はそれを指して「林紘を詐欺師に認定し林紘の名誉を毀損する瀬戸博士」と表現している。

瀬戸博士の文章からは清朝末期から中華民国初期を生きた中国の知識人に対する敬意というものを感ずることができない。以前、ある研究発表会で多くの参加者を前にして瀬戸博士にむかってご忠告もうしあげた。少し大きめの声を出したからその場の空気は凍りついた。瀬戸博士にはまったくご理解いただけなかった

ようだ。

瀬戸博士は私が書く漢訳莎劇関係の文章において出番が多い。本書未収ではあるが『清末小説から』に連載した「自爆する日中の研究者たち」にも出演してもらっている。中国の著名で研究の権威である阿英とも同席し共演するのだ。怪挙である。

瀬戸博士は反対するために反対してその結果は自爆である。自爆の原因は明白だ。林紓を批判するという結論が先にある。1910年代からの文学革命派、すなわち現在の中国学界主流派による根拠のない見解を瀬戸博士は強く支持している。林紓を批判し続ける理由だ。日本にいる瀬戸博士が中国学界の公式見解をくり返すことにはいかなる意味と意義があるというのであろう。事大することがそれほど誇らしいことなのだろうか。疑問に思う。

『林紓冤案事件簿』にもどる。

2013年に出版社と契約書を交わして数年が経過していた。どこからか出版計画を知ったある中国人研究者が、刊行されないのであれば別の出版社を紹介すると提案してくれたことがある。それほど親切な人は珍しい。契約書はあるが「ただの紙切れにすぎない」と言い出しかねないのが中国の組織だ。出版については不確かで不安定な状態があった。

いうまでもなく中国の学界、出版界ともに管理されている。中国学界の影響を受けていることとは別に、日本では何をどのように研究しても基本的に自由だ。表現する媒体も多様にある。日本で『林紓冤罪事件簿』は出た。しかし状況が基本的に違う中国では林紓批判が続くかぎり拙著の漢訳出版はむつかしいだろう。普通にそう考える。

「毒草」という言葉が中華人民共和国のある時期に使われたことがある。批判の対象となった人物の作品について閲覧を禁止した。再版することもあらたに出版することもない。図書館所蔵の作品は図書カードを抜いて閲覧不可にした。所蔵されていても借り出すことはできない。作品を読まずに批判しろという基本方針である。林紓を手元に置かずに林紓批判が実行されたということだ。

ところが林紓についての風向きが変わってきた。林紓批判路線を維持実行していた出版界に小さな変化が起こったのは1980年代からだ。『林紓小説叢書』（商

務印書館1981)である。200種をこえる林訳小説の中から10種を選び出して復刻した。林訳のほとんどは商務印書館から刊行された歴史がある。1981年の復刻版が商務印書館から刊行されたのもそういう経緯があったからだろう。

1981年の『林訳小説叢書』刊行は研究解禁の合図だったことになるろう。作品集だけでも複数が出版された。『林紓選集』(四川人民出版社1985-88)さらに『林紓翻訳小説未刊九種』(福建人民出版社1994)が出た。1981年の『林訳小説叢書』を再度復刻したのが『林紓訳書経典』(上海世紀出版股份公司2013)である。

これは、と目を見張る出版広告を最近見かけた。『林紓訳文全集』全47冊(上海書店出版社2018)だ。購入して今私の手元にある。

1981年から林紓研究と林訳研究の専門書も多数が出版されている。さらにはこの数年間に林紓の名前を冠した国内学会(研究会)、国際学会が複数回開催された。批判大会でないことが重要だ。これも林紓に対する見方が変更されつつあることを示しているのかもしれない。従来の評価を変更するばあい、研究者に広く告知するにはこの種の学会開催が有効であるという判断だと思う。

以上に見る一連の出版、学会活動は研究に影響を及ぼさないはずがない。というよりも上級が林紓批判を見直す方向に舵を切る予兆のようにも見える。それが林紓学会開催と『林紓訳文全集』の刊行にあらわれているのではなかろうか。拙著の漢訳が商務印書館そのものから刊行されたことはその軌道上にあるように思わないでもない。あくまでも推測の域をでないことを申し添える。

本格的な見直しとなれば当然のように今後の問題が発生する。林紓批判を弱めるにしても主流をなした批判者たちについてはどう扱うのか。銭玄同と劉半農はじめ、胡適、鄭振鐸、阿英までが直接に関係している。背後には蔡元培、陳独秀、魯迅、周作人らが控えている。魯迅は林紓のことを「ファシスト」と罵った。彼ら著名な批判者たちをそのままにして林紓を再評価することはできない。研究上の常識だろう。

林紓批判に関して中国学界は難しい局面に直面している。その動向に今後も注目していきたい。念のために言っておくが、中国学界の動向といってもそれだけのこと。私の研究とは基本的に無関係だ。

樽本照雄





著者略歴

**樽本照雄 (TARUMOTO Teruo)**

1948年 広島市生まれ

1972年 大阪外国語大学大学院修士課程修了

現 在 大阪経済大学名誉教授 博士(言語文化学)  
研究誌『清末小説から』を公開中

編著書 『清末民初小説目録 第10版』ウェブ公開2018  
『林紓冤案事件簿』李艶麗訳 商務印書館2018

んしまつしょうせつさんだん  
清末小説三談

---

発 行★2019年3月1日

著 者 兼  
発 行 人★樽本照雄

発 行 所★清末小説研究会 〒520-0806

滋賀県大津市打出浜8番4-202

樽本照雄方

<http://shinmatsu.main.jp>

---

Printed in Japan

非賣品





